

Oracle® Hyperion Enterprise Performance Management Architect

Administrator's Guide

リリース 11.1.2.3

Performance Management Architect Administrator's Guide, 11.1.2.3

Copyright © 2006, 2013, Oracle and/or its affiliates. All rights reserved.

著者: EPM 情報開発チーム

Oracle および Java は Oracle Corporation およびその関連企業の登録商標です。その他の名称は、それぞれの所有者の商標または登録商標です。

このソフトウェアおよび関連ドキュメントの使用と開示は、ライセンス契約の制約条件に従うものとし、知的財産に関する法律により保護されています。ライセンス契約で明示的に許諾されている場合もしくは法律によって認められている場合を除き、形式、手段に関係なく、いかなる部分も使用、複写、複製、翻訳、放送、修正、ライセンス供与、送信、配布、発表、実行、公開または表示することはできません。このソフトウェアのリバース・エンジニアリング、逆アセンブル、逆コンパイルは互換性のために法律によって規定されている場合を除き、禁止されています。

ここに記載された情報は予告なしに変更される場合があります。また、誤りが無いことの保証はいたしかねます。誤りを見つけた場合は、オラクル社までご連絡ください。

このソフトウェアまたは関連ドキュメントを、米国政府機関もしくは米国政府機関に代わってこのソフトウェアまたは関連ドキュメントをライセンスされた者に提供する場合は、次の通知が適用されます。

U.S. GOVERNMENT RIGHTS:

Programs, software, databases, and related documentation and technical data delivered to U.S. Government customers are "commercial computer software" or "commercial technical data" pursuant to the applicable Federal Acquisition Regulation and agency-specific supplemental regulations. As such, the use, duplication, disclosure, modification, and adaptation shall be subject to the restrictions and license terms set forth in the applicable Government contract, and, to the extent applicable by the terms of the Government contract, the additional rights set forth in FAR 52.227-19, Commercial Computer Software License (December 2007). Oracle America, Inc., 500 Oracle Parkway, Redwood City, CA 94065.

このソフトウェアもしくはハードウェアは様々な情報管理アプリケーションでの一般的な使用のために開発されたものです。このソフトウェアもしくはハードウェアは、危険が伴うアプリケーション（人的傷害を発生させる可能性があるアプリケーションを含む）への用途を目的として開発されていません。このソフトウェアもしくはハードウェアを危険が伴うアプリケーションで使用する際、安全に使用するために、適切な安全装置、バックアップ、冗長性（redundancy）、その他の対策を講じることは使用者の責任となります。このソフトウェアもしくはハードウェアを危険が伴うアプリケーションで使用したことにより起因して損害が発生しても、オラクル社およびその関連会社は一切の責任を負いかねます。

このソフトウェアまたはハードウェア、そしてドキュメントは、第三者のコンテンツ、製品、サービスへのアクセス、あるいはそれらに関する情報を提供することがあります。オラクル社およびその関連会社は、第三者のコンテンツ、製品、サービスに関して一切の責任を負わず、いかなる保証もいたしません。オラクル社およびその関連会社は、第三者のコンテンツ、製品、サービスへのアクセスまたは使用によって損失、費用、あるいは損害が発生しても一切の責任を負いかねます。

目次

ドキュメントのアクセシビリティについて	17
第 I 部 Performance Management Architect の概要	19
第 1 章 Performance Management Architect の使用方法	21
Performance Management Architect について	21
Performance Management Architect モジュール	23
Performance Management Architect のユーティリティ	24
アーキテクチャ	25
プロセスの概要	26
Performance Management Architect へのアクセス	27
セキュリティ	28
アップグレードの考慮事項	31
アップグレード後のタスク	31
FDMEE と Performance Management Architect の使用	31
Data Relationship Management と Performance Management Architect の使用	32
ライフサイクル管理	32
Performance Management Architect のナビゲート	33
ツールバー	34
メニュー	35
「ファイル」メニュー	35
「編集」メニュー	35
「表示」メニュー	36
管理メニュー	37
「ヘルプ」メニュー	37
クラシック・アプリケーションの Performance Management Architect への変換	37
第 2 章 Performance Management Architect サーバーの管理	41
Performance Management Architect サービス	41
Performance Management Architect 次元サーバーの開始および停止	42
Performance Management Architect アプリケーション・サーバーの開始および停止	42

Performance Management Architect データ・シンクロナイザ・サーバーの起動および停止	43
---	----

第 II 部 アプリケーション・メタデータの管理

第 3 章 メタデータのインポート

フラット・ファイルの作成	49
フラット・ファイルのエンコーディング	49
フラット・ファイルの構文	49
フラット・ファイルの特殊文字	50
次元セクション	51
次元の関連付けセクション	52
メンバー・セクション	53
階層セクション	55
IsPrimary を使用したメンバーのプライマリおよび共有インスタンスの指定	57
プロパティ配列セクション	58
インタフェース・テーブルの使用法	61
インタフェース・データ・ソースの構成	62
インタフェース・データ・ソースの編集	63
インタフェース・データ・ソースの削除	64
インタフェース・テーブルの定義	64
インタフェース・テーブルの消去	68
インポート・プロファイルの作成	68
プロパティの入力	70
次元のマッピング	71
既存メンバーの順序変更の例	73
次元マッピング - プロパティ・マッピング・オプション	75
インポート・プロファイル用のインタフェース・テーブル・ロード ID の入力	77
インポート・プロファイルの管理	77
次元のインポート	77
次元のインポート時のロード ID 情報の入力	78
インポート・プロファイルの編集	79
インポート・プロファイルの詳細の表示	80
インポート・プロファイルの削除	80

第 4 章 次元の操作

次元の作成	81
共有次元およびローカル次元の理解	82
プロパティの変更	83

Planning 次元での操作の考慮事項	85
その他の Planning 次元の機能	85
別名次元	86
ユーザー定義属性次元	89
カスタム次元	89
次元の関連付け	90
次元の関連付けの作成	90
次元の関連付けの表示および削除	91
次元のコピー	92
アプリケーション・メンバーシップの表示	92
名前付き世代の操作(Essbase (ASO)および Essbase (BSO)のみ)	92
名前付きレベルの操作(Essbase (ASO)および Essbase (BSO)のみ)	94
次元の整理	95
フォルダの作成	95
フォルダへの次元の追加	96
次元のコピー	96
次元の移動	96
フォルダの名前変更	97
フォルダの削除	97
フォルダのみの削除	97
コンテンツがあるフォルダの削除	97
次元のフィルタ処理	98
次元およびフォルダのソート	99
次元の削除	99
グリッド・エディタの使用方法	100
グリッド・エディタの起動	101
メンバーの検索	103
メンバーの選択	104
プロパティの選択	105
グリッド・エディタの操作	108
メンバーおよびプロパティの変更の保存	108
次元の変更	109
祖先の表示	109
メンバーの作成	109
メンバーの追加	110
メンバーの除去および削除	110
メンバーおよびプロパティのソート	111
セル・データのコピーおよび貼付け	111
プロパティの追加および除去	112

プロパティの検索	112
グリッド・エディタの終了	113
スマート・リストの操作(Planning のみ)	113
スマート・リストの作成	114
スマート・リストの名前	114
スマート・リストの次元プロパティの変更	115
スマート・リストでの#Missing の表示	116
トランザクション・ログの表示	117
トランザクション履歴の削除	122
トランザクション履歴の削除ユーティリティの起動	123
トランザクション履歴の削除ログの表示	125
トランザクション履歴の削除ユーティリティの操作	126
トランザクションの削除	126
コマンド・ウィンドウでのトランザクション履歴の削除ユーティリティ の使用方法	127
データベースのクリーンアップ・タスクのスケジュール	129
ネイティブのデータベース・ログの考慮事項	129
第 5 章 メンバーの操作	131
メンバーの作成	131
共有メンバーの操作	132
コピーおよび貼付けによる共有メンバーの作成	133
メンバー・セレクタを使用した共有メンバーの作成	133
メンバーの選択	134
メンバー・セレクタを使用したメンバーの検索	135
Planning アプリケーション内の共有メンバー	136
動的時系列メンバーの設定	137
メンバー名の変更	139
メンバーの除去および削除	140
メンバーの除去	140
メンバーの削除	141
プランニング・メンバーの除外および削除	141
メンバーの検索	142
メンバーのソート	144
親の縮小	145
子メンバーの順序変更	145
孤立メンバーの管理	145
孤立メンバーの表示	146
孤立メンバーの削除	146
プロパティ値の編集	146

プロパティの検索	147
ユーザー定義属性の操作	148
関連付けの作成	149
ユーザー定義属性の作成	149
ユーザー定義属性の削除	150
メンバー計算式の操作	150
式の検証	151
数式の操作	151
前提条件	152
数式	152
構文	153
スマート・リストの値を変数として含める	154
一般的なエラーの理解	154
アプリケーションのメンバーの操作	154
アプリケーションへのメンバーの追加	154
上位メンバーの選択	156
メンバーの除外	157
除外したメンバーの表示	157
基本メンバーの設定	158
第 6 章 アプリケーションの構築	159
アプリケーションについて	159
アプリケーション作成のワークフロー	159
手動のワークフロー	160
アプリケーション・ウィザードのワークフロー	160
前提条件	161
連結アプリケーションの作成	161
アプリケーション・タイプの選択	161
次元の選択	163
ウィザードを使用した次元の追加	163
手動での次元の追加	165
アプリケーション設定の変更	166
検証および配置	168
Planning アプリケーションの作成	169
アプリケーション・タイプの選択	169
プラン・タイプの定義	172
デフォルト通貨の指定	173
次元の選択	174
ウィザードを使用した次元の定義	174

手動での次元の追加	176
アプリケーション設定の変更	177
基本期間および月配布分散の定義	179
カレンダー範囲の定義	179
パフォーマンス設定の変更	181
データ型の評価順序の設定	183
検証および配置	184
標準の Profitability and Cost Management アプリケーションの作成	185
アプリケーション・タイプの選択	185
次元タイプの選択	187
ウィザードを使用した次元の追加	188
手動による次元の追加	190
アプリケーション設定の変更	192
次元ライブラリを使用したアプリケーション設定の変更	192
アプリケーション・ウィザードを使用したアプリケーション設定の変更	193
POV 次元のプロパティの設定	193
Profitability and Cost Management モデルの子メンバーの順序変更	194
検証および配置	195
詳細 Profitability and Cost Management アプリケーションの作成	195
アプリケーション・タイプの選択	196
次元タイプの選択	197
ウィザードを使用した次元の追加	199
手動による次元の追加	202
アプリケーション設定の変更	203
次元ライブラリを使用したアプリケーション設定の変更	204
アプリケーション・ウィザードを使用したアプリケーション設定の変更	204
POV 次元の表示順序の設定	206
詳細 Profitability and Cost Management モデルの子メンバーの順序変更	207
検証および配置	208
Essbase アプリケーションの作成	208
アプリケーション要件	209
アプリケーション・タイプの選択	210
次元の選択	211
ウィザードを使用した次元の追加	211
手動での次元の追加	212
アプリケーション設定の変更	213
検証および配置	215

汎用アプリケーションの作成	215
共通アプリケーション・タスク	216
アプリケーションでの次元の追加	216
共有次元のローカルへの変換	217
ローカル次元の共有への変換	218
共有ライブラリを使用した次元の同期	219
アプリケーションへの次元のインポート	220
次元の除去	220
次元の関連付けの表示	220
次元の関連付けのアクティブ化	221
次元の関連付けの表示	221
次元別名の設定	221
次元のソート順と次元密度の設定	222
プロパティ・グリッドでの次元のソート順の設定	223
アプリケーション・メンバーシップの表示	223
第7章 アプリケーションの管理	225
アプリケーション・ライブラリのナビゲート	225
アプリケーション・ライブラリ・ビューの変更	226
アプリケーションの整理	226
フォルダの作成	226
フォルダへのアプリケーションの追加	227
フォルダからのアプリケーションの除去	227
フォルダの名前変更	228
フォルダの削除	228
アプリケーション・フィルタの作成	228
アプリケーション・ライブラリのリフレッシュ	229
アプリケーションの編集	229
アプリケーションを開く	229
アプリケーションを閉じる	230
アプリケーションの削除	230
アプリケーションの複製	230
新規アプリケーションとしてのアプリケーションの複製	231
配置済アプリケーションとしての連結アプリケーションの複製	231
アプリケーションの検索	233
アプリケーションの再登録	233
アプリケーションの比較	233
比較結果のナビゲート	234
次元比較結果	235

アプリケーション比較要約	235
プロパティ比較結果	236
比較結果でのメンバーの除外	236
データ・フローの表示	236
データ・フローでのフォーカル・アプリケーションの変更	237
同期の表示	237
同期の編集	238
同期の検証および実行	238
アプリケーションの編集	238
アプリケーションの検証および配置	238
アプリケーションの検証	239
配置ログおよびエラーの確認	240
Planning アプリケーションの配置	240
連結アプリケーションの配置	244
Profitability アプリケーションの配置	246
Essbase (ASO)アプリケーションおよび Essbase (BSO)アプリケーションの配 置	247
アプリケーションの再配置	250
Planning アプリケーションの再配置時における考慮事項	251
Planning アプリケーションの再配置	252
Essbase (ASO)アプリケーションおよび Essbase (BSO)アプリケーション の再配置	253
詳細 Profitability アプリケーションの再配置	254
アプリケーション配置履歴の表示	256
アプリケーションの問題のトラブルシューティング	256
孤立アプリケーションの表示	257
アプリケーション診断の実行	257
アプリケーションのテスト	258
例: テストに失敗 - 配置済だが Shared Services から欠落	263
プランニング・データ・ソースの管理	265
データ・ソース・ウィザードの開始	265
データ・ソース情報の入力	266
データベースの選択	266
Essbase サーバーの構成	267
要約詳細の表示	267
データ・ソースの削除	268

第 III 部 アプリケーション・データ・ロードの管理	269
第 8 章 データの同期	271
データの同期の理解	271
アプリケーション・ライブラリでのデータの同期	272
データ・シンクロナイザでのデータの同期	272
複数通貨の Planning アプリケーションの同期	274
Hyperion データ・インタフェース・テーブルをソースとして使用	275
インタフェース領域の定義	276
同期の作成	277
外部ファイルのソースとしての使用方法	277
次元のマッピング	279
次元のフィルタ処理	281
再利用可能なフィルタの追加	282
再利用可能な次元フィルタの編集	284
再利用可能な次元フィルタの挿入	285
再利用可能な次元フィルタのコピー	285
再利用可能な次元フィルタの除去	286
再利用可能な次元フィルタの削除	286
フィルタ条件の追加と編集	287
デフォルト・メンバーの割当て	288
マッピング・テーブルの挿入	289
マッピングの編集	289
同期の保存	289
マッピングの操作	290
次元マッピングでのマッピング・テーブルの作成	290
データ・シンクロナイザでのマッピング・テーブルの作成	293
データ・シンクロナイザの操作	295
データ・シンクロナイザのナビゲート	296
データ・シンクロナイザ・ビューの変更	296
同期のフィルタ処理	296
同期の編集	297
マッピング・テーブルの編集	297
同期およびマッピングの複製	297
同期およびマッピングの削除	298
同期の検証および実行	298
データ同期のトラブルシューティング	300

第 IV 部 ジョブの管理	303
第 9 章 ジョブの管理	305
ジョブ・コンソールの操作	305
ジョブ・コンソールのナビゲート	307
ジョブ・コンソール・ビューの変更	308
ジョブ・コンソールのリフレッシュ	308
ジョブ・フィルタの作成	308
自分のジョブのフィルタ処理	310
他のユーザーのジョブのフィルタ処理	310
セキュリティ	310
ジョブの送信のセキュリティ	311
ジョブの表示のセキュリティ	311
ジョブの添付ファイルの表示	311
インポート結果の表示	312
テキスト・ファイルの表示	312
ジョブの削除	313
ジョブの手動によるタイムアウト	314
Performance Management Architect ログ	314
第 10 章 タスクの自動化の使用法	315
概要	315
タスクの自動化の前提条件	316
タスクフローの管理	316
タスクフローの表示	317
タスクフローの作成	317
Performance Management Architect アクション	318
データの同期	318
フラット・ファイルからの次元のインポート	318
インタフェース・テーブルからの次元のインポート	319
再配置	319
ステージの追加	320
Shared Services のステージのアクションとパラメータ	322
リンクの追加	323
タスクフローの編集	324
タスクフローの削除	325
タスクフローのコピー	325
テストのためのタスクフローの手動での実行	325
タスクフローへのアクセスの制御	325
タスクフローのスケジュール	326

タスクフローのステータスの表示	327
アクティブ・タスクフローの停止	328
タスクフロー参加者(要約)の表示	329
タスクフロー参加者(詳細)の表示	330
第 V 部 製品固有のプロパティ、要件および追加の考慮事項	331
第 11 章 Financial Management 次元の操作	333
勘定科目	334
勘定科目の種別の動作	338
動的な勘定科目の定義	340
Cell Text Label	340
カスタム	341
エンティティ	343
シナリオ	344
アプリケーション	347
期間別組織	352
連結メソッド	352
連結メソッドの使用方法	354
手動での連結メソッドの割当て	354
通貨	355
システム生成の勘定科目	356
連結勘定	357
出資比率勘定科目	357
内部取引パートナーの設定	358
システム生成の値メンバーの編集	359
セキュリティに基づくメタデータのフィルタ	359
メタデータの参照整合性	360
参照整合性に影響を与えるメタデータ・プロパティの変更	360
メタデータ・ログ・ファイルの参照整合性エラー	361
次元の名前付けの制限	362
9.3.1 で作成された連結フラット・ファイルの使用方法	362
Financial Management 9.3.1 および Performance Management Architect の操作	362
第 12 章 Planning 次元の操作	363
すべての Planning 次元に適用できるプロパティ	364
複数の Planning 次元に共通するプロパティ	367
勘定科目	370
勘定科目の種別およびそれに依存するプロパティの有効な組合せ	372
タイムバランスプロパティの例	372

ゼロおよび欠落した値のための勘定科目計算の例	373
通貨	374
エンティティ	376
期間	377
期間次元の代替階層の考慮事項	378
シナリオ	378
バージョン	380
年	381
カスタム次元	382
Planning の別名	382
Planning の属性	383
Planning 9.3.1 および Performance Management Architect の操作	383
Public Sector Planning and Budgeting のコンテンツの操作に関する考慮事項	383
Essbase での作業の考慮事項	384
アプリケーションの命名の制限(Essbase)	385
次元、メンバーおよび別名の名前付けの制限	386
Planning のフラット・ファイルの操作	387
Planning のフラット・ファイルの例(通常)	387
Planning のフラット・ファイルの例(シンプル)	393
第 13 章 Profitability and Cost Management プロパティの操作	397
次元プロパティおよびメンバー・プロパティ	397
第 14 章 Essbase プロパティの操作	403
アプリケーション・プロパティ	403
次元プロパティおよびメンバー・プロパティ	409
第 15 章 統計およびシステム・プロパティの操作	421
統計プロパティ	421
次元システム・プロパティ	421
メンバー・システム・プロパティ	422
付録 A. このリリースにアップグレードする場合のプロパティに関する考慮事項	423
以前のリリースとのプロパティの違い	423
アプリケーションと配置済アプリケーションを比較する場合の考慮事項	428
リリース 9.3.3 以降 Performance Management Architect に追加された新規プロパティ	429
付録 B. アプリケーションの検証	433
付録 C. データ・シンクロナイザで使用されるメンバー・クエリ関数	441
メンバー・クエリ関数の使用方法	441

注意事項	442
構文	443
例	443
Parent	444
構文	444
例	445
Children	445
構文	445
例	445
Ancestors	446
構文	446
例	446
Descendants	447
構文	447
例	447
Siblings	448
構文	448
例	448
Member	449
構文	449
例	449
Match	449
構文	449
例	450
AllMembers	450
構文	450
例	451
BottomOfHierarchy	451
構文	451
例	451
TopOfHierarchy	452
構文	452
例	452
レベル0	452
構文	452
例	453
付録 D. BPMA_Server_Config.xml の構成設定	455
用語集	461

索引	487
----------	-----

ドキュメントのアクセシビリティについて

Oracle のアクセシビリティについての詳細情報は、Oracle Accessibility Program の Web サイト <http://www.oracle.com/pls/topic/lookup?ctx=acc&id=docacc> を参照してください。

Access to Oracle Support

Oracle サポート・サービスでは、My Oracle Support を通して電子支援サービスを提供しています。詳細情報は <http://www.oracle.com/pls/topic/lookup?ctx=acc&id=info> か、聴覚に障害のあるお客様は <http://www.oracle.com/pls/topic/lookup?ctx=acc&id=trs> を参照してください。

第 I 部

Performance Management Architect の 概要

Performance Management Architect の概要の内容 :

- [Performance Management Architect の使用方法](#)
- [Performance Management Architect サーバーの管理](#)

1

Performance Management Architect の使用方法

この章の内容

Performance Management Architect について.....	21
Performance Management Architect モジュール	23
Performance Management Architect のユーティリティ	24
アーキテクチャ	25
プロセスの概要	26
Performance Management Architect へのアクセス	27
セキュリティ.....	28
アップグレードの考慮事項.....	31
アップグレード後のタスク.....	31
FDMEE と Performance Management Architect の使用	31
Data Relationship Management と Performance Management Architect の使用	32
ライフサイクル管理	32
Performance Management Architect のナビゲート	33
クラシック・アプリケーションの Performance Management Architect への変換	37

Performance Management Architect について

Oracle Hyperion EPM Architect は、Oracle Hyperion Foundation Services の機能であり、Oracle Hyperion Financial Management、Oracle Hyperion Planning、Oracle Essbase、Oracle Hyperion Profitability and Cost Management および Oracle Data Relationship Management と統合されています。Performance Management Architect を使用すると、管理者は 1 つのインターフェースで Hyperion のアプリケーションを管理、作成および配置できます。

作成および配置

- 次元をアプリケーションにドラッグ・アンド・ドロップすることによるアプリケーションの作成
- 1 つの環境内でのグラフィカルなアプリケーションの設計
- 既存のアーティファクトを使用する対象固有のアプリケーションの作成
- 定義済のサンプル・ライブラリからの次元の構成およびプロパティの定義
- 次元の特定のメンバーを選択するフィルタの作成。たとえば、「勘定科目」次元の「貸借対照表」の勘定科目を選択します。これによって、すべてのアプリケーションのすべての次元を使用しないで、1 つの次元を管理できます。

- テストまたは仮定の分析用のアプリケーションの複製
- クラシック・アプリケーション管理で管理されているアプリケーションを、次元ライブラリおよびアプリケーション・ライブラリに変換します。これにより、いつでも Performance Management Architect 内の機能から始めることができます。

アプリケーションのビジネス・ルールの計算

Oracle Hyperion Calculation Manager を使用すると、Financial Management および Planning のビジネス問題を解決する高度な計算を作成、検証および配置できます。Calculation Manager を使用すると、次の計算を作成できます:

- エンティティ間のコストの割当て
- 収益モデリングの実行
- 支出モデリングの実行
- 貸借対照表の準備
- キャッシュ・フローの計算
- 為替換算調整勘定の計算
- グループおよび少数株持ち分の計算
- 繰延税金の計算

管理

- 視覚的なアプリケーションのリンクおよび管理
- 複数のアプリケーション間での次元および属性の使用。(たとえば、勘定科目次元を 1 つ作成して、それを複数のアプリケーションで使用できます。)Performance Management Architect は既存のアプリケーションおよび次元性を活用して、以前に構成された次元を使用する他のアプリケーションに展開します。
- グラフィカルなデータ・フローの管理
- 影響分析の実行 - アプリケーション間の関係のグラフィカルなビューおよびモデル化
- すべてのモデルに対する除外および変更における影響の処理および評価
- アプリケーション間の手動による次元およびデータの調整の消去

このガイドでは、Performance Management Architect で導入された管理機能について説明します。クラシック・アプリケーション管理機能(Performance Management Architect では管理されないアプリケーション用)の詳細は、『Oracle Hyperion Planning 管理者ガイド』または『Oracle Hyperion Financial Management 管理者ガイド』を参照してください。

Performance Management Architect でのトレーニング(Oracle by Example、チュートリアル、デモなど)にアクセスするには、<http://www.oracle.com/technetwork/tutorials/index.html> に移動します。

Performance Management Architect モジュール

Performance Management Architect には次のモジュールがあります:

- **次元ライブラリ** - 次元および次元のプロパティを集中的に管理します。次元ライブラリを使用すると次のことができます:
 - 次元インポート・プロファイルの作成 - フラット・ファイルおよびデータベース・インタフェース・テーブルからの次元の更新を使用可能にする
 - 共有ライブラリまたは直接にアプリケーションでの次元メンバーの追加、削除および変更
 - 共有ライブラリまたは直接にアプリケーションでの次元およびメンバー・プロパティの変更
- **アプリケーション・ライブラリ** - 作成され、Financial Management、Planning、Profitability and Cost Management、Essbase Aggregate Storage Option (ASO)またはEssbase Block Storage Option に配置済アプリケーションの要約。Financial Management、Planning、Profitability and Cost Management、Essbase (ASO)および(BSO)に特有の要件を満たすように作成された次元および次元属性がアプリケーションには含まれます。アプリケーション・ライブラリを使用して次のことができます:
 - Financial Management、Planning および Profitability and Cost Management アプリケーションに基づく、Financial Management、Planning、Profitability and Cost Management、Essbase (ASO)または Essbase (BSO)アプリケーションの作成
 - アプリケーションの集中管理
 - アプリケーション間のデータ・フローの表示
 - アプリケーションの異なるサーバーへの移行
 - Financial Management、Planning、Profitability and Cost Management、Essbase (ASO)または Essbase (BSO)へのアプリケーションの配置
- **Calculation Manager** - ビジネス・ルールとビジネス・ルールセットを作成、検証および配置できます。

Calculation Manager で計算できるオブジェクトには3つのタイプがあります:

- ビジネス・ルールからなり、式、スクリプト、条件、範囲、固定ループおよび割当てが含まれるオブジェクトであるコンポーネント。
- 計算を実行するコンポーネントのグループが含まれるオブジェクトであるルール
- 同時または連続して計算される複数のルールが含まれるオブジェクトであるルールセット

Financial Management、Planning または Essbase ブロック・ストレージ・アプリケーションを使用している場合は、Calculation Manager システム・テンプレートをビジネス・ルールに含めることができます。たとえば、ある場所から別の場所にデータをコピーするシステム・テンプレートを使用できます。カスタム定義テンプレートを作成して、ビジネスに固有の問題を解決する計算を実行することもできます。

- **データの同期** - Hyperion アプリケーション内または Hyperion アプリケーション間でのデータの同期を使用可能にします。データの同期を使用して次のことができます:
 - Financial Management、Planning、Profitability and Cost Management、Essbase(ASO)および Essbase(BSO)を宛先として、次のソースとの間にデータの同期を作成します:
 - Financial Management
 - Planning
 - Profitability and Cost Management
 - Essbase ASO
 - Essbase BSO
 - 外部ソース(フラット・ファイル)
 - インタフェース・テーブル

たとえば、管理者は、2つの Financial Management アプリケーション間、2つの Planning アプリケーション間、1つの Financial Management アプリケーションおよび Planning アプリケーション間でデータを同期できます。
 - 再使用できるデータ・マッピングの作成
 - Hyperion アプリケーションにデータをインポートするフラット・ファイルおよびインタフェース・テーブル・マッピングの作成
- **クラシックから EPM Architect への変換** - クラシックの Financial Management および Planning のリリースで管理されているアプリケーションの Performance Management Architect への変換を可能にします。
- **ライブラリ・ジョブ・コンソール** - 次元ライブラリと、インポート、配置およびデータ同期などのアプリケーション・プロセスのステータスを含めた要約を提供します

Performance Management Architect のユーティリティ

Performance Management Architect とともに次のユーティリティを使用できます:

- **Performance Management Architect バッチ・クライアント**

Performance Management Architect バッチ・クライアントによって、データのエクスポート、メタデータのロード、データのロード、計算などのプロセスを組み合わせて、通常の夜間または週末のロード・プロセスの処理中に、これらの操作を開始できます。

バッチ・クライアントによる外部スケジューリング・ツールを使用してプロセスを開始できます。バッチ・クライアントを使用すると、次のような多くのタスクを実行できます:

- Performance Management Architect にメタデータをロードする

- 次元およびメジャーのセキュリティに関するプロパティを更新する
- アプリケーションにデータをロードする

バッチ・クライアントは、Performance Management Architect のインストール時に自動的にインストールされます。バッチ・クライアントの使用の詳細は、『Oracle Hyperion Enterprise Performance Management Architect, Fusion Edition バッチ・クライアント・ユーザー・ガイド』を参照してください。

- **Performance Management Architect ファイル・ジェネレータ**

Performance Management Architect ファイル・ジェネレータでは、次のソースからインポート・ファイルを作成できます:

- .PER、.SEC、.XML メタデータ・ファイルなどの既存の Financial Management ファイル。

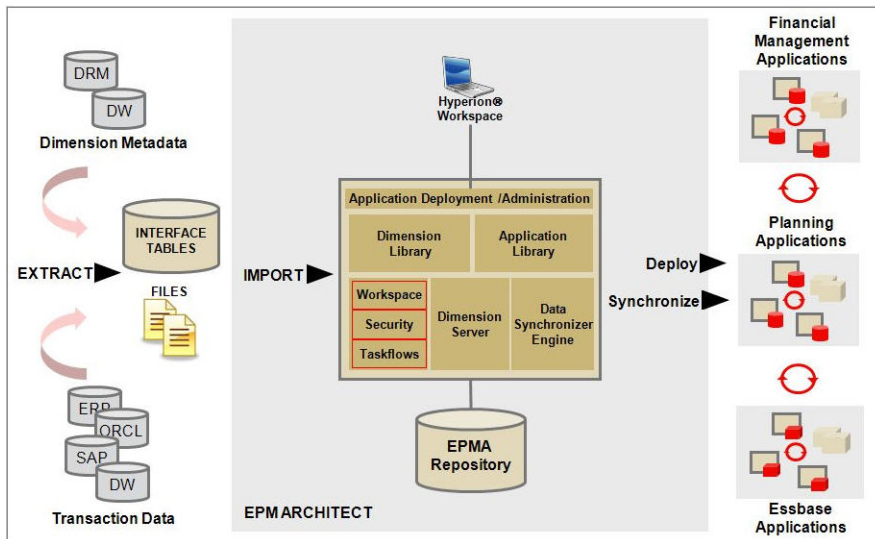
注： サポートされているのは Financial Management .XML フォーマットのメタデータ・ファイルのみです。.APP フォーマットは直接にはサポートされていませんが、システムから XML フォーマットにメタデータを抽出して、コンバータを使用できます。

- 既存の Financial Management アプリケーション
- 既存の Planning アプリケーション
- 既存の Performance Management Architect アプリケーション(連結、Planning および汎用アプリケーション・タイプ)
- Microsoft Excel ファイル

Performance Management Architect ファイル・ジェネレータをインストールするには、Oracle Hyperion Enterprise Performance Management System インストーラを使用します。インストール情報については、『Oracle Hyperion Enterprise Performance Management System インストールおよび構成ガイド』を参照してください。ファイル・ジェネレータの使用の詳細は、『Oracle Hyperion Enterprise Performance Management Architect ファイル・ジェネレータ・ユーザー・ガイド』を参照してください。

アーキテクチャ

Performance Management Architect は、Enterprise Resource Planning システム、リレーショナル・データベース、データ・ウェアハウスを含むメタデータおよびデータの様々なソースに対するインタフェースを提供します。これらのソースのデータ(およびその次元階層)は、フラット・ファイルまたは Hyperion インタフェース・テーブルを使用してシステムにインポートできます。



注： この機能ダイアグラムには、配置に必要なサーバーの数は示されていません。

Performance Management Architect は、Financial Management、Profitability and Cost Management および Planning の各アプリケーションに直接のインターフェースを提供するので、Performance Management Architect からこれらのアプリケーションを直接作成、維持および同期できます。

Performance Management Architect の中間層には、アプリケーション構築に必要なアプリケーション・サービス、メタデータ管理、データ同期およびユーザー・インターフェースの仕上げが含まれます。

エンド・ユーザーは、Oracle Hyperion Enterprise Performance Management Workspace を使用して、Performance Management Architect、レポート機能およびアプリケーションのコンテンツにアクセスします。

プロセスの概要

全体的には、次のプロセスに従います：

- 次元ライブラリを使用して次元をインポートします。第3章「メタデータのインポート」を参照してください。
- アプリケーションを作成します。第6章「アプリケーションの構築」を参照してください。
- Calculation Manager を使用してビジネス・ルールを作成します。
- アプリケーションを Hyperion 製品(Profitability and Cost Management、Planning、Essbase、Financial Management など)に配置します。Hyperion 製品で、アプリケーションが作成され、製品サーバーでメタデータがロードされます。168 ページの「検証および配置」を参照してください。
- Oracle Hyperion Shared Services を使用し、アクセス権を割り当てます。『Oracle Hyperion Enterprise Performance Management System ユーザーおよび役割セキュリティ・ガイド』を参照してください。

- Hyperion 製品を使用して、データ・フォームをアプリケーションにロードします。『Oracle Hyperion Planning 管理者ガイド』および『Oracle Hyperion Financial Management 管理者ガイド』を参照してください。
- Hyperion 製品を使用して、データ・フォーム、レポート、プラン、タスク・リストなどを作成します。

Performance Management Architect へのアクセス

▶ Performance Management Architect にアクセスするには:

- 1 Shared Services および EPM Workspace サーバーが実行されていることを確認します。
- 2 IIS が実行されていることを確認します。
- 3 Hyperion EPMA サーバーを起動するには、「サービス」パネルから「Hyperion EPMA サーバー」をクリックします。

注： 次元サーバーを開始できない場合は、タイムアウト設定を変更する必要がある可能性があります。42 ページの「Performance Management Architect 次元サーバーの開始および停止」を参照してください。

- 4 次のいずれかの方法で、EPM Architect アプリケーション・サーバーを開始します:
 - 「サービス」パネルで「Hyperion EPM Architect - Web Application」を選択します。
 - 「スタート」、「プログラム」、「Oracle EPM System」、「Foundation Services」、「Performance Management Architect」、「Performance Management Architect Web の起動」の順に選択します。
- 5 Web ブラウザを開き、Performance Management Architect に EPM Workspace からアクセスします(<http://<Web Server>:<port>/workspace/>)。ここで、<Web Server>は Web サーバー・マシンのホスト名、<port>は Web サーバーのポート番号です。たとえば、Oracle Hyperion Enterprise Performance Management System コンフィギュレーターで構成した Oracle HTTP サーバー・インスタンスを使用する場合は 19000 です。
- 6 ユーザー名およびパスワードを入力して、「ログオン」をクリックします。

注： Performance Management Architect がユーザーを認証できないというエラー・メッセージが表示された場合は、ユーザーがアプリケーションに対してプロビジョニングされているか(プロビジョニングされていない場合は、Shared Services を使用してユーザーをプロビジョニングします)、ユーザーのトークンまたはセッションがタイムアウトしていないか(タイムアウトしている場合はログオフしてから再度ログインし、新規セッションを開始します)。Financial Management Web サーバーやアプリケーション・サーバーに問題がある場合は、システム管理者に連絡してください。

Performance Management Architect にアクセスできない場合は、『Oracle Hyperion Enterprise Performance Management System インストールおよび構成ガイド』を参照してください。

- 7 次元ライブラリにアクセスするには、「ナビゲート」、「管理」、「次元ライブラリ」の順に選択します。

セキュリティ

Performance Management Architect は、次の役割をサポートします:

Performance Management Architect の役割	役割のタスク
EPMA 管理者 アプリケーション作成者 Essbase アプリケーション作成者 Financial Management アプリケーション作成者 Planning アプリケーション作成者 Profitability アプリケーション作成者	<p>EPMA 管理者役割は、アプリケーション作成者の親です。この役割により次のことができるようになります:</p> <ul style="list-style-type: none"> ● そのユーザーがアプリケーションを配置した本人ではないアプリケーションを含む、すべてのアプリケーションへのアクセス。 ● 停滞したジョブを手動でタイムアウトとしてマークする機能。 ● 非表示のジョブを表示する機能。 ● すべてのアプリケーションに対して、アプリケーション診断とすべてのテストおよびソリューションを実施する機能。 ● トランザクション履歴削除ユーティリティを実行する機能。 <p>管理者は、アプリケーション作成者の役割を使用することで、アプリケーションを作成し、次元をアクセス権を持っているものに変更できます。アプリケーション作成者が Performance Management Architect からアプリケーションを配置すると、自動的にアプリケーション管理者になります。</p> <p>注: すべてのアプリケーション作成者は汎用アプリケーションを作成できます。</p>
EPMA 管理者 次元エディタ	<p>次元および次元メンバーをインポート、削除および変更できます。また、次元にアクセス権(次元所有者およびリーダー/ライター)を割り当てることもできます。アプリケーションの作成はできません。</p>
統合の作成	<p>データの同期を作成および実行します。</p> <p>インタフェース・データ・ソースを作成します</p>
統合の実行	<p>データの同期を実行します。</p>
Calculation Manager 管理者 Financial Management Calculation Manager 管理者 Planning Calculation Manager 管理者	<p>Calculation Manager の関数を管理します。</p>
Financial Management Calculation Manager 管理者	<p>Financial Management の Calculation Manager の関数を管理します。</p>
Planning Calculation Manager 管理者	<p>Planning の Calculation Manager の関数を管理します。</p>

次の表に、Performance Management Architect の役割とアクセスのレベルへのマッピング方法を示します。

表 1 アクセスのレベル

役割	アクセスのレベル
次元エディタ ¹	<ul style="list-style-type: none"> 共有ライブラリのすべての共有次元に対する次元所有者 次元所有者、次元ライター、または次元リーダーというアクセス権を共有ライブラリの任意のローカル次元に、明示的に割り当てられます。
アプリケーション作成者 ²	<ul style="list-style-type: none"> 配置されていないアプリケーションのすべての次元に対する次元所有者です。 次元所有者、次元ライター、または次元リーダーというアクセス権を共有ライブラリの任意の次元に、明示的に割り当てられます。
アプリケーション管理者 ³	<ul style="list-style-type: none"> 配置済アプリケーションのすべての次元に対する次元所有者です。 次元所有者、次元ライター、または次元リーダーというアクセス権を共有ライブラリの任意の次元に、明示的に割り当てられます。
Calculation Manager 管理者 Calculation Manager 管理者の役割は、次の役割で構成されています: <ul style="list-style-type: none"> Financial Management Calculation Manager 管理者 Planning Calculation Manager 管理者 	Calculation Manager 機能を管理します Financial Management Calculation Manager 管理者は Financial Management での Calculation Manager 機能を管理します Planning Calculation Manager 管理者は Planning での Calculation Manager 機能を管理します

¹ 次元エディタのみが共有ライブラリで次元を作成できます。

² アプリケーション作成者またはアプリケーション管理者は、次元を作成したりアプリケーションに次元を追加できます。

³ アプリケーション作成者またはアプリケーション管理者は、次元を作成したりアプリケーションに次元を追加できます。

次の表に、Performance Management Architect で実行される一般的なタスクおよび必要なアクセスのレベルを示します。次の考慮事項に注意してください:

- アプリケーション内のローカル次元、または共有ライブラリの共有次元の構造のみ編集できます。
- 役割によってコピー先に次元を作成できる場合のみ、次元をコピーできます。
- 少なくともソース次元に対するリーダー・アクセス権およびターゲット次元に対するライター・アクセス権を持っている場合のみ、次元を同期できます。
- アプリケーション作成者またはアプリケーション管理者の役割の場合のみ、アプリケーションに次元を追加できます。

表 2 一般的なタスク

アクセスのレベル	次元レベルのタスク
次元所有者	<ul style="list-style-type: none"> 次元の構造またはプロパティの編集 次元のコピー 次元と次元の同期 アプリケーションへの次元の追加 次元の除去 次元の削除

アクセスのレベル	次元レベルのタスク
次元ライター	<ul style="list-style-type: none"> ● 次元の構造またはプロパティの編集 ● 次元のコピー ● 次元間の同期 ● アプリケーションへの次元の追加
次元リーダー	<ul style="list-style-type: none"> ● 次元のコピー ● 次元からの同期 ● アプリケーションへの次元の追加

役割の詳細は、『Oracle Hyperion Enterprise Performance Management System ユーザーおよび役割セキュリティ・ガイド』を参照してください。

シナリオ

Bob Smith がアプリケーション・ライブラリのアプリケーションを選択し、そのアプリケーション・タイプに対するアプリケーション作成者の役割を持っていない場合、またはそのアプリケーションの管理者にプロビジョニングされている場合、Bob Smith がこのアプリケーションに対するアクセス権を持たないというダイアログ・ボックスが表示されます。さらに、メニュー・アイテムが使用不可となり要約情報が制限されます。次の例を考慮してください:

Bob Smith は、管理者にプロビジョニングされていない App2 を選択しましたが、作成者の役割を持っていません。そのアプリケーションを選択すると、このアプリケーションに対して権限がないことを知らせるメッセージが表示されます。Bob Smith が右クリックすると、すべてのオプションが使用不可となります。

アプリケーションが配置されていない場合、そのアプリケーション・タイプ(連結、Planning、Essbase (ASO)および Essbase (BSO))に対する作成者ユーザーは適用可能なすべてのオプションおよび要約情報を利用できます。次の例を考慮してください:

アプリケーション・ライブラリには 5 つの Planning アプリケーション・ビュー (App_6、App7、App8、App9(配置済)および App10(未配置))と 5 つの連結アプリケーション(App1、App2、App3、および App4(配置済)および App5(未配置))があります。Bob Smith は連結アプリケーション作成者、Karen Jones は Planning アプリケーション作成者、および Jim Harrington は App1 の管理者です。Bob Smith は App5 に対する適用可能なすべての操作(配置、編集、比較など)を実行できます。Karen Smith も App10 に対する適用可能なすべての操作(配置、編集、比較など)を実行できます。

配置済アプリケーションに対する管理者としてプロビジョニングされたユーザーは、すべての操作(削除、再配置、移行など)を実行できます。次の例を考慮してください:

Jim Harrington は App1 の管理者で、App1 に対するフル・アクセス権を持ちます。管理者にプロビジョニングされていないがアプリケーションの作成者であるユーザーは、製品固有の役割を必要としないすべての操作(編集、複製、比較、検証など)にアクセスできます。アプリケーション固有の役割を必要とする操作(削除、再配置および移行)はできません。たとえば、Bob Smith は App1

から App4 に対して、編集および比較できますが、削除、再配置または移行できません。

アップグレードの考慮事項

リリース 11.1.2.1 で導入されたプロパティの変更と新しい検証の詳細は、[付録 A 「このリリースにアップグレードする場合のプロパティに関する考慮事項」](#)を参照してください。この項には、デフォルト・プロパティの変更および新しい検証が含まれ、次のリリースとリリース 11.1.2.1 の比較を示します:

- リリース 9.3.3
- リリース 11.1.1.3
- リリース 11.1.2

アップグレード後のタスク

Performance Management Architect をリリース 11.1.2.1 にアップグレードした後、SortOrder および IsPrimary 列はアップグレードされたインタフェース・テーブルに存在しません。アップグレード後に Performance Management Architect インタフェース・テーブルの SortOrder および IsPrimary 列を手動で作成する必要があります。

FDMEE と Performance Management Architect の使用

Oracle Hyperion Financial Data Quality Management Enterprise Edition は、Oracle Hyperion Financial Data Quality Management のモジュールであり、これを使用すると、次のタスクを実行できます:

- Enterprise Resource Planning (ERP) ソース・システムのメタデータとデータを、Enterprise Performance Management (EPM) ターゲット・アプリケーションに統合します
- EPM ターゲット・アプリケーションからドリル・スルーし、ERP ソース・システムのデータを表示します
- Planning、Essbase ASO または Essbase BSO アプリケーションから予算データをソース・システムにライトバックします。

サポートされるソース・システムおよび FDMEE の使用方法の詳細は、[Hyperion Financial Data Quality Management ERP Integration Adapter for Oracle 管理者ガイド](#)を参照してください。

Data Relationship Management と Performance Management Architect の使用

Data Relationship Management は、基本的な取引システムと分析システムをサポートするために必要な変更が多数発生する場合の、マスター・データ資産内で整合性を構築および維持するための企業向け変更管理アプリケーションです。

今回のリリースでは、メタデータ(階層、ノードおよびプロパティ)を Data Relationship Management から Performance Management Architect の共有ライブラリとアプリケーション・ビューにインポートできます。これらの次元は複数の EPM アプリケーションと共有でき、配置できます。

Data Relationship Management からエクスポートされたメタデータを次のものにインポートできます:

Financial Management

- 勘定科目、エンティティ、カスタム(汎用)、および通貨次元タイプのメンバー
- 勘定科目、エンティティ、カスタム(汎用)および通貨次元メンバーの Financial Management 関連のプロパティ
- 次元メンバーの階層

Planning

- 勘定科目、エンティティ、汎用および通貨次元タイプのメンバー
- 勘定科目、エンティティ、汎用および通貨次元メンバーの Planning 関連のプロパティ
- 次元メンバーの階層

Essbase ASO および BSO

- 勘定科目、エンティティ(国)および汎用次元タイプのメンバー
- 勘定科目、エンティティ(国)および汎用次元メンバーの Essbase ASO および BSO 関連のプロパティ
- 次元メンバーの階層

Data Relationship Management と Performance Management Architect の統合の詳細は、Oracle Data Relationship Management EPM Architect Integration Guide を参照してください

ライフサイクル管理

Oracle Hyperion Enterprise Performance Management System のライフサイクル管理には、Oracle Enterprise Performance Management System 製品のアプリケーション、リポジトリ、または個別のアーティファクトを製品環境およびオペレーティング・システムの間で移行する一貫した方法があります。一般的には、Oracle Hyperion Shared Services Console のライフサイクル管理インタフェースは、ライフサイクル

管理をサポートするすべての EPM System 製品に対して一貫しています。ただし、EPM System 製品では、ライフサイクル管理インタフェースでアーティファクトのリスト表示、およびエクスポートとインポートのオプションの表示が異なります。

ライフサイクル管理には、次の機能があります:

- アプリケーションおよびフォルダの表示
- アーティファクトの検索
- アプリケーションから他のアプリケーションへの直接的な移行
- ファイル・システム間の移行
- 移行定義ファイルの保存およびロード
- 選択済アーティファクトの表示
- 移行の監査
- 移行のステータスの表示
- ファイル・システムをすばやく変更するための個別アーティファクトのインポートおよびエクスポート

Shared Services Console のライフサイクル管理インタフェースに加え、ライフサイクル管理ユーティリティと呼ばれるコマンドライン・ユーティリティには、ソースから移行先にアーティファクトを移行させる代替方法を備えています。ライフサイクル管理ユーティリティは、Windows タスク・スケジューラや Oracle Enterprise マネージャなど、サードパーティ製スケジュール・システムともあわせて使用できます。

最後に、ユーザーがライフサイクル管理機能をカスタマイズして拡張できる、ライフサイクル管理アプリケーション・プログラミング・インタフェース(API)があります。

Oracle Hyperion Enterprise Performance Management System ライフサイクル管理の詳細は、『Oracle Hyperion Enterprise Performance Management System ライフサイクル管理ガイド』を参照してください。

Performance Management Architect のナビゲート

EPM Workspace で、「ナビゲート」メニューから次の項目にアクセスします:

- アプリケーション - 連結(Financial Management)アプリケーション、Planning アプリケーション、Essbase (ASO)および Essbase (BSO)アプリケーションにアクセスできます。アプリケーションは、ユーザーがアクセス権を持ち、そのアプリケーションが使用可能な場合にのみ表示されます。
- 管理 - ユーザー、グループ、ユーザー・プリファレンス、役割および認証方式を管理できます。さらに、次の Performance Management Architect モジュールにもアクセスできるようになります:
 - 次元ライブラリ
 - アプリケーション・ライブラリ
 - データの同期








- ライブラリ・ジョブ・コンソール
- クラシックから EPM Architect への変換

ツールバー

次のツールバーは、Performance Management Architect で使用できます:

- 標準ツールバー - 一般的な EPM Workspace 機能用に使用されます。Oracle Enterprise Performance Management Workspace ユーザース・ガイドを参照してください。
- Performance Management Architect ツールバー - Performance Management Architect 固有のボタンが表示されます。

表 3 Performance Management Architect ツールバーのボタン

ボタン	メニュー・コマンド	説明
	「表示」 > 「リフレッシュ」	ウィンドウをリフレッシュします。
		「アプリケーションの検索」ダイアログ・ボックスを表示します。 「アプリケーション・ライブラリ」のみに表示されます。
	「表示」 > 「フィルタ条件の消去」	設定したフィルタ条件を除去し、アプリケーション・ライブラリ内のアプリケーションを表示します。 「アプリケーション・ライブラリ」のみに表示されます。
	「表示」 > 「トランザクション・ログのダウンロード」	「トランザクション・ログのフィルタ」ダイアログ・ボックスが表示されます。 ¹
	「表示」 > 「次元のフィルタ」	「次元のフィルタ処理」ダイアログ・ボックスが表示されます。 ²
	「表示」 > 「次元のソート」	「次元のソート」ダイアログ・ボックスが表示されます。 ³
	なし	次元ライブラリに、「メンバーの検索」ダイアログ・ボックスが表示されます。 アプリケーション・ライブラリに、「アプリケーションの検索」ダイアログ・ボックスが表示されます。

¹ 次元ライブラリのみに表示されます。

² 次元ライブラリのみに表示されます。

³ 次元ライブラリのみに表示されます。

メニュー

サブトピック

- 「ファイル」メニュー
- 「編集」メニュー
- 「表示」メニュー
- 管理メニュー
- 「ヘルプ」メニュー

Performance Management Architect オプションは、EPM Workspace オプションとともに表示されます。次の項では、Performance Management Architect のオプションについてのみ説明します。

「ファイル」メニュー

表4 「ファイル」メニュー

コマンド	説明
「新規」>「次元」	次元を作成します。 ¹
「新規」>「アプリケーション」	アプリケーション・ウィザードを起動します。
「新規」>「フォルダ」	新規フォルダを作成します。
「開く」>「アプリケーション」	すべてのアプリケーションがアプリケーション・タイプごとに表示されます。
「閉じる」	現在のタブ、他のタブ(開いている他のすべてのタブ)、またはすべてのタブを開きます。
「アプリケーションの編集」	編集するアプリケーションを選択可能なダイアログ・ボックスが表示されます。 ²
「インポート」>「プロファイルの作成」	インポート・プロファイルを作成します。 ³
「インポート」>「次元のインポート」	「次元のインポート」ダイアログ・ボックスを使用して次元をインポートします。 ⁴
「インポート」>「インタフェース領域の消去」	インタフェース領域を消去します。 ⁵

¹ 次元ライブラリのみに表示されます。

² 次元ライブラリのみに表示されます。

³ 次元ライブラリのみに表示されます。

⁴ 次元ライブラリのみに表示されます。

⁵ 次元ライブラリのみに表示されます。

「編集」メニュー

「編集」メニューを使用すると、次元ライブラリでの検索およびソート条件の設定に関連するタスクを実行できます。

表 5 「編集」メニュー

コマンド	説明
検索	プロパティ、名前、別名によりメンバーを検索します。
「フィルタ条件の消去」	適用されたフィルタを消去します。
「ソート条件の消去」	適用されたソートを消去します。

「表示」メニュー

「表示」メニューを使用すると、Performance Management Architect に特定のペインを表示できます。これらのオプションは、切り替えることはできません。ペインを閉じるには、閉じるボタンを使用します。

表 6 「表示」メニュー

コマンド	説明
EPM Workspace	
マストヘッダの表示	メニュー・バーおよびツールバーを非表示にします。メニューおよびツールバーを非表示にした後で再び表示するには、画面の右上隅にある「表示」ボタンをクリックします。
次元ライブラリ	
共有ライブラリの表示	共有ライブラリが表示されます。
アプリケーションの表示	アプリケーション・ペインが表示されます。
プロパティ・グリッドの表示	プロパティ・グリッドが表示されます。
メンバー・リストの表示	「メンバーの検索」ペインが表示されます。
リフレッシュ	表示をリフレッシュします。
トランザクション・ログのダウンロード	「トランザクション・ログのフィルタ」ダイアログ・ボックスが表示されます。
メンバーの表示	別名次元に使用します。このオプションを選択した場合、手動でリフレッシュする必要があります。リフレッシュすると、システム・プロパティで指定されたデフォルト・メンバーが存在する別名次元に関連付けられた次元の変更内容が表示されます。
次元のソート	次元を昇順または降順にソートします。
次元のフィルタ	次元を名前、タイプ、または所有者によってフィルタします。
データの同期、ライブラリ・ジョブ・コンソールおよびアプリケーション・ライブラリ	
アイコン	アイコンおよびアーティファクトの名前が表示されます。 ¹
詳細	アーティファクト名、説明および詳細が表示されます。
リフレッシュ	表示をリフレッシュします。
フィルタ	「フィルタ」ダイアログ・ボックスが表示され、表示内容をフィルタできます。

コマンド	説明
「フィルタ条件の消去」	適用されたフィルタを消去します。
孤立アプリケーション	「孤立アプリケーション」ダイアログ・ボックスが表示され、孤立アプリケーションのトラブルシューティングができます。 「アプリケーション・ライブラリ」のみに表示されます。
検索	「アプリケーションの検索」ダイアログ・ボックスを表示します。 「アプリケーション・ライブラリ」のみに表示されます。

¹ データの同期およびアプリケーション・ライブラリでのみ表示されます。

管理メニュー

Performance Management Architect モジュール(次元ライブラリ、アプリケーション・ライブラリ、ライブラリ・ジョブ・コンソールまたはデータの同期)にアクセスすると、「管理」メニューが表示されます。

表 7 管理メニュー

コマンド	説明
タスクフローの管理	通常行うタスクを自動化します。
タスクフロー・ステータスの表示	自動化されたタスクのステータスを表示します。

「ヘルプ」メニュー

「ヘルプ」メニューから、Performance Management Architect のオンライン・ヘルプ、Oracle サポート、Oracle Technology Network、Oracle Web サイトおよび Performance Management Architect に関する情報にアクセスできます。

クラシック・アプリケーションの Performance Management Architect への変換

アプリケーション管理に Performance Management Architect を使用するには、Financial Management クラシック管理、Planning クラシック管理または Essbase を使用して管理されているアプリケーションを変換できます。

クラシック・アプリケーション管理機能(Performance Management Architect で管理されないアプリケーション用)の詳細は、『Oracle Hyperion Planning 管理者ガイド』または『Oracle Hyperion Financial Management 管理者ガイド』を参照してください。

注： アプリケーションは、移動前にリリース 11.1.2.1 に移行する必要があります。

クラシック・アプリケーション管理で作成したアプリケーションを Performance Management Architect に変換すると、そのアプリケーションをクラシック・アプリケーション管理には戻せません。

アプリケーションを移動する前に実行するタスク

- クラシック Planning アプリケーションを Performance Management Architect に変換する前に、属性次元の名前に含まれている空白を除去します。たとえば、Extra Small という属性は ExtraSmall に名前を変更します。
- クラシック Planning アプリケーションを Performance Management Architect に移動する前に、すべてのユーザーがアプリケーションをログオフする必要があります。ユーザーに通知するには、ブロードキャスト・メッセージを送信します。『Oracle Hyperion Planning 管理者ガイド』を参照してください。
- Performance Management Architect アプリケーションのサポートを使用可能にするには、Financial Management アプリケーション・サーバーに IIS をインストールする必要があります。ただし、ASP コンポーネントを使用可能にする必要はありません。

▶ クラシック・アプリケーションを Performance Management Architect に変換するには:

1 EPM Workspace で、「ナビゲート」、「管理」、「クラシックから EPM Architect への変換」の順に選択します。

2 「ようこそ」画面を確認し、「次へ」をクリックします。

「アプリケーション要約」ページに、ユーザーが変換するためにアクセスできるアプリケーションが表示されます。(この情報は、Shared Services サーバーから得られます。アプリケーションを変換できない場合は、説明が表示されず。)

3 「次へ」をクリックします。

4 「アプリケーションの選択」ページで、「変換するアプリケーション」リストに変換するアプリケーションを追加してから、「次へ」をクリックします。

5 変換するアプリケーションの要約を確認してから、「次へ」をクリックして変換を実行します。

6 「終了」をクリックします。

変換の進捗状況を確認するには、ライブラリ・ジョブ・コンソールに移動します(「ナビゲート」、「管理」、「ライブラリ・ジョブ・コンソール」の順に選択)。アプリケーションの Performance Management Architect への変換が成功しなかった場合、ライブラリ・ジョブ・コンソールの「添付ファイル」領域で、「ジョブのインポート」ログの変換に関する詳細情報を確認できます。305 ページの「ジョブ・コンソールの操作」を参照してください。

7 アプリケーション・ライブラリを開き、アプリケーションが Performance Management Architect に存在することを確認します。

8 次元ライブラリに移動し、Performance Management Architect に追加された次元を確認します。

9 アプリケーションを開きます。

注： クラシック Planning アプリケーションが Performance Management Architect に変換されると、最初に検出された Planning のメンバーが共有されます。変換後もこのメンバーは共有されたままであり、Planning と Performance Management Architect の階層が同じになります。

2

Performance Management Architect サーバーの管理

この章の内容

Performance Management Architect サービス	41
Performance Management Architect 次元サーバーの開始および停止	42
Performance Management Architect アプリケーション・サーバーの開始および停止	42
Performance Management Architect データ・シンクロナイザ・サーバーの起動および停止	43

Performance Management Architect では、次の 3 つのサーバーを実行する必要があります:

- Hyperion EPMA サーバー
- Hyperion EPMA Web 層 - Web アプリケーション
- Hyperion EPMA データ・シンクロナイザ - Web アプリケーション

サーバーを開始する前に、Shared Services、EPM Workspace、IIS および Hyperion EPMA サーバーのサービスが確実に実行されるようにする必要があります。

Performance Management Architect サービス

1 つのサービス・アプリケーションおよび 1 つのコンソール・アプリケーションが Performance Management Architect で実行され、どちらも 1 台のサーバー上で実行されます。

表 8 Performance Management Architect サービスおよびコンソール・アプリケーション

Performance Management Architect アプリケーション	説明
Hyperion EPMA サーバー EPMA_Server.exe	Performance Management Architect の次元データおよびアプリケーション・データのすべての読み取りおよび書き込み処理を扱います。また、ライブラリ・ジョブ・コンソールに対するすべての処理も扱います。Web サービスを介して公開された API 経由で送られてくるサーバー要求を処理するプロキシ・レイヤーをホストします。
NetJNIBridge Windows コンソール・アプリケーション HyS9BPMA_NetJNIBridge.exe	Performance Management Architect サーバー・アプリケーションおよび Shared Services (HSS) Java アプリケーション間のブリッジとなります。

注： コンソール・アプリケーション(HyS9BPMA_NetJNIBridge.exe)は、サービス(EPMA_Server.exe)によって起動および停止されるため、手動での起動または停止は行わないでください。

注： Performance Management Architect データベース・ユーザーまたはパスワードを変更した場合、データベースの構成タスクを再実行し、Performance Management Architect データベース・ユーザーおよびパスワードを入力します。再構成後、Hyperion EPMA サーバー・サービスを再開します。

Performance Management Architect 次元サーバーの開始および停止

Performance Management Architect 次元サーバーは、「開始」メニューまたは「サービス」パネルから開始および停止できます。

▶ 次元サーバーを起動または停止するには、次のアクションを行います:

- 「サービス」パネルから、「Hyperion EPMA サーバー」を開始します。
- 次の起動スクリプトを実行します: <EPM_ORACLE_INSTANCE>/bin/startEPMAserver.bat.

次元サーバーのサービス(Hyperion EPMA サーバー)の開始時に問題が発生する場合は、タイムアウト設定を変更できます。次元サーバーのスタートアップに対するデフォルト・タイムアウト設定は 180 秒です。

▶ 次元サーバーのスタートアップのタイムアウト設定を高くするには:

- 1 <EPM_ORACLE_INSTANCE>\products\Foundation\BPMA\AppServer\DimensionServer\ServerEngine\binにある BPMA_Server_Config.xml を開きます。
- 2 DimensionServerStartupTimeout を探して、タイムアウト値(秒単位)を変更します。

すべての BPMA_Server_Config.xml 設定の詳細は、[付録 D 「BPMA_Server_Config.xml の構成設定」](#) を参照してください。

Performance Management Architect アプリケーション・サーバーの開始および停止

Performance Management Architect アプリケーション・サーバーは、「サービス」パネル、「スタート」メニュー、またはコマンドにより開始および停止できます。コマンドの場所は、使用している Java アプリケーション・サーバーによって異なります。

- ▶ EPM Architect アプリケーション・サーバーを起動または停止するには、次のアクションを行います:
- 「サービス」パネルから「Hyperion EPM Architect Web アプリケーション」を開始します。
- 「スタート」、「プログラム」、「Oracle EPM System」、「Foundation Services」、「Performance Management Architect」、「Performance Management Architect Web の起動(停止)」の順に選択します。

Java アプリケーション・サーバーをホストしているコンピュータから、サーバーを開始または停止するコマンドを見つけます。

表 9 StartEPMAWebServer および StopEPMAWebServer コマンドの場所の例

使用中	次のディレクトリに移動(例)	実行するコマンド
<ul style="list-style-type: none"> ● WebLogic 10.3 ● WebSphere 7.0.0.19 	< drive letter >:\<EPM_ORACLE_INSTANCE>\deployments \<AppServerNameVersion>\bin	startEPMAWebServer.bat または stopEPMAWebServer.bat をダブルクリックします

注: Web サービス接続タイムアウト設定を AWBConfig.properties ファイルで構成できます。デフォルトは 10 分です:

WEBSERVICES_CONNECTION_TIMEOUT_MINUTES=10.

Performance Management Architect データ・シンクロナイザ・サーバーの起動および停止

Performance Management Architect のデータ移動機能を使用するには、データ・シンクロナイザ・サーバーを開始する必要があります。ただし、EPM Workspace にログインする必要はありません。

Performance Management Architect データ・シンクロナイザ・サーバーは、「サービス」パネル、「スタート」メニュー、またはコマンドにより起動および停止できます。コマンドの場所は、使用している Java アプリケーション・サーバーによって異なります。

- ▶ EPM Architect データ・シンクロナイザ・サーバーを起動または停止するには、次のアクションを行います:
- 「サービス」パネルから「Hyperion EPM Architect Data Synchronization – Web Application」を起動します。
- 「スタート」、「プログラム」、「Oracle EPM System」、「Foundation Services」、「Performance Management Architect」、「データ・シンクロナイザの起動(停止)」の順に選択します。
- Java アプリケーション・サーバーをホストしているコンピュータから、サーバーを開始または停止するコマンドを見つけます。

表 10 startEpmaDataSync および stopEpmaDataSync コマンドの場所の例

使用中	次のディレクトリに移動(例)	実行するコマンド
<ul style="list-style-type: none"> ○ WebLogic 10.3 ○ WebSphere 7.0.0.19 	<pre>< drive letter >:\<EPM_ORACLE_INSTANCE>\deployments <AppServerNameVersion>\bin</pre>	<pre>startEpmaDataSync.bat または stopEpmaDataSync.bat をダブルク リックします</pre>

第 II 部

アプリケーション・メタデータの管理

アプリケーション・メタデータの管理の内容：

- [メタデータのインポート](#)
- [次元の操作](#)
- [メンバーの操作](#)
- [アプリケーションの構築](#)
- [アプリケーションの管理](#)

この章の内容

フラット・ファイルの作成.....	49
インタフェース・テーブルの使用方法.....	61
インポート・プロファイルの作成.....	68
インポート・プロファイルの管理.....	77

次元ライブラリは、Financial Management、Profitability and Cost Management、Essbase、Data Relationship Management および Planning の管理者が次元と階層を表示、作成および管理するための中心的な場所です。


















共有ライブラリまたは個々のアプリケーションに次元情報(メタデータ)をインポートするには、1)インポート・フラット・ファイルを作成してインポートするか、2)インタフェース・テーブルからメタデータをインポートするか、3)Data Relationship Management アプリケーションからメタデータをインポートします。





- フラット・ファイルからのインポートの準備の詳細は、[49 ページの「フラット・ファイルの作成」](#)を参照してください。
- インタフェース・テーブルからのインポートの準備の詳細は、[61 ページの「インタフェース・テーブルの使用方法」](#)を参照してください。
- Data Relationship Management アプリケーションからのインポートの準備の詳細は、Oracle Data Relationship Management EPM Architect Integration Guide を参照してください。

注意 次元ライブラリの次元にアクセスするには、適切なセキュリティ・ログイン情報が必要です。たとえば、次元エディタのセキュリティ役割を持っている場合は、次元やメンバーの作成、削除および変更、インポート・プロファイルの作成、トランザクション・ログの実行など、次元ライブラリのすべての機能にアクセスできます。また、次元レベルのセキュリティを使用すると、個々の次元へのユーザー・アクセスを制御できます。『Oracle Hyperion Enterprise Performance Management System ユーザーおよび役割セキュリティ・ガイド』を参照してください。

次の表では、Performance Management Architect でサポートされる次元タイプについて説明します。共有ライブラリでは、各次元タイプはアイコンで表されます。

表 11 次元タイプ

アイコン	タイプ	説明
	勘定科目	アプリケーションにおける純利益および売上などの勘定科目の種別情報のチャート。
	別名	Financial Management アプリケーションの次元メンバーの説明または言語のセットを定義し、Planning、Profitability and Cost Management および Essbase アプリケーションの別名テーブルを作成します。
	割当てタイプ	直接割当ておよび割当て系統関係を保管します。Profitability アプリケーションに必須です。
	属性	Planning アプリケーションおよび Essbase アプリケーションで次元のメンバーを分類します。
	連結メソッド	Financial Management アプリケーションの連結動作を表します。
	国	Essbase アプリケーションの多数の国のビジネス・アクティビティを追跡調査します。次元に国のタグを付けると、「通貨」テキスト・ボックスに通貨名を入力できます。 注： この次元タイプは、集約ストレージ・アウトラインには適用されません。
	通貨	マルチ通貨アプリケーションにおける通貨。
	エンティティ	アプリケーションにおけるエンティティまたは組織構造。
	汎用	すべてのアプリケーション・タイプで使用できるカスタム次元
	ICP	Financial Management アプリケーションで ICP エンティティなどの内部取引情報を指定します。連結アプリケーションに ICP 次元を含めると、そのアプリケーション内のエンティティ次元のメンバーが自動的に挿入されます。これらのメンバーの編集や変更はできません。この次元は連結アプリケーションに含める必要があります。
	メジャー	Profitability and Cost Management モデルを構築、検証および計算するために必要となります。
	期間	月、四半期および半期などのアプリケーションの期間構造。
	シナリオ	実績および予算などのアプリケーションのシナリオ。
	セキュリティ・クラス	Financial Management アプリケーションのセキュリティ・クラス情報。
	スマート・リスト	Planning アプリケーションのスマート・リスト情報。
	時間	Essbase アプリケーションでデータを連結および更新する頻度を指定します。Essbase アウトラインの 1 つの次元にのみ時間のタグを付けられます。
	UDA	ユーザー定義属性(UDA)情報を指定します。

アイコン	タイプ	説明
	値	Financial Management アプリケーションの値次元に相当します。連結アプリケーションに値次元を含めると、そのアプリケーションの通貨次元のメンバーに基づいて、3つの通貨メンバーが自動的に生成されます。これらのメンバーの編集や変更はできません。この次元は連結アプリケーションに含める必要があります。
	バージョン	Planning アプリケーションのバージョン 1 および最終バージョンなどのバージョン情報。
	ビュー	Financial Management アプリケーションのビュー次元に相当します。この次元には、システムの期別メンバーに加え、特定のアプリケーションの期間次元の各レベルに相当するメンバーを含める必要があります。たとえば、期間次元に月、四半期および半期が含まれている場合、ビュー次元には、期別、MTD、QTD、HTD、YTD などのメンバーを含める必要があります。
	年	アプリケーションに使用する年

アプリケーションを作成する前に、これらのアプリケーションに含める次元のいくつかを定義する必要があります。

- ▶ 次元ライブラリにアクセスするには、「ナビゲート」、「管理」、「次元ライブラリ」の順に選択します。

フラット・ファイルの作成

フラット・ファイルを作成することで、次元を次元ライブラリにインポートできます。フラット・ファイルを作成して次元をインポートする前に、次の項を参照してください:

- [49 ページの「フラット・ファイルのエンコーディング」](#)
- [49 ページの「フラット・ファイルの構文」](#)
- [50 ページの「フラット・ファイルの特殊文字」](#)

フラット・ファイルのエンコーディング

Performance Management Architect インポートは、UTF-8、UTF-16LE、UTF-16BE、UTF-32LE、UTF-32BE のいずれかのエンコードの ADS フォーマットのテキスト・ファイルをサポートしています。また、ASCII エンコード・ファイルも読み取れますが、英字に限られます。ファイルには、保存されたファイルに使用するエンコードを判別するバイト順マークを含める必要があります。バイト順マークがない場合、デフォルトは UTF-8 です。

フラット・ファイルの構文

フラット・ファイルには次のセクションが含まれており、自由に順序を変更できます。

- 次元 - [51 ページの「次元セクション」](#) を参照してください。

- 次元の関連付け - 52 ページの「次元の関連付けセクション」を参照してください。
- メンバー - 53 ページの「メンバー・セクション」を参照してください。
- 階層 - 55 ページの「階層セクション」を参照してください。
- プロパティ配列 - 58 ページの「プロパティ配列セクション」を参照してください。

フラット・ファイルの特殊文字

感嘆符(!)は、セクションの始まりを示します。感嘆符の後には有効なセクション名(Dimensions や DimensionAssociations など)が続く必要があります。

アポストロフィ(')で始まる行は、各セクションの列を定義します。各セクションのヘッダー行の後には、列ヘッダー/定義行が続く必要があります。例:

```
!Section=Dimensions
```

```
'Name|DimensionClass|DimensionAlias|DimensionStorageType|AllowDuplicatesInDimension|
CommentDuplicate|ConsolidationDuplicate|DataStorageDuplicate|DimensionHierarchyType|
DimensionSolveOrder|BSOMemberFormulaDuplicate|MemberSolveOrderDuplicate|
SkipValueDuplicate|TimeBalanceDuplicate|UDADuplicate|TwoPassCalcDuplicate|
VarianceReportingDuplicate|DimDataStorage|DimValidForCapex|DimValidForPlan1|
DimValidForPlan2|DimValidForPlan3|DimValidForWorkforce|EnumOrder1|EnumOrder2|
EnumOrder3|EnumOrderCapex|EnumOrderWF|AttributeType|CurrencyNameDuplicate|
customDimensionId|ApplySecurity|DisplayOrder|GridMissingLabelType|Increment|
SmartListLabel|StartValue
```

TRUE および FALSE 値は、それぞれ Y および N として表されます。

セミコロン(;), カンマ(,), パイプ(|), スペースおよびタブは、有効なフィールド/列の区切り文字です。

注: ファイル当たり 1 つの区切り記号のみ使用できます。パイプ(|)とセミコロン(;)の両方でファイルを区切ることはできません。

アンダースコア(_)を改行の前で使用して、改行をエスケープすると、レコードがフラット・ファイルの複数行にまたがることができます。たとえば、メンバー式が非常に長いため、改行を使用してメンバー式を書式設定することが必要な場合があります。

注: インポート・ファイルにスペースのあるプロパティ名は含められません。たとえば、関連付けられた次元が属性次元である次元の関連付けを指定する場合、その次元の関連付けセクションで指定されたプロパティ名にはスペースを含めないでください。さらに、次元名を感嘆符(!)で始めることはできません。

次元セクション

次元セクションは、インポートされる次元を定義します。このセクションで定義される次元が共有ライブラリまたはターゲット・アプリケーションに存在しない場合、その次元はインポートの実行中に作成されます。共有ライブラリまたはターゲット・アプリケーションに存在する次元は、このセクションで定義されるプロパティ値を持ち、その値はインポートの実行中に更新されます。このセクションでは、Performance Management Architect でサポートされるすべての次元レベル・プロパティのサブセットまたは全部を定義できます。列ヘッダ一行で使用されるプロパティ名は、Performance Management Architect の次元プロパティ名と厳密に一致する必要はありません。ファイルのプロパティ名を、インポート・プロファイルの対応する Performance Management Architect プロパティ名にマッピングできます。

注： このセクションは必須であり、フラット・ファイルに常に存在する必要があります。

次元のプロパティについては、次の製品固有の章で定義されています：

- [第 11 章「Financial Management 次元の操作」](#)
- [第 12 章「Planning 次元の操作」](#)
- [第 13 章「Profitability and Cost Management プロパティの操作」](#)
- [第 14 章「Essbase プロパティの操作」](#)

構文

```
!Section=Dimensions  
  
Name  
;  
DimensionClass  
;  
Dimension_Property1  
;... ;  
Dimension_PropertyN
```

パラメータ	説明
Name	次元名(通貨など)。このパラメータは必須です。 注： 次元名は感嘆符(!)で始めることはできません。
DimensionClass	次元タイプ。たとえば、Generic です。このパラメータは、新規次元には必須です。
Dimension_PropertyX	次元レベルのプロパティ名。

例

```
!Section=Dimensions
'Name;DimensionClass;DimensionAlias
MyCurrency;Currency;Currencies
MyScenario;Scenario;Scenarios
MyEntity;Entity;Entities
MyAccount;Account;Accounts
```

例(次元リーダーおよび次元ライター・プロパティ)

行は非常に長い場合があるため、次元ライターおよび次元リーダーのプロパティをロードする際に、アンダースコア文字(_)を使用して改行を追加できます。次元リーダーのプロパティの例は次のとおりです:

```
Group1@Native Directory_
PowerUsers@Native Directory_
JSmith@EdenCorp
```

注: 次元名は、標準命名規則に従う必要があります。362 ページの「次元の名前付けの制限」および386 ページの「次元、メンバーおよび別名の名前付けの制限」を参照してください。また、スマート・リスト次元名には、特殊文字、ハイフンまたはスペースを含めることができません。

次元の関連付けセクション

このセクションには、勘定科目次元とセキュリティ・クラス次元の間の関連付けなどの、次元間の関連付けに関する情報が含まれています。

注: メンバーのプロパティが別の次元を参照している場合、新規次元には、このセクションは必須です。マージ・モードまたは置換モードを使用する場合の次元には、このセクションはオプションです。

構文

```
!Section=DimensionAssociations
,
BaseDimension
;
Property
;
TargetDimension
```

パラメータ	説明
BaseDimension	メンバーのプロパティが別の次元に関連付けられる基本次元の名前。これは必須列です。
Property	関連付けられたプロパティの名前('Alias'など)。これは必須列です。
TargetDimension	プロパティが関連付けられる次元の名前。これは必須列です。

例

```
!Section=DimensionAssociations
'BaseDimension;Property;TargetDimension
Currency;SecurityClass;MySecurityClassDimension
Scenario;Alias;MyAliasDimension
Account;UDA;MyUDADimension
```

メンバー・セクション

このセクションでは、次元メンバーとそのメンバー・プロパティを定義します。関係メンバー・プロパティは、親子関係を必要とするので、このセクションでは定義できません。たとえば、'AggregationWeight'はメンバー・セクションで定義できません。

次元のプロパティについては、次の製品固有の章で定義されています:

- [第 11 章「Financial Management 次元の操作」](#)
- [第 12 章「Planning 次元の操作」](#)
- [第 13 章「Profitability and Cost Management プロパティの操作」](#)
- [第 14 章「Essbase プロパティの操作」](#)

注: このセクションはオプションです。メンバー・プロパティ値は、フラット・ファイルの Hierarchies および PropertyArray セクションでも定義できます。

構文

```
!Members=
Dimension_Name

,
Name
;
Member_Property1
;...;
Member_PropertyN
```

パラメータ	説明
Dimension_Name	メンバーが定義されている次元の名前。
Name	メンバー名(Euro など)。これは必須列です。
Member_PropertyX	個別の次元タイプのメンバーレベル・プロパティ名。プロパティについては、製品固有の章を参照してください。

例

```
!Members=Currency
'Name;Scale;TranslationOperator;DisplayInICT
EURO;Whole;;y
GBR;Whole;;
USD;Whole;;
```

```
!Members=Scenario
'Name;DefaultFrequency;DefaultView;ZeroViewForNonAdj;_
ZeroViewForAdjConsolidateYTD;MaximumReviewLevel;UsesLineItems;_
Creating Flat Files 3
EnableProcessManagement;SecurityClass;EnableDataAudit;_
DefFreqForICTrans
Actual;MTD;Periodic;Periodic;Periodic;N;10;Y;N;;Y;MTD
Budget;MTD;Periodic;Periodic;Periodic;N;10;Y;Y;;Y;MTD
```

```
!Members=Entity
'Name;Currency;AllowAdjs;AllowAdjFromChildren;_
HoldingCompany;SecurityAsPartner;IsICP;SecurityClass
Entity_[None];[None];N;N;;N;
Regional;USD;Y;N;;N;CORPORATE
UnitedStates;USD;Y;Y;;N;US
```

```
!Members=Account
'Name;ConsolidationAccountType;IsCalculated;_
IsConsolidated;PlugAccount;Custom1TopMember;Custom2TopMember;_
Custom3TopMember;Custom4TopMember;NumDecimalPlaces;_
EnableCustom1Aggr;EnableCustom2Aggr;EnableCustom3Aggr;_
EnableCustom4Aggr;XBRLTags;ICPTopMember;IsICP;UsesLineItems;_
SecurityClass;EnableDataAudit;CalcAttribute
Account_[None];Revenue;N;N;;;;0;Y;Y;Y;Y;;N;N;;N;
ExchangeRates;GroupLabel;Y;Y;;;;0;Y;Y;Y;Y;;N;N;;N;
Plug;Revenue;N;Y;;;;0;Y;Y;Y;Y;;N;N;;N;
```

例

「メンバー」セクションでのメンバー式の定義の例(アンダースコア(_)は改行のエスケープとして使用されます)。

```
!Members=Planning_Account
'Name|BSOMemberFormula
SpecialAccount|[OpenInputValueBlock]_
[TimeBalanceFormula("Spread_Average")]_
[CloseInputValueBlock]
```

注： スマート・リスト・メンバー名には、特殊文字、ハイフンまたはスペースを含めることができません。詳細は、[114 ページの「スマート・リストの名前」](#)を参照してください。

注： MemberFormula プロパティは非推奨です。フラット・ファイルで MemberFormula を使用すると、警告が表示され、値は無視されます。かわりに ASOMemberFormula または BSOMemberFormula プロパティを使用してください。ASOMemberFormula は Essbase ASO および Profitability and Cost Management アプリケーションに有効です。BSOMemberFormula は Essbase BSO、Profitability and Cost Management および Planning アプリケーションに有効です。

階層セクション

このセクションでは、次元メンバー、それらのメンバー・プロパティと関係プロパティ、および階層/親-子関係を定義します。このセクションは:

- 新規次元および置換方法を使用する既存の次元には必須です。
- マージ方法を使用する既存の次元にはオプションです。
- 親の下にあるメンバーの順序を制御します。親の下にあるすべてのメンバーが階層セクションにある場合、既存の次元のメンバーは置換モードのインポート実行中に順序変更されます。

構文

```
!Hierarchies=
Dimension_Name

,
Parent
;
Child
;
Member-Relationship_Property1
;...;
Member-Relationship_PropertyN
```

パラメータ	説明
Dimension_Name	メンバーが定義されている次元の名前。
Parent	親メンバーの名前。これは必須列です。
Child	子メンバーの名前。これは必須列です。
Member-Relationship_PropertyX	個々の次元タイプのメンバーレベルのプロパティまたはメンバー関係プロパティの名前。メンバー・プロパティ情報については、製品固有の章を参照してください。
IsPrimary	親の下にあるメンバーのインスタンスがプライマリか、または共有かを指定します。IsPrimary パラメータはオプションですが、使用を強くお勧めします。定義しないままにすると、デフォルトの TRUE に設定され、メンバーがプライマリであると想定されます。57 ページの「IsPrimary を使用したメンバーのプライマリおよび共有インスタンスの指定」を参照してください。

例

```
!Hierarchies=Currency
'Parent;Child
#root;EURO
#root;GBR
#root;USD
```

```
!Hierarchies=Scenario
'Parent;Child
#root;Actual
#root;Budget
```

```
!Hierarchies=Entity
'Parent;Child
#root;Entity_[None]
#root;Regional
Regional;UnitedStates
UnitedStates;California
California;Sunnyvale
California;FosterCity
UnitedStates;Connecticut
Connecticut;Stamford
```

```
!Hierarchies=Account
'Parent;Child
#root;Account_[None]
#root;ExchangeRates
ExchangeRates;Rate1
ExchangeRates;Rate2
#root;Plug
```


注： トークン「#root」は、一番上の次元メンバーを親として参照するために使用されます。また、次元名を使用して、一番上の次元メンバーを親として参照できます。

ヒント： Alias および UDA など、複数の値を含んだプロパティは、階層セクションで定義できます。

例

階層セクションでの Alias プロパティの定義例:

```
!Hierarchies=Entity
'Parent;Child;DefaultParent;Currency;AllowAdjs;AllowAdjFromChildren;HoldingCompany;
  Alias=English;Alias=French

#root;Entity_[None];Y;[None];N;N;;Entity None
  Alias;French None Alias

#root;Regional;Y;USD;Y;N;;
  Regional Operations;Operationes Regionale
```

例

階層セクションでの UDA プロパティの定義例:

```
!Hierarchies=Plan1Account
'Parent;Child;UDA1; UDA2;UDA3;
111092;
  HSP_NOLINK;Plan1;Plan3

111093;
  HSP_NOLINK;Plan3
```

IsPrimary を使用したメンバーのプライマリおよび共有インスタンスの指定

インポート・ファイルでは、同じ次元で同じ名前を持つ2つのメンバーは、常に同じメンバーの別のインスタンスとして処理されます。あるメンバーが1つの次元で複数のインスタンスを持つ場合、「IsPrimary」列で、どのインスタンスがプライマリで、どのインスタンスが共有かを指定します。「IsPrimary」列は必須ではありませんが、使用を強くお勧めします。定義しないままにすると、デフォルトのTRUEに設定され、メンバーがプライマリであると想定されます。定義しないままの場合は、インポート結果ファイルに警告が表示されます。

注：「IsPrimary」列を使用しない古いインポート・ファイルは、従来どおり実行できます。ただし、インポート・ファイルに「IsPrimary」列がない場合、共有メンバーを作成したり、メンバーを移動したりできません。

プロパティ配列セクション

このセクションを使用して、次元のメンバーに対して複数值および単一値プロパティを定義できます。

製品固有のメンバー・レベル・プロパティについては、[第 11 章「Financial Management 次元の操作」](#)、[第 12 章「Planning 次元の操作」](#)、[397 ページの「次元プロパティおよびメンバー・プロパティ」](#)、および[第 14 章「Essbase プロパティの操作」](#)を参照してください。

注： このセクションはオプションです。

構文

```
!PropertyArray=  
Dimension_Name
```

```
,  
  
Property  
;  
Name  
;  
Key  
;  
Value  
;
```

パラメータ	説明
Dimension_Name	メンバーが定義されている次元の名前。
Property	変更されるプロパティの名前。これは必須列です。
Name	プロパティが変更されるメンバーの名前。これは必須列です。
Key	プロパティが次の値の場合: UDA - UDA 値。UDA 値を消去するには、このフィールドを空白のままにし、プロファイル内の UDA の「インポートの前に消去」オプションを有効にします。 別名 - 別名のテーブル名または説明の名前。 その他 - 常に空白にしておく必要があります。

パラメータ	説明
Value	<p>プロパティが次の値の場合:</p> <p>UDA - 常に空白にしておく必要があります。</p> <p>別名 - 「キー」で指定した値に対応する別名または説明。このメンバーの別名値とキーを消去するには、このフィールドを空白のままにし、インポート・プロファイル内の別名に「インポートの前に消去」オプションを指定します。</p> <p>その他 - プロパティ値。</p>

例

Alias プロパティ値の定義

```

!PropertyArray=Currency
'Property;Name;Key;Value
Alias;EURO;English;European Euro
Alias;EURO;French;
Alias;EURO;German;
Alias;EURO;Italian;
Alias;EURO;Japanese;
Alias;GBR;English;Great Britain Pounds
Alias;GBR;French;
Alias;GBR;German;
Alias;GBR;Italian;
Alias;GBR;Japanese;
Alias;USD;English;United Stated Dollars
Alias;USD;French;
Alias;USD;German;
Alias;USD;Italian;
Alias;USD;Japanese;

```

別名値の削除(値は空白のまま)

```

!PropertyArray=Currency
'Property;Name;Key;Value
Alias;EURO;English;

```

メンバーの別名値をすべて削除(キーと値は空白のまま)

```

!PropertyArray=Currency
'Property;Name;Key;Value
Alias;EURO;;

```

UDA プロパティ値の定義

```

!PropertyArray=Account
'Property;Name;Key;Value
UDA;ExchangeRates;UDA1;
UDA;ExchangeRates;UDA2;

```

```
UDA;Plug;UDA1;
UDA;Plug;UDA2;
```

メンバーの UDA 値をすべて削除(キーと値は空白のまま)

```
!PropertyArray=Account
'Property;Name;Key;Value
UDA;ExchangeRates;;
```

単一プロパティ値の定義

```
!PropertyArray=Account
'Property|Name|Key|Value
ACCOUNTTYPE|MemberRev||Revenue
ACCOUNTTYPE|MemberExp||Expense
```

Performance Management Architect は次元インポートの単一値メンバー・プロパティをサポートします。これにより、フラット・ファイル!PropertyArray セクションまたはプロパティ配列インタフェース・テーブルにキーを入力せずに、メンバー、プロパティおよび値を入力でき、配列プロパティとは対照的に単一値メンバー・プロパティ割当てとして処理されます。インタフェース・テーブルでは、データは次のようになります:

ロード ID	プロパティ	名前	キー	値
1	ACCOUNTTYPE	MemberRev		収益
2	ACCOUNTTYPE	MemberExp		支出

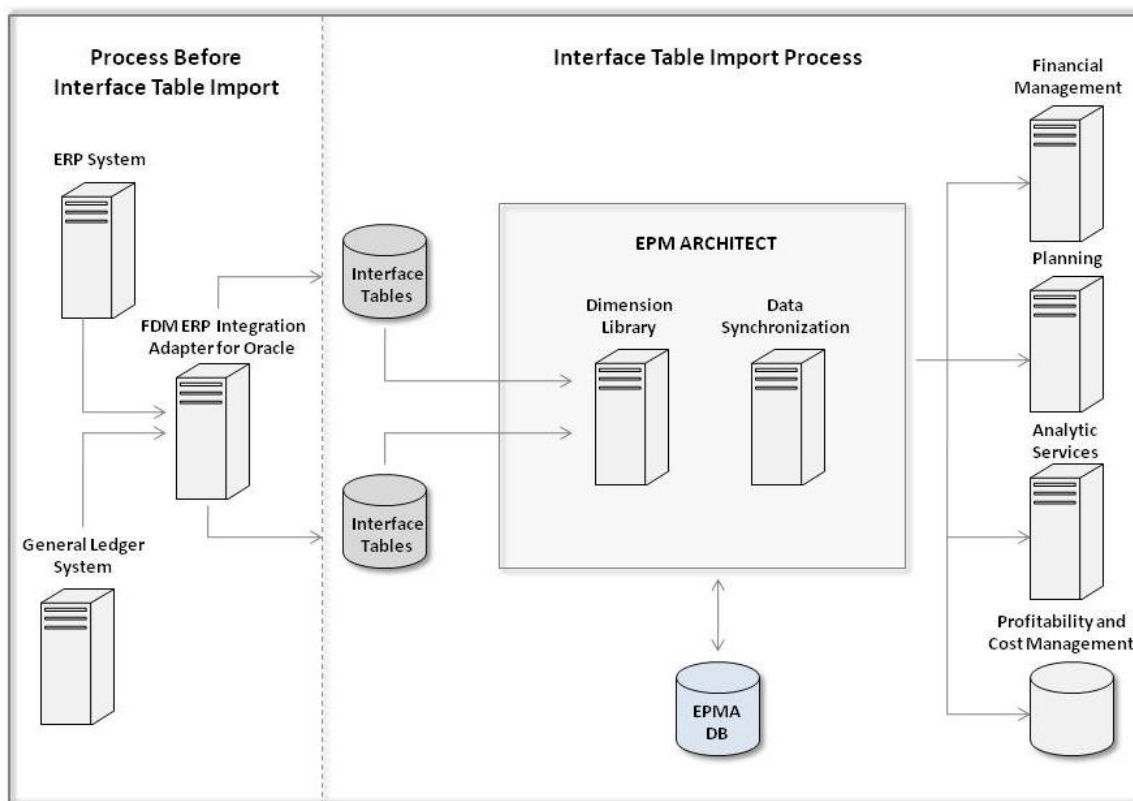
フラット・ファイルで、!PropertyArray セクションは次のようになります:

```
!PropertyArray=Account
'Property|Name|Key|Value
ACCOUNTTYPE|MemberRev||Revenue
ACCOUNTTYPE|MemberExp||Expense
```

この利点は、ACCOUNTTYPE プロパティが現在インポートされたデータの一部でなかった場合に割当てを開始するとき、ACCOUNTTYPE 列を HS_*Member または HS_*Hierarchy テーブルに追加する必要がないという点にあります。フラット・ファイルのインポートでは、ACCOUNTTYPE 列を生成された!Members および!Hierarchies セクションに追加する必要がありません。

インタフェース・テーブルの使用法

インタフェース・テーブルでは、リレーショナル・データベースを介した、外部システムから Performance Management Architect へのデータおよびメタデータのインポートが可能です。



インタフェース・テーブルからのメタデータのインポートは、2段階のプロセスから構成されます。Performance Management Architect 外で行われる第1段階を点線で図に示します。第2段階は Performance Management Architect 内で行われます。

1. ERP システムまたは総勘定元帳システムから FDMEE への情報の移動。
2. FDMEE から Performance Management Architect インタフェース・テーブルへの情報の移動。
3. インタフェース・テーブルから Performance Management Architect へのメタデータのインポート。
4. インポートされたメタデータを使用する Financial Management アプリケーション、Profitability and Cost Management アプリケーション、Planning および Essbase アプリケーションの作成。

複数の Performance Management Architect インタフェース・テーブルの定義を構成できます。Performance Management Architect とインタフェース・テーブルのデータベース・タイプは異なる可能性があります。たとえば、Performance Management Architect データベースは SQL Server を使用し、Performance Management Architect インタフェースは Oracle を使用できます。ベスト・プラクティスとしては、インタフェース・テーブルを Performance Management Architect と同じデータベース・テーブルスペースで構成しないでください。

インタフェース・データ・ソースの構成

この手順は、Performance Management Architect でインタフェース・テーブルを使用する場合に必要となります。インタフェース・テーブルは、外部システムから Performance Management Architect へのメタデータおよびデータのインポートを使用可能にする一連のテーブルやビューで構成されます。インタフェース・テーブルからメタデータおよびデータをインポートする前に、Performance Management Architect でインタフェース・テーブルを構成する必要があります。テーブルを構成するには、プロファイル作成中およびデータ同期中に使用できるデータ・ソース・リンクを作成します。

第3章「メタデータのインポート」および第8章「データの同期」を参照してください。

Performance Management Architect を FDMEE とともに使用する予定の場合、インタフェース・データ・ソースは FDMEE データベース・スキーマにある必要があります。また、Oracle Hyperion Financial Data Quality Management Enterprise Edition を使用している場合、このオプションを選択解除して、次の手順にあるインタフェース・テーブルを作成する必要があります。

▶ インタフェース・データ・ソースを作成するには:

- 1 EPM Workspace で、「ナビゲート」、「管理」、「インタフェース・データ・ソースの構成」を選択します。
- 2 「インタフェース・データ・ソース」タブが表示された場合、「新規データ・ソースの作成」をクリックするか、「ファイル」、「新規」、「インタフェース・データ・ソース」を選択します。
- 3 「インタフェース・データ・ソース・ウィザード」,で、「データベースの詳細」に、データベース・タイプ(Oracle、Microsoft SQL Server, or IBM DB2)を選択し、次のように詳細を入力します:
 1. データベースをホストするサーバーの名前とポート番号を入力します。(デフォルトはデータベース・タイプに基づいて表示されます。)
 2. データベースのサービス名/SID を入力します。これはサーバー上のデータベースの名前です。
 3. データベース・ユーザー名とパスワードを入力します。
 4. オプション: データベースの接続 URL を入力します。
- 4 データベースへの接続をテストする場合は、「テスト」をクリックします。
- 5 「データ・ソースの詳細」に、インタフェース・データ・ソースとして使用するデータベース名を入力します。データ・ソースの説明を入力することもできます。
- 6 「テーブルの作成」を選択し、「終了」をクリックして、テーブルを作成します。
ウィザードの終了後、新しいデータ・ソースのプロパティ(名前、説明、データベース・タイプおよびデータベース・サーバーなど)が「インタフェース・データ・ソース」タブに表示されます。

構成の完了後に、データベース内にサンプル・テーブルのセットが作成されます。サンプル・テーブルの詳細なリストは、64 ページの「[インタフェース・テーブルの定義](#)」を参照してください。

注： 構成ログ(EPM_ORACLE_INSTANCE/diagnostics/logs/config)を確認して、エラーを修正し、ウィザードを再実行できます。

インタフェース・データ・ソースの編集

インタフェース・データ・ソースの任意のプロパティを編集できます。これには、データ・ソースの名前と説明、データベース名、サーバーおよびユーザー名が含まれます。

▶ インタフェース・データ・ソースを編集するには:

- 1 「ナビゲート」、「管理」、「インタフェース・データ・ソースの構成 d」の順に選択します。
- 2 「インタフェース・データ・ソース」タブが表示されるたら、編集するデータ・ソースを右クリックして、「編集」を選択します。
- 3 「インタフェース・データ・ソース・ウィザード」で、「データベースの詳細」に、データ・ソースの次のプロパティを編集します。
 1. データベースをホストするサーバーの名前またはポート番号(あるいはその両方)を入力します。(デフォルトはデータベース・タイプに基づいて表示されます。)
 2. データベースのサービス名または SID を入力します。これはサーバー上のデータベースの名前です。
 3. データベース・ユーザー名またはパスワード(あるいはその両方)を編集します。
 4. データベースの接続 URL を編集します。
- 4 データベースへの接続をテストする場合は、「テスト」をクリックします。
- 5 「データ・ソースの詳細」に、データ・ソースの説明を編集します。

注： データ・ソースを作成したときに付けたデータ・ソース名が、データ・ソースを編集する際に読取り専用で表示されます。データ・ソース名は編集できません。

- 6 「テーブルの作成」を選択し、「終了」をクリックして、テーブルを更新します。

注： 「インタフェース・テーブルを作成してください」チェック・ボックスを選択しない場合、テーブルは作成されません。インタフェース・テーブルを作成するためこのチェック・ボックスを選択した場合は、IM_ (内部)および HS_ (サンプル)のテーブルが作成されます。テーブルがすでに存在する場合、既存の IM_ および HS_ テーブルを削除するようにプロンプトが表示されます。「はい」をクリックして既存のテーブルを削除すると、新規テーブルが作成されます。ただし、「いいえ」を選択すると、既存の IM_ および HS_ テーブルは変更されません。

注： 構成ログ(EPM_ORACLE_INSTANCE/diagnostics/logs/config)を確認して、エラーを修正し、ウィザードを再実行できます。

ウィザードの終了後、編集済のデータ・ソースのプロパティ(名前、説明、データベース・タイプおよびデータベース・サーバーなど)が「インタフェース・データ・ソース」タブに表示されます。

構成の完了後に、データベース内にサンプル・テーブルのセットが作成されます。サンプル・テーブルの詳細なリストは、[64 ページの「インタフェース・テーブルの定義」](#)を参照してください。

インタフェース・データ・ソースの削除

インタフェース・データ・ソース・テーブルを削除すると、インタフェース・データ・ソースに対して構成されているデータベースからテーブルが削除されます。

▶ インタフェース・データ・ソースを削除するには:

- 1 「ナビゲート」、「管理」、「インタフェース・データ・ソースの構成 d」の順に選択します。
- 2 「インタフェース・データ・ソース」タブが表示されるたら、削除するデータ・ソースを右クリックして、「削除」を選択します。
- 3 「テーブルの削除」ダイアログで「テーブルの削除」を選択して、「はい」をクリックしてテーブルを削除するか、「いいえ」を選択して「インタフェース・データ・ソース」タブに戻ります。

インタフェース・テーブルの定義

Performance Management Architect のインタフェース・テーブルは、システム・テーブルおよびユーザー定義テーブルという 2 つのカテゴリにグループ化されます。

システム・テーブルは、インタフェース・テーブルの構成時に作成されます。システム・テーブルにはプロファイルの作成および実行時にインポート・モジュールによって使用される情報が含まれます。

システム・テーブル	説明
IM_Load_Info	<p>このテーブルの使用はオプションです。IM_テーブル内のレコードのサブセットをグループ化できます。たとえば、異なるソースのメタデータを、同じインタフェース・テーブル・インスタンスに分類できますが、各ソースをソース独自の Load_ID を使用して識別できます。IM_Load_Info テーブルを使用すると、異なる Load_ID とその対応するソースを追跡できます。</p> <p>注： インポート実行中は、特定の Load_ID のセットでタグ付けされたメタデータのみをインポートするよう選択できます。78 ページの「次元のインポート時のロード ID 情報の入力」を参照してください。</p> <p>列は次のとおりです:</p> <ul style="list-style-type: none">● i_Load_ID - Load_ID を表す番号。● c_Source_System - この Load_ID が表すソース・システム。このフィールドはオプションです。● c_User_Last_Updated - このフィールドはオプションです。● c_Date_Last_Updated - このフィールドはオプションです。● c_Last_Update_Login - このフィールドはオプションです。

システム・ テーブル	説明
IM_Dimension	<p>処理される次元についての情報、タイプ、それらの次元のメタデータを含むすべてのテーブルおよびビューへの参照が含まれます。</p> <p>注： このテーブルには、サンプル次元の名前、サンプル次元クラス、および HS_サンプル・テーブル(c_Dimension_Name ごとに 1 行)が事前に移入されます。</p> <p>列は次のとおりです:</p> <ul style="list-style-type: none"> ● i_Load_ID - この次元の Load_ID タグ。 ● c_Dimension_Name - 次元の名前。 ● c_Dimension_Class_Name - 次元タイプ。 ● c_Member_Table_Name - この次元のメンバー情報を含むテーブルまたはビューの名前。 53 ページの「メンバー・セクション」 を参照してください。このテーブルおよびビューの移入および指定はオプションです。 ● c_Hierarchy_Table_Name - この次元の階層情報を含むテーブルまたはビューの名前。 55 ページの「階層セクション」 を参照してください。置換モードのインポートの実行時には、このテーブルおよびビューを指定し、定義する必要があります。 ● c_Property_Array_Table_Name - この次元の PropertyArray 情報を含むテーブルまたはビューの名前。 58 ページの「プロパティ配列セクション」 を参照してください。このテーブルおよびビューの移入および指定はオプションです。 ● c_Dim_Property_Table_Name - このテーブルは、ここで次元プロパティが定義されない場合を除き、フラット・ファイルの!Dimensions セクションに部分的に対応しています。 51 ページの「次元セクション」 を参照してください。
IM_Dimension_Association	<p>このテーブルはフラット・ファイルの!DimensionAssociation セクションに直接対応しています。 52 ページの「次元の関連付けセクション」 を参照してください。</p> <p>注： サンプル・テーブルにはデータは事前に移入されません。</p> <p>列は次のとおりです:</p> <ul style="list-style-type: none"> ● i_Load_ID - この次元の Load_ID タグ。 ● c_Base_Dimension - メンバー・プロパティが別の次元に関連付けられている基本次元の名前。これは必須列です。 ● c_Property - 関連プロパティの名前(別名など)。これは必須列です。 ● c_Target_Dimension - 関連プロパティが関連付けられている次元の名前。これは必須列です。

ユーザー定義のテーブルまたはビューを使用して、次元のメンバー、階層、PropertyArray、および次元プロパティ・コンテンツを表せます。IM_Dimension テーブルで適切に参照されているかぎり、テーブルおよびビューのいずれも使用できます。サンプル・テーブルは、命名規則 HS_Dimension_Section を使用します。ここで Dimension は、HS_Accounts_Hierarchy などの次元名を表します。

注： 次のテーブルのテーブル名はサンプルです。ユーザー定義のテーブルまたはビューには任意の名前を使用できます。

HS_Dimension_Member	このテーブルはフラット・ファイルの!Member セクションに直接対応しています。 53 ページの「メンバー・セクション」 を参照してください。
---------------------	--

HS_Dimension_Hierarchy	<p>このテーブルはフラット・ファイルの!Hierarchies セクションに直接対応しています。55 ページの「階層セクション」を参照してください。</p> <p>オプションの「SortOrder」列を指定できます。Performance Management Architect では、親の子を取得する際に、行の順序を決定するために定義された値があればそれを使用します。</p> <p>Alias および UDA プロパティは、サンプル・テーブルにこれらのプロパティの列がない場合でも、HS_Dimension_Hierarchy テーブルで指定できます。必要に応じて、サンプル・テーブル内に Alias および UDA プロパティの列を追加できます。</p> <p>例:</p> <p>Oracle Database 用:</p> <pre>ALTER TABLE HS_Account_Hierarchy ADD "Alias=English" NVARCHAR2(255);/ ALTER TABLE HS_Account_Hierarchy ADD "Alias=French" NVARCHAR2(255);/</pre> <p>SQL Server データベース用:</p> <pre>ALTER TABLE HS_Account_Hierarchy ADD "Alias=English" nvarchar(255)GO ALTER TABLE HS_Account_Hierarchy ADD "Alias=French" nvarchar(255)GO</pre> <p>IBM DB2 データベース用:</p> <pre>ALTER TABLE HS_Account_Hierarchy ADD "Alias=English" VARCHAR(255); ALTER TABLE HS_Account_Hierarchy ADD "Alias=French" VARCHAR(255);</pre> <p>等号[=]列名を使用すると、各別名次元メンバーを別々の列として表せます。</p>
HS_Dimension_PropertyArray	<p>このテーブルはフラット・ファイルの!PropertyArray セクションに直接対応しています。58 ページの「プロパティ配列セクション」を参照してください。</p>
HS_Dimension_Property	<p>このテーブルはフラット・ファイルの!Dimension セクションに直接対応しています。51 ページの「次元セクション」を参照してください。</p>

注： 次のサンプル・テーブルは、インタフェース・テーブル・インスタンスの作成時に作成されます。これらのテーブルは、ユーザーが作成したテーブルで置換できます。また、これらのテーブルに実際のデータは事前に移入されません。

インポート・インタフェース・データ・テーブル(次元、階層、メンバーまたはプロパティ・アレイ・データ)で SortOrder 列のあるテーブルがあれば、そのテーブル内のデータが、インポート・エンジンにその順序でロードされます。「SortOrder」列は整数データ型で、データは昇順でロードされます。「SortOrder」

列のデータ型が整数でない場合、インポート・エンジンではその列を無視し、ORDER BY 句をクエリーに追加せずに、インポート結果に警告を生成します。

サンプル・テーブル

HS_Account_Member	HS_Data_Sales	HS_SmartList_Property
HS_Account_Hierarchy	HS_Entity_Hierarchy	HS_SmartList_PropertyArray
HS_Account_Property	HS_Entity_Member	HS_Time_Hierarchy
HS_Account_PropertyArray	HS_Entity_Property	HS_Time_Member
HS_Alias_Hierarchy	HS_Entity_PropertyArray	HS_Time_Property
HS_Alias_Member	HS_Generic_Hierarchy	HS_Time_PropertyArray
HS_Alias_Property	HS_Generic_Member	HS_UDA_Hierarchy
HS_Attribute_Hierarchy	HS_Generic_Property	HS_UDA_Member
HS_Attribute_Member	HS_Generic_PropertyArray	HS_UDA_Property
HS_Attribute_Property	HS_ICP_Hierarchy	HS_Value_Hierarchy
HS_Attribute_PropertyArray	HS_ICP_Member	HS_Value_Member
HS_ConsolidationMethod_Hierarchy	HS_ICP_Property	HS_Value_Property
HS_ConsolidationMethod_Member	HS_ICP_PropertyArray	HS_Value_PropertyArray
HS_ConsolidationMethod_Property	HS_Period_Hierarchy	HS_Version_Hierarchy
HS_ConsolidationMethod_PropertyArray	HS_Period_Member	HS_Version_Member
HS_Country_Hierarchy	HS_Period_Property	HS_Version_Property
HS_Country_Member	HS_Period_PropertyArray	HS_Version_PropertyArray
HS_Country_Property	HS_Scenario_Hierarchy	HS_View_Hierarchy
HS_Country_PropertyArray	HS_Scenario_Member	HS_View_Member
HS_Currency_Hierarchy	HS_Scenario_Property	HS_View_Property
HS_Currency_Member	HS_Scenario_PropertyArray	HS_View_PropertyArray
HS_Currency_Property	HS_SecurityClass_Hierarchy	HS_Year_Hierarchy
HS_Currency_PropertyArray	HS_SecurityClass_Member	HS_Year_Member
HS_Data_CapExTemplate	HS_SecurityClass_Property	HS_Year_Property
HS_Data_Consolidation	HS_SecurityClass_PropertyArray	HS_Year_PropertyArray
	HS_SmartList_Hierarchy	
	HS_SmartList_Member	

テンプレート・スクリプトによって作成された次元インタフェース・テーブルに加え、その他の次元のインタフェース・テーブルを追加できます。テンプレート・スクリプトにエンティティ次元のテーブルのセットが含まれる場合などです。エンティティ次元は必要に応じて追加できます。また、インタフェース・テーブルに追加された次元ごとに、プロファイル作成中に使用可能にするために、IM_Dimension システム・テーブルにその次元を含める必要があります。サンプル・テーブルの作成用スクリプトは、<EPM_ORACLE_INSTANCE>\Products\Foundation\BPMA\Server\Conf にあります。スクリプトは、Oracle_Create_Interface_Tables.sql、DB2_Create_Interface_Tables.sql、SQL_Server_Create_Interface_Tables.sql のように、データベース・タイプごとに名前が付けられています。

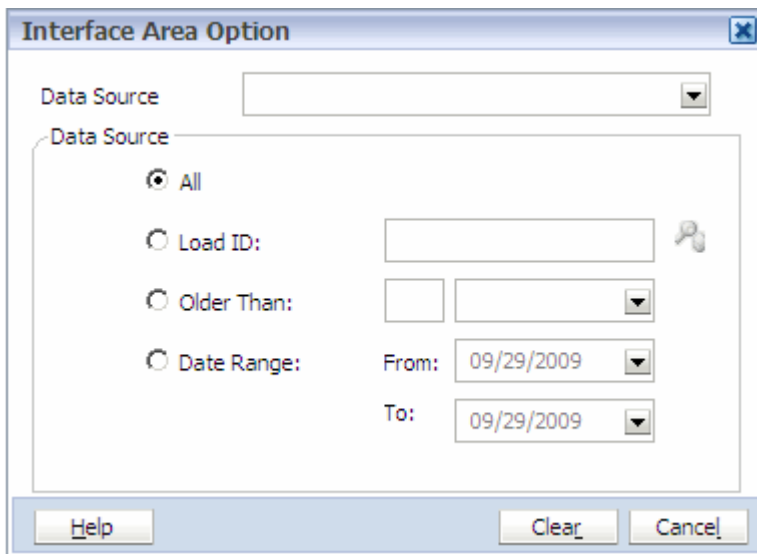
インタフェース・テーブルの消去

インタフェース・テーブル領域のオプションは次のとおりです:


- すべて
- ロード ID
- 経過時間 - 年、月、週および日の数を選択できます。
- 日付範囲

▶ インタフェース・テーブルを消去するには:

- 1 次元ライブラリで、「ファイル」、「インポート」、「インタフェース領域の消去」の順に選択します。



- 2 データ・ソースを選択します。
- 3 消去するデータ・ソース・ロード情報のタイプのオプションのいずれかを選択します。

複数のロード ID をカンマで区切って入力するか、または  をクリックしてロード ID を検索できます。

- 4 「消去」をクリックします。
- 5 「はい」をクリックして確定します。
- 6 成功メッセージで「OK」をクリックします。

インポート・プロファイルの作成

次元ライブラリまたはアプリケーションに次元をインポートする前に、インポート・プロファイルを作成する必要があります。プロファイルには新規次元などのインポートされた次元、既存の次元をマージするか置換するかどうか、および次元プロパティに関する重要な情報が含まれます。

インポート・ファイルをインポート、編集、表示および削除できます。77 ページの「[インポート・プロファイルの管理](#)」を参照してください。

▶ インポート・プロファイルを作成するには:

1 次元ライブラリから、「ファイル」、「インポート」、「プロファイルの作成」の順に選択します。

2 プロファイル名を入力します。

3 「インポート・タイプ」から、次のいずれかのタイプを選択します:

- フラット・ファイル: テキスト・ファイルをインポートします
- インタフェース・テーブル: データベースからデータをインポートします
- Data Relationship Management: Data Relationship Management から次元をインポートします。Data Relationship Management からエクスポートするメタデータの準備の詳細は、Oracle Data Relationship Management Administrator's Guide を参照してください

4 「オプション:」プロファイルの説明を入力します。

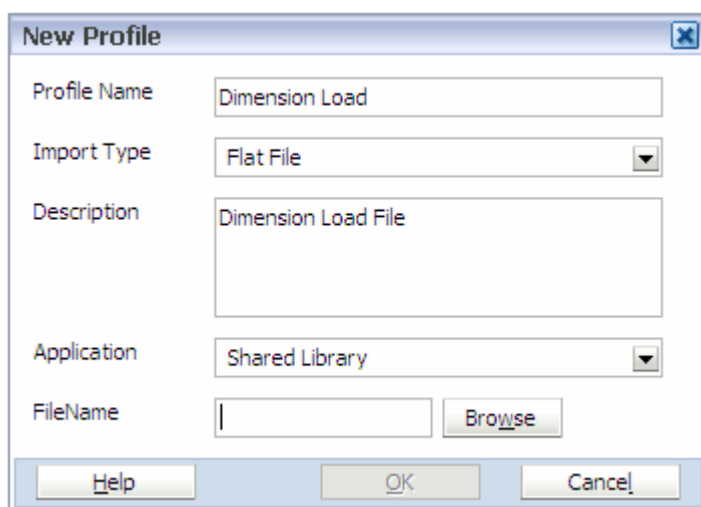
5 次元ライブラリにインポートする場合は、「共有ライブラリ」を選択するか、既存のアプリケーションを選択します。

アプリケーション・リストには共有ライブラリおよびアプリケーション・ライブラリへのセキュリティ・アクセス権限を持つすべての既存のアプリケーションが含まれます。

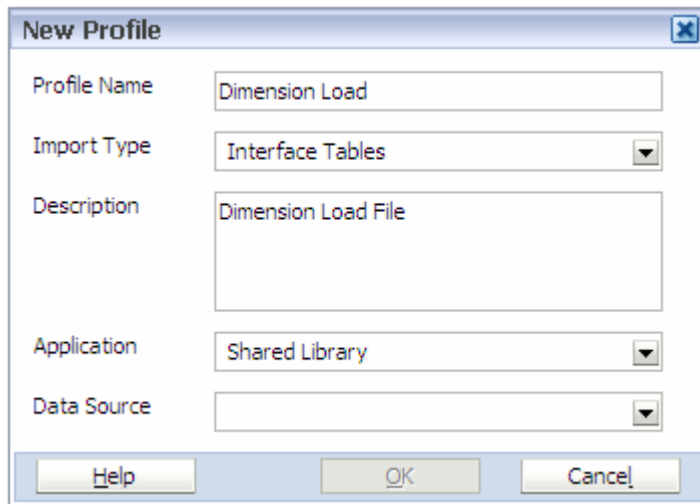
6 「フラット・ファイル」または「インタフェース・テーブル」を「インポート・タイプ」として選択した場合、次のいずれかの操作を実行します:

- 手順3で「フラット・ファイル」を選択した場合は、「参照」をクリックし、ファイルを検索後、「アップロード」をクリックします。

注: Performance Management Architect インポートは、UTF-8、UTF-16LE、UTF-16BE、UTF-32LE、UTF-32BE のいずれかのエンコードの ADS フォーマットのテキスト・ファイルをサポートしています。また、ASCII エンコード・ファイルも読み取れますが、英字に限られます。



- 手順3で「インタフェース・テーブル」を選択した場合は、「データ・ソース」から、このプロファイルで使用するデータベースを選択します。



7 「OK」をクリックします。

8 「次へ」をクリックします。

- フラット・ファイルや Data Relationship Management アプリケーションからインポートする場合、70 ページの「プロパティの入力」の説明に従って、ファイルまたはアプリケーション・プロパティをそれぞれ入力します。
- インタフェース・テーブルからインポートする場合、71 ページの「次元のマッピング」の説明に従って、次元をマッピングします。

プロパティの入力

▶ プロパティを入力するには:

1 フラット・ファイルのプロパティ用に入力するか、「Data Relationship Management」アプリケーション用に入力するかによって、次のいずれかを実行します。

- フラット・ファイルのプロパティを入力する場合:

1. 「ファイルのプロパティ」で、列の区切り文字を選択します。

セミコロン(;)、カンマ(,), パイプ(|)、スペースまたはタブを選択できます。セミコロンがデフォルトです。

注: 選択する区切り記号はファイル内にある必要があります。

2. 「オプション:」 文字列から二重引用符を除去するには、「文字列の二重引用符を除去」を選択します。

フラット・ファイルにメンバー計算式が含まれる場合、引用符が除去されないようにするためには「文字列の二重引用符を除去」の選択を解除します。

3. 「オプション:」 ロード・ファイルのスペースを除去するには、「空白文字の除去」を選択します。

4. 「オプション:」 トランザクション・ログを作成しない場合は、「トランザクション・ログの抑制」を選択します。

- Data Relationship Management アプリケーションのプロパティを入力する場合:
 1. 次元のインポート先から Data Relationship Management アプリケーションを選択します。(Shared Services に登録されているすべての Data Relationship Management アプリケーションがリストされます。)
 2. メタデータのインポート先から Data Relationship Management バージョンを選択します。(アクセスできるすべての Data Relationship Management アプリケーションのバージョンがリストされます。)
 3. Data Relationship Management のエクスポート・プロファイルを選択します。(選択したアプリケーションのすべてのエクスポート・プロファイルがリストされます。)
- 2 「オプション」: トランザクション・ログを作成しない場合は、「トランザクション・ログの抑制」を選択します。
- 3 「次へ」をクリックします。

これで、71 ページの「次元のマッピング」で説明したように、次元をマッピングできます。

次元のマッピング

「次元のマッピング」セクションで、次の方法を使用して、フラット・ファイル、インタフェース・テーブルまたは Data Relationship Management アプリケーションから次元をインポートする方法を指定します。次元は、自動マッピングまたは手動マッピングを行うことでマップできます。

▶ 次元をマップするには:

- 1 ソースから新規次元を作成するには、「ソース次元名を持つマップされていない次元に対して次元を作成します」を選択します。マッピングされていない次元(すなわち、自動または手動でマッピングされていない次元)の場合、フラット・ファイル、インタフェース・テーブルまたは Data Relationship Management アプリケーション内の次元の名前が、新規次元の作成に使用される名前となります。

「ソース次元名を持つマッピングされていない次元に対して次元を作成します。」を選択すると、共有ライブラリまたはアプリケーション列に自動的に新規次元が移入されます。
- 2 フラット・ファイル、インタフェース・テーブルまたは Data Relationship Management アプリケーション内の次元が共有ライブラリまたはアプリケーションに存在する場合、自動的に次元がマッピングされ、インポートされた次元をターゲット次元にマージするか、ターゲット次元をインポートされた次元に置換するかを選択します。
- 3 次元を手動でマップするには、「共有ライブラリ」列で、新規次元を作成するか、インポートされた次元を別の次元にマップします。別の次元にマップする場合は、インポートされた次元を共有ライブラリ次元にマージするか、または共有ライブラリ次元をインポートされた次元で置換できます。次のいずれかのアクションを実行します:

- インポートされた次元にマッピングする共有ライブラリ次元を選択します。
- 次元を作成します:
 1. 共有ライブラリまたはアプリケーションから、「新規次元」を選択します。
 2. 「新規次元の追加」ダイアログ・ボックスで、次元名と必要に応じて説明を入力し、「OK」をクリックします。
- オプション: 「プロセス・タイプ」を選択します。

注: ターゲット・アプリケーションに共有次元が含まれている場合、「プロセス・タイプ」にオプションが表示されません。

- **プライマリとしてマージ** - 「プライマリとしてマージ」ではすべてのセクションが処理され、ソースには存在するが、共有ライブラリまたはターゲット・アプリケーションには存在しない新規次元、メンバー、関係、プロパティおよび関連付けが追加されます。**ディメンション、メンバー、関係、プロパティまたは関連付けが除去されることはありません。** ソースで指定されている次元、関係、メンバーまたはプロパティが共有ライブラリまたはターゲット・アプリケーションに存在する場合、ソースで指定された値で上書きされます。(メンバーは移動されずに上書きされます。)ソースに含まれていないプロパティは、共有ライブラリまたはターゲット・アプリケーションでは変更されません。

注: あるメンバーが1つの次元で複数のインスタンスを持つ場合、「IsPrimary」列で、どのインスタンスがプライマリで、どのインスタンスが共有かを指定します。IsPrimary パラメータはオプションですが、使用を強くお勧めします。定義しないままにすると、デフォルトの TRUE に設定され、メンバーがプライマリであると想定されます。IsPrimary パラメータを定義しないか、プライマリとして定義されたメンバーが重複する場合、インポート結果ファイルに警告が表示されます。

- **移動としてマージ** - このモードでは、IsPrimary で TRUE に設定したメンバーのみが処理され、他のものは無視されます。処理中、メンバーのプライマリの場所を指定する最初の行が実行され、別のプライマリの場所を指定している後続の行はすべて無視されて、警告メッセージが表示されます。
- **置換** - すべての新規要素が追加され、すべてのプロパティ更新が行われます。ソースで指定されていないメンバーやメンバー関係は、共有ライブラリまたはターゲット・アプリケーションから除去されます。置換モードを使用すると、親の下のメンバーの順序も変更できます。ソースに含まれていないプロパティは、共有ライブラリまたはターゲット・アプリケーションでは変更されません。

このモードでは、インポート・ファイルで定義されていないかぎり (IsPrimary で FALSE に設定)、新規の共有メンバーは作成されません。

このモードにより、新規の親の下にあるプライマリ・メンバーを検出し、移動として処理できます。

注：「置換」オプションには、「順序変更タイプ」および「既存メンバーの順序変更」オプションが表示されません。

4 「順序変更タイプ」を選択します。

- **上位にマージ** - 新規にインポートされた子メンバーを、親の下の子リストの先頭に置きます。
- **下位にマージ** - 新規にインポートされた子メンバーを、親の下の子リストの最後に置きます。

5 「既存メンバーの順序変更」を選択します。

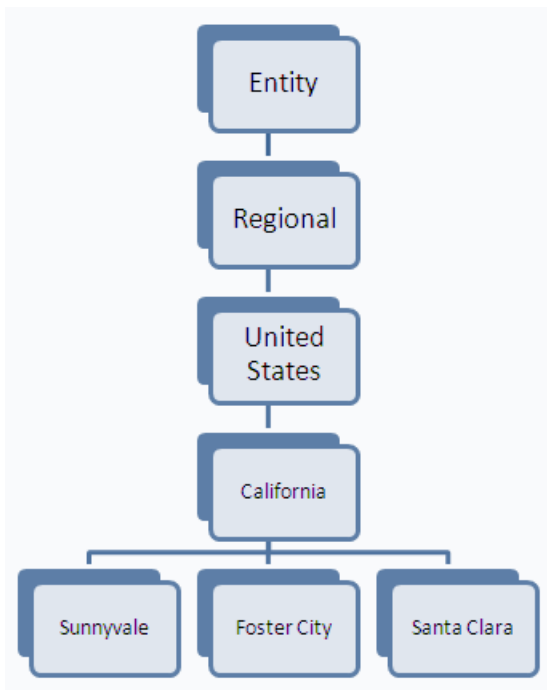
「既存メンバーの順序変更」を選択して、親の下に既存の子メンバーを、たとえばインポート・ソースにそのメンバーが存在しなくても再ソートします。「上位にマージ」が選択されている場合、インポート・ソースで最初の子メンバーが親の下に最初の子になり、インポートされたすべての子メンバーは、インポート・ソースでの順序に一致するようにソートされます。インポート・ソースにない既存のメンバーは従来の順序で子リストの最後に押しやられます。「下位にマージ」が選択されている場合、インポート・ソースで最後の子メンバーが親の下に最後の子になり、インポートされたすべての子メンバーは、インポート・ソースでの順序に一致するようにソートされます。インポート・ソースにない既存のメンバーは従来の順序で子リストの先頭に押しやられます。詳細な例は、[73 ページの「既存メンバーの順序変更の例」](#)を参照してください。

6 「次へ」をクリックします。

「次元マッピング」画面が表示されます。[75 ページの「次元マッピング - プロパティ・マッピング・オプション」](#)の説明に従ってプロパティ・マッピング・オプションを定義します。

既存メンバーの順序変更の例

「プライマリとしてマージ」または「移動としてマージ」モードを使用するインポートを作成すると、「順序変更タイプ」設定によっては、子の順序に影響が及ぶ可能性があります。例としてエンティティ階層について考えて見ます：



次のフラット・ファイル情報を「プライマリとしてマージ」または「移動としてマージ」モードでインポートすると、「順序変更タイプ」の設定や、「既存メンバーの順序変更」設定が有効になっているかどうかによって、California の子の順序に影響が及ぶ可能性があります。

```

!Hierarchies=Entity
'Parent;Child;IsPrimary
#root;Regional;Y
Regional;UnitedStates;Y
UnitedStates;California;Y
California;Foster City;Y
California;Redwood Shores;Y
California;Sunnyvale;Y

```

メンバー Santa Clara がフラット・ファイルに含まれておらず、新規のメンバー Redwood Shores が追加されていることに注意してください。

「順序変更タイプ」が MergeToTop に、「既存メンバーの順序変更」が False に設定されている場合、California の子には Redwood Shores、Sunnyvale、Foster City および Santa Clara がこの順序で並びます。

「順序変更タイプ」が MergeToTop に、「既存メンバーの順序変更」が True に設定されている場合、California の子には Foster City、Redwood Shores、Sunnyvale および Santa Clara がこの順序で並びます。

「順序変更タイプ」が MergeToBottom に、「既存メンバーの順序変更」が False に設定されている場合、California の子には Sunnyvale、Foster City、Santa Clara、Redwood Shores がこの順序で並びます。

「順序変更タイプ」が MergeToBottom に、「既存メンバーの順序変更」が True に設定されている場合、California の子には Santa Clara、Foster City、Redwood Shores および Sunnyvale がこの順序で並びます。

次元マッピング・プロパティ・マッピング・オプション

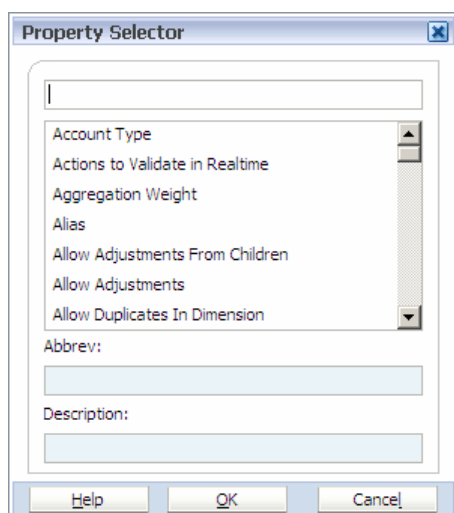
▶ 次元プロパティ・マッピング・オプションを定義するには:

- 1 フラット・ファイル、インタフェース・テーブルまたは Oracle Data Relationship Management アプリケーションから次元プロパティをインポートするには、「共有ライブラリ」列にインポートするプロパティを選択します。使用可能なプロパティのドロップダウン・リストについては、「共有ライブラリ」または「アプリケーション」列のセルをダブルクリックします。

いくつかのセルはデフォルト・プロパティを表示できない場合があります。この場合、「プロパティ・セクタ」ダイアログ・ボックスを使用して、プロパティを選択できます。

- 2 **オプション:** 空のセルを右クリックして、「プロパティの検索」を選択します。

「プロパティ・セクタ」ダイアログ・ボックスが表示されます。




- 3 プロパティを選択して、「OK」をクリックします。
- 4 「オプション」: 「インポートの前に消去」または「空白による上書きを許可」を選択します。

「インポートの前に消去」が選択されている場合、値は消去され、インポート・ソースと完全に一致します。これが選択されていない場合、値は既存の値にマージされ、既存の値はすべて残ります。

「空白による上書きを許可」が選択されている場合、ソースの値が空白であっても、値が上書きされます。

- 5 「終了」をクリックします。
- 6 プロファイルを次元ライブラリにインポートするには、「はい」をクリックします。

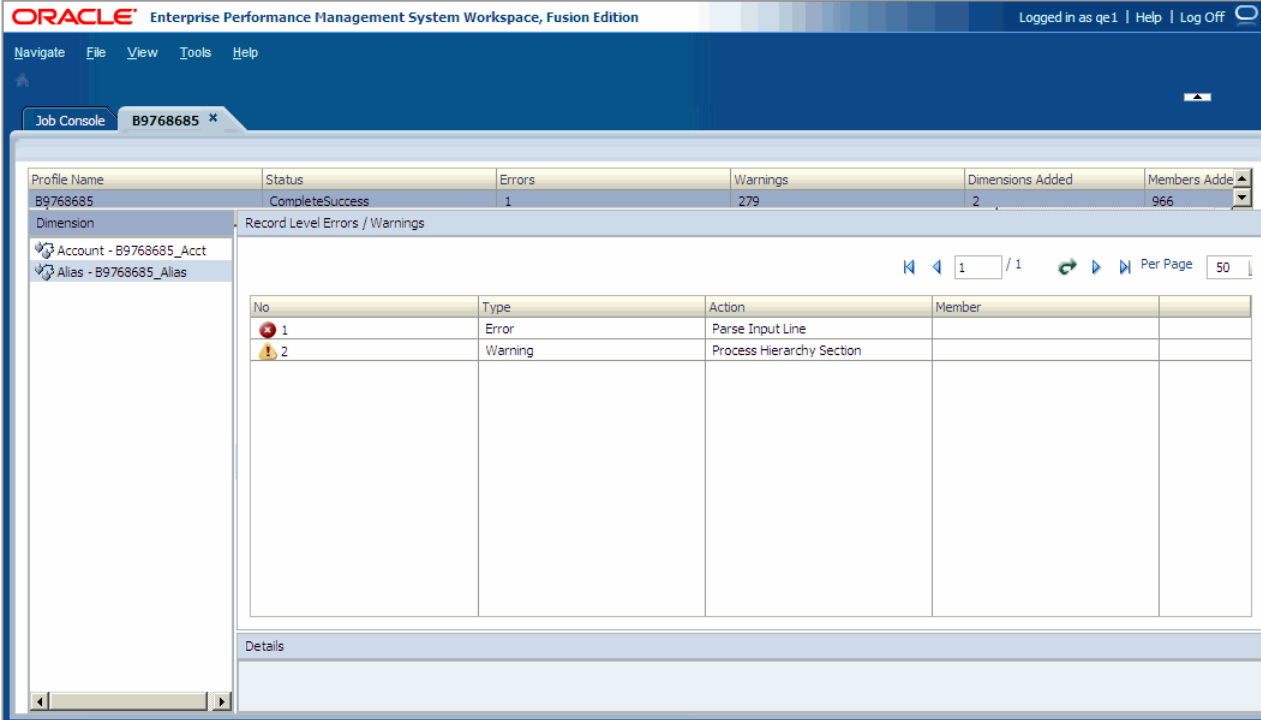
注: インタフェース・テーブルのインポート・プロファイルの場合は、「ロード ID 入力」ダイアログ・ボックスが表示されます。ロード ID をカンマで区切って入力できます。77 ページの「インポート・プロファイル用のインタフェース・テーブル・ロード ID の入力」を参照してください。

リンクをクリックしてジョブ・コンソールにジョブを表示する場合は、ジョブの完了後にインポート結果を表示できます。インポート・ステータスをリフレッシュするには、をクリックします。

7 インポートが完了したら、警告またはエラーに関するインポート結果を表示します。

次元をアプリケーションにインポートすると、添付ファイル領域にはログ・ファイルへのリンクが含まれます。そうでない場合、リンクは「インポート結果」画面を表示します。ジョブ添付ファイルの表示については、[311 ページ](#)の「ジョブの添付ファイルの表示」を参照してください。インポート結果の表示については、[312 ページ](#)の「インポート結果の表示」を参照してください。

注： BPMA_server_config.xml ファイルの ImportErrorThreshold 設定は、実行中のインポートがシャット・ダウンする前に発生する可能性があるエラーと警告を合せた最大数を定義します。デフォルト値は 1000 ですが、ImportErrorThreshold 設定を変更して、インポート・エラーしきい値を大きくできます。[付録 D 「BPMA_Server_Config.xml の構成設定」](#)を参照してください。



The screenshot displays the Oracle Enterprise Performance Management System Workspace interface. The main window shows the Job Console for job B9768685. The job status is 'CompleteSuccess'. A summary table shows 1 error and 279 warnings. Below this, a table titled 'Record Level Errors / Warnings' lists the following error:

No	Type	Action	Member
1	Error	Parse Input Line	
2	Warning	Process Hierarchy Section	


次元をアプリケーションにインポートした場合、インポートの完了後に、そのアプリケーションで次元を表示および編集できます。または、共有ライブラリで次元を表示できます。

インポート・プロファイル用のインタフェース・テーブル・ロード ID の入力

インタフェース・テーブルから次元およびメンバーをインポートする場合、すべての次元およびメンバーが自動的にインポートされます。ただし、インタフェース・テーブルには、インポート・プロファイルの実行時にフィルタの役目を果たす `i_Load_ID` 列が存在します。データベース管理者は、データベースの `i_Load_ID` 列を移入し、インポートされた次元およびメンバーをフィルタできます。

Performance Management Architect では、インポート・プロファイルまたはインポート次元を作成するときにロード ID を入力し、インタフェース・テーブルからアーティファクトをフィルタすることで、誤ったメタデータをロードしないようにできます。

▶ ロード ID を入力するには:

- 1 インタフェース・テーブルのインポート・プロファイルを作成したら、「はい」をクリックして次元をインポートします。
- 2 「ロード ID 入力」ダイアログ・ボックスで、ロード ID をカンマで区切って入力するか、または  をクリックしてロード ID を選択します。

注: `i_Load_ID` 列を Performance Management Architect で選択するには、データベース管理者がインタフェース・テーブルに移入する必要があります。

- 3 「OK」をクリックします。

インポート・プロファイルの管理

インポート・プロファイルを作成した後に、次元ライブラリに次元をインポートし、プロファイルの詳細を表示し、プロファイルを編集および削除できます。

次の項を参照してください:

- [77 ページの「次元のインポート」](#)
- [79 ページの「インポート・プロファイルの編集」](#)
- [80 ページの「インポート・プロファイルの詳細の表示」](#)
- [80 ページの「インポート・プロファイルの削除」](#)

次元のインポート

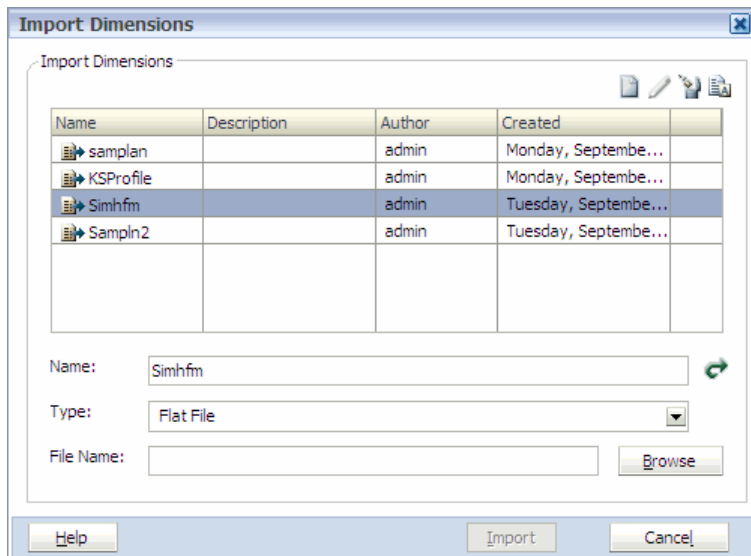
▶ 次元をインポートするには:

- 1 次元ライブラリから、「ファイル」、「インポート」、「次元のインポート」の順に選択します。
- 2 インポート・プロファイルを選択します。
- 3 インポート・タイプ(「フラット・ファイル」、「インタフェース・テーブル」または「Data Relationship Management」)を選択します。

注：「インタフェース・テーブル」を選択し、ロード ID を入力する場合は、78 ページの「次元のインポート時のロード ID 情報の入力」を参照してください。

4 次のいずれかのアクションを行います：

- 「フラット・ファイル」を選択した場合、「参照」をクリックしてファイルを探し、「アップロード」をクリックします。
- 「インタフェース・テーブル」を選択した場合、インタフェース・ロード ID を入力するか、「インタフェース・ロード ID の選択」をクリックします。
- 「Data Relationship Management」を選択した場合、次の手順に進みます。



ヒント：「次元のインポート」ダイアログ・ボックスの右上にあるボタンを使用して、新規プロファイルを作成またはプロファイルを削除できます。


5 「インポート」をクリックします。

次元のインポート時のロード ID 情報の入力

インタフェース・テーブルから次元およびメンバーをインポートする場合、すべての次元およびメンバーが自動的にインポートされます。ただし、インタフェース・テーブルには、次元のインポート時にフィルタの役割を果す `i_Load_ID` 列があります。データベース管理者は、データベースの `i_Load_ID` 列を移入し、インポートされた次元およびメンバーをフィルタできます。Performance Management Architect では、インポート・プロファイルまたはインポート次元を作成するときにロード ID を入力し、インタフェース・テーブルからアーティファクトをフィルタすることで、誤ったメタデータをロードしないようにできます。



注： `i_Load_ID` 列を Performance Management Architect で選択するには、データベース管理者がインタフェース・テーブルに移入する必要があります。



▶ ロード ID 情報を入力するには:

- 1 インポート次元の「インタフェース・ロード ID」フィールドで、ロード ID を入力するか、または  をクリックします。

ヒント: 複数のロード ID を入力するには、各エントリをカンマ(,)で区切ります。

「ロード ID 選択」ダイアログ・ボックスが表示されます。

- 2 左側の使用可能なロード ID のリストで、追加するロード ID を選択し、 をクリックします。
- 3 選択のリストからロード ID の選択を解除するには、 をクリックします。

ヒント: すべてのロード ID を選択するには、 をクリックします。選択のリストからすべてのロード ID の選択を解除するには、 をクリックします。

- 4 「OK」をクリックします。

インポート・プロファイルの編集

▶ インポート・プロファイルを編集するには:

- 1 「ファイル」、「インポート」、「次元のインポート」の順に選択します。
- 2 インポート・タイプ(「フラット・ファイル」、「インタフェース・テーブル」または「Data Relationship Management」)を選択します。(「フラット・ファイル」がデフォルトで表示されます。)
- 3 次のいずれかのアクションを行います:
 - 手順3で「フラット・ファイル」を選択した場合は、「参照」をクリックし、ファイルを検索後、「アップロード」をクリックします。
 - 「インタフェース・テーブル」または「Data Relationship Management」を選択した場合、次の手順に進みます。
- 4 プロファイルを右クリックし、「プロファイルの編集」をクリックします。

注: 「プロファイルの編集」オプションをアクティブにするには、フラット・ファイルをアップロードする必要があります。

- 5 インポート・プロファイルを編集します。

68 ページの「インポート・プロファイルの作成」の手順に従います。

インポート・プロファイルの詳細の表示

▶ インポート・プロファイルの詳細を表示するには:

- 1 「ファイル」、「インポート」、「次元のインポート」の順に選択します。
- 2 インポート・タイプ(「フラット・ファイル」、「インタフェース・テーブル」または「Data Relationship Management」)を選択します。(「フラット・ファイル」がデフォルトで表示されます。)
- 3 プロファイルを右クリックし、「詳細の表示」をクリックします。
- 4 タブをクリックしてプロファイル情報、次元、またはプロパティを表示します。
- 5 「閉じる」をクリックします。

インポート・プロファイルの削除

▶ インポート・プロファイルを削除するには:

- 1 「ファイル」、「インポート」、「次元のインポート」の順に選択します。
- 2 インポート・タイプ(「フラット・ファイル」、「インタフェース・テーブル」または「Data Relationship Management」)を選択します。(「フラット・ファイル」がデフォルトで表示されます。)
- 3 プロファイルを右クリックし、「プロファイルの削除」をクリックします。
- 4 「はい」をクリックしてプロファイルの削除を確認します。

4

次元の操作

この章の内容

次元の作成.....	81
共有次元およびローカル次元の理解.....	82
プロパティの変更.....	83
Planning 次元での操作の考慮事項.....	85
別名次元.....	86
ユーザー定義属性次元.....	89
カスタム次元.....	89
次元の関連付け.....	90
次元のコピー.....	92
アプリケーション・メンバーシップの表示.....	92
名前付き世代の操作(Essbase (ASO)および Essbase (BSO)のみ).....	92
名前付きレベルの操作(Essbase (ASO)および Essbase (BSO)のみ).....	94
次元の整理.....	95
次元のフィルタ処理.....	98
次元およびフォルダのソート.....	99
次元の削除.....	99
グリッド・エディタの使用法.....	100
スマート・リストの操作(Planning のみ).....	113
トランザクション・ログの表示.....	117
トランザクション履歴の削除.....	122

次元の作成

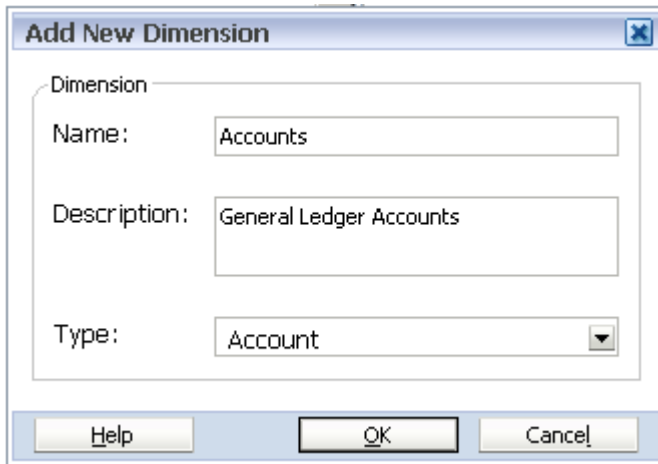
次元を手動で作成して既存の次元を編集できます。次元を作成するにはいくつかの方法がありますが、次元ライブラリのみで作成できます。

注： 次元ライブラリで次元を作成する場合は、製品の命名規則から逸脱することもできます。ただし、製品アプリケーション内では、命名規則に従う必要があります。Planning 次元については、[386 ページの「次元、メンバーおよび別名の名前付けの制限」](#)を参照し、Financial Management の次元については、[第 11 章「Financial Management 次元の操作」](#)を参照し、Essbase の次元については、[第 14 章「Essbase プロパティの操作」](#)を参照してください。

▶ 次元を作成するには:

- 1 「ファイル」、「新規」、「次元」の順に選択します。
- 2 次元の名前および説明(省略可能)を入力します。
- 3 次元タイプを選択します。

表 11 を参照してください。



注： 次元名は感嘆符(!)で始めることはできません。次元ライブラリでの次元作成時には、異なる文字を入力できますが、次元がアプリケーションで使用される際には、アプリケーションの命名ルールが適用されます。

- 4 「OK」をクリックします。

次元は、次元ライブラリに追加されます。次元にメンバーを追加するには、次元を右クリックし、メンバーの作成、追加、または挿入を選択します。131 ページの「メンバーの作成」を参照してください。

各次元タイプはアイコンを使用して共有ライブラリで示されます。Performance Management Architect の次元タイプのリストについては、表 11 を参照してください。

注： 次元の名前は後で変更できません。次元名を変更する必要がある場合は、次元をコピーして新規名前を指定する必要があります。次に、新規次元をアプリケーションに追加し、古い次元に対する関連付けを除去します。必要に応じて、古い未使用の次元を削除できます。ただし、連結アプリケーションと Planning アプリケーションでは、配置されたアプリケーションで別の名前を参照するために、別名または次元名を変更できます。221 ページの「次元別名の設定」を参照してください。

共有次元およびローカル次元の理解

Performance Management Architect アプリケーションには、共有およびローカルの 2 つの異なる状態の次元を含められます。

- 共有次元は、共有ライブラリという次元ライブラリの領域で作成されます。これらの次元は、すべてのアプリケーションで使用でき、各アプリケーション

ンに共有次元として含めると、個別に1つ以上のアプリケーションにリンクできます。共有ライブラリの次元への変更は、その次元を共有するすべてのアプリケーションに自動的に継承されます。共有ライブラリ内の次元にはあらゆる種類の変更を実行できますが、アプリケーション内の共有された次元に実行できる変更の種類は限られています。

アプリケーションに次元を共有次元として含めると、そのアプリケーションのみに関連する例外を処理するための変更を共有次元に適用できます。この種の変更は次のとおりです:

- メンバー・フィルタ
- プロパティ値の上書き

メンバーの追加や移動などの共有次元の構造的な変更は、共有ライブラリ内のみで実行できます。

- ローカル次元は、単一のアプリケーション内で作成され、アプリケーション内で直接作成するか、またはアプリケーションの共有ライブラリまたはアプリケーション内の別の次元からのコピーとして作成します。ローカル次元は個別の次元で、共有ライブラリの次元への変更は継承されません。
 - 共有ライブラリからの次元の最初のコピーによって、次元全体がコピーされます。新規メンバーの追加などのその後のアクションは、アプリケーション内で実行されます。
 - ローカル次元を作成するために使用した共有次元を変更する場合、次元に対するその後の変更をアプリケーション・レベルでマージするかどうかを明示的に指定できるオプションがあります。[218 ページの「ローカル次元の共有への変換」](#)を参照してください。

プロパティの変更

次元ライブラリからこれらのプロパティを編集できます:

- アプリケーション
- 次元
- メンバー

プロパティは、カテゴリ別に整理されます:

- システム - 名前、説明、メンバーが非アクティブかどうかなど、メンバーの特徴を識別するために使用されます。
- 統計 - 子の数や兄弟の数など、メンバーについての統計情報を提供するために使用されます。
- Essbase (ASO) - Essbase Aggregate Storage Option (ASO)アプリケーション
- Planning - Planning アプリケーションに使用されます。
- Essbase (BSO) - Essbase Block Storage Option (BSO)アプリケーション
- 連結 - Financial Management アプリケーション。
- 収益性 - Profitability and Cost Management アプリケーション。

次元プロパティのカテゴリは、製品ごとの章で定義されています:

- 第 11 章「Financial Management 次元の操作」
- 第 12 章「Planning 次元の操作」
- 第 13 章「Profitability and Cost Management プロパティの操作」
- 第 14 章「Essbase プロパティの操作」
- 第 15 章「統計およびシステム・プロパティの操作」

それぞれの章では、これらのプロパティ、使用可能な値およびデフォルト値、およびその使用方法を左右する他の特徴について説明します。プロパティは、グローバル・プロパティまたは関係プロパティになります:

- グローバル・プロパティ - グローバル・プロパティの値は、階層内のメンバーのすべてのインスタンス(共有インスタンスおよび孤立インスタンスを含む)に対して静的です。たとえば、エンティティ・メンバー「Kansas」の通貨値は、「United States」と「Management」の下にあるメンバー「Kansas」の両方のインスタンスで「USD」です。グローバル・プロパティの値は、メンバーのどのインスタンスでも変更でき、変更はそのメンバーのすべてのインスタンスに反映されます。
- 関係プロパティ - 関係プロパティの値は、階層内のメンバーの特定のインスタンスを対象とします。たとえば、エンティティ・メンバー「Washington」の「Aggregation for Plan 1」の値は、メンバーが親である「United States」の下にある場合は「+」に設定できますが、「Washington」が「Management」の下にある場合は「なし」に設定できます。

次元のメンバーのプロパティは継承もできます。継承には、関係継承とアプリケーション継承の 2 種類があります。

- 関係継承 - デフォルト値は、次元内のメンバーの親のプロパティの値から取得されます。継承されるプロパティは、グローバルか、または関係によって様々です。継承されるグローバル・プロパティは、次元のプライマリ・メンバーの親から継承されます。継承される関係プロパティは、プロパティ値が関係によって様々なので、メンバーの各インスタンスの親から継承されます。継承される値はデフォルト値のみで、メンバーに保管されている値による上書きもできます。この状況では、継承が上書きされているので、このプロパティの親に対する変更は、メンバーには反映されません。
- アプリケーション継承 - アプリケーションの共有次元のメンバーのプロパティのデフォルト値は、共有ライブラリ内のそのメンバーの値から継承されます。アプリケーション・レベルでは、共有ライブラリから継承されたプロパティ値を、そのアプリケーションにローカルな値で上書きできます。継承される値は、アプリケーションのメンバーのデフォルト値のみなので、アプリケーション内でも上書きできます。いったん上書きされたメンバーのプロパティには、共有ライブラリの次元に対する変更は反映されません。

Planning 次元での操作の考慮事項

次元のコンポーネントであるメンバーを作成および整理することによって、次元内に階層的な関係を作成します。次元メンバーは個別に、またはインポート・プロファイルを使用して追加できます。次元名は、[386 ページの「次元、メンバーおよび別名の名前付けの制限」](#)で詳しく説明する規約を使用する必要があります。

疎次元は、メンバーの組合せの大多数にデータ値がなく、利用可能なデータ位置が占有されている確率が低くなっています。密次元は、高い確率で、次元のすべての組合せに1つ以上のデータ・ポイントが占有されています。

データベースのパフォーマンスを最適化するには、次元を疎または密として指定します。次元が疎の場合、Planning では、各次元の組合せを占有しているデータ値のみが計算されます。これは、計算時間の短縮およびディスク使用の低減によってパフォーマンスを最適化します。デフォルトで、Planning では、勘定科目および期間次元が密として、その他の次元が疎として指定されます。

次元階層は、構造的および算術的關係、およびデータベースのメンバー間の連結を定義します。同じ次元またはメンバーに属する同一レベルのメンバーは、兄弟と呼ばれます。次元に属するメンバーはその次元の子と呼ばれます。メンバーに属するメンバーはそのメンバーの子と呼ばれます。

アプリケーションについての重要な情報については、[364 ページの「すべての Planning 次元に適用できるプロパティ」](#)および[367 ページの「複数の Planning 次元に共通するプロパティ」](#)を参照してください。次のような追加の考慮事項があります:

- 次元ライブラリで作成された新規次元には、デフォルトの関連付けがありません。
- フラット・ファイルからロードされた次元の場合、関連付けをフラット・ファイルで指定する必要があります。
- Planning から Performance Management Architect に変換したアプリケーションの場合、関連付けが割り当てられることがあります。
- スマート・リストを次元(勘定科目またはエンティティなど)に関連付ける必要はありませんが、スマート・リストは、Smart List プロパティ・フィールドで関連付けられます。スマート・リストは、共有ライブラリのメンバーに関連付ける必要があります。スマート・リストと関連付けられているメンバーは、そのデータ型をスマート・リストに設定する必要があります。

その他の Planning 次元の機能

その他の Essbase 機能が Planning 次元でサポートされるようになりました。シナリオ、バージョンおよび期間次元に、子および兄弟を追加できます。さらに、次元階層でメンバーの切り取り、貼付け、展開および縮小ができます。また、これらの次元の共有メンバーを使用したり、すべての次元のルート・レベルでの2パス計算を設定できます。たとえば、次のことを実行できます:

- シナリオおよびバージョン次元で、階層の作成および共有メンバーの使用ができます。子をボトムアップ・バージョンに割り当てる場合、これらのバージョンは読取り専用の親としてデータ・フォームに表示されます。

- 期間次元で、代替階層の作成および共有子孫の使用ができます。すべての期間のデータ・ストレージを任意の有効なデータ・ストレージ値に設定できます。すべてのシナリオ、バージョンおよび期間次元の連結演算子(BegBalanceを含む)は、任意の有効な連結演算子に設定できます。たとえば、~(無視)のかわりに+を設定できます
- 属性の場合は、階層の作成および別名の割当てができます。
- たとえば勘定科目のルート・レベルで2パス計算を有効にできます。

注意 2パス計算は、動的計算が設定されていない勘定科目以外のメンバーでは無視されます。この設定を使用する場合は、通貨換算スクリプトに対する影響を考慮します。

注： マルチ通貨アプリケーションの場合、組込み済の通貨換算計算スクリプトは、任意のシナリオ、バージョン、期間または年メンバー、または特定の次元ルート(エンティティ、バージョン、通貨、カスタム次元など)でデータ・ストレージを動的に変更した場合、適切に機能しません。データ・ストレージを変更する場合は、通貨換算スクリプトに対する影響を考慮します。

別名次元

別名は、次元の定義に役立つ代替の名前、説明、言語またはその他のアイテムです。1つ以上の別名を Planning の勘定科目、通貨、エンティティ、シナリオ、期間、バージョン、年、属性値およびユーザー定義の次元メンバーに割り当てられます。別名は、任意の Financial Management 次元に割り当てられます。

別名次元には3つの要素があります：

- 別名次元
- 別名メンバー
- Alias プロパティ

別名次元を作成し、それにメンバーを追加できます。関連付けられている次元のメンバーの Alias プロパティ値フィールドに、説明や代替名などを入力します。たとえば、メンバーが英語、フランス語、イタリア語の別名次元を作成します。Planning では、これらのメンバーは別名テーブルとみなされます。この別名次元に関連付けられている通貨次元には、AUD、JPY および USD というメンバーがあります。各メンバーの Alias プロパティ値をダブルクリックし、英語、フランス語およびイタリア語の説明を入力します。たとえば、英語の説明を「Australian Dollar」、「Japanese Yen」、「United States Dollar」と入力します。

次元ライブラリでのメンバーおよびその別名の表示方法を設定できます。メンバー名のみ、別名のみ、または両方を表示できます。たとえば、別名が Australian Dollar である AUD という通貨メンバーがある場合、次元ライブラリに、「AUD」のみ、「Australian Dollar」のみ、または「AUD-Australian Dollar」と表示できます。

別名によって、次元およびメンバーの一意的識別子を作成できます。たとえば、コスト・センター次元メンバーを、数字(100、200、210 など)でも、記述的な別名

(人事、技術、営業など)でも識別できます。メンバーは、異なる言語の別名を持つこともできます。

別名次元の名前は、Hyperion 製品の命名要件に従う必要があります。Planning 次元の場合、[386 ページの「次元、メンバーおよび別名の名前付けの制限」](#)を参照してください。Financial Management 次元の場合、[第 11 章「Financial Management 次元の操作」](#)を参照してください。

注： 次元ライブラリで別名次元を作成する場合に、別の文字を入力することもできますが、別名次元がアプリケーションに送られるときにアプリケーションの命名規則が適用されます。

▶ 別名次元を設定するには:

1 次元ライブラリで別名次元を作成して、メンバーを追加します。

注： アプリケーションが Planning に配置されると、別名次元の子メンバーが別名テーブルになります。


2 勘定科目やエンティティなどのメイン次元を別名次元に関連付けられます。[90 ページの「次元の関連付けの作成」](#)を参照してください。

3 別名次元をアプリケーションにドラッグします。(別名次元との関連付けを持つメイン次元がアプリケーションに存在しない場合は、メイン次元もドラッグする必要があります。)

4 アプリケーションで関連付けをアクティブにします。[220 ページの「次元の関連付けの表示」](#)を参照してください。

5 アプリケーションで、メイン次元メンバー(たとえば、CashFlow)を選択し、プロパティ・グリッドの「別名」フィールドをダブルクリックします。

Properties of CashFlow		
Category:	Planning	
Property	Value	
Valid for Plan2	<input checked="" type="checkbox"/>	✓
Valid for Plan3	<input checked="" type="checkbox"/>	✓
Valid for Wrkforce	<input type="checkbox"/>	⊞
Valid for Capex	<input type="checkbox"/>	⊞
Aggregation for Plan1	~	⊞
Aggregation for Plan2	+	✓
Aggregation for Plan3	+	✓
Aggregation for Wrkforce	+	⊞
Aggregation for Capex	+	⊞
UDA		✓
Member Formula		✓
Alias		✓
Data Storage	DynamicCalc	⊞
Two Pass Calc	<input type="checkbox"/>	✓
Smart List		✓
Time Balance	Flow	✓
Skip Value	None	⊞
Expense Reporting	NonExpense	✓
Account Type	SavedAssumption	⊞
ExchangeRate Type	None	⊞
Data Type	NonCurrency	⊞
Source Plan Type	Plan1	✓

6  をクリックし、別名テーブルにメンバーの別名を入力します。

Alias	
Alias	Alias
English	Plan
French	
German	
Spanish	

Help OK Cancel

7 「OK」 をクリックします。

▶ メンバーの別名を表示するには:

- 1 アプリケーションの別名次元を選択します。
- 2 プロパティ・グリッドで、「システム」カテゴリを選択します。

- 3 「デフォルト・メンバー」をダブルクリックし、別名テーブルを選択し、「保存」をクリックします。
- 4 プロパティ・グリッドで、Planning カテゴリを選択します。

エンティティなどの基本次元に別名次元とのアクティブな関連付けがある場合、およびエンティティ・メンバーが、選択された別名テーブルに定義された別名を持っている場合、Planning カテゴリの「別名」フィールドに別名が表示されます。

ヒント： 次元ライブラリで、「表示」、「メンバー」、「表示」、「両方」の順に選択し、アプリケーションの別名を表示します。

ユーザー定義属性次元

ユーザー定義属性(UDA)次元では、複数の次元のメンバー用に作成した UDA 次元を再使用できます。UDA は、メンバーの特徴を説明するために使用される単語または語句です。これによって、計算スクリプト内、メンバー計算式内およびレポート内で、指定した UDA に関連付けられているメンバーのリストを戻すことができます。たとえば、様々な製品メンバーを含む製品次元がある場合に、新製品という名前の UDA 次元を作成し、特定の計算を新製品にのみ基づかせます。

▶ UDA 次元を作成するには:

- 1 次元ライブラリで、「ファイル」、「新規」、「次元」の順に選択します。
- 2 次元の名前および説明を入力します。
- 3 「UDA」を選択します。
- 4 メンバーを UDA 次元に追加します。

メンバーは、プロパティ・グリッドを使用して UDA をメンバーに割り当てるときの選択元の UDA です。その他の情報については、[148 ページの「ユーザー定義属性の操作」](#)を参照してください。

カスタム次元

カスタム次元を使用する場合、[386 ページの「次元、メンバーおよび別名の名前付けの制限」](#)の命名規約に従う必要があります。次元名および別名は一意にする必要があります。スペースを含めて最大 80 文字を指定できます。説明は 255 文字までです。

メンバーにアクセス権を割り当て、次元メンバーの階層を再調整し、エンティティ、勘定科目およびカスタム次元のメンバーを共有できます。アクセス権の割当てについては、『Oracle Hyperion Planning 管理者ガイド』を参照してください。

次元の関連付け

サブトピック

- [次元の関連付けの作成](#)
- [次元の関連付けの表示および削除](#)

他の次元を参照する次元には関連付けが必要です。たとえば、セキュリティ・クラスや通貨などの次元を参照する次元には関連付けが必要です。Oracle の Hyperion 製品ではアプリケーションの構成(次元にはセキュリティが適用されています)が可能なので、関連付けが必要な次元はアプリケーションの構成に依存します。

次元の関連付けの作成

セキュリティ・クラス、通貨および属性を次元およびそのメンバーに割り当てるために、次元の関連付けを作成します。たとえば、エンティティ次元をセキュリティ・クラスおよび通貨次元に関連付ける場合、その関連付けはそのエンティティ次元のすべてのメンバーによって継承されます。

また、フラット・ファイルで次元の関連付けを行うこともできます。[52 ページの「次元の関連付けセクション」](#)を参照してください。既存の関連付けは、アプリケーションをクラシックから Performance Management Architect に変換するときに自動的に作成およびアクティブ化されます。

注： 共有次元からローカル次元への関連付けは作成できません。この関連付けを作成しようとすると、ダウンストリーム製品でエラーが発生します。

▶ 次元の関連付けを作成するには:

- 1 次元を右クリックし、「関連付けの作成」を選択します。

注： セキュリティ・クラスおよび別名次元は、属性次元にのみ関連付けられます。

- 2 「既存のプロパティ」または「新規プロパティ」を選択します。
- 3 「既存のプロパティ」を選択した場合は、「プロパティ」ドロップ・ダウン・リストからプロパティを選択します。
- 4 「新規プロパティ」を選択した場合は、新規プロパティの名前を入力します。

注： 「新規プロパティ」を選択した場合は、属性次元との関連付けのみを作成できます。

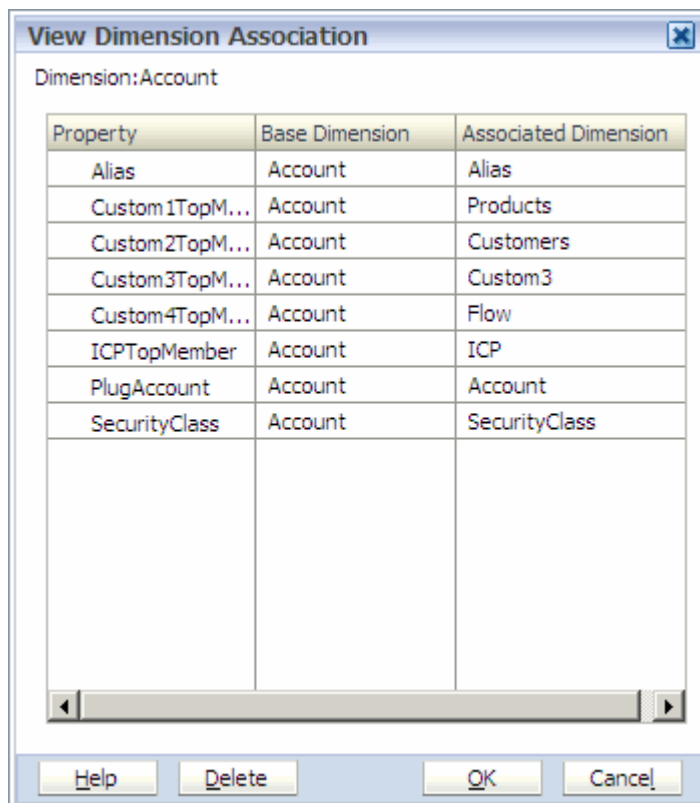
- 5 **オプション:** 関連付けの説明を入力します。
- 6 「次元」から関連次元を選択します。
- 7 「OK」をクリックします。

注： 次元ライブラリに作成された関連付けは、アプリケーションでアクティブ化する必要があります。220 ページの「次元の関連付けの表示」を参照してください。

次元の関連付けの表示および削除

▶ 次元の関連付けを表示および削除するには:

- 1 次元ライブラリで次元を右クリックし、「関連付けの表示」を選択します。



- 2 オプション: 「次元の関連付けの表示」ダイアログ・ボックスの列をソートするには、列のヘッダーをクリックします。

ヒント： 次元の関連付けを使用するアプリケーションのリストを表示するには、関連付けの行を右クリックして、「検索」を選択します。

- 3 関連付けを削除するには、関連付けの行を選択し、「削除」をクリックします。

ヒント： [Ctrl]または[Shift]キーを使用して複数の次元の関連付けを選択できます。

- 4 「はい」をクリックして確定します。

- 5 「OK」をクリックします。

次元のコピー

同じタイプの新規次元を作成するために、次元をコピーできます。次元がコピーされると、すべてのメンバーおよびプロパティの値も新規次元にコピーされます。元の次元およびコピーされた新規次元との間にリンクは定義されません。

次のように次元をコピーできます:

- 共有ライブラリ内の次元
- アプリケーション内でローカル次元として
- 共有ライブラリから新規ローカル次元を作成するアプリケーションに
- 1つのアプリケーションから、他のアプリケーションと共有する共有ライブラリに

▶ 次元を共有ライブラリにコピーするには:

- 1 共有ライブラリ内の次元を右クリックし、「次元のコピー先」、「共有ライブラリ」の順に選択します。
- 2 デフォルトの次元名を変更し、説明を入力します。
- 3 「OK」をクリックします。

次元が共有ライブラリに追加されます。

▶ 次元をアプリケーションにコピーするには:

- 1 次元を右クリックし、「次元のコピー先」、「アプリケーション」の順に選択します。
- 2 次元名を変更し、説明を入力します。
- 3 アプリケーションを選択して、「OK」をクリックします。

アプリケーション・メンバーシップの表示

アプリケーション・メンバーシップは、どのアプリケーションでどのメンバーまたは次元が使用されるのかを示します。この情報を使用して次元の変更の影響を確認できます。

▶ アプリケーション・メンバーシップを表示するには:

- 1 次元ライブラリで、次元またはメンバーを右クリックし、「アプリケーション・メンバーシップ」を選択します。
- 2 「閉じる」をクリックします。

名前付き世代の操作(Essbase (AS0)および Essbase (BS0)のみ)

世代とレベルは、データベース・メンバーの関係を定義する階層ツリー構造内のレイヤーです。世代は、次元の最上位のメンバー(世代 1)から子メンバーへと 1 世

代ずつ下に配置されていきます。レベルは、一番下の次元メンバー(レベル 0)から親メンバーまで並んでいます。

注： 重複するメンバー名が許容される次元では、一意の世代名を使用して、階層ツリー構造内のレイヤーを識別します。

アウトライン内の世代およびレベルには、独自の名前を付けられます。名前は、世代またはレベルを説明する単語または語句です。たとえば、アウトラインのすべての市に対して **Cities** という世代名を作成します。それぞれの世代またはレベルには、1つの名前のみ定義できます。定義した世代およびレベル名は、選択した次元のプロパティ・グリッドで表示できます。

計算スクリプトやレポート・スクリプトで、メンバー名のリスト、あるいは世代番号またはレベル番号のリストを指定する必要がある場合は、世代名やレベル名を使用します。たとえば、計算スクリプトで行う計算の範囲を、特定の世代のメンバーに限定できます。

例

- 年
 - 2006
 - Q1
 - 1月
 - 2月
 - 3月
 - Q2

世代には、最上位レベル(次元)の 1 から開始して、最下位メンバーまで番号を付けます。前述の例では、名前付き世代は次のように番号が振られます：

- 1(年)
- 2(2006)
- 3(Q1 および Q2)
- 4(1月、2月および3月)。

レベルには、階層の最下位メンバーであるリーフ・レベルの 0 から開始して、次元レベルまで番号を付けます。前述の例では、名前付きレベルは次のように番号が振られます：


- 3(年)
- 2(2006)
- 1(Q1 および Q2)
- 0(1月、2月および3月)

Essbase (ASO)および(BSO)アプリケーションで、名前付き世代を作成、変更または削除できます。

▶ 名前付き世代を作成、変更または削除するには:

- 1 次元ライブラリで、次元またはアプリケーション名を右クリックし、「名前付き世代」を選択します。

「名前付き世代」ダイアログ・ボックスが表示されます。




- 2  をクリックして名前付き世代を追加します。続いて、「世代名」の下のセルをダブルクリックし、説明的な名前を入力します。

たとえば、すべての北米地域で生成された売上データを後で公開するには、「地域」という世代を作成します。

- 3 「数値」列でセルをダブルクリックして、自動的に提供される数値を変更します。

注: DTS メンバーに関連付けられている数値は変更できません。

- 4 次のいずれかのオプション・タスクを実行します:

-  をクリックして変更を除去し、保存済のデータに戻します。
-  をクリックして、選択した世代を除去します。
-  をクリックして変更を保存し、名前付き世代の追加に進みます

- 5 「OK」をクリックします。

名前付きレベルの操作(Essbase (ASO)および Essbase (BSO)のみ)

論理的に関連する名前付き世代の名前付きレベルを定義できます。たとえば、月を含むすべての世代に名前付きレベル「月」を適用できます。名前付き世代と同様に、名前付きレベルでは、計算またはレポート・スクリプトで使用するメンバーを識別できます。名前付きレベルに割り当てる番号は、次元の最下位メンバーを表す 0 から開始し、次元の最上位レベルまで増加します。示されている例では、レベルには 0 (Jan、Feb、March)、1 (Q1 および Q2)、2 (2006) および 3 (Year) という番号が付きます。

サンプル


- Year
 - 2006
 - Q1
 - 1月
 - 2月
 - 3月
 - Q2

Essbase (ASO)および(BSO)アプリケーションで、名前付き世代を作成、変更または削除できます。

▶ 名前付きレベルを作成、変更または削除するには:

- 1 次元ライブラリで、次元またはアプリケーション名を右クリックし、「名前付きレベル」を選択します。

「名前付きレベル」ダイアログ・ボックスが表示されます。

- 2  をクリックしてレベルを追加します。続いて、「レベル名」の下のセルをダブルクリックし、説明的な名前を入力します。

たとえば、「人事オフィス」と入力して、これを後で人事オフィスのすべてのレベルに割り当てます。


注: 名前は一意である必要があり、メンバー、世代、別名および共有別名と共有することはできません。

- 3 「数値」列でセルをダブルクリックして、自動的に提供される数値を変更します。


注: DTS メンバーに関連付けられている数値は変更できません。

- 4 次のいずれかのオプション・タスクを実行します:

- セルをダブルクリックしてレベル名または番号を変更します。

-  をクリックして、変更を除去し、保存済のデータに戻します。

-  をクリックして、選択したレベルを除去します。

-  をクリックして変更を保存し、レベルの追加に進みます。

- 5 「OK」をクリックします。

次元の整理

フォルダを作成し、次元をそのフォルダにコピーまたは移動することで、次元を整理できます。次の項では、次元の整理について詳細に説明しています。

- [95 ページの「フォルダの作成」](#)
- [96 ページの「フォルダへの次元の追加」](#)
- [97 ページの「フォルダの名前変更」](#)
- [97 ページの「フォルダの削除」](#)

フォルダの作成

▶ フォルダを作成するには:

- 1 次元ライブラリで、「ファイル」、「新規」、「フォルダ」の順に選択します。

「新規フォルダの作成」ダイアログ・ボックスが表示されます。

- 名前および説明を入力し、「OK」をクリックします。
- 新しいフォルダに次元を追加します。96 ページの「フォルダへの次元の追加」を参照してください。

フォルダへの次元の追加

サブトピック

- 次元のコピー
- 次元の移動

次元は複数の場所に存在する可能性があります。たとえば、次元を整理して、勘定科目次元を複数のフォルダに持たせるか、または最上位レベルとフォルダ内に持たせます。複数のメソッドを使用して次元をフォルダにコピーまたは移動できます。

次元のコピー

▶ 次元をフォルダにコピーするには:

- 共有ライブラリでフォルダを右クリックし、「次元の追加」を選択します。

「フォルダに次元を追加」ダイアログ・ボックスが表示されます。

ヒント: 「フォルダに次元を追加」ダイアログ・ボックスを使用する場合、次元は新しい場所にコピーされます。この場合、次元は複数の場所に存在します。

- [Ctrl]キーを使用してリスト内の1つ以上の次元を選択します。

注: 次元がすでにフォルダ内に存在する場合、そのフォルダに同じ名前の次元は追加できません。

- 「OK」をクリックします。

次元の移動

次元をドラッグすると、元の場所からフォルダに移動できます。

▶ 次元を移動するには、共有ライブラリの次元をフォルダにドラッグします。

ヒント: [Ctrl]キーを使用すると、複数の次元を選択して移動できます。

▶ 次元をフォルダから取出し、共有ライブラリのルートに戻すには、フォルダ内の次元を右クリックし、「フォルダから除去」を選択します。次元がフォル

ダにのみ存在し、共有ライブラリのルート・フォルダにはない場合は、確認ダイアログ・ボックスが表示されます。「はい」をクリックして確定します。

フォルダの名前変更

▶ フォルダの名前を変更するには:

- 1 フォルダを右クリックし、「名前変更」をクリックします。
「フォルダの名前変更」ダイアログ・ボックスが表示されます。
- 2 フォルダ名を入力し、「OK」をクリックします。

フォルダの削除

サブトピック

- [フォルダのみの削除](#)
- [コンテンツがあるフォルダの削除](#)

共有ライブラリで作成するフォルダを削除できます。フォルダを削除する場合は、1)フォルダのみの削除する、または2)フォルダおよびそのコンテンツを削除する、の2つの選択肢があります。

フォルダのみの削除

フォルダを削除するとき、次のガイドラインを覚えておいてください:

- フォルダのみの削除される
- 次元およびサブフォルダは削除されずに共有ライブラリのルートに移動される
- サブフォルダを削除する場合は、サブフォルダのみの削除されます。次元は削除されずに、ルート・フォルダに移動します。

▶ フォルダのみの削除するには:

- 1 フォルダを右クリックし、「削除」、「フォルダのみ」の順に選択します。
確認のダイアログ・ボックスが表示されます。
- 2 「はい」をクリックします。
- 3 「OK」をクリックします。

コンテンツがあるフォルダの削除

コンテンツがあるフォルダを削除するには、次のガイドラインを考慮してください:


- コンテンツ全体が削除されます。
- サブフォルダを含むフォルダおよび次元が削除されます。

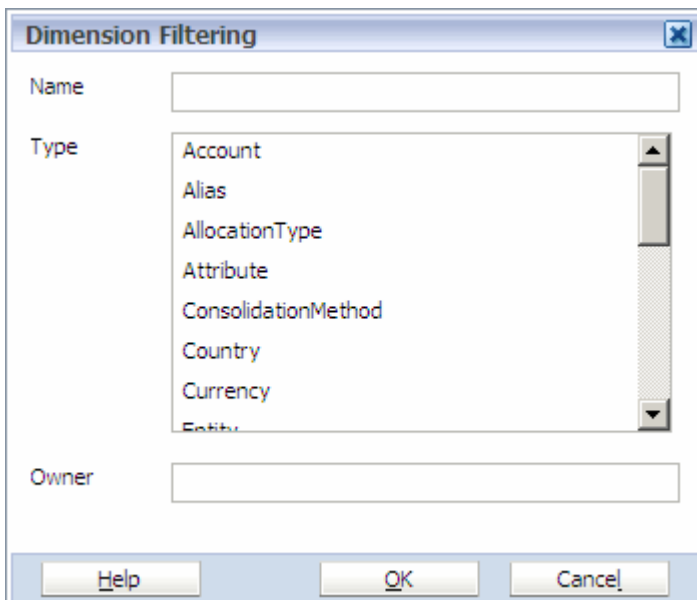
- サブフォルダを削除すると、フォルダを含むサブフォルダおよび次元が削除されます。
- ▶ フォルダおよびそのコンテンツを削除するには:
- 1 フォルダを右クリックし、「削除」、「フォルダ(コンテンツあり)」の順に選択します。
確認のダイアログ・ボックスが表示されます。
 - 2 「はい」をクリックします。
 - 3 「OK」をクリックします。
フォルダおよびそれに含まれるすべての次元が削除されます。

次元のフィルタ処理

次元ライブラリの次元はフィルタできます。フィルタ処理は、フォルダではなく次元のみに適用されます。

注： 次元を作成し、新規次元を含めないフィルタを適用すると、その次元は、フィルタを除去するまで共有ライブラリに表示されません。

- ▶ 次元をフィルタするには:
- 1  をクリックするか、または「表示」、「次元のフィルタ」の順に選択します。
「次元のフィルタ処理」ダイアログ・ボックスが表示されます。



ヒント： パフォーマンスを最適化するには、アプリケーション間でデータを同期している場合、すべての次元でフィルタを使用することが重要です。アプリケーションの次元のフィルタ処理の詳細は、[154 ページの「アプリケーションへのメンバーの追加」](#)を参照してください。

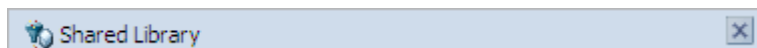
- 名前を入力するか、タイプを選択するか、または次元を所有するユーザーまたはグループの名前を入力します。

ワイルドカード文字を使用して、次元をフィルタできます。次元サーバーは、`$$^{[()]+.*?!}`のワイルドカード文字をサポートします。

- 「OK」をクリックします。

ヒント： フィルタ条件を除去するには、「編集」、「フィルタ条件の消去」の順に選択します。


次元がフィルタされるときは、共有ライブラリ・ペインにフィルタ・アイコンが表示されます。



次元およびフォルダのソート

次元およびフォルダは、昇順または降順でソートできます。

▶ 次元およびフォルダをソートするには:

- をクリックします。
「次元のソート」ダイアログ・ボックスが表示されます。
- ソート基準のアーティファクトを選択します(次元クラス、名前、説明、所有者)。
- ソート順を選択します(昇順または降順)。
- 「OK」をクリックします。

ヒント： ソート条件を除去するには、「編集」、「ソート条件の消去」の順に選択します。

次元をソートするときは、共有ライブラリ・ペインにソート・アイコンが表示されます。

次元の削除

次元を削除すると、次元およびそのすべてのメンバーが共有ライブラリから削除されます。次元およびそのメンバーは、その次元を使用しているアプリケーションからも削除されます。次元の関連付けも削除されます。

注意 次元を削除する前に次元を右クリックし、「アプリケーション・メンバーシップ」を選択すると、この次元を使用しているアプリケーションが表示されます。アプリケーションにその次元が含まれる場合、その次元は削除できません。

Planning 次元の削除に関する重要な情報については、[141 ページの「プランニング・メンバーの除外および削除」](#)を参照してください。

▶ 次元を削除するには:

- 1 次元ライブラリ(「共有ライブラリ」または「アプリケーション」ペイン)で次元を右クリックし、「次元の削除」を選択します。
- 2 「はい」をクリックします。

グリッド・エディタの使用法

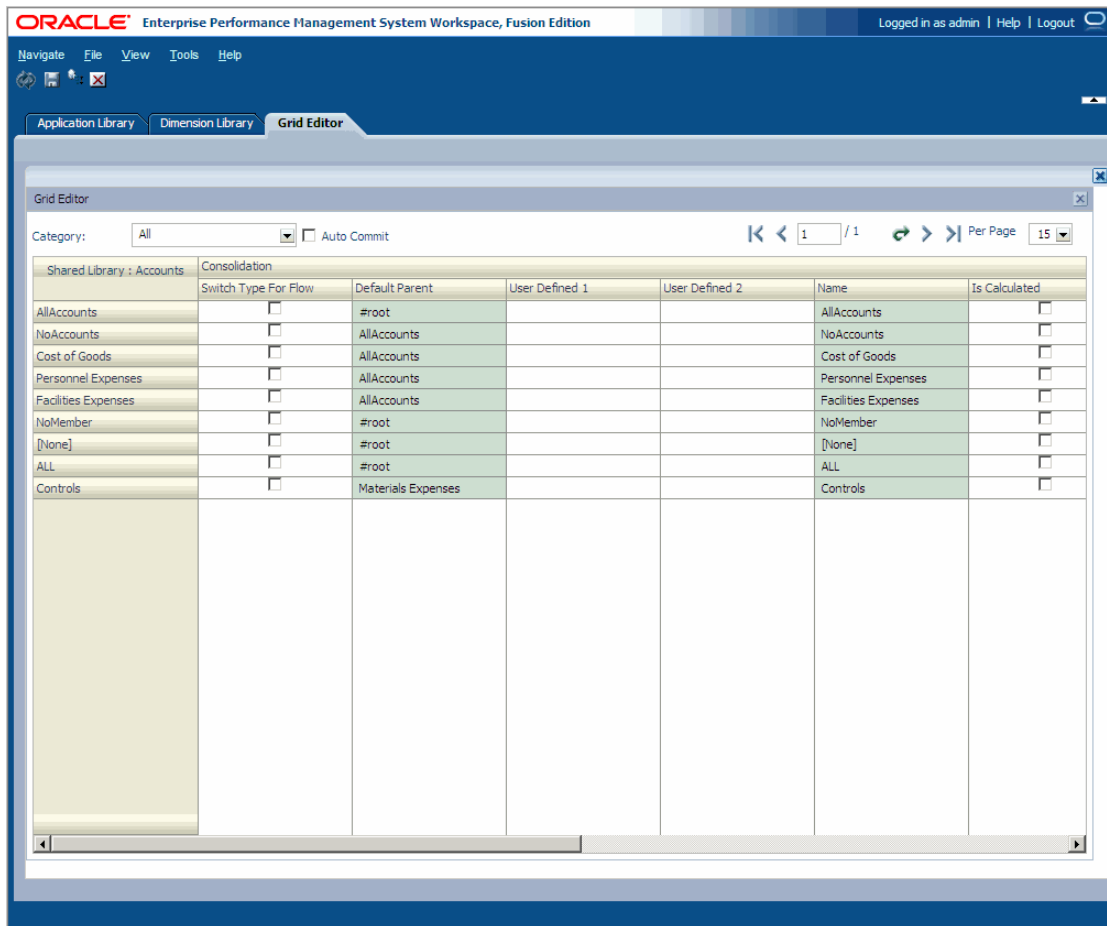
サブトピック

- [グリッド・エディタの起動](#)
- [メンバーの検索](#)
- [メンバーの選択](#)
- [プロパティの選択](#)
- [グリッド・エディタの操作](#)

グリッド・エディタを使用すると、表形式のグリッドベースのインタフェース内で次元の表示や管理を行えます。次も可能です:

- 同時に複数のメンバーのプロパティを表示する
- 複数のメンバーにバルク更新を実行する
- 変更された値を識別して簡単に値を割り当てる

次の例では、勘定科目次元のメンバーおよびプロパティを編集するためのグリッド・エディタを表示します。



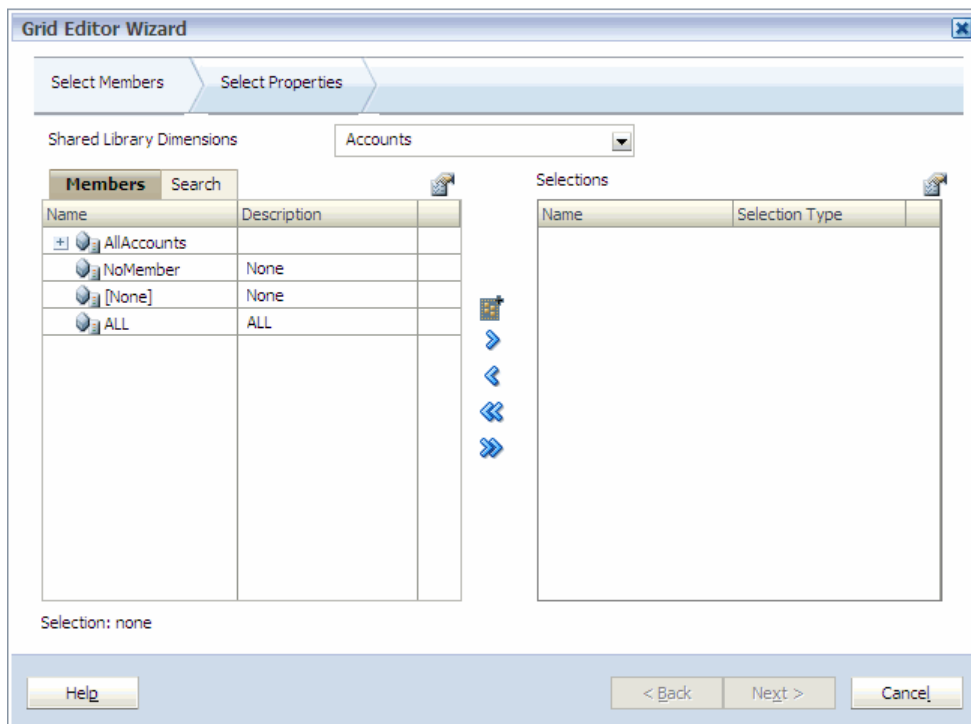
グリッド・エディタの起動

▶ グリッド・エディタを起動するには:

- 1 「共有ライブラリ」または「アプリケーション」ペインで、次元を右クリックして「グリッド・エディタ」を選択します。

注： メンバーを右クリックしても、「グリッド・エディタ」オプションは表示されません。次元を右クリックする必要があります。

グリッド・エディタ・ウィザードが表示されます。



グリッド・エディタ・ウィザードによって、次元内のメンバーを 2000 個まで表示できます。「+」および「-」を使用すると、次元内のメンバーを展開および縮小できます。

グリッド・エディタ・ウィザードには、2つのペインがあり、次元のすべてのメンバーが左側に表示され、グリッド・エディタの選択内容が右側に表示されます。左ペインには、「メンバー」および「検索」の2つのタブがあります。「メンバー」タブには、メンバー名と簡単な説明(使用可能な場合)を含め、次元で使用可能なすべてのメンバーが表示されます。「検索」タブを使用して、メンバーを検索できます。右ペインには、グリッド・エディタの選択内容が表示され、メンバー名および選択タイプが表示されます。

各ペインの上部にあるメニュー・ボタンを使用すると、グリッド・エディタ・ウィザードの列を変更できます。

共有ライブラリ次元のメンバーを選択する場合は、グリッド・エディタの「メンバー」および「検索」タブの上に共有ライブラリ次元と表示されます。一方、アプリケーションのメンバーを選択する場合は、「メンバー」および「検索」タブの上にアプリケーション名が表示されます。たとえば、「NewApp 次元」と表示されます。


2 「メンバー」タブを表示している場合、次元のすべてのメンバーを縮小するには、



をクリックし、「すべて縮小」を選択します。

注：「すべて縮小」を選択すると、次元の下のすべてのメンバーまたは選択したメンバーが縮小されます。次元またはメンバーが縮小された後にアーティファクトの上にマウス・ポインタを置くと、子孫の数を示すツールチップが表示されます。


3 次のいずれかのアクションを実行します:


1. 左ペインで、、「表示」、「カウント」の順に選択します。

名前および説明に加えてカウント列が表示されます。カウント列には、現在の次元の子メンバーの数が表示されます。これは、ツリーの分岐を展開するために必要な時間を示唆する便利なインディケータになります。

2. カウント列を除去するには、、「表示」、「カウント」の順に選択します。

4 次のいずれかのアクションを実行します:

1. 別名列を表示するには、、「表示」、「別名」の順に選択します。
名前および説明に加えて別名列が表示されます。別名列には、次元メンバーの代替の説明である別名が表示されます。

2. 別名列を除去するには、、「表示」、「別名」の順に選択します。

5 選択ペインの列を変更するには、選択ペインで、、「表示」、「選択のタイプ」の順に選択します。


選択ペインには名前が自動的に表示されますが、選択のタイプを表示するかどうかは各自で決められます。

メンバーの検索

「検索」タブを選択し、テキスト・ボックスに名前を入力することで、メンバーを検索できます。検索は、入力したテキストに基づいて、選択した次元のすべてのメンバーを検索します。たとえば、「c*」と入力して、「c」で始まる最初のメンバーを選択できます。

▶ メンバーを検索するには:

- 1 「検索」タブを選択します。
- 2 メンバー名を検索するには「名前」を選択し、メンバーの説明で検索するには「説明」を選択します。
- 3 検索するテキストを入力します。

「検索」タブを使用して、メンバーを検索して語句の中でワイルドカードを使用することもできます。たとえば、顧客次元を検索する場合に、名前を検索するためにテキスト・ボックスに Ba** と入力して、 をクリックすると、名前が Ba で始まる顧客のみが表示されます。また、ワイルドカードとして ! をテキスト・ボックスに入力することもできます。たとえば、Bassica, Inc. が Bassico、Bassiko または Bassica である可能性がある場合など、顧客名のつづりが明確でない場合があります。そのような場合は、Bass と入力すると、この顧客を検出できます。

注： 表示できる子の最大数は 2000 個です。


- 4 次に、グリッド・エディタに表示するメンバーを選択します。104 ページの「[メンバーの選択](#)」を参照してください。

- 兄弟
- 兄弟(含む)
- 親
- 親(含む)
- 祖先
- 祖先(含む)

ここにあげたオプションで、「(含む)」は選択したメンバーを含むことを意味します。たとえば、「子(含む)」は選択したメンバーを含むメンバーのすべての子を追加し、「子孫(含む)」は選択したメンバーを含むすべての子孫を追加します。「子」を選択した場合、選択したメンバーは含まれず、その子のみが含まれます。

そのメンバーは右側に移動され、「選択のタイプ」列には選択したオプションが表示されます。たとえば、「選択のタイプ」列に「子孫」が表示されます。

- 4 グリッド・エディタに表示するすべてのメンバーを選択するまで、これらの手順を繰り返します。

ヒント: 選択したリストのすべてのメンバーの選択を解除するには、をクリックします。

- 5 必要な場合は、編集対象の新規次元およびメンバーを選択します。

- 6 終了したら、「次へ」をクリックします。

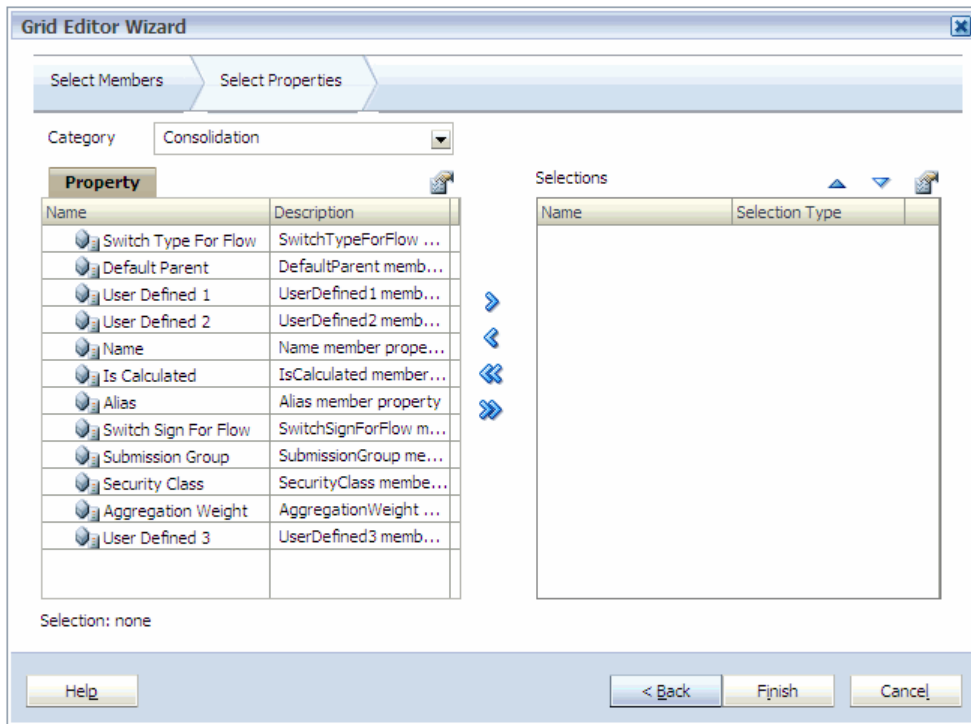
「プロパティの選択」タブが表示されます。105 ページの「プロパティの選択」を参照してください。


プロパティの選択

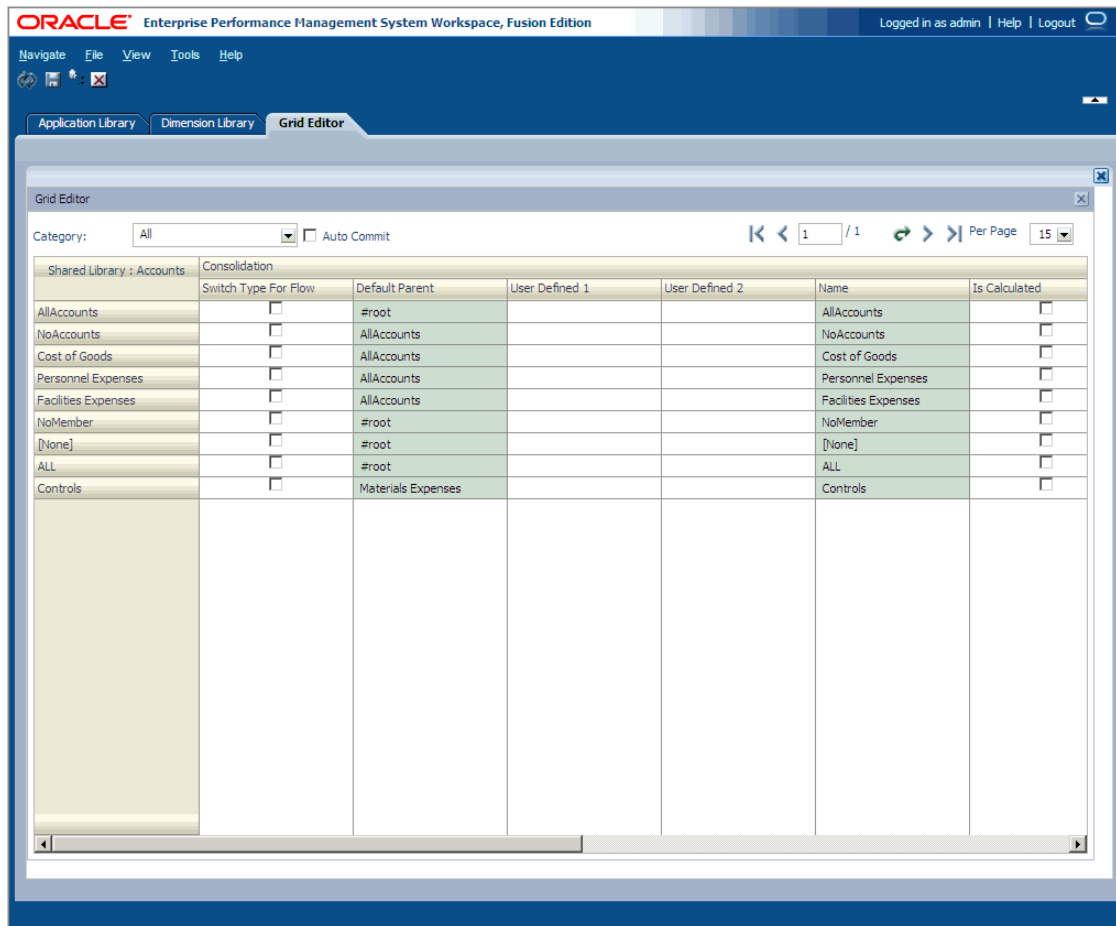
グリッド・エディタを使用して変更するプロパティを選択できます。グリッド・エディタ・ウィザードでプロパティを選択したときは、適切なカテゴリを選択したことを確認します。

▶ プロパティを選択するには:

- 1 プロパティはカテゴリとは異なることがあるため、編集するプロパティを含むカテゴリを選択します。



- 2 左側のプロパティを選択して  をクリックします。
- 3 「グリッド・エディタ」で編集するすべてのプロパティを選択するまで、これらの手順を繰り返します。
- 4 「終了」をクリックします。
グリッド・エディタが表示されます。



読取り専用プロパティを表すグリッド・セルは暗く表示され使用不可になります。次元ライブラリ・プロパティ・グリッド内のチェック・ボックスなど、特殊なコントロールを利用するプロパティの場合は、グリッド・エディタでも同じコントロールを使用します。

共有ライブラリ次元を編集する場合、グリッド・エディタには、「共有ライブラリ: 勘定科目」のように、共有ライブラリの後に次元名が表示されます。ただし、アプリケーション内の次元を編集する場合、アプリケーションの名前が次元名の前に表示されます。たとえば、“NewApp: Account”です。さらに、各プロパティ・カテゴリ名は、プロパティ列の上に表示されます。たとえば、連結は、連結カテゴリで選択したプロパティの上に表示されます。

グリッド・エディタの操作


サブトピック

- [メンバーおよびプロパティの変更の保存](#)
- [次元の変更](#)
- [祖先の表示](#)
- [メンバーの作成](#)
- [メンバーの追加](#)
- [メンバーの除去および削除](#)
- [メンバーおよびプロパティのソート](#)
- [セル・データのコピーおよび貼付け](#)
- [プロパティの追加および除去](#)
- [プロパティの検索](#)
- [グリッド・エディタの終了](#)

「グリッド・エディタ」には、ウィザードで選択したメンバーおよびプロパティが表示されます。カテゴリによっては、メンバーおよびプロパティは異なることがあるため、「グリッド・エディタ」の上部に表示する特定のカテゴリを選択できます。メンバーは行として表示され、左側にメンバー名が表示されます。プロパティは列として表示され、列の見出しの2行目にその名前が表示されます。対応するそれぞれのプロパティ値はセル・データとして表示されます。

メンバーおよびプロパティの変更の保存

メンバーやプロパティに変更を加える際、変更がすぐに現れるようにも、「保存」ボタンを使用するまで待つようにも設定できます。グリッド・エディタの「自動的にコミットする」機能では、各変更を個別に保存します。「自動的にコミットする」機能を使用する際には、次のガイドラインに留意してください:

「保存」ボタン - 

自動的にコミットする - Auto Commit

「自動的にコミットする」機能が選択されていない場合:


- データは「保存」ボタンをクリックしたときにのみ保存されます。
- メンバーまたはプロパティを変更すると、セルが新しい色で網掛けされます。色は次のとおりです:
 - **黄色** - 黄色いセルは、その値が更新されていることを示します。その値を保存すると、「次元ライブラリ」で更新されて、セルの色はデフォルトの色に戻ります。
 - **赤** - 赤い行は、削除のためにマークされていることを示します。行が削除にマークされると、そのセルは編集できなくなります。保存のときには、そのすべてのメンバーが「次元ライブラリ」から削除され、アプリケーションから除去され、すべての行がグリッドの現在のページから削除されます。

グリッドのあるページから別のページに移動する場合、変更を保存するかどうかを確認するダイアログ・ボックスが表示されます。

- すべての変更は、「保存」ボタンをクリックしたときに保存されます。
- 自動保存を選択するように変更すると、データを保存するように指示するメッセージが表示されます。

「自動的にコミットする」機能が選択されている場合:

- 個別のアクションが実行されると、データが保存されます。
- 行を変更するか[Enter]キーを押すと、プロパティ値は保存されます。
- メンバーを右クリックして「メンバーの削除」を選択すると、即時にそのメンバーは削除されます。

注:  をクリックすると、グリッドに対して実行した変更を除去して、最後に保存したデータにリフレッシュできます。

次元の変更

グリッド・エディタに表示される次元を変更できます。

▶ 次元を変更するには:

- 1 グリッド・エディタの左上の次元名を右クリックします。
- 2 「次元の変更」を選択します。
グリッド・エディタ・ウィザードが表示されます。
- 3 次元のドロップ・ダウン矢印を使用して次元を選択します。
- 4 グリッドに表示するメンバーを選択して、「次へ」をクリックします。
確認のダイアログ・ボックスが表示されます。
- 5 「はい」をクリックします。
- 6 プロパティを選択して「終了」をクリックします。
グリッド・エディタが表示されます。

祖先の表示

グリッド・エディタを使用してメンバーの祖先を表示して、メンバーが存在する次元階層の場所を特定できます。

▶ メンバーの祖先を表示するには:

- 1 メンバー(行)を右クリックして「祖先の表示」を選択します。
「祖先の表示」ダイアログ・ボックスが表示されます。
- 2 「OK」をクリックします。

メンバーの作成

「グリッド・エディタ」を使用すると、子メンバーまたは兄弟メンバーを作成できます。

選択したメンバーの子としてメンバーを作成すると、新規の子メンバーのプロパティ値の行がグリッドの現在のページに追加されます。選択したメンバーの兄弟を作成すると、選択したメンバーと同じレベルの兄弟として新規メンバーが作成され、新規の兄弟メンバーのプロパティ値の行がグリッドの現在のページに追加されます。

▶ メンバーを作成するには:

- 1 行を右クリックして「メンバーの作成」を選択します。「子として」または「兄弟として」を選択します。

「新規メンバー」ダイアログ・ボックスが表示されます。

- 2 メンバー名を入力して、「OK」をクリックします。

グリッド・エディタに、そのメンバーが表示されます。新規メンバーを作成すると、グリッド・エディタはそのアクションを自動的に保存します。

メンバーの追加

▶ グリッドに既存のメンバーを追加するには:

- 1 行を右クリックして「グリッドにメンバーを追加します」を選択します。

「グリッドにメンバーを追加します」ダイアログ・ボックスが表示されます。

共有ライブラリ次元にメンバーを追加する場合は、グリッド・エディタの「メンバー」および「検索」タブの上に共有ライブラリ次元と表示されます。一方、アプリケーションにメンバーを追加する場合は、「メンバー」および「検索」タブの上にアプリケーション名が表示されます。たとえば、「NewApp 次元」と表示されます。

- 2 追加するメンバーを選択して、 をクリックします。

ヒント: 「グリッドにメンバーを追加します」ダイアログ・ボックスの「検索」タブを使用してメンバーを検索できます。


- 3 「OK」をクリックします。

新規メンバーが、グリッド・エディタの行として追加されます。

メンバーの除去および削除

「グリッド・エディタ」を使用して、メンバーを除去または削除できます。メンバーを除去すると、選択したメンバーがグリッドから除去されます。メンバーを削除すると、選択したメンバーが赤色でマークされて削除されます。メンバーの削除では、「保存」ボタンをクリックしたときに次元サーバーからメンバーが物理的に削除されます。

▶ グリッド・エディタの表示からメンバーを除去するには:

- 1 メンバーを除去する前に、 をクリックします。
- 2 メンバー行を右クリックして、「メンバーのグリッドからの除去」を選択します。

メンバーはその次元から除去されます。

▶ 次元サーバーからメンバーを削除するには:


- 1 メンバーを右クリックして「メンバーの削除」を選択します。

確認のダイアログ・ボックスが表示されます。

注意 メンバーを削除すると、すべてのビューから削除されます。特に慎重に操作してください。

- 2 「はい」をクリックします。

ヒント: メンバーを削除した場合は、変更を保存する前に削除を元に戻すことができます。メンバーを右クリックし、「メンバーの削除を元に戻す」を選択します。


- 3  をクリックします。

メンバーが削除されます。

メンバーおよびプロパティのソート

グリッド・エディタでメンバーおよびプロパティをソートできます。

▶ グリッド・エディタでアーティファクトをソートするには:

- 1  をクリックします。

「GridEditor ソート・ダイアログ」が表示されます。

- 2 「メンバー」または「プロパティ」でのソートを選択します。
- 3 「メンバー」を選択した場合、ソート基準のアーティファクトを選択します(「名前」、「別名」、または「プロパティ」)。
- 4 ソート順を選択します(昇順または降順)。
- 5 「OK」をクリックします。

ヒント: 列ヘッダーをダブルクリックすると、「プロパティ」列をソートできます。プロパティをソートするとき、列ヘッダーにソート・インディケータが表示されます。

セル・データのコピーおよび貼付け

あるセルに別のセルで使用するコンテンツを追加している場合、時間の節約のためにそのセル・データをコピーして貼り付けられます。

注: 同じ列内で、1つのセルから別のセルへ情報をコピーして貼り付けられません。列同士では、コピーして貼り付けられません。

▶ セル・データをコピーして貼り付けるには:

1 情報をコピーするには、次のいずれかのアクションを行います:

- コピーするセルを選択し、右クリックして「コピー」を選択します。
- コピーするセルを選択し、[Ctrl]キーを押しながら[C]キーを押します。

2 情報を貼り付けるには、次のいずれかのアクションを行います:

- 情報を貼り付けるセルまたは列を選択し、右クリックして「貼付け」を選択します。
- 情報を貼り付けるセルまたは列を選択し、[Ctrl]キーを押しながら[V]キーを押します。

ヒント: 1つのセルから値をコピーしてその値を列のすべてのセルに貼付けできます。値をコピーし、列ヘッダーを右クリックして「貼付け」を選択します。


プロパティの追加および除去

グリッド・エディタを使用して、メンバーのプロパティを追加または除去できます。

▶ プロパティを追加するには:

1 列を右クリックして、「プロパティの追加」を選択します。

プロパティ・リスト・セレクトが表示されます。

2 追加するプロパティを選択し、をクリックします。

3 「OK」をクリックします。

グリッド・エディタが表示されます。

▶ グリッドからプロパティを除去するには、除去するプロパティの列を右クリックし、「プロパティの除去」を選択します。

プロパティの検索

グリッド・エディタで多数のメンバーおよびプロパティを編集している場合、編集するプロパティを検索できます。

▶ プロパティを検索するには:

1 列を右クリックして、「プロパティの検索」を選択します。


「プロパティ・セレクト」ダイアログ・ボックスが表示されます。

2 プロパティを選択して、「OK」をクリックします。

「グリッド・エディタ」で、そのプロパティ列が強調表示されます。

グリッド・エディタの終了

▶ グリッド・エディタを閉じるには:

- 1  をクリックすると、「グリッド・エディタ」のすべての変更が保存されます。
- 2 次のいずれかのアクションを実行します:
 - 「グリッド・エディタ」タブを右クリックして、「閉じる」を選択します。
 - 「ファイル」、「閉じる」、「現在」の順に選択します。

スマート・リストの操作(Planningのみ)

サブトピック

- [スマート・リストの作成](#)
- [スマート・リストの名前](#)
- [スマート・リストの次元プロパティの変更](#)
- [スマート・リストでの#Missingの表示](#)

スマート・リストはカスタムのドロップ・ダウン・リストで、Planningアプリケーションのデータ・フォームのセルからアクセスできます。データ・フォームのセルをクリックすると、データを入力するかわりにドロップ・ダウン・リストからアイテムを選択できます。スマート・リストを含むセルには入力できません。スマート・リストは、セルでは下矢印として表示され、そのセルをクリックすると展開されます。

たとえば、「理由」というドロップ・ダウンのスマート・リストを作成し、「研究」、「顧客の意見」および「展開」という選択項目を提供できます。ユーザーが「理由」スマート・リストと関連付けられている「理由」という「勘定科目」をクリックするとき下矢印をクリックすると、ドロップ・ダウン・リストが展開されて「研究」、「顧客の意見」および「展開」という選択項目が表示されます。そのセルの値として、スマート・リストのオプションを選択します。

管理者は次元ライブラリを使用してスマート・リストの次元およびメンバーを作成し、プロパティを割り当てます。スマート・リストの作成および管理のために、次のような作業を実行します:

- 次元タイプとして選択されたスマート・リストを使用して、新規次元を作成します。
- その次元にメンバーを作成します。(メンバーは、ドロップ・ダウン、データ・フォーム、またはグリッドに表示されるアイテムです。)
- スマート・リストの次元およびメンバーにプロパティを割り当てます。スマート・リストおよびスマート・リストのメンバーにラベルを割り当てます。
- オプション:
 - データ・フォームに対してスマート・リストを使用可能にします。『Oracle Hyperion Planning 管理者ガイド』を参照してください。
 - メンバー式およびビジネス・ルールで、スマート・リストの値を使用します。

- スマート・リストが関連付けられた#Missingセルが、データ・フォームおよびドロップ・ダウン・リストにどのように表示されるかを設定します。

スマート・リストの次元は、メンバーの次元と関連付ける必要はありません。スマート・リストはデフォルトのメンバー・プロパティです。スマート・リストとメンバーの関連付けを除去するには、Smart List プロパティをダブルクリックしてスマート・リスト名を削除します。メンバーからスマート・リストを除去するには、Smart List プロパティ・フィールドを右クリックして値を除去します。

スマート・リストの作成

▶ スマート・リストを作成するには:

- 1 次元ライブラリで、「ファイル」、「新規」、「次元」の順に選択します。

「新規次元の追加」ダイアログ・ボックスが表示されます。

- 2 「名前」および「説明」を入力し、タイプで「スマート・リスト」を選択します。

注： 英数字およびアンダースコア文字からなる(特殊文字、ハイフンまたはスペースを含まない)一意の名前(例: Position)を入力します。スマート・リストと次元名を一致させることはできません。スマート・リスト名は数式で参照されることがあります。

スマート・リストの次元が共有ライブラリに表示されます。

データ・セルには1つのスマート・リストのみを表示できます。複数のスマート・リストが複数のセルで交差する場合は、データ型の評価順序を設定して優先的に表示されるものを設定します。

次に、ドロップ・ダウン・リストのアイテムとして表示されるメンバーを作成します。

- 3 共有ライブラリで、スマート・リストの次元を右クリックして「メンバーの作成」を選択し、「子として」を選択します。

「新規メンバー」ダイアログ・ボックスが表示されます。

- 4 メンバー名を入力して、「OK」をクリックします。

注： 特殊文字、ハイフンまたは空白を入れずに、英数字とアンダースコア文字を含む一意のメンバー名を入力します。

- 5 必要に応じて、次元の他のメンバーも作成します。

スマート・リストの名前

スマート・リストを使用する場合、次の考慮事項に注意してください。スマート・リストの名前と別名:

- 開始値は文字で、文字、数字、_(アンダースコア)および\$(ドル記号)文字を含めることができます。空白または次にあげる Java の予約語は使用できません。

abstract, assert, boolean, break, byte, case, catch, char, class, const, continue, default, do, double, else, enum, extends, false, final, finally, float, for, if, goto, implements, import, instanceof, int, interface, long, native, new, null, private, protected, public, return, short, static, strictfp, super, switch, synchronized, this, throw, throws, transient, true, try, void, volatile, while

- スマート・リストの次元、他の次元、または次元メンバーと同じ名前は使用できません。

スマート・リストの次元がクラシックから Performance Management Architect に変換されると、接頭辞 s1_ が追加されて名前の一意性が確保されます。(スマート・リストのメンバー名のアップグレードでは追加されません。)

スマート・リストの次元プロパティの変更

プロパティ・グリッドを使用して、スマート・リストのプロパティを設定します。

▶ スマート・リストのプロパティを設定するには:

- 1 スマート・リストの次元を選択します。
- 2 カテゴリで「Planning」を選択します。スマート・リストの次元の次のプロパティを定義します:

表 12 スマート・リストの次元プロパティ

プロパティ	説明
Label	スマート・リストが選択されたときに表示されるテキストを入力します。スマート・リストおよびスマート・リストのメンバーにはラベルを割り当てる必要があります。空白および特殊文字を使用できません。スマート・リストのラベルはリソースを参照して、それを別の言語に翻訳できます。『Oracle Hyperion Planning 管理者ガイド』を参照してください。
Auto Generate ID	スマート・リストのエントリに対して数値 ID を生成します。このオプションを選択しない場合は、スマート・リストの ID の値をカスタマイズできます。
Start Value	スマート・リストの最初のメンバーの Value プロパティを取り込みます。たとえば、スマート・リストの次元が Justification で Start Value が 10 に設定されている場合、このリストに追加される最初のメンバーの値は 10 になります。
Increment	この値は、リストの最後のメンバーに追加されて、それによって選択したメンバーの値が決定します。例: Justification (Start Value=0, Increment=10) Research (Value=0) Customer Feedback (Value=10) Survey (Value=20)

プロパティ	説明
Display Order	<p>スマート・リストのドロップダウン・リストを、ID 順、名前順、ラベル順のいずれでソートするのかを指定します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ● ID - エントリを表示する順番を決める一意の数です。 ● 名前 - 一意の英数字の名前で、英数字およびアンダースコアを含められますが(例: Customer_Feedback)、特殊文字および空白は含むことができません。 ● ラベル - ドロップダウン・リストのスマート・リストのエントリに表示されるテキストです(例: Customer Feedback)。
#Missing Data Form Label	<p>スマート・リストに関連付けられたセルでの、#Missing 値の表現形式を指定します。次のオプションがあります:</p> <ul style="list-style-type: none"> ● ドロップ・ダウン - #Missing ドロップ・ダウン・ラベルのラベル・セットを表示します。 ● グリッド - データ・フォームの「欠落値を空白で表示」の選択内容によって、#Missing を表示するか、セルを空白のままにします(『Oracle Hyperion Planning 管理者ガイド』を参照)。 <p>この選択によって、セルが選択されていないときに表示される内容が決定されます。セルが選択されているときは、スマート・リストのドロップ・ダウン・リストで選択されたアイテムが表示されます。</p>
#Missing Drop Down Label	<p>値が#Missing のスマート・リストのエントリに表示するラベル(たとえば、No Justification)を入力します。次に注意点を示します:</p> <ul style="list-style-type: none"> ● スマート・リストのドロップ・ダウンに最初の項目として表示されるので、データ・フォームの中で#Missing を選択できます。 ● セルがフォーカスされていないときには、ドロップ・ダウン・リストが選択されている場合のみこのラベルが表示されます。それ以外の場合は、データ・フォームの「欠落値を空白で表示」の選択内容によって、#Missing を表示するか、セルを空白のままにします。 ● #Missing ラベルは、#Missing をセルに表示するかどうかを決定するのみです。保管された値は、#Missing のままです。

スマート・リストでの#Missing の表示

管理者はスマート・リストおよびデータ・セルに表示される値を設定できます(セルにデータがない場合に表示する内容を含む)。セルにデータがない場合、そのセルに値を表示しない(すなわち空白を表示)、#Missing または(スマート・リストが関連付けられたセルの場合)指定した別の値を表示する、から選択できます。

次に示すオプションを使用して、セルが選択されていない場合の#Missing の表示を制御します:

オプション	説明
空白	<p>データ・フォームの設計時に、「欠落値を空白で表示」を選択します。</p> <p>スマート・リストのプロパティの設定時に、「グリッド」を選択します。</p>
#missing	<p>データ・フォームの設計時に、「欠落値を空白で表示」を選択しません。</p> <p>スマート・リストのプロパティの設定時に、「グリッド」を選択します。</p>

オプション	説明
「No Change」などのカスタム・ラベル	スマート・リストのプロパティの設定時に、「#Missing ドロップ・ダウン・ラベル」フィールドにカスタム・ラベルを入力します(例: No Change)。「ドロップ・ダウン」を選択します。

トランザクション・ログの表示

「次元ライブラリ」で実行されるすべての操作は、トランザクション・ログに記録されます。日付、アプリケーション、次元およびプロパティでログをフィルタでき、現在のセッションで実行された操作のみ記録するように制限できます。それぞれの操作はタイム・スタンプ、ユーザー名、実行したアクションのタイプおよびその他の関連情報とともに記録されます。

アクション	説明
AddApplication	アプリケーションをライブラリに追加します
AddDimension	次元をライブラリに追加します
AddDimensionAssociation	2つの次元の間の関連付けを追加します
AddLibrary	ライブラリをシステムに追加します
AddMember	指定したメンバーを指定した次元に追加します
AddOrphanMember	孤立メンバーを次元に追加します
AddView	ビュー・オブジェクトをアプリケーションに追加します
AddViewFilter	ビュー・フィルタをビューに追加します
AddViewTopMember	指定したビューの最上位のメンバーを追加します
AddViewFilterTopMember	ビュー・フィルタに最上位のメンバーを追加します
AutomatorRun	オートメーター実行に対する記録されたアクションです
ClearApplication	既存のアプリケーションを消去します。アプリケーションに対するデータ・アーティファクトを削除しますが、アプリケーション・レコードは削除しません
ClearDimension	既存の次元を消去します。次元に対するデータ・アーティファクトを削除しますが、次元レコードは削除しません
CloseLibrary	ライブラリの終了に対する記録されたアクションです
CompareRun	比較ジョブに対する記録されたアクションです
CopyApplication	既存のアプリケーションをコピーします
CopyDimension	既存の次元をコピーします
CopyLibrary	既存のライブラリをコピーします
DeleteApplication	既存のアプリケーションを削除します

アクション	説明
DeleteBranch	メンバーおよびその子孫を削除します
DeleteDimension	ライブラリから次元を削除します
DeleteLibrary	既存のライブラリを削除します
DeleteMember	ライブラリから指定したメンバーを削除します
DeleteView	アプリケーション内のビューを削除します
ExportRun	エクスポート・ジョブに対する記録されたアクションです
ImportRun	インポート・ジョブに対する記録されたアクションです
InsertMember	指定したメンバーを指定した次元に挿入します
MemberPropertyDataLoss	メンバーのプロパティ・データ損失に対する損失アクションです
MigrateApplication	アプリケーションを別のサーバーに移行します
MoveMember	次元内の指定したメンバーを移動します
OpenLibrary	ライブラリの開始に対する記録されたアクションです
RemoveApplicationArrayPropertyValue	指定したアプリケーションの指定したプロパティの配列値を除去します
RemoveApplicationPropertyValue	指定したアプリケーションの指定したプロパティの値を除去します
RemoveDescendantValues	メンバーの子孫のプロパティ値を除去します
RemoveDimensionArrayPropertyValue	指定した次元の指定したプロパティの配列値を除去(消去)します。他の次元が使用している可能性があるため、プロパティ自体は削除されません。
RemoveDimensionAssociation	2つの次元の間の関連付けを除去します
RemoveDimensionPropertyValue	指定した次元の指定したプロパティの値を除去(消去)します。他の次元が使用している可能性があるため、プロパティ自体は削除されません。
RemoveDuplicates	指定したメンバーに対する重複したプロパティを除去します
RemoveLibraryPropertyValue	指定したライブラリの指定したプロパティの値を除去(消去)します。他のライブラリが使用している可能性があるため、プロパティ自体は削除されません。
RemoveMember	次元から指定したメンバーを除去します
RemoveMemberArrayPropertyValue	指定したメンバーの指定したプロパティの配列値を除去(消去)します。他のメンバーが使用している可能性があるため、プロパティ自体は削除されません。
RemoveMemberPropertyValue	指定したメンバーの指定したプロパティの値を除去(消去)します。他のメンバーが使用している可能性があるため、プロパティ自体は削除されません。
RemoveViewFilter	既存のアプリケーションからビュー・フィルタを除去します
RemoveViewFilterTopMember	ビュー・フィルタから最上位のメンバーを除去します
TransactionExportRun	トランザクション・クエリーに対する記録されたアクションです

アクション	説明
UpdateApplicationArrayPropertyValue	指定したアプリケーションの指定したプロパティの配列値を更新します
UpdateApplicationPropertyValue	指定したアプリケーションの指定したプロパティの値を更新します
UpdateDimensionArrayPropertyValue	指定した次元の指定したプロパティの配列値を更新します
UpdateDimensionPropertyValue	指定した次元の指定したプロパティの値を更新します
UpdateLibraryPropertyValue	指定したライブラリの指定したプロパティの値を更新します
UpdateMemberArrayPropertyValue	指定したメンバーの指定したプロパティの配列値を更新します
UpdateMemberPropertyValue	指定したメンバーの指定したプロパティの値を更新します

▶ トランザクション・ログを表示するには:

1 次元ライブラリから、「表示」、「トランザクション・ログのダウンロード」の順に


選択するか、 をクリックします。

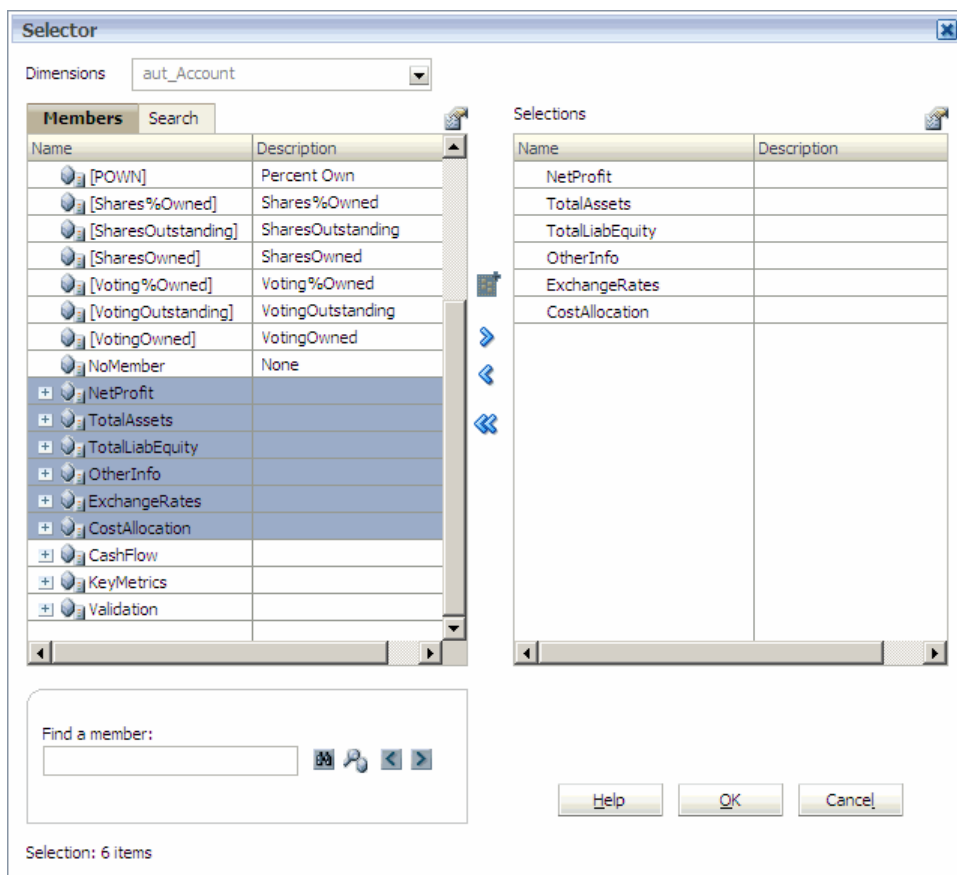
2 アプリケーションを選択するか、共有ライブラリを選択して共有ライブラリのすべての次元を表示します。


注： トランザクション・ログをフィルタするには、少なくとも1つのアプリケーションまたは共有ライブラリを選択する必要があります。

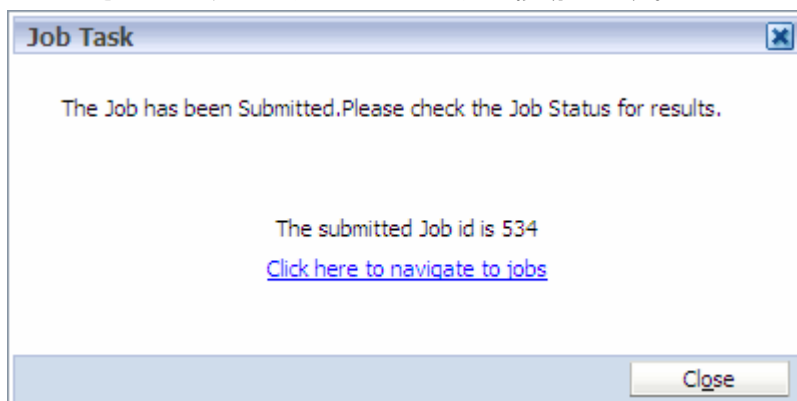
3 「オプション」：次元を選択します。

注： ドロップダウン・リストには選択したアプリケーションまたは共有ライブラリに対する次元のみが表示され、1つの次元のみ選択できます。

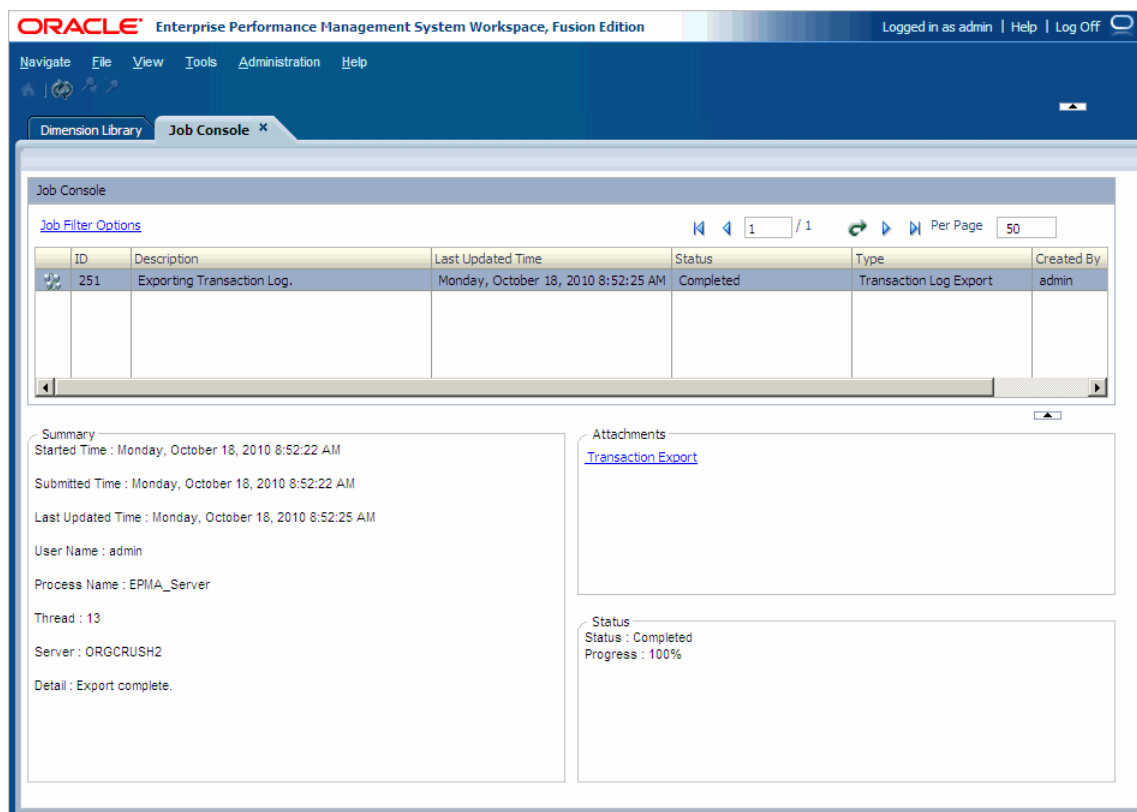
4 「オプション」：ログに含める1つまたは複数のメンバーを選択するには、 をクリックして「OK」をクリックします。



- 5 「オプション」: ログに含める 1 つまたは複数のプロパティを選択するには、 をクリックして「OK」をクリックします。
- 6 「オプション」: 「日付」ドロップ・ダウン・リストを使用し、日付範囲を選択します。
- 7 「オプション」: 「現在のセッションへのフィルタ」を選択します。
- 8 「OK」をクリックします。
- 9 ジョブが送信されたら、メッセージ・ボックスのリンクをクリックして、エクスポートされたトランザクション・ログに移動します。



- 10 「添付ファイル」領域で、「トランザクションのエクスポート」をクリックします。



11 選択してトランザクション・ログを開くか、または保存します。

注： トランザクション・ログは csv ファイル拡張子を使用し、Microsoft Excel で開けます。

トランザクション・ログには複数の情報列から構成されます。列の表示は、選択した基準によって異なります。

列名	説明
トランザクション ID	1 つまたは複数のトランザクション・アクションに関連付けられたトランザクション ID です
DetailID	トランザクション内で処理されるアクションの順序です
アクション	ログに記録される操作です
ApplicationID	アプリケーション・アーティファクトと関連する、生成された ID です
ApplicationName	アプリケーション名
ClassID	追加されているアーティファクトの分類です
CreatedDateTime	アクションのタイムスタンプです
説明	アクションの説明です
DimensionID	次元アーティファクトの生成された ID です
DimensionName	アクションが実行される次元名です

列名	説明
FromOrigin	プロパティの更新のときに、更新が発生する前のプロパティ値の原点です
FromValue	プロパティの更新のときに、更新が発生する前のプロパティの値です
Level	トランザクション・アクションに対する指定で、「コア」、「ログに記録済」、「損失」、「結果」または「管理」のいずれかです。
MemberDescription	アクションがメンバーと関連する場合、そのメンバーの名前がこの列に記録されます
MemberID	メンバーの生成された ID です
MemberName	アクションが実行されるメンバー名です
NewMemberOrder	メンバーが親の下に挿入される順序です
NewParentID	メンバーが挿入される親の ID です
OriginalMemberOrder	親メンバーに対するこの順序の元の位置です
OriginalParentID	メンバーの移動操作の前の、元の親の ID です
OriginatingDetailID	他のアクションを開始するアクションに対して、これは開始しているアクションの詳細 ID です
OriginatingID	他のアクションを開始するアクションに対して、これは開始しているアクションの ID です
PropertyID	プロパティの定義の生成された ID です
PropertyName	プロパティの定義の名前です
ToOrigin	プロパティ値の元です
ToValue	プロパティ値の新しい値です
UserName	アクションを実行するユーザー名です
LibraryID	ライブラリ ID で、デフォルト値は 1 です
LibraryName	アクションを実行する対象のライブラリ名です

トランザクション履歴の削除

サブトピック

- [トランザクション履歴の削除ユーティリティの起動](#)
- [トランザクション履歴の削除ログの表示](#)
- [トランザクション履歴の削除ユーティリティの操作](#)
- [ネイティブのデータベース・ログの考慮事項](#)

Performance Management Architect により、Performance Management Architect データベースにトランザクションが作成されます。このデータベースは、インストール時および構成時に自動的に作成されます。Performance Management Architect では、これらのアーティファクトが削除されないため、データベースのサイズは時

間の経過とともに増大します。Performance Management Architect のトランザクション履歴の削除ユーティリティにより、データベースからトランザクションを除去して、データベースのサイズを小さくできます。

トランザクション履歴の削除により、トランザクションが除去され、データベースのサイズが小さくなります。ユーティリティを使用する場合、ユーティリティを実行する前に、Performance Management Architect データベースをフル・バックアップして、サーベンスオクスリー遵守のための監査証跡を維持する必要があります。

注： トランザクション履歴を削除するには、LCM 管理者または EPMA 管理者のセキュリティ役割が必要です。『Oracle Hyperion Enterprise Performance Management System ユーザーおよび役割セキュリティ・ガイド』を参照してください。

トランザクション履歴の削除ユーティリティの起動

トランザクション履歴の削除ユーティリティを実行するには、コマンド・ラインを使用するか、または Windows の「スタート」メニューのショートカットの「EPMA トランザクション履歴削除」を選択します。

注： トランザクション履歴の削除ユーティリティを実行する前に、Hyperion EPMA サーバーを開始する必要があります。Windows の「サービス」パネルで、Hyperion EPMA サーバーを選択し、右クリックして「開始」を選択するか、コマンド・ラインで `net start EPMA_Server.exe` と入力します。

注意 このユーティリティはデータベースからトランザクションを削除します。トランザクション履歴の削除ユーティリティを実行する前に、Performance Management Architect データベースのフル・バックアップを実行していることを必ず確認する必要があります。

ユーティリティによって Shared Services データベースからデータベース接続情報 (データベース名、場所、ログイン情報など) が自動的に取得されるので、クリーンアップは Performance Management Architect が使用する同じデータベースに影響を及ぼします。このユーティリティはリモート・クライアント上では実行できないことに注意してください。このユーティリティは次元サーバーのアプリケーション・サーバーで実行する必要があります。

▶ ユーティリティを起動するには:

- 1 ユーティリティをグラフィカル・ユーザー・インタフェースで起動するには、次のいずれかのアクションを行います:
 - 「スタート」、「プログラム」、「Oracle EPM System」、「Foundation Services」、「Performance Management Architect」、「EPMA トランザクション履歴削除」の順に選択します。

- <EPM_ORACLE_INSTANCE>products\Foundation\BPMA\AppServer\DimensionServer\ServerEngine\binに移動します。次に、EPMA_database_cleanup_utility.exe をダブルクリックします。

「EPMA トランザクション履歴削除ユーティリティ」ダイアログ・ボックスが表示されます。

- 2 Performance Management Architect にログインするのに使用するユーザー名とパスワードを入力し、「ログオン」をクリックします。

注： トランザクション履歴を削除するには、LCM 管理者または EPMA 管理者のセキュリティ役割が必要です。『Oracle Hyperion Enterprise Performance Management System ユーザーおよび役割セキュリティ・ガイド』を参照してください。

- 3 コマンド・ラインでユーティリティを起動するには、コマンド・プロンプトを開き、ディレクトリの場所を dimension_server.exe ファイルの場所に変更します。たとえば、C:\EPM_ORACLE_INSTANCE\BPMA\AppServer\DimensionServer\ServerEngine\bin に変更してから、次のように入力します:

```
database_cleanup_utility -h
```

```
database_cleanup_utility.exe -h
-----
EPMA Transaction History Purge Utility
Commands:
-A<n> Specifies a minimum age, where <n> is an integer number of days.
-D<d> Specifies a maximum date, where <d> represents the date.
-np  Suppresses prompts of any kind.
-h   Displays this help.
-u   Specifies user name.
-p   Specifies password.

Examples:
database_cleanup_utility -u<user> -p<password>      <-- Deletes all applicabl
e transactions with prompts
database_cleanup_utility -u<user> -p<password> -np   <-- Deletes all applic
able transactions with no prompts
database_cleanup_utility -u<user> -p<password> -d08/07 <-- Deletes applicable
transactions dated on or before August 7th
database_cleanup_utility -u<user> -p<password> -a50  <-- Deletes applicable
transactions older than 50 days
database_cleanup_utility -h                          <-- Displays the help text

Press any key..._
```

126 ページの「トランザクション履歴の削除ユーティリティの操作」では、グラフィカル・ユーザー・インタフェースの使用方法を説明し、ユーティリティに関する重要な情報も含まれています。コマンド・ライン・パラメータの説明については、127 ページの「コマンド・ウィンドウでのトランザクション履歴の削除ユーティリティの使用方法」を参照してください。

- 4 database_cleanup_utility -u<user> -p<password>と入力します。ここで、<user>はユーザー名を表し、<password>はパスワードを表します。

トランザクション履歴の削除ログの表示

トランザクション履歴の削除ユーティリティによって、EPM_ORACLE_INSTANCE/diagnostics/logs/epma にログ・ファイルが生成されます。次に Database_Cleanup_UTILITY_Log.log ファイルの引用を示します。

```
2009-04-03 17:27:28,468
2009-04-03 17:27:28,484 EPMA Transaction History Purge Utility
2009-04-03 17:27:28,484
2009-04-03 17:27:28,484 Connecting to database...
2009-04-03 17:27:31,734 Connected successfully
2009-04-03 17:27:31,750 Only items dated April 3, 2009 or earlier will be deleted.
2009-04-03 17:27:31,750
2009-04-03 17:27:31,750 Deleting transactions...
2009-04-03 17:27:36,234
2009-04-03 17:27:36,234 The purge has completed. 129 transactions were deleted.
```

ヒント: 「EPMA トランザクション履歴削除ユーティリティ」ダイアログ・ボックスの「ファイルを開く」ボタンをクリックして、プロセスの実行後にログ・ファイルにアクセスすることもできます。

トランザクション履歴の削除ユーティリティの操作

サブトピック

- トランザクションの削除
- コマンド・ウィンドウでのトランザクション履歴の削除ユーティリティの使用法
- データベースのクリーンアップ・タスクのスケジュール

次の項では、グラフィカル・ユーザー・インターフェースを使用してトランザクションを削除する方法を説明します。

トランザクションの削除

注意 このユーティリティはデータベースからトランザクションを削除します。トランザクション履歴の削除ユーティリティを実行する前に、Performance Management Architect データベースのフル・バックアップを実行していることを必ず確認する必要があります。トランザクションの削除は元に戻せません。トランザクションを削除する場合は十分に注意してください。

▶ トランザクションを削除するには:

- 1 「EPMA トランザクション履歴削除ユーティリティ」ダイアログ・ボックスで、トランザクションを削除する条件を選択します。次のいずれかのアクションを実行します:
 - 「次の日付以前」を選択し、日付を選択します。
 - 「経過時間」を選択し、日数を選択します。最大 100 日まで設定可能です。100 日を超える値に変更すると、エラー・メッセージが表示されます。

- 2 「開始」をクリックします。

「警告」ダイアログ・ボックスが表示されます。

注意 「はい」をクリックする前に、トランザクションの削除は進行中に取消しできないことに注意してください。

- 3 「はい」をクリックします。

「開始」ボタンをクリックすると、ユーティリティによって削除するトランザクションが判別されます。「警告」ダイアログ・ボックスで「はい」をクリックすると、すべてのトランザクションの削除が開始されます。「はい」をクリックすると、削除プロセスが開始されます。ダイアログ・ボックスのコントロールにはプロセスが完了するまでアクセスできません。削除したトランザクションの要約がプロセスの最後に表示されます。この要約はダイアログ・ボックスの下部に示されるログ・ファイルに含まれます。削除が完了すると、ダイアログ・ボックス・コントロールが再度使用可能になります。

注： 削除の進行中にアプリケーションを閉じようとする、現在の削除プロセスがロールバックされることを示すエラー・メッセージが表示されま
す。

注： トランザクション履歴削除ユーティリティのタイムアウトで問題が発生した場合は、CommandTimeout 設定の値を大きくすることができます。デフォルトのタイムアウトは 900 秒(15 分)です。タイムアウト設定は BPMA_Server_Config.xml ファイルで変更できます。付録 D 「BPMA_Server_Config.xml の構成設定」の Data_Access_Layer の設定を参照してください。

コマンド・ウィンドウでのトランザクション履歴の削除ユーティリティの使用 方法

-h パラメータを含んだコマンド・プロンプトからユーティリティを起動する場合は、有効なパラメータのリストがコマンド・ウィンドウに表示されます。次のガイドラインに注意してください：

- 各パラメータはスペースで区切る必要があります。
- パラメータが値をとる場合は、スペースで区切らないでください。たとえば、-d05/08 は日付を渡します。
- コマンドでは、大文字と小文字は区別されません。

コマンド・ウィンドウでユーティリティを起動するには、127 ページの「コマンド・ウィンドウでのトランザクション履歴の削除ユーティリティの使用
方法」を参照してください。

次の表では、コマンド・ウィンドウで使用可能な各パラメータを説明します：

パラメータ	説明
-a<n>	削除する最少日数を指定します。<n>は整数の日数です。 使用できる最大値は 100 です。100 を超える値を入力すると、エラーがロギングされます。
-d<d>	最大の日付を指定します。<d>は日付を表します。日付フォーマットは、コントロールパネルの「地域設定」のフォーマットを使用します。年は、現在の年と同じである場合は指定する必要はありません。ただし、月および日は指定する必要があります。たとえば、現在の年が 2008 年である場合、9/8 と 09/08 は 2008 年 9 月 8 日を表します。
-np	すべてのプロンプトを非表示にします。
-h	パラメータのヘルプを表示します。
-u	ユーザー名を指定します。
-p	パスワードを指定します。

複数のパラメータを使用してプロセスを完了できます。コマンド例は次のとおりです：

コマンド	説明
database_cleanup_utility -u<user> -p<password>	ユーザー名とパスワードを指定します。ユーティリティの各コマンド・ラインを実行するには、ユーザー名とパスワードが必要です。ただし、ユーティリティのヘルプ・テキストにアクセスするための-h コマンドは例外です。
database_cleanup_utility -np	プロンプトを表示せずに、該当するすべてのトランザクションを削除します。
database_cleanup_utility -d04/08	現在の年の4月8日以前の該当するトランザクションを削除します。
database_cleanup_utility -d04/08/2005	2005年4月8日以前の該当するトランザクションを削除します(日付が現在の年の範囲内がない場合は、年を指定する必要があります)。
database_cleanup_utility -a50	50日より古い該当するトランザクションを削除します。
database_cleanup_utility -h	ヘルプ・テキストを表示します。

注： コマンド・ラインでユーティリティを実行する際にエラーが発生すると、終了コード・メッセージが表示されます。

コマンド・ラインに表示できる終了コードは次のとおりです。次の表に、終了コード、コマンド・ラインのコードに対して表示される関連番号、および説明を示します。

終了コード	関連番号	説明
正常終了	0	コマンドは正常に実行されました。
入力エラー	1	使用したコマンド・ライン・パラメータは無効です。
構成ファイル・エラー	2	BPMA_Server_Config.xml ファイルに問題があります。たとえば、BPMA_Server_Config.xml はこのユーティリティと同じディレクトリにある必要がありますが、そうでない場合はエラーが発生します。このファイルはデータベース接続情報には不要ですが、存在する必要があります。
接続の失敗	3	データベースへのアクセス中に接続エラーが発生しました。
Hyperion EPMA サーバーが実行されない	4	トランザクション履歴の削除ユーティリティを起動する前に、Hyperion EPMA サーバーを開始する必要があります。コマンド・ラインを使用して Hyperion EPMA サーバーを開始する方法については、 127 ページの「コマンド・ウィンドウでのトランザクション履歴の削除ユーティリティの使用方法」 を参照してください。
不明なエラー	5	Oracle サポートに連絡してください。
SQL エラー	6	データベースに対する削除操作を実行しようとしているときにエラーが発生しました。

注： トランザクション履歴削除ユーティリティのタイムアウトで問題が発生した場合は、CommandTimeout 設定の値を大きくすることができます。デフォルトのタイムアウトは 900 秒です。タイムアウト設定は BPMA_Server_Config.xml ファイルで変更できます。付録 D 「BPMA_Server_Config.xml の構成設定」の Data_Access_Layer の設定を参照してください。

データベースのクリーンアップ・タスクのスケジュール

Windows のコントロール パネルを使用して、トランザクション履歴の削除ユーティリティの実行をスケジュールできます。

- ▶ タスクをスケジュールするには、コントロール パネルを使用して「タスク」を開きます。次に、トランザクション履歴の削除ユーティリティのスケジュールされたタスクを追加し、タスク ウィザードの手順に従います。ウィザードの最後の画面で、詳細プロパティを表示してください。

スケジュールされたタスクのプロパティを表示する場合、「ファイル名を指定して実行」テキスト・ボックスの末尾にパラメータを追加できます。「ファイル名を指定して実行」テキスト・ボックス内の文字列の末尾にパラメータを追加する場合、たとえば、database_cleanup_utility.exe -u<user> -p<password> -a20 -np と入力すると、20 日より古いすべての適用可能なトランザクションがプロンプトなしで削除されます。

終了コードおよびロギング機能は、Windows のスケジューラを使用するときに役立ちます。これは、スケジューラの実行時にログインする必要がなく、失敗時にログを確認して原因を判別できるためです。ログ・ファイル

Database_Cleanup_UTILITY_Log.txt は<EPM_ORACLE_INSTANCE>\logs\epm にあります。

ネイティブのデータベース・ログの考慮事項

このユーティリティを使用すると、多数のネイティブ・データベースのログ・エントリが生成されます。これらの多数のエントリにより、データベースで使用される格納場所が大幅に増大する可能性があります。使用するデータベース・タイプ(Oracle、SQL Server または DB2)に応じて、様々な方法を使用して、トランザクション・ロギング・スペースを管理できます。

注： ロギング・スペースの再利用は、データベース管理者が行うタスクです。

次の例は、Oracle および SQL Server でトランザクション・ロギング・スペースを再利用する方法を示します。

- Oracle - 次のコマンドは、Redo ログ・ファイル EPMARedo.log を 600k にサイズ変更します。

```
ALTER DATABASE DATAFILE 'F:\oradata\live\EPMARedo.log' RESIZE 600k;
```

- SQL Server - 次のコマンドは、各ファイル内に 5%の空きスペースを作成するために、EPMA というデータベースのデータおよびログ・ファイルのサイズを小さくします。

```
DBCC SHRINKDATABASE (EPMA, 5);  
GO
```

注： DB2 では通常、ログ・ファイルのサイズは問題になりません。これは、循環ロギングが使用可能な場合に上書きされるためです。非循環ロギングが使用可能な場合は、DB2 が次のログ・ファイルの使用を開始したときに削除されます。詳細は、DB2 のドキュメントを参照してください。

この章の内容

メンバーの作成	131
共有メンバーの操作	132
動的時系列メンバーの設定	137
メンバー名の変更	139
メンバーの除去および削除	140
メンバーの検索	142
メンバーのソート	144
親の縮小	145
子メンバーの順序変更	145
孤立メンバーの管理	145
プロパティ値の編集	146
プロパティの検索	147
ユーザー定義属性の操作	148
メンバー計算式の操作	150
アプリケーションのメンバーの操作	154

メンバーの作成

選択したメンバーの兄弟または子として、メンバーを作成できます。次元ライブラリにのみメンバーを作成できます。アプリケーションにメンバーを追加する場合、先に共有ライブラリにメンバーを作成し、それをアプリケーションに追加する必要があります。

メンバー名は、製品名の命名要件に従う必要があります。Planning 次元の場合、[386 ページの「次元、メンバーおよび別名の名前付けの制限」](#)を参照してください。

Financial Management 次元の場合、[第 11 章「Financial Management 次元の操作」](#)を参照してください。Profitability and Cost Management メンバーの作成の詳細は、『Oracle Hyperion Profitability and Cost Management 管理者ガイド』を参照してください。

注： 次元ライブラリでメンバーを作成する場合に、別の文字を入力することもできますが、メンバーがアプリケーションに送られるときにアプリケーションの命名規則が適用されます。

Performance Management Architect では、大きなメンバー・ドメインがサポートされます。大きなメンバー・ドメインの縮小の詳細は、[145 ページの「親の縮小」](#)を参照してください。

▶ メンバーを作成するには:

- 1 メンバーを右クリックして「メンバーの作成」を選択します。次に「子として」または「兄弟として」を選択します。

注： 次元の最上位のメンバーを右クリックしても、兄弟を作成するオプションは表示されません。

- 2 メンバー名を入力して、「OK」をクリックします。

共有メンバーの操作

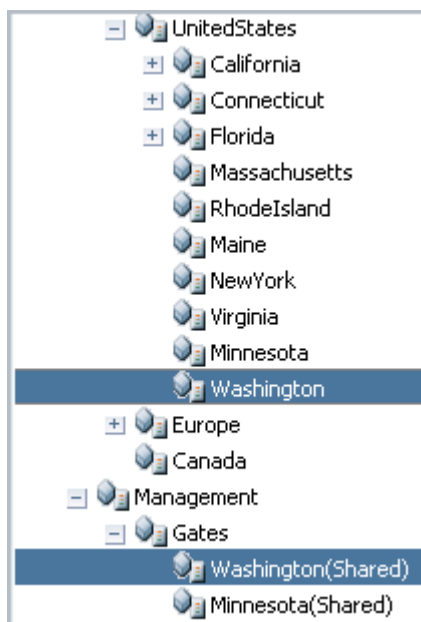
サブトピック

- [コピーおよび貼付けによる共有メンバーの作成](#)
- [メンバー・セレクタを使用した共有メンバーの作成](#)
- [メンバーの選択](#)
- [メンバー・セレクタを使用したメンバーの検索](#)
- [Planning アプリケーション内の共有メンバー](#)

メンバーを共有することで、次元ライブラリ内で別の階層構造を許可できます。共有メンバーを作成する前に、基本メンバーが存在する必要があります。1つのメンバーに対して複数の共有メンバーを作成できます。

メンバーの第2インスタンスには共有メンバーであることを示すタグ(かっこに囲まれた「共有」)が付けられます。

次の例では、Washington というエンティティは UnitedStates 階層のメンバーで、Management-Gates 階層のメンバーでもあります。



共有メンバーは次の2つの方法で作成できます:

- 子または兄弟として共有メンバーをコピーおよび貼り付けます。133 ページの「コピーおよび貼付けによる共有メンバーの作成」を参照してください。
- メンバー・セレクトアを使用して共有メンバーを挿入すると、「共有ライブラリ」ツリー・ビューの位置を失うことなく、次元の別の部分からメンバーを選択できます。133 ページの「メンバー・セレクトアを使用した共有メンバーの作成」を参照してください。

注: メンバーの共有インスタンスのグローバル・プロパティを変更できます。グローバルおよび関係プロパティの詳細は、83 ページの「プロパティの変更」を参照してください。

コピーおよび貼付けによる共有メンバーの作成

▶ 共有メンバーを作成するには:

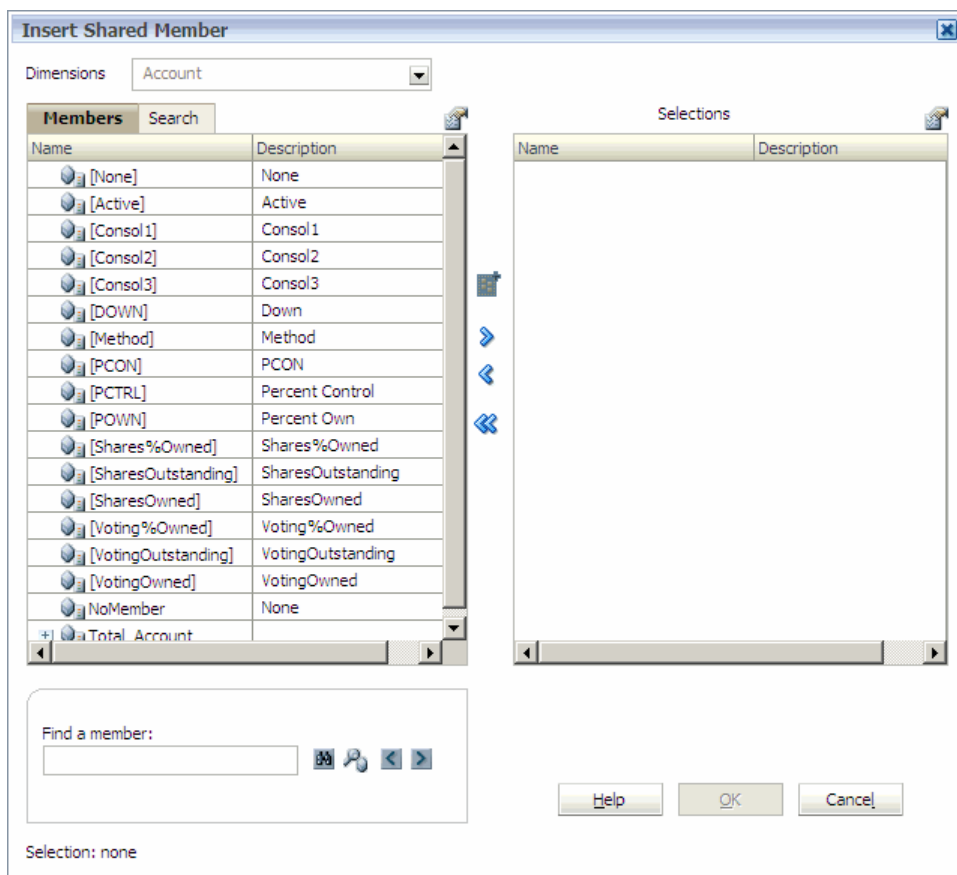
- 1 メンバーを右クリックして「コピー」を選択します。
- 2 階層内の新規メンバーを配置する場所を検索し、メンバーを右クリックして、「貼付け」、「子として」または「兄弟として」の順に選択します。

メンバー・セレクトアを使用した共有メンバーの作成

メンバー・セレクトアを使用すると、「共有ライブラリ」ビューの位置を失うことなく、次元の別の部分からメンバーを選択できます。

▶ 共有メンバーを作成するには:

- 1 メンバーを右クリックして「共有メンバーの挿入」を選択します。
- 2 「子として」または「兄弟として」を選択します。
「共有メンバーの挿入」ダイアログ・ボックスが表示されます。



- 3 挿入するメンバーを選択します。詳細は、134 ページの「メンバーの選択」を参照してください。

メンバーの選択

メンバー・セクタを使用して、次元内のメンバーを表示して選択できます。選択するメンバーを探すために、「+」および「-」を使用して、次元内のメンバーを展開および縮小できます。



「共有メンバーの挿入」ダイアログ・ボックスには、2つのペインがあり、次元のすべてのメンバーが左側に表示され、選択内容が右側に表示されます。その次元で使用可能なすべてのメンバーが表示される左ペインには、メンバー名および簡単な説明(ある場合)が表示されます。選択内容が表示される右ペインには、メンバー名および選択タイプが表示されます。


▶ メンバー・セクタを使用するには、次の手順に従います:


- 1 **オプション:** それぞれのペインの上の「メニュー」ボタンを使用して、メンバー・セクタの列を変更します。例:


- 左ペインで、、「表示」、「カウント」の順に選択します。

名前および説明に加えてカウント列が表示されます。カウント列には、現在の次元の子メンバーの数が表示されます。これは、ツリーの分岐を展開するために必要な時間を示唆する便利なインディケータになります。

- カウント列を除去するには、、「表示」、「カウント」の順に選択します。
- 2 次元を縮小するには、をクリックし、「すべて縮小」を選択します。

注：「すべて縮小」を選択すると、次元の下のすべてのメンバーまたは選択したメンバーが縮小されます。次元またはメンバーが縮小された後にアーティファクトの上にマウス・ポインタを置くと、子孫の数を示すツールチップが表示されます。
 - 3 左側の使用可能な次元およびメンバーのリストで、共有として追加するメンバーを選択してをクリックします。

ヒント：メンバーが見つからない場合、メンバー・セレクトタでメンバーを検索できます。135 ページの「メンバー・セレクトタを使用したメンバーの検索」を参照してください。
 - 4 共有メンバーのリストからメンバーを選択解除するには、をクリックします。


選択したリストのすべてのメンバーの選択を解除するには、をクリックします。
 - 5 「OK」をクリックします。

メンバー・セレクトタを使用したメンバーの検索

メンバー・セレクトタ内でメンバーを検索するには、2つのオプションがあります。

- 「メンバー」タブ - 「メンバーの検索」テキスト・ボックスにメンバー名またはメンバー名の一部を入力して「検索」ボタンをクリックできます。「次へ」ボタンおよび「前へ」ボタンを使用して、次や前の検索結果に移動できます。「詳細検索」ボタンをクリックして、名前、別名またはプロパティごとに検索することもできます。
- 「検索」タブ - 「検索」タブを使用すると、メンバー名またはメンバー名の一部を入力して、検索で返されるメンバーのリストを表示できます。

メンバーの検索時にワイルドカード文字(*または%など)を使用できます。たとえば、顧客次元を検索する場合、Ba で始まる顧客名を検索するには、Ba**と入力します。

- ▶ 「メンバー」タブを使用してメンバーを検索するには、次の手順に従います：
 - 1 メンバー・セレクトタの「メンバーの検索」テキスト・ボックスに、ワイルドカード文字を使用してメンバー名またはメンバー名の一部を入力します。
 - 2 をクリックします。

左ペインにあるメンバーのリストに、メンバーが自動的に選択されます。
 - 3 「次へ」ボタン」または「前へ」ボタンをクリックして、選択するメンバーが見つかるまで、メンバー間を移動します。

4 **オプション:** 「メンバーの検索」領域で  をクリックします。次のタスクを実行します:

1. 「名前」、「別名」または「プロパティ」を選択します。
2. 値を入力します。

ヒント: ワイルドカード文字を使用して、「メンバーの検索」ダイアログ・ボックスに値を入力できます。

3. 「OK」をクリックします。

左ペインにあるメンバーのリストに、メンバーが選択されます。


4. 「次へ」ボタンまたは「前へ」ボタンをクリックして、選択するメンバーが見つかるまで、メンバー間を移動します。

5 メンバーを見つける場合、「選択」ボタンをクリックして、メンバーを選択領域に移動します。


6 「OK」をクリックします。

▶ 「検索」タブを使用してメンバーを検索するには、次の手順に従います:

1 メンバー・セレクタで、「検索」タブを選択します。

2 「検索」テキスト・ボックスに、メンバー名またはワイルドカード文字を使用してメンバー名の一部を入力して、 をクリックします。

「結果」リストに、メンバーが自動的に選択されます。

3 **オプション:**  をクリックします。次のタスクを実行します:

1. 「名前」、「別名」または「プロパティ」を選択します。
2. 値を入力します。

ヒント: ワイルドカード文字を使用して、「メンバーの検索」ダイアログ・ボックスに値を入力できます。

3. 「OK」をクリックします。

4 メンバーを見つける場合、「選択」ボタンをクリックして、メンバーを選択領域に移動します。

5 「OK」をクリックします。

Planning アプリケーション内の共有メンバー

メンバーを共有すると、Planning アプリケーション内でロールアップ構造の入れ替えが行えます。共有メンバーを作成する前に、基本メンバーが存在する必要があります。基本メンバーに対して複数の共有メンバーを作成できます。上から下への表示位置では、基本メンバーはそれに対する共有メンバーより先に表示されます。

共有メンバーは勘定科目、エンティティ、シナリオ、バージョン、期間およびカスタム次元で作成できます。共有メンバーは基本メンバーと一部のプロパティ定

義(メンバー名、別名、基本通貨、メンバーに対して有効なプラン・タイプなど)を共有します。共有メンバーの Data Storage プロパティは共有または ShareData である必要があります。カスタム・プロパティ、カスタム・プロパティ値およびメンバー式は、共有メンバーには使用できません。

共有メンバーは、他の親メンバーには移動できません。共有メンバーを削除してから別の親メンバーの下に再作成する必要があります。共有メンバーは階層の最下位レベル(レベル 0)である必要があります、子を持つことはできません(基本メンバーはレベル 0 である必要がありません)。共有メンバーにデータを入力できますが、その値は基本メンバーに保管されます。共有メンバーの注意事項を次に示します:

- 基本メンバーは共有メンバーの親になることはできません。共有メンバーは次元階層のそれ以外の場所に存在できます。
- 共有メンバーおよびそれに対する基本メンバーは同じ名前を持つ必要があります。
- Performance Management Architect で、共有メンバーのデータ・ストレージを ShareData に設定する必要があります。そうしないと、アプリケーションが Planning に配置されたときに、共有メンバーが追加されません。

Oracle Hyperion Business Rules および Oracle Hyperion Smart View for Office のメンバー選択の次元階層で、共有メンバーは基本メンバーのように表示されます。Oracle Hyperion Business Rules の場合、それを明示するラベルはありません。したがって、「データのコピー」などのアクションで共有メンバーを選択できないことがあります。

動的時系列メンバーの設定

動的時系列(DTS)メンバーを使用して、期間累計データ(支出の四半期累計など)を表示するレポートを作成できます。DTS のメンバーは期間次元メンバーとともに使用されます。たとえば、四半期累計の値を計算するには、Q-T-D メンバーを使用可能にして世代番号 2 と関連付けます。これによって、Q-T-D の DTS メンバーを使用して、現在の月までの四半期の月ごとの値を計算できます。

定義済の DTS メンバーを次に示します:

- Y-T-D: 年次累計
- H-T-D: 累計
- S-T-D: 季節累計
- Q-T-D: 四半期累計
- P-T-D: 期間累計
- M-T-D: 月次累計
- W-T-D: 週次累計
- D-T-D: 日次累計

注意 Y-T-D メンバーまたは P-T-D メンバーを使用している場合、年次元または期間次元の名前を変更して、動的時系列で生成された名前の年および期間と競合しないようにする必要があります。Y-T-D を使用する前に年次元の名前を変更し、P-T-D を使用する前に期間の名前を変更します。その後で、この変更によって影響を受けるすべてのアプリケーション・アーティファクト(メンバー式、ビジネス・ルール、名前次元を参照するすべてのレポートなど)を更新します。

DTS メンバーは最高 8 レベルの期間累計レポートを提供します。使用するデータおよびデータベースのアウトラインによって、使用できるメンバーが決定されます。たとえば、データベースに 1 時間ごと、日ごと、週ごと、月ごと、四半期ごとおよび年ごとのデータがある場合、日次累計(D-T-D)、週次累計(W-T-D)、月次累計(M-T-D)、四半期累計(Q-T-D)および年次累計(Y-T-D)の情報をレポートできます。データベースに過去 5 年間の月ごとのデータがある場合、指定の年の年次累計(Y-T-D)および累計(H-T-D)の情報をレポートできます。データベースで季節ごとのデータを追跡している場合、四半期累計(P-T-D)または季節累計(S-T-D)の情報をレポートできます。

動的計算のために設定されたメンバーには(動的時系列計算で使用する予定の場合)、タイム・バランス・プロパティ(First、Average など)を割り当てないでください。これを割り当てた場合、勘定科目次元の親メンバーについて正しくない値が取得される可能性があります。詳細は、『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』を参照してください。

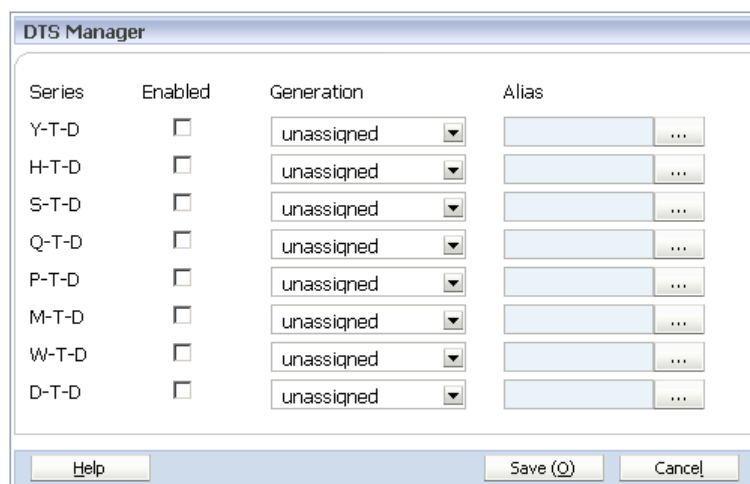
「DTS マネージャ」ダイアログ・ボックスを使用すると、次のオプションで DTS メンバーを設定できます。「DTS 使用可能」、「DTS 世代」および「別名」。(DTS メンバー以外に DTS プロパティを設定しても影響はありません。)それ以外の期間プロパティは DTS メンバーには適用されません。

Performance Management Architect での DTS メンバーの使用についての考慮事項を次に示します:

- DTS メンバーはレベル 0 のメンバーで、root メンバー(「期間」など)の子である必要があります。
- DTS メンバーの「期間タイプ」・プロパティは「DTS 期間」です。
- DTS として使用可能なメンバーには、「DTS 世代」を選択する必要があります。
- 「Y-T-D」を使用している場合、年次元の名前を年にはできません。
- 「P-T-D」を使用している場合、期間次元の名前を期間にはできません。
- DTS メンバーは期間次元階層の実際のメンバーとしては表示されません。Planning の場合、アプリケーションが配置されると Planning および Essbase で DTS メンバーが使用可能になります。

▶ DTS メンバーを設定するには:

- 1 次元ライブラリで期間次元を右クリックします。次に、「DTS マネージャ」を選択します。



- 2 「DTS マネージャ」ダイアログ・ボックスで、使用する DTS の時系列に対して「使用可能」を選択します。時系列は、「Y-T-D」、「H-T-D」、「S-T-D」、「Q-T-D」、「P-T-D」、「M-T-D」、「W-T-D」、または「D-T-D」です。
- 3 世代を選択します。
DTS メンバーを最上位の世代(次元ルート)に関連付けることはできません。
- 4 オプション: 次に別名が関連付けられている場合、別名を選択します。
- 5 「保存」をクリックします。

メンバー名の変更

次元ライブラリでメンバー名を変更できます。次のガイドラインに留意してください(アプリケーション・タイプごと):

すべてのアプリケーション

- システム・メンバー(大かっこ [] で名前が囲まれている)の名前は変更できません。

連結(Financial Management)

- Financial Management アプリケーションの場合、名前の変更は Performance Management Architect にのみ適用され、クラシック管理機能には適用されません。次のアーティファクトの名前を変更すると、Financial Management では自動更新されなくなります:
 - ルール
 - メンバー・リスト
 - Web データ入力フォーム
 - データ・グリッド
 - レポート
 - POV
- 期間、年および表示のメンバー名は、アプリケーションが初めて正常に配置された後は変更できません。

- デフォルト通貨のメンバー名が変更された場合、既存の Financial Management アプリケーションに対するアプリケーション・プロパティである「デフォルト通貨」も手動で更新する必要があります。

Planning

- 通貨メンバー名は変更できません。
- 年メンバー名は変更できません。

Profitability アプリケーションで初期配置後にメンバー名を変更した場合は、そのアプリケーションを再配置する必要があります。

注： アプリケーションを配置すると、ログ・ファイルには、名前を変更されたすべてのメンバーおよびすべてのアイテムは自動的に更新されないという注意が表示されます。

▶ メンバー名を変更するには:

- 1 メンバーを右クリックして「メンバー名の変更」を選択します。
「メンバー名の変更」ダイアログ・ボックスが表示されます。
- 2 名前を入力して、「OK」をクリックします。

メンバーの除去および削除

サブトピック

- [メンバーの除去](#)
- [メンバーの削除](#)
- [プランニング・メンバーの除外および削除](#)

共有メンバー、共有ライブラリ階層のメンバーなどのメンバーを除去および削除できます。

メンバーの除去

共有メンバー、共有ライブラリ階層のメンバーなどのメンバーを除去できます。ローカル・メンバーを除去すると、メンバーは孤立メンバーになります。ローカル・メンバーを除去すると、そのメンバーおよびそのすべての子孫が階層から除去され、階層構造を持たない個のメンバーとして孤立領域に移動されます。共有メンバーを除去すると、そのメンバーは代替階層から除去され、孤立メンバーにはなりません。別の階層構造内の同じメンバーは除去されません。

▶ メンバーを除去するには:

- 1 「次元ライブラリ」でメンバーを右クリックし、「メンバーの除去」を選択します。

注： 複数のメンバーを選択するには、[Ctrl]キーおよび[Shift]キーを使用します。

- 2 「はい」をクリックして確定します。

メンバーの削除

共有メンバー、共有ライブラリ階層のメンバーなどのメンバーを除去して、後で再利用できます。階層からメンバーを除去すると、孤立メンバーが作成されます。メンバーを除去すると、そのメンバーおよびそのすべての子孫が階層から除去され、階層構造を持たない個のメンバーとして孤立領域に移動されます。共有メンバーを除去すると、そのメンバーだけが孤立領域に移動されます。別の階層構造内の同じメンバーは除去されません。

共有メンバー、共有ライブラリ階層のメンバーなどのメンバーを削除できます。メンバーを削除すると、そのメンバーおよびそのすべての子孫が階層とすべてのビューから削除されます。共有メンバーを削除すると、そのメンバーだけが削除されます。別の階層構造内の同じメンバーは、削除されません。

▶ メンバーを削除するには:

- 1 「次元ライブラリ」でメンバーを右クリックし、「メンバーの削除」を選択します。

注： 削除するメンバーを複数選択するには、[Ctrl]キーおよび[Shift]キーを使用します。

- 2 「はい」をクリックして確定します。

プランニング・メンバーの除外および削除

Planning の各データ値は、次元メンバー・セットおよびプラン・タイプによって識別されます。Performance Management Architect アプリケーションからの次元メンバーの除外は、配置時には削除アクションに翻訳されます。したがって、次元メンバーを除外すると、再配置のときにデータを失うことになることがあります。

再配置のときには、Planning アプリケーションは Performance Management Architect からリフレッシュされ、アプリケーションで使用されるすべての次元は Performance Management Architect 内のそれぞれの現在の構造とともにリフレッシュされます。再配置では、変更されたかどうかにかかわらず、すべての次元およびそれらのメンバーがリフレッシュされます。

除外されたメンバーが他のどこか(データ・フォームでの選択など)で使用されているとき、それらの関連付けは除去されます。アプリケーションからメンバーを除外する前に、Planning 内の Planning の使用の表示機能を使用して、メンバーがアプリケーションで使用されているかどうかを判断し、次元メンバーの除外による影響を確認します。「使用の表示」機能の詳細は、『Oracle Hyperion Planning 管理者ガイド』を参照してください。

Performance Management Architect アプリケーションの次元からメンバーが削除され、そのアプリケーションが Planning に配置されている場合、そのメンバーは Planning のその次元から削除されます。これによって、そのメンバーに関連するサポート詳細、データおよび参照などが存在する場合はすべて削除されます。例:

- シナリオ次元、バージョン次元、またはエンティティ次元メンバーを除外すると、プランニング・ユニット、そのすべての履歴(データ)および注釈が削除されます。
- データ・フォームから参照されているメンバーを除外するとデータ・フォームの定義が変更され、ルート次元メンバーだけを使用することになります。これによって、アクセス権を失ったり、データ・フォームに表示するデータがなくなったりする可能性があります。
- エンティティによって参照されている通貨次元メンバーを除外すると、そのエンティティが変更され、Performance Management Architect のアプリケーションに対してデフォルト通貨を使用することになります。
- 三角換算法の通貨として参照されている通貨のメンバーを除外すると、その三角換算法が除去されます。

Performance Management Architect のアプリケーションから除外されたカスタム次元および属性次元は、配置中は Planning から削除されません。ただし、それらの次元メンバーが Performance Management Architect のアプリケーションから削除されると、配置中の Planning から削除されます。


エンティティの削除中のパフォーマンスを改善するには、root メンバーを除外することで、すべてのシナリオおよびバージョンに対するサブツリーのプランニング・ユニットを最初に除外します。エンティティのメンバーを削除した後で、ビジネス・ルール、レポートおよびデータ・フォームを更新して検証する必要があります。

注： データ検証ルールで使用されるメンバーを削除した場合、メンバーは Planning から削除されません。アプリケーションを Planning に配置した場合、ジョブ・コンソールには、配置がエラーで完了したことが表示され、メッセージ・ログにはメンバーが削除されていないことが表示されます。

メンバーの検索

次元ライブラリ内でメンバーを検索できます。

▶ メンバーを検索するには:


- 1 「メンバーの検索」ダイアログ・ボックスで、次のいずれかのアクションを行います:
 -  をクリックします。
 - 次元を右クリックして「メンバーの検索」をクリックします。
 - 「編集」、「検索」の順に選択します。
- 2 メンバーの検索方法を「名前」、「別名」、「プロパティ」から選択します。
- 3 値を入力します。

注： 英数字のみを入力します。ワイルドカード文字も入力できますが、他の特殊文字はサポートされません。

4 結果表示のオプションを次から選択します:

- リスト・ビュー- 「プロパティ・グリッド」を置換して「メンバーの検索」ペインのすべてのメンバーをリスト表示します。
- ナビゲーション・ボタン- 選択された「共有ライブラリ」ペインの最初のメンバーを表示します。標準ツールバーのナビゲーション・ボタンを使用すると、次のメンバーまたは前のメンバーに移動できます。

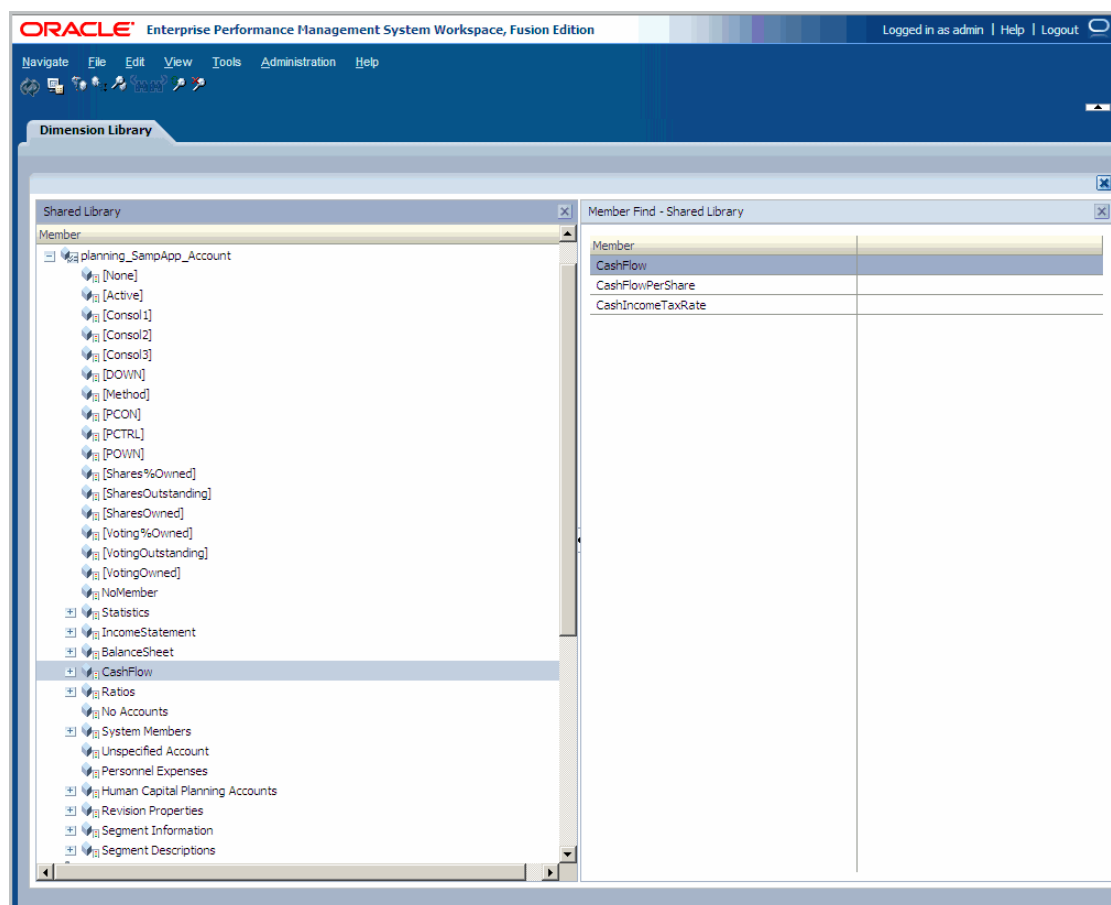
たとえば、ナビゲーション・ボタンを使用して「予算」というメンバーを検索すると、最初に検索されたメンバーが自動的に共有ライブラリで選択

され、次にをクリックすると次の「予算」メンバーを検索し、「次へ」をクリックし続けるとさらに次のメンバーを検索します。前のメンバーを

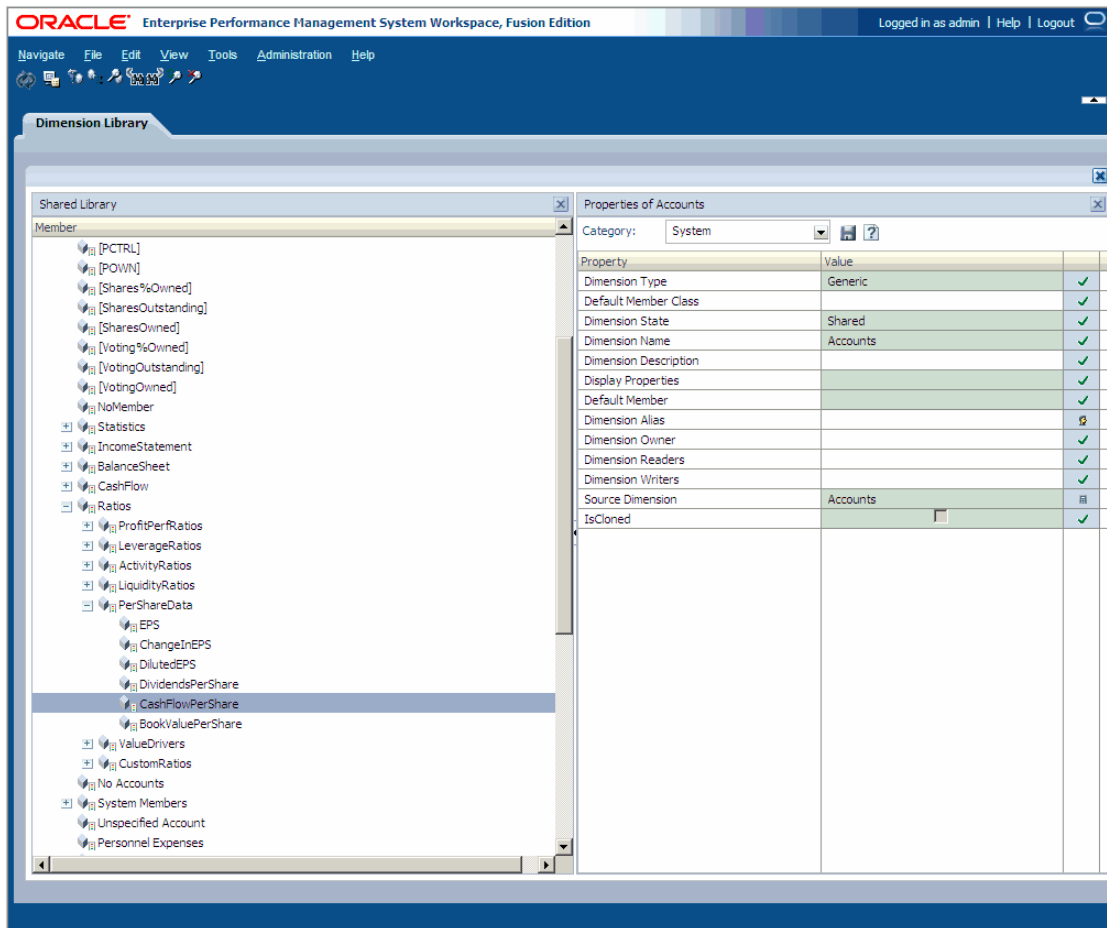
検索する場合は、をクリックします。





5 「OK」をクリックします。

「リスト・ビュー」を選択した場合、検索結果によりプロパティ・グリッドが置換されます。「メンバーの検索」ペインでメンバーをダブルクリックすると、階層内のメンバーの場所を特定できます。メンバーをダブルクリックすると、そのメンバーが含まれる次元が自動的に「共有ライブラリ」に展開されます。



「ナビゲーション・ボタン」オプションを選択すると、そのメンバーを含む次元が自動的に「共有ライブラリ」に展開されます。メンバーを選択すると、プロパティ・グリッドにそのプロパティが表示されます。



- 6 オプション: 検索を再適用するには、 をクリックします。前に入力した情報は「メンバーの検索」ダイアログ・ボックス保存されています。
- 7 オプション: 検索を消去するには、 をクリックします。
- 8 オプション: 検索結果に表示されるアーティファクトをリフレッシュするには、 をクリックします。
- 9 「メンバーの検索」を閉じるには、 をクリックします。

メンバーのソート

次元ライブラリ(「共有ライブラリ」および「アプリケーション」ペイン)で、メンバーをソートできます。

▶ メンバーをソートするには:

- 1 次元を右クリックします。次に、「メンバーのソート」を選択します。
- 2 ソート順を選択します(昇順または降順)。

親の縮小

Performance Management Architect では、大きなメンバー・ドメインがサポートされます。多数のメンバーがある次元を展開した場合、手動で上にスクロールして親を探し、[-]をクリックするかわりに、親を縮小できます。

- ▶ 親を縮小するには、メンバーを右クリックし、「親の縮小」を選択します。

子メンバーの順序変更

次元ライブラリで子の順序を変更できます。

- ▶ 子を順序変更するには:

- 1 「共有ライブラリ」または「アプリケーション」ペインで、順序を変更するメンバーを上または下にドラッグするか、子の順序を変更する次元を右クリックして、「子の順序変更」を選択します。

注： Profitability and Cost Management モデルの場合、NoMember を最新のメンバーとして表示するには、モデル内のすべてのビジネス次元について、メンバーのリストの順序を変更する必要があります。これを行わないと、モデルの検証に失敗します。この手順は、Alias、AllocationType、Measures、Periods、Scenarios、Years などのシステム次元には必要ありません。

ローカル次元で子の順序を変更する場合、次元ライブラリの「アプリケーション」ペインで順序を変更できます。ただし、次元が共有されている場合、「アプリケーション」ペインではなく「共有ライブラリ」ペインで順序を変更する必要があります。

- 2 順序を変更するには、次のアクションを行います:

- ソート順をダブルクリックし、新しい番号を入力します。
- 行を選択し、[F2]を押して新しい番号を入力します。
- 行を選択し、矢印を使用して順序を変更します。

- 3 新しい順序をプレビューするには、「プレビュー」をクリックします。

- 4 「保存」をクリックします。

孤立メンバーの管理

サブトピック

- [孤立メンバーの表示](#)
- [孤立メンバーの削除](#)

共有メンバー、共有ライブラリ階層のメンバーなどのメンバーを除去して、後で再利用できます。階層からメンバーを除去すると、孤立メンバーが作成されます。

メンバーを除去すると、そのメンバーおよびそのすべての子孫が階層から除去され、階層構造を持たない個のメンバーとして孤立領域に移動されます。共有メンバーを除去すると、そのメンバーだけが孤立領域に移動されます。別の階層構造内の同じメンバーは除去されません。

孤立メンバーを表示したり、孤立メンバーを完全に削除できます。

孤立メンバーの表示

- ▶ 孤立メンバーを表示するには、次元を右クリックして「孤立メンバー」を選択します。

孤立メンバーのリストによってプロパティ・グリッドが置換されます。

孤立メンバーの削除

- ▶ 孤立メンバーを削除するには、孤立メンバー・リストでメンバーを右クリックして「孤立メンバーの削除」を選択します。

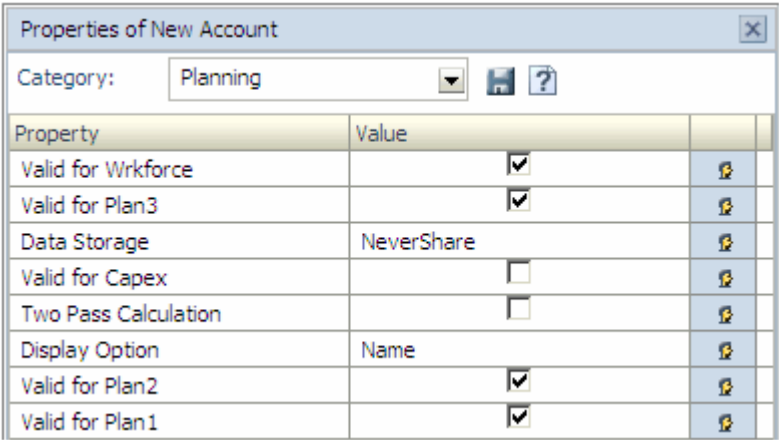
孤立メンバーは完全に削除されます。

ヒント： プロパティ・グリッドを再表示するには、「表示」、「プロパティ・グリッドの表示」の順に選択します。

プロパティ値の編集

次元メンバーが作成されたときには、プロパティおよびプロパティ値のデフォルト・セットが設定されます。プロパティはカテゴリごとに編成されます。

たとえば、カテゴリが **Planning** に設定されると、新規勘定科目次元に対する次のプロパティが表示されます：




Property	Value		
Valid for Wrkforce	<input checked="" type="checkbox"/>		
Valid for Plan3	<input checked="" type="checkbox"/>		
Data Storage	NeverShare		
Valid for Capex	<input type="checkbox"/>		
Two Pass Calculation	<input type="checkbox"/>		
Display Option	Name		
Valid for Plan2	<input checked="" type="checkbox"/>		
Valid for Plan1	<input checked="" type="checkbox"/>		

グローバル・プロパティと関係プロパティはどちらも、1つのメンバーのすべてのインスタンスに対して編集できます。83 ページの「[プロパティの変更](#)」を参照

してください。プロパティ、有効プロパティ値およびデフォルト値は、後続の章で定義されています:

- 第 11 章「Financial Management 次元の操作」
- 第 12 章「Planning 次元の操作」
- 第 13 章「Profitability and Cost Management プロパティの操作」
- 第 14 章「Essbase プロパティの操作」
- 第 15 章「統計およびシステム・プロパティの操作」


プロパティ値の形式には、次のとおりです:

- 文字列およびメモ - テキストを入力します。
- 整数 - 数値を入力します。
- ブール - TRUE で選択、FALSE で選択解除します。
- メンバー -  をクリックしてメンバーを選択します。
- ドロップ・ダウン・リスト - アイテムを選択します。
- 文字列マップ - Alias プロパティから別名次元にマップします。





▶ プロパティ値を編集するには:

- 1 編集するプロパティの「値」列のセルをダブルクリックします。
- 2 プロパティの値を変更します。

注: 値を変更すると、セルの色が変わります。

- 3  をクリックします。

プロパティ・エディタでは、各プロパティの右側にアイコンが表示されます。各アイコンは、次のようなプロパティの種類を示します:

-  デフォルト
-  ユーザー定義
-  計算結果
-  継承済

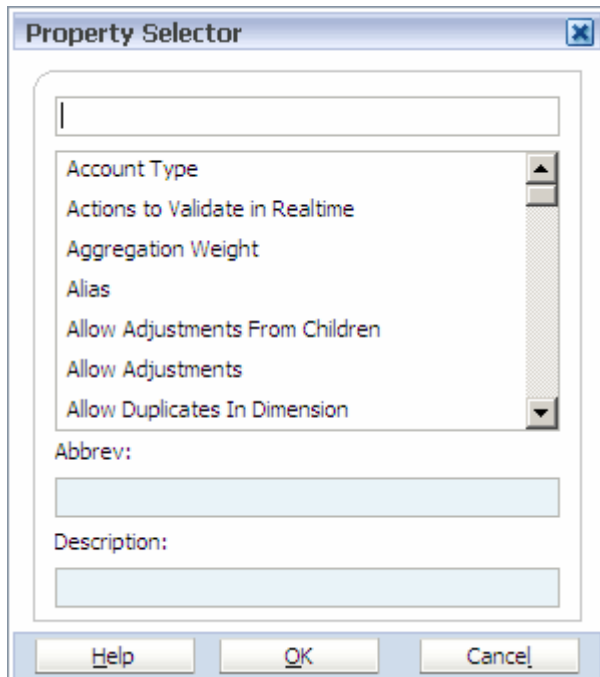
プロパティの検索

いくつかのセルはデフォルト・プロパティを表示できない場合があります。この場合、「プロパティ・セレクト」ダイアログ・ボックスを使用して、プロパティを選択できます。

▶ プロパティを検索するには:

- 1 プロパティ・グリッドで、空のセルを右クリックして「プロパティの検索」を選択します。

「プロパティ・セレクタ」ダイアログ・ボックスが表示されます。



- 2 プロパティを選択して、「OK」をクリックします。

ユーザー定義属性の操作

サブトピック

- [関連付けの作成](#)
- [ユーザー定義属性の作成](#)
- [ユーザー定義属性の削除](#)

計算スクリプト、メンバー式およびレポートで、ユーザー定義の属性(UDA - メンバーの特徴を記述した語句)を使用して、指定した UDA に関連するメンバーのリストを戻します。たとえば、製品次元に様々な製品メンバーが含まれている場合、「新製品」という UDA を作成すると新製品のみを対象に計算するようにできます。UDA の作成および使用の詳細は、『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』およびオンライン・ヘルプを参照してください。

UDA の作成は、次の 3 ステップのプロセスです:


- 1 1 つまたは複数の UDA 次元を作成します。89 ページの「ユーザー定義属性次元」を参照してください。
- 2 UDA プロパティおよび UDA 次元の間に次元の関連付けを作成します。
- 3 UDA のメンバーを作成します。

関連付けの作成

ユーザー定義の属性を作成する前に、UDA を作成する次元を UDA 次元に関連付ける必要があります。UDA 次元との関連付けを作成すると、複数の次元でその UDA を再利用できるようになります。

注：すでにこの次元を UDA 次元に関連付けている場合、UDA の作成前に次の手順を実行する必要はありません。

▶ 次元の関連付けを作成するには:

- 1 次元を展開してユーザー定義の属性を作成する対象のメンバーを選択します。
- 2 プロパティ・グリッドで、「UDA」をダブルクリックしてをクリックします。

注：次元を UDA 次元と関連付けていない場合、「関連付けの作成 - 警告」ダイアログ・ボックスが表示されます。ユーザー定義の属性をこのメンバーに追加するには、最初に次元の関連付けを作成する必要があります。


- 3 「はい」をクリックすると関連付けが作成されます。
「新規関連付けの作成」ダイアログ・ボックスが表示されます。
- 4 UDA プロパティを選択し、オプションで説明を追加して、UDA 次元を選択します。

ユーザー定義属性の作成

UDA を作成するときに、次のオプションの 1 つを使用できます:

- UDA 次元にメンバーを追加します。131 ページの「メンバーの作成」を参照してください。
- プロパティ・グリッドから「UDA 選択」ダイアログ・ボックスを使用して、メンバーを追加します。





▶ プロパティ・グリッド経由で UDA のメンバーを作成するには:

- 1 プロパティ・グリッドで、「UDA」をダブルクリックして
「UDA 選択」ダイアログ・ボックスが表示されます。
- 2 UDA を作成するには、「追加」をクリックします。
「新規 UDA メンバーの追加」ダイアログ・ボックスが表示されます。
- 3 UDA 名を入力します。
- 4 オプション: 複数の UDA を追加するには、次のアクションを行います:
 - 「複数のメンバーの作成」を選択します。
 - UDA 名をカンマ区切りで入力します。たとえば、「Spring Collection, Summer Collection, Fall Collection, Winter Collection」のようになります。この例では、4 個の新規 UDA が作成されます。

5 「OK」をクリックします。

「UDA 選択」ダイアログ・ボックスが表示されます。

6 次のいずれかのアクションを実行します:

- 左側の1つまたは複数のUDAメンバーを選択してをクリックします。
- すべてのUDAメンバーを追加するには、をクリックします。
- 「UDAメンバーの選択」リストから1つまたは複数のメンバーを除去するには、そのメンバーを選択してをクリックします。
- 「UDAメンバーの選択」リストからすべてのメンバーを除去するには、をクリックします。

7 「保存」をクリックします。

UDAがUDAプロパティに表示され、そのUDAプロパティとの関連付けを作成したUDA次元メンバーとして表示されます。

ユーザー定義属性の削除

▶ UDAを削除するには、次のいずれかのアクションを行います:

- 「UDA 選択」ダイアログ・ボックスで:
 1. 「UDA 選択」ダイアログ・ボックスで1つまたは複数のメンバーを選択します。
 2. 右クリックして、「メンバーの削除」を選択します。
- 「次元ライブラリ」で:
 1. 除去するメンバーが含まれているUDA次元を展開します。
 2. メンバーを右クリックして、「メンバーの削除」を選択します。
 3. 「はい」をクリックします。

他のメンバーによって参照されているUDAは削除できません。最初にプロパティ・グリッドから「UDA 選択」ダイアログ・ボックスを使用して、参照されているメンバーからUDAを除去する必要があります。

メンバー計算式の操作

サブトピック

- [式の検証](#)
- [数式の操作](#)

Planning、Profitability、Essbase (ASO)およびEssbase (BSO)の各カテゴリのプロパティ・グリッドでメンバー式を定義できます。メンバー式は演算子、計算関数、次元名およびメンバー名、および数値定数を組み合わせて、メンバーに対する計算を実行します。メンバー式には、次のものも含めることができます:


- Essbase の式で許可されている演算子のタイプ、関数、メンバー名、UDA、その他(『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』およびオンライン・ヘルプを参照)
- データベースのリフレッシュ時に式または値に展開される、定義済の数式(スマート・リストの値など)

▶ メンバー計算式を定義するには:

- 1 式を追加または変更する次元メンバーを選択します。

注: Member Formula プロパティは、Planning、Essbase (ASO)および Essbase (BSO)の各カテゴリで表示されます。

- 2 プロパティ・グリッドで、「メンバー式」をダブルクリックします。

- 3  をクリックします。

「メモ・エディタ」ダイアログ・ボックスが表示されます。

Essbase の式の構文、ルールおよび使用の詳細は、『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』を参照してください。

- 4 式のテキストを折り返すには、「右端で折り返す」をクリックします。


- 5 「OK」をクリックします。

式の検証

アプリケーションを配置した後にのみ、メンバー式を検証できます。

▶ メンバー式を検証するには:

- 1 検証するメンバー式をダブルクリックします。

- 2  をクリックします。

「メモ・エディタ」ダイアログ・ボックスが表示されます。

- 3 「検証」をクリックします。

- 4 必要に応じて、式を編集します。終了したら、「OK」をクリックします。

数式の操作


メンバー式は、データベースがリフレッシュされるときに検証され Essbase コード・ブロック内に展開される Essbase ネイティブの式および数式をサポートします。これらの式では、スマート・リストを名前指定し、それを計算中に数値によって置換できます。

定義済の数式をメンバー式に含められ、メモ・エディタの「検証」ボタンを使用してアプリケーションの配置後にそれをテストできます。また、Oracle の Hyperion Application Link または Shared Services を使用して、それらをロードできます。

次元のアウトラインに依存するすべてのビジネス・ルールおよび計算スクリプトを更新しなくても、アウトラインを更新できます。計算がアウトラインの仕様か

ら独立します。数式を使用しても、データベースをリフレッシュするときのみ実行されるため、パフォーマンスは低下しません。

▶ メンバー計算式で数式を使うには:

- 1 式を追加または変更する次元メンバーを選択します。
- 2 「メンバー式」をダブルクリックして、
- 3 「メモ・エディタ」ダイアログ・ボックスで、メンバーに対する式を定義します。
メンバー式には数式および Essbase ネイティブの式を含めることができます。
Essbase ネイティブの式の構文、ルールおよび使用の詳細は、『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』を参照してください。
Planning には定義済の数式があり、数式内でそれらを使用できます。独自の数式を編集または作成できません。152 ページの「数式」を参照してください。
- 4 「OK」をクリックします。

前提条件

メンバー式で数式を使用する前に、Essbase の式、計算およびアプリケーションのアウトラインを理解する必要があります。『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』を参照してください。

数式

数式には、定義済の変数および関数を含められます。

表 13 数式内の変数

変数	説明
OpenInputValueBlock	マルチ通貨アプリケーションの場合に IF 文を生成し、単一通貨のアプリケーションの場合には空の文字列を生成します。CloseInputValueBlock とともに使用されます。
CloseInputValueBlock	マルチ通貨アプリケーションの場合に End IF 文を生成し、単一通貨のアプリケーションの場合には空の文字列を生成します。OpenInputValueBlock とともに使用されます。
NumberOfPeriodsInYear	年内の期間を戻します。
NumberOfYears	アプリケーション内の年数を戻します。

表 14 数式内の関数

関数	説明
Dimension(dimTag)	定義済の次元の名前を戻します。dimtags の値は次のとおりです： <ul style="list-style-type: none"> ● DIM_NAME_PERIOD ● DIM_NAME_YEAR ● DIM_NAME_ACCOUNT ● DIM_NAME_ENTITY ● DIM_NAME_SCENARIO ● DIM_NAME_VERSION ● DIM_NAME_CURRENCY
Period(periodName)	指定した期間を戻します。periodName の選択肢は次のとおりです： <ul style="list-style-type: none"> ● FIRST_QTR_PERIOD ● SECOND_QTR_PERIOD ● THIRD_QTR_PERIOD ● FOURTH_QTR_PERIOD ● FIRST_PERIOD ● LAST_PERIOD
CrossRef(accountName)	勘定科目の相互参照を生成します。
CrossRef(accountName, prefix)	勘定科目の相互参照を生成します。勘定科目名には定義した接頭辞が含まれます。デフォルトの接頭辞は No で、空白をあけて勘定科目名が続きます。たとえば、「No Salary」とします。
getCalendarTPIIndex()	期間のインデックスを戻す式を生成します。暦年に基づくインデックスです。
getFiscalTPIIndex()	期間のインデックスを戻す式を生成します。年度に基づくインデックスです。
CYTD(memberName)	メンバー用に暦年の通算日数を計算する式を生成します。
CYTD(memberName, caTPIIndexName, fiscalTPIIndexName)	メンバー用に暦年の通算日数を計算する式と、暦年および会計年度に基づいた期間のインデックスを生成します。メンバーの名前が変更されたときに使用します。デフォルトのメンバー名は「暦期間-インデックス」および「会計期間-インデックス」です。

構文

数式は関数および変数をサポートします。数式を作成するときは、次に示す関数および変数の構文ルールに従います：

- 変数またはプロパティは大かっこ ([]) で囲みます。大かっこを使用しないと、その変数はネイティブの変数として処理されます。
- メンバー名は、二重引用符で囲みます(たとえば、"Account 200")。
- 変数では大文字と小文字は区別されますが、余計なスペースや、アンダースコア(_)のような文字は使用できません。
- 式には他の関数へのサブコールも含められます。
- 数字が必要な箇所には、テキストは入力できません。

- アウトラインの順序は、メンバー式では重要です。たとえば、まだ計算されていない値を参照できません。

スマート・リストの値を変数として含める

数式"Status"=[Status.Departed]などのように、数式内の変数としてスマート・リストを含められます。

"Status"はメンバー名で、Status はスマート・リストの次元名、Departed はスマート・リストのメンバー名です。Departed に対するスマート・リストの値が2の場合、Essbase はメンバー式内の Status.Departed を2で置換します(Planning はスマート・リストをテキストとして処理し、Essbase はスマート・リストを数値として処理します)。Departed に対するスマート・リストの値が2の場合、Essbase は計算では Status.Departed を2で置換し、データベースには2を保管します。

スマート・リストは、次のフォーマットで記述します。

[SmartListDimensionName.SmartListMemberName]

一般的なエラーの理解

構文のルールには慎重に従います。数式の構文にエラーが含まれている場合、アプリケーションを配置したときにエラー・メッセージが戻されます。エラー・メッセージの情報を取得するには、Planning アプリケーション・サーバー・ログを表示します。最も一般的なエラー・メッセージは、「実行できませんでした」です。これは、式に対して不適切なパラメータを使用した場合に発生します。次のようなアクションが、「実行できませんでした」エラー・メッセージの原因になります:

- 数式のパラメータの個数が間違っている
- メンバー名、関数、または変数名の綴りが間違っている
- メンバー名が引用符で囲まれていない
- 文字列が必要な場所に数字が含まれている

『Oracle Hyperion Planning 管理者ガイド』を参照してください。

アプリケーションのメンバーの操作

アプリケーションを作成するときに、アプリケーションに一定のメンバーを追加したり、メンバーを除外したり、基本メンバーを設定できます。アプリケーションの作成の詳細は、[第6章「アプリケーションの構築」](#)を参照してください。

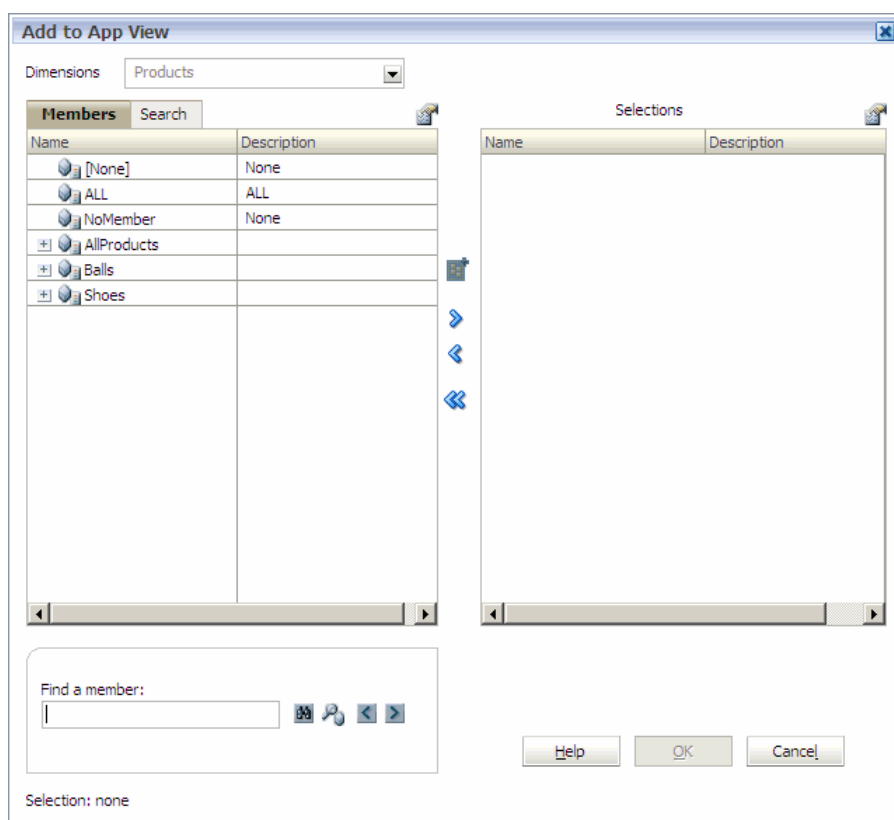
アプリケーションへのメンバーの追加

次元のサブセットを使用すると、アプリケーションに表示される結果を絞り込めます。たとえば、製品や地域など、アプリケーションの特定のメンバーのみを表示する場合があります。特定のメンバーのみを追加すると、アプリケーションの結果はそれらのメンバーに絞り込まれます。これは、膨大なメンバーが含まれている次元の一部のメンバーのみを表示する場合に、非常に役に立ちます。

▶ アプリケーションにメンバーを追加するには:

- 1 共有ライブラリで、次元を右クリックして「アプリケーション・ビューに追加」を選択します。


「アプリケーション・ビューに追加」ダイアログ・ボックスが表示されます。



メンバー・セレクトタによって、次元メンバーをフィルタできます。「+」および「-」を使用すると、次元内のメンバーを展開および縮小できます。



「アプリケーション・ビューに追加」ダイアログ・ボックスには2つのペインがあり、左側には次元のすべてのメンバーが表示され、アプリケーションに対して選択されたメンバーは右側に表示されます。その次元で使用可能なすべてのメンバーが表示される左ペインには、メンバー名および簡単な説明(ある場合)が表示されます。選択内容が表示される右ペインには、メンバー名および選択タイプが表示されます。新規アプリケーションの場合は、デフォルトですべてのメンバーが選択されています。

- 2 オプション: それぞれのペインの上の「メニュー」ボタンを使用して、メンバー・セレクトタの列を変更します。例:


- 左ペインで、、「表示」、「カウント」の順に選択します。


名前および説明に加えてカウント列が表示されます。カウント列には、現在の次元の子メンバーの数が表示されます。これは、ツリーの分岐を展開するために必要な時間を示唆する便利なインディケータになります。

- カウント列を除去するには、、「表示」、「カウント」の順に選択します。

- 3 展開したメンバーを縮小するには、をクリックして、「すべて縮小」を選択します。
- 4 左側の使用可能なメンバーのリストで、フィルタ条件にするメンバーを選択して をクリックします。

ヒント： メンバーが見つからない場合、メンバー・セレクタでメンバーを検索できます。135 ページの「メンバー・セレクタを使用したメンバーの検索」を参照してください。

- 5 フィルタ条件のメンバーのリストからメンバーを選択解除するには、をクリックします。
- 6 フィルタへのメンバーの追加を続行します。(アプリケーションのフィルタ条件になるメンバーが右側に表示されます。)

ヒント： 選択したリストのすべてのメンバーの選択を解除するには、をクリックします。


- 7 終了したら、「OK」をクリックします。

上位メンバーの選択

上位メンバーの選択機能は、アプリケーション・ビューに追加機能に似ています。154 ページの「アプリケーションへのメンバーの追加」の説明に従ってメンバーをアプリケーションに追加すると、必要なメンバーのみが共有ライブラリからアプリケーションに追加されます。一方、上位メンバーを選択すると次元全体がアプリケーションに追加されるため、1つ以上の上位メンバーを選択することでメンバーを除外できます。たとえば、すべての地域に地理的な階層を持つエンティティ次元がある場合に、国固有の構造のみを含むようにアプリケーションを設定するとします。アプリケーションの共有次元では、ドイツなどの国を上位メンバーとして選択できます。同様に、機能的な階層から他の上位メンバーを選択できます。上位メンバーを選択する場合は、メンバーのみか、子またはすべての子孫を含むかどうかも指定できます。

注： 上位メンバーは最上位レベルにある必要はありません。子メンバーを上位メンバーとして選択でき、共有ライブラリに子を追加したり子を変更したりすると、アプリケーション内に反映されます。

▶ 上位メンバーを選択するには:

- 1 アプリケーションで、共有次元を右クリックし、「上位メンバーの選択」を選択します。
「メンバー・セレクタ」ダイアログ・ボックスが表示されます。
- 2 左でメンバーを選択し、をクリックしてメンバーを選択領域に移動します。
- 3 「OK」をクリックします。

ヒント： 選択内容を変更するには、共有次元を右クリックし、「上位メンバーの選択」をもう一度選択します。

メンバーの除外

アプリケーションで、次元が共有されている場合に次元からメンバーを除外できます。次元に対するメンバー・フィルタを定義したときにメンバーを選択に含めた場合、そのメンバーを除外できます。

メンバーを除外すると、そのメンバーがアプリケーションには表示されなくなるように自動的にプロパティが設定されます。メンバーを除外しても、そのメンバーおよびその子孫に対して設定された既存のプロパティ値は除去されません。後でそのメンバーをアプリケーションに追加すると、除外の直前と同様にプロパティ値は保持されています。

Planning および Financial Management 製品がインストールされていて、Planning アプリケーションを作成した場合、不要な Financial Management システム・メンバーを除外する必要があります。[None]や[Active]などの大かっこが表示されているすべての Financial Management システム・メンバーを選択して、除外します。たとえば、勘定科目次元で、Planning アプリケーションを作成するときは、「勘定科目」の下の「負債」および「無形資産」以外のすべてのアイテムを除外します。

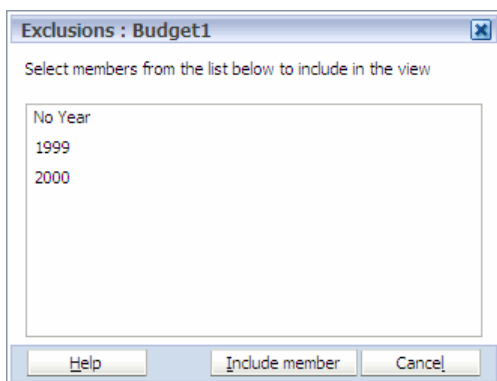
- ▶ アプリケーションでメンバーを除外するには、除外するメンバーを右クリックして「メンバーを除外」を選択します。

除外したメンバーの表示

- ▶ 除外したメンバーを表示するには:

- 1 アプリケーションで、次元を右クリックして「除外したメンバーの表示」を選択します。

「除外」ダイアログ・ボックスが表示されます。



- 2 アプリケーションで除外されたメンバーを表示するには、そのメンバーを選択して「メンバーを含む」を選択します。表示しない場合は「取消し」をクリックします。

除外されたメンバーがアプリケーションで表示されます。

基本メンバーの設定

基本メンバーを設定すると、共有次元の親のすべての子を除外できます。たとえば、エンティティのロール・アップで、「ヨーロッパ」には「イタリア」および「英国」という子があるとします。「ヨーロッパ」をこのロール・アップの基本にすると、「イタリア」および「英国」は表示されなくなります。

注： 基本メンバーの設定機能は、共有メンバーとは関係ありません。

- ▶ 基本メンバーを設定するには、アプリケーションで共有次元のメンバーを右クリックし、「基本メンバーとして設定」を選択します。
- ▶ 基本メンバーの設定を除去するには、その基本メンバーを右クリックして「子孫の使用可能」を選択します。

この章の内容

アプリケーションについて.....	159
アプリケーション作成のワークフロー.....	159
前提条件.....	161
連結アプリケーションの作成.....	161
Planning アプリケーションの作成.....	169
標準の Profitability and Cost Management アプリケーションの作成.....	185
詳細 Profitability and Cost Management アプリケーションの作成.....	195
Essbase アプリケーションの作成.....	208
汎用アプリケーションの作成.....	215
共通アプリケーション・タスク.....	216

アプリケーションについて

アプリケーション・ライブラリによって、Performance Management Architect アプリケーションを表示、作成、検証および Hyperion 財務アプリケーションに配置できます。アプリケーションには、財務管理および Planning の要件を満たすための次元および次元属性が含まれます。各アプリケーションには、勘定科目、エンティティ、シナリオおよびその他の次元要素が含まれています。

アプリケーション作成者が作成できるアプリケーションの数には制限がありません。たとえば、次の目的のアプリケーションを作成できます：

- 原価中心点ごとの、営業経費の予算計上
 - 製品ラインごとの、収益プラン作成
 - 税金データのレポート
 - セキュリティおよび取引手数料のデータのレポート
- ▶ アプリケーション・ライブラリを開くには、「ナビゲート」、「管理」、「アプリケーション・ライブラリ」の順に選択します。

アプリケーション作成のワークフロー

次の各項では、様々なタイプのアプリケーションの作成について説明します：

- 連結 - 161 ページの「[連結アプリケーションの作成](#)」を参照してください。

- [Planning](#) - 169 ページの「[Planning アプリケーションの作成](#)」を参照してください。
- [Profitability](#) - 185 ページの「[標準の Profitability and Cost Management アプリケーションの作成](#)」を参照してください。
- [Essbase](#) - 208 ページの「[Essbase アプリケーションの作成](#)」を参照してください。
- [汎用](#) - 215 ページの「[汎用アプリケーションの作成](#)」を参照してください。

前提条件については、[161 ページの「前提条件」](#)を参照してください。

手動のワークフロー

手動方式では、次の7ステップの手順で、[ブランク・アプリケーション](#)を作成してそのアプリケーションを定義できます:

1. [アプリケーション・ウィザード](#)で[アプリケーション・タイプ](#)を選択し、「[ブランク・アプリケーションの作成](#)」を選択します。
2. [共有ライブラリ](#)から[アプリケーション](#)へ次元(または次元階層のサブセット)をドラッグするか、[アプリケーション](#)にローカル次元を作成します。
3. すべての次元の関連付けをアクティブ化します。
4. 次元、[アプリケーション](#)およびメンバーのプロパティを変更します([アプリケーション・プロパティ](#)が[共有ライブラリ](#)のプロパティと異なる場合のみ)。
5. [アプリケーション](#)を検証します。
6. [アプリケーション](#)を Hyperion の製品環境に配置します。
7. [アクセス権限](#)を定義します。『[Oracle Hyperion Enterprise Performance Management System ユーザーおよび役割セキュリティ・ガイド](#)』を参照してください。

アプリケーション・ウィザードのワークフロー

[アプリケーション・ウィザード](#)では、[アプリケーション](#)の作成が簡単になるように、次の各画面で手順を進めます:

- [アプリケーション・タイプ](#) - 名前を入力し、[タイプ](#)を選択して、説明を入力します。[161 ページの「アプリケーション・タイプの選択」](#)を参照してください。[アプリケーション・タイプ](#)に従って、追加のオプションが表示されます。
- [次元の選択](#) - [次元](#)を選択または作成できます。[163 ページの「次元の選択」](#)を参照してください。
- [アプリケーション設定](#) - [次元](#)の関連付け、[次元別名](#)の設定およびその他の[アプリケーション・プロパティ](#)の変更を行います。[166 ページの「アプリケーション設定の変更」](#)を参照してください。

[次元ライブラリ](#)または[アプリケーション・ライブラリ](#)で「[ファイル](#)」、「[新規](#)」、「[アプリケーション](#)」の順に選択して、[アプリケーション・ウィザード](#)にアクセスできます。

前提条件

アプリケーションを作成するには、Hyperion 製品(Financial Management、Profitability and Cost Management、Planning、Essbase (ASO)または Essbase (BSO))に対するアプリケーション作成者のグローバル役割が必要です。また、共有次元を使用するアプリケーションを作成するには、次元エディタの役割も必要です。Performance Management Architect の役割の詳細は、[28 ページの「セキュリティ」](#)を参照してください。グローバル役割の作成または割当ての詳細は、『Oracle Hyperion Enterprise Performance Management System ユーザーおよび役割セキュリティ・ガイド』を参照してください。

アプリケーションを作成する前に、次のタスクを実行します：

- Shared Services をインストールおよび構成します。
- アプリケーションの配置先として予定している製品を構成します。(構成には製品インスタンスおよびデータ・ソースの作成も含まれます。)
- オプション: Performance Management Architect で、プロファイルを作成して共有ライブラリに次元をロードします。[第3章「メタデータのインポート」](#)を参照してください。

注： すべてのアプリケーション・タイプについて、アプリケーションに"Master"という名前は付けられません。アプリケーション名"Master"は、Performance Management Architect の予約名です。誤ってアプリケーションに"Master"という名前を付けると、アプリケーションが存在することを示すエラー・メッセージが表示されます。

連結アプリケーションの作成

アプリケーション・ウィザードを使用して、連結アプリケーションを作成できます。次の各項で、連結アプリケーションの作成について順を追って説明します：

- [161 ページの「アプリケーション・タイプの選択」](#)
- [163 ページの「次元の選択」](#)
- [166 ページの「アプリケーション設定の変更」](#)
- [168 ページの「検証および配置」](#)

アプリケーション・タイプの選択

次の手順では、連結および課税規定のアプリケーションの作成について説明します。

▶ 連結アプリケーションを作成するには：

- 1 「ファイル」>「新規」>「アプリケーション」を選択します
- 2 アプリケーション名を入力します。

アプリケーション名には、特殊文字または空白を含めることはできず、HFM、HSV、HSX、または数字で始めることはできません。アプリケーション名の長さは 10 文字を超えることはできません。アプリケーション名に ASCII 以外の文字が含まれ、6 文字から 10 文字の長さである場合、アプリケーションの配置時にエラーが発生します。

3 「アプリケーション・タイプ」に、次のいずれかのオプションを選択します:

- 標準的な連結アプリケーションを作成する場合、「標準集計」を選択します。
- 税引当専用のアプリケーションを作成する場合、「税引当」を選択します。税引当アプリケーションでは、US GAAP と IFRS の両方に基づいて企業の税引当について収集、計算およびレポートを行うことができます。

注: Performance Management Architect で税引当アプリケーションを作成および検証し、Financial Management に配置できます。税引当アプリケーションは、Financial Management の今後のリリースで、開いたり、操作することができます。

4 説明を入力します。

説明には特殊文字が含まれ、256 文字を超えている可能性があります。

5 オプション: 標準的な連結アプリケーションを作成する場合、「ブランク・アプリケーションの作成」を選択してブランク・アプリケーションを作成し、次元ライブラリを使用して次元をアプリケーションにドラッグします。165 ページの「手動での次元の追加」を参照してください。

注: 税引当アプリケーションを作成する場合は、ブランク・アプリケーションを作成できません。

6 オプション: 「ローカル次元の自動作成」を選択します。

「ローカル次元の自動作成」を選択すると、アプリケーションに必要なすべての次元について新規次元が自動的に作成されます。各新規次元の次元名は、次元タイプにカッコで囲んだ(新規)が付いた名前になります。ローカル次元を自動的に作成すると、アプリケーションの作成に必要な次元が追加されるため、時間を節約できます。

7 次のいずれかのアクションを行います:

- アプリケーション・ウィザードを使用している場合は、「次へ」をクリックします。
「次元の選択」画面が表示されます。163 ページの「次元の選択」を参照してください。
- 手動でアプリケーションを作成している場合は、「終了」をクリックします。

注: 税引当アプリケーションを作成する場合、「終了」ボタンは無効になります。「次へ」をクリックして、次元にメタデータを移入します。アプリケーションを検証し、必要な変更を行うことも、「終了」をクリックすることもできます。

次元ライブラリが表示されます。165 ページの「手動での次元の追加」を参照してください。

次元の選択

アプリケーション作成の次の手順は、アプリケーションに次元を追加することです。連結アプリケーションには次の次元インスタンスが含まれる必要があります:

- 1つのシナリオ
- 1つの年
- 1つのビュー
- 1つの期間
- 1つのエンティティ
- 1つの値
- 1つの勘定科目
- 1つの ICP
- 2つの汎用(通貨に使用プロパティの値が'To'の次元と通貨に使用プロパティの値が'From'の次元が1つずつ必要です。)
- 1つのセキュリティ・クラス(オプション)
- 1つの別名(オプション)
別名次元に含まれるメンバー数は10までです。
- 1つの通貨
- 1つの連結メソッド

注: アプリケーション・ウィザードを使用してアプリケーションを作成すると、必要なすべての次元が自動的に「次元の選択」画面に表示されます。

アプリケーション・ウィザードを使用している場合は、163 ページの「ウィザードを使用した次元の追加」を参照してください。空のアプリケーションを作成した場合は、165 ページの「手動での次元の追加」を参照してください。

ウィザードを使用した次元の追加

アプリケーション・ウィザードを使用する場合、標準的な連結および税引当のアプリケーション用のすべての必須次元は、自動的に表示されます。正確な一致がある場合は、その次元タイプの次元列に自動的に入力されます。次元タイプは自動的にカテゴリ化されその見出しが暗く表示されます。たとえば、プライマリ次元、カスタム次元およびその他の次元などです。プライマリ次元は、必須です。

「ローカル次元の自動作成」を選択した場合、必要な各次元に対して新規ローカル次元が作成されます。各新規次元の名前は、次元タイプにかっこで囲まれた(New)が付いたものになります。たとえば、Account (New)となります。

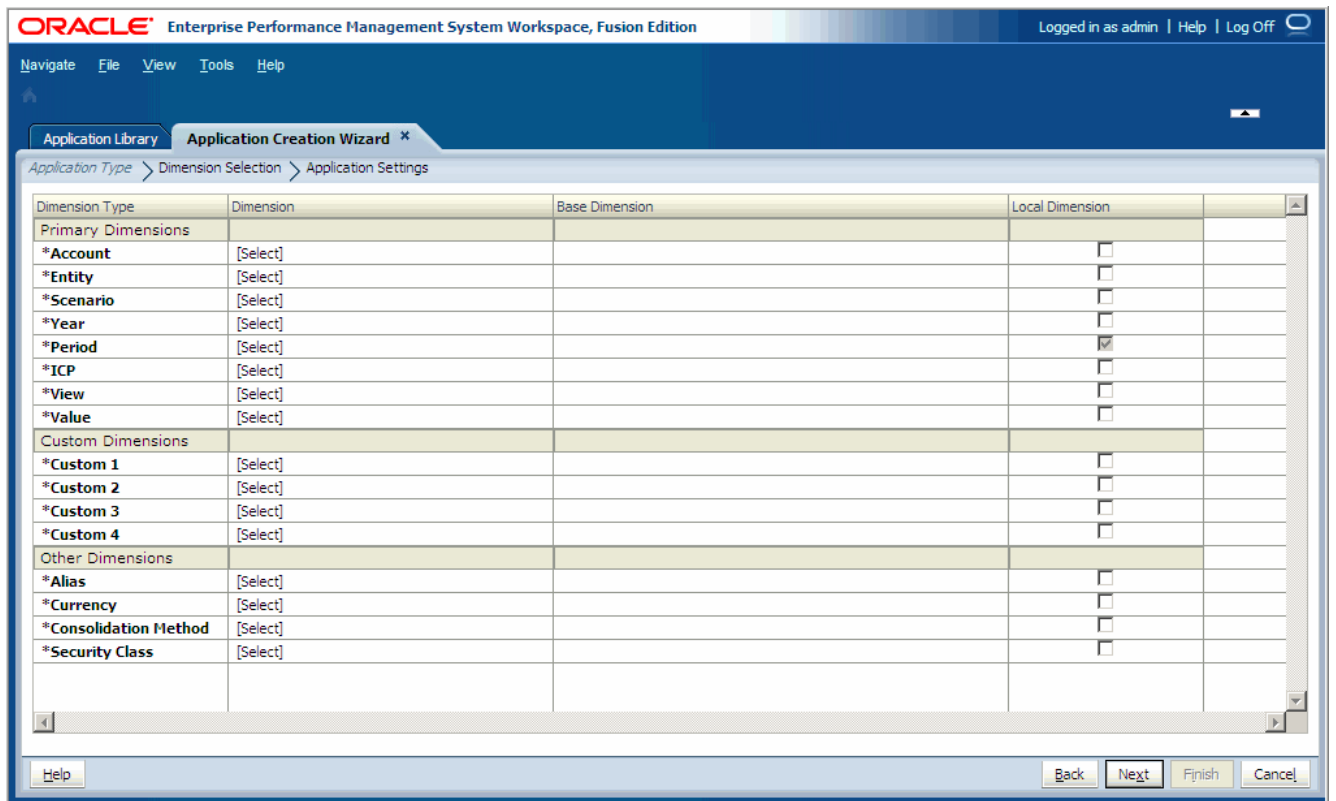
▶ 次元を定義するには:

1 次元に次元タイプをマップするには、「次元」列で「選択」をクリックします。

必須の次元タイプが次元ライブラリの次元と一致する場合、その次元名が「次元」列に表示されます。

2 次元を選択します。

ドロップ・ダウン・リストに表示される次元は次元のタイプにマップされます。たとえば、ある次元を勘定科目次元タイプにマップしている場合は、勘定科目次元のみがリストに表示されます。



場合によっては、新規次元を作成することがあります。

3 オプション: 新規次元を作成します。新規次元を作成するには:

1. 「次元」ドロップダウン矢印を使用して、「新規次元の作成」を選択します。

「新規次元の追加」ダイアログ・ボックスが表示されます。

2. 次元の名前および説明を入力します。次元を「次元タイプ」列にマップする次元タイプに従って、タイプが自動的に選択されます。
3. 「OK」をクリックします。

注: アプリケーション・ウィザードで次元を作成する場合、その次元は常にローカル次元になり、アプリケーション・ウィザードで共有できません。次元を共有する場合は、次元ライブラリを使用する必要があります。82 ページの「共有次元およびローカル次元の理解」を参照してください。

- 4 プライマリ次元、カスタム次元およびその他のすべての次元に対する新規次元の選択、または作成を続けます。
- 5 次元をローカルにする場合は、各行の末尾のローカル・チェック・ボックスを選択します。

注： ウィザードの最初の画面で新規ローカル次元を自動的に作成した場合、その次元を共有に変更できません。

共有次元およびローカル次元の詳細は、[82 ページの「共有次元およびローカル次元の理解」](#)を参照してください。

注： 次の画面に移動する前に、すべての次元を、次元または[該当なし]にマップする必要があります。

- 6 「次へ」をクリックします。
「アプリケーション設定」画面が表示されます。

手動での次元の追加

ブランク・アプリケーションを作成する場合は、次元ライブラリを使用して次元を選択します。次元ライブラリには、次の3つのペインがあります：

- **共有ライブラリ** - 左側に表示されます。共有ライブラリで現在使用可能なすべての次元が表示されます。
共有ライブラリに次元をロードする方法の詳細は、[第3章「メタデータのインポート」](#)を参照してください。
- **アプリケーション** - 中央部に表示されます。展開されると現在のアプリケーションのすべての次元の名前をリスト表示します。
- **プロパティ・グリッド** - 右側に表示されます。選択した次元またはメンバーのすべてのプロパティを表示します。
プロパティを編集する方法の詳細は、[146 ページの「プロパティ値の編集」](#)を参照してください。

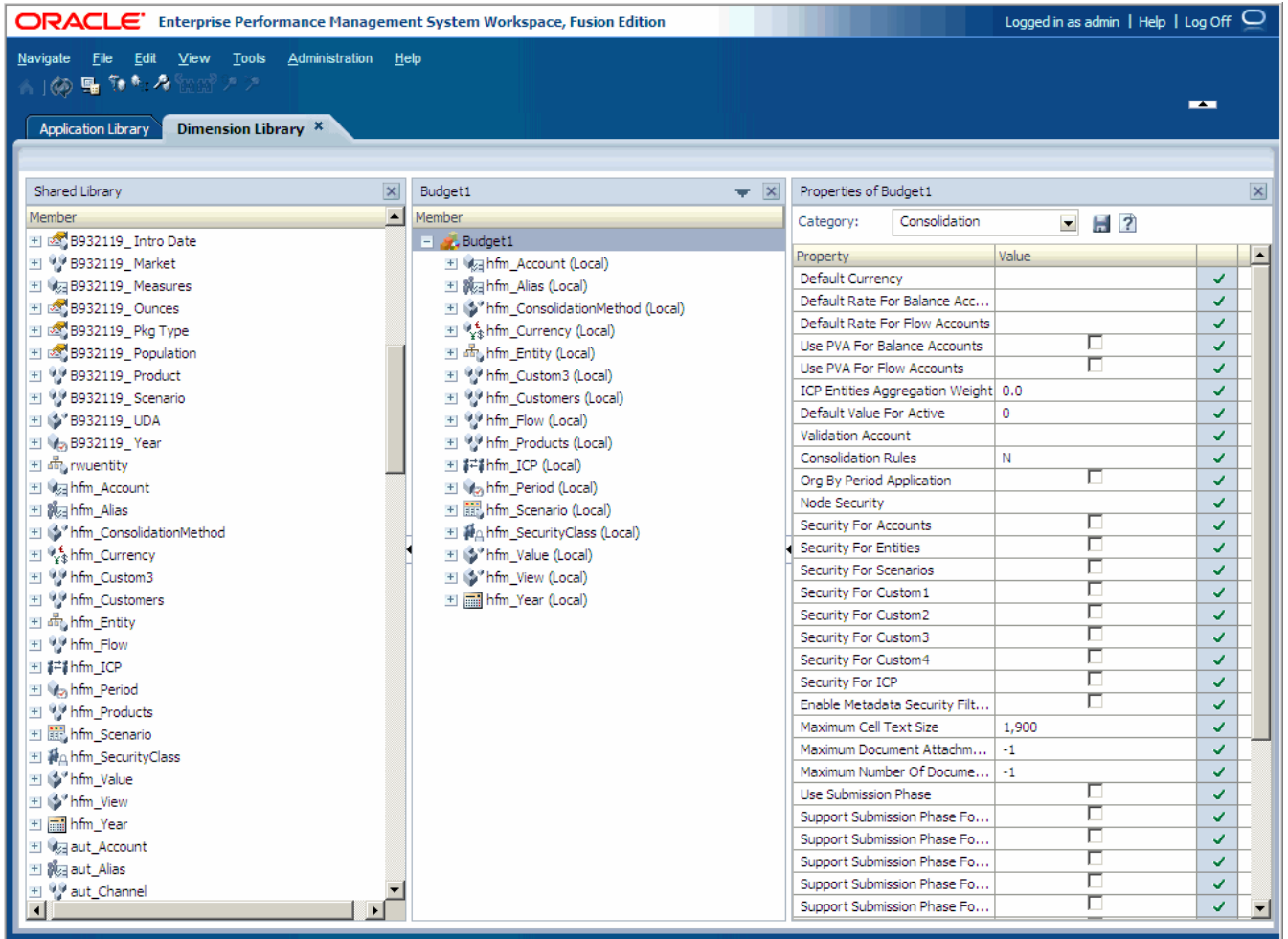
▶ アプリケーションに次元を追加するには：


- 1 共有ライブラリからアプリケーションに次元をドラッグします。
「次元のコピー」ダイアログ・ボックスが表示されます。
- 2 「ローカル次元」または「共有次元」を選択します。

ヒント： アプリケーションにメンバーのみを追加するには、共有ライブラリで次元を右クリックして、「アプリケーション・ビューに追加」を選択します。[154 ページの「アプリケーションへのメンバーの追加」](#)を参照してください。

共有次元およびローカル次元の詳細は、[82 ページの「共有次元およびローカル次元の理解」](#)を参照してください。

展開されたアプリケーションはすべての次元をリスト表示します。



ヒント: 共有ライブラリにメンバーを追加してアプリケーションに次元を含めた場合、 をクリックすると新規メンバーがアプリケーションに表示されます。

アプリケーション設定の変更

アプリケーション作成の次の手順は、アプリケーション・プロパティおよび他のアプリケーション設定の変更です。アプリケーションを手動で作成する場合、これらのオプションに加えて、共有ライブラリの他のオプションを使用します。

アプリケーションを手動で作成する場合、次元ライブラリとともに、共有ライブラリ、アプリケーションおよびプロパティ・グリッドが表示されます。右クリック・メニューを使用すると、アプリケーション次元や最高レベルのアプリケーションを変更できます。

次元ライブラリを使用したアプリケーション設定の変更

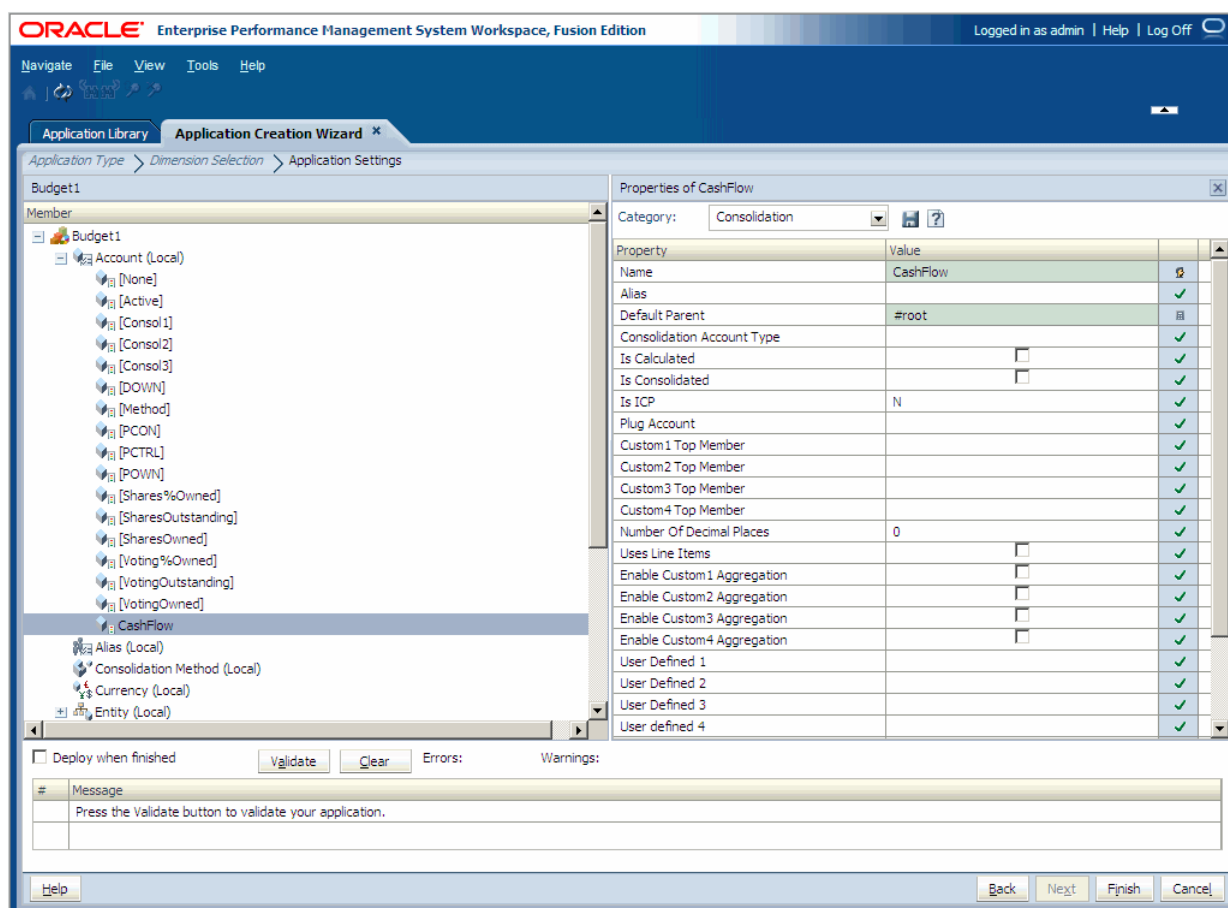
空のアプリケーションを作成した後、次元ライブラリでアプリケーション設定を変更する場合、次のアクションを行えます:

- 次元別名の設定 - 221 ページの「次元別名の設定」を参照してください。

- 次元の関連付けおよび既存の次元の関連付けの表示 - 220 ページの「次元の関連付けの表示」を参照してください。
- アプリケーション・メンバーシップの表示 - 223 ページの「アプリケーション・メンバーシップの表示」を参照してください。
- 次元の作成 - 81 ページの「次元の作成」を参照してください。
- 次元の除去 - 220 ページの「次元の除去」を参照してください。
- 次元のコピー - 92 ページの「次元のコピー」を参照してください。
- 次元の切離し - 218 ページの「ローカル次元の共有への変換」を参照してください。
- プロパティ値の変更 - 146 ページの「プロパティ値の編集」を参照してください。
- メンバーの追加、メンバーの除外および基本メンバーの設定 - 154 ページの「アプリケーションのメンバーの操作」を参照してください。

アプリケーション・ウィザードを使用したアプリケーション設定の変更

ウィザードを使用してアプリケーションを作成する場合、アプリケーションの次元およびメンバーが左側に表示され、プロパティ・グリッドが右側に表示され、検証および配置オプションが下部に表示されます。



ウィザード・アプリケーションでは、右クリック・メニューを使用して、アプリケーションの次元またはメンバーを変更します。次のアクションを行えます:

- 次元別名の設定 - 221 ページの「次元別名の設定」を参照してください。

- アプリケーション・メンバーシップの表示 - 223 ページの「アプリケーション・メンバーシップの表示」を参照してください。
- 次元の関連付けの表示 - 220 ページの「次元の関連付けの表示」を参照してください。
- 次元の同期 - 219 ページの「共有ライブラリを使用した次元の同期」を参照してください。
- メンバーの作成 - 131 ページの「メンバーの作成」を参照してください。
- 共有メンバーの挿入 - 132 ページの「共有メンバーの操作」を参照してください。
- 子の順序変更 - 145 ページの「子メンバーの順序変更」を参照してください。
- 孤立メンバーの管理 - 145 ページの「孤立メンバーの管理」を参照してください。
- メンバーの除外 - 157 ページの「メンバーの除外」を参照してください。

検証および配置

アプリケーション・ウィザードを使用している場合、アプリケーションの次元およびメンバーの変更が終了したとき、アプリケーションを検証して、アプリケーションの作成の終了前にエラーを修正できます。ウィザードの検証オプションおよび配置オプションを使用しないで、後でアプリケーション・ライブラリで配置オプションを使用することもできます。

アプリケーションを手動で作成する場合は、アプリケーション・ライブラリのオプションを使用してアプリケーションを検証および配置します。検証および配置の詳細は、238 ページの「アプリケーションの検証および配置」を参照してください。

▶ ウィザードを使用してアプリケーションを検証および配置するには:

- 1 アプリケーション・ウィザードの「アプリケーション設定」画面で、「検証」を選択します。

すべてのエラーはグリッドに表示され、エラー・タイプとエラー・メッセージが示されます。

- 2 検証エラーが発生した場合は、アプリケーションを配置する前にそれらを修正します。
- 3 アプリケーションを配置するには、「アプリケーション設定」画面で「終了時に配置」を選択します。
- 4 「終了」をクリックします。

「終了時に配置」を選択した場合、「配置」ダイアログ・ボックスが表示されます。

注: アプリケーションを配置した後は、年、期間、別名、表示の各次元は変更できません。さらに、配置後は言語を追加できません。

Planning アプリケーションの作成

Planning アプリケーションを手動で、またはアプリケーション・ウィザードを使用して作成できます。Planning アプリケーションは、次の要件を満たす必要があります:

- アプリケーションは名前を持ち、少なくとも1つのプラン・タイプに割り当てられる必要があります。
- 「デフォルト通貨」プロパティを定義する必要があります。
- Fiscal Start Year Date プロパティを定義する必要があります。年は、4桁の長さにする必要があります(2010 など)。
- 年次元の最初の年メンバーおよび Fiscal Year Start Date プロパティは、同じ年を表す必要があります。たとえば、「会計開始年」が2010の場合、年次元の最初の年はFY10にする必要があります。
- 年メンバーはFYで始まり、2桁の年が続く必要があります。たとえば、FY10のようになります。
- 「会計年度の最初の月」プロパティを定義する必要があります。
- デフォルト別名テーブル・プロパティを定義する必要があります。詳細は、[86 ページの「別名次元」](#)を参照してください。
- アプリケーションには Planning の必須次元が含まれる必要があります。単一通貨のアプリケーションにはシナリオ、バージョン、エンティティ、勘定科目、期間および年が必要です。複数通貨のアプリケーションには、シナリオ、バージョン、エンティティ、勘定科目、期間、年および通貨が必要です。
- アプリケーションは[第12章「Planning 次元の操作」](#)で指定されている条件を満たす必要があります。

Planning モジュールに固有の要件については、適切なガイドを参照してください。Oracle Hyperion Public Sector Planning and Budgeting については、『Oracle Hyperion Public Sector Planning and Budgeting ユーザー・ガイド』を参照してください。Oracle Hyperion Workforce Planning および Oracle Hyperion Capital Asset Planning の詳細は、『Oracle Hyperion Workforce Planning 管理者ガイド』および『Oracle Hyperion Capital Asset Planning 管理者ガイド』を参照してください。

アプリケーション・タイプの選択

次の手順を使用して Planning アプリケーションを作成します。アプリケーション情報を指定するときに、次のことを確認します:

- アプリケーションが名前を持ち、少なくとも1つのプラン・タイプに割り当てられていること。
- 「デフォルト通貨」プロパティが定義されていること。
- Fiscal Start Year Date プロパティを定義する必要があります。年は、4桁の長さにする必要があります(2010 など)。

- 年次元の最初の年メンバーおよび「会計開始年」プロパティは、同じ年を表す必要があります。たとえば、Fiscal Start Year が 2010 の場合、年次元の最初の年は FY10 にする必要があります。
- 年のメンバーは FY で始まり、2 桁の年が続くこと。たとえば、FY10 のようになります。
- 「会計年度の最初の月」プロパティが定義されています。

▶ アプリケーション・ウィザードを使用して Planning アプリケーションを作成するには:

1 「ファイル」>「新規」>「アプリケーション」を選択します

ウィザードの最初の画面が表示されます。

2 アプリケーション名を入力します。

名前には特殊文字を使用できません。また、8 文字を超えることもできません。

3 「アプリケーション・タイプ」に、「Planning」を選択します。

4 オプションの説明を入力します。

5 オプション: 「ブランク・アプリケーションの作成」を選択してブランク・アプリケーションを作成し、次元ライブラリを使用して次元をアプリケーションにドラッグ・アンド・ドロップします。任意で、「終了」をクリックします。165 ページの「手動での次元の追加」を参照してください。

ブランク・アプリケーションを作成している場合、プラン・タイプとデフォルト通貨を定義し、複数通貨を使用可能にします。172 ページの「プラン・タイプの定義」および173 ページの「デフォルト通貨の指定」を参照してください。

6 オプション: 次元クラスのデフォルト名を使用して必要なすべての次元をローカルに作成して、ローカル・アプリケーションを作成する場合、「ローカル次元の自動作成」を選択します。

たとえば、これによって「エンティティ」という名前のエンティティ次元、「勘定科目」という名前の勘定科目次元、などが作成されます。この設定では、次元は「次元の選択」画面でローカル次元として選択され、必要な場合は「カスタム次元」および「他の次元」の下にこれらの次元を追加できます。

7 次のアクションを行います:

- 「アプリケーション・タイプ」に、次のいずれかのオプションを選択します: 「全般」。
 - 全般
 - Public Sector Planning and Budgeting
 - Project Financial Planning
- プラン・タイプを定義します。172 ページの「プラン・タイプの定義」を参照してください。
- デフォルト通貨を指定します。173 ページの「デフォルト通貨の指定」を参照してください。
- 基本期間のカレンダー・オプションを設定します。12 か月を選択する場合、会計開始月および週次配布を入力します。179 ページの「カレンダー範囲の定義」を参照してください。

8 オプション: 次のアクションを行います:

- 「新規ローカル期間次元の作成」を選択します。
ローカル期間次元を作成する場合、カレンダー領域で新規次元に対する期間名を入力します。「基本期間」で「カスタム」を選択する場合は、期間名、接頭辞および年間の期間を入力します。
- 「新規ローカル年次元の作成」を選択します。
ローカル年次元を作成する場合、カレンダー領域で新規次元の適切な情報(年名、最初の会計年度および合計年数など)を入力します。

9 「次へ」をクリックします。

「次元の選択」画面が表示されます。174 ページの「次元の選択」を参照してください。

プラン・タイプの定義

アプリケーションでは、少なくとも1つのプラン・タイプを構成する必要があります。Essbase データベースは、各プラン・タイプに対して作成されます。Planning アプリケーションに対しては最高3つのプラン・タイプ、個別のモジュールに対しては2つのプラン・タイプを設定できます。アプリケーションを作成した後は、プラン・タイプの名前や数を変更できません。

アプリケーションの勘定科目、エンティティおよびその他の要素を作成するとき、それらをプラン・タイプに関連付けます。それによって、各プラン・タイプのデータベースにはアプリケーションの次元、メンバーおよびプラン・タイプに関連するデータ値のみが含まれるようになります。これで、設計、サイズおよびパフォーマンスが最適化されます。

プラン・タイプの数、組織での必要性に依存します。たとえば、販売部門には年次収益プランがあり、財務部門には P&L(損益計算書)プランがある場合、収益および P&L という2つのプラン・タイプを定義できます。

データはプラン・タイプ間で共有できます。たとえば、収益プランには、製品販売合計勘定科目にロール・アップされる販売の明細科目がいくつか含まれることがあります。P&L プランに製品販売合計勘定科目を含めるように構成できます。この構成によって、製品販売合計勘定科目のデータ値を明細科目なしで P&L プランに取込むことができます。これによって、P&L プランのデータベースは小さく、効率的になります。

プラン・タイプの名前には8文字まで使用できます。8文字を超えても、シングルバイトおよびダブルバイトの文字を入力できますが、Essbase データベースが作成されるときにエラー・メッセージが表示されます。Essbase が UNIX サーバーにインストールされている場合は、プラン・タイプ名にはアンダースコア文字を使用できません。

Public Sector Planning and Budgeting については、『Oracle Hyperion Public Sector Planning and Budgeting ユーザー・ガイド』を参照してください。

Oracle Project Financial Planning の詳細は、Oracle Project Financial Planning User's Guide を参照してください。

- ▶ プラン・タイプを定義するには、次のいずれかのアクションを行います:
- アプリケーション・ウィザードを使用している場合は、プラン・タイプを選択してプラン・タイプ名を入力します。
 - 「全般」アプリケーション・タイプには、最大3つの汎用プラン・タイプ、1つの「Workforce」プラン・タイプおよび1つの「Capital Asset」プラン・タイプを指定できます。
 - 「Public Sector Planning and Budgeting」アプリケーション・タイプには、最大3つの汎用プラン・タイプおよび1つの「人材プランニング」プラン・タイプを指定できます。「人材プランニング」プラン・タイプは、デフォルトで選択され、削除できません。予算詳細のレベルを選択します:

- 「従業員」: 従業員データのみを含めます
- 「職階」: 職階データのみを含めます
- 「職階および従業員」: 職階と従業員の両方のデータを含めます
- 「Project Financial Planning」アプリケーション・タイプには、最大3つの汎用プラン・タイプを指定できます。また、「業種サンプル」アプリケーションを作成するかどうかを次から選択できます:
 - 「なし」: 基本的な Project Financial Planning アプリケーションを作成し、サンプル・アプリケーションを作成しない場合、このオプションを選択します。

「情報技術」: 情報技術(IT)業界固有の Project Financial Planning アプリケーションを作成し、サンプル・アプリケーションを作成する場合、このオプションを選択します。サンプル・アプリケーションには、プロジェクト、従業員、資産およびその他のメタデータと、IT業界に固有のデータが含まれます。

注: 「なし」を選択した場合、カレンダー範囲を定義する必要があります。「業種サンプル」ドロップダウンから「情報技術」を選択した場合、「デフォルト通貨」、「複数通貨の使用」、「基本期間」、会計年度開始月、「会計年度の数」および他のすべてのカレンダー関連のプロパティの値は、自動的に設定され、変更できません。

- 手動でアプリケーションを作成している場合は、「Plan 1 Name」プロパティをダブルクリックしてそのプラン・タイプの名前を入力します。追加のプラン・タイプに対してもこのプロセスを繰り返します。

デフォルト通貨の指定

アプリケーションのエンティティに対してデフォルト通貨を指定して、アプリケーションが通貨換算をサポートするかどうかを確立する必要があります。複数通貨のサポート(通貨の上書き)は、基本通貨にかかわらず、レベル0のメンバーで使用可能です。

次に、サポートされている通貨コードの例を示します:

- USD: US ドル
- EUR: 欧州連合ユーロ
- AUD: オーストラリア・ドル

通貨コードのリストについては、銀行およびビジネスで使用される ISO 4217 の通貨コードのリストを参照してください。事前定義済の3桁の通貨コードを使用するか、独自のコードを追加します。Performance Management Architect では、ISO規格を遵守する必要はありません。

複数通貨をサポートしている場合、配置済アプリケーションでは通貨および HSP_Rates という2つの次元が作成されます。複数通貨の設定は、後で変更できません。

▶ デフォルト通貨を設定するには:

- アプリケーション・ウィザードを使用している場合は、「デフォルト通貨」として使用する通貨を選択します。アプリケーションに複数の通貨がある場合は、「複数通貨」を選択します。
- 手動でアプリケーションを作成している場合は、最上位レベルのアプリケーションを選択します。「デフォルト通貨」プロパティをダブルクリックして通貨コードを入力します。複数通貨をサポートしている場合は、最上位レベルのアプリケーションを選択して「プロパティ・グリッド」で「複数通貨」を選択します。

次元の選択

アプリケーション作成の次の手順は、アプリケーションに次元を追加することです。Planning アプリケーションは、次の要件を満たす必要があります:

- 単一通貨のアプリケーションには次の次元が必要です:
 - エンティティ
 - バージョン
 - シナリオ
 - 勘定科目
 - 年
 - 期間
- 複数通貨のアプリケーションでは、上の次元の他に通貨が必要です。
- デフォルト別名テーブル・プロパティを定義する必要があります。詳細は、[86 ページの「別名次元」](#)を参照してください。
- アプリケーションは[第 12 章「Planning 次元の操作」](#)で指定されている要件を満たす必要があります。

ヒント: ウィザードを使用してアプリケーションを作成している場合、必要なすべての次元が「次元の選択」画面で自動的にマークが付けられます。

ウィザードを使用している場合は、[174 ページの「ウィザードを使用した次元の定義」](#)を参照してください。空のアプリケーションを作成した場合は、[176 ページの「手動での次元の追加」](#)を参照してください。

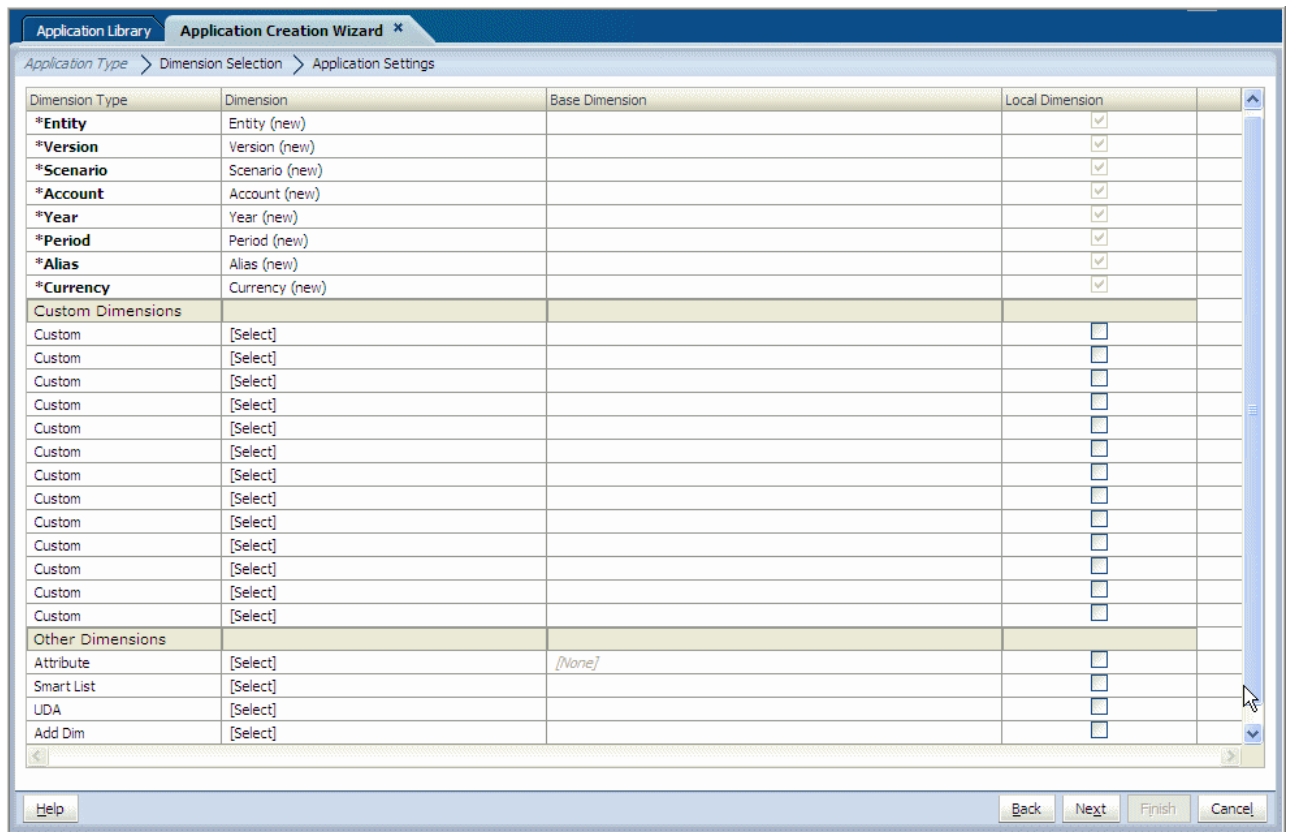
ウィザードを使用した次元の定義

アプリケーション・ウィザードを使用すると、必要なすべての次元が太字で表示されます。次元タイプはカテゴリ化され、見出しとともに表示されます。たとえば、すべてのプラン・タイプ、カスタム次元、その他の次元などです。すべてのプラン・タイプの下の次元は必須です。

▶ アプリケーション・ウィザードを使用して次元を定義するには:

- 1 次元に次元タイプをマップするには、「次元」列で「選択」をクリックします。

必須の次元タイプが次元ライブラリの次元と一致する場合、その次元名が「次元」列に表示されます。



2 次元を選択します。

ドロップ・ダウン・リストに表示される次元は次元のタイプにマップされます。たとえば、ある次元を勘定科目次元タイプにマップしている場合、勘定科目次元のみがリストに表示されます。

場合によっては、新規次元を作成することがあります。

注： Project Financial Planning アプリケーション用に次元を選択している場合、シナリオ次元、年次元および期間次元は、ローカルである必要があり、共有することはできません。残りの次元が共有される場合は、UDA、通貨および別名次元も共有されます。

3 オプション: 新規次元を作成します。新規次元を作成するには:

1. 「次元」ドロップダウン矢印を使用して、「新規次元の作成」を選択します。

「新規次元の追加」ダイアログ・ボックスが表示されます。

2. 次元の名前および説明を入力します。次元を「次元タイプ」列にマップする次元タイプに従って、タイプが自動的に選択されます。
3. 「OK」をクリックします。

4 必須次元、カスタム次元およびその他のすべての次元に対する新規次元の選択、または作成を続けます。

5 属性次元を追加するには、基本次元を識別します。属性次元は基本次元と関連付けられる必要があります。

- 6 アプリケーションのローカルとして次元を作成するには、各行の最後にある「ローカル次元」を選択します。

注： ウィザードの最初の画面で新規ローカル次元を自動的に作成した場合、その次元を共有に変更できません。

エンティティなどの共有の基本次元に、別名などのローカル次元を関連付けることはできません。共有次元およびローカル次元の詳細は、[82 ページの「共有次元およびローカル次元の理解」](#)を参照してください。

注： 次の画面に進む前に、すべての必須次元を1つの次元にマップする必要があります。必須でない次元はマップする必要がありません。

- 7 [174 ページの「次元の選択」](#)に説明されている要件を満たしているか、アプリケーション設定を確認します。たとえば、必須次元がすべて選択されている必要があります。(単一通貨アプリケーションには、シナリオ、バージョン、エンティティ、勘定科目、期間および年が必要です。複数通貨アプリケーションには、通貨以外にこれらの次元が必要です。)
- 8 すべての問題を解決したら、「次へ」をクリックします。

エラーが表示された場合は、アプリケーションが [174 ページの「次元の選択」](#)に説明されている要件を満たしているかを確認します。「詳細の表示」をクリックすると、エラーに関する情報が表示されます。次に「詳細の非表示」をクリックします。次に、「OK」をクリックします。すべてのエラーを解決したら、再度「次へ」をクリックします。

「アプリケーション設定」画面が表示されます。[177 ページの「アプリケーション設定の変更」](#)を参照してください。

手動での次元の追加

手動でアプリケーションを作成している場合は、「次元ライブラリ」を使用して次元を選択します。次元ライブラリには、次の3つのペインがあります：

- **共有ライブラリ** - 左側に表示されます。共有ライブラリで現在使用可能なすべての次元が表示されます。

次元ライブラリに次元をロードする方法の詳細は、[第3章「メタデータのインポート」](#)を参照してください。

- **アプリケーション** - 中央部に表示されます。展開されると現在のアプリケーションのすべての次元の名前をリスト表示します。
- **プロパティ・グリッド** - 右側に表示されます。選択した次元またはメンバーのすべてのプロパティを表示します。

プロパティを編集する方法の詳細は、[146 ページの「プロパティ値の編集」](#)を参照してください。

アプリケーションの次元のフィルタ処理の詳細は、[154 ページの「アプリケーションへのメンバーの追加」](#)を参照してください。

▶ アプリケーションに次元を追加するには:

1 共有ライブラリからアプリケーションに次元をドラッグします。

「次元のコピー」ダイアログ・ボックスが表示されます。

2 「ローカル次元」または「共有次元」を選択します。

ヒント: アプリケーションにメンバーのみを追加する場合については、[154 ページの「アプリケーションへのメンバーの追加」](#)を参照してください。

展開されたアプリケーションはすべての次元をリスト表示します。共有次元およびローカル次元の詳細は、[82 ページの「共有次元およびローカル次元の理解」](#)を参照してください。

アプリケーション・プロパティを変更できます。アプリケーション・タイプによって、要件およびプロパティは様々に異なります。[177 ページの「アプリケーション設定の変更」](#)を参照してください。

アプリケーション設定の変更

アプリケーション作成の次の手順は、アプリケーション・プロパティおよび他のアプリケーション設定の変更です。アプリケーションを手動で作成する場合、これらのオプションに加えて、次元ライブラリの他のオプションを使用します。

アプリケーションを手動で作成する場合、次元ライブラリとともに、共有ライブラリ、アプリケーションおよびプロパティ・グリッドが表示されます。右クリック・メニューを使用すると、アプリケーション次元や最高レベルのアプリケーションを変更できます。

次元ライブラリを使用したアプリケーション設定の変更

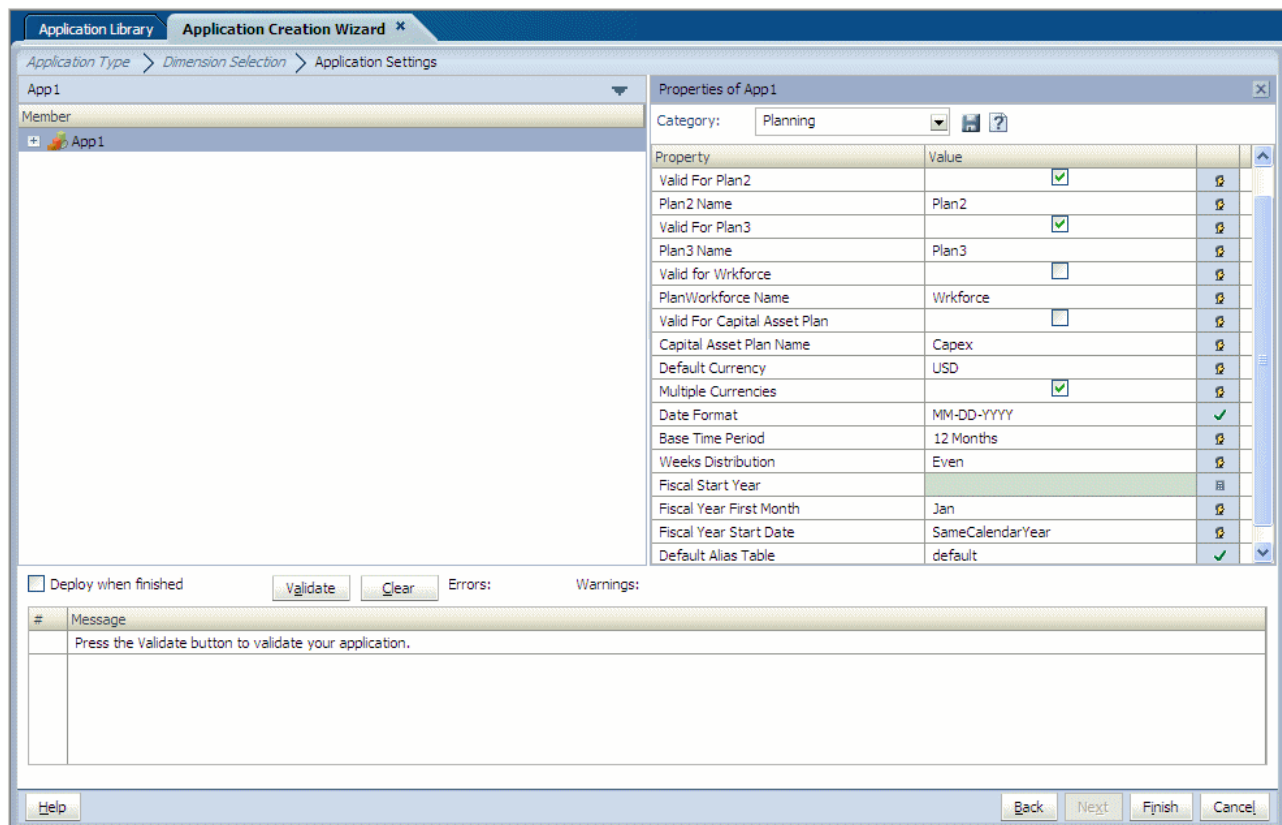
空のアプリケーションを作成した後、次元ライブラリでアプリケーション設定を変更する場合、次のアクションを行えます:

- アプリケーション・パフォーマンスの最適化。[181 ページの「パフォーマンス設定の変更」](#)を参照してください。
- データ型の評価順序の設定。[183 ページの「データ型の評価順序の設定」](#)を参照してください。
- 次元別名の設定 - [221 ページの「次元別名の設定」](#)を参照してください。
- 次元の関連付けおよび既存の次元の関連付けの表示 - [220 ページの「次元の関連付けの表示」](#)を参照してください。
- 次元の作成 - [81 ページの「次元の作成」](#)を参照してください。
- 次元の除去 - [220 ページの「次元の除去」](#)を参照してください。
- 次元のコピー - [92 ページの「次元のコピー」](#)を参照してください。
- 次元の切離し - [218 ページの「ローカル次元の共有への変換」](#)を参照してください。
- プロパティ値の変更 - [146 ページの「プロパティ値の編集」](#)を参照してください。

- メンバーの追加、メンバーの除外および基本メンバーの設定 - 154 ページの「アプリケーションのメンバーの操作」を参照してください。

アプリケーション・ウィザードを使用したアプリケーション設定の変更

ウィザードを使用してアプリケーションを作成する場合、アプリケーションの次元およびメンバーが左側に表示され、プロパティ・グリッドが右側に表示され、検証および配置オプションが下部に表示されます。



ウィザード・アプリケーションでは、右クリック・メニューを使用して、アプリケーションの次元またはメンバーを変更します。次のアクションを行えます:

- アプリケーション・パフォーマンスの最適化。181 ページの「パフォーマンス設定の変更」を参照してください。
- デフォルト別名テーブルを設定します。Default Alias Table プロパティは、アプリケーション・レベルでデフォルトに設定されています。別の別名テーブルを作成し(「英語」など、別名次元の別のメンバー)、これをアプリケーションで使用されるデフォルト別名テーブルにする場合、これを手動で設定する必要があります。221 ページの「次元別名の設定」を参照してください。
- アプリケーション・メンバーシップの表示 - 223 ページの「アプリケーション・メンバーシップの表示」を参照してください。
- 次元の関連付けの表示 - 220 ページの「次元の関連付けの表示」を参照してください。
- 次元の同期 - 219 ページの「共有ライブラリを使用した次元の同期」を参照してください。
- メンバーの作成 - 131 ページの「メンバーの作成」を参照してください。

- 共有メンバーの挿入 - 132 ページの「共有メンバーの操作」を参照してください。
- 子の順序変更 - 145 ページの「子メンバーの順序変更」を参照してください。
- 孤立メンバーの管理 - 145 ページの「孤立メンバーの管理」を参照してください。
- メンバーの除外 - 154 ページの「アプリケーションのメンバーの操作」を参照してください。

基本期間および月配布分散の定義

基本期間および月配布パターンは、1 か月間の会計週の数に基づいて選択できません。基本期間は、アプリケーションにおける最下位レベルの期間です。定義済みのオプションは、四半期と月です。週や日などの、カスタム基本期間を作成できません。

月配布パターンを使用して、要約期間に入力されるデータが基本期間中に配布(分散)される方法を決定します。データの入力中に、ユーザーは年や四半期などの要約期間にデータを入力できます。要約期間を構成する基本期間中、入力された値が Planning により配布されます。

均等配布パターン以外の週次配布パターンを選択した場合、Planning により、四半期ごとの値は 13 週に分割されたものとして扱われ、選択したパターンに従って週が配布されます。たとえば、5-4-4 パターンを選択した場合、Planning により四半期の最初の月は 5 週あるものとして扱われ、四半期の最後の 2 か月は 4 週あるものとして扱われます。週次配布パターンのオプションは、基本期間オプションの「12 か月」を選択した場合のみ使用できます。

▶ 基本期間および週次配布パターンを定義するには:

- 1 アプリケーション(最上位レベル)を選択して「基本期間」プロパティをダブルクリックし、「12 か月」、「四半期」、または「カスタム」を選択します。
- 2 「週の配布」プロパティをダブルクリックして、週次配布パターンを選択します。(オプションは「偶数」、「445」、「454」および「544」。)

カレンダー範囲の定義

アプリケーションでは、会計開始年および開始月を指定できます。会計開始年を指定する際、組織がアプリケーションで必要とする過去のデータの量を考慮します。カレンダーには年を追加できますが、会計開始年は変更できません。

会計年度の場合、会計年度の最初の月を設定し、会計年度が同じカレンダー年から始まるのか、前のカレンダー年から始まるのかを指定できます。そのカレンダー年に基づいて、たとえば数式を使用して、後から計算を設定できます。Planning アプリケーション用の式を設定する際、[TPDate]や[FirstDate]などの数式は、アプリケーションの開始が同じ年なのか前の年なのかで、結果が異なることに注意してください。

次の表では、会計開始年を 2010 年と想定して、「会計年度の最初の月」および「会計開始年」オプションの設定がアプリケーションのカレンダーにどのような影響を与えるかの例を示しています。

表 15 「会計年度の最初の月」および「会計開始月」カレンダー・オプションの例

会計年度の最初の月	会計開始年	年 - 期間	年次元
1 月	同じカレンダー年	1 月 10 日から 12 月 10 日まで	FY10
7 月	同じカレンダー年	7 月 10 日から 6 月 11 日まで	FY10
7 月	前のカレンダー年	7 月 9 日から 6 月 10 日まで	FY10
2 月	同じカレンダー年	2 月 10 日から 1 月 11 日まで	FY10
2 月	前のカレンダー年	2 月 9 日から 1 月 10 日まで	FY10
12 月	同じカレンダー年	12 月 10 日から 11 月 11 日まで	FY10
12 月	前のカレンダー年	12 月 9 日から 11 月 10 日まで	FY10

▶ カレンダーを設定するには、次の手順に従います。

1 アプリケーション・ウィザードの「カレンダー」セクションで、「基本期間」オプションを選択して、カレンダーのロールアップ方法を設定します:

注: アプリケーション・タイプが Project Financial Planning であり、業界のサンプル・アプリケーションを作成するように選択した場合、カレンダー・プロパティは自動的に設定され、変更することはできません。

- 「12 か月」: 1 年に 4 回の四半期 - 月は親四半期に、四半期は年にロールアップ。
- 「四半期」: 四半期は年にロールアップ。このオプションを選択した後、次の手順 7 に進みます。
- 「カスタム」: 週や日などのカスタム期間。このオプションを選択した後、次の手順 7 に進みます。

注: Project Financial Planning アプリケーションには、12 か月のカレンダー範囲のみを使用できます。

アプリケーション・ウィザードを使用した Planning アプリケーションの作成方法の詳細は、『Oracle Hyperion Planning 管理者ガイド』を参照してください。

2 「新規ローカル年次元の作成」オプションを選択した場合、「最初の会計年度」オプションが表示されます。このオプションを選択して、アプリケーションの会計開始年度を定義します。アプリケーションの作成後にこれを変更することはできません。最初の会計年度を指定する前に、組織がアプリケーションで履歴データをどの程度必要とするか検討してください。

注: Project Financial Planning アプリケーションの場合、このオプションはデフォルトで選択され、変更できません。

3 「新規ローカル年次元の作成」オプションを選択した場合、「会計年度の数」オプションが表示されます。カレンダーの年数を定義するには、アプリケーションの「会

計年度の数」を選択します。アプリケーションを作成した後に、カレンダーへ年数をさらに追加することができます。

注： Project Financial Planning アプリケーションの場合、このオプションはデフォルトで選択され、変更できません。

- 4 基本期間に「12 か月」を設定した場合、新規ローカル期間次元の「会計年度の最初の月」を選択します。

これはアプリケーションの会計年度の最初の月で、「最初の会計年度」オプションの設定によって異なります。

- 5 基本期間に「12 か月」を設定した場合、次の「会計年度の開始日」を選択します:

- 「同じカレンダー年」。現在のカレンダー年で開始するように会計年度を設定します。たとえば、開始期間が6月の2010年を選択すると、開始年がFY10として作成され、6月10日から5月11日までと定義されます。
- 「前のカレンダー年」。前のカレンダー年で開始するように年度を設定します。たとえば、開始期間が6月の2010年を選択すると、開始年がFY10として作成され、6月9日から5月10日までと定義されます。

- 6 基本期間を「12 か月」に設定する場合、週次配分オプションとして、「均等」、「445」、「454」または「544」のいずれかを選択します。

月の会計週数に基づいて週次配布が設定されます。これによって、要約期間のデータを基本期間内にどう分布させるかが決定されます。ユーザーが、四半期などの要約期間に、データを入力する際、要約期間内の基本期間に値が分散されます。

週次配分パターンを「均等」以外で設定すると、Planning は選択パターンに従って、13週に分かれて週が配分されたかのように四半期ごとの値が扱われます。たとえば、「5-4-4」を選択すると、四半期の最初の月は5週、最後の2か月は4週あると見なされます。

- 7 「次へ」をクリックします。

▶ カレンダーの範囲を定義するには:

- 1 アプリケーション(最高レベル)を選択し、「会計開始年」をクリックします。年を入力します。
- 2 「会計年度の最初の月」をダブルクリックして月を選択します。
- 3 「会計年度の開始日」をダブルクリックし、「SameCalendarYear」または「PreviousCalendarYear」を選択します。

パフォーマンス設定の変更

アプリケーションのパフォーマンスを最適化するには、次の方法を使用します:

- 次元を密または疎として割り当てます。

次元を密および疎のいずれかに割り当てると、データ取得を高速化し、メモリーおよびディスク・スペースを最小限にできます。

次元にメンバーの組合せの大多数のデータ値が不足している場合、次元を疎と定義します。次元にメンバーの組合せの大多数のデータ値がある場合、次元を密と定義します。多くの場合、密次元は期間および勘定科目です。通常、期間には多くのデータが追加されていますが、勘定科目は計算が頻繁に行われるために密になっています。

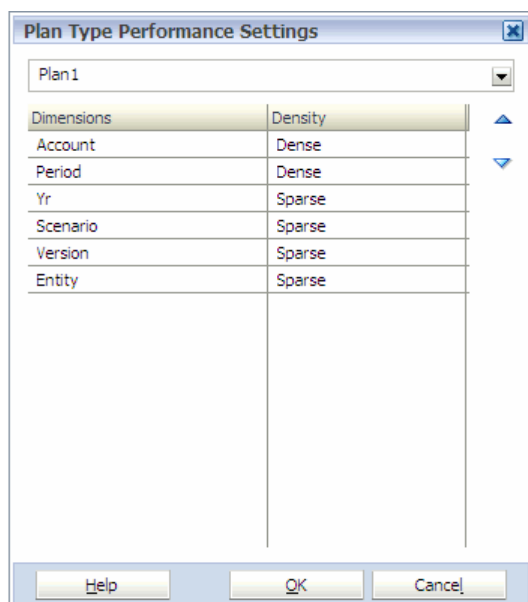
Essbase では、少なくとも 1 つの次元を密に設定する必要があります。密次元にカスタム属性を割り当てられません。『Oracle Hyperion Planning 管理者ガイド』を参照してください。

- 次元順序の変更
- サポート詳細キャッシュにメモリーを割り当てます。『Oracle Hyperion Planning 管理者ガイド』を参照してください。

▶ Planning アプリケーションのパフォーマンスを向上させるには:

- 1 アプリケーション(最上位レベル)を右クリックし、「パフォーマンス設定」を選択します。

「プラン・タイプ・パフォーマンス設定」ダイアログ・ボックスが表示されます。



- 2 プラン・タイプを選択します。

プラン・タイプに属する次元と、プラン・タイプの次元の数が表示されます。アプリケーションは、5 つまでのプラン・タイプを持つことができます。

アプリケーションが単一通貨で作成されている場合、HSP_Rates 次元は表示されません。

- 3 「密度」列のセルをダブルクリックして、次のいずれかを選択します:

- 疎 - メンバーの組合せの大多数のデータ値が不足している次元。疎次元は、使用可能なデータ位置のうち入力されている割合が小さい次元のことです。
- 密 - 次元のすべての組合せの中で、1 つまたは複数のデータ・ポイントが占められている可能性が高い次元のことです。

注意 キューブ内の少なくとも1つの次元を密に割り当てない場合は、アプリケーションの配置に失敗します。



計算する次元の順序を変更すると、計算時間を高速化できます。次元の順序は、Essbase データベースの構造およびパフォーマンスにとって重要です。密次元は疎次元より速く計算されるため、次元の順序は密の度合いが高い順にしてください。集約する次元は、子を親に集約して新規データを作成します。集約しない次元は、階層ごとに新規データを作成しません(たとえば、シナリオ次元やバージョン次元など)。

疎次元は、集約する次元および集約しない次元に分けて、集約する次元を集約しない次元の前に配置します。

次のガイドラインに従って次元を順序付けすることにより、パフォーマンスを最適化します:

- 期間および勘定科目を密にします。
- 密次元は、密の度合いが高い順に順序付けします。通常、最も密な次元が期間となり、その後に勘定科目が続きます。
- 疎次元は、集約する次元および集約しない次元に分けます。集約する次元を集約しない次元の前に配置します。疎次元は、密の度合いが高い順に順序付けします。

4 次元を選択します:

-  をクリックして、リストで次元を上に移動します。
-  をクリックして、リストで次元を下に移動します。

5 「OK」 をクリックします。

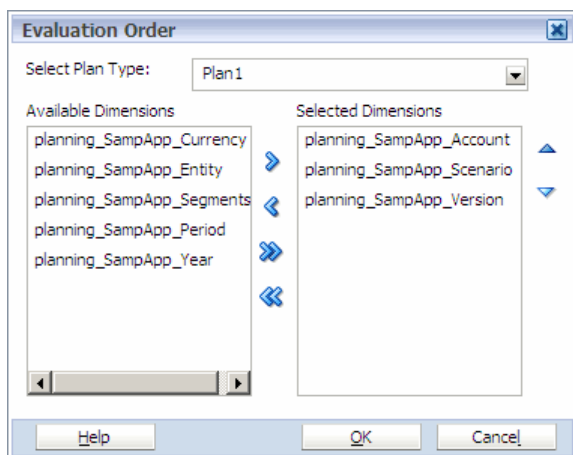
データ型の評価順序の設定

データ型は、すべての次元メンバーで定義されるプロパティです。データ・フォームに定義されたセル交差によっては、データ型によりデータ・フォームの表面に競合する結果が生じる場合があります。たとえば、「パーセント」のデータ型および「通貨」のデータ型は、パワー・ユーザーにより設定された定義済の順序に基づいて解決する必要があります。「データ型の評価順序」が定義済の順序です。プラン・タイプごとに次元順序を設定し、複数のデータ型が交差する場合の優先順位を決定します。リスト内の最初の次元に関連付けられたデータ型は、後続の次元に関連付けられたデータ型より優先されます。

▶ 評価順序を変更するには:

1 アプリケーション(最上位レベル)を右クリックし、「データ型の評価順序」を選択します。

「評価順序」ダイアログ・ボックスが表示されます。





注： Planning アプリケーションで、ユーザーが日付およびテキスト(それぞれ日付データ型とテキスト・データ型)をデータ・フォームのセルに入力できるようにする場合、それらのメンバーの次元を選択し、それらを「選択した次元」に移動します。

2 「プラン・タイプ」を選択します。

アプリケーションは、5 つまでのプラン・タイプを持つことができます。

3 次元を選択し、1 つのアクションを実行します:

-  をクリックして、リストで次元を上に移動します。
-  をクリックして、リストで次元を下に移動します。

4 「OK」 をクリックします。

検証および配置

アプリケーション・ウィザードを使用している場合、アプリケーションの次元およびメンバーの変更が終了したとき、アプリケーションを検証して、アプリケーションの作成の終了前にエラーを修正できます。ウィザードの検証オプションおよび配置オプションを使用しないで、後でアプリケーション・ライブラリで配置オプションを使用することもできます。

アプリケーションを手動で作成する場合は、アプリケーション・ライブラリのオプションを使用してアプリケーションを検証および配置します。検証および配置の詳細は、[238 ページの「アプリケーションの検証および配置」](#)を参照してください。

▶ ウィザードを使用してアプリケーションを検証および配置するには:

1 アプリケーション・ウィザードの「アプリケーション設定」画面で、「検証」を選択し、問題を表示して配置前に解決します。

すべてのエラーはグリッドに表示され、エラー・タイプおよびエラー・メッセージが表示されます。メッセージを表示するには、必要に応じてスクロール・バーを使用します。

1 つまたはすべてのメッセージのコピーを保存するには、メッセージを右クリックし、「選択内容をクリップボードにコピー」または「すべてをクリップ

ボードにコピー」を選択します。情報をテキスト・エディタに貼り付けて保存したり、メッセージを印刷できます。メッセージのリストを消去するには、「消去」をクリックします。

- 2 検証エラーまたは警告が表示された場合は、アプリケーションを配置する前にそれらを修正します。
- 3 アプリケーションを作成した後に配置するには、「アプリケーション設定」画面で「終了時に配置」を選択します。

注： Project Financial Planning アプリケーションを配置する場合、「Shared Services プロジェクト」に、「デフォルト・アプリケーション・グループ」を選択します。(これは、セキュリティおよびプロビジョニングを定義したプロジェクトです。)

- 4 「終了」をクリックします。

「終了時に配置」を選択した場合、「配置」ダイアログ・ボックスが表示されます。

Public Sector Planning and Budgeting アプリケーションの検証および配置の詳細は、『Oracle Hyperion Public Sector Planning and Budgeting ユーザー・ガイド』を参照してください。

Oracle Project Financial Planning アプリケーションの検証および配置の詳細は、Oracle Project Financial Planning User's Guide を参照してください。

標準の Profitability and Cost Management アプリケーションの作成

アプリケーション・ウィザードを使用して、標準の Profitability and Cost Management アプリケーションを作成できます。次の項では、Profitability and Cost Management アプリケーションの作成について順を追って説明します：

- 185 ページの「アプリケーション・タイプの選択」
- 187 ページの「次元タイプの選択」
- 192 ページの「アプリケーション設定の変更」

アプリケーション・タイプの選択

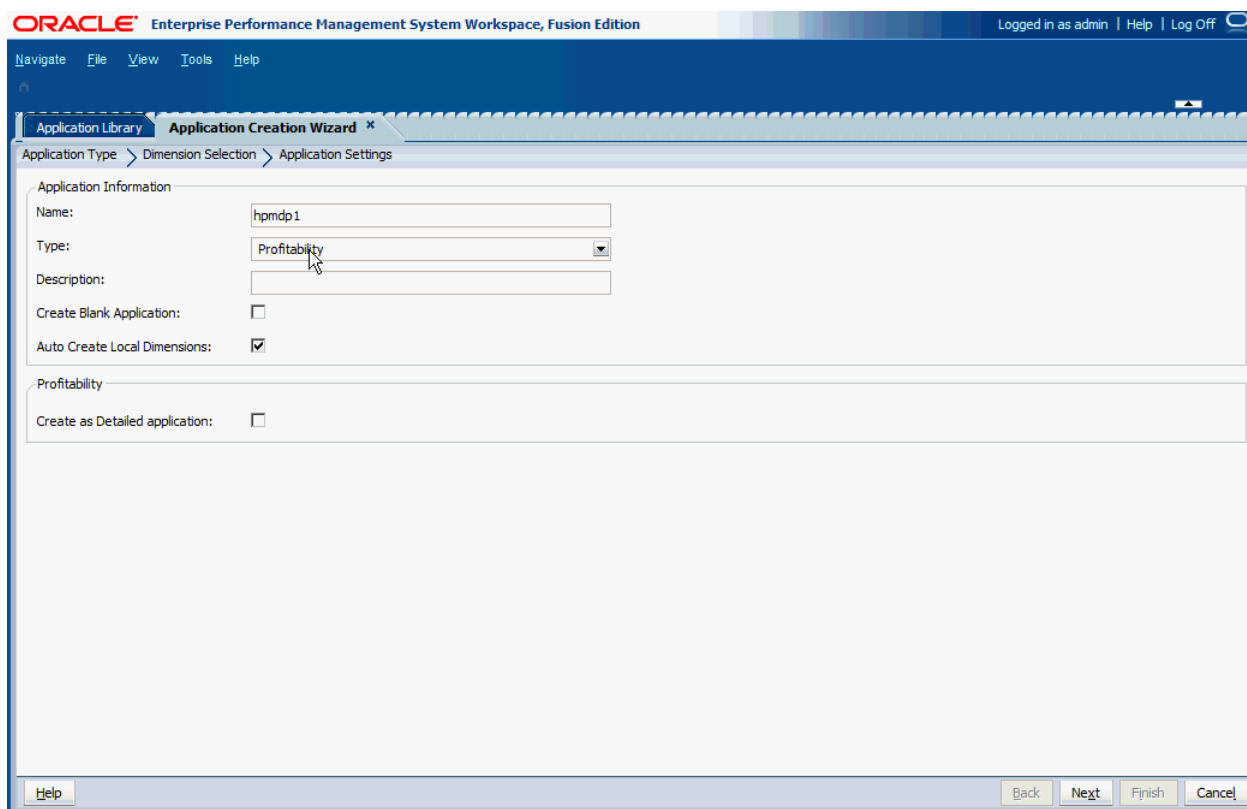
次の手順では、Profitability and Cost Management アプリケーションの作成について説明します。

➤ Profitability and Cost Management アプリケーションを作成するには：

- 1 フラット・ファイルのインポートまたは Performance Management Architect インタフェース・テーブルのインポートを使用して Performance Management Architect に新規共有ライブラリを移入します。

注意 アプリケーションに含めるビジネス次元(汎用、勘定科目、エンティティ、時間、国など)は、アプリケーションを作成する前に、次元ライブラリに追加します。これを行わないと、アプリケーション・ウィザードでの選択に次元を使用できません。「次元の作成」を参照してください。

- 2 「ナビゲート」、「管理」、「アプリケーション・ライブラリ」の順に選択します。
アプリケーション・ライブラリが表示されます。
- 3 「ファイル」、「新規」、「アプリケーション」の順に選択します。
ウィザードの最初の「アプリケーション・タイプ」画面が表示されます。



- 4 アプリケーション名を入力します。
名前は7文字以内で命名し、「&」(アンパサンド)を含む特殊文字を使用しないでください。
- 5 「タイプ」ドロップダウン・リストから「Profitability」を選択します。
- 6 オプション: 説明を入力します。
- 7 オプション: 次元を手動で空白・アプリケーションに追加するには、「空白・アプリケーションの作成」を選択し、「終了」をクリックします。190 ページの「手動による次元の追加」を参照してください。
- 8 オプション: すべての必須次元を自動的に作成するには、「ローカル次元の自動作成」を選択します。
「ローカル次元の自動作成」を選択すると、アプリケーションに必要なすべての次元について新規次元が自動的に作成されます。各新規次元の次元名は、次元タイプにカッコで囲んだ(新規)が付いた名前になります。
- 9 「次へ」をクリックします。

ウィザードの2番目の画面である「次元の選択」が表示されます。163 ページの「次元の選択」および187 ページの「次元タイプの選択」を参照してください。

次元タイプの選択

アプリケーションを作成した後、アプリケーションに含める次元タイプを選択する必要があります。次元タイプとそれらに関連付けられたメンバーの詳細は、『Oracle Hyperion Profitability and Cost Management 管理者ガイド』を参照してください。

Profitability and Cost Management アプリケーションに必要な次元タイプは次のとおりです:

- メジャー次元タイプには、ドライバ・メジャー、レポート・メジャー、割当てメジャーなど、モデルの構築、検証および計算に必要なメンバーが含まれています。ユーザーは、メンバー「UserDefinedDriverMeasures」の下の階層にユーザー定義のドライバ・メジャー(つまりサブ階層)を追加できます。
- AllocationType 次元は、直接割当ておよび割当てシステムの保管に使用されます。
- ユーザーは、少なくとも1つの視点(POV)次元タイプを定義する必要があります。モデル POV により、選択した時点または期間のモデル情報に関する具体的なビューを参照できます。たとえば、POV 次元タイプには次のような次元がいくつか含まれる場合があります:
 - 年
 - 時間
 - 期間
 - シナリオ
 - 月
 - 財務四半期
 - 季節
- 別名次元はオプションで、モデル内で別名を使用する場合にのみ必要です。

注意 重複メンバー名または別名は使用できません。

- 少なくとも1つのビジネス次元タイプをユーザーが定義する必要があります。ビジネス次元は、ビジネス固有の部署、総勘定元帳の勘定科目、アクティビティ、場所、顧客または製品などのモデル内のビジネス要素を説明するために作成されます。

汎用ビジネス次元には、次の例の一部が含まれ、1つ以上のステージまたはモデルに適用される場合があります:

- 会計次元には、純利益や売上などアプリケーション内の勘定科目タイプの情報のチャートが含まれる場合があります。
- 組織次元は、部門、タスク・フォース、または人事や情報技術などのその他の内部または外部グループのアウトラインを示す場合があります。

- 国内または国次元は、複数の国、州、地域または場所でのビジネス・アクティビティの追跡に使用される場合があります。

注： これらのビジネス次元は Profitability and Cost Management アプリケーションの一部として含められますが、Essbase アウトラインが配置されると、タイプのない基本または汎用次元として作成されます。

- 属性次元は、ビジネス次元に関連付けられた次元の特殊なタイプであり、別の関連する次元のメンバーを分類するために使用できるメンバーを含みます。属性次元は、製品のサイズ、色など、データの特性を示します。

Performance Management Architect には、2つの属性次元タイプがあります：

- 属性次元:
 - 属性は、Boolean、Date、Numeric、Text などの異なる構造を使用して作成できます。
 - 属性には階層があり、階層は集約値に対してロールアップできます。
 - 1つのメンバーに関連付けられるのは、指定した属性次元の1つの属性のみです。
- ユーザー定義属性次元(UDA):
 - 属性は、Text を使用してのみ作成できます。
 - UDA には階層がないため、合計を生成するためのレポートに容易に使用することはできません。
 - 複数の UDA を1つのメンバーに関連付けることができます。

各タイプの属性次元には、モデルの要件とレポート・ニーズに応じて異なる利点があります。

注： モデル・ステージは次元ではないため、Performance Management Architect では使用できません。Profitability and Cost Management では、ステージはモデルに追加され、次元を論理的な手順またはステージに整理するために使用されます。

アプリケーションを作成した後、適切な手順を使用してアプリケーションに追加する次元を選択します：

- ウィザードを使用している場合は、[188 ページの「ウィザードを使用した次元の追加」](#)を参照してください。
- ブランク・アプリケーションを作成した場合は、[190 ページの「手動による次元の追加」](#)を参照してください。

ウィザードを使用した次元の追加

アプリケーション・ウィザードを使用すると、必要なすべての次元が自動的に表示されます。正確な一致がある場合は、その次元タイプの次元列に自動的に入力されます。Profitability and Cost Management の必要な次元タイプは、自動的に分類されて、次の影付きヘッダーとともに表示されます：

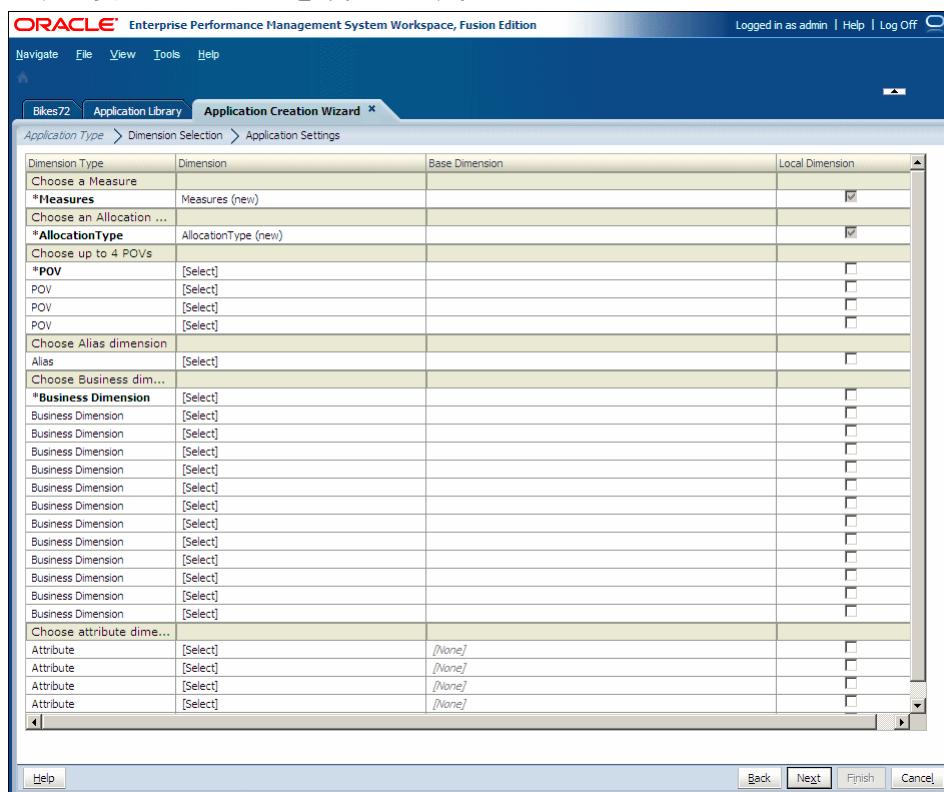
- メジャー次元
- AllocationType 次元
- POV 次元
- 別名次元(オプション)
- ビジネス次元
- 属性次元(オプション)

「ローカル次元の自動作成」を選択した場合、必要な次元ごとに新規ローカル次元が作成されます。各新規次元の名前は、次元タイプにかっこで囲まれた(New)が付いたものになります。たとえば、Account (New)となります。

注意 勘定科目、エンティティ、時間、国などアプリケーションに含めるビジネス次元は、アプリケーションを作成する前に次元ライブラリに追加する必要があります。そうしないと、アプリケーション・ウィザードで次元を選択できません。「次元の作成」を参照してください。

▶ 次元を選択するには:

- 1 「次元の選択」タブ(アプリケーション・ウィザードの手順 2)の「次元のタイプ」で、必要な次元タイプを確認します。



- 2 既存の各次元をアプリケーションに追加するには、「次元」列の「[選択]」をクリックすると、その次元タイプに使用可能な次元のドロップダウン・リストが表示されます。

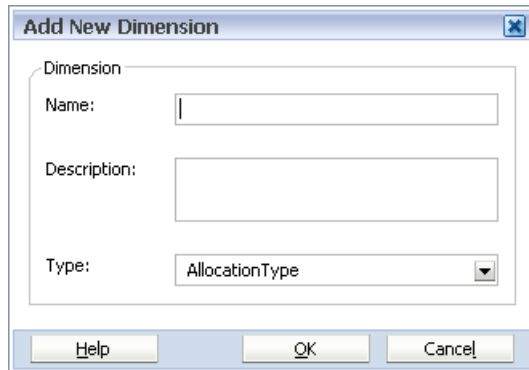
関連次元タイプの次元のみが表示されます。たとえば、次元をメジャー次元タイプにマッピングしている場合は、メジャー次元のみがリストに表示されます。

3 ドロップダウン・リストから次元を選択します。

4 オプション: 新規次元を次のように作成します:

1. 「次元」列で、「[選択]」をクリックすると、その次元タイプに使用可能な次元のドロップダウン・リストが表示されます。
2. ドロップダウン・リストから、「[新規次元の作成]」を選択します。

「新規次元の追加」ダイアログ・ボックスが表示されます。



The image shows a dialog box titled "Add New Dimension". It has three input fields: "Name:" (a single-line text box), "Description:" (a multi-line text box), and "Type:" (a dropdown menu currently showing "AllocationType"). At the bottom, there are three buttons: "Help", "OK", and "Cancel".

3. 新規次元の「名前」と「説明」を入力します。「タイプ」は、「次元のタイプ」列で選択した次元タイプに基づいて、自動的に選択されます。
4. 「OK」をクリックします。

注: アプリケーション・ウィザードで次元を作成する場合、その次元は常にローカル次元になり、アプリケーション・ウィザードで共有できません。次元を共有する場合は、次元ライブラリを使用する必要があります。

5 手順 3 と手順 4 を繰り返し、必要に応じて新規次元を選択または作成します。

注: 次の画面に移動する前に、すべての必須次元を、次元または[該当なし]にマップする必要があります。

6 オプション: 次元をローカル次元として設定するには、各行の最後にある「ローカル次元」チェック・ボックスを選択します。

7 「次へ」をクリックします。

「アプリケーション設定」画面が表示されます。

手動による次元の追加

ブランク・アプリケーションを作成する場合は、次元ライブラリを使用して次元を選択します。次元ライブラリには、次の 3 つのペインがあります:

- 共有ライブラリ - 左側に表示され、共有ライブラリで現在使用可能なすべての次元が表示されます。

次元ライブラリに次元をロードする方法の詳細は、[第3章「メタデータのインポート」](#)を参照してください。

- **アプリケーション** - 中央部に表示され、展開されると現在のアプリケーションのすべての次元の名前をリスト表示します。
- **プロパティ・グリッド** - 右側に表示され、選択した次元またはメンバーのすべてのプロパティを表示します。

プロパティを編集する方法の詳細は、[146 ページの「プロパティ値の編集」](#)を参照してください。

ブランク・アプリケーションを作成したら、次元を追加できます。

▶ ブランク・アプリケーションに次元を追加するには、次の手順を行います：

- 1 **次元ライブラリで、共有ライブラリからアプリケーションに次元をドラッグ**します。

「次元のコピー」ダイアログ・ボックスが表示されます。

ヒント： 新規ローカル次元を作成するには、アプリケーション・ビューでアプリケーション名を右クリックし、「次元の作成」を選択します。「新規次元の追加」ダイアログ・ボックスが表示されます。


- 2 **各次元の「ローカル次元」または「共有次元」**を選択します。

ヒント： アプリケーションにメンバーのみを追加するには、共有ライブラリで次元を右クリックして、「アプリケーション・ビューに追加」を選択します。[154 ページの「アプリケーションへのメンバーの追加」](#)を参照してください。

共有次元およびローカル次元の詳細は、[82 ページの「共有次元およびローカル次元の理解」](#)を参照してください。

- 3 **必要なすべての次元をアプリケーションに追加**します。(メジャー、AllocationType、POV など。)

展開されたアプリケーションはすべての次元をリスト表示します。

ヒント： 共有ライブラリにメンバーを追加し、アプリケーションに次元を追加した場合、「リフレッシュ」ボタンをクリックすると、アプリケーションに新規メンバーが表示されます。

- 4 NoMember が最後の Gen2 の位置に移動するように次元の順序を変更します。[194 ページの「Profitability and Cost Management モデルの子メンバーの順序変更」](#)を参照してください。
- 5 必要に応じて、アプリケーション設定を変更します。[192 ページの「アプリケーション設定の変更」](#)を参照してください。

アプリケーション設定の変更

アプリケーションの作成の次の手順は、アプリケーションのプロパティ、関連付けおよび他のアプリケーション設定の変更です。ブランク・アプリケーションを作成し、次元ライブラリを使用してアプリケーション設定を変更する場合、変更を加えるためにウィザードではなく次元ライブラリを使用するという点を除けば、同様のオプションを使用できます。

適切なオプションを使用して、アプリケーション設定を変更します:

- ブランク・アプリケーションの場合は次元ライブラリを使用します。192 ページの「[次元ライブラリを使用したアプリケーション設定の変更](#)」を参照してください
- 自動生成アプリケーションの場合はアプリケーション・ウィザードを使用します。193 ページの「[アプリケーション・ウィザードを使用したアプリケーション設定の変更](#)」を参照してください

注: 次元の関連付けは、共有階層に必要ですが、すべてのモデルで必要というわけではありません。

次元ライブラリを使用したアプリケーション設定の変更

次元ライブラリには、共有ライブラリ、アプリケーションおよびプロパティ・グリッドが表示されます。右クリック・メニューを使用して、アプリケーション次元を変更し、次のアクションを実行できます:

- POV 次元のプロパティを設定します。193 ページの「[POV 次元のプロパティの設定](#)」を参照してください。
- 複数の POV 次元の POV 表示順序を設定します。194 ページの「[Profitability and Cost Management モデルの子メンバーの順序変更](#)」を参照してください。
- 次元別名の設定 - 221 ページの「[次元別名の設定](#)」を参照してください。
- 次元の関連付けおよび既存の次元の関連付けの表示 - 220 ページの「[次元の関連付けの表示](#)」を参照してください。
- アプリケーション・メンバーシップの表示 - 223 ページの「[アプリケーション・メンバーシップの表示](#)」を参照してください。
- 次元の作成 - 81 ページの「[次元の作成](#)」を参照してください。
- 次元の除去 - 220 ページの「[次元の除去](#)」を参照してください。
- 次元のコピー - 92 ページの「[次元のコピー](#)」を参照してください。
- 次元の切離し - 218 ページの「[ローカル次元の共有への変換](#)」を参照してください。
- プロパティ値の変更 - 146 ページの「[プロパティ値の編集](#)」を参照してください。
- メンバーの検索、メンバーの除外および基本メンバーの設定 - 216 ページの「[共通アプリケーション・タスク](#)」を参照してください。

アプリケーション・ウィザードを使用したアプリケーション設定の変更

ウィザードを使用してアプリケーションを作成する場合、アプリケーションの次元およびメンバーが左側に表示され、プロパティ・グリッドが右側に表示され、検証および配置オプションが下部に表示されます。

- POV 次元のプロパティを設定します。193 ページの「POV 次元のプロパティの設定」を参照してください。
- 複数の POV 次元の POV 表示順序を設定します。194 ページの「Profitability and Cost Management モデルの子メンバーの順序変更」を参照してください。
- 次元別名の設定 - 221 ページの「次元別名の設定」を参照してください。
- アプリケーション・メンバーシップの表示 - 223 ページの「アプリケーション・メンバーシップの表示」を参照してください。
- 次元の関連付けの表示 - 220 ページの「次元の関連付けの表示」を参照してください。
- 次元の同期 - 219 ページの「共有ライブラリを使用した次元の同期」を参照してください。
- メンバーの作成 - 131 ページの「メンバーの作成」を参照してください。
- 共有メンバーの挿入 - 132 ページの「共有メンバーの操作」を参照してください。
- 子の順序変更 - 194 ページの「Profitability and Cost Management モデルの子メンバーの順序変更」を参照してください。
- 次元パフォーマンス設定の変更 - 222 ページの「次元のソート順と次元密度の設定」を参照してください。
- 孤立メンバーの管理 - 145 ページの「孤立メンバーの管理」を参照してください。

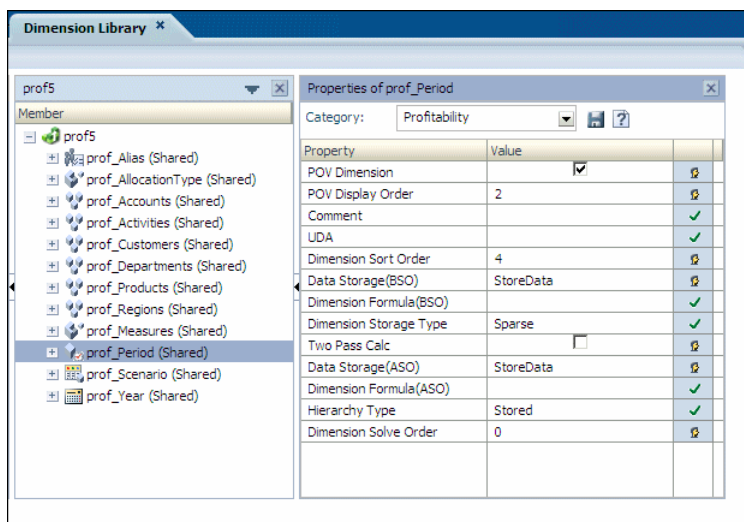
POV 次元のプロパティの設定

Profitability and Cost Management モデルごとに、少なくとも 1 つの POV (つまり視点)次元を設定する必要があります。POV 次元は、任意のカスタム値に設定できますが、通常は、年、期間、シナリオなどの期間を示します。

複数の POV 次元が指定されている場合、POV の表示順序も設定して表示の順序とステージング・テーブルを制御する必要があります。Performance Management Architect で設定された POV の表示順序は、Profitability and Cost Management で自動的に取得されます。

▶ POV 次元プロパティを設定するには:

- 1 次元ライブラリで、最初の POV 次元(年など)を選択します。



- 2 プロパティ・グリッドで「カテゴリ」の下の「Profitability」を選択します。
- 3 アプリケーションの POV 次元については、「POV Dimension」プロパティを選択します。
- 4 オプション: 期間やシナリオなど、他の POV 次元を選択するには、手順 1 から手順 3 を繰り返します。
- 5 オプション: 複数の POV 次元が選択された場合、POV 次元ごとに「POV の表示順序」を設定します。

「POV の表示順序」セルをダブルクリックして、選択した POV 次元のシーケンス番号を入力します。たとえば、年、期間およびシナリオが POV 次元として設定されている場合、年の POV の表示順序に 1、期間に 2、およびシナリオに 3 を表示順序として設定します。

Profitability and Cost Management モデルの子メンバーの順序変更

モデル内のすべてのビジネス次元については、NoMember がメンバー・リストの最後のメンバーとして表示されるようにリストを順序変更する必要があります。これを行わないと、モデルの検証は失敗します。

NoMember が最後の位置に移動されていれば、特定の要件に合わせてメンバーの順序も変更できます。

注: この手順は、別名、AllocationType、メジャー、期間、シナリオまたは年などのシステム次元では必要ありません。

▶ 子を順序変更するには:

- 1 EPM Workspace から、「ナビゲート」、「管理」、「次元ライブラリ」の順に選択し、共有ライブラリを表示します。
- 2 「共有ライブラリ」で、順序を変更する次元を右クリックし、「子の順序変更」を選択します。

「子の順序変更」ダイアログ・ボックスが表示されます。

- 3 移動するメンバーを選択し、上下矢印を使用して子の順序を変更します。

注： NoMember 次元がリストの最後に移動したことを確認します。最後にならない場合、配置は失敗します。

- 4 **手順 3** を繰り返して、すべてのメンバーを順序付けます。
- 5 変更をプレビューするには、「プレビュー」をクリックします。
- 6 「保存」をクリックします。

検証および配置

アプリケーション・ウィザードを使用している場合、アプリケーションの次元およびメンバーの変更が終了したとき、アプリケーションを検証して、アプリケーションの作成の終了前にエラーを修正できます。ウィザードの検証オプションおよび配置オプションを使用しないで、後でアプリケーション・ライブラリで配置オプションを使用することもできます。

アプリケーションを手動で作成する場合は、アプリケーション・ライブラリのオプションを使用してアプリケーションを検証および配置します。検証および配置の詳細は、次を参照してください。

▶ ウィザードを使用してアプリケーションを検証および配置するには:

- 1 アプリケーション・ウィザードの「アプリケーション設定」画面で、「検証」を選択し、問題を表示して配置前に解決します。

すべてのエラーはグリッドに表示され、エラー・タイプとエラー・メッセージが示されます。

- 2 検証エラーが発生した場合は、アプリケーションを配置する前にそれらを修正します。
- 3 アプリケーションを作成した後に配置するには、「アプリケーション設定」画面で「終了時に配置」を選択します。
- 4 「終了」をクリックします。

「終了時に配置」を選択した場合、「配置」ダイアログ・ボックスが表示されます。それ以外の場合は、アプリケーションが次元ライブラリに表示されません。

詳細 Profitability and Cost Management アプリケーションの作成

アプリケーション・ウィザードを使用して、詳細 Profitability and Cost Management アプリケーションを作成できます。次の項では、Profitability and Cost Management アプリケーションの作成について順を追って説明します:

- [185 ページの「アプリケーション・タイプの選択」](#)
- [187 ページの「次元タイプの選択」](#)
- [192 ページの「アプリケーション設定の変更」](#)

アプリケーション・タイプの選択

▶ 詳細 Profitability and Cost Management アプリケーションを作成するには:

- 1 フラット・ファイルのインポートまたは Performance Management Architect インタフェース・テーブルのインポートを使用して Performance Management Architect に新規共有ライブラリを移入します。

注意 アプリケーションに含めるビジネス次元(汎用、勘定科目、エンティティ、時間、国など)は、アプリケーションを作成する前に、次元ライブラリに追加します。これを行わないと、アプリケーション・ウィザードでの選択に次元を使用できません。「次元の作成」を参照してください。

- 2 「ナビゲート」、「管理」、「アプリケーション・ライブラリ」の順に選択します。
アプリケーション・ライブラリが表示されます。
- 3 「ファイル」、「新規」、「アプリケーション」の順に選択します。
ウィザードの最初の「アプリケーション・タイプ」画面が表示されます。

The screenshot shows the Oracle Enterprise Performance Management System Workspace, Fusion Edition interface. The top navigation bar includes 'Navigate', 'File', 'View', 'Tools', and 'Help'. The main window is titled 'Application Creation Wizard' and is divided into three tabs: 'Application Library', 'Dimension Selection', and 'Application Settings'. The 'Application Settings' tab is active, showing the 'Application Information' section with the following fields: 'Name' (hpmdp1), 'Type' (Profitability), 'Description' (empty), 'Create Blank Application' (unchecked), and 'Auto Create Local Dimensions' (checked). Below this is the 'Profitability' section with 'Create as Detailed application' (checked). At the bottom, there are 'Help', 'Back', 'Next', 'Finish', and 'Cancel' buttons.

- 4 アプリケーション名を入力します。
名前は7文字以内で命名し、「&」(アンパサンド)を含む特殊文字を使用しないでください。
- 5 「タイプ」ドロップダウン・リストから「Profitability」を選択します。
- 6 オプション: 説明を入力します。

7 **オプション:** 次元を手動でブランク・アプリケーションに追加するには、「ブランク・アプリケーションの作成」を選択し、「終了」をクリックします。190 ページの「手動による次元の追加」を参照してください。

8 **オプション:** すべての必須次元を自動的に作成するには、「ローカル次元の自動作成」を選択します。

「ローカル次元の自動作成」を選択すると、アプリケーションに必要なすべての次元について新規次元が自動的に作成されます。各新規次元の次元名は、次元タイプにカッコで囲んだ(新規)が付いた名前になります。

9 「Profitability」で、「Detailed アプリケーションとして作成」をクリックします。

10 「次へ」をクリックします。

ウィザードの2番目の画面である「次元の選択」が表示されます。163 ページの「次元の選択」および187 ページの「次元タイプの選択」を参照してください。

次元タイプの選択

アプリケーションを作成した後、アプリケーションに含める次元タイプを選択する必要があります。次元タイプとそれらに関連付けられたメンバーの詳細は、『Oracle Hyperion Profitability and Cost Management 管理者ガイド』を参照してください。

詳細 Profitability and Cost Management アプリケーションに必要な次元タイプは次のとおりです:

- MeasuresDetailed 次元は予約済次元であり、計算およびステージの貸借一致に必要です。これには AllocationMeasures が含まれていますが、ドライバ・メジャーが含まれていません。

注意 この次元は編集しないでください。変更を行うと、データの損失やモデルの破損が生じる可能性があります。

- ユーザーは、少なくとも1つの視点(POV)次元タイプを定義する必要があります。モデル POV により、選択した時点または期間のモデル情報に関する具体的なビューを参照できます。たとえば、POV 次元タイプには次のような次元がいくつか含まれる場合があります:
 - 年
 - 時間
 - 期間
 - シナリオ
 - 月
 - 財務四半期
 - 季節
- 別名次元はオプションで、モデル内で別名を使用する場合にのみ必要です。

注意 重複メンバー名または別名は使用できません。

- 少なくとも1つのビジネス次元タイプをユーザーが定義する必要があります。ビジネス次元は、ビジネス固有の部署、総勘定元帳の勘定科目、アクティビティ、場所、顧客または製品などのモデル内のビジネス要素を説明するために作成されます。この次元タイプは、集約ストレージ・アウトラインには適用されません。

汎用ビジネス次元には、次の例の一部が含まれ、1つ以上のステージまたはモデルに適用される場合があります:

- 会計次元には、純利益や売上などアプリケーション内の勘定科目タイプの情報のチャートが含まれる場合があります。
- 組織次元は、部門、タスク・フォース、または人事や情報技術などのその他の内部または外部グループのアウトラインを示す場合があります。
- 国内または国次元は、複数の国、州、地域または場所でのビジネス・アクティビティの追跡に使用される場合があります。
- 属性次元は、ビジネス次元に関連付けられた次元の特殊なタイプであり、別の関連する次元のメンバーを分類するために使用できるメンバーを含みます。属性次元は、製品のサイズ、色など、データの特性を示します。

Performance Management Architect には、2つの属性次元タイプがあります:

- 属性次元:
 - 属性は、Boolean、Date、Numeric、Text などの異なる構造を使用して作成できます。
 - 属性には階層があり、階層は集約値に対してロールアップできます。
 - 1つのメンバーに関連付けられるのは、指定した属性次元の1つの属性のみです。
- ユーザー定義属性次元(UDA):
 - 属性は、Text を使用してのみ作成できます。
 - UDA には階層がないため、合計を生成するためのレポートに容易に使用することはできません。
 - 複数の UDA を1つのメンバーに関連付けることができます。

各タイプの属性次元には、モデルの要件とレポート・ニーズに応じて異なる利点があります。

注: モデル・ステージは次元ではないため、Performance Management Architect では使用できません。Profitability and Cost Management では、ステージはモデルに追加され、次元を論理的な手順またはステージに整理するために使用されます。

アプリケーションを作成した後、適切な手順を使用してアプリケーションに追加する次元を選択します:

- ウィザードを使用している場合は、[188 ページの「ウィザードを使用した次元の追加」](#)を参照してください。

- ブランク・アプリケーションを作成した場合は、190 ページの「[手動による次元の追加](#)」を参照してください。

ウィザードを使用した次元の追加

アプリケーション・ウィザードを使用すると、必要なすべての次元が自動的に表示されます。正確な一致がある場合は、その次元タイプの次元列に自動的に入力されます。Profitability and Cost Management の必要な次元タイプは、自動的に分類されて、次の影付きヘッダーとともに表示されます：

- MeasuresDetailed 次元は予約済の次元で、計算を処理できる必要があります。この次元には、ステージの貸借一致やその他の検証アクティビティ(コントリビューション、調整など)をサポートするために必要な配賦メンバーが含まれます。MeasuresDetailed 次元には、ドライバ・メジャーが含まれていません。

注意 この次元のメンバーは編集しないでください。変更を行うと、データの損失やモデルの破損が生じる可能性があります。

- ユーザーは、少なくとも1つの視点(POV)次元タイプを定義する必要があります。モデル POV により、選択した時点または期間のモデル情報に関する具体的なビューを参照できます。たとえば、POV 次元タイプには次のような次元がいくつか含まれる場合があります：
 - 年
 - 時間
 - 期間
 - シナリオ
 - 月
 - 財務四半期
 - 季節
- 別名次元(オプション)

注意 重複メンバー名または別名は使用できません。

- 少なくとも1つのビジネス次元タイプをユーザーが定義する必要があります。ビジネス次元は、ビジネス固有の部署、総勘定元帳の勘定科目、アクティビティ、場所、顧客または製品などのモデル内のビジネス要素を説明するために作成されます。

汎用ビジネス次元には、次の例の一部が含まれ、1つ以上のステージまたはモデルに適用される場合があります：

- 会計次元には、純利益や売上などアプリケーション内の勘定科目タイプの情報のチャートが含まれる場合があります。
- 組織次元は、部門、タスク・フォース、または人事や情報技術などのその他の内部または外部グループのアウトラインを示す場合があります。
- 国内または国次元は、複数の国、州、地域または場所でのビジネス・アクティビティの追跡に使用される場合があります。

- 属性次元はオプションであり、ビジネス次元に関連付けられた特殊なタイプの次元を定義します。これには、関連する別の次元のメンバーを分類するために使用できるメンバーが含まれます。属性次元は、製品のサイズ、色など、データの特性を示します。

Performance Management Architect には、2つの属性次元タイプがあります:

- 属性次元:
 - 属性は、Boolean、Date、Numeric、Text などの異なる構造を使用して作成できます。
 - 属性には階層があり、階層は集約値に対してロールアップできます。
 - 1つのメンバーに関連付けられるのは、指定した属性次元の1つの属性のみです。
- ユーザー定義属性次元(UDA):
 - 属性は、Text を使用してのみ作成できます。
 - UDA には階層がないため、合計を生成するためのレポートに容易に使用することはできません。
 - 複数の UDA を1つのメンバーに関連付けることができます。

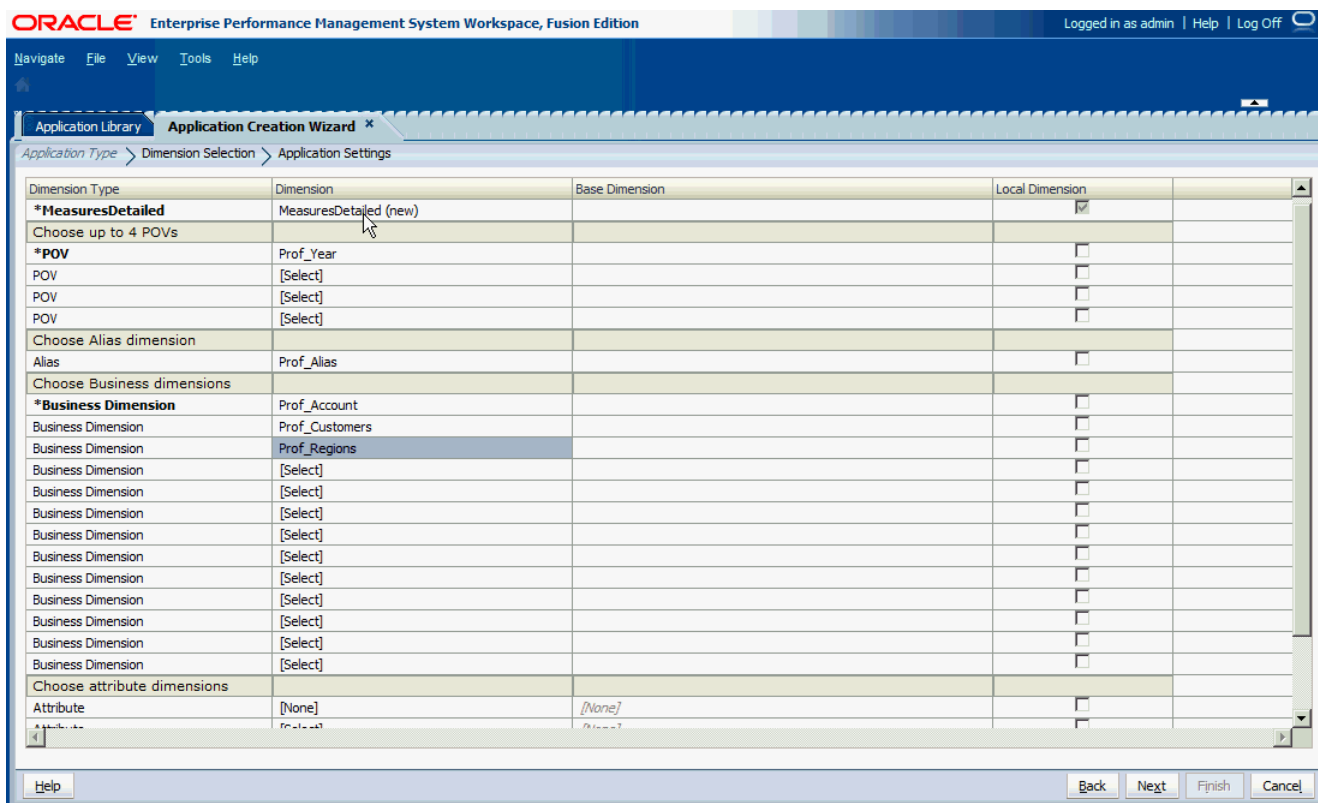
各タイプの属性次元には、モデルの要件とレポート・ニーズに応じて異なる利点があります。

「ローカル次元の自動作成」を選択した場合、必要な次元ごとに新規ローカル次元が作成されます。各新規次元の名前は、次元タイプにかっこで囲まれた(New)が付いたものになります。たとえば、Account (New)となります。

注意 勘定科目、エンティティ、時間、国などアプリケーションに含めるビジネス次元は、アプリケーションを作成する前に次元ライブラリに追加する必要があります。そうしないと、アプリケーション・ウィザードで次元を選択できません。「次元の作成」を参照してください。

▶ 次元を選択するには:

- 1 「次元の選択」タブ(アプリケーション・ウィザードの手順 2)の「次元のタイプ」で、必要な次元タイプを確認します。



2 「MeasuresDetailed」を選択します。

注意 これは、詳細 Profitability アプリケーションに必要な次元ですが、変更できません。

3 既存の各次元をアプリケーションに追加するには、「次元」列の「[選択]」をクリックすると、その次元タイプに使用可能な次元のドロップダウン・リストが表示されます。

関連次元タイプの次元のみが表示されます。たとえば、次元を POV 次元タイプにマッピングしている場合は、POV 次元のみがリストに表示されます。

4 ドロップダウン・リストから次元を選択します。

5 オプション: 新規次元を次のように作成します:

- 1 「次元」列で、「[選択]」をクリックすると、その次元タイプに使用可能な次元のドロップダウン・リストが表示されます。
- 2 ドロップダウン・リストから、「[新規次元の作成]」を選択します。

「新規次元の追加」ダイアログ・ボックスが表示されます。

The image shows a dialog box titled "Add New Dimension". It contains three input fields: "Name:" (a single-line text box), "Description:" (a multi-line text area), and "Type:" (a dropdown menu currently showing "Period"). Below the fields are three buttons: "Help", "OK", and "Cancel".

3. 新規次元の「名前」と「説明」を入力します。「タイプ」は、「次元のタイプ」列で選択した次元タイプに基づいて、自動的に選択されます。
4. 「OK」をクリックします。

注： アプリケーション・ウィザードで次元を作成する場合、その次元は常にローカル次元になり、アプリケーション・ウィザードで共有できません。次元を共有する場合は、次元ライブラリを使用する必要があります。

次の画面に移動する前に、すべての必須次元を、次元または[該当なし]にマップする必要があります。

- 6 **オプション:** 次元をローカル次元として設定するには、各行の最後にある「ローカル次元」チェック・ボックスを選択します。
- 7 「次へ」をクリックします。
「アプリケーション設定」画面が表示されます。

手動による次元の追加

ブランク・アプリケーションを作成する場合は、次元ライブラリを使用して次元を選択します。次元ライブラリには、次の3つのペインがあります：

- **共有ライブラリ** - 左側に表示され、共有ライブラリで現在使用可能なすべての次元が表示されます。
次元ライブラリに次元をロードする方法の詳細は、[第3章「メタデータのインポート」](#)を参照してください。
- **アプリケーション** - 中央部に表示され、展開されると現在のアプリケーションのすべての次元の名前をリスト表示します。
- **プロパティ・グリッド** - 右側に表示され、選択した次元またはメンバーのすべてのプロパティを表示します。
プロパティを編集する方法の詳細は、[146 ページの「プロパティ値の編集」](#)を参照してください。

ブランク・アプリケーションを作成したら、次元を追加できます。

▶ ブランク・アプリケーションに次元を追加するには、次の手順を行います:

- 1 次元ライブラリで、共有ライブラリからアプリケーションに次元をドラッグします。

「次元のコピー」ダイアログ・ボックスが表示されます。

ヒント: 新規ローカル次元を作成するには、アプリケーション・ビューでアプリケーション名を右クリックし、「次元の作成」を選択します。「新規次元の追加」ダイアログ・ボックスが表示されます。


- 2 各次元の「ローカル次元」または「共有次元」を選択します。

ヒント: アプリケーションにメンバーのみを追加するには、共有ライブラリで次元を右クリックして、「アプリケーション・ビューに追加」を選択します。154 ページの「アプリケーションへのメンバーの追加」を参照してください。

共有次元およびローカル次元の詳細は、82 ページの「共有次元およびローカル次元の理解」を参照してください。

- 3 必要なすべての次元をアプリケーションに追加します。(MeasuresDetailed、AllocationType、POV など。)

展開されたアプリケーションはすべての次元をリスト表示します。

ヒント: 共有ライブラリにメンバーを追加し、アプリケーションに次元を追加した場合、「リフレッシュ」ボタンをクリックすると、アプリケーションに新規メンバーが表示されます。

- 4 NoMember が最後の Gen2 の位置に移動するように次元の順序を変更します。194 ページの「Profitability and Cost Management モデルの子メンバーの順序変更」を参照してください。

- 5 必要に応じて、アプリケーション設定を変更します。192 ページの「アプリケーション設定の変更」を参照してください。

アプリケーション設定の変更

アプリケーションの作成の次の手順は、アプリケーションのプロパティ、関連付けおよび他のアプリケーション設定の変更です。ブランク・アプリケーションを作成し、次元ライブラリを使用してアプリケーション設定を変更する場合、変更を加えるためにウィザードではなく次元ライブラリを使用するという点を除けば、同様のオプションを使用できます。

適切なオプションを使用して、アプリケーション設定を変更します:

- ブランク・アプリケーションの場合は次元ライブラリを使用します。192 ページの「次元ライブラリを使用したアプリケーション設定の変更」を参照してください

- 自動生成アプリケーションの場合はアプリケーション・ウィザードを使用します。193 ページの「[アプリケーション・ウィザードを使用したアプリケーション設定の変更](#)」を参照してください

注： 次元の関連付けは、共有階層に必要ですが、すべてのモデルで必要というわけではありません。

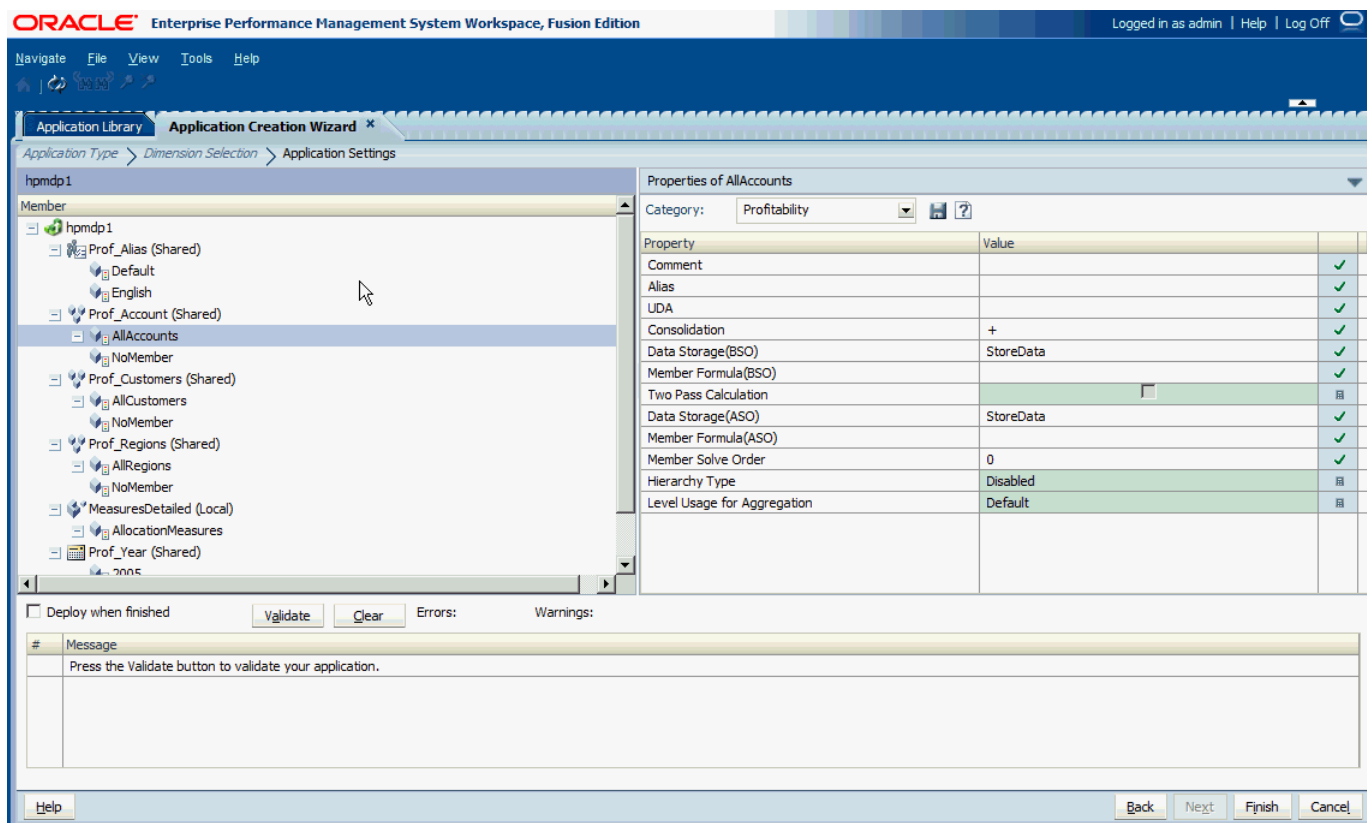
次元ライブラリを使用したアプリケーション設定の変更

次元ライブラリには、共有ライブラリ、アプリケーションおよびプロパティ・グリッドが表示されます。右クリック・メニューを使用して、アプリケーション次元を変更し、次のアクションを実行できます：

- POV 次元のプロパティを設定します。193 ページの「[POV 次元のプロパティの設定](#)」を参照してください。
- 複数の POV 次元の POV 表示順序を設定します。194 ページの「[Profitability and Cost Management モデルの子メンバーの順序変更](#)」を参照してください。
- 次元別名の設定 - 221 ページの「[次元別名の設定](#)」を参照してください。
- 次元の関連付けおよび既存の次元の関連付けの表示 - 220 ページの「[次元の関連付けの表示](#)」を参照してください。
- アプリケーション・メンバーシップの表示 - 223 ページの「[アプリケーション・メンバーシップの表示](#)」を参照してください。
- 次元の作成 - 81 ページの「[次元の作成](#)」を参照してください。
- 次元の除去 - 220 ページの「[次元の除去](#)」を参照してください。
- 次元のコピー - 92 ページの「[次元のコピー](#)」を参照してください。
- 次元の切離し - 218 ページの「[ローカル次元の共有への変換](#)」を参照してください。
- プロパティ値の変更 - 146 ページの「[プロパティ値の編集](#)」を参照してください。
- メンバーの検索、メンバーの除外および基本メンバーの設定 - 216 ページの「[共通アプリケーション・タスク](#)」を参照してください。

アプリケーション・ウィザードを使用したアプリケーション設定の変更

ウィザードを使用してアプリケーションを作成する場合、アプリケーションの次元およびメンバーが左側に表示され、プロパティ・グリッドが右側に表示され、検証および配置オプションが下部に表示されます。



次の手順を参照してください:

- 複数の POV 次元の POV 表示順序を設定します。193 ページの「POV 次元のプロパティの設定」を参照してください。
- 次元別名の設定 - 221 ページの「次元別名の設定」を参照してください。
- アプリケーション・メンバーシップの表示 - 223 ページの「アプリケーション・メンバーシップの表示」を参照してください。
- 次元の関連付けの表示 - 220 ページの「次元の関連付けの表示」を参照してください。
- 次元の同期 - 219 ページの「共有ライブラリを使用した次元の同期」を参照してください。
- メンバーの作成 - 131 ページの「メンバーの作成」を参照してください。
- 共有メンバーの挿入 - 132 ページの「共有メンバーの操作」を参照してください。
- 子の順序変更 - 194 ページの「Profitability and Cost Management モデルの子メンバーの順序変更」を参照してください。
- 次元パフォーマンス設定の変更 - 222 ページの「次元のソート順と次元密度の設定」を参照してください。
- 孤立メンバーの管理 - 145 ページの「孤立メンバーの管理」を参照してください。

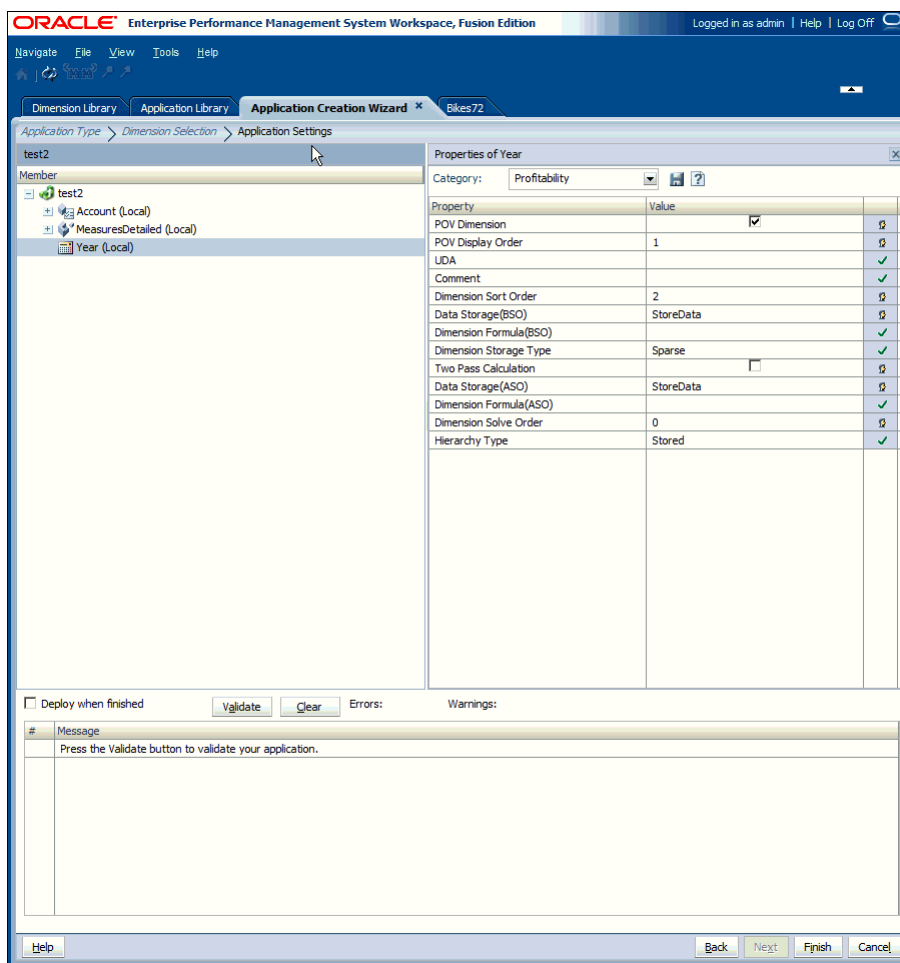
POV 次元の表示順序の設定

Profitability and Cost Management モデルごとに、少なくとも 1 つの POV (つまり視点)次元を設定する必要があります。POV 次元は、任意のカスタム値に設定できますが、通常は、年、期間、シナリオなどの期間を示します。

複数の POV 次元が指定されている場合、POV の表示順序も設定して表示の順序とステージング・テーブルを制御する必要があります。Performance Management Architect で設定された POV の表示順序は、Profitability and Cost Management で自動的に取得されます。

▶ POV 次元プロパティを設定するには:

- 1 アプリケーション作成ウィザードの「アプリケーション設定」タブで、年などの POV 次元を選択します。



- 2 プロパティ・グリッドで「カテゴリ」の下の「Profitability」を選択します。
- 3 アプリケーションの POV 次元については、「POV Dimension」プロパティを選択します。
- 4 オプション: 複数の POV 次元が選択された場合、POV 次元ごとに「POV の表示順序」を設定します。

「POV の表示順序」セルをダブルクリックして、選択した POV 次元のシーケンス番号を入力します。たとえば、年、期間およびシナリオが POV 次元とし

て設定されている場合、年の POV の表示順序に 1、期間に 2、およびシナリオに 3 を表示順序として設定します。

- 5 **オプション:** 期間やシナリオなど、他の POV 次元を選択するには、**手順 1** から**手順 5** を繰り返し、それぞれ POV 表示順序を設定します。

詳細 Profitability and Cost Management モデルの子メンバーの順序変更

モデル内のすべてのビジネス次元については、NoMember がメンバー・リストの最後のメンバーとして表示されるようにリストを順序変更する必要があります。これを行わないと、モデルの検証は失敗します。

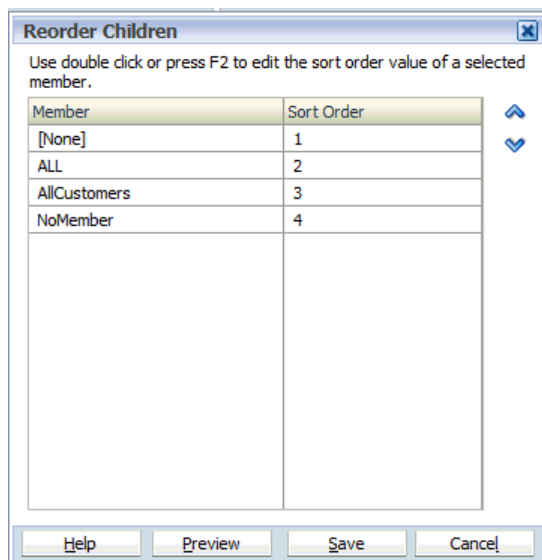
NoMember が最後の位置に移動されていれば、特定の要件に合わせてメンバーの順序も変更できます。

注: この手順は、Alias、Measures、Periods、Scenarios、Years などのシステム次元には必要ありません。

▶ 子を順序変更するには:

- 1 EPM Workspace から、「ナビゲート」、「管理」、「次元ライブラリ」の順に選択し、共有ライブラリを表示します。
- 2 「共有ライブラリ」で、順序を変更する次元を右クリックし、「子の順序変更」を選択します。

「子の順序変更」ダイアログ・ボックスが表示されます。



- 3 移動するメンバーを選択し、上下矢印を使用して子の順序を変更します。

注: NoMember 次元がリストの最後に移動したことを確認します。最後にならない場合、配置は失敗します。

- 4 **手順 3** を繰り返して、すべてのメンバーを順序付けます。
- 5 変更をプレビューするには、「プレビュー」をクリックします。

6 「保存」をクリックします。

検証および配置

アプリケーション・ウィザードを使用している場合、アプリケーションの次元およびメンバーの変更が終了したとき、アプリケーションを検証して、アプリケーションの作成の終了前にエラーを修正できます。ウィザードの検証オプションおよび配置オプションを使用しないで、後でアプリケーション・ライブラリで配置オプションを使用することもできます。

アプリケーションを手動で作成する場合は、アプリケーション・ライブラリのオプションを使用してアプリケーションを検証および配置します。検証と配置の詳細は、[付録 B「アプリケーションの検証」](#)を参照してください。

▶ ウィザードを使用してアプリケーションを検証および配置するには:

1 アプリケーション・ウィザードの「アプリケーション設定」画面で、「検証」を選択し、問題を表示して配置前に解決します。

すべてのエラーはグリッドに表示され、エラーまたは警告タイプおよびメッセージが表示されます。

2 検証エラーが発生した場合は、アプリケーションを配置する前にそれらを修正します。

3 アプリケーションを作成した後に配置するには、「アプリケーション設定」画面で「終了時に配置」を選択します。

4 「終了」をクリックします。

「終了時に配置」を選択した場合、「配置」ダイアログ・ボックスが表示されます。それ以外の場合は、アプリケーションが次元ライブラリに表示されません。

Essbase アプリケーションの作成

アプリケーション・ウィザードを使用して、Essbase アプリケーションを作成できます。次の各セクションで、Essbase (ASO)および Essbase (BSO)アプリケーションの作成について順を追って説明します。

- [210 ページの「アプリケーション・タイプの選択」](#)
- [211 ページの「次元の選択」](#)
- [213 ページの「アプリケーション設定の変更」](#)
- [215 ページの「検証および配置」](#)

Essbase ASO または BSO アプリケーションを作成するときに、アプリケーションの要件を確認することは重要です。[209 ページの「アプリケーション要件」](#)を参照してください。

Performance Management Architect および Essbase の次の制限事項に注意してください。

次は行えません:

- Performance Management Architect を使用して、ハイブリッド分析または拡張リレーショナル・アクセス・キューブを作成する。
- 複数のキューブがある既存の Essbase アプリケーションを Performance Management Architect に変換する(注意: Performance Management Architect では 1 つの(通貨以外の)キューブの変換のみサポートされます)。37 ページの「クラシック・アプリケーションの Performance Management Architect への変換」を参照してください。
- Performance Management Architect 内の式の検証

Performance Management Architect では次のものはサポートされません:

- 可変属性
- パーティション管理、ドリルスルー定義およびセキュリティを含むデータベース管理機能
- 複数データベースの概念。Performance Management Architect では、Essbase アプリケーションと Essbase データベース間の 1 対 1 関係が許可されます。

アプリケーション要件

Essbase アプリケーションを作成する際は、次のガイドラインと要件に注意してください:

- Essbase アプリケーションには、次元の固定されたセットは必要ありません。たとえば、1 つの汎用次元および 1 つのメンバーのみが含まれる Essbase アプリケーションを作成して配置できます。
- 別名メンバーを追加する場合は、このメンバーと関連付ける別名タイプの次元を作成する必要があります。次元の関連付けを作成する方法の詳細は、90 ページの「次元の関連付けの作成」を参照してください。
別名次元には、最大 10 個のメンバーを含められます。この次元には、少なくとも「Default」という名前のメンバーが必要です。
- 属性メンバーを追加する場合、メンバーを基本次元に関連付けます。次元の関連付けを作成する方法の詳細は、90 ページの「次元の関連付けの作成」を参照してください。
- Performance Management Architect では、属性タイプ「Text」のみがサポートされます。

注: Performance Management Architect の Auto Configure プロパティを変更しても、Essbase 内で上書きされないことがあります。Essbase アプリケーションで Dimension Storage Type プロパティを設定する場合は、Essbase にアプリケーションを配置または再配置する前に、Auto Configure プロパティ値を FALSE に設定する必要があります。

Essbase アプリケーションのプロパティと、次元およびメンバーについては、第 14 章「Essbase プロパティの操作」で説明します。

アプリケーションおよびデータベースの Essbase 要件の詳細は、『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』および『Oracle Essbase Administration Services オンラインヘルプ』を参照してください。

アプリケーション・タイプの選択

次の手順は、Essbase アプリケーションの作成方法を示します。

▶ Essbase (ASO)および Essbase (BSO)アプリケーションを作成するには:

- 1 「ファイル」、「新規」、「アプリケーション」の順に選択します。
- 2 アプリケーション名を入力します。
名前は 8 文字までに制限されます。さらに、特殊文字は使用できません。
- 3 「Essbase (ASO)」または「Essbase (BSO)」を選択します。
- 4 **オプション:** 説明を入力します。
説明に使用できる文字数は最大 255 文字です。
- 5 **オプション:** 「空白・アプリケーションの作成」を選択して空白・アプリケーションを作成し、次元ライブラリを使用して次元をアプリケーションにドラッグ・アンド・ドロップします。212 ページの「[手動での次元の追加](#)」を参照してください。

注: 「ローカル次元の自動作成」機能は、アプリケーションに必要なすべての次元について新規次元を自動的に作成するため、使用できません。
Essbase アプリケーションには、特定の必須次元はありません。

- 6 「Essbase データベース名」を入力します。

Essbase アプリケーションを作成すると、Essbase データベースも作成されます。データベース名は、すべての Essbase アプリケーションに必要です。データベース名に使用できる文字は 8 文字までです。具体的なデータベース命名規則については、『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』を参照してください。

- 7 **オプション:** 「Unicode」を選択します。

「Unicode」オプションを選択した場合は、次元のメンバーが Unicode 形式で格納され、すべての文字が使用可能になります。詳細は、『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』を参照してください。

- 8 次のいずれかのアクションを行います:

- アプリケーション・ウィザードを使用している場合は、「次へ」をクリックします。
「次元の選択」画面が表示されます。211 ページの「[ウィザードを使用した次元の追加](#)」を参照してください。
- 手動でアプリケーションを作成している場合は、「終了」をクリックします。

「次元ライブラリ」が表示されます。212 ページの「[手動での次元の追加](#)」を参照してください。

次元の選択

アプリケーション作成の次の手順は、アプリケーションへの次元の追加です。

ヒント： ウィザードを使用してアプリケーションを作成すると、必要なすべての次元が自動的に「次元の選択」画面に表示されます。Essbase の場合、次元は必須ではありませんが、少なくとも 1 つの次元を選択する必要があります。

アプリケーション・ウィザードを使用している場合は、211 ページの「[ウィザードを使用した次元の追加](#)」を参照してください。空のアプリケーションを作成した場合は、212 ページの「[手動での次元の追加](#)」を参照してください。

ウィザードを使用した次元の追加

アプリケーション・ウィザードを使用して次元を追加すると、次元タイプが自動的にカテゴリ化され、その見出しが暗く表示されます。たとえば、勘定科目次元、期間次元、エンティティ次元、通貨次元、およびシナリオやバージョンなどのその他の次元があります。

▶ 次元を定義するには:

1 次元に次元タイプをマップするには、「次元」列で「選択」をクリックします。

必須の次元タイプが「次元ライブラリ」内の次元と一致する場合、その次元名が「次元」列に表示されます。

2 次元を選択します。

ドロップ・ダウン・リストに表示される次元は次元のタイプにマップされます。たとえば、ある次元を勘定科目次元タイプにマップしている場合は、勘定科目次元のみがリストに表示されます。

場合によっては、新規次元を作成することがあります。

3 オプション: 新規次元を作成します。新規次元を作成するには:

1. 「次元」ドロップダウン矢印を使用して、「新規次元の作成」を選択します。

「新規次元の追加」ダイアログ・ボックスが表示されます。

注： アプリケーション・ウィザードで次元を作成する場合、その次元は常にローカル次元になり、アプリケーション・ウィザードで共有できません。次元を共有する場合は、「次元ライブラリ」を使用する必要があります。82 ページの「[共有次元およびローカル次元の理解](#)」を参照してください。

2. 次元の名前および説明を入力します。「次元タイプ」列で次元をマップする次元タイプに従って、タイプが自動的に選択されます。

3. 「OK」をクリックします。
- 4 必要に応じて、新規次元を選択または作成して続行します。
- 5 **既存の次元の場合:** 次元をローカルにする場合は、各行の末尾のローカル・チェック・ボックスを選択します。

注: 新規次元を作成した場合、次元を共有に変更することはできません。

共有次元およびローカル次元の詳細は、[82 ページの「共有次元およびローカル次元の理解」](#)を参照してください。

注: 次の画面に移動する前に、少なくとも1つの次元を次元にマップする必要があります。

- 6 「次へ」をクリックします。

「アプリケーション設定」画面が表示されます。[213 ページの「アプリケーション設定の変更」](#)を参照してください。

手動での次元の追加

ブランク・アプリケーションを作成する場合は、「次元ライブラリ」を使用して次元を選択します。「次元ライブラリ」には、次の3つのペインがあります:

- **共有ライブラリ** - 左側に表示されます。「共有ライブラリ」には現在使用可能なすべての次元が表示されます。

「次元ライブラリ」に次元をロードする方法の詳細は、[第3章「メタデータのインポート」](#)を参照してください。

- **アプリケーション** - 中央部に表示されます。展開されると現在のアプリケーションのすべての次元の名前をリスト表示します。
- **プロパティ・グリッド** - 右側に表示されます。選択した次元またはメンバーのすべてのプロパティを表示します。

プロパティを編集する方法の詳細は、[146 ページの「プロパティ値の編集」](#)を参照してください。

▶ アプリケーションに次元を追加するには:

- 1 「共有ライブラリ」からアプリケーションに次元をドラッグします。

「次元のコピー」ダイアログ・ボックスが表示されます。


ヒント: 新規ローカル次元を作成するには、「アプリケーション・ビュー」でアプリケーション名を右クリックし、「次元の作成」を選択します。「新規次元の追加」ダイアログ・ボックスが表示されます。

- 2 「ローカル次元」または「共有次元」を選択します。

ヒント: アプリケーションにメンバーのみを追加するには、「共有ライブラリ」で次元を右クリックして、「アプリケーション・ビューに追加」を選択します。[154 ページの「アプリケーションへのメンバーの追加」](#)を参照してください。

共有次元およびローカル次元の詳細は、[82 ページの「共有次元およびローカル次元の理解」](#)を参照してください。

展開されたアプリケーションはすべての次元をリスト表示します。

ヒント: 「共有ライブラリ」にメンバーを追加してアプリケーションにその次元を含めた場合、をクリックすると新規メンバーがアプリケーションに表示されます。

アプリケーション設定の変更

アプリケーション作成の次の手順は、アプリケーション・プロパティおよび他のアプリケーション設定の変更です。アプリケーションを手動で作成する場合、これらのオプションに加えて、「次元ライブラリ」にある他のオプションを使用します。

アプリケーションを手動で作成する場合、「次元ライブラリ」が、「共有ライブラリ」、「アプリケーション」および「プロパティ・グリッド」とともに表示されます。右クリック・メニューを使用すると、アプリケーション次元や最高レベルのアプリケーションを変更できます。

次元ライブラリを使用したアプリケーション設定の変更

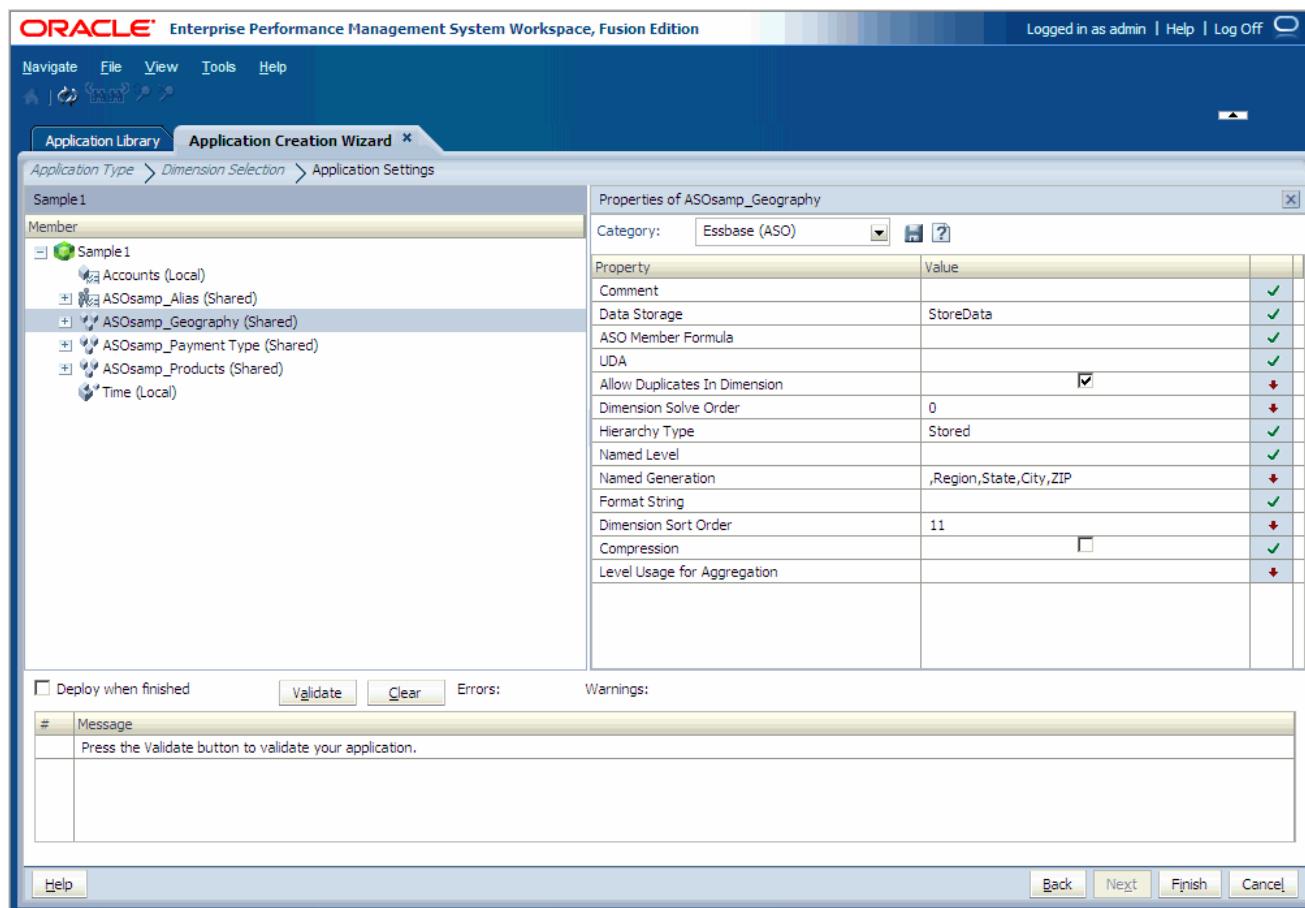
空のアプリケーションを作成した後、次元ライブラリでアプリケーション設定を変更する場合、次のアクションを行えます:

- 次元パフォーマンス設定の変更 - [222 ページの「次元のソート順と次元密度の設定」](#)を参照してください。
- 名前付きレベルの作成、変更および削除 - [94 ページの「名前付きレベルの操作\(Essbase \(ASO\)および Essbase \(BSO\)のみ\)」](#)を参照してください。
- 名前付き世代の作成、変更および削除 - [92 ページの「名前付き世代の操作\(Essbase \(ASO\)および Essbase \(BSO\)のみ\)」](#)を参照してください。
- 次元の関連付けおよび既存の次元の関連付けの表示 - [220 ページの「次元の関連付けの表示」](#)を参照してください。
- アプリケーション・メンバーシップの表示 - [223 ページの「アプリケーション・メンバーシップの表示」](#)を参照してください。
- 次元の作成 - [81 ページの「次元の作成」](#)を参照してください。
- 次元の除去 - [220 ページの「次元の除去」](#)を参照してください。
- 次元のコピー - [92 ページの「次元のコピー」](#)を参照してください。
- 次元の切離し - [218 ページの「ローカル次元の共有への変換」](#)を参照してください。

- プロパティ値の変更 - 146 ページの「プロパティ値の編集」を参照してください。
- メンバーの追加、メンバーの選択、メンバーの除外および基本メンバーの設定 - 154 ページの「アプリケーションのメンバーの操作」を参照してください。

アプリケーション・ウィザードを使用したアプリケーション設定の変更

ウィザードを使用してアプリケーションを作成する場合、アプリケーションの次元およびメンバーが左側に表示され、「プロパティ・グリッド」が右側に表示され、検証および配置オプションが下部に表示されます。



ウィザード・アプリケーションでは、右クリック・メニューを使用して、アプリケーションの次元またはメンバーを変更します。次のアクションを行えます:

- 「アプリケーション・メンバーシップの表示」 - 223 ページの「アプリケーション・メンバーシップの表示」を参照してください。
- 「メンバーの除外」 - 157 ページの「メンバーの除外」を参照してください。

アプリケーション・ウィザードを使用している場合、アプリケーションの次元およびメンバーの変更が終了したとき、アプリケーションを検証して、アプリケーションの作成の終了前にエラーを修正できます。215 ページの「検証および配置」を参照してください。

検証および配置

アプリケーション・ウィザードを使用している場合、アプリケーションの次元およびメンバーの変更が終了したとき、アプリケーションを検証して、アプリケーションの作成の終了前にエラーを修正できます。ウィザードの検証および配置オプションを使用しないで、後から「アプリケーション・ライブラリ」で配置オプションを使用することもできます。

アプリケーションを手動で作成する場合は、「アプリケーション・ライブラリ」のオプションを使用してアプリケーションを検証および配置します。検証および配置の詳細は、[238 ページの「アプリケーションの検証および配置」](#)を参照してください。

▶ ウィザードを使用してアプリケーションを検証および配置するには:

- 1 アプリケーション・ウィザードの「アプリケーション設定」画面で、「検証」を選択します。

すべてのエラーはグリッドに表示され、エラー・タイプとエラー・メッセージが示されます。

- 2 検証エラーが発生した場合は、アプリケーションを配置する前にそれらを修正します。

- 3 アプリケーションを配置するには、「アプリケーション設定」画面で「終了時に配置」を選択します。

- 4 「終了」をクリックします。

「終了時に配置」を選択した場合、「配置」ダイアログ・ボックスが表示されます。それ以外の場合は、アプリケーションが「次元ライブラリ」に表示されます。

汎用アプリケーションの作成

汎用アプリケーションは、次のことを行う場合に作成できます:

- 複製可能なテンプレート・アプリケーションを作成して、様々なタイプの配置可能なアプリケーションを作成する
- 共有ライブラリまたは配置可能なアプリケーションに含める準備ができるまで、独自の作業領域でローカル次元をモデル化する
- Performance Management Architect ファイル・ジェネレータから ADS ファイルを生成するためのソースとして使用する。[24 ページの「Performance Management Architect のユーティリティ」](#)を参照してください。

汎用アプリケーションを作成する場合、アプリケーション・ウィザードを使用してブランク・アプリケーションを作成します。その後、次元ライブラリを使用して次元を追加します。

▶ 汎用アプリケーションを作成するには:

- 1 「ファイル」、「新規」、「アプリケーション」の順に選択します。

ウィザードの最初の「アプリケーション・タイプ」画面が表示されます

2 アプリケーション名を入力します。

名前には特殊文字やスペースを含めないでください。また、名前に使用できる文字数は 10 文字以内です。

3 「汎用」を選択します。

4 説明を入力します。

5 「終了」をクリックします。

次元ライブラリが表示されます。

6 共有ライブラリからアプリケーションに次元を追加します。216 ページの「共通アプリケーション・タスク」を参照してください。

共通アプリケーション・タスク

ここでは、すべてのアプリケーション・タイプの共通タスクについて説明します。アプリケーション・タイプに固有のタスクについては、次の項を参照してください:

- 161 ページの「[連結アプリケーションの作成](#)」
- 169 ページの「[Planning アプリケーションの作成](#)」
- 185 ページの「[標準の Profitability and Cost Management アプリケーションの作成](#)」
- 208 ページの「[Essbase アプリケーションの作成](#)」
- 215 ページの「[汎用アプリケーションの作成](#)」

アプリケーションでの次元の追加

Performance Management Architect では、アプリケーション間で次元を管理および共有するのみではなく、アプリケーションに固有の独自の次元を使用可能にします。さらに、アプリケーション内で次元を共有からローカル(またはその逆)に変更することもできます。この機能により、他のアプリケーションとの次元共有要件を、アプリケーションの作成時に定義しなくても時間の経過とともに変更する柔軟性が、配置済アプリケーションにもたらされます。

ローカル次元を作成し、アプリケーションで次元をローカルに管理できます。その後で、それらのローカル次元を共有することにした(ローカルから共有に変換)、それらの次元を他のアプリケーションが独自に使用する別個の次元として共有ライブラリにコピーできます。一度次元が共有ライブラリに入れられると、次元を使用する他のアプリケーションに更新を様々な方法で配布できます(共有ライブラリを使用して継承したり、次元の同期を明示的に使用して共有ライブラリおよびアプリケーションの間で変更を移動します)。

次元の添付解除(共有からローカルに変換)により、共有ライブラリ内の次元およびアプリケーション内の対応する次元の間の共有リンクを切断しながら、アプリケーションで同じ次元構造およびプロパティ値の維持が使用可能になります。この場合、共有ライブラリ内の次元に加えられた変更は、アプリケーションに自動的に継承されなくなります。

▶ アプリケーションに次元を追加するには:

- 1 共有ライブラリからアプリケーションに次元をドラッグします。

「次元ステータス選択」ダイアログ・ボックスが表示されます。

- 2 「ローカル次元」または「共有次元」を選択します。
- 3 「OK」をクリックします。

アプリケーションで共有されている次元は、次元名の後に(共有)と表示されます。アプリケーションでローカルな次元は、次元名の後に(ローカル)と表示されます。

共有次元のローカルへの変換

共有次元を、アプリケーション内のローカル次元に変更する必要があることがあります。共有次元をローカルに変換すると、共有ライブラリで加えたその後のすべての変更は、アプリケーション内のそのローカル次元に適用されなくなります。

アプリケーションで次元を添付解除することにより、共有次元をローカルに変換できます。

「次元を添付解除」機能は、次元がアプリケーションで共有されている場合のみ使用できます。次元を添付解除すると、コピーを作成することにより共有次元がローカル次元に変換されます。次元がコピーされると、その次元は共有されなくなりますが、共有ライブラリに影響を与えず(またはその逆)に構造を変更可能なローカル次元となります。

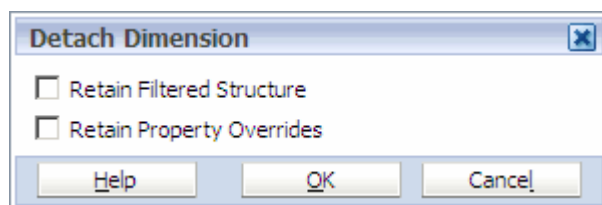
次元を再び共有にする場合は、アプリケーションに以前含められていた共有ライブラリ内の同じ次元と再接続できます。218 ページの「ローカル次元の共有への変換」を参照してください。

次元が共有からローカルに変換される場合、次元はアプリケーションにコピーされるため同期されません。プロパティの上書きとフィルタがローカル次元に適用されるため、作成される次元の構造とプロパティ値は共有バージョンと同じになります。

▶ 次元を添付解除するには:

- 1 アプリケーションで共有次元を右クリックします。
- 2 「次元を添付解除」を選択します。

「次元を添付解除」ダイアログ・ボックスが表示されます。



- 3 「フィルタされた構造を保持」または「プロパティの上書きを保持」を選択します。

共有次元にあったのと同じフィルタされた構造および上書きされたプロパティ値をローカル次元で保持するには、両方のオプションを選択します。共有次

元で作成したアプリケーション・レベルのフィルタ処理および上書きをすべて破棄し、共有ライブラリ内のソース次元と同じ構造を持つローカル次元を作成するには、ソース次元の継承されたプロパティ値を使用し、どちらのオプションも選択しないでください。

4 「OK」をクリックします。

注： アプリケーションでプロパティ値を変更した場合、そのプロパティ値はアプリケーション・レベルの上書き値となります。この場合、共有ライブラリのバージョンが変更されても、共有ライブラリ内の同じメンバーのプロパティ値から添付解除されます。アプリケーション・レベルのプロパティを継承する共有ライブラリのバージョンに戻すには、アプリケーションで右クリックして値を除去します。

ローカル次元の共有への変換

ローカル次元は、次の2つのタイプで構成されます：

- 共有ライブラリをソースとするが、共有ライブラリ次元にリンクされていない次元
- 共有ライブラリの外部をソースとする次元

アプリケーション内のローカル次元を共有に変換できます。変換時にローカル次元は共有となり、アプリケーションに元々含まれていた同じ共有次元に再接続されます。ローカル次元を変換する際、変更をマージするか、単に共有ライブラリ内の次元と置換するかを決定できます。

変更のマージ - 元の共有次元に変更を加えた場合、アプリケーション内の次元に加えられた構造変更がすべてマージ操作によりマージされます。共有ライブラリから既存の次元を選択すると、マージにより共有ライブラリ内の次元からアプリケーション内の次元にメンバーが追加されます。既存のメンバーのプロパティ値の違いは、アプリケーション内でローカル・プロパティ値として保持されます。マージする新規共有次元を作成することもできます。

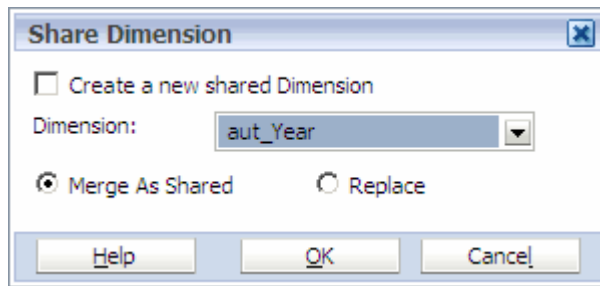
変更の置換 - アプリケーション内のローカル次元に変更を加え、共有次元に変換する場合、置換操作により、共有ライブラリ内の次元がアプリケーション内の次元の構造およびプロパティ値で置換されます。

他のアプリケーションが使用するために、ローカル次元を共有ライブラリに追加できます。

注： アプリケーションの配置後は、期間、ビュー、ICP、年、値、通貨の各連結次元を更新できません。

▶ ローカル次元を共有に変換するには：

- 1 アプリケーションでローカル次元を右クリックします。
- 2 「共有次元」を選択します。
「共有次元」ダイアログ・ボックスが表示されます。



3 次のいずれかのアクションを実行します:

- 次元のコピーを作成して新規コピーを作成するには、「新規共有次元の作成」を選択します。

注： 次元は、共有ライブラリ内と同じ名前で作成されます。すでに同じ名前が存在する場合は、新規共有次元を作成できないことを示すエラーが表示されます。共有アクションの結果、ローカル次元が共有ライブラリに移動して、アプリケーションに対して共有されるため、次元名は同じになる必要があります。これは、アプリケーションに次元を追加する際に、プロセスの最初から次元がその場所にドラッグされていたかのようなようです。アプリケーション内の共有次元は、共有ライブラリ内のソース次元と常に同じ名前になります。

- マージまたは置換する既存の次元を選択します。

4 「共有としてマージ」または「置換」を選択します。

5 「OK」をクリックします。

共有ライブラリを使用した次元の同期

アプリケーションでローカル次元を同期する方法は2つあります。1つは、共有ライブラリ内の次元からアプリケーション内のローカル次元に変更を同期する方法で、もう1つはアプリケーション内のローカル次元から共有ライブラリ内の次元に変更を同期する方法です。

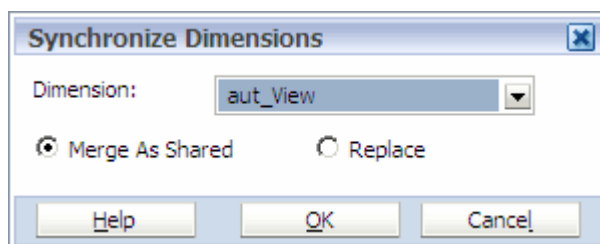
▶ 次元を同期するには:

1 アプリケーションでローカル次元を右クリックします。

2 「同期」を選択します。

3 次のいずれかを選択します:

- 共有ライブラリへ
- 共有ライブラリから



4 同期するターゲット次元を選択します(同期先または同期元)。

共有ライブラリの使用可能なターゲット次元のリストは、選択されたアプリケーション次元と同じ次元タイプの次元のみにフィルタされています。ローカル次元のコピーが共有ライブラリに存在する場合、デフォルトで自動的に選択されます。

5 「共有としてマージ」または「置換」を選択して、「OK」をクリックします。

「共有としてマージ」オプションを使用すると、2つの異なるアプリケーションから同様の次元をマージできます。たとえば、Performance Management Architect に変換された、同様の次元性(同様の製品次元など)を持つ2つのアプリケーションを変換する場合です。この場合、次元の1つを共有ライブラリにコピーして、もう1つの次元をこの次元にマージできます。これにより、個々のアプリケーションの構造を保持しながら、マスター次元を作成することもできます。

アプリケーションへの次元のインポート

Performance Management Architect アプリケーションには、次元を直接インポートできます。詳細は、[68 ページの「インポート・プロファイルの作成」](#) および [77 ページの「インポート・プロファイルの管理」](#) を参照してください。

次元の除去

- ▶ アプリケーションから次元を除去するには、次元を右クリックし、「次元の除去」を選択します。

次元の関連付けの表示

次元の関連付けによる、次元と次元メンバーに対するセキュリティ・クラスおよび通貨の割当てが使用可能になります。たとえば、エンティティ次元の場合、セキュリティ・クラスおよび通貨次元への関連付けを作成できます。関連付けは次元レベルで作成され、次元の下すべてのメンバーにより継承されます。次元の関連付けは、次元ライブラリで作成されます。[90 ページの「次元の関連付けの作成」](#) を参照してください。

次元の関連付けは、共有ライブラリおよびアプリケーション内の次元間の相互関係を示すために使用されます。たとえば、連結アプリケーション内には、セキュリティ・クラス、カスタム次元の交差(<DimensionAliasName>TopMember)などを参照する勘定科目次元プロパティがあります。これらの次元プロパティは、他の次元と直接関連しています。次元の関連付けによる、これらのプロパティおよび他の次元の間の関係の定義が使用可能になるため、参照先次元からの値の直接取得が使用可能になります。

Planning アプリケーションの次元の関連付けの例は、シナリオ次元の Start Period プロパティおよび End Period プロパティに、期間次元との次元の関連付けがあるという点です。シナリオ次元の Start Year プロパティおよび End Year プロパティには、年次元との次元の関連付けがあります。

次元の関連付けは、プロパティ値が別の次元のメンバーを参照するすべてのプロパティに作成されます。関連付けを作成すると、アプリケーションでその関連付けをアクティブ化する必要があります。

次元の関連付けのアクティブ化

- ▶ すべての次元の関連付けをアクティブ化するには、アプリケーション(最上位レベル)を右クリックし、「すべての関連付けをアクティブにする」を選択します。

注： マルチ通貨アプリケーションを使用している場合、通貨次元を基本エンティティ次元に関連付ける必要があります。すべての次元の関連付けをアクティブ化する場合、関連付けが自動的にアクティブになります。

1つ以上の次元の関連付けを作成する方法の詳細は、[90 ページの「次元の関連付けの作成」](#)を参照してください。

次元の関連付けの表示

次元の関連付けは自動ではないため、関連付けを表示する前に、すべての関連付けをアクティブ化する必要があります。

- ▶ 次元の関連付けを表示するには:

- 1 アプリケーションで、次元を右クリックし、「関連付けの表示」を選択します。
「次元の関連付けの表示」ダイアログ・ボックスが表示されます。

ヒント： 関連付けを削除するには、削除する関連付けを選択し、「削除」をクリックします。

- 2 「OK」をクリックします。

次元別名の設定

連結および Planning アプリケーションの場合は、配置済アプリケーションでの別の名前を表示するために、別名(つまり次元名)を変更できます。配置済アプリケーションでの次元の別の名前を、共有ライブラリまたはアプリケーションに表示されている名前と比較する場合は、次元別名プロパティが役立ちます。



- ▶ 次元別名プロパティを設定するには:

- 1 共有ライブラリで次元を選択します。
- 2 プロパティ・グリッドで、カテゴリを「システム」に変更します。
- 3 次元別名プロパティを右クリックし、新規次元名(別名)を入力します。

次元のソート順と次元密度の設定

Profitability and Cost Management および Essbase アプリケーションの次元パフォーマンス設定を変更できます。パフォーマンス設定には、次元ソート順と次元密度の変更が含まれます。

▶ 次元ソート順を設定するには:

- 1 次元ライブラリで、アプリケーション名を右クリックして「次元パフォーマンス設定」を選択します。
- 2 「次元(タイプ)」で次元を選択し、およびを使用して後の項で説明する次元ソート順を設定します。

Profitability and Cost Management

次元のソート順は、「別名」次元と「UDA」次元を除き、モデル内のすべての Profitability and Cost Management 次元に対して設定する必要があります。次元のソート順は連続し、一意であり、1 以上である必要があります。そうでないと、モデルの検証に失敗します。推奨される次元ソート順の設定は、[表 16](#) を参照してください。

表 16 推奨される Profitability and Cost Management の次元のソート順設定

次元タイプ	設定
メジャー	1 (デフォルト)
AllocationType	2
POV およびビジネス次元	3 以上
属性次元	最後の次元としてソートします。 たとえば、12 個の連続した次元のうち 4 個が属性次元である場合、属性次元には 9、10、11 および 12 を設定する必要があります。

Essbase

Essbase では、次元のソート順によって、次元がアウトラインに表示される順序が決定され、次元の計算順序に影響します。ASO データベースと BSO データベースの計算順序は、データベースの設計時にあらかじめ決定しておく必要があります。BSO データベースでは特に、次元の順序がパフォーマンスに影響することがあります。ASO および BSO データベースの計算については、『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』で説明されています。ただし、次の点に注意してください:

- ASO - 次元の解決順序は、ASO データベースによって使用され、次元のソート順を設定する際に考慮する必要があります。次元の解決順序またはソート順が設定されていない場合は、アウトラインの順序で集約が実行されず、属性は最後に計算されます。
- BSO - 次元のソート順は、Essbase に固有の計算順序に基づきます。密次元 (たとえば、時間次元やメジャー次元) が最初に計算され、疎次元が次に計算され、属性次元が最後に計算されます。

- 3 **オプション:** Essbase BSO および Profitability and Cost Management では、「密度」の下で次元に必要な密度を選択します。
- 4 「OK」をクリックします。

プロパティ・グリッドでの次元のソート順の設定

プロパティ・グリッドの Dimension Sort Order プロパティで、モデル次元の処理順序を設定できます。

次元ソート順は、別名次元と UDA 次元を除き、モデル内のすべての次元に設定されている必要があります。次元ソート順は連続し、一意であり、1 以上である必要があります。

注： 別名次元は、Profitability and Cost Management と Essbase には次元として存在しないため、次元ソート順では無視されます。

Profitability and Cost Management の場合、次元は、[表 16](#) で指定した順序でソートする必要があります。そうしないと、モデルの検証に失敗します:

▶ プロパティ・グリッドで次元のソート順を設定するには:

- 1 「ナビゲート」、「管理」、「次元ライブラリ」を順に選択します。
- 2 Profitability and Cost Management または Essbase アプリケーションを編集します。
- 3 次元を選択します。
- 4 プロパティ・グリッドで、編集しているアプリケーションのタイプに基づいて「Profitability」、「Essbase (BSO)」または「Essbase (ASO)」のカテゴリを選択します。
- 5 **Profitability アプリケーションの場合にのみ**、次のタスクを実行します:
 1. 次元のソート順を設定します。推奨される順序は、[222 ページの「次元のソート順と次元密度の設定」](#)を参照してください。
 2. モデルを検証します。[195 ページの「検証および配置」](#)を参照してください。

注： Essbase アプリケーションの場合は、アプリケーションの配置後に次元ソート順を変更する場合は、再配置して「メタデータの消去」および「完全配置」を選択する必要があります。

アプリケーション・メンバーシップの表示

アプリケーション・メンバーシップは、特定のメンバーまたは次元が使用されている場所を、使用可能なアプリケーションのリストに示します。この情報は、変更の影響を理解するのに役立ちます。たとえば、部門が再編成されたため、エンティティ次元を更新をプランニングしている場合です。アプリケーション・メンバーシップ機能を使用して、影響を受ける可能性があるアプリケーションや、変更スコープを特定します。

▶ アプリケーション・メンバーシップを表示するには:

- 1 次元またはメンバーを右クリックし、「アプリケーション・メンバーシップ」を選択します。

「アプリケーション・リスト」ダイアログ・ボックスには、次元がメンバーとなっているすべてのアプリケーションのリスト、および各アプリケーションの説明が表示されます。

- 2 「OK」をクリックします。

7

アプリケーションの管理

この章の内容

アプリケーション・ライブラリのナビゲート	225
アプリケーションの編集	229
アプリケーションを開く	229
アプリケーションを閉じる	230
アプリケーションの削除	230
アプリケーションの複製	230
アプリケーションの検索	233
アプリケーションの再登録	233
アプリケーションの比較	233
データ・フローの表示	236
アプリケーションの検証および配置	238
アプリケーション配置履歴の表示	256
アプリケーションの問題のトラブルシューティング	256
プランニング・データ・ソースの管理	265

- ▶ アプリケーション・ライブラリを開くには、「ナビゲート」、「管理」、「アプリケーション・ライブラリ」の順に選択します。

アプリケーション・ライブラリのナビゲート

アプリケーション・ライブラリには、すべてのアプリケーションが表示されます。上部ペインでアプリケーションを選択すると、下部ペインに要約情報が表示されます。下部ペインには、次の情報が表示されます:

- **要約** - 名前、タイプ、作成日、前回の配置日および関連付けられたデータ同期
- **説明** - 「新規アプリケーション」ダイアログ・ボックスまたはアプリケーション・ウィザードの「説明」フィールドに入力した情報
- **次元** - アプリケーションで使用可能な次元
- **プロパティ** - アプリケーションのステータス、デフォルト通貨および特定のプロパティ・セット
- **同期** - このアプリケーションのデータ同期
- **ルール/ルール・セット** - Calculation Manager で定義された、このアプリケーションのルールおよびルール・セット

アプリケーション・ライブラリ・ビューの変更

▶ アプリケーション・ライブラリ・ビューを変更するには:

1 「表示」、「詳細」の順に選択します。

The screenshot displays the Oracle Enterprise Performance Management System Workspace, Fusion Edition interface. The main window is titled "Application Library" and contains a table of applications. The table has columns for Name, Description, and Created On. Below the table, there are several sections: Summary, Dimensions, Properties, Description, Synchronizations, and Rules / Rules Set.

Name	Description	Created On
PrfAuto	Sudarsahns 1173	Thursday, November 11, 2010 3:27:...
prof6	***Created via GUI automation***	Wednesday, November 10, 2010 8:3:...
rwaso1	dup of rwaso1C	Tuesday, November 02, 2010 6:55:1...
rwaso1C	rwaso1C	Tuesday, November 02, 2010 6:14:1...
rwaso2	import shared	Tuesday, November 02, 2010 7:40:2...
rwbo1	dup of rwbo1C	Tuesday, November 02, 2010 7:07:2...
rwbo1C	rwbo1C	Tuesday, November 02, 2010 6:24:4...
rwbo2	import shared	Tuesday, November 02, 2010 8:00:0...

Summary
Name : rwp1n1
Type : Planning
Created : Tuesday, November 02, 2010 9:52:51 AM
Last Deployed : Friday, November 05, 2010 10:27:41 AM
Status : In sync with deployment

Dimensions
Account
Alias
Currency
Entity
Asset Class
Employee
Line Item
Period
Scenario

Properties
Status : Deployed
Application Type : General
Default Currency : USD
Plan Type : Plan1
Plan Type : Plan2
Plan Type : Plan3
Plan Type : Capex
Plan Type : Wrkforce

Description
acw wf / cap

Synchronizations

Rules / Rules Set

PlanType	Rulesets	Rules
Capex	0	19
Wrkforce	0	12

2 次の1つまたは複数のアクションを行います:

- 列を基準にソートするには、列ヘッダーをクリックします。たとえば、名前によってソートする場合は、「名前」をクリックします。
- 列を移動するには、列ヘッダーを新しい場所にドラッグします。
- ビューをアイコン・ビューに変更するには、「表示」、「アイコン」の順に選択します。

アプリケーションの整理

アプリケーション・ライブラリでフォルダを作成し、アプリケーションをフォルダに移動すると、アプリケーションを整理するのに役立ちます。

フォルダの作成

▶ フォルダを作成するには:

1 アプリケーション・ライブラリで、「ファイル」、「新規」、「フォルダ」の順に選択します。

「新規フォルダの作成」ダイアログ・ボックスが表示されます。

フォルダ名には、空白を使用できますが、特殊文字は使用できません。

- 2 フォルダ名および説明を入力し、「OK」をクリックします。

フォルダが作成されます。

フォルダへのアプリケーションの追加

アプリケーション・ライブラリでフォルダを作成したら、アプリケーションをフォルダに追加できます。

▶ アプリケーションをフォルダに追加するには:

- 1 アプリケーション・ライブラリで、アプリケーションをフォルダにドラッグするか、またはフォルダを右クリックして「アプリケーションの追加」を選択します。「アプリケーション・リスト」ダイアログ・ボックスが表示されます。
- 2 フォルダに追加する1つ以上のアプリケーションを選択します。

ヒント: [Shift]または[Ctrl]キーを押すと、「アプリケーション・リスト」ダイアログ・ボックスで複数のアプリケーションを選択できます。

- 3 「OK」をクリックします。

作成したフォルダにアプリケーションが移動します。


- 4 フォルダを開くには、フォルダをダブルクリックするか、フォルダを右クリックして「開く」を選択します。

アプリケーション・ライブラリでフォルダを開くと、アプリケーション・ライブラリ・ウィンドウの上部付近にフォルダの名前が表示されます。

ヒント: フォルダを開いている場合に新規アプリケーションを作成すると、アプリケーションは自動的にそのフォルダに保管されます。新規フォルダを作成してアプリケーション・ライブラリに戻ると、そのフォルダではなくライブラリのルートが表示されるため、この点に注意してください。新たに作成したアプリケーションが表示されない場合は、フォルダを確認してください。

フォルダからアプリケーションを除去する場合は、[227 ページの「フォルダからのアプリケーションの除去」](#)を参照してください。

- 5 アプリケーション・ライブラリ(ルート)に戻って現在のフォルダを閉じるには、

 をクリックします。

フォルダからのアプリケーションの除去

▶ フォルダからアプリケーションを除去するには:

- 1 フォルダを開きます。
- 2 アプリケーションを右クリックし、「フォルダから除去」を選択します。

フォルダからアプリケーションが除去され、アプリケーション・ライブラリのルートに戻されます。

フォルダの名前変更

▶ フォルダの名前を変更するには:

- 1 フォルダを右クリックし、「名前変更」を選択します。
「フォルダの名前変更」ダイアログ・ボックスが表示されます。
- 2 新規フォルダ名を入力し、「OK」をクリックします。

フォルダの削除

フォルダは、フォルダ内に存在するアプリケーションを除去せずに削除できます。フォルダを削除すると、すべてのアプリケーションは自動的にアプリケーション・ライブラリのルートに移動します。

▶ フォルダを削除するには:

- 1 フォルダを右クリックし、「削除」を選択します。
「アプリケーション・ライブラリ - 警告」ダイアログ・ボックスが表示されます。
- 2 「はい」をクリックします。
フォルダが除去され、アプリケーションがアプリケーション・ライブラリのルートに移動します。

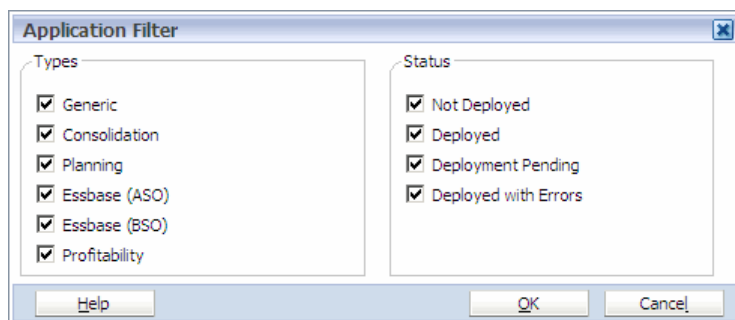
アプリケーション・フィルタの作成

フィルタを作成すると、アプリケーション・ライブラリに特定のアプリケーションのみが表示されます。

注: アプリケーション・ライブラリでは、セキュリティに基づいてアプリケーションがフィルタされません。すべてのアプリケーションが表示されます。たとえば、ユーザーが1つのアプリケーションへのアクセス権しか持っていない場合でも、アプリケーション・ライブラリ内の20個のアプリケーションが表示されます。

▶ アプリケーション・フィルタを作成するには:

- 1 「表示」、「フィルタ」の順に選択します。



- 2 表示しないタイプを選択解除します。
- 3 「ステータス」の下で、表示しないステータスを選択解除します。たとえば、配置されていないアプリケーションを表示できます。
- 4 「OK」をクリックします。

アプリケーション・ライブラリのリフレッシュ

最も新規アプリケーション情報が表示されるようにするため、アプリケーション・ライブラリをリフレッシュできます。

- ▶ アプリケーション・ライブラリをリフレッシュするには、「表示」、「リフレッシュ」の順に選択します。

アプリケーションの編集

- ▶ アプリケーションを編集するには、アプリケーション・ライブラリで、アプリケーションをダブルクリックするか、右クリックして「編集」を選択します。

次元ライブラリに共有ライブラリ、アプリケーションおよびプロパティ・グリッドが表示されます。

アプリケーションを開く

アプリケーションを配置したら、Financial Management など、配置済の Hyperion アプリケーションで開くことができます。


- ▶ 配置したアプリケーションを開くには、アプリケーション・ライブラリで配置したアプリケーションを右クリックし、「開く」を選択します。

ヒント：「ナビゲート」、「アプリケーション」の順にクリックして、Planning などのアプリケーション・タイプを選択し、アプリケーションを選択することもできます。

アプリケーションは、Financial Management および Profitability and Cost Management、または Planning で表示されます。

注： 右クリック・メニューの「開く」オプションは、アプリケーションが配置されていない場合は使用できません。

アプリケーションを閉じる

- ▶ アプリケーションを閉じるには、次のいずれかのアクションを実行します：
 - ビューの右上隅で、をクリックします。
 - 開いているアプリケーションが表示されている「次元ライブラリ」タブを右クリックし、「閉じる」を選択します。
 - 「ファイル」、「閉じる」、「現在」の順に選択します。

アプリケーションの削除

アプリケーション・ライブラリでは、「配置済」または「未配置」ステータスのアプリケーションを削除できます。ステータスが「配置の保留中」の場合、アプリケーションを削除できません。

- ▶ アプリケーション・ライブラリでアプリケーションを削除するには、アプリケーションを右クリックして「削除」を選択します。

削除の権限チェックが実行され、要求が Hyperion 製品サーバーに渡されて完了ステータスとなります。アプリケーションのステータスは「保留中の削除」に更新され、他の操作ができなくなります。アプリケーションが削除されると、アプリケーション・ライブラリから除去されます。

注： Planning アプリケーションを削除する前に、『Oracle Hyperion Enterprise Performance Management System バックアップおよびリカバリ・ガイド』で説明されているようにアプリケーションおよびアプリケーション・データベースをバックアップします。バックアップ後、アプリケーションを削除する標準的な手順に従います。削除後、アプリケーションが Essbase から削除されており、プランニング・リレーショナル・テーブルがリレーショナル・データベースから削除されていることを確認します。

アプリケーションの複製

アプリケーション・ライブラリでは、アプリケーションをコピーして新規アプリケーションを作成できます。共有ライブラリでアーティファクトを変更した場合、両方の未配置のアプリケーションで変更が自動的に反映されます。アプリケーションを複製するときは、次の2つのオプションがあります：

- アプリケーションを新規アプリケーションとして複製する
- アプリケーションを配置済アプリケーションとして複製する

新規アプリケーションとしてのアプリケーションの複製

▶ アプリケーションを複製するには:

- 1 アプリケーション・ライブラリで、アプリケーションを右クリックして「複製」、「新規アプリケーションとして」の順に選択します。

「アプリケーションの複製」ダイアログ・ボックスが表示されます。

- 2 名前、説明(オプション)を選択し、タイプを選択します。次に、「OK」をクリックします。

注: 連結から Planning など、別のアプリケーション・タイプを選択した場合、類似の次元プロパティのみがコピーされます。アプリケーションを複製したら、新規アプリケーション・タイプ・プロパティを更新する必要があります。

場合によっては、アプリケーション・ライブラリをリフレッシュして、既存のアプリケーションの複製により作成された新規アプリケーションを表示する必要があります。

- 3 「表示」、「リフレッシュ」の順に選択するか、



- 4 必要に応じて、アプリケーションをダブルクリックし、次元ライブラリを使用してプロパティを変更します。

配置済アプリケーションとしての連結アプリケーションの複製

配置済の連結アプリケーションをコピーして、あるサーバーから別のサーバーに複製できます。連結アプリケーションは異なるタイプのデータベースにはコピーできません。たとえば、SQL Server データベースを使用して作成された連結アプリケーションは、別の SQL Server データベースにコピーする必要があります。

次のガイドラインに従います:

- ソースおよび宛先コンピュータは、同じ Shared Services サーバーに登録する必要があります。
- ある Performance Management Architect サーバーから別の Performance Management Architect サーバーにアプリケーションを複製できません。

▶ 配置済アプリケーションを複製するには:

- 1 アプリケーション・ライブラリで、アプリケーションを右クリックして「複製」、「配置済アプリケーション」の順に選択します。

注：「データのコピー」および「監査データのコピー」オプションは、連結アプリケーションでのみ使用できます。

- 2 新規アプリケーションの名前を入力します。
- 3 オプションで説明を入力します。
- 4 インスタンス名、アプリケーション・サーバーおよび Shared Services プロジェクトを選択します。
- 5 オプションで、「ノート」フィールドに備考を入力します。

ここに入力した備考は、ジョブ・コンソール内のジョブの説明に追加されます。このテキスト・フィールドには 150 文字まで入力でき(説明に追加されるため)、任意の文字を使用できます。

- 6 オプションで、「データのコピー」または「監査データのコピー」、あるいはその両方を選択します。

「データのコピー」を選択すると、メタデータ/アプリケーション構造情報とともにデータをコピーできます。「監査データのコピー」を選択すると、移行時点までにアプリケーションで生成されたデータおよびタスク監査情報がコピーされます。

- 7 「OK」をクリックします。

注： 複製のステータスを表示するには、「ナビゲート」、「管理」、「ライブラリ・ジョブ・コンソール」の順に選択します。

配置済アプリケーションを複製すると、Shared Services に自動的に登録されます。

ユーザーの役割の割当てについては、『Oracle Hyperion Enterprise Performance Management System ユーザーおよび役割セキュリティ・ガイド』を参照してください。

アプリケーションの検索

アプリケーション・ライブラリで、アプリケーションを検索できます。アプリケーションの検索では、アプリケーション・ライブラリのルートおよびすべてのフォルダが検索されます。次の検索条件を入力できます：

- アプリケーション名
- アプリケーション・タイプ
- ステータス

▶ アプリケーションを検索するには：

1  をクリックするか、「表示」、「検索」の順に選択します。

「アプリケーションの検索」ダイアログ・ボックスが表示されます。

2 次の1つまたは複数のアクションを行います：

- オプション：アプリケーション名を入力します。
- アプリケーション・タイプを選択します。
- ステータスを選択します。「未配置」、「配置済」、「配置の保留中」および「配置済(エラーあり)」の各オプションがあります。

3 「OK」をクリックします。

アプリケーションの再登録

再登録は、Shared Services に対してのみ行われ、Shared Services が使用できず、アプリケーションを再登録する必要がある場合に使用されます。

▶ アプリケーションを再登録するには：

1 アプリケーションを右クリックし、「再登録」を選択します。

2 アプリケーションにオプションを選択し、「再登録」をクリックします。

注：「再登録」ダイアログ・ボックスに、アプリケーションのタイプに応じて各種オプションが表示されます。

アプリケーションの比較

アプリケーションの比較は、アプリケーション・フローに不可欠な部分です。比較レポートには、除外されたすべてのメンバーおよびプロパティの差が表示されます。

アプリケーションは、次の方法で比較できます：

- 共有ライブラリとの比較 - アプリケーション内の次元およびメンバーを、共有ライブラリ内の次元およびメンバーと比較します。
- 配置済アプリケーションとの比較 - アプリケーションを、配置済アプリケーションと比較します。

▶ アプリケーションを比較するには:

1 アプリケーションを右クリックし、「比較」を選択して次のアクションを実行します:

- 共有ライブラリとの比較
- 配置済アプリケーションとの比較

「比較」ダイアログ・ボックスが表示されます。

2 「結果の表示」をクリックします。

「次元比較結果」が表示されます。

The screenshot shows the Oracle Enterprise Performance Management System Workspace, Fusion Edition interface. The 'Compare' dialog box is open, displaying the following information:

Dimension Compare Results		Application Compare Summary	
Shared Library	Status	<input checked="" type="radio"/> Total Differences	796
<input checked="" type="checkbox"/> Shared Library		<input type="radio"/> Property Differences	764
<input checked="" type="checkbox"/> planning_SampApp_Entity (232)		<input type="radio"/> Additions	31
<input checked="" type="checkbox"/> planning_SampApp_Version		<input type="radio"/> Deletes	0
<input checked="" type="checkbox"/> planning_SampApp_Scenario		<input type="radio"/> Renames	1
<input checked="" type="checkbox"/> planning_SampApp_Account		<input type="radio"/> Removes	1
<input checked="" type="checkbox"/> Ratios (43)	Property Difference	<input type="radio"/> Moves	0
<input checked="" type="checkbox"/> IncomeStatement (250)	Property Difference	<input type="radio"/> Shares	0
<input checked="" type="checkbox"/> BalanceSheet (160)	Property Difference	<input type="radio"/> Includes	0
<input checked="" type="checkbox"/> CashFlow (31)	Property Difference	<input type="radio"/> Excludes	0
<input checked="" type="checkbox"/> Statistics (48)	Property Difference		
<input checked="" type="checkbox"/> No Accounts	Property Difference		
<input type="checkbox"/> [None]	Added to Shared Library		
<input type="checkbox"/> [Active]	Added to Shared Library		
<input type="checkbox"/> [Consol1]	Added to Shared Library		
<input type="checkbox"/> [Consol2]	Added to Shared Library		
<input type="checkbox"/> [Consol3]	Added to Shared Library		
<input type="checkbox"/> [DOWN]	Added to Shared Library		
<input type="checkbox"/> [Method]	Added to Shared Library		
<input type="checkbox"/> [PCON]	Added to Shared Library		
<input type="checkbox"/> [PCTRL]	Added to Shared Library		
<input type="checkbox"/> [POWN]	Added to Shared Library		
<input type="checkbox"/> [Shares%Owned]	Added to Shared Library		
<input type="checkbox"/> [SharesOutstanding]	Added to Shared Library		
<input type="checkbox"/> [SharesOwned]	Added to Shared Library		
<input type="checkbox"/> [Voting%Owned]	Added to Shared Library		
<input type="checkbox"/> [VotingOutstanding]	Added to Shared Library		

Property Compare Results		
Property Name	Shared Library	sampN
Application Class	Master	Planning
Application Desc...	Master Application	
Application Name	Master	sampN

注： アクティブ化および非アクティブ化は現在サポートされていません。

比較結果のナビゲート

比較ビューには、次の3つのペインがあります:

- 235 ページの「次元比較結果」
- 235 ページの「アプリケーション比較要約」

- 236 ページの「プロパティ比較結果」

次元比較結果

左側の「次元比較結果」には、追加または削除された次元およびメンバーが表示されます。最初、比較結果にはアプリケーションが折りたたまれて表示され、差の合計数がかっこで囲まれて表示されます。アプリケーションを展開すると、次元が折りたたまれている場合は次元ごとに差の数がかっこで囲まれて表示され、次元が配置されている場合は、アプリケーションから除去されたアーティファクトが取消し線付きで表示されます。プロパティの差があるアーティファクトは、太字で表示されます。

アーティファクトを選択すると、「比較要約」および「プロパティ比較結果」の値が更新されます。(選択内容に応じて、「比較要約」ヘッダーには「アプリケーション比較要約」、「次元比較要約」、または「メンバー比較要約」が表示されます。) 次の選択肢があります:

- アプリケーション - 「アプリケーション比較要約」に、アプリケーション全体の差の合計数が表示されます。
- 次元 - 次元全体の差の合計。
- 除去されたメンバー(取消し線付き) - 「メンバー比較要約」の「差の合計」および「除去」が更新されて、選択したメンバーの値が反映されます。
- プロパティの差があるメンバー(太字) - 「メンバー比較要約」が更新され、「プロパティ比較結果」に比較対象のアプリケーションと異なるプロパティ名が表示されます。

▶ 次元比較結果ビューを変更するには:

- 1 ツリーを横に並べて表示するには、「横並びのツリーの表示」をクリックします。
「次元比較結果」に、比較ビューが横に並んで表示されます。
- 2 1つのツリー(デフォルト・ビュー)を表示するには、「単一比較ツリーの表示」をクリックします。

アプリケーション比較要約

右上の「比較要約」には、アプリケーションおよび共有ライブラリの間のすべての変更の要約が表示されます。「比較要約」は、選択内容に応じて更新されます。たとえば、「次元比較結果」で次元を選択した場合、「比較要約」ヘッダーには「次元比較要約」が表示されます。「比較要約」の値は、「次元比較結果」で選択されたアーティファクトに基づきます。次の内容が表示されます:

- 差の合計 - アプリケーションおよび共有ライブラリの間の差の合計。
- プロパティの差 - プロパティの差の合計数。
- 追加 - アプリケーションに追加されたアーティファクトの合計数。
- 削除 - 削除されたアーティファクトの合計数。
- 名前変更 - 名前が変更されたメンバーの合計数。ここに表示される名前が変更されたメンバーの数は、「差の合計」とは別にカウントされます。たとえば、差の合計が6で、名前変更が2の場合、差の総計は8になります。

- 除去 - 除去されたアーティファクトの合計数。
- 移動 - メンバーが、次元内のある場所から別の場所に移動されました。
- 共有 - 次元に共有メンバーが挿入されました。
- 含む - アプリケーションに共有次元が追加されました。
- 除外 - メンバーが次元からフィルタで除外されました。

各要約にはラジオ・ボタンが表示されます。ラジオ・ボタンはフィルタです。「追加」、「除去」、または「プロパティの差」の各ラジオ・ボタンを選択すると、「次元比較結果」が更新されます。たとえば、「追加」を選択した場合、表示が更新されて追加のみが表示されます。加えて、追加がないメンバーは、表示すべき子がある場合以外は表示されなくなります。

プロパティ比較結果


右下の「プロパティ比較結果」には、「次元比較結果」で選択されたメンバーの変更されたメンバー・プロパティが表示されます。「プロパティ比較結果」には、「プロパティ名」、「共有ライブラリ」およびアプリケーション名の3つの列があります。

比較結果でのメンバーの除外

▶ メンバーを除外するには:

- 1 「次元比較結果」でメンバーを右クリックし、「除外フィルタへの追加」を選択します。

「アプリケーション比較要約」で「除去」の数が更新されます。

- 2 終了したら、ビューの右上隅の  をクリックします。

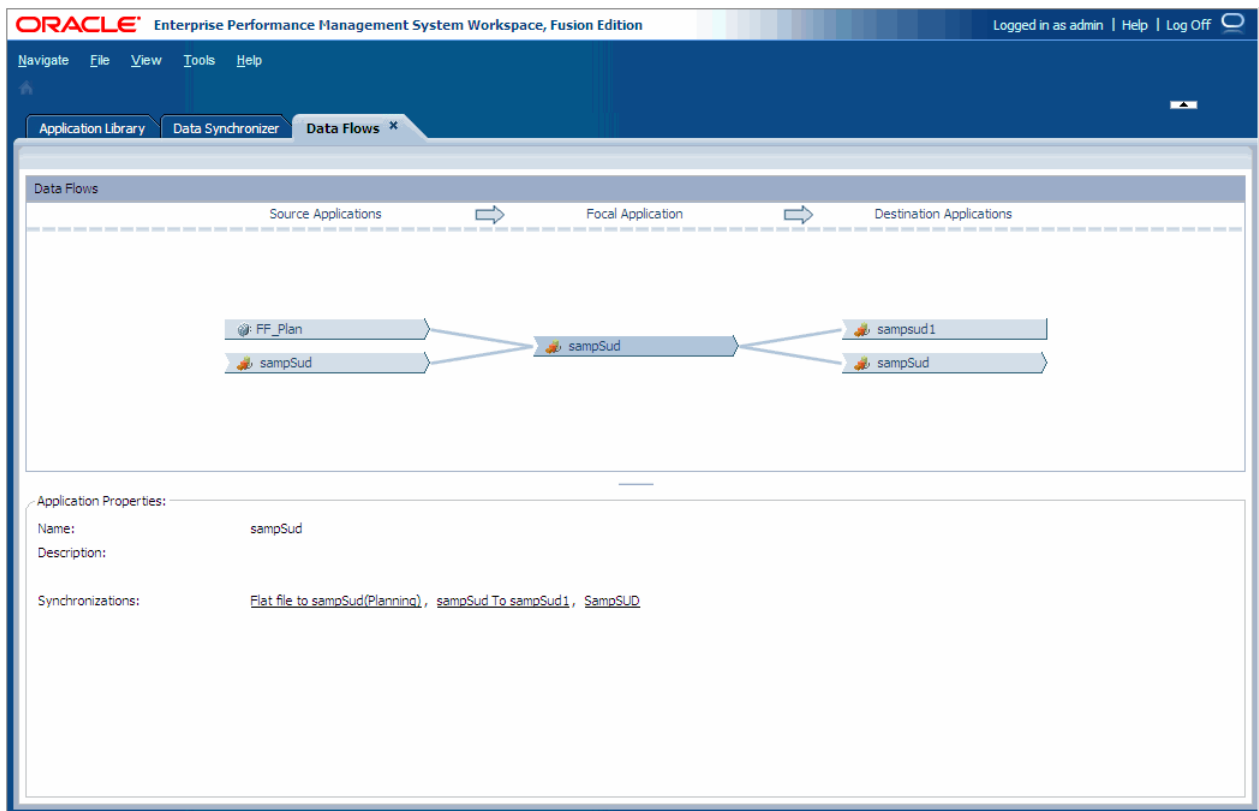
データ・フローの表示

データ・フローには、アプリケーション・ライブラリからアクセスできます。データ・シンクロナイザで作成された同期を使用してアプリケーション間でデータがどのように移動するかが、データ・フローに示されます。データ・フローではデータ同期がとられ、アプリケーション間のデータ移動の関係がグラフィカルに表現されます。

注： データ・フローを表示するには、同期済の複数のアプリケーションが必要です。第8章「データの同期」を参照してください。

▶ データ・フローを表示するには、アプリケーション・ライブラリでアプリケーションを右クリックし、「データ・フロー」を選択します。

データ・フローが表示されます。データ・フロー・マップに、フォーカル・アプリケーションに出入りするデータのフローが示されます。フォーカル・アプリケーションとは、データ・フローの中心にあるアプリケーションのことです。



データ・フローでアプリケーションを選択すると、下部ペインにプロパティが表示されます。アプリケーション・プロパティには名前、説明および同期が表示されます。

データ・フローでのフォーカル・アプリケーションの変更

- ▶ フォーカル・アプリケーションを変更するには、アプリケーションを右クリックし、「中央」を選択します。

選択したアプリケーションに従って、フォーカル・アプリケーションが変更されます。

同期の表示

- ▶ 同期を表示するには、アプリケーションを右クリックし、「同期」を選択して同期名を選択します。

編集、検証、または実行する同期を選択できます。238 ページの「同期の編集」および238 ページの「同期の検証および実行」を参照してください。

同期の編集

▶ 同期を編集するには:

1 次の操作を行います:

- データ・フローの「アプリケーション・プロパティ」領域で同期を選択します。「同期実行」ダイアログ・ボックスで、同期を選択して「アクション」、「編集」の順に選択し、「OK」をクリックします。
- データ・シンクロナイザにアクセスし(「ナビゲート」>「管理」>「データの同期」)、同期を右クリックして「編集」を選択します。

2 必要に応じてデータ・マッピングを変更します。

第8章「データの同期」を参照してください。

同期の検証および実行

データ・フローから同期を実行できます。

▶ 同期を検証および実行するには:

1 データ・フローで、アプリケーションを選択します。

2 「アプリケーション・プロパティ」で、実行する同期を選択します。

「同期実行」ダイアログ・ボックスが表示されます。

3 アクション「検証」または「実行」を選択し、「OK」をクリックします。

同期を検証する場合、「データ同期検証オプション」ダイアログ・ボックスが表示されます。データ・フローから同期を実行した場合は、「データの同期実行オプション」ダイアログ・ボックスが表示されます。

アプリケーションの編集

データ・フローに表示されたアプリケーションを編集できます。

▶ アプリケーションを編集するには、データ・フローでアプリケーションを右クリックして「編集」を選択します。

アプリケーションの検証および配置

Performance Management Architect では、次元性およびアプリケーションに関する他の情報を説明するアプリケーションを作成します。アプリケーションを作成する際、アプリケーションを検証して Oracle の Hyperion 製品に配置できます。配置プロセスにより、Financial Management、Profitability and Cost Management、Essbase、Planning などの目的の製品にアプリケーションが作成されます。

アプリケーションを配置するには、特定の製品タイプのアプリケーション作成者のユーザー役割で Shared Services にプロビジョニングされている必要があります。詳細は、[28 ページの「セキュリティ」](#)を参照してください。

配置プロセスには、次の処理が関係します:

- **アプリケーションの検証** - Financial Management、Profitability and Cost Management、Planning などの製品に対してアプリケーションが検証されます。アプリケーションに次元や他の必須情報がない場合、配置は中止されます。さらに、アプリケーションの別の配置が進行中の場合、要求は取り消されます。
- **配置の環境情報の選択** - アプリケーションを配置する環境を選択します。
- **アプリケーションのエクスポートと配置** - アプリケーションを配置すると、配置ジョブが開始し、アプリケーションが Performance Management Architect から特定の Hyperion 製品にエクスポートされます。配置を開始すると、アプリケーションのステータスがアプリケーション・ライブラリに「配置の保留中」と表示されます。
- **製品アプリケーションの作成** - 新しい配置に、Hyperion 製品によりアプリケーションが作成され、Hyperion 製品サーバーがメタデータのロードを試みます。配置が完了すると、アプリケーション・ライブラリでステータスおよびタイムスタンプが更新されます。続いて、配置ジョブが「完了」としてマークされます。配置ジョブの表示の詳細は、[第9章「ジョブの管理」](#)を参照してください。

アプリケーションの検証

▶ アプリケーションを検証するには:

- 1 アプリケーションを右クリックし、「検証」、「アプリケーション」の順に選択します。
「ジョブ・タスク」ダイアログ・ボックスが表示されます。
- 2 リンクをクリックして、ライブラリ・ジョブ・コンソールにナビゲートします。
- 3 「添付ファイル」領域で検証ログ・リンクをクリックします。
- 4 「開く」をクリックして、ログ・ファイルをテキスト・エディタで開きます。

検証ログの抜粋を次に示します:

```
Validation Log  
=====
```

```
Job Id: 191  
Created : 3/4/2008 8:08:30 PM  
Application : Consol
```

```
Validation Summary  
=====
```

Result : Success

Summary : There were 0 errors and 0 warnings during the validation process. For details refer the error and warning section of this log.

アプリケーションの検証の詳細は、[付録 B 「アプリケーションの検証」](#) を参照してください。

配置ログおよびエラーの確認

アプリケーションを配置したら、「要約」領域を表示して、ライブラリ・ジョブ・コンソールで配置ログ(参照可能な場合)を表示できます。[第 9 章 「ジョブの管理」](#) を参照してください。

連結アプリケーションの場合、配置ログ(ライブラリ・ジョブ・コンソールに表示)には Financial Management メタデータ・ロード・ファイルが含まれています。ほとんどの場合、ログには無効なメンバーおよびエラーが表示されており、Financial Management ログにアクセスして詳細情報にアクセスするために必要ではありません。ただし、まれにメタデータ・ログに十分な情報がないことがあり、この場合は Financial Management アプリケーション・サーバー・ログで詳細を確認できます。

Planning、Essbase および Profitability アプリケーションの場合、ライブラリ・ジョブ・コンソールには配置ログが表示されます。エラーがある場合、「添付ファイル」領域の検証ログ・リンクをクリックして、すべての検証エラーまたはメッセージの完全なリストを表示します。

Planning アプリケーションの配置

Planning では、アプリケーションの設定内容に応じて、特定の次元が必要です。検証エラーを回避するために、アプリケーションに必要な次元がすべて含まれていることを確認します。Planning 次元の要件は、[第 12 章 「Planning 次元の操作」](#) を参照してください。

配置プロセスでは、次のものが作成されます:

- Planning データベース内のテーブルおよび値。
- Planning Web ユーザー・インターフェースからキューブをリフレッシュする必要がない、Essbase 内のアプリケーションおよびアウトライン。
- マルチ通貨アプリケーションの場合、配置時の HSP_Rates(手動で作成する次元ではありません)。

注： Planning アプリケーションを配置する前に、Planning アプリケーション・サーバーが実行されていることを確認します。Performance Management Architect から Planning にアプリケーションを配置する操作は時間がかかります。初回の配置には、その後の再配置よりも時間がかかる可能性があります。

Planning アプリケーションを配置する前に、すべてのプロパティが正しく、必要に合っていることを確認してください。設定を更新する必要がある場合は、配置前に更新します。アプリケーションが正しく設定されていない場合、配置は失敗し、エラー・メッセージが表示されます。正しく配置するには、Planning アプリケーションが、この章の第3章「メタデータのインポート」および第12章「Planning 次元の操作」に示されている条件を満たす必要があります。例:

- 「会計開始年」プロパティを定義する必要があります。年は、4桁の長さにする必要があります(2010 など)。
- 年次元は、先頭の FY の後に、2桁の年が続く必要があります(FY10 など)。
- 年次元の最初の年メンバーおよび「会計開始年」プロパティは、同じ年を表す必要があります。たとえば、「会計開始年」が 2010 の場合、年次元の最初の年は FY10 にする必要があります。
- 12 か月の基本期間アプリケーションの場合のみ、Start Month プロパティを定義する必要があります。
- デフォルト別名テーブル・プロパティを定義する必要があります。詳細は、86 ページの「別名次元」を参照してください。
- 「デフォルト通貨」プロパティを定義する必要があります。
- アプリケーションには、「シナリオ」、「バージョン」、「エンティティ」、「勘定科目」、「期間」、「年」のタイプの事前定義済次元が含まれている必要があります。マルチ通貨アプリケーションでは、「通貨」タイプの次元も必要です。
- アプリケーションは第12章「Planning 次元の操作」で指定されている条件を満たす必要があります。

注： これらの要件は、「プラン 1」、「プラン 2」または「プラン 3」のプラン・タイプを使用する Planning アプリケーションに固有です。他のプラン・タイプを使用する Planning モジュールでは、要件が異なる場合があります。Public Sector Planning and Budgeting の詳細は、『Oracle Hyperion Public Sector Planning and Budgeting ユーザー・ガイド』を参照してください。Workforce Planning および Capital Asset Planning の詳細は、『Oracle Hyperion Workforce Planning 管理者ガイド』および『Oracle Hyperion Capital Asset Planning 管理者ガイド』を参照してください。

アプリケーション名やデータ・ソースなどの一部の情報は、アプリケーションの配置後は変更できません。アプリケーションが配置されると、未参照の UDA がアプリケーションから除去されます。148 ページの「ユーザー定義属性の操作」を参照してください。

注意 Planning の各データ値は、次元メンバー・セットおよびプラン・タイプによって識別されます。アプリケーションから次元メンバーを除外すると、削除アクションを再配置に変えられます。除外されたメンバーが他の場所(データ・フォームでの選択など)で使用されている場合、それらの関連付けは除去されます。詳細は、141 ページの「プランニング・メンバーの除外および削除」を参照してください。

アプリケーションからメンバーを除外する前に、Planning内で「使用の表示」機能を使用して、メンバーが使用されるアプリケーションの場所、および配置中にアプリケーションから次元メンバーを除外することの影響について特定します。「使用の表示」機能の詳細は、『Oracle Hyperion Planning 管理者ガイド』を参照してください。

▶ Planning アプリケーションを配置するには:

- 1 「ナビゲート」、「管理」、「アプリケーション・ライブラリ」の順にクリックします。
- 2 Planning アプリケーションを右クリックし、「配置」、「アプリケーション」の順に選択します。

「ルール」を選択してルールのみを配置したり、「すべて」を選択してビジネス・ルールがあるアプリケーションを配置することもできます。ビジネス・ルールの配置の詳細は、『Oracle Hyperion Calculation Manager 設計者ガイド』を参照してください。

アプリケーションは、配置前に検証されます。検証エラーは、すべてジョブ・コンソールに表示されます。配置前にすべての検証エラーを修正する必要があります。ビジネス・ルール・エラーを解決する方法の詳細は、『Oracle Hyperion Calculation Manager 設計者ガイド』を参照してください。

「配置」ダイアログ・ボックスが表示されます。

The screenshot shows a 'Deploy' dialog box with the following fields and options:

- Application Name: BudPln1
- Description: (empty text box)
- Notes: (empty text box)
- Instance Name: Default (dropdown menu)
- Web Server: orgcrush2.hyperion.com
- Application Server: Default (dropdown menu)
- Shared Services Project: Default Application Group (dropdown menu)
- Data Source: PlanSource1 (dropdown menu)
- Create Outline:
- Refresh Outline:
- Create Security Filters:
- Shared Members Security Filters:
- Validate Security Filter Limit:
- Continue Deploy Rules even if Rules Validation fails:
- Full Deploy:

Buttons at the bottom: Help, Deploy, Cancel.

- 3 次のタスクを実行します:

再配置する場合、インスタンス名、アプリケーション・サーバー、データ・ソースなど、一部のオプションは使用できません。

1. **オプション:** 「ノート」フィールドに配置に関する備考を入力します。ここに入力した備考は、ジョブ・コンソール内のジョブの説明に追加されます。このテキスト・フィールドには 150 文字まで入力でき(説明に追加されるため)、任意の文字を使用できます。テキストが画面上の長さを超える場合、テキスト・フィールドは縦にスクロールできます。
2. 「インスタンス名」を選択します。
3. 「アプリケーション・サーバー」を選択します。
4. 「Shared Services プロジェクト」を選択します。
5. アプリケーションにより使用される「データ・ソース」を選択します。
6. **オプション:** データ・ソースを作成する場合は、「データ・ソース」の横のアイコンをクリックします。詳細な方法は、[266 ページの「データ・ソース情報の入力」](#)を参照してください。
7. **オプション:** アプリケーションを最初に配置する場合、「アウトラインの作成」を選択して、アプリケーション・データが保管される Essbase データベースを更新します。
8. **オプション:** アプリケーション構造の変更後にアプリケーション・データベースをリフレッシュするには、「アウトラインのリフレッシュ」を選択します。
9. **オプション:** 「セキュリティ・フィルタの作成」を選択して、暗号化されたデータ・ファイル(Essbase.sec)にアクセス権を保管します。アプリケーション内のすべてのユーザーのセキュリティ・フィルタを生成するには、「セキュリティ・フィルタの作成」を選択しますが、「セキュリティ・フィルタ制限の検証」は選択しないでください。
10. **オプション:** 「共有メンバーのセキュリティ・フィルタ」を選択して、共有メンバーにアクセス権を適用します。
11. **オプション:** 「セキュリティ・フィルタ制限の検証」を選択し、Essbase セキュリティ・フィルタの制限である 1 行当たり 64 KB を超えているセキュリティ・フィルタを特定します。これにより、Essbase セキュリティ・フィルタの構築時に、ファイル・サイズがサイズ制限を超えていないことが検証されます。
12. 「完全配置」オプションは、アプリケーションを再配置する場合にのみ使用できます。詳細は、[251 ページの「Planning アプリケーションの再配置時における考慮事項」](#)を参照してください。
13. ビジネス・ルールを配置する場合、「ルールの配置」または「ルールの検証に失敗してもルールの配置を続行する」を選択することもできます。ビジネス・ルールの配置の詳細は、『Oracle Hyperion Calculation Manager 設計者ガイド』を参照してください。

4 「配置」をクリックします。

注: 単一通貨アプリケーションを配置する場合、エンティティ・メンバーの Currency プロパティがアプリケーションのデフォルト・プロパティに設定されます。

Planning アプリケーションの作成時に、Planning アプリケーションが自動的に Shared Services に登録されます。進捗状況およびエラー・メッセージを表示するには、Planning アプリケーション・サーバーを開きます。

配置後に作成された Planning アプリケーションにアクセスするには、EPM Workspace で Planning アプリケーションのリフレッシュを実行してから、アプリケーションを選択する必要があります。プロンプトが表示された場合は、ログオン情報を入力します。『Oracle Hyperion Planning 管理者ガイド』を参照してください

注： 配置が中断または削除された場合は、ステータスが「配置の保留中」と表示されたり、配置がタイムアウトになったりします。デフォルトのタイムアウト値は 480 分(8 時間)です。このデフォルトは、`awbconfig.properties(EPM_ORACLE_INSTANCE\config\EPMA\WebTier)` にあります)で変更できます。配置がタイムアウトした場合、アプリケーションを再度配置する必要があります。配置と同期されていることがステータスに示されている場合でも、タイムアウトのために同期されていない場合があります。

連結アプリケーションの配置

Financial Management では、アプリケーションの設定内容に応じて、特定の次元が必要です。検証エラーを回避するために、アプリケーションに必要な次元がすべて含まれていることを確認します。

注： ビジネス・ルールの配置の詳細は、『Oracle Hyperion Calculation Manager 設計者ガイド』を参照してください。

▶ 連結アプリケーションを配置するには:

- 1 「ナビゲート」、「管理」、「アプリケーション・ライブラリ」の順にクリックします。
- 2 連結アプリケーションを右クリックし、「配置」、「アプリケーション」の順に選択します。

「ルール」を選択してルールのみを配置したり、「すべて」を選択してビジネス・ルールがあるアプリケーションを配置することもできます。ビジネス・ルールの配置の詳細は、『Oracle Hyperion Calculation Manager 設計者ガイド』を参照してください。

- 3 「アプリケーション検証エラー」ダイアログ・ボックスが表示されたら、エラーを修正し、もう一度配置してみてください。

「配置」ダイアログ・ボックスが表示されます。

The screenshot shows a 'Deploy' dialog box with the following fields and options:

- Application Name: Dup1
- Description: (empty)
- Notes: (empty)
- Instance Name: HfmWeb:blrd9210.symphony.hyper...
- Web Server: blrd9210.symphony.hyperion.com
- Application Server: cluster1
- Shared Services Project: Default Application Group
- Clear All Metadata and Data:
- Check Referential Integrity:
- Full Deploy:

Buttons: Help, Deploy, Cancel

再配置する場合、インスタンス名、アプリケーション・サーバー、データ・ソースなど、一部のオプションは使用できません。

4 次のタスクを実行します:

1. **オプション:** このアプリケーションの配置に関する備考を追加します。これらの備考はジョブ・コンソールのジョブの説明に追加されます。このテキスト・フィールドには 150 文字まで入力でき、任意の文字を使用できます。
2. 「インスタンス名」(クラスタ名)を選択します。
3. 「アプリケーション・サーバー」を選択します。
4. 「Shared Services プロジェクト」を選択します。
5. **オプション:** 「すべてのメタデータとデータの消去」を選択します - アプリケーション・データベース内のすべての次元メンバー、対応するデータ、仕訳および内部取引が削除されます。

除去された次元メンバーからのデータの消去については、『Oracle Hyperion Financial Management 管理者ガイド』を参照してください。

6. **オプション:** 「参照整合性の確認」を選択します - メタデータとデータ間の整合性がチェックされます。たとえば、メンバーの名前を変更し、「参照整合性の確認」を選択すると、配置ログには、名前の変更により影響を受けたすべてのアーティファクトがリストされます。『Oracle Hyperion Financial Management ユーザー・ガイド』を参照してください。

注: アプリケーションの配置後は、年、期間またはビューの次元を変更できません。

- 5 ビジネス・ルールを配置する場合、「ルールの配置」または「ルールの検証に失敗してもルールの配置を続行する」を選択することもできます。ビジネス・ルール

の配置の詳細は、『Oracle Hyperion Calculation Manager 設計者ガイド』を参照してください。

注：「完全配置」オプションは、アプリケーションを再配置する場合にのみ使用できます。詳細は、250 ページの「アプリケーションの再配置」を参照してください。

6 「配置」をクリックします。

注：配置が中断または削除された場合は、ステータスが「配置の保留中」と表示されたり、配置がタイムアウトになったりします。デフォルト・タイムアウトは 480 分(8 時間)です。デフォルトは `awbconfig.properties` で変更できます。配置がタイムアウトになった場合、もう一度アプリケーションを配置する必要があります。ステータスで配置との同期が示されている場合でも、タイムアウトのため、同期されていない可能性があります。

Profitability アプリケーションの配置

► Profitability and Cost Management アプリケーションを Performance Management Architect で配置するには、次の手順を行います：

- 1 「ナビゲート」、「管理者」、「アプリケーション・ライブラリ」の順に選択します。
- 2 配置するアプリケーションの名前を右クリックし、ドロップダウン・リストから「配置」を選択します。

アプリケーションは配置前に検証され、検証エラーはジョブ・コンソールに表示されます。配置前にすべての検証エラーを修正する必要があります。検証が完了すると、アプリケーション名が表示された「配置」ダイアログ・ボックスが表示されます。

Application Name	hmpdp1
Description	
Notes	
Instance Name	Default
Web Server	abcserver.company.com
Application Server	EssbaseCluster-1
Shared Services Project	Default Application Group
Full Deploy	<input checked="" type="checkbox"/>

- 3 オプション: 「説明」で、アプリケーションの簡単な説明を入力します。

4 **オプション:** 「ノート」で、このアプリケーションの配置に関する備考を追加します。これらの備考はジョブ・コンソールのジョブの説明に追加されます。このテキスト・フィールドには 150 文字まで入力でき、任意の文字を使用できます。

5 「インスタンス名」で、アプリケーションの配置先の Profitability and Cost Management インストール名を選択します。

Profitability and Cost Management アプリケーションは、単一マシンまたはクラスターの一部として複数のマシンにインストールできます。各インストールまたはインスタンスは、「インスタンス名」ドロップダウン・リストに表示されます。初回インストール時には、コンフィグレータ・ツールで使用されるインスタンスの名前がデフォルトで指定されます。

6 「アプリケーション・サーバー」を選択します。

7 「Shared Services プロジェクト」で、このアプリケーションを割り当てる「Profitability and Cost Management」アプリケーション・グループを選択します。

8 **オプション:** 次のようにして、「完全配置」を選択するかどうかを決定します:

- アプリケーションの初めての配置の場合、Performance Management Architect はすべての次元を Profitability and Cost Management に自動的に送信するため、「完全配置」チェック・ボックスは無効になっています。
- 後続の配置で「完全配置」が選択されている場合、Performance Management Architect はすべての次元を Profitability and Cost Management に送信します。
- 「完全配置」が選択されていない場合、Performance Management Architect は変更された次元のみを Profitability and Cost Management に送信します。次元が変更されていない場合、その次元は配置に含まれません。

9 「配置」をクリックします。

検証ジョブが送信されたことを確認する「ジョブ・タスク」ウィンドウが開き、ジョブ ID が表示されます。

10 「ジョブ・タスク」・ウィンドウでリンクをクリックすると、ジョブ・ステータスが表示されます。

ジョブを完了すると、新規アプリケーションが作成され、Profitability and Cost Management に配置されたことを示すメッセージが「詳細」に表示されます。新規アプリケーションを選択できるようになります。

Essbase (ASO)アプリケーションおよび Essbase (BSO)アプリケーションの配置

このトピックでは、Essbase ASO および BSO アプリケーションの配置について説明します。Essbase (ASO)または Essbase (BSO)アプリケーションを再配置する場合は、[253 ページの「Essbase \(ASO\)アプリケーションおよび Essbase \(BSO\)アプリケーションの再配置」](#)を参照してください。

Essbase アプリケーションを配置する前に、次の操作を完了する必要があります:

- EPM System コンフィグレータを使用して、Performance Management Architect、Essbase および Oracle Essbase Studio を正常に構成する必要があります。構成の

詳細は、『Enterprise Performance Management System インストールおよび構成ガイド』を参照してください。

- ユーザーは、Shared Services で、Essbase アプリケーション作成者のユーザー役割によりプロビジョニングされている必要があります(ユーザー管理コンソールで、「Hyperion Shared Services」、グローバル役割、「アプリケーション作成者」、「Essbase アプリケーション作成者」の順に設定します)。プロビジョニングの詳細は、Shared Services のドキュメントを参照してください。

Essbase アプリケーションの配置または再配置時に考慮する必要があるガイドラインは次のとおりです:

- Essbase アプリケーションには、次元の固定されたセットは必要ありません。たとえば、1つの汎用次元および1つのメンバーのみが含まれる Essbase アプリケーションを作成して配置できます。
- 空の次元は許容されます。
- Performance Management Architect を使用して、ハイブリッド分析または拡張リレーショナル・アクセス・キューブを作成できません。
- 一般的な検証エラーの1つに、メンバー名に無効な文字が含まれている、というものがあります。大かっこ([])またはその他の無効な文字がメンバー名に含まれている場合にこのエラーが発生します。このエラーを回避するには、次のいずれかの操作を行います:
 - メンバーが共有次元にある場合は、157 ページの「メンバーの除外」で説明されているように、「メンバーを除外」コマンドを使用してメンバーを消去します。
 - メンバーがローカル・メンバーの場合は、140 ページの「メンバーの除去」で説明されている「メンバーの除去」コマンドまたは 141 ページの「メンバーの削除」で説明されている「メンバーの削除」コマンドを使用してメンバーを消去します。
- 重複するメンバー名を許可する場合は、アプリケーション・レベルで Allow Duplicates プロパティ・フラグを設定する必要があります。このプロパティを設定してアプリケーションが配置されると、Allow Duplicates プロパティがアプリケーションに対して永続的に設定されます。後でプロパティを消去することはできません。Essbase Studio では、アプリケーションの再配置時に Allow Duplicates プロパティを更新することは許可されていません。

注: Essbase ASO アプリケーションまたは BSO アプリケーションの最初の配置の成功後、配置の実行ユーザーは、アプリケーション管理者として自動的にプロビジョニングされません。Essbase ASO アプリケーションまたは BSO アプリケーションを再配置するには、Shared Services で Essbase アプリケーションのアプリケーション管理者としてプロビジョニングされる必要があります。

注: Essbase (ASO)アプリケーションおよび Essbase (BSO)アプリケーションの配置プロセスに違いはありません。

Essbase アプリケーションのプロパティと、次元およびメンバーについては、第 14 章「Essbase プロパティの操作」で説明します。

アプリケーションおよびデータベースの Essbase 要件の詳細は、『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』および『Oracle Essbase Administration Services オンライン・ヘルプ』を参照してください。

注： ビジネス・ルールの配置の詳細は、『Oracle Hyperion Calculation Manager 設計者ガイド』を参照してください。

▶ Essbase (ASO)アプリケーションまたは Essbase (BSO)アプリケーションを配置するには:

- 1 「ナビゲート」、「管理」、「アプリケーション・ライブラリ」の順にクリックします。
- 2 「Essbase (ASO)」または「Essbase (BSO)」アプリケーションを右クリックし、「配置」を選択します。

「配置」ダイアログ・ボックスが表示されます。

Application Name	kc_aso
Description	
Notes	
Instance Name	ESSBASE_STUDIO_SERVER:o...
Host	orgcrush2.hyperion.com
Application Server	EssbaseCluster-1
Clear Metadata	<input type="checkbox"/>
Clear Data	<input type="checkbox"/>
Full Deploy	<input checked="" type="checkbox"/>

エラーがある場合は、「ジョブ・タスク」ダイアログ・ボックスが表示されます。次の手順を実行します:

- 1 「ジョブ・タスク」ダイアログ・ボックスのリンクをクリックして、「ジョブ・コンソール」にアクセスします。
- 2 ジョブ・コンソールの「添付ファイル」で、エラー・レポートのリンクをクリックします。

エラー・レポートがテキスト・ファイル・フォーマットで表示されます。

- 3 エラー・レポートを開くか保存し、エラーを確認して修正してから、配置プロセスを再び開始します。

- 3 **オプション:** 「配置」 ダイアログ・ボックスで、「ノート」ボックスにこの配置についての備考を追加します。

入力した備考は、ジョブ・コンソールでアプリケーションの説明に追加されます。150 文字までの制限があり(説明に追加されるため)、任意の文字を使用できません。

- 4 **アプリケーションの配置に使用する Essbase Studio サーバー・インスタンスの「インスタンス名」を選択します。**

これは、Essbase Studio サーバー・インスタンスがインストールされて構成されているマシンの名前です。構成情報は、『Enterprise Performance Management System インストールおよび構成ガイド』を参照してください。

注: Essbase Studio サーバーを使用して Essbase アプリケーションのみ配置できます。

- 5 **「アプリケーション・サーバー」を選択します。**

これは、Essbase Studio サーバー・インスタンスまたはクラスタがインストールされて構成されているマシンの名前です。構成情報は、『Enterprise Performance Management System インストールおよび構成ガイド』を参照してください。

- 6 **「配置」をクリックします。**

「完全配置」、「メタデータの消去」および「データの消去」チェック・ボックスは、初回配置時には適用されません。これらのオプションは再配置にのみ適用されます。再配置時のこれらのチェック・ボックスの使用方法は、[253 ページの「Essbase \(ASO\)アプリケーションおよび Essbase \(BSO\)アプリケーションの再配置」](#)を参照してください。

注: 配置が中断または削除された場合は、ステータスが「配置の保留中」と表示されたり、配置がタイムアウトになったりします。デフォルト・タイムアウトは 480 分(8 時間)です。デフォルトは `awbconfig.properties` で変更できます。配置がタイムアウトした場合、アプリケーションを再度配置する必要があります。ステータスで配置との同期が示されている場合でも、タイムアウトのため、同期されていない可能性があります。

- 7 **Essbase Administration Services コンソールで、配置されたアプリケーションのアウトラインを表示および編集します。Smart View または Oracle Essbase Spreadsheet Add-in を使用して、アプリケーション・データベースをクエリーします。**

アプリケーションの再配置

再配置では、前回の配置後に行った変更のタイプに基づいて、アプリケーション・メタデータのマージまたは置換が実行されます。たとえば、アプリケーション内の階層でメンバーが移動されたかまたは削除された場合は、置換モードでメタデータの再配置が実行されます。前回の配置後にアプリケーションに対してプロパティのみ更新された場合は、メタデータの再配置はマージ・モードで実行されます。

▶ アプリケーションを再配置するには:

- 1 アプリケーションを右クリックし、「配置」を選択します。
- 2 **オプション:** Shared Services プロジェクトを選択します。

注: 連結、Essbase (ASO)または Essbase (BSO)アプリケーションを再配置する際に、Performance Management Architect が前に指定されたアプリケーション・サーバーを見つけられない場合は、別のアプリケーション・サーバーを選択できます。

- 3 **オプション:** 「完全配置」を選択します。

「完全配置」を選択すると、Performance Management Architect によって、アプリケーションのすべての次元とメンバーが配置に含まれます。「完全配置」を選択しない場合は、最後の配置の後に変更された次元のみ含まれます。このオプションは、Performance Management Architect メタデータが同期していない可能性があるか、Performance Management Architect データベースが復元された場合に選択します(このオプションは、アプリケーションの再配置時のみ選択できます)。

Planning アプリケーションの再配置時における考慮事項

再配置前に、プロパティが正しく、要件を満たしていることを確認します。アプリケーションが正しく設定されていない場合、配置は失敗し、エラー・メッセージが表示されます。Planning アプリケーションが表示された後、次のプロパティを変更できません:

- アプリケーションで単一通貨を使用しているか、複数通貨を使用しているか。たとえば、複数通貨を選択して配置した後、複数通貨を後で消去して、単一通貨を使用できません。同様に、単一通貨のアプリケーション上では、後で複数通貨を選択できません。
- デフォルト・アプリケーションの通貨。たとえば、USD を使用する場合、後で EUR に変更できません。
- カレンダのタイプ。たとえば、「基本期間」を「12 か月」に設定した場合、後で「四半期」に変更できません。
- 会計開始月。「開始月」を設定した後は、変更できません。
- 開始年。たとえば、「開始年」を「2010」に設定した場合、後で「2009」に変更することはできません。ただし、最初の年の後に年を追加することはできます。
- 年の追加。年を追加した後は、除去できません。たとえば、配置したアプリケーションに FY09 が含まれている場合、この年は除去できません。
- 「週の配布」パターン。たとえば、「週の配布」を「445」と設定した場合、後で「544」や「偶数」に変更できません。
- アプリケーションに含まれているプラン・タイプ。たとえば、アプリケーションをプラン 1 およびプラン 2 のプラン・タイプとして選択して配置した場合、後でプラン 3 の追加またはプラン 2 の除去はできません。次元メンバーに対する「プラン・タイプに有効」はいつでも変更できます。ただし、配置後のアプリケーションに含まれているプラン・タイプは変更できません。

- 追加された次元。事前に定義されている次元を含めて、全部で 20 個まで次元を追加できます。次元別名を変更することで次元の名前変更はできますが、削除できません。221 ページの「次元別名の設定」を参照してください。
- 事前に定義されている次元。事前に定義されている次元は削除できません。単一通貨アプリケーションには、シナリオ、バージョン、エンティティ、勘定科目、期間および年の次元が必要です。複数通貨アプリケーションには、シナリオ、バージョン、エンティティ、勘定科目、期間、年および通貨の次元が必要です。

注意 Planning の各データ値は、次元メンバー・セットおよびプラン・タイプによって識別されます。アプリケーションから次元メンバーを除外すると、これは配置時の削除アクションになります。詳細は、141 ページの「プランニング・メンバーの除外および削除」を参照してください。

注： Workforce Planning および Capital Asset Planning に対して有効になっているアプリケーションの詳細は、『Oracle Hyperion Workforce Planning, Fusion Edition 管理者ガイド』および『Oracle Hyperion Capital Asset Planning, Fusion Edition 管理者ガイド』を参照してください。Public Sector Planning and Budgeting の詳細は、『Oracle Hyperion Public Sector Planning and Budgeting ユーザー・ガイド』を参照してください。

アプリケーションからメンバーを除外する前または Planning に配置する前に、Planning 内で「使用の表示」機能を使用して、メンバーがアプリケーション内のどこで使用されているか、および配置時に次元メンバーをアプリケーションから除外する影響を判断します。「使用の表示」機能の詳細は、『Oracle Hyperion Planning 管理者ガイド』を参照してください。

Planning アプリケーションの再配置

▶ Planning アプリケーションを再配置するには:

- 1 Planning アプリケーションを右クリックし、「配置」を選択します。
- 2 「Shared Services プロジェクト」を選択します。

アプリケーションは、Performance Management Architect の配置時に、選択した Shared Services プロジェクトに自動的に登録されます。

- 3 **オプション:** 「アウトラインのリフレッシュ」を選択し、必要に応じて追加のセキュリティ・オプションを選択します。240 ページの「Planning アプリケーションの配置」を参照してください。
- 4 「OK」をクリックします。

アプリケーションが Planning に配置されます。進行状況およびエラー・メッセージを表示するには、Planning アプリケーション・サーバーを開きます。

注： 単一通貨アプリケーションを再配置すると、エンティティ・メンバーの Currency プロパティはアプリケーションのデフォルト・プロパティに設定されます。

Essbase (ASO)アプリケーションおよび Essbase (BSO)アプリケーションの再配置

最初に、247 ページの「Essbase (ASO)アプリケーションおよび Essbase (BSO)アプリケーションの配置」にリストされているガイドラインを確認します。

注： ビジネス・ルールの配置の詳細は、『Oracle Hyperion Calculation Manager 設計者ガイド』を参照してください。

▶ Essbase (ASO)アプリケーションまたは Essbase (BSO)アプリケーションを再配置するには、次の手順を行います：

1 247 ページの「Essbase (ASO)アプリケーションおよび Essbase (BSO)アプリケーションの配置」の手順 1 から手順 5 に従います。

注： アプリケーションを再配置するときに、Performance Management Architect が前に指定されたアプリケーション・サーバーを見つけられない場合は、別のアプリケーション・サーバーを選択できます。

2 次のように、要件に従って「メタデータの消去」、「データの消去」および「完全配置」チェック・ボックスを選択します：

- 「完全配置」チェック・ボックスが選択されている場合は、Performance Management Architect によって完全なメタデータがエクスポートされます。

注： アプリケーションを最初に配置した後で次元のソート順を変更した場合は、Essbase で配置されたアプリケーションのアウトラインを変更するために、再配置時に「完全配置」オプションを選択する必要があります。ソート順設定の変更の詳細は、222 ページの「次元のソート順と次元密度の設定」を参照してください。

- 「完全配置」が選択されていない場合は、Performance Management Architect によって、変更された次元のみエクスポートされます。Essbase Studio は、変更された次元とメンバーのみ削除し、「メタデータの消去」および「データの消去」チェック・ボックスの選択内容に従ってこれらを再構築します。

「配置」ダイアログ・ボックスでのチェック・ボックスの選択結果の詳細は、表 17 を参照してください。

表 17 「配置」 チェック・ボックスの選択または選択解除の結果

「完全配置」 チェック・ ボックスの 状態	「メタデー タの消去」 チェック・ ボックスの 状態	「データの 消去」 チェック・ ボックスの 状態	結果
選択済	選択済	選択済	Essbase Studio によって、アウトライン・メンバーが削除されてから、すべてのメンバーがアウトラインに追加されます。アウトラインの再構築では、すべてのデータが消去されます。
選択済	選択済	選択解除	Essbase Studio によって、アウトライン・メンバーが削除されてから、すべてのメンバーがアウトラインに追加されます。アウトラインの再構築では、データが保持されます。
選択済	選択解除	選択済	Essbase Studio によって、既存のメンバーを削除せずにアウトライン・メンバーが追加されます。アウトラインの再構築では、すべてのデータが消去されます。
選択済	選択解除	選択解除	Essbase Studio によって、既存のメンバーを削除せずにアウトライン・メンバーが追加されます。アウトラインの再構築では、データが保持されます。
選択解除	選択済	選択済	Essbase Studio によって、アウトライン次元が削除されてから、次元が再構築されます。アウトラインの再構築では、すべてのデータが消去されます。
選択解除	選択済	選択解除	Essbase Studio によって、アウトライン次元が削除されてから、次元が再構築されます。アウトラインの再構築では、データが保持されます。
選択解除	選択解除	選択済	Essbase Studio によって、次元を削除せずにメンバーが追加されます。アウトラインの再構築では、データが消去されます。
選択解除	選択解除	選択解除	Oracle Essbase Studio によって、次元を削除せずにメンバーが追加されます。アウトラインの再構築では、データが保持されます。

3 「配置」をクリックします。

注： 配置が中断または削除された場合は、ステータスが「配置の保留中」と表示されたり、配置がタイムアウトになったりします。デフォルト・タイムアウトは 480 分(8 時間)です。デフォルトは `awbconfig.properties` で変更できます。配置がタイムアウトした場合、アプリケーションを再度配置する必要があります。ステータスで配置との同期が示されている場合でも、タイムアウトのため、同期されていない可能性があります。

- Essbase Administration Services コンソールで、配置されたアプリケーションのアウトラインを表示および編集します。Oracle Hyperion Smart View for Office または Oracle Essbase Spreadsheet Add-in を使用して、アプリケーション・データベースをクエリーします。

詳細 Profitability アプリケーションの再配置

再配置では、前回の配置後に行った変更のタイプに基づいて、アプリケーション・メタデータのマージまたは置換が実行されます。

詳細 Profitability アプリケーションでは、次のいずれかの状態の場合に再配置できない場合があります:

- ユーザー定義メジャー次元が削除されています。再配置を続けるには、次のいずれかの方法で削除された次元を復元する必要があります。
 - 正しいバージョンのアプリケーションのインポート
 - 次元の再作成
 - 「次元ライブラリ」画面の共有ライブラリからの次元のコピー
- モデルで使用されていない次元が削除されています。その次元へのすべてのモデル・データ登録列マッピングも削除されています。削除されたマッピングのリストは、EPMA log および hpcm.log に表示されます。

注: いずれの場合も次元を削除しようとする時、再配置時に警告が表示され、EPM Workspace の「ジョブ・コンソール」画面の EPMA.log に表示されます。

▶ Profitability and Cost Management アプリケーションを Performance Management Architect で再配置するには:

- 1 **オプション:** 存在する可能性のある検証条件を修正し、アプリケーションを保存します。
- 2 EPM Workspace から、「ナビゲート」、「管理」、「アプリケーション・ライブラリ」の順に選択します。
- 3 配置するアプリケーションの名前を右クリックし、ドロップダウン・リストから「配置」を選択します。

アプリケーションは配置前に検証され、検証エラーはジョブ・コンソールに表示されます。配置前にすべての検証エラーを修正する必要があります。検証が完了すると、アプリケーション名が表示された「配置」ダイアログ・ボックスが表示されます。

- 4 「完全配置」を選択して、Performance Management Architect ですべての次元を Profitability and Cost Management に送信します。

- 5 「配置」をクリックします。

検証ジョブが送信されたことを確認する「ジョブ・タスク」ウィンドウが開き、ジョブ ID が表示されます。

- 6 「ジョブ・タスク」ウィンドウでリンクをクリックすると、ジョブ・ステータスが表示されます。

ジョブが完了すると、アプリケーションが Profitability and Cost Management に配置されたことを示すメッセージが「詳細」に表示されます。アプリケーションは選択可能です。

アプリケーション配置履歴の表示

配置について問題のトラブルシューティングを行うために、アプリケーションの配置履歴を表示できます。アプリケーションの配置履歴を表示するには、Shared Services で特定の役割を割り当てられている必要があります。

- 配置されていないアプリケーションの場合、配置履歴を表示するには、Performance Management Architect のアプリケーション作成者の権限が必要です。
- 配置済のアプリケーションの場合、配置履歴を表示するには、Shared Services のアプリケーション管理者権限が必要です。

注： デフォルトのアプリケーション配置履歴のエントリ数は 10 です。この設定をオーバーライドするには、MaxDeploymentHistoryEntries エントリを BPMA_Server_Config.xml ファイルに追加します。[付録 D 「BPMA_Server_Config.xml の構成設定」](#)を参照してください。

▶ 配置履歴を表示するには:

- 1 アプリケーション・ライブラリに移動します。
- 2 配置されているアプリケーションを右クリックし、「配置履歴」を選択します。

ジョブ・コンソールが表示されます。「ジョブ・コンソール」ビューは、ソース・アプリケーションと、「エクスポート」、「クラシックから EPM Architect への変換」、「アプリケーションの移行」および「アプリケーションの配置」というジョブ・タイプでフィルタされます。(アプリケーションの配置のジョブは、配置、再配置およびビジネス・ルールの配置のみです。)

ジョブ・コンソールの使用の詳細は、[305 ページの「ジョブ・コンソールの操作」](#)を参照してください。

アプリケーションの問題のトラブルシューティング

場合によっては、Performance Management Architect アプリケーションの状態が、次元サーバー、オブジェクト・リポジトリ、Shared Services またはターゲット Hyperion 製品で同期しなくなることがあります。これは、データベースが破損するか、復元または移行に失敗した場合に発生する可能性があります。アプリケーションの問題のトラブルシューティングには 2 つのオプションがあります:

- 孤立アプリケーションを表示します。[257 ページの「孤立アプリケーションの表示」](#)を参照してください。

孤立アプリケーションとは、次元サーバーには存在するが、オブジェクト・リポジトリでは破損しているか、見つからないものです。孤立アプリケーションは、次元サーバーに存在していても、Performance Management Architect アプリケーション・ライブラリ・ユーザー・インタフェースには表示されません。

- アプリケーション・ライブラリに存在するアプリケーションでテストを実行します。[257 ページの「アプリケーション診断の実行」](#)を参照してください。

アプリケーション診断ツールを使用すると、アプリケーション・ライブラリに表示されているアプリケーションに対してテストを実行できます。アプリケーション診断ツールでは孤立アプリケーションにアクセスできません。

孤立アプリケーションの表示

孤立アプリケーションとは、アプリケーション・ライブラリにはないが、Performance Management Architect 次元サーバーから削除されてはいないアプリケーションです。

▶ 孤立アプリケーションを表示するには:

- 1 アプリケーション・ライブラリで、「表示」、「孤立アプリケーション」の順に選択します。
- 2 孤立アプリケーションが表示された場合、「解決」または「削除」のいずれかのソリューションを選択します。

「選択オプション」列を使用して、孤立アプリケーションの問題を解決するかアプリケーションを削除できます。

解決 - アプリケーションをアプリケーション・ライブラリに戻します。孤立アプリケーションが戻されると、そのアプリケーションは「未配置」状態になります。場合によっては、この状態が原因で次元サーバーと不整合になることがあります。ただし、アプリケーションを表示できるため、アプリケーション診断を実行することにより不整合を解決できます。[257 ページの「アプリケーション診断の実行」](#)を参照してください。

削除 - 次元サーバーからアプリケーションを削除します。

- 3 「適用」をクリックします。
- 4 問題を解決した後で「取消し」をクリックして、ダイアログ・ボックスを閉じます。

アプリケーション診断の実行

アプリケーション診断を実行でき、診断テストに失敗した場合は、Performance Management Architect によって問題を解決するための自動化ソリューションまたは手動手順が提供されます。

一部のテストは他のテストに依存します。テストには次の3つのカテゴリがあります(実行順に示しています):

1. Performance Management Architect の不一致
2. Shared Services のテスト
3. Hyperion 製品のテスト

Performance Management Architect のテストが失敗した場合、そのテストに依存する他のテストは実行されず、「該当なし」と表示されます。依存テストを実行するには、依存テストの選択を解除する必要があります。

注： Performance Management Architect アプリケーションでアプリケーション診断を実行するには、EPMA 管理者セキュリティ役割が必要です。Performance Management Architect セキュリティ役割の詳細は、『Oracle Hyperion Enterprise Performance Management System ユーザーおよび役割セキュリティ・ガイド』を参照してください。

▶ アプリケーションの問題を診断するには:

- 1 アプリケーション・ライブラリで、アプリケーションを右クリックして「診断」を選択します。

「アプリケーション診断」ダイアログ・ボックスには、アプリケーション名が表示され、アプリケーション名の下にテストの全体的なステータスが表示されます。たとえば、選択したテストを実行する前は、ステータスに「未テスト」と表示されます。テストを実行した後は、失敗したテストがある場合は「失敗で完了」、エラーが発生した場合は「エラーで完了」、すべてのテストに成功した場合は「正常に完了」と表示されます。

- 2 アプリケーション診断を実行するために使用可能なテストを確認します。258 ページの「アプリケーションのテスト」を参照してください。

- 3 実行するテストを選択し、「選択したテストを実行」をクリックします。

デフォルトでは Performance Management Architect のテストのみが選択されています。「すべて選択」を使用して、すべてのテストを選択するか、選択解除するかを切り替えることができます。

各テストのステータス列には、個々のテストについて「成功」、「失敗」または「エラー」と表示されます。アプリケーションにそのテストを実行する必要がない場合、またはそのアプリケーション・タイプでそのテストがサポートされていない場合には、「該当なし」が表示されます。選択が解除されたテストには、「未テスト」のステータスが表示されます。

- 4 テストに失敗した場合は、失敗したテストを選択して詳細を表示し、解決方法を選択します。次に、「適用」をクリックします。

失敗したテストの例は、263 ページの「例: テストに失敗 - 配置済だが Shared Services から欠落」を参照してください。

- 5 「はい」をクリックして変更を確認します。

- 6 「閉じる」をクリックします。

アプリケーションのテスト

アプリケーションで実行できるのは次のテストです:

- **一部削除済** - アプリケーションは次元サーバー・データベースに部分的に存在し、オブジェクト・リポジトリ・データベースには存在しません。この問題は、データベースの復元が中断されたか、データベースが破損している場合に発生することがあります。このテストに失敗する場合は、Performance Management Architect でアプリケーションを削除し、アプリケーションを再作成します。

このソリューションでは、アプリケーションが Performance Management Architect からのみ削除されます。このアプリケーションが配置されている場合は、Shared Services および適切な Hyperion 製品からアプリケーションを手動で削除します。

- **一貫性のないステータス** - アプリケーションのステータスが、データベース全体で一貫していません。このシナリオは、アプリケーション・ステータスがオブジェクト・リポジトリ・データベース内で一貫していない場合に発生することがあります。この問題は、データベースの復元が中断されたか、データベースが破損している場合にも発生することがあります。この問題を解決するには、データベース内のステータス情報を同期します。

このソリューションは、データベース内のすべてのステータス情報を同期して一貫させます。

- **不完全な保留配置** - アプリケーションは不完全な配置状態にあります。問題を解決するには:

- アプリケーションを更新して配置済状態を反映します。

このソリューションは、アプリケーションが少なくとも 1 回は正常に配置された場合に使用できます。これにより、アプリケーションの状態が以前に正常に配置された状態に戻り、再配置できるようになります。

- アプリケーションを更新して未配置状態を反映します。

このソリューションは、アプリケーションが一度も正常に配置されていない場合に使用できます。これにより、アプリケーションが未配置状態に戻り、アプリケーションを再び配置できるようになります。

- **不完全な配置** - アプリケーションの状態は、部分的に完了した配置を反映します。このシナリオは、アプリケーションが次元サーバー・データベースでは「配置の保留中」状態で、オブジェクト・リポジトリ・データベースでは「配置済」の場合に発生することがあります。この問題は、データベースの復元が中断されたか、データベースが破損している場合にも発生することがあります。この問題を解決するには、アプリケーションを再配置します。

このソリューションは、次元サーバー・データベースでの配置を完了し、次元サーバーとオブジェクト・リポジトリ間でステータスを同期します。

- **一部配置** - アプリケーションは、現在一部配置された状態です。このシナリオは、アプリケーションが次元サーバー・データベースには配置されておらず、オブジェクト・リポジトリ・データベースに配置されている場合に発生することがあります。この問題は、データベースの復元が中断されたか、データベースが破損している場合にも発生することがあります。問題を解決するには:

- アプリケーションを更新して「未配置」の状態を反映します。

アプリケーションが存在する場合は、Hyperion 製品から手動で削除する必要があります。

- Performance Management Architect のみからアプリケーションを削除します。

アプリケーションが存在する場合は、Hyperion 製品から手動で削除する必要があります。

- **一部配置の保留中** - アプリケーションは現在一部配置の保留中状態です。このシナリオは、「不完全な配置」シナリオと似ていますが、さらに矛盾があります。アプリケーションが一部配置の保留中状態の場合、保留中の配置は現在の配置になりません。したがって、前に試行した配置から保留中になっている配置です。このシナリオは、アプリケーションが配置されたときにシステム障害が発生し、その後でアプリケーションを修正(配置済状態に復元)してから、Hyperion 製品への配置に再び失敗した場合に発生することがあります。データベースの破損がこの問題の原因となることもあります。問題を解決するには:
 - アプリケーションを更新して配置済状態を反映します。

このソリューションは、アプリケーションが少なくとも 1 回は正常に配置された場合に使用できます。
 - アプリケーションを更新して「未配置」の状態を反映します。

このソリューションは、アプリケーションが一度も正常に配置されていない場合に使用できます。
- **一貫性のない配置状態(配置保留と未配置)** - アプリケーションは、未配置と配置の保留中の両方の状態です。このシナリオは、アプリケーションが次元サーバー・データベースに配置されておらず、オブジェクト・リポジトリ・データベースでは「配置の保留中」状態である場合に発生することがあります。この問題は、データベースの復元が中断されたか、データベースが破損している場合にも発生することがあります。この問題を解決するには、「未配置」の状態を反映するために、アプリケーションを更新します。

このソリューションは、アプリケーションを初期の「未配置」状態に戻します。
- **配置の保留中** - アプリケーションは現在「配置の保留中」状態です。この問題は、アプリケーションが配置された Hyperion 製品が応答不能になった場合に発生することがあります。問題を解決するには:
 - アプリケーションを更新して配置済状態を反映します。

このソリューションは、アプリケーションが少なくとも 1 回は正常に配置された場合に使用できます。これにより、アプリケーションの状態が以前に正常に配置された状態に戻り、再配置できるようになります。

注： アプリケーションが配置されていない場合、アプリケーションを「未配置」状態に戻して問題を解決するか、「配置済」状態に移行することができます。

 - アプリケーションを更新して未配置状態を反映します。

このソリューションは、アプリケーションが一度も正常に配置されていない場合に使用できます。これにより、アプリケーションが未配置状態に戻り、アプリケーションを再び配置できるようになります。
- **削除の保留中** - アプリケーションは「削除の保留中」状態です。このシナリオは、配置済のアプリケーションでのみ発生することがあります。アプリケーションは配置されているため、アプリケーションは Planning などの Hyperion 製品から削除しようとしたときに「削除の保留中」状態になっていることがあり、製品が応答しなくなります。問題を解決するには:

- Performance Management Architect のみから削除します。
アプリケーションが Financial Management や Shared Services などの Hyperion 製品に存在する場合は、手動で削除します。
- アプリケーションを更新して配置済状態を反映します。
このソリューションは、アプリケーションを「配置済」に戻し、「配置の保留中」状態情報を除去して、配置した Hyperion 製品でアプリケーションの削除を試行できるようにします。
- **削除用に予約されているアプリケーション** - アプリケーションはユーザーによって削除が予約されていますが、削除されていません。このシナリオは、アプリケーションが「削除の保留中」状態からの更新プロセスにある場合に発生することがあります。たとえば、アプリケーションの削除の試行が失敗し、そのアプリケーションが「削除の保留中」状態でないことを反映するために次元サーバー・データベースが更新されていない場合などです。この問題は、データベースの復元が中断されたか、データベースが破損している場合に発生することがあります。この問題を解決するには、ユーザーの削除予約を除去し、アプリケーションを有効としてリセットします。
このソリューションでは、アプリケーションを再び削除できます。
- **配置済ですが、Shared Services にありません** - アプリケーションが Shared Services には存在しませんが、Performance Management Architect には表示されます。この問題は、Shared Services が動作を停止した場合に発生することがあります。問題を解決するには:
 - Performance Management Architect のみから削除します。
このソリューションは、アプリケーションが Hyperion 製品に配置されておらず、その製品に現在存在することがわかっている場合にのみ使用します。
 - Performance Management Architect でステータスを「未配置」に変更し、必要なクリーンアップを実行します。
アプリケーションのステータスを変更すると、アプリケーションが Performance Management Architect で「未配置」の状態に戻り、アプリケーションを再配置できるようになります。
 - Shared Services にアプリケーションを再登録します。
このソリューションは、Performance Management Architect および Shared Services のアプリケーションを同期します。
- **未配置ですが、Shared Services にあります** - アプリケーションが Shared Services には存在しますが、Performance Management Architect では、「未配置」と表示されます。この問題は、データベースの復元が中断されたか、データベースが破損している場合に発生することがあります。問題を解決するには:
 - Performance Management Architect からアプリケーションを削除します。
このソリューションでは、アプリケーションが Performance Management Architect からのみ削除されます。アプリケーションが Shared Services または Hyperion 製品(Financial Management など)にある場合、手動で削除します。

- Shared Services から手動でアプリケーションを削除します。

Shared Services からアプリケーションを削除するには、Shared Services にログインし、アプリケーションが配置されたプロジェクトを探し、アプリケーションを削除します。

- **一貫性のない配置状態(配置済と配置の保留中)** - アプリケーションは「配置済」と「配置の保留中」の両方の状態です。このシナリオは、アプリケーションが配置されていることが次元サーバー・データベースで示され、アプリケーションが配置の保留中であることがオブジェクト・リポジトリ・データベースで示されている場合に発生することがあります。この問題は、データベースの復元が中断されたか、データベースが破損している場合にも発生することがあります。この問題を解決するには、配置済の状態が反映されるようにアプリケーションを更新します。

このソリューションは、オブジェクト・リポジトリ・データベースを次元サーバー・データベースと同期し、アプリケーションを配置済状態にします。

- **一貫性のない配置状態(配置済と未配置)** - アプリケーションは、配置済と未配置の両方の状態です。このシナリオは、アプリケーションが配置されていることを次元サーバー・データベースが示し、アプリケーションが配置されていないことがオブジェクト・リポジトリ・データベースで示されている場合に発生することがあります。この問題は、データベースの復元が中断されたか、データベースが破損している場合にも発生することがあります。問題を解決するには:

- Performance Management Architect のみから削除します。

アプリケーションが Shared Services に登録されている場合にのみ使用できます。このソリューションは、Performance Management Architect からアプリケーションを削除します。Shared Services からアプリケーションを手動で削除する必要があります。

- アプリケーションを更新して未配置状態を反映します。

アプリケーションが Shared Services に登録されていない場合に使用可能です。このソリューションは、アプリケーションを未配置状態に戻します。

- **無効な配置情報** - アプリケーションが無効な場所に配置されています。この問題を解決するには、次の2段階の手順を実行します:

1. 考えられる配置済の場所のインスタンス名とクラスタを取得します。
2. 正しい配置場所を選択し、配置データを新規の場所と同期させます。

- **配置済、製品内ではクラシック・アプリケーション** - アプリケーションは Web アプリケーション・サーバーおよび次元サーバーに配置されていますが、Planning または Financial Management ではクラシック・アプリケーションです。(このテストは、Essbase または Profitability and Cost Management アプリケーションには適用されません。)問題を解決するには:

- Performance Management Architect のみから削除します。アプリケーションが削除されると、「クラシックから EPM Architect への変換ウィザード」を実行して、アプリケーションを Performance Management Architect に移動します。37 ページの「[クラシック・アプリケーションの Performance Management Architect への変換](#)」を参照してください。

- アプリケーションを Planning または Financial Management から手動で削除します。
- **配置済ステータスですが製品内にありません** - アプリケーションは Performance Management Architect に配置されていますが、適切な製品に配置されていません(このテストは、Essbase アプリケーションには適用できません。)問題を解決するには:
 - Performance Management Architect でのステータスを「未配置」ステータスに変更し、必要に応じてアプリケーションをクリーンアップします。
 - 現在の配置の場所を表示するために、インスタンス名、Web サーバー、クラスタ、データ・ソース(Planning アプリケーションの場合)および Shared Services ID を取得します。 .

このテストを実行し、ステータスに「エラー」と表示された場合、ソリューションは表示されません。問題を解決するには、「テストの詳細」領域に表示されたエラー・メッセージにある指示に従います。

- **EPMA では未配置ステータスですが、製品内にあります** - アプリケーションは Performance Management Architect に配置されていませんが、Planning、Profitability and Cost Management または Financial Management などの製品では表示されます。(このテストは、Essbase アプリケーションの場合、適用されません。)問題を解決するには:

連結および Planning アプリケーションの場合:

- Performance Management Architect のみから削除します。アプリケーションが削除されると、「クラシックから EPM Architect への変換ウィザード」を実行して、アプリケーションを Performance Management Architect に移動します。37 ページの「クラシック・アプリケーションの Performance Management Architect への変換」を参照してください。
- アプリケーションを Planning または Financial Management から手動で削除します。

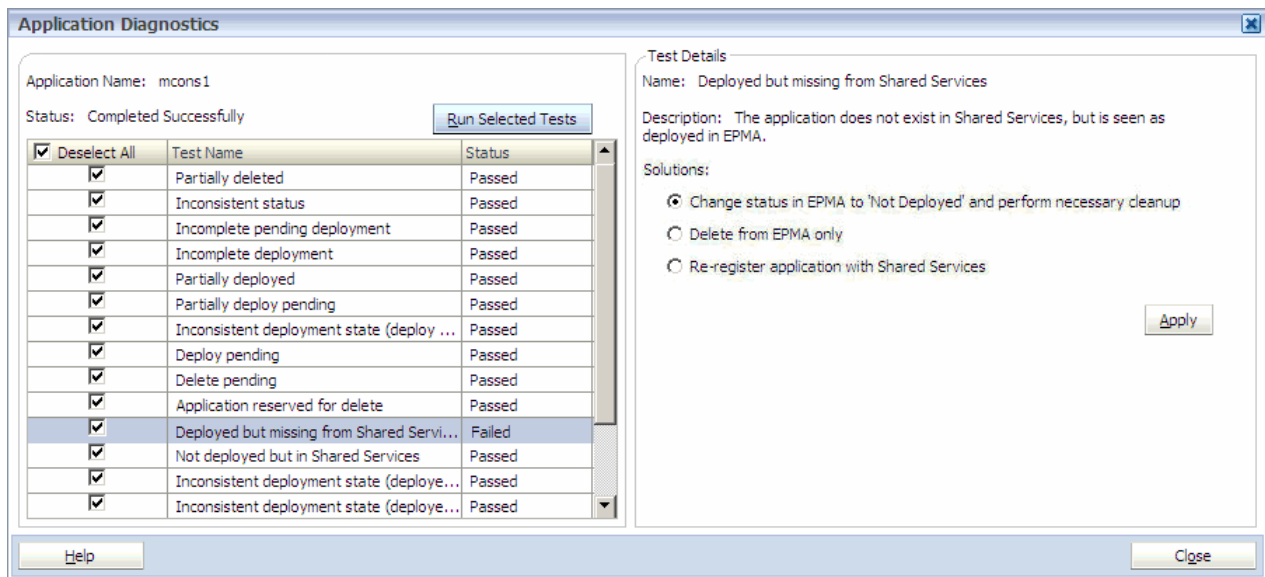
Profitability アプリケーションの場合:

- Profitability and Cost Management でアプリケーションをクリーンアップします(アプリケーションのクリーンアップを選択して、Profitability and Cost Management の適切なインスタンス名を選択します)。アプリケーションのクリーンアップを選択すると、アプリケーションは Profitability and Cost Management 内で削除されます。

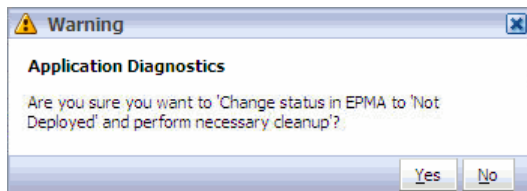
例: テストに失敗 - 配置済だが Shared Services から欠落

「配置済ですが、Shared Services にありません」テストが失敗した場合、アプリケーションは Performance Management Architect に存在しますが、Shared Services からは欠落しています。この場合、いくつかのソリューションが表示されます。たとえば、Performance Management Architect でのステータスを「未配置」に変更し、必

要なクリーンアップを実行してから「適用」をクリックするというオプションを選択できます。



「適用」をクリックすると、確認ダイアログ・ボックスが表示されます。



「警告」ダイアログ内で「はい」をクリックすると、「配置済ですが、Shared Services にはありません」テストに「成功」ステータスが表示されます。

場合によっては、このテストが成功しても、別のテストが失敗することもあります。次のシナリオを考えてみます：

1. アプリケーション診断ツールをアプリケーションで実行して、「配置済ですが、Shared Services にはありません」が失敗します。
2. 「EPMA のステータスを「未配置」に変更して必要なクリーンアップを実行します」ソリューションを適用します。

最初のテストは成功しますが、「EPMA では未配置ステータスですが、製品内にあります」テストは失敗します。

アプリケーション診断ツールでは、自動的にこの新しい問題を検出します。この場合、最初のソリューションを適用すると、配置ステータスが Performance Management Architect で変わります。この時点で、アプリケーションは Performance Management Architect に配置されていませんが、製品内にはまだ存在します。

3. この問題を解決するには、「EPMA では未配置ステータスですが、製品内にあります」を選択して、適切なソリューションを選択します。

これですべてのテストが成功します。

プランニング・データ・ソースの管理

データ・ソースはリレーショナル・データベースおよび Essbase サーバーをリンクします。プランニングの場合、各アプリケーションがデータ・ソースと関連付けられている必要があります。名前、説明、Unicode のサポート、使用、データベース・タイプ、名前、サーバー、ユーザー名、Essbase サーバー情報などを含む、データ・ソースの要約詳細を表示できます。

注： EPM System コンフィグレータを使用して Essbase サーバーを変更する場合は、Performance Management Architect 内でサーバー名を更新します。

データ・ソースを作成および更新するには、[266 ページの「データ・ソース情報の入力」](#)を参照してください。データ・ソースを削除するには、[268 ページの「データ・ソースの削除」](#)を参照してください。

注： 各アプリケーションはインスタンスと関連付けられている必要もあります。インスタンスは EPM System コンフィグレータで操作します。詳細は、『Oracle Hyperion Enterprise Performance Management System インストールおよび構成ガイド』を参照してください。

データ・ソース・ウィザードの開始

データ・ソース・ウィザードを使用して Planning アプリケーションのデータ・ソースを作成および更新できます。データ・ソースはリレーショナル・データベースおよび Essbase サーバーをリンクします。このタスクを実行する前に、Essbase サーバーが実行されていることを確認してください。

データ・ソースを削除するには、[268 ページの「データ・ソースの削除」](#)を参照してください。

▶ データ・ソース・ウィザードを開始するには:

- 1 アプリケーション・ライブラリで、「ツール」を選択し、「プランニング・データ・ソースの管理」を選択します。
- 2 次のいずれかのアクションを実行します:
 - データ・ソースを作成するには、「ファイル」、「新規」、「データ・ソース」の順に選択します。
 - データ・ソースを更新するには、データ・ソースを右クリックし、「編集」を選択します。
- 3 [266 ページの「データ・ソース情報の入力」](#)に進みます。

データ・ソース情報の入力

▶ データ・ソース情報を入力するには:

- 1 データ・ソース・ウィザードのナビゲーション・フレームで、「1. データ・ソースの詳細」をクリックします。
ウィザードを開始するには、[265 ページの「データ・ソース・ウィザードの開始」](#)を参照してください。
- 2 データ・ソース名を入力します。
データ・ソースが作成された後は、この名前を更新できません。
- 3 オプション: データ・ソースの説明を入力します。
- 4 オプション: 「Unicode をサポート」を選択して、アプリケーションを Unicode モードに設定します。Unicode モードのアプリケーションは複数のキャラクタ・セットをサポートします。
- 5 「次へ」をクリックし、[266 ページの「データベースの選択」](#)に進みます。

データベースの選択

データベースに接続している必要があります。また、サポートされているデータベース・タイプである必要があります。サポートされているデータベースについては、『Oracle Hyperion Enterprise Performance Management System インストール概要』ガイドを参照してください。

注: データベースを構成する前に、Planning が Shared Services に登録され、アプリケーション・サーバーに配置されていることを確認します。Planning に対してデータベースを構成する際に、以前に構成されているデータベースが検出された場合、新規データベースを作成するか、既存のデータベースを再利用するかを尋ねるメッセージが表示されます。製品アップグレードを構成する場合には、このページのフィールドはパスワード以外、読取り専用になります。

オプションを選択して、アプリケーションを Unicode モードに設定できます。Unicode モードのアプリケーションは、複数のキャラクタ・セットをサポートします。Essbase は UTF-8 エンコード方式を使用して、文字テキストを解釈して保管します。Unicode モードのアプリケーションでの文字ベースのアーティファクト (メンバー、別名など) には別の言語の文字を含めることができます。詳細は、Oracle Essbase データベース管理者オンライン・ヘルプを参照してください。

▶ データベースを選択するには:

- 1 データ・ソース・ウィザードのナビゲーション・フレームで、「2. データベースの詳細」をクリックします。
ウィザードを開始するには、[265 ページの「データ・ソース・ウィザードの開始」](#)を参照してください。

- 2 「データベース・タイプ」フィールドがアクティブ化されている場合には、「MS SQL Server」、「Oracle」、「IBM DB2」のいずれかを選択します。
- 3 データベース構成の詳細を追加または更新します:
 - 「サーバー」: データベースをホストするサーバー。
 - 「ポート」: ポート番号。デフォルト・ポートの詳細は、『Oracle Hyperion Enterprise Performance Management System インストール概要』ガイドを参照してください。
 - 「データベース」: データベースの名前。
 - 「ユーザー名」: データベース・ユーザー名。
 - 「パスワード」: データベース・パスワード。
- 4 「オプション」: 「接続のテスト」をクリックして、データ・ソースとの接続をテストします。
- 5 「次へ」をクリックして、[267 ページの「Essbase サーバーの構成」](#)に進みます。

Essbase サーバーの構成

▶ Essbase サーバーを構成するには:

- 1 データ・ソース・ウィザードのナビゲーション・フレームで、「3. Essbase サーバーの詳細」をクリックします。

ウィザードを開始するには、[265 ページの「データ・ソース・ウィザードの開始」](#)を参照してください。
- 2 サーバーの詳細を更新します:
 - Essbase サーバー名
Essbase サーバー名はポート番号とともにリストできます。たとえば localhost:1423 のようにリストできます。
 - Essbase ユーザー名
 - Essbase パスワード
- 3 「オプション」: 「接続のテスト」をクリックして、Essbase サーバーの接続をテストします。
- 4 「次へ」をクリックして、[267 ページの「要約詳細の表示」](#)に進みます。

要約詳細の表示

詳細を表示した後に、データ・ソースを作成または更新できます。

注: データ・ソースの作成後、Oracle Hyperion Enterprise Performance Management System コンフィグレータを使用して、必要に応じてインスタンスを更新できます。詳細は、『Oracle Hyperion Enterprise Performance Management System インストールおよび構成ガイド』を参照してください。

▶ 要約詳細を表示するには:

- 1 データ・ソース・ウィザードのナビゲーション・フレームで、「4. 要約の詳細」をクリックします。

ウィザードを開始するには、265 ページの「データ・ソース・ウィザードの開始」を参照してください。

- 2 設定がよければ、「終了」をクリックします。

設定を更新するには、「戻る」をクリックし、変更したら、このタブに戻り、「終了」をクリックします。

データ・ソースの削除

アプリケーションに関連付けられていないデータ・ソースを削除できます。

▶ データ・ソースを削除するには:

- 1 アプリケーション・ライブラリで、「ツール」を選択し、「プランニング・データ・ソースの管理」を選択します。

- 2 アプリケーションに関連付けられていないデータ・ソースを右クリックして、「削除」を選択します。

データ・ソースがアプリケーションに関連付けられている場合、このオプションは使用できません。

- 3 プロンプトで「OK」をクリックし、データ・ソースを削除します。

第 III 部

アプリケーション・データ・ロードの 管理

アプリケーション・データ・ロードの管理の内容：

- [データの同期](#)

この章の内容

データの同期の理解	271
アプリケーション・ライブラリでのデータの同期	272
データ・シンクロナイザでのデータの同期	272
複数通貨の Planning アプリケーションの同期	274
Hyperion データ・インタフェース・テーブルをソースとして使用	275
外部ファイルのソースとしての使用方法	277
次元のマッピング	279
マッピングの操作	290
データ・シンクロナイザの操作	295
データ同期のトラブルシューティング	300

データの同期の理解

データの同期によって、Hyperion アプリケーション、インタフェース・テーブルおよび外部ファイル間でデータを同期およびマップできます。

データの同期モジュールによって使用可能になるタスクは、次のとおりです：

- 同期の作成および変更
- ソースおよび宛先のアプリケーションまたはファイルの選択(外部ソースはソースのみ)
- ソースおよび宛先間のマッピングの定義
- 同期の検証
- 同期の実行
- 同期アクティビティのログの表示

データの同期モジュールによって、Financial Management、Planning、Profitability and Cost Management、Essbase (ASO)および Essbase (BSO)を宛先として、次のソースとの間の同期を作成できます：

- Financial Management
- Planning
- Profitability and Cost Management
- Essbase ASO

- Essbase BSO
- 外部ソース(フラット・ファイル)
- インタフェース・テーブル

Performance Management Architect によって、次の3つの場所のデータを同期できます:

- アプリケーション・ライブラリ(272 ページの「アプリケーション・ライブラリでのデータの同期」)
- データ・フロー(236 ページの「データ・フローの表示」)
- データ・シンクロナイザ(272 ページの「データ・シンクロナイザでのデータの同期」)

アプリケーション・ライブラリでのデータの同期

2つのアプリケーションが選択され、「統合の作成」アクセス役割に自身のユーザー一名が割り当てられている場合、アプリケーション・ライブラリでアプリケーションを同期できます。『Oracle Hyperion Enterprise Performance Management System ユーザーおよび役割セキュリティ・ガイド』を参照してください。

▶ アプリケーション・ライブラリでデータを同期するには:

- 1 「ナビゲート」、「管理」、「アプリケーション・ライブラリ」の順に選択します。
- 2 ソース・アプリケーションを選択します。
- 3 [Ctrl]キーを押しながら宛先アプリケーションを選択します。
- 4 右クリックして「同期」を選択します。

注: Planning アプリケーションを同期する場合は、プラン・タイプを選択することを求めるプロンプトが表示されます。

次元マッピングが表示されます。279 ページの「次元のマッピング」を参照してください。

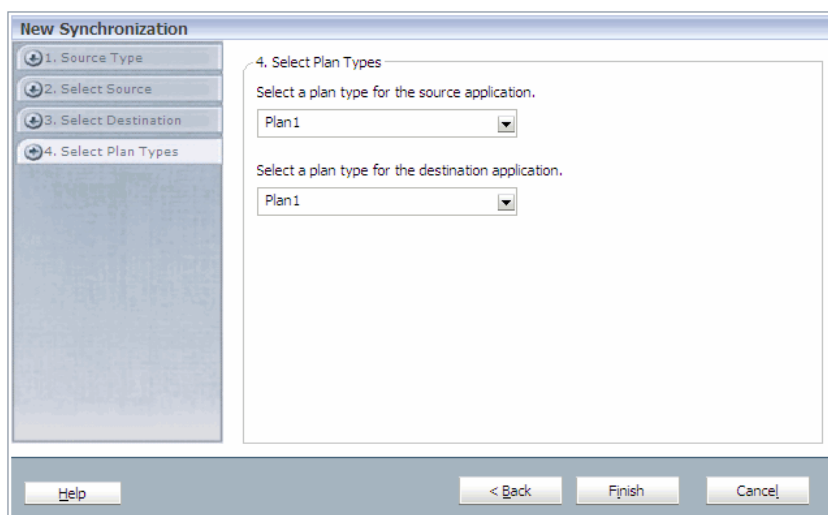
データ・シンクロナイザでのデータの同期

データ・シンクロナイザでアプリケーションを同期できます。

▶ データ・シンクロナイザでデータを同期するには:

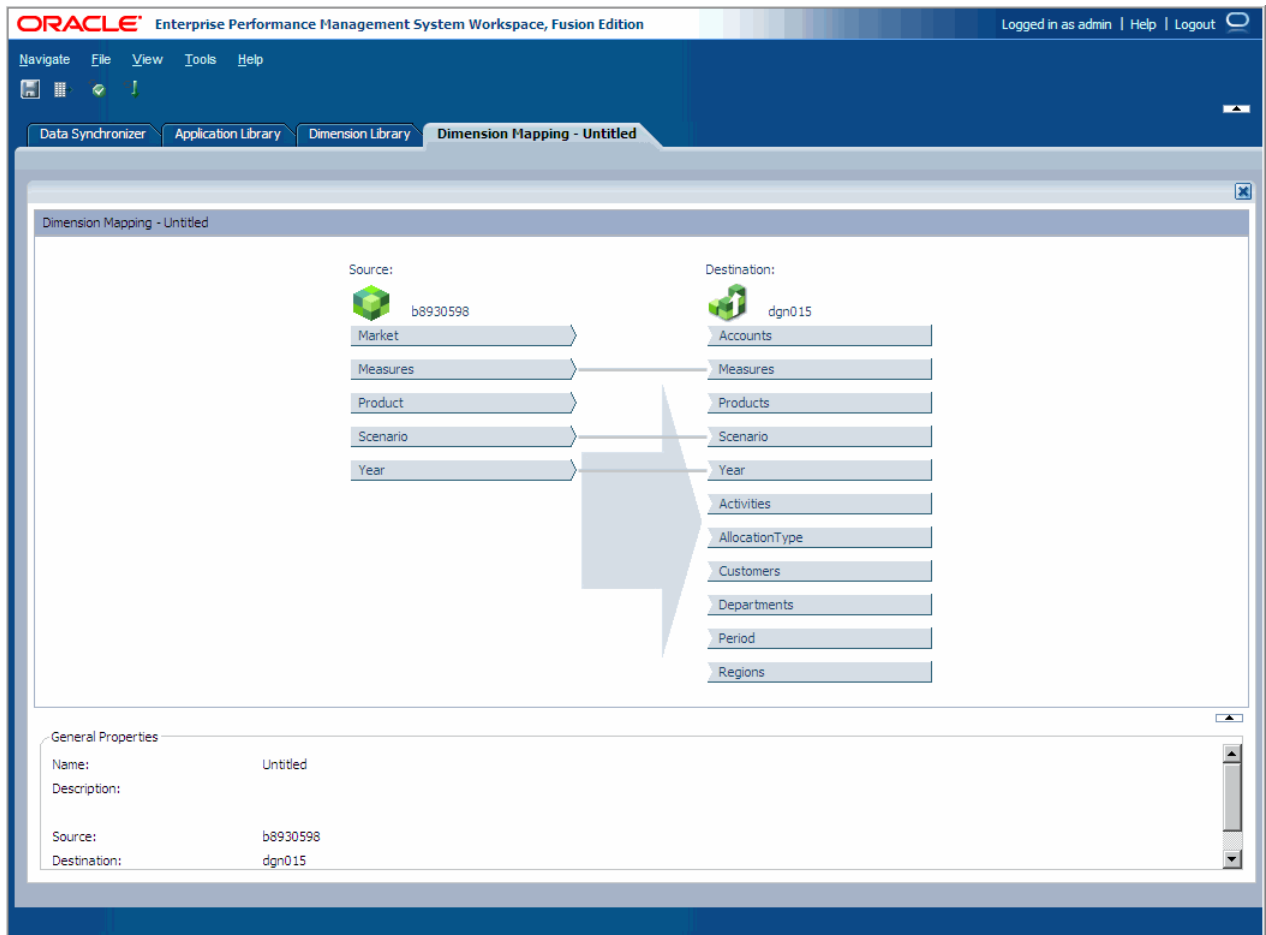
- 1 「ナビゲート」、「管理」、「データの同期」の順に選択します。
- 2 「ファイル」、「新規」、「同期」の順に選択します。
「新規同期」ウィザードが表示されます。


- 3 「Hyperion アプリケーション」を選択し、「次へ」をクリックします。
 - 4 ソース・アプリケーションを選択し、「次へ」をクリックします。
 - 5 次のいずれかのアクションを行います:
 - 2つの Financial Management アプリケーションを同期する場合は、「終了」をクリックし、手順6から手順8をスキップします。
 - Planning のソースまたは宛先のアプリケーションを同期する場合は、「次へ」をクリックします。
- 「プラン・タイプの選択」ダイアログ・ボックスが表示されます。



データはプラン・タイプ間で共有できます。たとえば、収益プランには、製品販売合計勘定科目に連結される一連の販売詳細勘定科目を含められます。P & L プランを作成して製品販売合計勘定科目を含め、一連の販売詳細勘定科目を省略することもできます。このようにして、勘定科目の詳細を記載せずに製品販売合計のデータ値を P & L プランに集約し、P & L プランのデータベースを小さく効率的にできます。複数通貨の Planning アプリケーションの同期の詳細は、[274 ページの「複数通貨の Planning アプリケーションの同期」](#)を参照してください。

- 6 プラン・タイプを選択し、「終了」をクリックします。
- 次元マッピングが表示されます。



7  をクリックします。

「データの同期の保存」ダイアログ・ボックスが表示されます。

8 「名前」および「説明」を入力し、「OK」をクリックします。

同期を保存した後に、次元をマップできます。279 ページの「次元のマッピング」を参照してください。

複数通貨の Planning アプリケーションの同期

複数通貨の Planning アプリケーションを同期できます。

たとえば、Financial Management の値(ソース)を HSP_Rates(宛先)にリンクするとします。Financial Management が生成する各行に対して、Planning に 2 行が戻されます。

この例では、Financial Management の行

```
Account, Entity, Period, Scenario, Year, Value "NetProfit", "UnitedStates.Massachusetts",
"January", "Actual", "2006", "USD", 10.0
```

は、次のように変換されます:

```
Account, Entity, Period, Scenario, Year, Currency,
```

```
HSP_Rates"NetProfit", "UnitedStates.Massachusetts", "January", "Actual", "2006", " Local"
, "HSP_InputValue", 10.
0"NetProfit", "UnitedStates.Massachusetts", "January", "Actual", "2006", " Local" , "HSP_In
putCurrency", USD
```

逆の場合も同様に動作します。Planning アプリケーションから連結アプリケーションに同期し、HSP_Rates から連結値にマップする場合は、2 行が 1 行にマージされます(前述の例の逆)。それ以外の場合、行は変更されずにソースから宛先に送信されます(メタデータおよびデータ換算後)。

注： 新規行の生成または元の行のマージは、データが宛先に送信される前に即座に実行されます。すべてのメタデータおよびデータの変換は、行の自動生成またはマージの前に実行されます。

▶ マルチ通貨アプリケーションを同期するには、HSP_Rates 次元を右クリックし「通貨メンバーの生成」を選択します。

注： Financial Management から Planning に同期している場合、「通貨メンバーの生成」オプションを使用できます。たとえば、右クリックして、連結アプリケーションの値次元を Planning アプリケーションの HSP_Rates 次元にマップすることができます。2 つの Planning アプリケーション間で同期している場合、このオプションは使用できません。

アプリケーションをマルチ通貨の Planning アプリケーションと同期して HSP_Rates 次元がリンクされた場合、HSP_Rates 次元の右クリック・メニューに「通貨メンバーの生成」が表示されます。

注： マルチ通貨アプリケーションの同期は、1 対 1 マッピングで実行でき、HSP_Rates が複数の次元にリンクされている場合は実行できません。

Financial Management を Planning にマッピングする場合は、Financial Management の値次元を Planning の HSP_Rates にマップし、デフォルト・メンバーの「ローカル」を通貨次元に割り当てる必要があります。

Hyperion データ・インタフェース・テーブルをソースとして使用

インタフェース・テーブルによって、データベース操作(SQL ロードまたは Hyperion データ統合製品の活用)を通じて Hyperion スキーマに情報を提供できます。インタフェース・テーブルに情報を保管した後に、データ同期で提供される標準のマッピングとロードのメカニズムを使用して、情報をそれぞれの Hyperion 製品に送れます。インタフェース・テーブルは、フラット・ファイルのロードのためにテキスト・ファイルを事前にフォーマットする必要がなく、Hyperion 製品スイートに情報を提供する際のリレーショナル・データベースの機能および柔軟性を必要と

する場合に役立ちます。次の項では、データ・インタフェース・テーブルをソースとして使用方法の詳細を説明します:

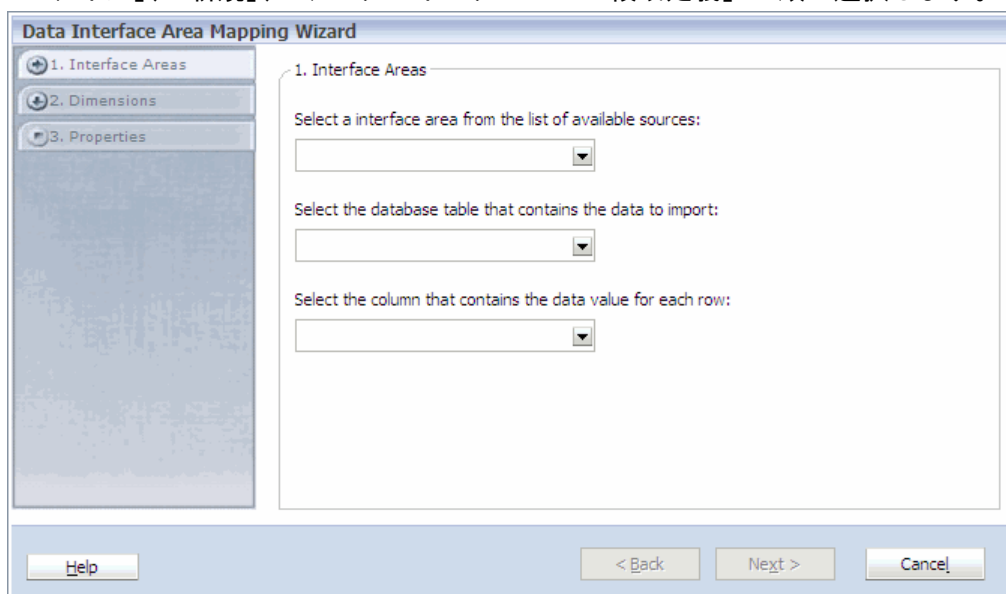
- 276 ページの「インタフェース領域の定義」
- 277 ページの「同期の作成」


インタフェース領域の定義

インタフェース領域をソースとして使用して同期を作成する前に、インタフェース・データ・ソースを作成する必要があります。62 ページの「インタフェース・データ・ソースの構成」を参照してください。

▶ インタフェース領域を作成するには:

- 1 「ファイル」、「新規」、「データ・インタフェース領域定義」の順に選択します。



- 2 インタフェース・テーブル・ソース、インポートするデータを含むデータベース・テーブル、および各行のデータ値を含む列を選択し、「次へ」をクリックします。
- 3 左の列を選択し、右に次元名を入力して次元を定義します。次に、 をクリックして列を追加します。

たとえば、列名が SCENARIO_DIMENSION_NAME の場合は、表示される名前を「Scenario」に変更できます。

ヒント:  をクリックして列を除去します。

- 4 「次へ」をクリックします。
- 5 インタフェース・テーブル名、オプションの説明を入力し、「終了」をクリックします。

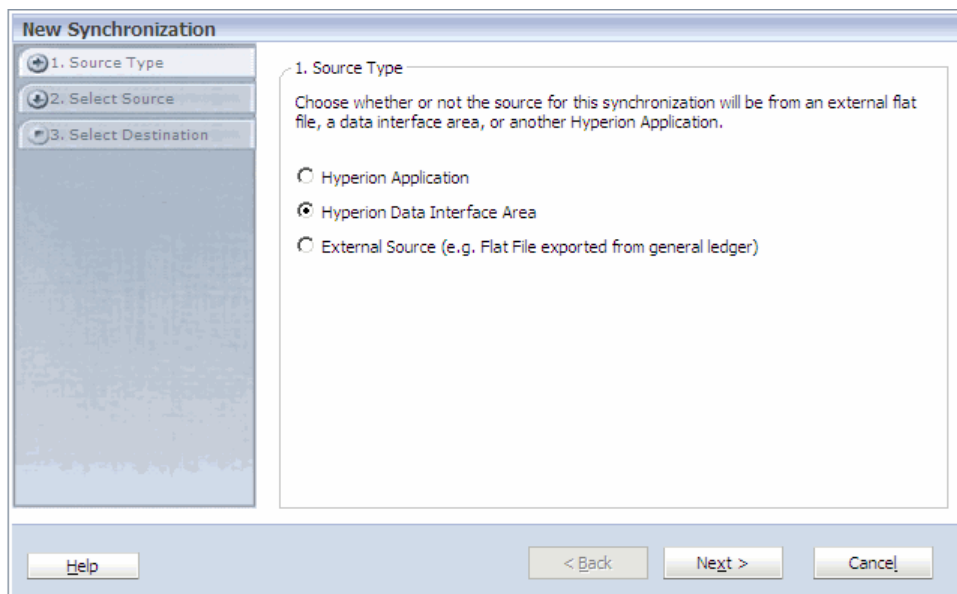
同期の作成


インタフェース領域を作成したら、そのインタフェース・テーブルをソースとして使用する同期を作成できます。

注： インタフェース・テーブルをソースとして使用して同期を作成する前に、インタフェース・テーブルを定義する必要があります。276 ページの「[インタフェース領域の定義](#)」を参照してください。

▶ 同期を作成するには:

- 1 データ・シンクロナイザで、「ファイル」、「新規」、「同期」の順に選択します。
- 2 「Hyperion データ・インタフェース領域」を選択します。



- 3 「次へ」をクリックします。
- 4 ソースを選択し、「次へ」をクリックします。
- 5 宛先アプリケーションを選択し、「次へ」をクリックします。
- 6 宛先アプリケーションが Planning アプリケーションの場合は、プラン・タイプを選択します。
- 7 「終了」をクリックします。
- 8  をクリックします。
「データの同期の保存」ダイアログ・ボックスが表示されます。
- 9 「名前」および「説明」を入力し、「OK」をクリックします。

外部ファイルのソースとしての使用方法

データ同期のソースとして使用する外部ファイルを定義できます。データ同期は、最後の列にデータを格納する区切りファイルをサポートし、固定長フィールドは

サポートしていません。フラット・ファイルのソースに関係するすべてのマッピング・ルールおよびフィルタを入力する必要があります。

外部ファイルをソースとして使用する同期を作成する前に、外部ファイルを定義する必要があります。

▶ 外部ファイルを定義するには:

1 「ファイル」、「新規」、「外部のファイル定義」の順に選択します。

「外部ファイル・マッピング・ウィザード」が表示されます。

2 次のすべてのアクションを実行します:

- 外部ファイルのフィールドを区切り文字である**区切り記号**を選択します。ファイルの区切り文字として、カンマ(,)、セミコロン(;)、タブまたはスペースを使用できます。「その他」フィールドを使用して区切り文字を指定することもできます。
- テキスト値を識別する文字である**引用符文字**を選択します。たとえば、引用符文字が二重引用符(")の場合は、すべてのメンバーを二重引用符で囲む必要があります。二重引用符で囲まれていないテキスト値があると、エラーを戻します。


注: メンバー名またはデータ値に区切り文字が現れた場合、引用符文字を指定する必要があります。区切り文字と引用符文字に同じものは指定できません。

- **スキップするヘッダー行の数**を入力します。たとえば、外部ファイルには、名前、住所、都市、都道府県、郵便番号など、スキップするヘッダーがある場合があります。
- **次元フィールドの行数**を入力します。次の例は、スキップするヘッダー行の合計数が4で、次元名のある行番号が行3である外部ファイルを示しています。

```
#first Row of the header
#Second Row of the header
Account,Time,Data
#fourth Row of the header
Sales,FY10,34.123
```

3 「次へ」をクリックします。

4 アクションを実行してファイルをプレビューします:

-  をクリックし、「参照」をクリックし、ファイルを選択し、「アップロード」をクリックします。

「プレビューするファイル URL の指定」を選択し、file:///c:/data/previewfile.csv などの URL を入力します。

外部ファイルの形式を指定したため、厳密な形式の制約を受けません。ただし、次のルールに注意してください:

- すべての行に同じ数の列を含める必要があります。
- すべての行には、各次元に対するメンバー値(空ではない)が必要です。
- すべての行の最後の列は交差値(テキストまたは数値)にする必要があります。

5 「サンプル・ファイルのプレビュー」をクリックします。

ファイルをプレビューするときはウィザードで指定するオプションが適用されるので、オプションがどのようにデータに影響するかを確認できます。

6 「次へ」をクリックします。

7 ファイルの次元の数を入力し、「更新」をクリックします。

8 ターゲット内の次元に対応するフィールド・ラベルを入力し、「次へ」をクリックします。

9 外部ファイルの名前と説明(省略可能)を入力し、「終了」をクリックします。

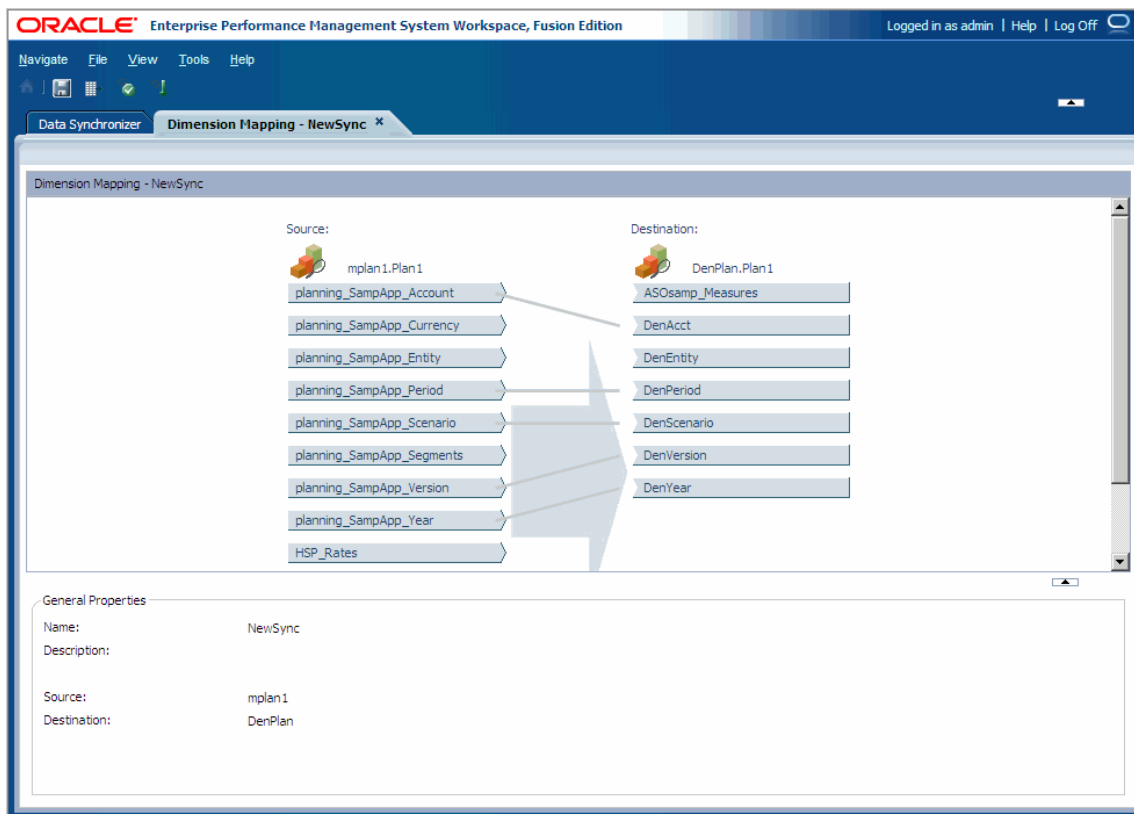
次元のマッピング

同期を作成した後は、同期がすべての関連要素を認識できるように、各ソースおよび宛先に対応する次元をマップする必要があります。同期の詳細を定義するときはリンクを作成するか、または定義済のマッピング・テーブルを活用するか、またはマップする必要がない次元にデフォルト値を割り当てられます。

▶ 次元をマップするには:

- 1 新規同期を作成する場合は、次元マッピングが自動的に表示されます。それ以外の場合に次元マッピングにアクセスするには、データ・シンクロナイザで同期を右クリックし、「編集」をクリックします。

次元マッピングが表示されます。



次元マッピングを使用して、ソースおよび宛先の次元間のリンクを作成、変更、または削除できます。データ同期は、アプリケーション間の一般的な次元を自動的にリンクします。ソースおよび宛先の次元間のリンクは、ドラッグ・アンド・ドロップを使用して動的に作成または変更できます。

2 アクションを実行することによって、次元のソースおよび宛先間にリンクを作成する:

- マップする次元をドラッグします。たとえば、ソース・アプリケーションの勘定科目次元を宛先アプリケーションの勘定科目次元にドラッグできます。
- ソース次元を右クリックし、「新規リンクの開始」を選択します。宛先次元を右クリックし、「リンクの終了」を選択します。

注: ソースおよび宛先の次元間には、1対1、1対多、または多対1のリレーションシップを作成できます。

リンクは静的にすることもできますが、マッピング・テーブルをリンクに適用して、2つの次元間のリレーションシップをさらに細かく定義することもできます。290ページの「次元マッピングでのマッピング・テーブルの作成」を参照してください。

線の種類は、ソースおよび宛先の次元間のリレーションシップを表す:

- **実線** - マッピング・テーブルは割り当てられません。実線は、1対1および1対多のマッピングで有効です。

- **点線**-マッピング・テーブルは、リレーションシップに関連付けられます。[290 ページの「次元マッピングでのマッピング・テーブルの作成」](#)を参照してください。

リンクは対話型で、リンクを選択すると、リンクされた次元間に定義されているリレーションシップの要約が表示されます。要約には、次の内容が含まれます:

- ソース次元
- 宛先次元
- リレーションシップ型(1対1またはマッピング・テーブルが定義されたメンバー・リレーションシップ)
- フィルタ要約
- デフォルト・メンバー選択

3 省略可能: リンクを除去する場合は、リンクを右クリックし、「リンクの除去」を選択します。

マッピングを定義した後に、次元をフィルタし、マッピングを定義し、デフォルト・メンバーを割り当てることもできます。終了したら、同期を保存する必要があります。[281 ページの「次元のフィルタ処理」](#)、[290 ページの「次元マッピングでのマッピング・テーブルの作成」](#)、[288 ページの「デフォルト・メンバーの割当て」](#) および [289 ページの「同期の保存」](#) を参照してください。

次元のフィルタ処理

次元間でリレーションシップを作成するときは、ソース・アプリケーションで使用できるメンバー・セットを制限することもできます。同期の実行時に、ソースと次元のメンバーにフィルタを適用します。フィルタ処理が必要になるインスタンスがあります。たとえば、1月から2月への期間のマッピングで、ソースの Entity_1 から宛先の Entity_2 にデータを移動する場合、ソースのフィルタは、1月のデータのみを抽出する必要があります。そうしなければ、結果は予測できなくなります。

フィルタ処理の制約:

- フラット・ファイルでは、フィルタはサポートされません。
- インタフェース・テーブルに対する関数フィルタはサポートされません。ただし、EQUAL および LIKE はサポートされます。

フィルタを作成して保存した後、「データの同期」タブから使用可能になります。様々なデータ同期オブジェクトでフィルタを共有できます。

ヒント: パフォーマンスを最適化するには、アプリケーション間でデータを同期している場合、すべての次元でフィルタを使用することが重要です。アプリケーションの次元のフィルタ処理の詳細は、[154 ページの「アプリケーションへのメンバーの追加」](#)を参照してください。

ヒント:

▶ 次元をフィルタするには:

- 1 次元を右クリックし、「フィルタの作成」を選択します。
「フィルタ条件」ダイアログ・ボックスが表示されます。
- 2 フィルタを選択します。(EQUAL、LIKE または FUNCTION。)


注: Actual; Budget のように、各エントリをセミコロンで区切ると、複数のフィルタを作成できます。

- EQUAL - シナリオ次元の実績などの任意の有効なメンバー。
- LIKE - フィルタに次のようなワイルドカードを使用します:
 - 複数の文字には「*」(文字列の末尾には*ワイルドカード文字のみを使用します)
 - 単一文字には「?」

例:

Actua?または Act*は Actual を戻します

J??または J*は、Jan、Jun および Jul を戻します

- FUNCTION - 次元の基本レベル・メンバーを取得する BottomOfHierarchy() などの有効なメンバー選択関数を使用します。Performance Management Architect がサポートする関数のリストについては、[付録 C 「データ・シクロナイザで使用されるメンバー・クエリー関数」](#) を参照してください。
- 3 フィルタ条件にするメンバーを入力します。
「フィルタ条件」ダイアログ・ボックスが表示されます。
 - 4 フィルタ条件にする複数のメンバーを選択し、 をクリックします。次に、「OK」をクリックします。

注: セミコロン(;)で区切った複数のメンバーを挿入できます。たとえば、“Descendents(NetProfit);Children(Sales);NoMember” などです。

ヒント: メンバーが見つからない場合、メンバー・セレクタでメンバーを検索できます。

- 5 「OK」をクリックします。

フィルタを次元マッピングに適用すると、次元の横にファンネルが表示されます。

再利用可能なフィルタの追加

再利用可能なフィルタには、いくつかのルールがあります。

- 再利用可能なフィルタをソース次元の既存のフィルタ条件に追加できます。既存のフィルタ条件を再利用可能なフィルタ基準と組み合わせます。
- 再利用可能なフィルタ・オブジェクトに関連付けられている次元を削除すると、そのオブジェクトは無効になりますが、削除されません。
- 再利用可能なフィルタ・オブジェクトを編集する場合、変更は、データ同期オブジェクトに含まれているフィルタのすべてのインスタンスに適用されます。
- ソース次元に関連付けられている再利用可能なフィルタ条件を編集する場合、変更はローカルでのみ適用され、再利用可能なフィルタ・オブジェクトには影響を与えません。

▶ 再利用可能な次元フィルタを作成するには:

- 1 「ナビゲート」、「管理」、「データの同期」の順に選択します。
- 2 「データ・シンクロナイザ」タブが表示されている場合、「ファイル」、「新規」、「フィルタ定義」を選択します。

「フィルタ定義ウィザード」が表示されます。

- 3 「フィルタ定義」の場合、次のタスクを実行します:

1. 再利用可能なフィルタを作成するアプリケーションを選択します。
2. 次元タイプを選択します。
3. 再利用可能なフィルタを作成する次元を選択します。

注: 「アプリケーション」ドロップ・ダウン・リストから共有ライブラリを選択する場合、共有次元を選択できます。

4. フィルタ・タイプ(EQUAL、LIKE、または FUNCTION)を選択します。

注: Actual; Budget のように、各エントリをセミコロンで区切ると、複数のフィルタを作成できます。


- EQUAL - シナリオ次元の実績などの任意の有効なメンバー。
- LIKE - フィルタに次のようなワイルドカードを使用します:
 - 複数の文字には「*」(文字列の末尾には*ワイルドカード文字のみを使用します)
 - 単一文字には「?」

例:


Actua?または Act*は Actual を戻します。

J??または J*は、Jan、Jun および Jul を戻します。

- FUNCTION - 次元の基本レベル・メンバーを取得する BottomOfHierarchy()などの有効なメンバー選択関数を使用します。Performance Management Architect がサポートする関数のリストについては、[付録 C「データ・シンクロナイザで使用されるメンバー・クエリー関数」](#)を参照してください。

5. 「フィルタ条件」で、フィルタするメンバーを入力するか、をクリックします。

「フィルタ条件」ダイアログ・ボックスが表示されます。

6. フィルタ条件にする複数のメンバーを選択し、をクリックします。次に、「OK」をクリックします。

注： セミコロン(;)で区切った複数のメンバーを挿入できます。たとえば、"(Descendents)NetProfit;(Children)Sales;NoMember"などです。

ヒント： メンバーが見つからない場合、メンバー・セレクタでメンバーを検索できます。135 ページの「メンバー・セレクタを使用したメンバーの検索」を参照してください。

- 4 「次へ」をクリックします。
- 5 「フィルタ・プロパティ」の場合、次のタスクを実行します:
 1. 再利用可能なフィルタの名前を入力します。
 2. 再利用可能なフィルタの説明を入力します。
- 6 「終了」をクリックします。

再利用可能なフィルタを作成すると、アイコンが「データ・シンクロナイザ」タブに表示されます。フィルタのプロパティの要約(フィルタ名、作成者、およびフィルタを作成したアプリケーションと次元など)がアイコンの下に表示されます。

再利用可能な次元フィルタの編集

再利用可能な次元フィルタを「データ・シンクロナイザ」タブ内から編集できます。フィルタ定義ウィザードを使用して、再利用可能なフィルタを作成および編集できます。フィルタを変更する場合、この変更は、フィルタが適用されるすべての次元に影響します。

▶ 再利用可能な次元フィルタを編集するには:

- 1 「ナビゲート」、「管理」、「データの同期」の順に選択します。
- 2 「データ・シンクロナイザ」タブが表示されるたら、編集する再利用可能なフィルタを右クリックして、「編集」を選択します。
「フィルタ定義ウィザード」が表示されます。
- 3 フィルタ定義とプロパティを変更します。283 ページの手順 3 から 284 ページの手順 6 を参照してください。
- 4 「終了」をクリックします。

再利用可能な次元フィルタの挿入

再利用可能な次元フィルタを作成後、これを次元マッピング内からソース次元に挿入できます。

▶ 再利用可能な次元フィルタを挿入するには:

- 1 新規同期を作成する場合は、次元マッピングが自動的に表示されます。それ以外の場合に次元マッピングにアクセスするには、データ・シンクロナイザで同期を右クリックし、「編集」をクリックします。

次元マッピングが表示されます。

注: データ同期の定義内にフィルタ定義を挿入する場合、「フィルタ条件」フィールドのみを編集できます。

- 2 ソース次元を右クリックして、「フィルタ定義の挿入」を選択し、定義の再利用可能な次元フィルタを挿入します。

注: 関連付けられたフィルタが次元にある場合、「フィルタの追加」メニューが「フィルタの編集」メニューに置き換わります。

- 3 「フィルタ定義の挿入」で、次のいずれかのタスクを実行します:

- フィルタ定義を作成して挿入するには、次のタスクを実行します:

- 1 「フィルタ定義の作成」をクリックします。
- 2 「フィルタ定義ウィザード」を使用して、フィルタを作成します。281ページの「次元のフィルタ処理」を参照してください。

フィルタを作成すると、「フィルタ定義の挿入」ダイアログに表示されます。

- 3 「フィルタ定義の挿入」ダイアログで新しいフィルタ定義を選択します。

- 既存のフィルタ定義を挿入するには、これを選択します。

- 4 「OK」をクリックします。

フィルタを次元マッピングに適用すると、次元名の横にファンネルが表示されます。

再利用可能な次元フィルタのコピー

再利用可能な次元フィルタを作成すると、フィルタのアイコンが「データ・シンクロナイザ」タブに表示されます。「データ・シンクロナイザ」タブから、再利用可能なフィルタを編集、削除およびコピーできます。

▶ 再利用可能な次元フィルタをコピーするには:

- 1 「ナビゲート」、「管理」、「データの同期」の順に選択します。
- 2 「データ・シンクロナイザ」タブが表示されるたら、コピーする再利用可能なフィルタを右クリックして、「複製」を選択します。

「複製」ダイアログが表示されます。

3 フィルタの名前と説明(オプション)を入力し、「OK」をクリックします。

フィルタのコピーは「データ・シンクロナイザ」タブに表示されます。

再利用可能な次元フィルタの除去

次元マッピングで関連付けられている次元から再利用可能なフィルタを除去できます。再利用可能なフィルタを除去すると、一緒に除去する次元からのみ除去されます。関連付けられている他の次元からは除去されません。関連付けられているすべての次元からフィルタを除去する場合、フィルタを削除する必要があります。286 ページの「再利用可能な次元フィルタの削除」を参照してください。

▶ 再利用可能な次元フィルタを除去するには:

- 1 新規同期を作成する場合は、次元マッピングが自動的に表示されます。それ以外の場合に次元マッピングにアクセスするには、データ・シンクロナイザで同期を右クリックし、「編集」をクリックします。

次元マッピングが表示されます。

- 2 フィルタを除去する次元を右クリックし、「フィルタの除去」を選択します。

次元に関連付けられた再利用可能なフィルタがある場合、「フィルタの除去」ダイアログ・ボックスが表示され、次元に関連付けられているフィルタがリスト表示されます。

- 3 除去する1つ以上のフィルタを選択し、「OK」をクリックします。

選択したフィルタが次元から除去されます。

- 4 関連付けられた再利用可能なフィルタを次元から除去するには、次元を右クリックし、「すべてのフィルタの除去」を選択します。

任意またはすべてのフィルタが除去された場合、フィルタを表すファンネル・アイコンが次元名から除去されます。

再利用可能な次元フィルタの削除

再利用可能な次元フィルタを「データ・シンクロナイザ」タブから削除できます。再利用可能な次元フィルタを削除すると、関連付けられているすべてのソース次元マッピングから削除されます。

フィルタ定義は、次元マッピングでソース次元に関連付けられている場合、削除できません。これを実行すると、次のようなエラーが表示されます:"定義を削除できません。データ同期定義のうちのいずれかが参照しています。"任意のフィルタ定義を削除する前に、それを使用する他のデータ同期定義から参照を除去する必要があります。参照がない場合、正常に削除されます。

▶ 再利用可能な次元フィルタを削除するには:

- 1 「ナビゲート」、「管理」、「データの同期」の順に選択します。
- 2 「データ・シンクロナイザ」タブが表示されるたら、削除する再利用可能なフィルタを右クリックして、「削除」を選択します。

- 3 「はい」をクリックしてフィルタの削除を確認するか、「いいえ」をクリックして「データ・シンクロナイザ」タブに戻ります。

フィルタを削除すると、アイコンが「データ・シンクロナイザ」タブから除去されます。

フィルタ条件の追加と編集

再利用可能な次元フィルタのフィルタ条件を追加および編集できます。

▶ フィルタ条件を追加または編集するには:

- 1 新規同期を作成する場合は、次元マッピングが自動的に表示されます。それ以外の場合に次元マッピングにアクセスするには、データ・シンクロナイザで同期を右クリックし、「編集」をクリックします。

次元マッピングが表示されます。

- 2 次元を右クリックし、フィルタ条件を追加するか編集するかによって、次のタスクのいずれかを実行します。

- フィルタ条件を追加するには、「フィルタ条件の追加」を選択します。
- フィルタ条件を編集するには、「フィルタ条件の編集」を選択します。

「フィルタ条件」ダイアログ・ボックスが表示されます。



- 3 フィルタを選択します。(EQUAL、LIKE または FUNCTION。)

注： Actual; Budget のように、各エントリをセミコロンで区切ると、複数のフィルタを作成できます。

- EQUAL - シナリオ次元の実績などの任意の有効なメンバー。
- LIKE - フィルタに次のようなワイルドカードを使用します:
 - 複数の文字には「*」(文字列の末尾には*ワイルドカード文字のみを使用します)
 - 単一文字には「?」



例:

Actua?または Act*は Actual を戻します。

J??または J*は、Jan、Jun および Jul を戻します。

- FUNCTION - 次元の基本レベル・メンバーを取得する BottomOfHierarchy() などの有効なメンバー選択関数を使用します。Performance Management

Architect がサポートする関数のリストについては、[付録 C 「データ・シンクロナイザで使用されるメンバー・クエリー関数」](#) を参照してください。

- 4 フィルタ条件にするメンバーを入力するか、または  をクリックします。
「フィルタ条件」ダイアログ・ボックスが表示されます。
- 5 フィルタ条件にする複数のメンバーを選択し、 をクリックします。次に、「OK」をクリックします。

注： セミコロン(;)で区切った複数のメンバーを挿入できます。たとえば、"(Descendents)NetProfit;(Children)Sales;NoMember"などです。

ヒント： メンバーが見つからない場合、メンバー・セレクタでメンバーを検索できます。[135 ページの「メンバー・セレクタを使用したメンバーの検索」](#) を参照してください。

- 6 「OK」をクリックします。
フィルタを次元マッピングに適用すると、次元名の横にファンネルが表示されます。

注： 「名前を付けて保存」を使用すると、再利用可能なフィルタのコピーを保存できます。

デフォルト・メンバーの割当て

宛先アプリケーションの次元にリレーションシップが定義されていない場合、リンク・プロセスを完了するために1つのメンバーを指定する必要があります。このメンバーは、同期の実行時に各データ・ポイント交差を完了するために使用します。

▶ デフォルト・メンバーを割り当てるには:


- 1 デフォルト・メンバーを割り当てる宛先アプリケーションで、マップされていない次元を右クリックします。
- 2 「デフォルト・メンバーの割当て」を選択します。
「メンバーの選択」ダイアログ・ボックスが表示されます。
- 3 デフォルトとして割り当てるメンバーを選択し、「OK」をクリックします。
デフォルト・メンバーの次元の横に緑のチェックマークが表示されます。

注： デフォルトのメンバーを除去するには、デフォルトのメンバーが含まれている次元を右クリックして、「デフォルト・メンバーの除去」を選択します。メンバーが見つからない場合、「メンバーの選択」ダイアログ・ボックスでメンバーを検索できます。メンバーの検索については、[135 ページの「メンバー・セレクタを使用したメンバーの検索」](#) を参照してください。

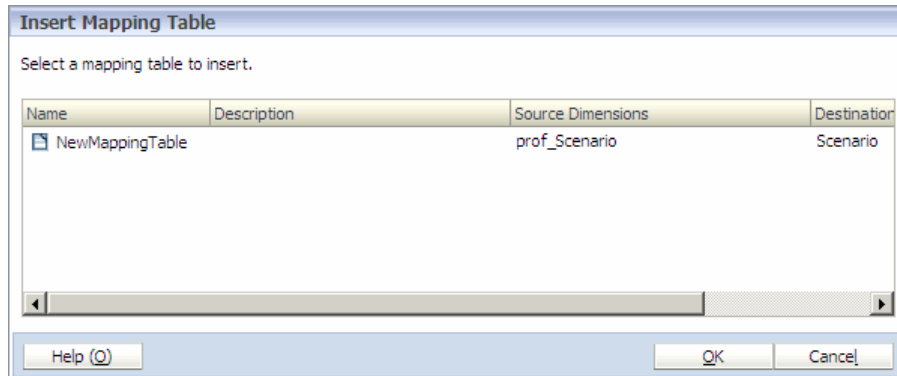
マッピング・テーブルの挿入

マッピング・テーブルは、データ同期で再利用できるマッピングです。作成したマッピング・テーブルは、同期に挿入できます。マッピング・テーブルの作成については、290 ページの「マッピングの操作」を参照してください。

▶ マッピング・テーブルを挿入するには:

- 1  をクリックします。

「マッピング・テーブルの挿入」ダイアログ・ボックスが表示されます。



- 2 挿入するマッピング・テーブルを選択して、「OK」をクリックします。

マッピング・テーブルを次元マッピングで使用する場合、リンクは点線になります。

マッピングの編集

既存のマッピング・テーブルを編集している場合、マッピング・テーブル・デザイナーには、ソース・アプリケーション、宛先アプリケーションおよびマップされた次元リレーションシップが表示されます。

▶ マッピングを編集するには:

- 1 マッピング(点線のリンク)を右クリックします。

- 2 「マッピングの編集」を選択します。

マッピング・テーブル・デザイナーが表示されます。

- 3 マッピングを編集します。「次へ」をクリックして画面を順次移動し、「終了」をクリックします。

同期の保存

同期を検証および実行する前に、保存する必要があります。

▶ 同期を保存するには:

- 1 「次元マッピング」で  をクリックします。

「データの同期の保存」ダイアログ・ボックスが表示されます。

2 名前および説明を入力し、「OK」をクリックします。

マッピングの操作

マッピング・テーブルを使用して、次元間のリレーションシップを定義できます。マッピングは、一度マッピングを定義して複数の同期で再利用できるシナリオで使用します。

マッピング・テーブルを作成する場合は、複数のソース・アプリケーションの次元を選択できますが、宛先アプリケーションの次元は1つしか選択できません。表示されるリレーションシップは、ソース次元のメンバーが宛先次元のメンバーとして使用されることを示します。1対1、1対多および多対1のリレーションシップを定義できます。データの同期は、次の内容を活用します:

- 簡単な変換または複雑な変換を実行するためのマッピング・テーブルおよび
- 外部ソースまたはアプリケーションからアプリケーションにマップする変換エンジン。

マッピング・テーブル・デザイナを使用して、マッピング・テーブルを作成します。290 ページの「次元マッピングでのマッピング・テーブルの作成」および293 ページの「データ・シンクロナイザでのマッピング・テーブルの作成」を参照してください。

マッピング・テーブルは、データ・シンクロナイザで編集できます。297 ページの「マッピング・テーブルの編集」を参照してください。

次元マッピングでのマッピング・テーブルの作成

ここでは、次元マッピングで次元をリンクする際にマッピングを定義する方法を順を追って説明します。ソースおよび宛先アプリケーションは自動的に選択されるので、マッピング・テーブル・デザイナの最初の画面はスキップされます。

▶ 次元をマップする際に、マッピング・テーブルを作成するには:

1 次元マッピングで、リンクを右クリックし、「マッピングの定義」を選択します。

マッピング・テーブル・デザイナ(データのマップ)が表示されます。

各行は、ソースと宛先のアプリケーション次元間でのマッピング・ルールを表します。セルをダブルクリックして、セルに値を直接入力するか、セルをクリックして「メンバーの選択」を選択してメンバーを選択します。

ソース値をセルに直接入力する場合は、ワイルド・カードおよびインディケータとして記号を使用できます。

表 18 ソース次元のルール構文

記号	使用
*	1つ以上の文字に一致します。たとえば、Acc*は Acc100、Acc101 などに一致します。
?	1つの文字に一致します。たとえば、Acc???は Acc100 に一致しますが、Acc1000 には一致しません。

記号	使用
~	文字の範囲に一致します。たとえば、Acc100~Acc200 は、Acc100、Acc101 などの Acc200 までの候補に一致します。両方のフィールドが数値の場合、範囲は数値として評価されます。いずれかのフィールドが英数字の場合、範囲は辞書編集的に評価されます。
\	次の文字が文字どおりに解釈されることを示します。たとえば、Acc\<*は正確に Acc*のみに一致します。
^	スペースを表します。 必須 - 先頭および末尾のスペース 省略可能 - 入力の途中に表示されるスペース
{NULL}	空のフィールドに一致します。

宛先次元には、異なるルール構文を使用します。ソースのルール構文では、ルールに適合する交差を定義します。行が換算エンジンを通過するとき、それぞれのソース・ルールに対してメンバーが定義されているルールに適合するかどうかチェックされます。一致候補が見つかり、宛先ルールがメンバーに適用されます。宛先ルールは、ソース・ルールに一致するメンバーに行われる変更を定義します。宛先次元のルール構文には、次のエントリがあります:

- メンバー名
- リテラル文字列と組み合わせたソース・メンバー名
- ワイルド・カードのコンテンツ

表 19 宛先次元のルール構文

記号	使用
[]	連結できる宛先値。
[フィールド番号]	指定した入力フィールドの値全体を転送します。入力フィールドは、入力フィールドの定義の順序に基づくシーケンス番号によって識別されます。たとえば、[1]は、最初の入力値が出力になることを示します。FY[1][2]は、出力値が入力1の値および入力2の値を連結した文字列FYになることを示します。つまり、入力1がYearsで、入力2がMonthsの場合、結果はFYYearsMonthsになります。
[フィールド番号,*]	入力フィールドの*の値になります。たとえば、出力1が[1,*]と定義され、入力1が123*と定義されている場合、入力1 = 123456の場合、出力1 = 456です。
[フィールド番号,*#]	参照される*が入力の最初のインスタンスではない場合に必要なフォーマットです。 #は、入力フィールドの*の位置です。 [1,*1]は、[1,*]と同じです。 たとえば、入力3 = *123*で出力1 = abc[3,*2]の場合、入力3 = 91234で出力1 = abc4になります。
[フィールド番号,?]	入力フィールドの?の値になります。たとえば、出力1が[1,?]と定義され、入力1が123?と定義されている場合、入力1 = 123456の場合、出力1 = 4です。

記号	使用
[フィールド番号,?#]	参照される?が入力の最初のインスタンスではない場合に必要フォーマットです。 #は、入力フィールドの?の位置です。 [2, ?1]は、[2, ?]と同じです。 たとえば、入力 1 = 123?、入力 2 = 4??、および出力 1 = abcd[2, ?2]の場合、入力 1 = 1237、入力 2 = 498、出力 1 = abcd8 です。
\	次の文字が文字どおりに解釈されることを示すインディケータです。出力に[または]を使用する場合は、\が必要です。出力で、[]の定義の内部で\を使用できません。
^	スペースのインディケータです。 必須 - 先頭および末尾のスペース 省略可能 - 入力の途中に表示されるスペース
{NULL}	空のフィールドを出力するために使用する値です。

2 次のいずれかのアクションを行います:

- ソースには、セルをダブルクリックしてルールを入力します。表 18 で説明されている構文を使用します。(セルを選択し、「メンバーの選択」を選択してから「メンバーの選択」ダイアログ・ボックスでメンバーを選択し、「OK」をクリックすることもできます。)
「メンバーの選択」ダイアログ・ボックスでのメンバーの検索の詳細は、135 ページの「メンバー・セレクトタを使用したメンバーの検索」を参照してください。
- 宛先には、セルをダブルクリックしてルールを入力します。表 19 で説明されている構文を使用します。(セルを選択し、「メンバーの選択」を選択してから「メンバーの選択」ダイアログ・ボックスでメンバーを選択し、「OK」をクリックすることもできます。)

「メンバーの選択」を選択すると、メンバー・セレクトタで次元内のメンバーを表示して選択できます。「+」および「-」を使用すると、次元内のメンバーを展開および縮小できます。

メンバーが見つからない場合、メンバー・セレクトタ「メンバーの選択」ダイアログ・ボックスでメンバーを検索できます。135 ページの「メンバー・セレクトタを使用したメンバーの検索」を参照してください。

3 必要に応じて、マッピングを変更します:

- テーブルの最後に行を挿入するには、「追加」をクリックします。
- 行をコピーするには、行を選択して「複製」をクリックします。
重複行は、テーブルの最後に追加されます。
- 行を削除するには、複数の行を選択して「除去」をクリックします。
- テーブル内の行を上または下に移動するには、行を選択し、「上へ移動」または「下へ移動」をクリックします。

ルールは順番に処理されます。一致候補が見つかり、ルールがメンバーに適用され、処理が完了します(そのメンバーに他のルールは適用されません)。複数のルールに適合するメンバーもあるので、ルールの順序を制御できるようになっています。

- セルを編集するには、セルをダブルクリックするか、または[F2]キーを押します。

ヒント： [Tab]キーを使用すると、テーブル内を移動できます。

4 「次へ」をクリックし、マッピング・テーブルを検証します。

「マッピングの検証」画面には、各行にマッピング・ルールが記述されたテーブルが表示されます。メンバー情報ではなく、構文のみが検証されます。各ルールに合否のマークが付けられます。

5 「検証」をクリックします。

ヒント： 「すべて表示」をクリックしてすべてのルールを表示するか、または「例外のみ表示」をクリックして、検証を通過していないルールのみを表示します。「すべて表示」が選択されている場合、失敗のルールは赤でハイライト表示されます。

6 ルールが検証を通過しなかった場合は、「戻る」をクリックして「データのマップ」ページに戻り、エラーを修正してから「次へ」をクリックして再検証します。

7 「次へ」をクリックします。

「マッピング・プロパティ」画面が表示され、そこでマッピング・テーブルの名前および説明を提供します。MAP_などの接頭辞を付けると有効です。

8 名前および説明を入力し、「終了」をクリックします。

名前および説明に制限はありません。

点線は、マッピングが定義されたことを示します。

マッピングは、データ・シンクロナイザにも表示されます。295 ページの「データ・シンクロナイザの操作」を参照してください。

データ・シンクロナイザでのマッピング・テーブルの作成

次の手順では、ソースおよび宛先アプリケーションの選択を含むデータ・シンクロナイザでのマッピング・テーブルの定義について順を追って説明します。

マッピング・テーブルを作成する前に、少なくとも1つのアプリケーションを作成する必要があります。

▶ データ・シンクロナイザでマッピング・テーブルを作成するには:


1 「ファイル」、「新規」、「マッピング・テーブル」の順に選択します。

マッピング・テーブル・デザイナーが表示されます。

2 をクリックして、ソース・アプリケーションを選択します。

「ソース・アプリケーション」ダイアログ・ボックスが開きます。

3 「ソース・アプリケーション」を選択します。アプリケーションが Planning アプリケーションである場合は、「プラン・タイプ」を選択します。次に、「OK」をクリックします。

- 4  をクリックして、宛先アプリケーションを選択します。
- 5 「宛先アプリケーション」を選択します。アプリケーションが Planning アプリケーションである場合は、「プラン・タイプ」を選択します。次に、「OK」をクリックします。

プラン・タイプに応じて次元が変更されます。

- 6 ソースおよび宛先次元を選択し、「次へ」をクリックします。
- 7 次のいずれかのアクションを行います:

- ソースには、セルをダブルクリックしてルールを入力します。表 18 で説明されている構文を使用します。(セルを選択し、「メンバーの選択」を選択してから「メンバーの選択」ダイアログ・ボックスでメンバーを選択し、「OK」をクリックすることもできます。)
- 宛先には、セルをダブルクリックしてルールを入力します。表 19 で説明されている構文を使用します。(セルを選択し、「メンバーの選択」を選択してから「メンバーの選択」ダイアログ・ボックスでメンバーを選択し、「OK」をクリックすることもできます。)

「メンバーの選択」を選択すると、メンバー・セレクタで次元内のメンバーを表示して選択できます。「+」および「-」を使用すると、次元内のメンバーを展開および縮小できます。

メンバーが見つからない場合、メンバー・セレクタでメンバーを検索できます。135 ページの「メンバー・セレクタを使用したメンバーの検索」を参照してください。

- 8 必要に応じて、マッピングを変更します:

- テーブルの最後に行を挿入するには、「追加」をクリックします。
- 行をコピーするには、行を選択して「複製」をクリックします。
重複行は、テーブルの最後に追加されます。
- 行を削除するには、複数の行を選択して「除去」をクリックします。
- テーブル内の行を上または下に移動するには、行を選択し、「上へ移動」または「下へ移動」をクリックします。
ルールは順番に処理されます。一致候補が見つかり、ルールがメンバーに適用され、処理が完了します(そのメンバーに他のルールは適用されません)。複数のルールに適合するメンバーもあるので、ルールの順序を制御できるようになっています。
- セルを編集するには、セルをダブルクリックするか、または[F2]キーを押します。

ヒント: [Tab]キーを使用すると、テーブル内を移動できます。

- 9 「次へ」をクリックし、マッピング・テーブルを検証します。

「マッピングの検証」画面には、各行にマッピング・ルールが記述されたテーブルが表示されます。メンバー情報ではなく、構文のみが検証されます。各ルールに合否のマークが付けられます。

10 「検証」をクリックします。

ヒント： 「すべて表示」をクリックしてすべてのルールを表示するか、または「例外のみ表示」をクリックして、検証を通過していないルールのみを表示します。

11 ルールが検証を通過しなかった場合は、「戻る」をクリックして「データのマップ」ページに戻り、エラーを修正してから「次へ」をクリックして再検証します。

12 「次へ」をクリックします。

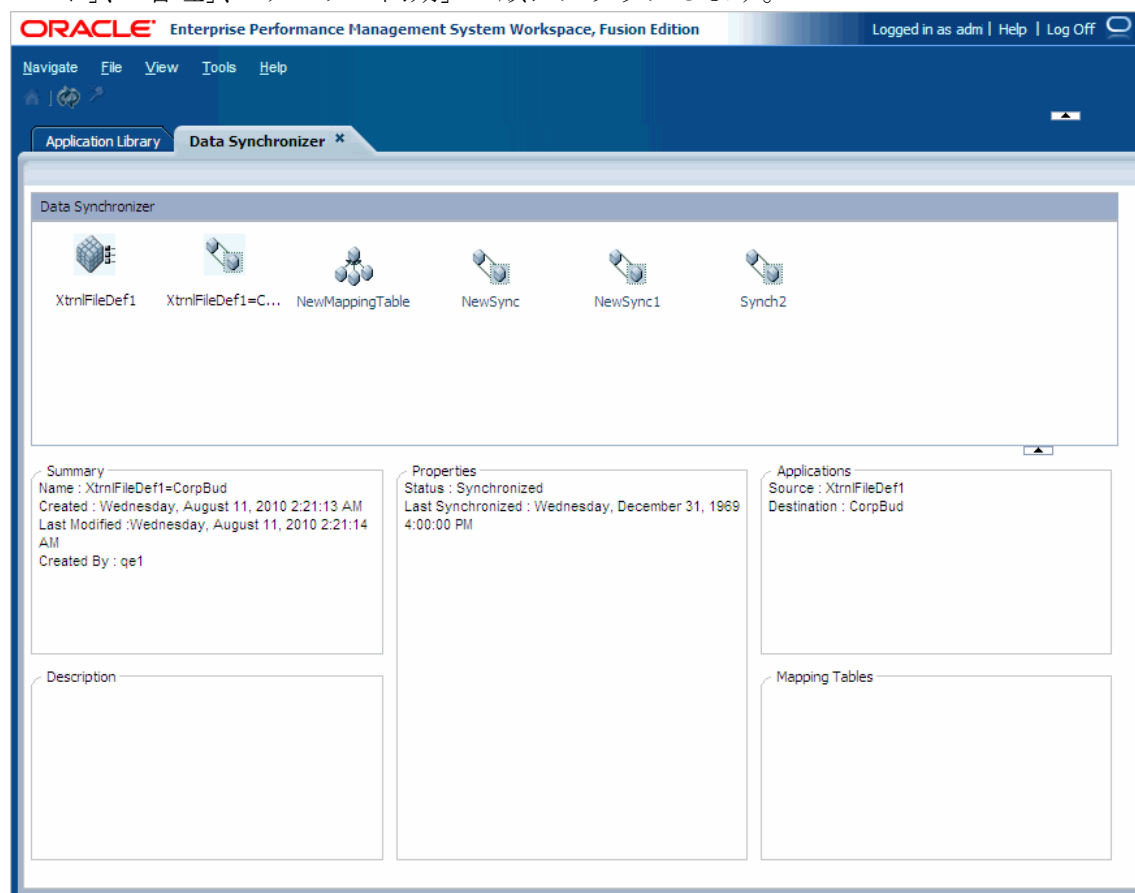
「マッピング・プロパティ」画面が表示され、そこでマッピング・テーブルの名前および説明を提供します。MAP_などの接頭辞を付けると有効です。

13 名前および説明を入力し、「終了」をクリックします。

データ・シンクロナイザで定義済のすべてのマッピング・テーブルを表示できます。295 ページの「データ・シンクロナイザの操作」を参照してください。

データ・シンクロナイザの操作

- ▶ データの同期およびマッピング・テーブルにアクセスするには、「ナビゲート」、「管理」、「データの同期」の順にクリックします。



データ・シンクロナイザのナビゲート

データ・シンクロナイザによって、すべての同期とマッピング・テーブルが識別されます。同期を選択すると、下部ペインに次の情報が表示されます:

- **要約** - 名前、作成日、最終更新日および同期を作成したユーザー
- **説明** - 新規同期を作成したときに「説明」テキスト・ボックスで入力した情報
- **プロパティ** - ステータスおよび最後に同期済日付
- **アプリケーション** - 同期のソースおよび宛先アプリケーション
- **マッピング・テーブル** - 同期で使用されるマッピング・テーブル

マッピング・テーブルを選択すると、下部ペインに次の情報が表示されます:

- **要約** - 名前、作成日、最終更新日および同期を作成したユーザー
- **説明** - マッピング・テーブルを作成したときに「説明」テキスト・ボックスで入力した情報
- **ソース次元** - マッピング・テーブルで使用されるソース次元
- **宛先次元** - マッピング・テーブルで使用される宛先次元
- **同期** - マッピング・テーブルを使用する同期

データ・シンクロナイザ・ビューの変更

▶ データの同期ビューを変更するには:

- 1 「表示」、「詳細」の順に選択します。

詳細表示には、同期の名前、説明、タイプ、同期を作成したユーザーおよび作成日が表示されます。

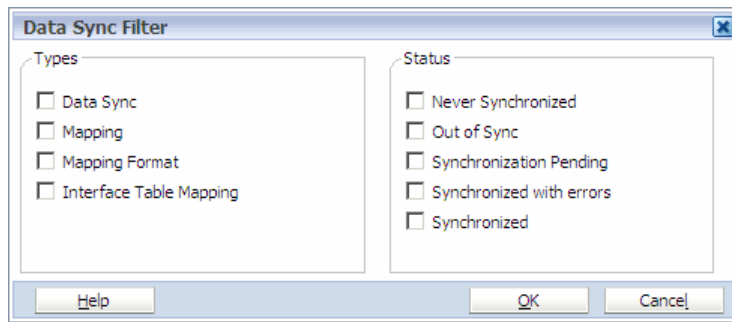
- 2 列を基準にソートするには、列ヘッダーをクリックします。たとえば、名前によってソートする場合は、「名前」をクリックします。
- 3 列を移動するには、列見出しをクリックして新しい場所にドラッグします。
- 4 ビューをアイコン・ビューに変更するには、「表示」、「アイコン」の順にクリックします。

同期のフィルタ処理

フィルタを使用して、ビューで同期またはマッピングを非表示にします。


▶ データの同期フィルタを作成するには:

- 1 「表示」、「フィルタ」の順に選択します。



- 2 表示するタイプを選択します。
- 3 たとえば、非同期状態の同期など、表示するステータスを選択します。
- 4 「OK」をクリックします。

同期の編集

- ▶ 同期を編集するには:
- 1 同期を右クリックし、「編集」を選択します。
次元マッピングが表示されます。
 - 2 必要に応じて、マッピングを変更し、 をクリックします。

マッピング・テーブルの編集

- ▶ マッピング・テーブルを編集するには:
- 1 マッピングをダブルクリックするか、マッピングを右クリックして、「編集」を選択します。
マッピング・テーブル・デザイナーが表示されます。
 - 2 マップされた値を変更して、「次へ」をクリックします。
 - 3 マッピングを検証し、「次へ」をクリックします。
 - 4 マッピング・プロパティを変更し、「終了」をクリックします。

同期およびマッピングの複製

- ▶ 同期およびマッピングを複製するには:
- 1 データの同期モジュールで、同期またはマッピングを右クリックして、「複製」を選択します。
同期を複製する場合にマッピング・テーブルを使用している場合、そのマッピング・テーブルが元の同期および複製された同期で使用されます。
 - 2 「複製」ダイアログ・ボックスに名前および説明を入力し、「OK」をクリックします。

同期およびマッピングの削除

▶ 同期およびマッピングを削除するには:

- 1 データの同期モジュールで、同期またはマッピングを右クリックして、「削除」を選択します。

注: マッピング・テーブル、外部ファイル定義またはデータ・インタフェース・テーブル定義がデータ同期によって参照される場合、削除できません。

- 2 必要な場合は、「表示」、「リフレッシュ」の順に選択します。

同期またはマッピングが除去されます。

同期の検証および実行

同期を実行すると、データがソース・アプリケーションから取得され、マッピング・ルールに従って変換され、宛先アプリケーションにプッシュされて、そこでアプリケーションにコミットされます。同期を検証する場合は、同じプロセスに従いますが、データは宛先アプリケーションにコミットされません。これによって、ソースおよび宛先で要求および結果データを処理でき、データを書き込まずに発生する可能性があるエラーを生成できます。同期に問題があるかどうかをすばやく識別できます。

宛先が Essbase アプリケーションである場合、データ・シンクロナイザは次のデフォルト値を使用します:


- abortOnError - この操作をエラー発生時に中止するかどうかを判別します。有効な値は TRUE または FALSE です。
- DryRun - 実際のデータ更新を含まないドライ・ランかどうかを判別します。有効な値は TRUE または FALSE です。
- delimiter - データ・ストリームの区切り文字を示します。

注: 外部ファイル用に共有場所を使用する場合、同期を検証または実行するサーバーからこのデータ・ファイルにアクセスする必要があります。

▶ 同期を検証および実行するには:

- 1 次のいずれかのアクションを行います:

同期を検証するには:

- データ・シンクロナイザで、同期を右クリックし、「同期の検証」を選択します。
- 「次元マッピング」で  をクリックします。

同期を実行するには:

- データ・シンクロナイザで、同期を右クリックし、「同期の実行」を選択します。

- 「次元マッピング」で  をクリックします。

2 「演算子」を選択し、「値」を入力します。

ソースの値と宛先の値でスケールが異なる場合は、演算子を選択し、値を入力する必要があります。乗算、除算、加算、または減算を選択し、演算子とともに適用する数値を入力できます。たとえば、演算子*(乗算)を選択し、値 10 を入力すると、宛先に送信される各データ値に 10 が掛けられます。

3 データ・ロード・オプション「モード」を選択します。

Planning と Essbase ASO および BSO アプリケーションのデータ・ロード・オプションは次のとおりです:

- **加算** - ロードされたデータの値を加算します。たとえば、「勘定科目 A」のソース・データの値が 60 で、「勘定科目 A」のターゲット・データの値が 100 であるとして、「加算」を選択したデータの同期後、「勘定科目 A」のターゲット・アプリケーション・データには値として 160 が表示されます。
- **減算** - ロードされたデータの値を減算します。たとえば、「勘定科目 A」のソース・データの値が 60 で、「勘定科目 A」のターゲット・データの値が 100 であるとして、「減算」を選択したデータの同期後、「勘定科目 A」のターゲット・アプリケーション・データには値として 40 が表示されます。
- **上書き** - ソース・データから最後にロードされた値で、ターゲット・アプリケーション内のデータを上書きします。たとえば、「勘定項目 1010」のソース・データに行が 2 行あるとして、1 行目は最も古く、値は 500.00 です。2 行目は最後にロードされたもので、値は 1100 です。データの同期後、データは最後にロードされた値 1100 で上書きされます。

注: Essbase (ASO)同期では、「上書き」ロード・オプションは、重複レコード・ソース・データを累計し、ターゲット・アプリケーション・データを上書きする点で異なります。

Financial Management アプリケーションのデータ・ロード・オプションは次のとおりです:

- **マージ** - ターゲット・アプリケーションのデータをソース・データの最新の値とマージし、サブキューブを変更しません。たとえば、「勘定項目 1000」のデータ・ソースに行が 4 行あるとして、1 行目は最も古く、値は 1000.00 です。2 行目と 3 行目の値も 1000.00 です。4 行目は最新で、値は 2000 です。データの同期後、データは最新の値 2000 とマージされます。
- **置換** - 最新の値でデータを置換し、サブキューブ内の値を変更します。たとえば、「勘定項目 10」のソース・データに行が 2 行あるとして、1 行目は最も古く、値は 5000.00 です。2 行目の値は 1000.00 です。データの同期後、データは最新の値 1000 で置換されます。
- **ソース内の累計** - (クラシック Financial Management の「ファイル内の累計」と同等) ソース内の累計を、「マージ」および「置換」オプションとの組合せで選択する際、次のようなシナリオを考えます:

- 「マージ」とソース内の累計を選択 - ソース内で重複する値を加算し、サブキューブは変更されません。
- 「累計」を選択し、ソース内の累計を選択解除 - 最新の値がソースにロードされ、サブキューブは変更されません。
- 「置換」とソース内の累計を選択 - ソース内の重複値を加算し、サブキューブは変更されます。
- 「置換」を選択し、ソース内の累計を選択解除 - 最新の値をロードし、サブキューブは変更されます。
- **累計** - ロードされたデータ内の値を加算します。たとえば、「勘定項目 A」のソース・データ内に行が 2 行あるとします。値は 50.5 と 100 です。データ同期の後、ターゲット・アプリケーションで「勘定項目 A」に表示される値は 150.5 です。

注： ソース内の累計の選択または選択解除は、「累計」を選択した場合の値のロードには影響がありません。

- 4 同期で外部ソース・ファイルを使用する場合は、ソースの URL を入力するか、「アップロード」をクリックして、ファイルをソースとして使用します。
- 5 「OK」をクリックします。

データ同期のトラブルシューティング

追加のログギングを有効にして、データ同期の問題のトラブルシューティングに役立てることができます。

注意 デバッグ・トレースを有効にすると、追加のデバッグ・ファイルが作成され、アクセスできます。これは、データ同期のパフォーマンスに影響し、ハード・ディスク・スペースを余分に使用します。問題をトラブルシューティングする場合にのみ、これらのオプションを有効にします。本番環境ではこれらのオプションは必ず無効にしてください。

▶ 追加ログギングを有効にするには:

- 1 %EPM_ORACLE_INSTANCE%\config\EPMA\DataSync に移動します。

たとえば、C:\Oracle\Middleware\user_projects\epmsystem1\config\EPMA\DataSync\です。

- 2 テキスト・エディタを使用して、dme.properties を開きます。
- 3 先頭の#を削除して、次のデバッグ行を非コメント化します。

```
preTranslationProcessingClass=com.hyperion.awb.datasync.custom.FileBasedRowLogger
preTranslationProcessingClass.outputFile=preTransOut.txt

postTranslationProcessingClass=com.hyperion.awb.datasync.custom.FileBasedRowLogger
postTranslationProcessingClass.outputFile=postTransOut.txt

createDebugFiles=true
```

```
debugSampleSize=1000
```

`preTranslationProcessingClass` を有効にすると、マッピングまたは変換が適用される前に、一時ファイルにソースからデータが保存されます。ファイルは、接尾辞として一意の ID が `_preTransOut` に追加されて名前が付けられます。これは、ソースから返されたデータを追跡する場合に便利です。

`postTranslationProcessingClass` を有効にすると、すべてのマッピングまたは変換が適用される前に、一時ファイルにソースからデータが保存されます。ファイルは、接尾辞として一意の ID が `_postTransOut` に追加されて名前が付けられます。これは、ソースに送信されるデータ、およびメタデータのマップ方法と変換方法を追跡する場合に便利です。

`createDebugFiles` を有効にすると、データ同期が実行または検証されるたびに次のログ・ファイルが生成されます:

- `SynRequest.xml` - データ同期の実行の各ステップを追跡します
- `ALEQuery.xml` - ソースによって実行される ALE 形式のクエリー

`debugSampleSize` 設定によって、ファイル・サイズが、設定されたバイト数を超えないようにします。

- 4 `dme.properties` を保存して閉じます。
- 5 「Hyperion EPM Architect データ・シンクロナイザ - Web アプリケーション」・サービスを再起動します。
- 6 データ同期を実行します。

データ同期の実行または検証ジョブごとに作成されるフォルダに、結果のログ・ファイルが生成されます。 `dme.log` が標準の Web Logic サーバー・フォルダにある場合、一時フォルダへのパスを持ちます。通常、一時フォルダは `%EPM_ORACLE_INSTANCE%\tmp\Oracle\Temp` です。

一時フォルダ内の一意の ID を持つフォルダに作成されるデバッグ・ファイルの場合、ファイルは、一意 ID が接尾辞として `_preTransOut` および `_postTransOut` に追加された一時フォルダに作成されます。

問題を解決するために追加ロギングを有効にしたら、本番環境に戻る前にオプションを無効にします。

▶ 追加ロギングを無効にするには:

- 1 テキスト・エディタを使用して、`dme.properties` を開きます。
- 2 先頭に # を追加して、次のデバッグ行をコメント化します。

```
preTranslationProcessingClass=com.hyperion.awb.datasync.custom.  
FileBasedRowLogger preTranslationProcessingClass.outputFile=preTransOut.txt
```

```
postTranslationProcessingClass=com.hyperion.awb.datasync.custom.  
FileBasedRowLogger postTranslationProcessingClass.outputFile=postTransOut.txt
```

```
createDebugFiles=true
```

```
debugSampleSize=1000
```

- 3 `dme.properties` を保存して閉じます。
- 4 「Hyperion EPM Architect データ・シンクロナイザ - Web アプリケーション」・サービスを再起動します。

第IV部

ジョブの管理

ジョブの管理の内容：

- [ジョブの管理](#)
- [タスクの自動化の使用方法](#)

この章の内容

ジョブ・コンソールの操作.....	305
ジョブ・コンソールのナビゲート.....	307
ジョブの添付ファイルの表示.....	311
ジョブの削除.....	313
ジョブの手動によるタイムアウト.....	314
Performance Management Architect ログ.....	314

ジョブ・コンソールの操作

ライブラリ・ジョブ・コンソールは、多数の機能領域にまたがるジョブを扱うインフラストラクチャを提供する中心的なコンポーネントです。ジョブは、Performance Management Architect でバックグラウンドで実行するように送信する非同期プロセスです。

ジョブ・コンソールでは、中心的な1つの場所でジョブを表示および管理できます。通常、2つのジョブ・カテゴリがあります。セッション間での可用性を必要とするジョブおよびジョブのステータスと、1つのセッションに結合されているジョブです。

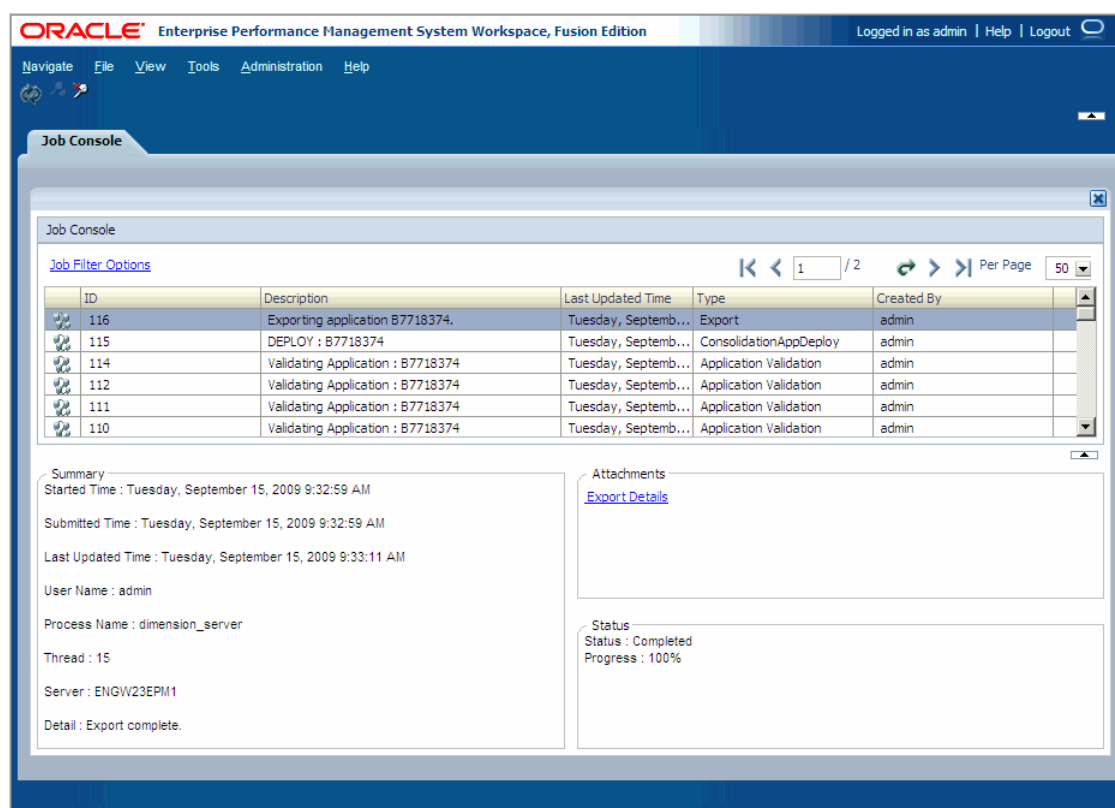
ジョブ・コンソールは、次のジョブ・タイプをサポートしています:

ジョブ・タイプ	ジョブに関連する操作
次元のインポート	次元ライブラリへの次元のインポート
連結アプリケーションの配置	連結アプリケーションの配置
Planning アプリケーションの配置	Planning アプリケーションの配置
分析アプリケーションの配置	Analytic Services アプリケーションの配置
Profitability アプリケーションの配置	Profitability アプリケーションの配置
データの同期	データの同期の実行
比較	アプリケーションの比較
プロパティ・クエリー	プロパティ・クエリー
エクスポート	アプリケーションのエクスポート

ジョブ・タイプ	ジョブに関連する操作
メンバーのクエリー	特に Oracle Hyperion Calculation Manager からメンバー・クエリー(これらのクエリーは非常に大きくなる可能性があります)を実行する際に作成されるセッション・レベルのジョブ
トランザクション・ログ・エクスポート	トランザクション・ログのエクスポート
クラシックから EPM Architect への変換	クラシックの Planning、Financial Management または Essbase で管理されているアプリケーションの変換
アプリケーションの移行	既存の Hyperion アプリケーションの移行
アプリケーションの検証	既存の Hyperion アプリケーションの検証
次元の添付解除	共有次元をアプリケーション内のローカルに変更
ローカル次元の共有	ローカル次元を共有に変更
アプリケーションのコピー	アプリケーションのコピー
次元のコピー	次元のコピー
次元のエクスポート	次元のエクスポート

- ▶ ジョブ・コンソールを開くには、「ナビゲート」、「管理」、「ライブラリ・ジョブ・コンソール」の順にクリックします。

ジョブ・コンソールが表示されます。



各ジョブは、初回送信時またはジョブ処理中に、ジョブ実行中の情報を取り込みます。

ジョブ・コンソールのナビゲート





ジョブ・コンソールには、Performance Management Architect のジョブが表示されます。上部ペインでジョブを選択し、下部ペインに要約情報を表示できます。下部ペインに表示される情報は、次のとおりです:

- **要約** - ジョブについての情報
 - **開始時間** - 短い文字列に使用
 - **送信時間** - 大量のコンテンツに使用
 - **最終変更時間** - ジョブが最後に更新された時刻
 - **ユーザー名** - ジョブを送信したユーザー名
 - **プロセス名** - ジョブが実行されているプロセス名
 - **スレッド** - 現在のジョブのスレッド ID
 - **サーバー** - ジョブが実行されているサーバー名
 - **詳細** - エラーおよび警告を含むジョブの要約
- **添付ファイル** - 各ジョブは、追加の情報を含む複数の添付ファイルを保持できます。添付ファイルは、それぞれ異なる独立したものにできます。たとえば、入力パラメータ・ファイル、出力ログ・ファイル、または出力結果ファイルを使用できます。添付ファイルには、次の2種類があります:
 - **プレーン・テキスト** - 小さい文字列に使用
 - **ファイル** - 大量のコンテンツに使用
- **ステータス** - ステータスおよび進行状況を表示します。各ジョブは、次のステータスを保持できます:
 - **無効** - サーバーで実行中のジョブはありません
 - **スケジュール済の開始** - キューに入っていますが、まだ開始されていません
 - **スケジュール済の停止** - 取り消されましたが、まだ実行中です
 - **開始中** - 開始準備をしています
 - **実行中** - 現在実行中です
 - **一時停止**
 - **停止中** - 停止処理中です
 - **停止済** - ユーザーの要求により停止しました
 - **中止** - エラーにより中止されました
 - **完了** - 正常に完了しました
 - **エラーで完了** - 完了しましたが、エラーがあります(検証ログを確認する必要があります)。
 - **応答なし**


注: ジョブのステータスは変更できません。

ジョブ・コンソール・ビューの変更

▶ ジョブ・コンソール・ビューを変更するには:


- 1 ページごとのジョブ数を変更するには、「ページ当たり」をクリックし、100などのジョブ数を選択します。
- 2 列を基準にソートするには、列ヘッダーをクリックします。たとえば、名前によってソートする場合は、「名前」をクリックします。
- 3 ジョブのページをスクロールするには、 および最後のページまでスクロールする  をクリックします。
- 4 前のページにスクロールするには、 または最初のページまでスクロールする  をクリックします。

ヒント: ジョブのページを移動するときに、ジョブ・コンソールをリフレッシュして最新のジョブのステータスを表示できます。308 ページの「[ジョブ・コンソールのリフレッシュ](#)」を参照してください。

- 5 ページに移動するには、ページ番号を入力して  をクリックします。

ジョブ・コンソールのリフレッシュ

ジョブ・コンソールをリフレッシュしてジョブの最新ステータスを表示できます。

- ▶ 表示されているジョブ数をリフレッシュするには、ツールバーで  をクリックします。

ジョブ・フィルタの作成

フィルタを作成して、ジョブ・コンソールに特定のジョブを表示できます。

▶ フィルタを作成するには:

- 1 次のいずれかのオプションを実行します:
 - 「ジョブ・フィルタのオプション」。
 - ジョブを右クリックして「フィルタ」を選択します。
 - 「表示」、「フィルタ」の順にクリックします。

「ジョブ・フィルタ」ダイアログ・ボックスが表示されます。

2 次のオプションでジョブをフィルタできます:

1. 「自己」または「他のユーザー」 - 「自己」を選択して自分のユーザー名で送信したジョブを表示するフィルタを作成するか、「他のユーザー」を選択して、ユーザー名を入力します。310 ページの「自分のジョブのフィルタ処理」および310 ページの「他のユーザーのジョブのフィルタ処理」を参照してください。
2. **ジョブ ID** - ジョブ ID を入力します。
3. **ジョブ・タイプ** - 次元のインポートなど、フィルタするジョブ・タイプを選択します。
4. **ジョブのステータス** - 「完了」など、フィルタするステータスを選択します。
5. **送信時間の「開始」および「終了」** - 開始日および終了日を選択して、日付範囲でフィルタします。

注： 非表示のシステム・ジョブを開始する特定のアクションがあります。EPMA 管理者の役割を持つユーザーのみが非表示のシステム・ジョブを表示できます。非表示のジョブを表示するには、「ジョブ・フィルタ」ダイアログ・ボックスで「非表示ジョブの表示」を選択します。セキュリティ役割の詳細は、『Oracle Hyperion Enterprise Performance Management System ユーザーおよび役割セキュリティ・ガイド』を参照してください。

3 「ソース・オブジェクト」を選択します。

「ソース・オブジェクト」ドロップダウン・リストには、関連付けられたジョブのあるすべてのアプリケーションが表示されます。たとえば、「NewBudget」アプリケーションのすべてのジョブを表示するには、「ソース・オブジェクト」の「NewBudget」でフィルタします。

4 「OK」をクリックします。

ヒント: フィルタをデフォルト・オプションにリセットするには、「ジョブ・フィルタ」ダイアログ・ボックスで「リセット」をクリックします。

自分のジョブのフィルタ処理

ジョブ・コンソールに表示されるジョブが、自分のジョブのみになるようにフィルタできます。ジョブのフィルタは、期限切れのジョブの削除を含むジョブの管理に役立ちます。ジョブの削除は、[313 ページ](#)の「[ジョブの削除](#)」を参照してください。

▶ 自分のジョブをフィルタするには:

- 1 「表示」、「フィルタ」の順に選択します。
- 2 使用可能な場合は、「ジョブ ID」を入力します。
- 3 「ジョブ・タイプ」を選択します。
- 4 **オプション:** 「ジョブのステータス」または「送信時間」を選択します。次に、「OK」をクリックします。

ジョブ・コンソールには、「ジョブ・フィルタ」ダイアログ・ボックスの選択内容に応じて、自分のジョブのみが表示されます。

他のユーザーのジョブのフィルタ処理

ジョブ・コンソールに、他のユーザーのジョブのみを表示するようにフィルタできます。

▶ 他のユーザーのジョブをフィルタするには:

- 1 「表示」、「フィルタ」の順に選択します。
「ジョブ・フィルタ」ダイアログ・ボックスで、別のユーザー ID でフィルタできます。「他のユーザー」を選択する場合は、ユーザー名またはログイン ID を入力する必要があります。
- 2 「ユーザー名」を入力します。
- 3 使用可能な場合は、「ジョブ ID」を入力します。
- 4 「ジョブ・タイプ」を選択します。
- 5 **オプション:** 「ジョブのステータス」または「送信時間」を選択します。次に、「OK」をクリックします。

ジョブ・コンソールに、「ジョブ・フィルタ」ダイアログ・ボックスの選択内容に応じたジョブが表示されます。

セキュリティ

ジョブ・コンソールは、ジョブの送信および表示に Performance Management Architect 役割を使用します。

ジョブの送信のセキュリティ

認証済ユーザーは、前のセクションで説明したジョブ・タイプのジョブを送信できます。

ジョブの表示のセキュリティ

ジョブを送信するユーザーには、更新および読取りのために、ジョブ・コンソール内のジョブのフル・アクセス権があります。さらに、他の Performance Management Architect 役割(次元エディタ、アプリケーション作成者、統合の作成、統合の実行)の一部であるユーザーは、次の表に基づくジョブへのアクセス権も保持できます。

表 20 ジョブ・タイプのセキュリティ

ジョブ・タイプ	表示可能な人
次元のインポート	ユーザー、次元エディタ
連結アプリケーションの配置	ユーザー、Financial Management アプリケーション作成者、次元エディタ
Planning アプリケーションの配置	ユーザー、Planning アプリケーション作成者、次元エディタ
Profitability アプリケーションの配置	ユーザー、Profitability アプリケーション作成者、次元エディタ
分析アプリケーションの配置	ユーザー、Essbase アプリケーション作成者、次元エディタ
データの同期	ユーザー、統合の作成、統合の実行
比較	ユーザー、次元エディタ
プロパティ・クエリー	ユーザー、次元エディタ
エクスポート	ユーザー、Financial Management アプリケーション作成者、 Planning アプリケーション作成者、Essbase アプリケーション作成者
メンバーのクエリー	ユーザー、Financial Management アプリケーション作成者、 Planning アプリケーション作成者、Essbase アプリケーション作成者
トランザクション・ログ・エクスポート	ユーザー、Financial Management アプリケーション作成者、 Planning アプリケーション作成者、Essbase アプリケーション作成者
クラシックから EPM Architect への変換	ユーザー、Financial Management アプリケーション作成者、 Planning アプリケーション作成者、Essbase アプリケーション作成者、次元エディタ
アプリケーションの移行	ユーザー、Financial Management アプリケーション作成者、 Planning アプリケーション作成者、Essbase アプリケーション作成者
アプリケーションの検証	ユーザー、Financial Management アプリケーション作成者、 Planning アプリケーション作成者、Essbase アプリケーション作成者

ジョブの添付ファイルの表示

各添付タイプを、ジョブの結果のビューアのタイプに関連付けられます。たとえば、インポート・プロセスで生成されたエラー・ログ・ファイルを、インポート・

エラー・ログ・ビューアを使用して表示できます。添付ファイル用に実装された特定のビューアがない場合は、デフォルトによりテキスト・ファイルで表示できます。

インポート結果の表示

- ▶ インポート結果を表示するには、ジョブ・コンソールの「添付ファイル」領域で、「インポート結果」をクリックします。

The screenshot shows the Oracle Enterprise Performance Management System Workspace interface. The top bar indicates the user is logged in as 'admin'. The main area displays a job console for '9ced20c8-ebca-8e5d-c4f3-742de56de751_DIH_IMPORT_501880906'. A table shows the import results for a profile named '9ced20c8-ebca-8e5d-c4f3-742de56...'. The table has columns for Profile Name, Status, Errors, Warnings, Dimensions Added, and Members. Below the table, a 'Dimension' list shows 'Account - test1'. The main area displays a table of 'Record Level Errors / Warnings' with columns for No, Type, Action, and Member. The table contains 8 rows of error records. A 'Details' section below the table shows the message: 'The dimension level property 'DefaultMember' has an invalid value; the property value '0' will not be processed.'

No	Type	Action	Member
1	Error	Create Dimension Association	
2	Error	Create Dimension Association	
3	Warning	Process Hierarchy Section	
4	Error	Update Member Properties	[None]
5	Error	Update Member Properties	[Active]
6	Error	Update Member Properties	[Consol 1]
7	Error	UpdateDimensionMemberArrayProperty	[Consol 2]
8	Error	Update Dimension Properties	

68 ページの「インポート・プロファイルの作成」を参照してください。

注： BPMA_server_config.xml ファイルの ImportErrorThreshold 設定は、実行中のインポートがシャット・ダウンする前に発生する可能性があるエラーと警告を合せた最大数を定義します。デフォルト値は 1000 ですが、ImportErrorThreshold 設定を変更して、インポート・エラーしきい値を大きくできます。付録 D 「BPMA_Server_Config.xml の構成設定」を参照してください。

テキスト・ファイルの表示

次のジョブはテキスト・ファイルの添付ファイルとして表示できます：

- データの同期 - ソース、宛先およびデータの同期について作成されるセッション・ログ・ファイルです。

- 次の各ジョブ用のテキスト・ファイルが作成されます:
 - 比較 - テキスト・ファイルがジョブに添付されます。
 - 配置 - テキスト・ファイルがジョブに添付されます。
 - クラシックから EPM Architect への変換とアプリケーションのアップグレード - テキスト・ファイルがジョブに添付されます。
 - エクスポート - テキスト・ファイルがジョブに添付されます。
 - 検証 - テキスト・ファイルがジョブに添付されます。
- ▶ テキスト・ファイルの添付ファイルを表示するには、ジョブ・コンソールの「添付ファイル」領域で、ログ・ファイルのリンクをクリックします。

次の図に、「添付ファイル」領域のデータ同期のログ・ファイルを示します。

The screenshot displays the Oracle EPM System Workspace Job Console. At the top, it shows the Oracle logo and 'Enterprise Performance Management System Workspace, Fusion Edition'. The user is logged in as 'admin'. The main area is titled 'Job Console' and contains a table with the following data:

ID	Description	Last Updated Time	Type	Created By
34	Executing synchronization:aso1_bso1	Monday, Septemb...	DataSynchronization	admin

Below the table, there is a 'Summary' section with the following details:

- Started Time: Monday, September 14, 2009 10:41:08 AM
- Submitted Time: Monday, September 14, 2009 10:41:08 AM
- Last Updated Time: Monday, September 14, 2009 10:42:05 AM
- User Name: admin
- Process Name:
- Thread: 0
- Server: dmeserver
- Detail: Synchronization Successful

To the right of the summary is an 'Attachments' section with three links: [Source Log](#), [Destination Log](#), and [Data Synchronization Log](#). Below that is a 'Status' section showing 'Status: Completed' and 'Progress: 100%'.

ジョブの削除

データベースで多数のジョブを維持するのは困難な場合があるため、ジョブの削除は重要です。ジョブを削除すると、ジョブ・コンソールのナビゲートが簡単になります。ただし、ジョブを削除するための適切なユーザー権限を持っている必要があります。

- ▶ ジョブを削除するには:
 - 1 ジョブ・コンソールで、ジョブを右クリックし、「ジョブの削除」を選択します。「削除の確認」ダイアログ・ボックスが表示されます。

- 2 「OK」をクリックします。

ジョブの手動によるタイムアウト

時には、あるジョブの実行が続き、リソースを消費し続けることがあります。そのような場合、リソースの消費が続かないように、ジョブを強制的にタイムアウトさせることができます。

▶ ジョブを強制的にタイムアウトさせるには:

- 1 ライブラリ・ジョブ・コンソールで、強制タイムアウトさせるジョブを右クリックします。
- 2 「手動タイムアウト・ジョブ」を選択します。
- 3 「はい」をクリックします。

Performance Management Architect ログ

Performance Management Architect には、次のログ・ファイルがあります:

- epma.log - ライフサイクル管理アクティビティ
- epma_err.log - Web サーバーによって書き込まれる情報
- awb.log - Web サーバーによって書き込まれる情報
- DMEngine.log - データ同期の Web アプリケーション・アクティビティ
- Windows イベント・ビューア - 次元サーバー・アクティビティ
- トランザクション・ログ - トランザクション(次元ライブラリからトランザクション・ログを表示します。117 ページの「トランザクション・ログの表示」を参照してください。)

Oracle Enterprise Performance Management System および Performance Management Architect のログ・ファイルの追加情報と詳細は、『Oracle Hyperion Enterprise Performance Management System インストールおよび構成トラブルシューティング・ガイド』を参照してください。

この章の内容

概要	315
タスクの自動化の前提条件.....	316
タスクフローの管理	316
タスクフローの表示	317
タスクフローの作成	317
タスクフローの編集	324
タスクフローの削除	325
タスクフローのコピー	325
テストのためのタスクフローの手動での実行	325
タスクフローへのアクセスの制御	325
タスクフローのスケジュール	326
タスクフローのステータスの表示	327

概要

タスクの自動化は、一連のタスクをタスクフローにまとめる Web ベースのモジュールです。タスクの自動化を使用すると、Performance Management Architect でよく実行するタスクを自動化できます。

Performance Management Architect を操作する場合、次元のインポート、データの同期、アプリケーションの再配置などのタスクを定期的に行います。Performance Management Architect 操作を実行するタスクフローを作成および維持して、必要に応じて実行される重要なタスクをスケジュール化できます。

Performance Management Architect は、次のタスクフローをサポートしています:

- データの同期
- フラット・ファイルからの次元のインポート
- インタフェース・テーブルからの次元のインポート
- 連結の再配置
- Planning の再配置
- Analytic Services の再配置(Essbase (ASO)および Essbase (BSO)アプリケーション用)

タスクの自動化の前提条件

タスクの自動化における次の前提条件を考慮します:

- Shared Services をインストールする必要があります。『Oracle Hyperion Enterprise Performance Management System インストールおよび構成ガイド』を参照してください。
- Shared Services にアプリケーションを登録する必要があります。アプリケーションを Performance Management Architect に配置すると、自動的に登録されます。
- タスクフロー操作を実行するユーザーに次のいずれかの Shared Services 役割を割り当てます:
 - タスクフローの管理 - ユーザーにタスクフローの作成および編集を許可します。
 - タスクフローの実行 - ユーザーにタスクフローの実行と表示のみ許可します。この役割を持つユーザーは、新規タスクフローの作成または既存のタスクフローの編集を行うことができません。

注: この両方の役割は、グローバル・ユーザー役割です。これらの役割を割り当てられているユーザーは、アプリケーションおよび製品のタスクフローを変更または実行できます。『Oracle Hyperion Enterprise Performance Management System ユーザーおよび役割セキュリティ・ガイド』を参照してください。

ユーザーは、タスクフローを実行するのに十分な役割を持っている必要があります。同じユーザー名を持つユーザーがいる場合、特権ユーザーが検索順序の上位に表示される方法で、ユーザーが順序付けされます。

タスクフローの管理

タスクフローは、タスクの自動化で作成できる一連のタスクです。たとえば、タスクフローを作成して、データのロード、計算および連結を行うことができます。「タスクフローの管理」オプションでは、タスクフローの作成、編集、保存、コピーおよび削除、使用可能なタスクフローのリストの表示、タスクフローへのアクセス権の割当て、テストするタスクフローの手動実行、タスクフローを自動的に実行するスケジュールの設定を行うことができます。

次の各手順を参照してください:

- [317 ページの「タスクフローの表示」](#)
- [317 ページの「タスクフローの作成」](#)
- [324 ページの「タスクフローの編集」](#)
- [325 ページの「タスクフローの削除」](#)
- [325 ページの「タスクフローのコピー」](#)
- [325 ページの「テストのためのタスクフローの手動での実行」](#)
- [325 ページの「タスクフローへのアクセスの制御」](#)
- [326 ページの「タスクフローのスケジュール」](#)

- [327 ページの「タスクフローのステータスの表示」](#)

タスクフローの表示

タスクフローは Shared Services で保管および管理します。「タスクフローのリスト (要約)」には、アプリケーションで使用可能なタスクフロー、そのタスクフローの作成者および説明が表示されます。

- ▶ タスクフローを表示するには、Performance Management Architect から、「管理」、「タスクフローの管理」の順に選択します。

注： タスクフローのタスクを表示する場合、ユーザーはアクセス権のあるタスクのみ表示できます。

タスクフローの作成

一連のタスクにリンクするタスクフローを作成し、それらを実行する時間を指定します。タスクフローを作成するときは、タスクフローに名前と説明を割り当てます。次に、タスクのステージと、タスク間のリンクを追加します。ステージは、データ・ロードのような特定のタスクを定義します。リンクは、手順の終了後に、システムがどのように続行するかを指定します。

- ▶ タスクフローを作成するには:

- 1 「タスクフローのリスト(要約)」の「新規」をクリックします。
- 2 「名前」にタスクフロー名を入力します。Performance Management Architect タスクフローを認識しやすいように、タスクフロー名に EPMA という接頭辞を付けることもできます。

名前には、最大 40 文字を指定できます。

「アプリケーション」テキスト・ボックスに現在のアプリケーションの名前が表示されます。

- 3 「説明」にタスクフローの説明を入力します。

- 4 「送信」をクリックします。

タスクフロー・エディタが表示されるので、ステージおよびリンクを追加します。

タスクフローの作成に進むには、次のトピックを参照してください:

- [318 ページの「Performance Management Architect アクション」](#)
- [320 ページの「ステージの追加」](#)
- [323 ページの「リンクの追加」](#)

Performance Management Architect アクション

Performance Management Architect は、次のアクションをサポートします:

- 318 ページの「データの同期」
- 318 ページの「フラット・ファイルからの次元のインポート」
- 319 ページの「インタフェース・テーブルからの次元のインポート」
- 319 ページの「再配置」

データの同期

▶ データ同期タスクフローを作成するには:

- 1 「処理」を選択し、アプリケーションを選択します。たとえば、EPMA-Budget です。
- 2 アクション「データの同期の実行」を選択します。
- 3 次のアクションを行います:
 - 「同期タイプ」 - 「URL」を選択し、「編集」をクリックします。同期を選択し、「送信」をクリックします。
 - オプション: 「外部ソース・ファイル」 - 同期で、同期のソースに外部ソース・ファイルを使用する場合は、外部ソース・ファイルの場所を入力します。
場所は、Web サーバーがアクセスできる場所を URL で示す必要があります(例: file:///b1r14983a/FlatFile/SimpleHFM.txt)。
 - 「モード」 - 「スキャン」または「ロード」を選択します。
 - 「スキャン」 - 同期のデータをコミットしません。かわりに、新規データを書き込まずに実行することで同期をテストします。
 - 「ロード」 - 同期を完全に実行します。
- 4 「保存」をクリックします。

フラット・ファイルからの次元のインポート

▶ フラット・ファイルのインポート・タスクフローを作成するには:

- 1 アプリケーションを選択します。
- 2 アクション「フラット・ファイルからの次元のインポート」を選択します。
- 3 次のアクションを行います:
 - 「プロファイル名の選択」 - 「URL」を選択し、「編集」をクリックし、プロファイルを選択し、「送信」をクリックします。
 - オプション: 「次元ファイルのインポート」 - プロファイルが外部フラット・ファイルを使用する場合は、テキスト・ボックスに場所を入力します。

場所は、Web サーバーからアクセスできる場所を Universal Naming Convention(UNC)で示す必要があります(例: \\server\file.dat)。

- 4 「保存」をクリックします。

インタフェース・テーブルからの次元のインポート

- ▶ インタフェース・テーブル・インポートのタスクフローを作成するには:
 - 1 アプリケーションを選択します。
 - 2 アクション「インタフェース領域からの次元のインポート」を選択します。
 - 3 「プロファイル名の選択」で、「URL」を選択し、「編集」をクリックし、プロファイルを選択し、「送信」をクリックします。
 - 4 「保存」をクリックします。

再配置

連結、Planning および Analytic Services の再配置のタスクフローを作成できます。

連結

- ▶ 連結の再配置タスクフローを作成するには:
 - 1 アプリケーションを選択します。
 - 2 アクション「連結の再配置」を選択します。
 - 3 次のアクションを行います:
 - 「連結アプリケーション」 - 「URL」を選択し、「編集」をクリックします。アプリケーションを選択し、「送信」をクリックします。
 - オプション: 「すべてのメタデータとデータの消去」 - 「PICKLIST」を選択し、「TRUE」または「FALSE」を選択します。
 - オプション: 「参照整合性の確認」 - 「PICKLIST」を選択し、「TRUE」または「FALSE」を選択します。
 - 4 「保存」をクリックします。

Planning

- ▶ Planning の再配置タスクフローを作成するには:
 - 1 アプリケーションを選択します。
 - 2 「Planning の再配置」を選択します。
 - 3 次のアクションを行います:
 - 「Planning アプリケーション」 - 「URL」を選択し、「編集」をクリックします。アプリケーションを選択し、「送信」をクリックします。

- 「データソース」 - 「TEXTBOX」を選択し、元のプランニング・データ・ソースの場所を入力します。(アプリケーションで使用されるデータベースまたは Essbase キューブ。)
- オプション:
 - 「アウトラインの作成」 - 「PICKLIST」を選択し、「TRUE」または「FALSE」を選択します。
 - 「アウトラインのリフレッシュ」 - 「PICKLIST」を選択し、「TRUE」または「FALSE」を選択します。
 - 「セキュリティ・フィルタの作成」 - 「PICKLIST」を選択し、「TRUE」または「FALSE」を選択します。
 - 「共有メンバーのセキュリティ・フィルタ」 - 「PICKLIST」を選択し、「TRUE」または「FALSE」を選択します。
 - 「セキュリティ・フィルタ制限の検証」 - 「PICKLIST」を選択し、「TRUE」または「FALSE」を選択します。

注： Planning Web で Planning 次元エディタでメンバーにセキュリティを割り当てる必要があります。Planning のセキュリティ・オプションについては、『Oracle Hyperion Planning 管理者ガイド』で説明しています。

4 「保存」をクリックします。

Analytic Services

▶ Analytic Services 再配置タスクフローを作成するには:

- 1 アプリケーションを選択します。
- 2 アクション「Analytic Services の再配置」を選択します。
- 3 次のアクションを行います:
 - 「Essbase アプリケーション」 - 「URL」を選択し、「編集」をクリックします。アプリケーションを選択し、「送信」をクリックします。
 - オプション: 「すべてのデータを消去」 - 「PICKLIST」を選択し、「TRUE」または「FALSE」を選択します。
- 4 「保存」をクリックします。

ステージの追加

ステージは、通常 1 人の個人が実行するタスクフロー内の手順を説明します。各ステージは、アクションを保持します。これらのアクションは、実行時に値が提供されるパラメータを保持できます。

ステージを定義するには、次の 3 つのタブを使用します:

- 「全般」: ステージ名、説明およびステージの実行を担当するユーザーのユーザー ID を定義します。ユーザーは、開始元(タスクフローの 1 番目のステージの所有者)、または他のステージの別のユーザーです。

- 「処理」:タスクフローが実行されたときのアクションと、必要に応じて、そのパラメータを定義します。
- 「開始イベント」:ローカル・ユーザーのコンピュータではなくアプリケーション・サーバーの時間に基づいたタスクフローの開始時間および発生するイベントの実行予定回数を定義します。このタブは、タスクフローの1番目のステージに対してのみ表示されます。スケジュール済イベント(タスクフロー開始時間)が表示されているか、または使用不可になっています(「今すぐ実行」オプションで実行されたタスクフローの手動開始の場合)。

▶ ステージを追加するには:

1 タスクフロー・エディタで、「ステージの追加」をクリックします。

新規ステージが左パネルに表示され、ステージの詳細が右パネルに表示されます。タスクフローにステージがある場合、新規ステージはタスクフローの最後に作成されます。

2 「全般」を選択し、次の情報を入力します:

1. 「名前」に、ステージ名(Data_Synchronization など)を入力します。

注: ステージ名にスペースを含めることはできません。名前には最大 30 文字を指定できます。

2. **オプション:**「説明」に、タスクフローの説明(同期を毎日実行する、など)を入力します。
3. 「別のユーザーとして実行」で「ユーザー名」を選択し、タスクフローを起動するユーザー名およびパスワードを入力します。

注: ステージ 1 では、ユーザー名およびパスワードを入力することが要求されます。後続のステージでは、開始元を選択できます。この場合は、ステージ 1 で定義したユーザー ID およびパスワードが使用されます。

3 「処理」を選択し、次の情報を入力します:

1. 「アプリケーション」から、タスクも実行元のアプリケーションを選択します。
2. 「アクション」から、実行するアクション(Data_Synchronization など)を選択します。

注: 322 ページの「Shared Services のステージのアクションとパラメータ」を参照してください。

3. 各パラメータの「タイプ」で、アクションに応じて POV の「選択リスト」、「テキスト・ボックス」、または「URL」の順に選択して、パラメータの値を入力します。

たとえば、Data_Synchronization アクションでは、「モード」パラメータの選択リストから、「マージ」、「累計」または「置換」を選択できます。

データ・ファイルおよびログ・ファイルの名前およびパスの場合は、手動で情報をテキスト・ボックスに入力する必要があります。タスクフローは

サーバーから実行されるので、ファイル名およびパスが有効で、タスクを実行するサーバーからアクセスできることを確認する必要があります。このため、自分のハード・ドライブを参照する c:\file.dat などのパスを入力できません。たとえば \\HFMServer\share\path\file.dat のように、Universal Naming Convention (UNC) を使用してファイルのコンピュータ名および共有ディレクトリを特定する必要があります。

4 「開始イベント」を選択し、次の情報を入力します:

1. 「開始イベント」でイベントを選択します。
「サーバーの日付」情報は、表示専用です。
2. 「開始日」に、タスクを実行する日を入力するか、ポップアップ・カレンダーをクリックして日付を選択します。
3. 「開始時間」で、タスクを実行する時間を選択します。

注： この時刻は、サーバーの日付に表示されている、アプリケーション・サーバーでの時刻です。

4. 繰り返しタスクの場合は、「繰り返し」を選択し、「繰り返しパターン」からタスクの頻度を選択します。
5. タスクの終了日時のオプションを選択します:
 - 「終了日なし」
 - 「終了条件」: 実行回数を入力します。
 - 「終了日」: 終了日を選択し、「終了時間」を選択します。

5 「オプション」: ステージを追加するには、「ステージの追加」をクリックし、「全般」および「処理」にステージ情報を入力します。

注： 開始イベント・タブは、最初のステージでのみ使用可能です。ただし、タスクフローのスケジュール機能を使用して、ステージの作成に依存せずにタスクフローをスケジュールできます。326 ページの「タスクフローのスケジュール」を参照してください。

Shared Services のステージのアクションとパラメータ

次の表に、使用可能なアクションとパラメータを示します。

表 21 Shared Services のステージのアクションとパラメータ

アクション	パラメータ
電子メール	<p>電子メール・メッセージを自動的に電子メール・アドレスに送信できるようにするアクション。電子メール・アクションの次のパラメータを指定します:</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 宛先: 受信者の電子メール・アドレスを入力します ● 件名: 電子メールの件名を入力します ● メッセージ: 変数を選択して(変数リストから変数をダブルクリック)、成功か失敗かを表示します。 ● 変数: 電子メール・アクションに使用可能な変数をリストします
実行	<p>コマンド・ラインから外部プログラムを実行するアクション。実行アクションの次のパラメータを指定します:</p> <ul style="list-style-type: none"> ● コマンド: 外部プログラムを実行するコマンドを入力します。 <p>外部プログラムは、有効なコマンド・ライン・スクリプト(Windows の「bat」スクリプトまたは UNIX の「sh」スクリプトなど)、および任意の有効なプログラム実行コマンドです。bat ファイルがパスを動的に解決しないことを確認します。ファイルがパスを解決する変数を使用する場合は機能しません。</p> <p>コマンドには、実行可能ファイルへのフル・パスを含める必要があります。たとえば、Internet Explorer を起動するには、C:\Program Files\Internet Explorer\IEXPLORE.EXE と入力します。</p>

リンクの追加

リンクは、タスクフロー実行中に 1 つのステージのアクティビティが完了して制御が次のステージに渡され、それが開始されるポイントです。リンクは、条件なし(1 つのステージが完了すると別のステージが開始される)、または条件付き(操作のシーケンスは複数のリンク条件に依存する)にできます。

リンクは、次に実行されるシステムのアクションを指定します。リンクはすべてのステージに必要です。通常、ほとんどのステージが 2 つのリンク(成功および失敗)を保持します。成功リンクでは、1 番目のステージが成功した場合にシステムが受信ステージと呼ばれる 2 番目のステージに進む必要があることを指定できます。失敗リンクでは、1 番目のステージで問題が発生した場合に実行されるアクションを指定します。

たとえば、Data_Synchronization の 1 番目のステージが成功した場合に、システムが Redeploying_Consolidation ステージに進む成功リンクを設定できます。また、Data_Synchronization ステージでエラーが発生した場合または問題に遭遇した場合に、システムが Redeploying_Consolidation ステージの End(プロセスを終了してタスクフローを停止する)に進む失敗リンクを設定できます。

タスクフローの最後のステージには、タスクフローを完了する目標として、「End」への最終リンクが必要です。

イベントの変数を指定できます。たとえば、Data_Synchronization_Result==Success などのデータ・ロード・タスクの変数を追加できます。

変数の後に等号を 2 つ(==)入力し、条件を一重引用符(")で囲みます。値は TRUE または FALSE です。

▶ リンクを追加するには:

- 1 「リンクの追加」をクリックします。
- 2 「全般」を選択し、「名前」にリンク名を入力します。
名前には最大 30 文字を指定できます。
- 3 「説明」にリンクの説明を入力します。
「送信ステージ」は表示専用です。変更できません。
- 4 「受信ステージ」でステージを選択します。
- 5 必要に応じて「条件」タブを選択し、「変数」で変数(たとえば、`Data_Synchronization_Result`)を選択します。
- 6 「値」で「成功」または「失敗」を選択します。
- 7 「追加」をクリックします。

注: タスクフローの最後のステージに End 目標へのリンクがあることを確認します。

ヒント: 条件を削除するには、「削除」をクリックします。

タスクフローの編集

タスクフローを作成した後、タスクフローの説明の編集、およびタスクフロー変数の作成、編集または削除ができます。ステージまたはリンクの追加または削除もできます。

▶ タスクフローを編集するには:

- 1 「管理」、「タスクフローの管理」の順に選択します。
 - 2 編集するタスクフローを選択し、「編集」をクリックします。
 - 3 タスクフロー・エディタで、オプションを選択します:
 - ステージを追加するには、「ステージの追加」をクリックします。320 ページの「[ステージの追加](#)」を参照してください。
 - リンクを追加するには、「リンクの追加」をクリックします。323 ページの「[リンクの追加](#)」を参照してください。
 - ステージまたはリンクを削除するには、「削除」をクリックします。
- 注:** ステージを削除すると、そのステージに関連したリンクもすべて削除されます。
- タスクフローの説明を編集するには、「プロパティ」をクリックします。
 - 4 タスクフローを編集し、アクションを実行します:
 - 編集内容を保存するには、「保存」をクリックします。
 - 編集を取り消すには、「取消し」をクリックします。変更は保存されずに「タスクフローのリスト(要約)」に戻ります。

タスクフローの削除

使用しなくなったタスクフローを削除できます。

▶ タスクフローを削除するには:

- 1 「管理」、「タスクフローの管理」の順に選択します。
- 2 タスクフローのリストで削除するタスクフローを選択し、「削除」をクリックします。

タスクフローのコピー

アプリケーションのタスクフローを定義したら、それを別のアプリケーションにコピーできます。

▶ タスクフローをコピーするには:

- 1 「管理」、「タスクフローの管理」の順に選択します。
- 2 コピーするタスクフローを選択し、「名前を付けて保存」をクリックします。
- 3 タスクフローの新規名前および説明を入力します。
- 4 「送信」をクリックします。

Shared Services では、タスクフローのコピーが、新規名前で「タスクフローのリスト(要約)」に追加されます。

テストのためのタスクフローの手動での実行

タスクフローは、自動的に開始されるのを待つかわりに、手動で実行できます。スケジュール済の実行時間の前にタスクフローをテストできます。これによって、実行前にタスクフローを調整できます。

▶ タスクフローを手動で実行するには:

- 1 「管理」、「タスクフローの管理」の順に選択します。
- 2 タスクフローのリストから実行するタスクフローを選択し、「今すぐ実行」をクリックします。

タスクフローへのアクセスの制御

Shared Services Console を使用した役割ベースの認可に加えて、アクセス制御リストを使用した、よりきめ細かいタスクフロー・レベルでアクセス権を管理できます。タスクフローに権限を割り当てる前に、Shared Services Console を使用して適切な役割が作成されていることを確認する必要があります。たとえば、(すべての財務タスクフローを管理する能力を提供する)「財務 TF 管理」のような説明的な名前で Performance Management Architect 役割を作成してから、「タスクフローの管理」基本役割を選択します。役割が Oracle Hyperion Shared Services Console を使用

して作成された後、個々のタスクフローにアクセス権を割り当てることができます。

Shared Services は、各タスクフローについて次のタイプの権限を提供します:

- 管理
- 実行

▶ 個々タスクフローに対する権限を割り当てるには:

- 1 「管理」、「タスクフローの管理」の順に選択します。
- 2 タスクフローのリストから、タスクフローを選択し、「アクセス・コントロール」をクリックします。
- 3 「管理権限役割」および「実行権限役割」に対して適切な基本役割を選択します。
たとえば、管理権限役割には「財務 TF 管理」を選択し、実行権限役割には「財務 TF 実行」を選択します。
- 4 「保存」をクリックします。

タスクフローのスケジュール

タスクフローを作成または編集せずに、タスクフローを自動的に実行するようにスケジュールできます。タスクフローのスケジュールでは、ローカル・ユーザーのコンピュータではなくアプリケーション・サーバー時刻に基づいて、タスクフロー会誌時刻およびイベントの発生がスケジュールされた時刻を定義できます。

▶ タスク・フローをスケジュールするには、次の手順を行います:

- 1 「管理」、「タスクフローの管理」の順に選択します。
- 2 タスクフローのリストからタスクフローを選択し、「タスクフローのスケジュール」をクリックします。
- 3 次の情報を入力します:
 1. 「開始イベント」で、「スケジュールされたイベント」を選択します。
「サーバーの日付」情報は、表示専用です。
 2. 「開始日」に、タスクを実行する日を入力するか、ポップアップ・カレンダーをクリックして日付を選択します。
 3. 「開始時間」で、タスクを実行する時間を選択します。

注: この時刻は、サーバーの日付に表示されている、アプリケーション・サーバーでの時刻です。

4. 繰り返しタスクの場合は、「繰り返し」を選択し、「繰り返しパターン」からタスクの頻度を選択します。
5. タスクの終了日時のオプションを選択します:
 - 「終了日なし」
 - 「終了条件」: 実行回数を入力します

- 「終了日」: 終了日を選択し、「終了時間」を選択します。

4 「保存」をクリックします。

タスクフローのステータスの表示

タスクフロー・ステータス(要約)では、タスクフローのステータス(アクティブ、完了、または停止済など)を確認できます。すべてのタスクフローを表示するか、またはステータス、アプリケーション、またはタスクフローが開始された日付または日付の範囲でタスクフローのリストをフィルタできます。






個別のタスクフローをドリル・ダウンして「タスクフロー参加者(要約)」にタスクフローの詳細を表示できます。「タスクフロー参加者(要約)」は、タスクフローの各ステージのステータス、およびそれが完了した時間を表示します。正常に完了したステージおよび失敗したステージを表示できます。この情報は、自動ルーチンのトラブルシューティングに使用できます。

▶ タスクフローのステータスを表示するには:

- 1 「管理」、「タスクフロー・ステータスの表示」の順に選択します。
- 2 タスク ID をダブルクリックして、そのステータスを表示します。
- 3 タスクフローを検索するには、フィルタ条件を選択し、「検索」をクリックします。

表 22 タスクフローのステータス(要約)の要素

要素	説明
ステータス	次のタスクフローのタイプでフィルタします: <ul style="list-style-type: none"> ● アクティブ ● 完了 ● 停止済 ● すべて
アプリケーション	タスクフローに含まれるアプリケーション
タスクフロー	タスクフロー名
開始期間(オプション)	タスクフローを開始した日付または日付の範囲を入力するか、クリックして選択します。
検索	クリックして、指定する検索基準に一致するタスクフローのリストを「タスクフローのリスト」領域に表示します。

要素	説明
タスクフローのリスト	<p>次のような指定の検索条件に一致するタスクフローを表示します:</p> <ul style="list-style-type: none"> ● ID ● アプリケーション ● タスクフロー ● 開始元 ● 開始済*(最新のタスクフローを最初に表示します) ● ステータス ● 説明 <p>*ソート可能なデータを示します。列ヘッダーをクリックして、アプリケーション、タスクフロー、開始元、開始済またはステータス別にタスクフローをソートできます。</p>
停止	アクティブ・タスクフロー・インスタンスを停止します。
削除	<p>選択したタスクフロー・インスタンスを削除します。</p> <p>注: タスクフローは、削除の前に停止する必要があります。</p>
すべて削除	選択したタスクフロー・インスタンスをすべて削除します。
	指定した検索条件に一致するタスクフロー・インスタンスの最初のページを「タスクフローのリスト」領域に表示します。
	指定した検索条件に一致するタスクフロー・インスタンスの前のページを「タスクフローのリスト」領域に表示します。
ページ	ページを選択して、「タスクフローのリスト」領域に表示します。
	「ページ」ドロップダウン・リスト・ボックスで選択したページを「タスクフローのリスト」領域に表示します。
	指定した検索条件に一致するタスクフロー・インスタンスの次のページを「タスクフローのリスト」領域に表示します。
	指定した検索条件に一致するタスクフロー・インスタンスの最後のページを「タスクフローのリスト」領域に表示します。
リフレッシュ	「タスクフローのリスト」領域に表示されたタスクフロー・インスタンスをリフレッシュします。

タスクフロー・ステータス(要約)から、アクティブ・タスクフローの停止、タスクフロー参加者の要約の表示またはタスクフロー参加者の詳細の表示を行うこともできます:

- [328 ページの「アクティブ・タスクフローの停止」](#)
- [329 ページの「タスクフロー参加者\(要約\)の表示」](#)
- [330 ページの「タスクフロー参加者\(詳細\)の表示」](#)

アクティブ・タスクフローの停止

アクティブ・タスクフローは、進行中のタスクフローです。進行中でないタスクフローは停止できます。たとえば、エラーがあるタスクフローを停止して調整できます。

- ▶ アクティブ・タスクフローを停止するには:
 - 1 「管理」、「タスクフロー・ステータスの表示」の順に選択します。
 - 2 「ステータス」で「アクティブ」を選択します。
 - 3 「オプション」: リストをフィルタするには、タスクフローの検索条件を選択して「検索」をクリックします。
 - 4 停止するタスクフローを選択し、「停止」をクリックします。

タスクフロー参加者(要約)の表示

タスクフロー参加者(要約)では、タスクフローの参加者をリストし、各参加者インスタンスのステータス情報を表示します。

- ▶ タスクフロー参加者ステータスを表示するには:
 - 1 「管理」、「タスクフロー・ステータスの表示」の順に選択します。
 - 2 タスクフローの権限条件を選択し、「検索」をクリックします。
Shared Services タスクフロー管理システムでタスクフローをすべて表示するには、「(ステータス)すべて」を選択し、「検索」をクリックします。
 - 3 「タスクフローのリスト」領域で、参加者要約を表示するタスクフローを見つけて、タスクフロー ID をクリックします。
タスクフロー参加者(要約)ウィンドウが表示されます。
 - 4 「タスクフローのステータス(要約)」ウィンドウに戻るには「取消し」をクリックします。

表 23 タスクフロー参加者(要約)ウィンドウの要素

要素	説明
タスクフロー(要約)	選択したタスクフローの要約情報(アイテムは完了順に表示される)は、次のとおりです: <ul style="list-style-type: none"> ● ID ● アプリケーション ● タスクフロー ● 開始元 ● 開始済 ● ステータス ● 説明
参加者	ステージの参加者名。参加者は選択可能です。参加者をクリックすると、タスクフローの参加者の詳細が表示されます。
ステージ名	ステージ名

要素	説明
ステータス	ステージ・ステータスは、次のとおりです: <ul style="list-style-type: none"> ● アクティブ ● 完了 ● 停止済 ● すべて
成功変数	完了したステージの結果
完了	ステージ完了日時

タスクフロー参加者(詳細)の表示

タスクフロー参加者(詳細)ウィンドウにタスクフロー参加者の詳細が表示されます。

▶ タスクフロー参加者の詳細を表示するには:

1 「管理」、「タスクフロー・ステータスの表示」の順に選択します。

2 タスクフローの権限条件を選択し、「検索」をクリックします。

Shared Services タスクフロー管理システムでタスクフローをすべて表示するには、「(ステータス)すべて」を選択し、「検索」をクリックします。

3 「タスクフローのリスト」で、参加者要約を表示するタスクフローを見つけて、タスクフロー ID をクリックします。

4 タスクフロー参加者の詳細を表示する参加者をクリックします。

Shared Services で、タスクフロー参加者(詳細)ウィンドウが表示され、参加者イベントが発生順にソートされます。

5 「タスクフロー参加者(要約)」ウィンドウに戻るには「取消し」をクリックします。

第 V 部

製品固有のプロパティ、要件および追加の考慮事項

製品固有のプロパティ、要件および追加の考慮事項の内容：

- Financial Management 次元の操作
- Planning 次元の操作
- Profitability and Cost Management プロパティの操作
- Essbase プロパティの操作
- 統計およびシステム・プロパティの操作

11

Financial Management次元の 操作

この章の内容

勘定科目	334
Cell Text Label	340
カスタム	341
エンティティ	343
シナリオ	344
アプリケーション	347
期間別組織	352
連結メソッド	352
通貨	355
システム生成の勘定科目	356
内部取引パートナーの設定	358
セキュリティに基づくメタデータのフィルタ	359
メタデータの参照整合性	360
次元の名前付けの制限	362
9.3.1 で作成された連結フラット・ファイルの使用方法	362
Financial Management 9.3.1 および Performance Management Architect の操作	362

Financial Management では、他の次元のメンバーを参照するプロパティがあるため、次元によってはその他の次元と関連付ける必要があります。たとえば、勘定科目次元の Security Class プロパティは、セキュリティ・クラス次元のメンバーを指しています。90 ページの「次元の関連付けの作成」を参照してください。

次元名の最大文字数は 80 文字です。詳細は、362 ページの「次元の名前付けの制限」を参照してください。

表 24 Financial Management の関連付け

次元(ソース)	プロパティ名	次元(ターゲット)
勘定科目	Plug Account	勘定科目
	Alias	別名
	<DimensionAliasName>TopMember	カスタム
	Security Class	セキュリティ・クラス
連結メソッド	Alias	別名

次元(ソース)	プロパティ名	次元(ターゲット)
通貨	Alias	別名
カスタム	Alias	別名
	Security Class	セキュリティ・クラス
エンティティ	Alias	別名
	Currency	通貨
	Holding Company	エンティティ
	ICP Top member	ICP
	Security Class	セキュリティ・クラス
	Security As Partner	セキュリティ・クラス
ICP	Alias	別名
	Security Class	セキュリティ・クラス
期間	Alias	別名
シナリオ	Alias	別名
	Security Class	セキュリティ・クラス
	Default Frequency	表示
	Default Frequency For IC Transactions	表示
	Phased Submission Start Year	年
値	Alias	別名
表示	Alias	別名
年	Alias	別名

勘定科目

次の表では、勘定科目次元のメンバー・プロパティを説明します。プロパティ・ラベル列は、Performance Management Architect プロパティ・グリッドのプロパティに表示されるラベルを示します。プロパティ名列に表示される名前を使用すると、Performance Management Architect バッチ・クライアントを使用してプロパティ値を変更できます。スクリプトの実行の詳細は、『Oracle Hyperion Enterprise Performance Management Architect バッチ・クライアント・ユーザー・ガイド』を参照してください。

表 25 勘定科目次元のメンバー・プロパティ

プロパティ・ラベル	値の説明	プロパティ名
Alias	<p>メンバーの説明(最大 80 文字)</p> <p>Alias プロパティを使用するには、別名次元を作成し、プロパティを定義して、その別名次元を別の次元に関連付けます。たとえば、値が英語、フランス語およびイタリア語の別名次元を作成し、その別名次元を勘定科目次元に関連付けられます。</p>	Alias
Calc Attribute	<p>計算の説明(最大 80 文字)</p> <p>この情報はデータ・フォームおよびデータ・グリッドに表示されます。</p> <p>注： このプロパティの値を親レベルで定義すると、すべての子はその値を自動的に継承します。</p>	CalcAttribute
Consolidation Account Type	<p>次のいずれかの値です:</p> <ul style="list-style-type: none"> ● ASSET(資産) ● LIABILITY(負債) ● REVENUE(収益) <p>注： リリース 4.1 より前の Financial Management では、この勘定科目の種別は INCOME と呼ばれています。</p> <ul style="list-style-type: none"> ● EXPENSE(支出) ● FLOW(フロー) ● BALANCE(残高) ● BALANCERECURRING(経常残高) ● CURRENCYRATE(通貨レート) ● GROUPLABEL(グループラベル) ● DYNAMIC(動的) <p>注： このプロパティの値を親レベルで定義すると、すべての子はその値を自動的に継承します。</p>	ConsolidationAccountType
<DimensionAliasName> TopMember	<p>勘定科目で有効なカスタム次元の最上位のメンバー</p> <p>指定したメンバーおよびその子孫のすべてが勘定科目で有効です。</p> <p>このプロパティの値を入力するには、勘定科目およびカスタム次元を関連付ける必要があります。</p>	<DimensionAliasName>TopMember
Default Parent	<p>勘定科目のデフォルトの親。デフォルトの親の値は派生値であり、値の入力はできません。</p>	DefaultParent

プロパティ・ラベル	値の説明	プロパティ名
Enable <DimensionAliasName> Aggregation	勘定科目次元およびカスタム次元が交差するセルで集約できるかどうかを指定します。 このプロパティは、特殊な合計(加算ではない)に使用されます。勘定科目がカスタム次元で集約できるようにする場合はYを指定し、集約できるようにしない場合はNを指定します。 注： このプロパティの値を親レベルで定義すると、すべての子はその値を自動的に継承します。	Enable<DimensionAliasName>Aggregation
Enable Data Audit	シナリオが監査されるかどうかおよび監査可能な対象 <ul style="list-style-type: none"> ● すべての勘定科目を監査する場合はY。Enable Data Audit が False に設定されている勘定科目も監査されます。 ● N: すべての勘定科目の監査を使用不可にする 	EnableDataAudit
ICP Top Member	勘定科目の ICP 最上位のメンバー 指定したメンバーおよびその子孫のすべてが勘定科目で有効です。 このプロパティの値を入力するには、勘定科目および ICP 次元を関連付ける必要があります。	ICPTopMember
Is Calculated	勘定科目を計算できるかどうかを指定します。 基本レベルの勘定科目のみを計算できます。基本レベルの計算済勘定科目に値を入力できません。勘定科目を計算するにはYを指定し、それ以外の場合はNを指定します。 注： このプロパティの値を親レベルで定義すると、すべての子はその値を自動的に継承します。	IsCalculated
Is Consolidated	勘定科目が親勘定科目に連結されているかどうか 親勘定科目に連結する場合はYを指定し、親勘定科目に連結しない場合はNを指定します。 注： このプロパティの値を親レベルで定義すると、すべての子はその値を自動的に継承します。	IsConsolidated
Is ICP	勘定科目が内部取引勘定科目であるかどうか <ul style="list-style-type: none"> ● Y: 自己 ICP トランザクションを含め、ICP 取引を計上できる場合。 ● N: ICP トランザクションを計上できない場合。 ● R: ICP トランザクションを計上できるが、勘定科目そのものに ICP トランザクションを指定できない場合。 内部取引勘定科目の場合は、調整勘定科目を指定する必要があります。	IsICP

プロパティ・ラベル	値の説明	プロパティ名
Name	<p>勘定科目の名前(必須)</p> <p>名前は、スペースを含めて最大 80 文字を指定できます。スペースで開始したり、次の文字を含めることはできません:</p> <ul style="list-style-type: none"> ● アンパサンド(&) ● アスタリスク(*) ● アット・マーク(@) ● カンマ(,) ● 中かっこ({}) ● 二重引用符(") ● マイナス符号(-) ● シャープ(#) ● ピリオド(.) ● プラス符号(+) ● セミicolon(;) ● スラッシュ(/) 	Name
Number of Decimal Places	<p>勘定科目の値に、小数点の右側に表示される桁数(0 から 9)(必須)</p> <p>注: このプロパティの値を親レベルで定義すると、すべての子はその値を自動的に継承します。</p>	NumDecimalPlaces
Plug Account	<p>内部取引での矛盾を特定するために使用される勘定科目の名前(勘定科目の IsICP プロパティが選択されている場合に必須)</p> <p>このプロパティの値を入力するには、2つの勘定科目次元を関連付ける必要があります。</p>	PlugAccount
Security Class	<p>勘定科目データにアクセスできるユーザーを定義するセキュリティ・クラスの名前(最大 80 文字)</p> <p>このプロパティの値を入力するには、勘定科目およびセキュリティ・クラス次元を関連付ける必要があります。</p>	SecurityClass
Submission Group	<p>送信グループ(0 から 99)。</p> <p>送信グループが 0 に設定されると、勘定科目が確認プロセスに含まれなくなります。</p> <p>注: このプロパティの値を親レベルで定義すると、すべての子はその値を自動的に継承します。</p> <p>デフォルト値: 1</p>	SubmissionGroup
User Defined 1、User Defined 2、User Defined 3	<p>勘定科目のカスタム情報(最大 80 文字)</p> <p>User Defined1、User Defined2 および User Defined3 関数は、このプロパティに格納されたテキストを取得します。</p>	UserDefined1 UserDefined2 UserDefined3

プロパティ・ラベル	値の説明	プロパティ名
Uses Line Items	<p>勘定科目がライン・アイテムを保持できるかどうかを示します。勘定科目がライン・アイテムを使用する場合はYを指定し、勘定科目がライン・アイテムを使用しない場合はNを指定します。</p> <p>注意 ライン・アイテムの詳細を入力した後にこのプロパティを変更すると、格納されたライン・アイテムの詳細が勘定科目で有効でなくなる場合があります:</p> <ul style="list-style-type: none"> このプロパティをYからNに変更した場合は、データベースに保管されたライン・アイテムの詳細が無効になります。合計のみが表示されます。 このプロパティをNからYに変更した場合、合計額のみが表示されますが、合計とライン・アイテムの詳細情報が一致するように、合計を抽出してそれをライン・アイテムの詳細データとしてロードできます。 	UsesLineItems

勘定科目の種別の動作

次の表は、システムにおける勘定科目の種別の動作を示しています。たとえば、ASSET 勘定科目は、期間をまたぐ合計は計算されず、REVENUE 勘定科目では年度累計が出力されます。借方が ASSET 勘定科目の場合、入力した値はその勘定科目に加算されます。貸方が ASSET 勘定科目の場合、入力した値はその勘定科目から減算されます。GROUPLABEL を除くすべての勘定科目の種別にはデータが含まれます。

表 26 勘定科目の種別の動作

勘定科目の種別	勘定科目の種別の動作			
	年次累計	借方	貸方	デフォルトの換算
ASSET(資産)	いいえ	加算	減算	DefaultRateForBalance 勘定科目
LIABILITY(負債)	いいえ	減算	加算	DefaultRateForBalance 勘定科目
REVENUE(収益)	はい	減算	加算	DefaultRateForFlow 勘定科目
EXPENSE(支出)	はい	加算	減算	DefaultRateForFlow 勘定科目
FLOW(フロー)	はい	加算	減算	なし
BALANCE(残高)	いいえ	加算	減算	なし
BALANCE RECURRING(経常残高)	いいえ	加算	減算	なし
CURRENCYRATE(通貨レート)	いいえ	N/A	N/A	N/A
GROUPLABEL(グループラベル)	N/A	N/A	N/A	N/A
DYNAMIC(動的)	N/A	N/A	N/A	N/A

異なるタイプの親勘定科目に集約されるときは、勘定科目の種別によって異なります。たとえば、ASSET 勘定科目の値は、親 ASSET および EXPENSE 勘定科目に加算され、親 LIABILITY および REVENUE 勘定科目から減算されます。

注： 下の表では、勘定科目の種別を 1 文字または 2 文字の略号で示しています。

表 27 親勘定科目に集約される場合の勘定科目の種別の動作

種別	親勘定科目の種別ごとの勘定科目の種別の動作									
	A	L	R	E	F	B	BR	C	G	D
ASSET(資産)	加算	減算	減算	加算	加算	加算	加算	いいえ	いいえ	いいえ
LIABILITY(負債)	減算	加算	加算	減算	加算	加算	加算	いいえ	いいえ	いいえ
REVENUE(収益)	減算	加算	加算	減算	加算	加算	加算	いいえ	いいえ	いいえ
EXPENSE(支出)	加算	減算	減算	加算	加算	加算	加算	いいえ	いいえ	いいえ
FLOW(フロー)	加算	加算	加算	加算	加算	加算	加算	いいえ	いいえ	いいえ
BALANCE(残高)	加算	加算	加算	加算	加算	加算	加算	いいえ	いいえ	いいえ
BALANCE RECURRING(経常残高)	加算	加算	加算	加算	加算	加算	加算	いいえ	いいえ	いいえ
CURRENCYRATE(通貨 レート)	いいえ	いいえ	いいえ	いいえ	いいえ	いいえ	いいえ	いいえ	いいえ	いいえ
GROUPLABEL(グループ ラベル)	いいえ	いいえ	いいえ	いいえ	いいえ	いいえ	いいえ	いいえ	いいえ	いいえ
DYNAMIC(動的)	いいえ	いいえ	いいえ	いいえ	いいえ	いいえ	いいえ	いいえ	いいえ	いいえ

注： 上の表の「なし」は、勘定科目の種別が親勘定科目に集約されないことを示します。

勘定科目の種別が親勘定科目に集約される例を次に示します：

```

Total Assets 80
├ Fixed Assets 100
└ Amortization 20
  
```

この例では、総資産(ASSET 勘定科目)が固定資産(ASSET 勘定科目)および償却(LIABILITY 勘定科目)の親です。勘定科目が親勘定科目に連結されると、固定資産の値 100 が加算され、償却の値 20 が減算されて、結果の総資産の値は 80 になります。

動的な勘定科目の定義

動的な勘定科目は、データが要求されると動的に計算されます。その値は保管されません。最も一般的な動的計算の種類は比率計算です。

▶ 動的な勘定科目および計算を定義するには:

1 動的な勘定科目の種別を使用する勘定科目を設定します。

動的にできるのは、これらの勘定科目のみです。

注: 動的な勘定科目では、次の勘定科目プロパティは無視されます: Is Calculated、Is Consolidated、Enable Custom1 Aggregation、Enable Custom2 Aggregation、Enable Custom3 Aggregation、Enable Custom4 Aggregation、Uses Line Items。

2 ルール・ファイルに、Sub Dynamic ()セクションを作成します。

3 ルール・ファイルで計算を定義します。

Cell Text Label

セル・テキスト・ラベルによって、セル・テキストの表示の際、情報のタイプを簡単に識別できます。セル・テキスト・ラベルは、データ・グリッドおよびデータ・フォームで使用できます。

表 28 セル・テキスト・ラベルのメンバー・プロパティ

プロパティ・ラベル	値の説明	プロパティ名
Name	セル・テキスト・ラベルの名前(必須) 名前は、スペースを含めて最大 80 文字を指定できます。スペースで開始したり、次の文字を含めることはできません: <ul style="list-style-type: none">● アンパサンド(&)● アスタリスク(*)● アット・マーク(@)● カンマ(,)● 中かっこ({})● 二重引用符(")● マイナス符号(-)● シャープ(#)● ピリオド(.)● プラス符号(+)● セミicolon(;)● スラッシュ(/)	Name

カスタム

カスタム次元は、Performance Management Architect の汎用次元タイプで表されま
す。汎用次元プロパティであるカスタム次元は、汎用 Performance Management
Architect 次元をカスタム連結次元にマッピングします。任意の数のカスタム次元
を Financial Management アプリケーション・ビューに追加できます。

表 29 カスタム次元のメンバーのプロパティ

プロパ ティ・ラベ ル	値の説明	プロパティ名
Alias	メンバーの説明(最大 80 文字) Alias プロパティを使用するには、別名次元を作成し、プロパティを定義し て、その別名次元を別の次元に関連付けます。たとえば、別名次元を英語、 フランス語およびイタリア語の値で作成して、その別名次元をカスタム次元 に関連付けられます。	Alias
Aggregation Weight	カスタム次元の集約加重には、任意の値(正または負の値)および分率(たと えば、1.5 は有効な値)を指定できます。デフォルト値は 0(集約なし)および 1(集 約あり)です。値が 0 または 1 以外の場合は、乗数の値を使用して子メンバ ーが親に集約されます。 たとえば、集約加重を .5 に設定すると、メンバーの値の 50%だけが親に集約 されます。	AggregationWeight
Default Parent	カスタム・メンバーのデフォルトの親。デフォルトの親の値は派生値であ り、値の入力はできません。	DefaultParent
Is Calculated	基本レベルのカスタム勘定科目が計算されるかどうか 基本レベルのカスタム勘定科目のみが計算できます。基本レベルの計算され たカスタム勘定科目には値を入力できません。カスタム勘定科目を計算する には Y を指定します; それ以外の場合は N を指定します。	IsCalculated
Name	カスタム・メンバーの名前(必須) 名前は、スペースを含めて最大 80 文字を指定できます。スペースで開始し たり、次の文字を含めることはできません: <ul style="list-style-type: none"> ● アンパサンド(&) ● アスタリスク(*) ● アット・マーク(@) ● カンマ(,) ● 中かっこ({}) ● 二重引用符(") ● マイナス符号(-) ● シャープ(#) ● ピリオド(.) ● プラス符号(+) ● セミicolon(;) ● スラッシュ(/) 注: Custom1 次元メンバー名を連結メソッドの名前と同じにできません。	Name

プロパティ・ラベル	値の説明	プロパティ名
Security Class	<p>カスタム次元データにアクセスできるユーザーを定義するセキュリティ・クラスの名前(最大 80 文字)</p> <p>このプロパティに値を入力するには、カスタム次元およびセキュリティ・クラス次元を関連付ける必要があります。</p>	SecurityClass
Submission Group	<p>送信グループ(0 から 99)。</p> <p>デフォルトの空白は、1 に設定されます。送信グループがゼロ(0)に設定されると、カスタム・メンバーは確認プロセスに含まれません。</p>	SubmissionGroup
Switch Sign For Flow	<p>次のルールを使用する FLOW 勘定科目の符号変更(借方/貸方)を指定します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ● ASSET から LIABILITY へ ● LIABILITY から ASSET へ ● EXPENSE から REVENUE へ ● REVENUE から EXPENSE へ ● BALANCE から FLOW へ ● FLOW から BALANCE へ <p>この勘定科目の符号が切り替えられる場合は Y、切り替えられない場合は N を指定します。</p> <p>注： このプロパティの値を親レベルで定義すると、すべての子はその値を自動的に継承します。</p>	SwitchSignForFlow
Switch Type For Flow	<p>次のルールを使用する FLOW 勘定の勘定科目の種別の変更を指定します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ● ASSET から EXPENSE へ ● EXPENSE から ASSET へ ● LIABILITY から REVENUE へ ● REVENUE から LIABILITY へ ● BALANCE から FLOW へ ● FLOW から BALANCE へ <p>この勘定科目の種別が切り替えられる場合は Y、切り替えられない場合は N を指定します。</p> <p>注： このプロパティの値を親レベルで定義すると、すべての子はその値を自動的に継承します。</p>	SwitchTypeForFlow
User Defined 1、User Defined 2、User Defined 3	<p>カスタム・メンバーのカスタム情報(最大 80 文字)</p> <p>User Defined 1、User Defined 2、User Defined 3 の関数は、このプロパティに保管されたテキストを取得します。</p>	UserDefined1 UserDefined2 UserDefined3

エンティティ

表 30 エンティティの次元のメンバーのプロパティ

プロパティ・ラベル	値の説明	プロパティ名
Alias	メンバーの説明(最大 80 文字) Alias プロパティを使用するには、別名次元を作成し、プロパティを定義して、その別名次元を別の次元に関連付けます。たとえば、別名次元を英語、フランス語およびイタリア語の値で作成し、その別名次元をエンティティ次元に関連付けられます。	Alias
Allow Adjustments	このエンティティで仕訳の転記が許可されているかどうかを指定します。このエンティティで仕訳の転記が許可されている場合は Y を指定し、仕訳の転記が許可されていない場合は N を指定します。	AllowAdjs
Allow Adjustments From Children	親エンティティで子からの仕訳の転記が許可されているかを指定します。子からの仕訳の転記が許可されている場合は Y を指定し、子からの仕訳の転記が許可されていない場合は N を指定します。	AllowAdjFromChildren
Currency	エンティティのデフォルト通貨を指定します。このプロパティの値は必須です。 このプロパティに値を入力するには、エンティティおよび通貨次元を関連付ける必要があります。 注： このプロパティの値を親レベルで定義すると、すべての子はその値を自動的に継承します。	Currency
Default Parent	エンティティのデフォルトの親を指定します。デフォルトの親の値は派生値であり、値の入力はできません。	DefaultParent
Holding Company	エンティティの持株会社を指定します。エンティティの名前を指定するか<blank>にできます。 このプロパティに値を入力するには、2 つのエンティティ次元を関連付ける必要があります。	HoldingCompany
Is ICP	エンティティが内部取引エンティティかどうかを指定します。エンティティが内部取引エンティティの場合は Y を指定し、内部取引エンティティでない場合は N を指定します。エンティティが内部取引エンティティの場合は、[ICP Entities] の下の ICP 次元の POV に表示されます。 デフォルト値: N	IsICP

プロパティ・ラベル	値の説明	プロパティ名
Name	<p>エンティティの名前(必須)</p> <p>名前は、スペースを含めて最大 80 文字を指定できます。スペースで開始することはできず、ALL という単語にすることもできません。また次の文字は使用できません:</p> <ul style="list-style-type: none"> ● アンパサンド(&) ● アスタリスク(*) ● アット・マーク(@) ● カンマ(,) ● 中かっこ({}) ● 二重引用符(") ● マイナス符号(-) ● シャープ(#) ● ピリオド(.) ● プラス符号(+) ● セミicolon(;) ● スラッシュ(/) 	Name
Security As Partner	<p>ICP エンティティのセキュリティ・クラスの名前を指定します。このプロパティを使用して ICP 次元のエンティティをセキュリティで保護できます。</p> <p>このプロパティに値を入力するには、エンティティおよびセキュリティ・クラス次元を関連付ける必要があります。</p>	SecurityAsPartner
Security Class	<p>エンティティ・データにアクセスできるユーザーを定義するセキュリティ・クラスの名前(最大 80 文字)</p> <p>このプロパティに値を入力するには、エンティティおよびセキュリティ・クラス次元を関連付ける必要があります。</p>	SecurityClass
User Defined 1、User Defined 2、User Defined 3	<p>エンティティのカスタム情報(最大 80 文字)</p> <p>User Defined 1、User Defined 2、User Defined 3 の関数は、このプロパティに保管されたテキストを取得します。</p>	UserDefined1 UserDefined2 UserDefined3

シナリオ

表 31 シナリオ次元プロパティ

プロパティ・ラベル	値の説明	プロパティ名
Alias	<p>メンバーの説明(最大 80 文字)</p> <p>Alias プロパティを使用するには、別名次元を作成し、プロパティを定義して、その別名次元を別の次元に関連付けます。たとえば、別名次元を英語、フランス語およびイタリア語の値で作成し、その別名次元をシナリオ次元に関連付けられます。</p>	Alias

プロパティ・ラベル	値の説明	プロパティ名
Consolidate YTD	連結のビューを指定します。このプロパティの値は必須です。YTD には Y を、期別には N を指定します。	ConsolidateYTD
Default Frequency	シナリオの、データを入力できる期間を指定します。このプロパティの値は必須です。 たとえば、Monthly という値は、月別でしか入力データを抽出できず、四半期または年間では抽出できないことを表す。 このプロパティに値を入力するには、シナリオ次元および表示次元を関連付けます。	DefaultFrequency
Default Frequency For IC Transactions	内部取引のデフォルトの頻度を指定します。このプロパティは有効な頻度で、最大 20 文字まで指定できます。このプロパティのデフォルトは<blank>です。 このプロパティに値を入力するには、シナリオ次元および表示次元を関連付けます。	DefFreqForICTrans
Default Parent	シナリオのデフォルトの親を指定します。デフォルトの親の値は派生値であり、値の入力はできません。	DefaultParent
Default View	視点バーでシナリオ・ビューが選択された場合に使用するビューを指定します。このプロパティの値は必須です。YTD または期別を指定します。 シナリオのデフォルト・ビューを変更し、ライン・アイテムの詳細を入力する場合、最初にライン・アイテムの詳細を抽出して保存する必要があります。次に、ビューを変更する前にライン・アイテムの詳細を削除します。新規デフォルト・ビューを一致させるには、それをロードする前に抽出したライン・アイテムの詳細を変更する必要があります。	DefaultView
Enable Data Audit	シナリオを監査対象にするかどうかを指定します。勘定科目またはシナリオのこのプロパティは監査できる対象を決定します。次のいずれかの値を指定します: <ul style="list-style-type: none"> ● Y: すべての勘定科目を自動的に監査します。Enable Data Audit が False に設定されている勘定科目も監査されます。 ● O: Enable Data Audit が TRUE に設定されている勘定科目のみを監査します ● N: すべての勘定科目の監査を使用不可にする デフォルト値: N	EnableDataAudit
Enable Process Management	プロセス管理機能を使用可能にするかどうかを指定します。次のいずれかの値を指定します: <ul style="list-style-type: none"> ● Y: プロセス管理オプションを使用可能にします ● N: プロセス管理を使用不可にします。 ● A: プロセス管理および電子メールによる警告を使用可能にします デフォルト値: N	HfmEnableProcessManagement
Maximum Review Level	シナリオに最大のプロセス管理確認レベルを指定します。確認レベルを 1 から 10 で指定します。このプロパティの値は必須です。	MaximumReviewLevel

プロパティ・ラベル	値の説明	プロパティ名
Name	シナリオの名前(必須) 名前は、スペースを含めて最大 80 文字を指定できます。スペースで開始したり、次の文字を含めることはできません: <ul style="list-style-type: none"> ● アンパサンド(&) ● アスタリスク(*) ● アット・マーク(@) ● カンマ(,) ● 中かっこ({}) ● 二重引用符(") ● マイナス符号(-) ● シャープ(#) ● ピリオド(.) ● プラス符号(+) ● セミコロン(;) ● スラッシュ(/) 	Name
Phased Submission Start Year	開始年を指定します。Performance Management Architect でアプリケーションを配置するか、従来の Financial Management アプリケーションにメタデータをロードすることで、開始年を設定できます。この設定により、プロセス管理のフェーズ化された送信を開始するシナリオの年に対する柔軟な設定を使用可能にします。	PhasedSubStartYear
Security Class	シナリオのデータにアクセスできるユーザーを定義するセキュリティ・クラスの名前(最大 80 文字) このプロパティに値を入力するには、シナリオ次元およびセキュリティ・クラス次元を関連付ける必要があります。	SecurityClass
User Defined 1、User Defined 2、User Defined 3	シナリオのカスタム情報(最大 80 文字) User Defined 1、User Defined 2、User Defined 3 の関数は、このプロパティに保管されたテキストを取得します。	UserDefined1 UserDefined2 UserDefined3

プロパティ・ラベル	値の説明	プロパティ名
Uses Line Items	<p>シナリオにライン・アイテムを含めることができるかどうかを指定します。シナリオがライン・アイテムを受け入れることができる場合はY、シナリオがライン・アイテムを受け入れることができない場合はNを指定します。</p> <p>注： ライン・アイテムの詳細を入力した後でこのプロパティを変更すると、保管されているライン・アイテムの詳細が、そのシナリオに対して有効ではなくなる場合があります。次のような状態になります：</p> <ul style="list-style-type: none"> ライン・アイテムを受け入れていたシナリオを、ライン・アイテムを受け入れないように変更すると、データベースに保管されたライン・アイテムの詳細が無効になります。合計のみが表示されます。 ライン・アイテムを受け入れていなかったシナリオを、ライン・アイテムを受け入れるように変更すると、そのシナリオの合計量の情報だけが存在し、対応するライン・アイテムの詳細情報は存在しません。合計を抽出してから、それをライン・アイテムの詳細データとしてロードし、合計をライン・アイテムの詳細情報に一致させられます。 	UsesLineItems
Zero View For Adjustments	その期間で不足している調整済データ値を解釈する方法を指定します。このプロパティの値は必須です。YTD または 期別を指定します。	ZeroViewForAdj
Zero View For Non-adjustments	その期間で不足している未調整データ値を解釈する方法を指定します。このプロパティの値は必須です。YTD または 期別を指定します。	ZeroViewForNonAdj

アプリケーション

アプリケーション・プロパティは、従来の Financial Management メタデータ・ファイルのアプリケーション設定セクションと同じです。アプリケーション・プロパティは Financial Management アプリケーション全体に適用され、アプリケーションの次の情報を決定します。

- 組織が動的かどうか、期間別組織を使用するかどうか?
- どの次元にセキュリティを設定するか?
- どのデフォルトの換算レートを使用するか?
- ICP 加重はどの程度か?
- 連結ルールを適用するかどうか?
- デフォルト通貨は何か?

表 32 アプリケーション・プロパティ

プロパティ・ラベル	値の説明	プロパティ名
Consolidation Rules	<p>アプリケーションで連結ルールがサポートされるかどうかを指定します。次のいずれかの値を指定します:</p> <ul style="list-style-type: none"> ● Y: ユーザー定義ルールの Consolidate() ルーチンに記述されているルールを使用します ● R: 値次元の比例値を算出します。比例値は保管されないので注意してください。 ● N: デフォルトの連結および消去を使用します <p>デフォルト値: N</p>	ConsolidationRules
Default Currency	<p>アプリケーションのデフォルト通貨を指定します。</p> <p>このプロパティの値は必須です。</p>	DefaultCurrency
Default Rate For Balance Accounts	<p>ASSET または LIABILITY 勘定科目で使用する換算レートを含む勘定科目を指定します。</p> <p>このプロパティの値は必須です。</p>	DefaultRateForBalanceAccounts
Default Rate For Flow Accounts	<p>REVENUE または EXPENSE 勘定科目で使用する換算レートを含む勘定科目を指定します。</p> <p>このプロパティの値は必須です。</p>	DefaultRateForFlowAccount
Default Value For Active	<p>アプリケーション内のエンティティがデフォルトでアクティブか、デフォルトで非アクティブかを指定します。非アクティブのエンティティはその親に集計されません。</p> <p>このプロパティの値は必須です。</p> <p>非アクティブの場合は 0、アクティブの場合は 1 を指定します。</p>	DefaultValueForActive

プロパティ・ラベル	値の説明	プロパティ名
Enable Metadata Security Filtering	<p>アプリケーションのユーザーがすべての次元のメンバーを参照するか、アクセス権のあるメンバーだけを参照するかを指定します。システムは次の次元をフィルタできます:</p> <ul style="list-style-type: none"> ● シナリオ ● エンティティ ● 内部取引パートナ(ICP) ● 勘定科目 ● カスタム <p>ユーザーがアクセス権を持つ次元メンバーだけを表示するにはYを、アプリケーション内のすべての次元を表示するにはNを指定します。</p> <p>デフォルト値はNです。</p>	EnableMetadataSecurityFiltering
ICP Entities Aggregation Weight	<p>ICP次元の[ICP Top]メンバーに集約される、内部取引パートナ・エンティティの[ICP Entities]の比率を指定します。</p> <p>百分率の値を、小数(1.0が100パーセント)で表します。値は正または負にすることができます。</p> <p>このプロパティの値は必須です。</p> <p>デフォルト値: 1</p>	ICPEntitiesAggregationWeight
Maximum Cell Text Size	<p>セル・テキストで使用できる最大文字数を指定します。</p> <p>有効な値は、制限なしを示す-1または2,147,483,647までの正数です。</p> <p>デフォルト値: 1900</p>	MaxCellTextSize
Maximum Document Attachment Size	<p>添付文書の最大サイズをバイト単位で指定します。</p> <p>有効な値は、制限なしを示す-1または2,147,483,647までの正数です。</p>	MaxDocAttachmentSize
Maximum Number of Document Attachments	<p>各ユーザーが添付できる文書の最大数を指定します。</p> <p>有効な値は、制限なしを示す-1または2,147,483,647までの正数です。</p>	MaxNumDocAttachments

プロパティ・ラベル	値の説明	プロパティ名
Node Security	<p>ノードのセキュリティ・アクセス権のタイプを指定します。</p> <p>有効な値は親かエンティティです。</p> <p>エンティティのセキュリティ・アクセス権に基づいてノードのデータをチェックする場合はエンティティ、親のセキュリティ・アクセス権に基づいてノードのデータをチェックする場合は親を指定します。</p> <p>このプロパティの値は必須です。</p>	NodeSecurity
Org By Period Application	<p>以前の連結構造と新しい連結構造をアプリケーションで共存させることができるかどうかを指定します。</p> <p>次のいずれかの値を指定します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ● Y: アプリケーションで新旧の組織構造を許可します ● N: アクティブな組織構造のみを許可します 	OrgByPeriodApplication
Security For Accounts	<p>アプリケーションの勘定科目にセキュリティを設定するかどうかを指定します。</p> <p>アプリケーションの勘定科目にセキュリティを設定する場合はY、設定しない場合はNを指定します。</p>	SecurityForAccounts
Security For <DimensionAliasName>	<p>アプリケーションのカスタム次元をセキュリティで保護するかどうかを指定します。アプリケーションのカスタム次元にセキュリティを設定する場合はY、設定しない場合はNを指定します。</p>	SecurityFor<DimensionAliasName>
Security For Entities	<p>アプリケーションのエンティティにセキュリティを設定するかどうかを指定します。アプリケーションのエンティティにセキュリティを設定する場合はY、設定しない場合はNを指定します。</p>	SecurityForEntities
Security For ICP	<p>アプリケーションのICPメンバーにセキュリティを設定するかどうかを指定します。アプリケーションのICPメンバーにセキュリティを設定する場合はY、設定しない場合はNを指定します。</p>	SecurityForICP
Security For Scenarios	<p>アプリケーションのシナリオにセキュリティを設定するかどうかを指定します。アプリケーションのシナリオにセキュリティを設定する場合はY、設定しない場合はNを指定します。</p>	SecurityForScenarios

プロパティ・ラベル	値の説明	プロパティ名
Support Submission Phase for Account	アプリケーション内の勘定科目で、プロセス管理のフェーズ化された送信がサポートされるかどうかを指定します。 有効な値は TRUE または FALSE です。 デフォルト値: FALSE	SupportSubmissionPhaseForAccount
Support Submission Phase for <DimensionAliasName>	アプリケーション内のカスタム・メンバーで、プロセス管理のフェーズ化された送信がサポートされるかどうかを指定します。 有効な値は TRUE または FALSE です。 デフォルト値: FALSE	SupportSubmissionPhaseFor<DimensionAliasName>
Support Submission Phase for ICP	アプリケーション内の ICP メンバーで、プロセス管理のフェーズ化された送信がサポートされるかどうかを指定します。 有効な値は TRUE または FALSE です。 デフォルト値: FALSE	SupportSubmissionPhaseForICP
Use PVA For Balance Accounts	BALANCE 勘定のデフォルトの換算メソッドを指定します。 次のいずれかの値を指定します: ● Y: 期別値(PVA)換算メソッドを使用します ● N: 為替レート値(VAL)換算メソッドを使用します	UsePVAForBalanceAccounts
Use PVA For Flow Accounts	FLOW 勘定科目のデフォルトの換算メソッドを指定します。 次のいずれかの値を指定します: ● Y: 期別値(PVA)換算メソッドを使用します ● N: 為替レート値(VAL)換算メソッドを使用します	UsePVAForFlowAccounts
Use Submission Phase	プロセス管理のフェーズ提出をアプリケーションで使用するかどうかを指定します。 有効な値は Y または N です。デフォルトは N です。	UseSubmissionPhase
Validation Account	検証に使用する勘定科目の名前を指定します。検証に使用する勘定科目は、既存の勘定科目で、カスタム次元の [ICPTop] との有効な交差部分が必要です。	ValidationAccount

プロパティ・ラベル	値の説明	プロパティ名
Validation Account 2-9	検証勘定科目は、プロセス単位を次の確認レベルに上げる前に、値がゼロに等しいことを確認するために使用されます。 たとえば、Validation Account3 には送信フェーズ 4 のための有効な勘定科目が必要です。	ValidationAccount2-9
FDM Application Name	FDM アプリケーションの名前です。	FdmAppName

期間別組織

組織構造は、買収、売却、合併および再編成など、様々な理由で変更されます。期間別組織機能によって、同じアプリケーション内での最新の連結構造を使用可能にして過去の構造と共存させられます。

組織変更をサポートするために、Financial Management はアクティブ・システム勘定科目を使用して、子のアクティブまたは非アクティブ集計ステータスを親に反映します。アクティブ勘定科目は、親レベルでデータを保管し、ICP 次元を使用して子に関する情報を保管する内部取引勘定科目です。この勘定科目は、エンティティ階層のフィルタとして機能します。

親の子に対応する ICP メンバーでは、アクティブ勘定科目は、子が現在の年、シナリオおよび期間のアクティブ連結メンバーとみなされるべきかどうかをシステムに指定します。アクティブ勘定科目が 0 の ICP メンバーに対応する子は、非アクティブな子とみなされ、連結されません。アクティブ勘定科目が 1 の ICP メンバーに対応する子は、アクティブな子とみなされ、連結されます。アクティブ勘定科目の値は表示または変更できます。アクティブな子データに対する変更は親に影響を与え、非アクティブな子への変更は親に影響を与えません。

アクティブ・プロパティのデフォルト値で、アクティブ勘定科目が空である子のステータスが制御されるため、親と子の交差ごとにアクティブか非アクティブかを指定する必要はありません。デフォルトでは、すべての子エンティティは特に指定がないかぎり親に対してアクティブです。

連結メソッド

表 33 連結メソッドのプロパティ

プロパティ・ラベル	値の説明	プロパティ名
Alias	メンバーの説明(最大 80 文字) Alias プロパティを使用するには、別名次元を作成し、プロパティを定義して、その別名次元を別の次元に関連付けます。たとえば、別名次元を英語、フランス語およびイタリア語の値で作成し、その別名次元を連結メソッド次元に関連付けられます。	Alias

プロパティ・ラベル	値の説明	プロパティ名
Control	<p>計算ルーチンで使用されるコントロールのタイプに対応するしきい値を指定します。このプロパティには、次のいずれかの値を指定します:</p> <ul style="list-style-type: none"> ● Blank ● No ● Limited ● Full 	Control
Is Holding Method	<p>連結メソッドを持株会社に使用するかどうかを指定します。</p> <p>このメソッドを持株会社に使用する場合はY、持株会社には別のメソッドを使用する場合はNを指定します。</p>	IsHoldingMethod
Name	<p>連結メソッドの名前(必須)</p> <p>名前は、スペースを含めて最大 80 文字を指定できます。スペースで開始したり、次の文字を含めることはできません:</p> <ul style="list-style-type: none"> ● アンパサンド(&) ● アスタリスク(*) ● アット・マーク(@) ● カンマ(,) ● 中かっこ({}) ● 二重引用符(") ● マイナス符号(-) ● シャープ(#) ● ピリオド(.) ● プラス符号(+) ● セミicolon(;) ● スラッシュ(/) 	Name
Percent Consol	<p>出資比率計算ルーチンに適用する連結比率を指定します。</p> <p>次のいずれかの値を指定します:</p> <ul style="list-style-type: none"> ● POWN ● POWNMIN ● PERCENTAGE <p>注: 値として PERCENTAGE を選択する場合、Percent Consol Value プロパティに値を入力する必要があります。</p>	PercentConsol
Percent Consol Value	<p>出資比率計算ルーチンに適用する連結比率値を指定します。</p> <p>注: このプロパティは、Percent Consol プロパティの値が PERCENTAGE の場合のみ、システムによって使用されます。</p> <p>1 から 100 の値を指定します。</p>	PercentConsolValue
To Percent Control	<p>支配比率の範囲の上限を指定します。出資比率計算ルーチンで使用されません。</p> <p>0 から 100 の値を指定します。</p> <p>注: メソッドのレコードの 1 つで、100 に指定する必要があります。</p>	ToPercentControl

プロパティ・ラベル	値の説明	プロパティ名
To Percent Control Compare	支配比率の上限の境界が範囲に含まれるかどうかを指定します。出資比率計算ルーチンおよび To Percent Control プロパティで使用されます。このプロパティは、Used By Calc Routine プロパティが N の場合はオプションです。 このプロパティには<または<=を指定します。	ToPercentControlComp
Used By Calc Routine	このメソッドを自動出資比率計算ルーチンで使用するかどうかを指定します。 このメソッドを出資比率の計算に使用する場合はY、使用しない場合はNを指定します。	UsedByCalcRoutine

連結メソッドの使用方法

連結メソッドは、連結および出資比率の計算プロセスで使用されます。

メタデータで連結メソッドを定義すると、システムは、カスタム 1 次元の [ConsolMethod] システム・リストを自動的に生成します。システム・リストは、メタデータの連結メソッドのセクションで定義されるすべてのメソッドで構成されます。

連結する際に、連結メソッドを使用するエンティティに割り当てる方法は 2 つあります。データ・ロードまたはデータ入力を使用してメソッドを手動で割り当てることができます。また、エンティティに割り当てられた最終的な支配比率に基づいた出資比率の計算ルーチンを使用して、メソッドを割り当てることもできます。

手動での連結メソッドの割当て

連結メソッドの情報を手動で入力するには、次の情報のあるデータ・グリッドを作成します:

POV: シナリオ、年、期限、ビュー、エンティティ、値、勘定科目、C2、C3、C4

シナリオ: 適用可能なシナリオ

年: 適用可能な年

期間: 適用可能な期間

エンティティ: 親エンティティ

値: [該当なし]

勘定科目: [Method] という名前の、システム生成の勘定科目

C2 [なし]

C3: [なし]

C4: [なし]

行: ICP エンティティ(親エンティティの場合は、[ICP Entities] システム・リストを使用するか、選択した ICP エンティティのユーザー定義リストを使用できます。)

列: カスタム 1([ConsolMethods]システム生成リストを使用する必要があります。)

メソッド割当て情報は、親エンティティのデータ・ファイルの勘定科目メソッドに保管されます。各親の子では、連結メソッドの割当てがシステムによって ICP 次元に保管されます。割り当てられたメソッドは、子が親に連結されるときに使用されます。

グリッドの交差では、ICP エンティティへのメソッドの割当てを示すために 1 を使用します。たとえば、親グループに 2 つの子、A および B があり、A にグローバル・メソッド、B に資本メソッドを割り当ててる場合、グローバル・メソッドとエンティティ A の交差に 1 を入力し、資本メソッドとエンティティ B の交差に 1 を入力します。

通貨

表 34 通貨次元でのメンバーのプロパティ

プロパティ・ラベル	値の説明	プロパティ名
Alias	メンバーの説明(最大 80 文字) Alias プロパティを使用するには、別名次元を作成し、プロパティを定義して、その別名次元を別の次元に関連付けます。たとえば、別名次元を英語、フランス語およびイタリア語の値で作成し、その別名次元を通貨次元に関連付けられます。	Alias
Display In ICT	内部取引モジュールのドロップダウン・リストに通貨を表示するかどうかを指定します。 通貨を表示する場合は Y、表示しない場合は N を指定します。	DisplayInICT
Name	通貨の名前(必須) 名前は、スペースを含めて最大 80 文字を指定できます。スペースで開始したり、次の文字を含めることはできません: <ul style="list-style-type: none"> ● アンパサンド(&) ● アスタリスク(*) ● アット・マーク(@) ● カンマ(,) ● 中かっこ({}) ● 二重引用符(") ● マイナス符号(-) ● シャープ(#) ● ピリオド(.) ● プラス符号(+) ● セミコロン(;) ● スラッシュ(/) 	Name

プロパティ・ラベル	値の説明	プロパティ名
Scale	<p>小数点の位置を指定して、金額を表示および保管するときの位取りを設定します。</p> <p>このプロパティの値は必須です。</p> <p>為替レートの入力方法を決定します。このプロパティには、次のいずれかの値を指定します:</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 空白 = なし ● 0 = 1 ● 1 = 10 ● 2 = 100 ● 3 = 1000 ● 4 = 1 万 ● 5 = 10 万 ● 6 = 100 万 ● 7 = 1 千万 ● 8 = 1 億 ● 9 = 10 億 	Scale
Translation Operator	<p>内部取引の換算を指定します。</p> <p>デフォルトは空白です。</p> <p>次のいずれかの値を指定します:</p> <ul style="list-style-type: none"> ● D: 取引通貨をレートで除算して現地通貨を算出します。 ● M: 取引通貨をレートで乗算して現地通貨を算出します。 ● <blank>: デフォルトで D が使用されます。 	TranslationOperator

カスタム 1 およびカスタム 2 次元では、システム・メンバー・リスト [Currencies] が使用できます。アプリケーションに追加する通貨は、[Currencies] メンバー・リストに追加されます。[Currencies] リストにより、通貨のペアに対する通貨換算レートのエントリが使用可能になり、非通貨メンバーをフィルタ処理する方法が提供されます。

システム生成の勘定科目

アプリケーションを作成すると、そのアプリケーションの連結および出資比率のシステム勘定科目が自動的に作成されます。

注: システム勘定科目で変更できるのは、説明、セキュリティ・クラスおよび小数点の位置のみです。システム勘定科目のその他のプロパティは定義済で変更できません。

連結勘定

次のシステム勘定科目は、勘定科目次元の各親に必要で、連結プロセスで使用されます。

注： 連結に使用されるシステム勘定科目は、アクティブ勘定科目を除き、すべて残高勘定です。アクティブ勘定科目は、経常残高勘定です。

表 35 連結のシステム勘定科目

システム勘定科目	値の説明
アクティブ	親に対する子の連結ステータス。子が親に連結される場合は Yes。子が親に連結されない場合は No。
[PCON]	連結比率。エンティティの親に連結されるエンティティの値の割合。0 を含む-100 から 100 までの正数または負数。デフォルト値は 100 です。 注： 後続の期間については、0 が導出されます。したがって、すべての後続の期間に比率を入力する必要があります。
[POWN]	他のエンティティに所有されているエンティティの共有に基づいて計算された出資比率。0 から 100 までの正数。デフォルト値は 100 です。
[DOWN]	直接出資比率。0 から 100 までの正数。デフォルト値は 100 です。
[PCTRL]	他のエンティティに所有されている議決権株式に基づいて計算された支配比率。0 から 100 までの正数。デフォルト値は 100 です。
メソッド	エンティティに割り当てる連結メソッド。<該当なし>、または使用可能なメソッドのリストから選択したものを指定します。
Consol1、 Consol2、 Consol3	連結メソッド。0 から 255 の間の数値です。

出資比率勘定科目

出資比率の計算には、次のシステム勘定科目が使用されます。

注： 出資比率の計算に使用されるシステム勘定科目は、すべて BALANCE 勘定です。

表 36 出資比率のシステム勘定科目

システム勘定科目	値の説明
SharesOwned	所有株式の総数。正数または 0。デフォルトは 0 です。 注： 所有株式の総数は、未払株の総数以下であることが必要です。
VotingOwned	所有議決権株の数。正数または 0。デフォルト値は 0。 注： 所有議決権株の総数は、未払議決権株の総数以下であることが必要です。

システム勘定科目	値の説明
SharesOutstanding	発行済株式の総数、または発行済株式の割合。正数または0。デフォルト値は0。 注： 発行済株式の数または比率を入力します。割合の場合は100を入力します。
VotingOutstanding	発行済議決権株の数。正数または0。デフォルト値は0。 注： 発行済議決権株の数または割合を入力します。割合の場合は100を入力します。
Shares%Owned	システムによって計算されます。
Voting%Owned	システムによって計算されます。

内部取引パートナーの設定

内部取引は、内部取引パートナー(ICP)次元全体で管理されます。ICP次元には、1つの勘定科目に対して存在するすべての内部取引残高が格納されます。ICPは、内部取引の詳細を追跡および消去するために、勘定科目次元およびカスタム次元を組み合わせて使用する予約済の次元です。

内部取引用にアプリケーションを設定するには、次のアクションを行う必要があります。

- 内部取引が実行される勘定科目と、各内部取引勘定科目(勘定科目メタデータの Is ICP プロパティおよび Plug Account プロパティ)の調整勘定科目を示します。
- 内部取引を実行するエンティティを示します(エンティティ・メタデータの Is ICP プロパティ)。

内部取引を作成する場合、各グループに少なくとも1つの内部取引勘定科目および調整勘定科目が必要です。勘定科目に Is ICP プロパティを選択することで、その勘定科目を内部取引勘定科目に指定します。勘定科目が内部取引と指定され、内部取引が入力されると、連結プロセスにより [Elimination] 値次元メンバーに消去または反転するエントリが生成されます。

調整勘定科目は、消去の完了時に2つの内部取引勘定科目の間の差分を保管します。調整勘定科目は、ICP 勘定科目として設定できます。調整勘定科目を ICP によって詳細化するには、Is ICP プロパティを Y または R に設定し、システムが消去した内容を対応する ICP メンバーに書き込むようにします。調整勘定科目を ICP によって詳細化しない場合は、Is ICP プロパティを N に設定して、システムが消去内容を [ICP 該当なし] に書き込むようにします。連結の間に、有効な内部取引エンティティの間のトランザクションは消去されます。

表 37 システム生成の ICP 要素

システム生成の ICP 要素	値の説明
[ICP Top]	最上位内部取引メンバーを指定します。
[ICP None]	内部取引メンバーが使用されないことを指定します。
[ICP Entities]	内部取引が発生するエンティティを示します。

表 38 ICP プロパティ

プロパティ・ラベル	値の説明	プロパティ名
Alias	メンバーの説明(最大 80 文字) Alias プロパティを使用するには、別名次元を作成し、プロパティを定義して、その別名次元を別の次元に関連付けます。たとえば、別名次元を英語、フランス語およびイタリア語の値で作成し、その別名次元を ICP 次元に関連付けられます。	Alias
Default Parent	ICP のデフォルトの親。デフォルトの親の値は派生値であり、値の入力はできません。	DefaultParent
Name	ICP の名前(必須) 名前が定義され、変更できません。	Name
Security Class	ICP データにアクセスできるユーザーを定義するセキュリティ・クラスの名前(最大 80 文字) このプロパティに値を入力するには、ICP およびセキュリティ・クラス次元を関連付ける必要があります。	SecurityClass
Submission Group	送信グループ(0 から 99)。 デフォルトの空白は、1 に設定されます。送信グループがゼロ(0)に設定される場合、ICP は確認プロセスに含まれません。	SubmissionGroup

システム生成の値メンバーの編集

アプリケーションを作成すると、そのアプリケーションの値メンバーが自動的に作成されます。

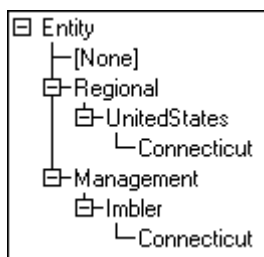
注： 値メンバーの説明のみを変更できます。その他のすべてのプロパティは定義済で変更できません。

メタデータをロードすると、Financial Management はアプリケーション内の各通貨について、CurrencyName、CurrencyName Adjs および CurrencyName Total の 3 つの値次元メンバーを自動的に作成します。ここで、CurrencyName は通貨ラベルです。たとえば、通貨が USD の場合、Financial Management は値次元メンバーとして USD、USD Adjs および USD Total を作成します。

セキュリティに基づくメタデータのフィルタ

セキュリティに基づいてメタデータをフィルタする場合、ユーザーは、アクセス権を持つシナリオ、エンティティ、ICP、勘定科目およびカスタムの各次元の要素のみを参照します。メタデータのフィルタ処理は、EnableMetadataSecurityFiltering プロパティに Y を指定してアプリケーション・レベルで設定します。ユーザーが階層で表示できる要素については、セキュリティ・クラスを割り当て、セキュリティ・クラスに対するユーザー・メタデータ・アクセスを割り当てます。

ユーザーは、アクセス権を持つメンバーの親および祖先に暗黙的なアクセス権があります。暗黙的なアクセスでは、階層ツリー構造内の祖先および親を参照できますが、それらにアクセスできません。たとえば、次のツリー構造で、ツリーには親(UnitedStates および Imbler)および祖先(Management および Regional)が表示されていますが、ユーザーは Connecticut にのみアクセスできます。



メタデータの参照整合性

Financial Management では、アプリケーションで参照整合性の問題が発生しないように、メタデータを変更する前に、変更がアプリケーションの現在の状態で有効かどうかを確認されます。

メタデータをロードする場合、システムはメタデータ・ロード・ファイルをアプリケーション内のメタデータ要素と比較します。すべての変更は記録され、一部の変更は既存のデータに対して確認されます。参照整合性の問題を引き起こす変更は行えません。

注： メタデータをロードするときは、必ず「整合性の確認」オプションを選択してください。

参照整合性に影響を与えるメタデータ・プロパティの変更

次の表は、ロードするメタデータ・ファイルに対してシステムが既存のデータをチェックする必要がある、メタデータ・プロパティでの特定の変更について示しています。参照整合性に影響を与えるメタデータ・プロパティのみが表にリストされています。

表 39 メタデータの参照整合性チェック

次元	メタデータ・プロパティの変更	メタデータをロードできない場合の条件
勘定科目	Is Calculated (N から Y)	勘定科目に仕訳またはテンプレートが存在するかどうかチェックされます。存在する場合は、メタデータはロードされません。
	Is ICP (Y から R)	勘定科目および ICP=<エンティティ>に仕訳またはテンプレートが存在するかどうかチェックされます。存在する場合は、メタデータはロードされません。
	Is ICP (Y から N または R から N)	勘定科目および ICP <> [ICP None]に仕訳またはテンプレートが存在するかどうかチェックされます(勘定科目は内部取引勘定科目でなく、[ICP None]以外の ICP メンバーが無効なため)。存在する場合は、メタデータはロードされません。

次元	メタデータ・プロパティの変更	メタデータをロードできない場合の条件
	Uses Line Items (Y から N または N から Y)	シナリオおよび勘定科目に標準のデータが存在するかどうかチェックされます。存在する場合は、メタデータはロードされません。 注： Y から N の場合は、ライン・アイテムの詳細へのアクセスは許可されません。
カスタム	Is Calculated (N から Y)	このカスタム次元に仕訳またはテンプレートが存在するかどうかチェックされます。存在する場合は、メタデータはロードされません。
エンティティ	Currency	<Entity Currency Adjs>または<Parent Currency Adjs>に仕訳が存在するかどうかチェックされます。存在する場合は、メタデータはロードされません。
	Allow Adjustments (Y から N)	Allow Adjustments の場合は、エンティティに<Entity Curr Adjs>または<Parent Currency Adjs>の仕訳が存在するかどうかチェックされます。存在する場合は、メタデータはロードされません。
	Allow Adjustments From Children (Y から N)	Allow Adjustments From Children の場合は、エンティティに[Parent Adjs]または[Contribution Adjs]の仕訳が存在するかどうかチェックされます。存在する場合は、メタデータはロードされません。
	Is ICP (Y から N)	ICP 次元で使用されるエンティティが仕訳内にあるかどうかチェックされます。存在する場合は、メタデータはロードされません。
シナリオ	Zero View For Adjustments	シナリオに仕訳が存在するかどうかチェックされます。存在する場合は、メタデータはロードされません。
	Uses Line Items	指定されたシナリオに対してこのプロパティが有効と設定された勘定科目に標準データが存在するかどうかチェックされます。存在する場合は、メタデータはロードされません。
アプリケーション	Default Value For Active	[Parent Adjs]または[Contribution Adjs]に仕訳または反復テンプレートが存在するかどうかチェックされます。存在する場合は、メタデータはロードされません。

システムは、アプリケーション内のロード・ファイルおよびメタデータの間は無効な視点もチェックします。次元メンバーがロード・ファイルに存在しないがアプリケーションの仕訳に存在する場合、メタデータはロードされません。

メタデータ・ログ・ファイルの参照整合性エラー

参照整合性エラーは、メタデータのログ・ファイルの、次の項に表示されます:

```
Metadata referential integrity check started at
```

参照整合性の確認セクションの各行は、ロード・ファイル内のメタデータ整合性エラーを示します。整合性のチェック中に検出されたエラーは次のフォーマットで表示されます:

```
Journals::SINGLECA1 Scenario::Actual Year::2012
Value::[Contribution Adjs]
Period::January has 1 occurrences of
Changed::[SCENARIO::Actual::ZeroViewForAdj: Periodic -> YTD]
```

この例は、メタデータ整合性エラーが、Scenario Actual、Year 2012、Value [Contribution Adjs]、Period January の視点を持つ SINGLECA1 仕訳で発生したことを示しています。エラーは、Actual シナリオの ZeroViewForAdj プロパティが Periodic から YTD に変更されたことを示しています。仕訳は Actual シナリオのため存在するので、この変更はできません。

次元の名前付けの制限

連結次元に名前を付けるときは、次のルールに従う必要があります：

- 名前に使用できる文字数は最大 80 文字です。
- 名前を、アンダースコア、空白文字または英数字以外の文字で始められません。2 番目以降の文字には、空白文字、英数字以外の文字およびアンダースコアを含む英数字を使用できます。
- 次元名に次の語を含めないでください

ALL AND ASSIGN AVERAGE CALC CALCMBR	GENRANGE GROUP GT ID IDERROR	OR PAREN PARENPARM PERCENT PLUS
COPYFORWARD CROSSDIM CURMBRNAME	INTEGER LE LEVELRANGE LOOPBLOCK	RELOP SET SKIPBOTH SKIPMISSING
DIM DIMNAME DIV DYNAMIC EMPTYPARM	LOOPPARMS LT MBR MBRNAME	SKIPNONE SKIPZERO TO TOLOCALRATE
EQ EQOP EXCEPT EXP EXPERROR FLOAT	MBRONLY MINUS MISSING MUL	TRAILMISSING TRAILSUM UMINUS UPPER
FUNCTION GE GEN	MULOP NE NON NONINPUT NOT	VARORXMBR XMBRONLY \$\$UNIVERSE\$\$
		#MISSING #MI

9.3.1 で作成された連結フラット・ファイルの使用方法

以前のリリースで作成された .ads フラット・ファイルを使用する場合、現在のリリースで使用する前に手動で更新する必要があります。フラット・ファイルで次の更新を行います：

- .ads ファイルのシナリオ次元に、PhasedSubStartYear を追加する必要があります。
- .ads ファイルから DefaultParent を除去する必要があります。

Financial Management 9.3.1 および Performance Management Architect の操作

Financial Management 9.3.1 を、現在のリリースの Performance Management Architect で使用する場合、このリリースで使用可能なすべての機能を使用できます。Performance Management Architect、Oracle Enterprise Performance Management Workspace および Shared Services をアップグレードする標準プロセスに従います。その他の手順は必要ありません。

この章の内容

すべての Planning 次元に適用できるプロパティ	364
複数の Planning 次元に共通するプロパティ	367
勘定科目	370
通貨	374
エンティティ	376
期間	377
シナリオ	378
バージョン	380
年	381
カスタム次元	382
Planning の別名	382
Planning の属性	383
Planning 9.3.1 および Performance Management Architect の操作	383
Public Sector Planning and Budgeting のコンテンツの操作に関する考慮事項	383
Essbase での作業の考慮事項	384
アプリケーションの命名の制限(Essbase)	385
次元、メンバーおよび別名の名前付けの制限	386
Planning のフラット・ファイルの操作	387

すべての Planning 次元に適用できるプロパティ

プロパティ・レベル	説明	プロパティ名
Plan Name	<p>最大 8 文字。</p> <p>(様々なアプリケーションで)Planning で使用可能なプラン・タイプには、プラン 1、プラン 2、プラン 3、Workforce、Capital Asset および HCP の 6 つがあります。ただし、特定のアプリケーションのプラン・タイプの総数は、5 個以下にする必要があります。</p> <p>プラン 1、プラン 2 およびプラン 3 は、すべての Planning アプリケーションで使用可能な標準プラン・タイプです。</p> <p>標準 Planning アプリケーションでは、Workforce および Capital Asset という追加のモジュールを使用できます。</p> <p>Public Sector Planning and Budgeting アプリケーションでは、HCP という 1 つのモジュールのみ使用できます。</p> <p>注： Public Sector Planning and Budgeting では、Workforce Planning または Capital Asset Planning はサポートされないため、これらのモジュールを使用する場合は、別々のアプリケーションとして設定します。</p> <p>Workforce Planning および Capital Asset Planning については、『Oracle Hyperion Workforce Planning, Fusion Edition 管理者ガイド』および『Oracle Hyperion Capital Asset Planning, Fusion Edition 管理者ガイド』を参照してください。Public Sector Planning and Budgeting については、『Oracle Hyperion Public Sector Planning and Budgeting ユーザー・ガイド』を参照してください。</p> <p>デフォルト値: プラン 1: TRUE、プラン 2: TRUE、プラン 3: TRUE、Wrkforce: FALSE、Capital Asset: FALSE、HCP: FALSE</p>	Plan1Name、Plan2Name、Plan3Name、PlanWrkforceName、PlanCapexName、PlanHCPName

プロパティ・レベル	説明	プロパティ名
Valid For Plan	<p>標準的な Planning アプリケーションでは、3 個までのプラン・タイプを指定できます。</p> <p>Workforce Planning and Capital Asset Planning については、『Oracle Hyperion Workforce Planning 管理者ガイド』および『Oracle Hyperion Capital Asset Planning 管理者ガイド』を参照してください。</p> <p>Essbase データベースは、各プラン・タイプに対して作成されます。勘定科目、エンティティおよび他の次元を作成するとき、それらをプラン・タイプと関連付けて、各プラン・タイプのデータベースにはそのプラン・タイプに対応する次元、メンバーおよびデータ値のみが含まれるようにします。これにより、最適なアプリケーション設計、サイズおよびパフォーマンスが実現されます。少なくとも1つのプラン・タイプを設定する必要があります。(プラン・タイプの数は組織での必要性に依存します。)アプリケーションを作成した後は、プラン・タイプの数を削減したり、プラン・タイプの名前を変更したりはできません。</p> <p>注意 アプリケーションにデータを入力した後で次元メンバーのプラン・タイプを選択解除すると、アプリケーションのリフレッシュ時にデータが失われる場合があります。勘定科目メンバーでは、選択解除されたプラン・タイプがソースのプラン・タイプの場合、データが失われます。</p> <p>プラン・タイプは親メンバーから子メンバーに継承されます。親メンバーに対して別のプラン・タイプを選択すると、階層内のすべての子孫メンバーも更新されます。特定のメンバーに異なるプラン・タイプを設定するには、それらを個別に選択して異なるプロパティを設定します。</p> <p>注： このプロパティの値を親レベルで定義すると、すべての子孫は自動的に値を継承します。元の親の子孫メンバーで値が上書きされると、その子孫は新しい値を継承します。</p> <p>このプロパティ値は関係値です。この値を変更した場合、他の階層のメンバーでは自動的に変更されません。</p> <p>デフォルト値: プラン 1: TRUE、プラン 2: TRUE、プラン 3: TRUE、Wrkforce: FALSE、Capital Asset: FALSE</p>	AppValidForPlan1、AppValidForPlan2、AppValidForPlan3、AppValidForWrkforce、AppValidForCapex
Date Format	<p>日付フォーマットを MM-DD-YYYY または DD-MM-YYYY に設定します。</p> <p>デフォルト値: MM-DD-YYYY</p>	DateFormat
Default Currency	<p>これは、アプリケーションおよびアプリケーション・エンティティのデフォルト通貨です。</p> <p>デフォルト値: 該当なし</p>	DefaultCurrency
Multiple Currencies	<p>アプリケーションが複数の通貨をサポートすることを示します。一度指定すると変更できません。通貨次元は必須です。複数通貨のサポートは、基本通貨に関係なく、レベル 0 のメンバーでのみ使用できます。</p> <p>Performance Management Architect は通貨次元を自動的に作成しません。HSP_Rates はマルチ通貨アプリケーションに対する Planning アプリケーションの作成時に作成されます。これは、Performance Management Architect では定義されません。HSP_Rates は、「パフォーマンス設定」ダイアログ・ボックスで使用し、Planning アプリケーションのパフォーマンスを調整します。</p> <p>デフォルト値: TRUE</p>	MultiCurrency

プロパティ・ラベル	説明	プロパティ名
Base Time Period	<p>カレンダーのロールアップ方法を設定するために、アプリケーションに最低レベルの期限を定義します。期間次元構造に対して次から適切な値を選択します:</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 12 か月(月は四半期にロールアップされ、四半期は年にロールアップされます) ● 四半期 ● カスタム(週や日など) <p>デフォルト値: 12 か月</p>	BaseTimePeriod
Weeks	<p>1 か月の会計週のパターンで、均等、445、454、または 544 を指定します。基本期間の中で要約期間にデータがどのように入力されるかを設定します。</p> <p>均等ではなく週パターンを選択した場合、Planning は、四半期の値をそれらが 13 週に分割されているかのように処理し、選択したパターンに従って週を分散します。</p> <p>週パターンは、基本期間オプションで 12 か月を選択した後にのみ使用できます。</p> <p>デフォルト値: 均等</p>	WeeksDistribution、WeeksDistributionMember
Fiscal Start Year	<p>アプリケーションの会計開始年。会計開始年は、2008 や 2009 のような 4 桁の年フォーマットを使用します。アプリケーションを作成した後は、この設定を変更しないでください。</p> <p>デフォルト値: 該当なし</p>	AppStartYear
Fiscal Year First Month	<p>基本期間が 12 か月に設定されたアプリケーションの会計年度開始月。他の基本期間タイプでは、このフィールドは関係ありません。アプリケーションを配置した後は、アプリケーションの「会計年度の最初の月」を変更しないでください。</p> <p>デフォルト値: 該当なし</p>	StartMonth
Default Alias Table	<p>各アプリケーションに必須。他の別名テーブルが作成されていない場合、別名はデフォルト・テーブル(削除できません)に保管されます。9 個までの追加の別名テーブルを作成できます。</p> <p>Performance Management Architect に別名テーブルを作成するには、別名タイプの次元を作成して、Default という名前の子メンバーを作成します。このメンバーは、Planning および Essbase で必要なデフォルトの別名テーブルです。別名次元に子メンバーを追加することで、追加の別名テーブルを作成できます。別名次元を勘定科目やエンティティなどのメインまたは基本次元や、ユーザー定義次元に関連付けるために、次元の関連付けを作成します。別名次元を選択して、システム・カテゴリのデフォルト・メンバー・プロパティを変更することで、デフォルトの別名テーブルを変更できます。</p> <p>デフォルト値: デフォルト</p>	DefaultAliasTable

複数の Planning 次元に共通するプロパティ

プロパティ・ラベル	説明	プロパティ名
Valid for Plan	<p>プラン 1、プラン 2、プラン 3、要員、資本資産、HCP(要因、資本資産および HCP プラン・タイプは別のモジュールに付属しています。『Oracle Hyperion Workforce Planning, Fusion Edition 管理者ガイド』、『Oracle Hyperion Capital Asset Planning, Fusion Edition 管理者ガイド』および『Oracle Hyperion Workforce Planning, Fusion Edition 管理者ガイド』を参照してください)。</p> <p>メンバーにプラン・タイプのアクセス権を割り当てます。メンバーにプラン・タイプを割り当てないと、その子がプラン・タイプにアクセスできません。カスタム次元では、プラン・タイプを選択解除すると、すべての次元メンバーが無効になります。</p> <p>メンバーを移動するとき、新しい親が別のプラン・タイプに対して有効な場合、メンバーは新しい親と共通のプラン・タイプに対してのみ有効です。</p> <p>このプロパティの値を親レベルで定義すると、すべての子孫は自動的に値を継承します。元の親の子孫メンバーで値が上書きされると、その子孫は新しい値を継承します。</p> <p>注： Public Sector Planning and Budgeting では、Workforce Planning または Capital Asset Planning はサポートされないため、これらのモジュールを使用する場合は、別々のアプリケーションとして設定します。</p>	AppValidForPlan1、AppValidForPlan2、AppValidForPlan3、AppValidForWrkforce、AppValidForCapex、AppValidForHCP

プロパティ・ラベル	説明	プロパティ名
Data Storage	<p>データをデータベースに保管する方法を決定し、パフォーマンスおよびディスク使用の最適化を使用可能にします:</p> <ul style="list-style-type: none"> ● StoreData: メンバーのデータ値を保管します。子メンバーに動的計算が設定されている場合、親メンバーを保管する設定にしないでください。ユーザーがデータ・フォームを保存およびリフレッシュしても、親に対する新しい合計が計算されません。 ● NeverShare: 親に集約する子メンバーを1つのみ持つ親メンバーで使用され、子メンバーにセキュリティを適用します。 ● DynamicCalc: 密次元のメンバーまたは多数のユーザーから同時にアクセスされるデータ値に使用します。多くの場合、疎次元のメンバーを計算するために使用されます。ユーザーがデータを入力する基本レベルのメンバーには使用しないでください。データ値は動的計算メンバーについては保存されません。データがターゲット・バージョンのメンバーに対して入力される場合、親メンバーには使用しないでください。動的計算に設定された親メンバーは、ターゲット・バージョンでは読み取り専用です。動的計算の親の場合、Essbase 制限による子の数は 100 個です。 <p>注意 メンバーのストレージを動的計算に変更すると、データの算出方法によってはデータが失われる可能性があります。アウトライン、計算、またはその両方を更新して、動的に計算された値を取得する必要があります。</p> <ul style="list-style-type: none"> ● DynamicCalcAndStore: メンバーのデータ値を計算し、その値を保管します。多くの場合、複雑な式で疎次元のメンバーやユーザーが頻繁に取得するメンバーを計算する際、「動的計算および保管」ではなく、「動的計算」を使用することで、計算を最適化し、ディスク使用を低減できます。 ● LabelOnly: データではなくデータベース・スペースの操作や最小化を支援する仮想メンバーに使用します。メンバーは値を表示できます。これは、為替レートを保管する場所なので、マルチ通貨アプリケーションでは、LabelOnly データ・ストレージをエンティティ、バージョン、通貨およびユーザー定義のカスタム次元の最上位メンバーに適用できません。レベル 0 のメンバーには使用しないでください。データ・フォームの場合、ラベルのみの親に最初の子メンバーを続けて使用しないでください。 ● ShareData: 同じ次元のメンバーによるデータ値の共有を許可し、アプリケーション内のロールアップ構造の変更を使用可能にします。共有メンバーの場合、データ・ストレージを共有データに設定する必要があります。設定しないと、アプリケーションが Planning に配置される際、共有メンバーが追加されません。 <p>このプロパティの値を親レベルで定義すると、すべての子孫は自動的に値を継承します。元の親の子孫メンバーで値が上書きされると、その子孫は新しい値を継承します。</p> <p>このプロパティ値は関係値です。この値を変更した場合、他の階層のメンバーでは自動的に変更されません。</p> <p>デフォルト値: NeverShare</p>	DataStorage
Two Pass Calculation	<p>親メンバーまたは他のメンバーのデータ値に基づいたメンバーのデータ値を再計算します。動的計算または動的計算および保管プロパティを持つ勘定科目およびエンティティ・メンバーで使用できます。</p> <p>デフォルト値: FALSE</p>	TwoPassCalc

プロパティ・ラベル	説明	プロパティ名
UDA	<p>メンバーに関連付けられた UDA(ユーザー定義属性)を定義します。1 つのメンバーに複数の UDA を入力するには、UDA メンバー間にカンマを配置します。UDA の詳細は、『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』を参照してください。</p> <p>デフォルトの UDA メンバーは HSP_NOLINK および HSP_UDF です。</p> <p>デフォルト値: 該当なし</p>	UDA
Member Formula	<p>演算子、計算関数、次元、メンバーの名前および個別メンバーの値を計算するための数値定数の組合せで作成されるアウトライン式。</p> <p>デフォルト値: 該当なし</p>	BSOMemberFormula
Alias	<p>別名または代替メンバー名を保管する別名テーブルを定義します。386 ページの「次元、メンバーおよび別名の名前付けの制限」で定義される命名規約を使用します。</p> <p>デフォルト値: 該当なし</p>	Alias
Aggregation	<p>プラン 1、プラン 2、プラン 3、Workforce、Capital Asset、HCP では、連結時に子を親にロールアップする方法を指定します:</p> <ul style="list-style-type: none"> ● + (加算) ● - (減算) ● * (乗算) ● / (除算) ● % (パーセント) ● ~ (連結では無視する) ● なし(階層に関係なく集約しない) <p>このプロパティの値を親レベルで定義すると、すべての子孫は自動的に値を継承します。元の親の子孫メンバーで値が上書きされると、その子孫は新しい値を継承します。</p> <p>このプロパティ値は関係値です。この値を変更した場合、他の階層のメンバーでは自動的に変更されません。</p> <p>デフォルト値: プラン 1: +、プラン 2: +、プラン 3: +、Wrkforce: ~、Capital Asset: ~、HCP: ~</p>	Plan1Aggregation、Plan2Aggregation、Plan3Aggregation、WrkforceAggregation、CapexAggregation、HCPAggregation
Data Type	<p>値を保管および表示する方法:</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 通貨 ● 通貨以外 ● パーセンテージ ● スマート・リスト ● 日付 ● テキスト ● 未指定 <p>勘定科目で、データ型が通貨以外に設定されている場合、為替レート・タイプを「なし」に設定する必要があります。</p> <p>デフォルト値: 未指定</p>	DataType

プロパティ・ラベル	説明	プロパティ名
Attribute Type	<p>タイプが、テキスト、ブール、日付、または数字の選択したメンバーと関連付ける属性値。Planning では、属性値は次元内の単一レベルにのみ割り当てられます。</p> <p>次元メンバーに割り当てられた属性の属性値を作成します。データ・フォームおよびレポートを作成する際、メンバーを属性値でフィルタできます。</p> <p>属性を疎次元のみに割り当てられます。属性をラベルのみのメンバーに割り当てることはできません。密次元に属性を追加する必要がある場合、すべてのプランのタイプで次元を疎に変更する必要があります。次元を疎から密に変更する場合、その次元のすべての属性および属性値は自動的に削除されます。</p> <p>属性メンバーを削除する際、関連付けられたすべての属性値も削除されます。値は割り当てられていたすべてのメンバーおよび次元から除去されます。</p> <p>デフォルト値: テキスト</p>	AttributeDataType
Smart List	<p>一意の名前。英数字およびアンダースコアを含み、特殊文字またはスペースは含みません。詳細は、スマート・リストの作成を参照してください。</p> <p>デフォルト値: 該当なし</p>	SmartList

勘定科目

勘定科目次元のメンバーは、表で説明されているプロパティだけでなく、[364 ページの「すべての Planning 次元に適用できるプロパティ」](#)で説明されている次のようなほとんどの一般的なプロパティを使用します:

- Valid for Plan
- Two Pass Calculation
- Aggregation
- UDA
- Member Formula
- Alias
- Data Storage
- Smart List
- Data Type

勘定科目には、予算プランナが必要とする情報を指定します。勘定科目の構造には、計算を定義できます。勘定科目の次元には、次元のメンバーに属性値および別名を割り当てるために、属性次元および別名次元に関連付ける必要があります。勘定科目が複数のプラン・タイプに対して有効な場合、ソース・プラン・タイプを指定して、勘定科目の値を保管するデータベースを決定します。動的計算プロパティまたは動的計算および保管プロパティの勘定科目では、2 パス計算を使用して、親メンバーまたはその他のメンバーのデータ値に基づいたメンバーのデータ値を再計算できます。

プロパティ・レベル	説明	プロパティ名
Time Balance	<p>なし、フロー、期首、残高、平均、入力、加重平均 - Actual Actual、加重平均 - Actual 365、期末から、要約期間の値の計算方法を設定します。</p> <p>デフォルト値: 該当なし</p>	TimeBalance
Skip Value	<p>タイム・バランスのプロパティが「期首」、「残高」、または「平均」の場合、親値を計算する際にデータベース計算がゼロ値および欠落した値を処理する方法を次の中から指定します:</p> <ul style="list-style-type: none"> ● なし: ゼロおよび#MISSING 値を考慮する ● 欠落: #MISSING 値を除外する ● ゼロ: ゼロ値を除外する ● 欠落およびゼロ: #MISSING 値およびゼロ値を除外する <p>このプロパティの値を親レベルで定義すると、すべての子孫は自動的に値を継承します。元の親の子孫メンバーで値が上書きされると、その子孫は新しい値を継承します。</p> <p>デフォルト値: なし</p>	SkipValue
Expense Reporting	<p>勘定科目を差異レポートの支出として扱うかどうかを設定します:</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 支出: 実績値が予算値から減算される ● 支出外: 予算値が実績値から減算される <p>このプロパティの値を親レベルで定義すると、すべての子孫は自動的に値を継承します。元の親の子孫メンバーで値が上書きされると、その子孫は新しい値を継承します。</p> <p>デフォルト値: 支出外</p>	VarianceReporting
Account Type	<p>勘定科目のタイム・バランス(時間経過による値のフロー)および差異レポートの署名の動作を定義します(支出、収入、資産、負債、資本および保存された仮定)。</p> <p>このプロパティの値を親レベルで定義すると、すべての子孫は自動的に値を継承します。元の親の子孫メンバーで値が上書きされると、その子孫は新しい値を継承します。</p> <p>デフォルト値: 新しいメンバーがルート・レベルに作成された場合は収益。それ以外の場合は、値を親から継承します。</p>	AccountType

プロパティ・レベル	説明	プロパティ名
Exchange Rate Type	<p>勘定科目メンバーに数値を格納し、値を計算する方法を設定します。この設定は、レポートの通貨値を計算するために使用する為替レートを決定します。通貨データ型の勘定科目では、次に示すオプションはどの期間にも有効です:</p> <ul style="list-style-type: none"> ● なし ● 平均: 平均為替レート ● 期末: 期末為替レート ● 履歴: ある時点に適用された為替レート <p>勘定科目のデータ型を「通貨」以外の値に設定した場合、為替レート・タイプは「なし」に設定する必要があります。</p> <p>このプロパティの値を親レベルで定義すると、すべての子孫は自動的に値を継承します。元の親の子孫メンバーで値が上書きされると、その子孫は新しい値を継承します。</p> <p>デフォルト値: 平均(データ型が「通貨」に設定されていない場合は「なし」)</p>	ExchangeRateType
Source Plan Type	<p>勘定科目を複数のプラン・タイプで使用する場合、プラン・タイプは勘定科目値を保管するデータベースになります。勘定科目メンバーを移動すると、有効なプラン・タイプはメンバーおよび新しい親に共通の内容によって決まります。新しい親に異なるソース・プラン・タイプがある場合、メンバーのソース・プラン・タイプは、そのメンバーの有効な最初の新規プラン・タイプに設定されます。</p> <p>このプロパティの値を親レベルで定義すると、すべての子孫は自動的に値を継承します。元の親の子孫メンバーで値が上書きされると、その子孫は新しい値を継承します。勘定科目メンバーの新しい親に別のソース・プラン・タイプがある場合、ソース・プラン・タイプはそのメンバーの有効な最初の新規プラン・タイプに設定されます。</p> <p>デフォルト値: プラン 1</p>	SourcePlanType

勘定科目の種別およびそれに依存するプロパティの有効な組合せ

勘定科目の種別	タイム・バランス	差異レポート	目的
収益	フロー	支出外	収益のソース
支出	フロー	支出	ビジネスの原価
資産	残高	支出外	企業リソース
負債および資本	残高	支出外	残余請求権または債権者への債務
保存された想定	ユーザー定義	ユーザー定義	アプリケーション全体の整合性を確保するための一元管理された Planning の仮定

タイムバランスプロパティの例

タイム・バランスおよび差異レポートの設定は、システムによって定義されます。

タイム・バランス・プロパティ	説明	例
フロー	期間合計としての要約期間の値の集約。	1月=10、2月=15、3月=20、Q1=45
期首	期間合計としての要約期間の最初の値	1月=10、2月=15、3月=20、Q1=10
残高	期間合計としての要約期間の最後の値	1月=10、2月=15、3月=20、Q1=20
平均	平均	1月=10、2月=15、3月=20、Q1=15
入力	親の期間の値は、子孫に入力されます。子の値が変更された場合は、デフォルト集約ロジックが親に適用されます。	1月=20、2月=20、3月=20、Q1=20
加重平均-Actual_Actual	年間の実際の日数に基づいた日々の加重平均です。2月が29日間あるうるう年の会計です。この例では、Q1の平均が計算されています: (1) Q1の各値にその月の日数を乗算し、(2)それらの値を合計し、(3)合計をQ1の日数で除算します。結果は、この年をうるう年と仮定して算出されます: $(10 * 31 + 15 * 29 + 20 * 31) / 91 = 15$	1月=10、2月=15、3月=20、Q1=5
加重平均-Actual_365	年間365日に基づいた日々の加重平均で、2月が28日間あると仮定します。うるう年は考慮していません。この例では、Q1の平均が計算されています: (1) Q1の各値にその月の日数を乗算し、(2)それらの値を合計し、(3)合計をQ1の日数で除算します。結果は、この年をうるう年ではないと仮定して算出されます: $(10 * 31 + 15 * 28 + 20 * 31) / 90 = 15$	1月=10、2月=15、3月=20、Q1=15

加重平均(Actual_Actual プロパティおよび加重平均 - Actual_365 プロパティ)は、4つの四半期にロール・アップされる標準の月別カレンダーのみで使用できます。Planning でデータを計算して記録する方法については、『Oracle Hyperion Planning ユーザー・ガイド』を参照してください。

注： Planning アプリケーションの配置の場合: 「タイム・バランス」が「期末」に設定されている場合、プロパティは「残高」として Planning に送信されます。「タイム・バランス」が「なし」に設定されている場合、プロパティは「フロー」として Planning に送信されます。

ゼロおよび欠落した値のための勘定科目計算の例

次の例では、タイム・バランスが「期首」が設定されていると仮定します。

スキップ・オプション	例
なし	Jan = 0、Feb = 20、Mar = 25、Q1 = 0 最初の子(1月)の値は0で、ゼロ値は親値を計算する際に考慮されます。

スキップ・オプション	例
欠落	1月 = #MISSING、2月 = 20、3月 = 25、Q1 = 20 最初の子(1月)の値は#MISSINGで、#MISSING値は親値を計算する際に考慮されないため、Q1 = 2番目の子(2月)または20になります。
ゼロ	1月 = 0、2月 = 20、3月 = 25、Q1 = 20 最初の子(1月)の値は0で、ゼロ値は親値を計算する際に考慮されないため、Q1 = 2番目の子(2月)または20になります。
#Missing およびゼロ	1月 = 0、2月 = #MISSING、3月 = 25、Q1 = 25 最初の子(1月)の値は0で、2番目の子(2月)の値は#MISSINGです。#MISSING値およびゼロ値は親値を計算する際に考慮されないため、Q1 = 3番目の子(3月)または25になります。

通貨

通貨次元のメンバーは、表で説明されているプロパティだけでなく、[364 ページ](#)の「すべての Planning 次元に適用できるプロパティ」で説明されている次のようなほとんどの一般的なプロパティを使用します:

- Valid for Plan
- Two Pass Calculation
- UDA
- Member Formula
- Alias
- Data Storage
- Smart List
- Data Type
- Attribute Values
- Apply Security

財務情報は、複数の通貨でプラン、予測および分析できます。次の内容を設定できます:

- アプリケーションがレポートの作成に使用する通貨
- レポートおよびデータ・フォームでの通貨の表示方法
- 他の通貨への換算方法
- 3番目の通貨を使用するかどうか(三角換算法の通貨)
- 通貨換算を行うタイミングの指定

為替レート、通貨換算および交換レート表の管理については、『Oracle Hyperion Planning 管理者ガイド』を参照してください。

プロパティ・ラベル	説明	プロパティ名
Thousands Separator	<ul style="list-style-type: none"> ● なし: 1000 ● カンマ: 1,000 ● 点: 1.000 ● スペース: 1 000 ● 通貨設定: 通貨の設定 デフォルト値: カンマ	ThousandSep
Decimal Separator	<ul style="list-style-type: none"> ● 点: 1.00 ● カンマ: 1,00 ● 通貨設定: 通貨の設定 デフォルト値: 点	DecimalSep
Negative Sign	<ul style="list-style-type: none"> ● 接頭辞のマイナス: -1000 ● 接尾辞のマイナス: 1000- ● かっこ: (1000) ● 通貨設定: 通貨の設定 デフォルト値: 接頭辞のマイナス	NegativeSign
Negative Color	<ul style="list-style-type: none"> ● 黒: 負の値は黒で表示される ● 赤: 負の値は赤で表示される ● 通貨設定: 通貨の設定 デフォルト値: 赤	NegativeColor
Scale	スケールによって、値の表示方法(整数、十、百、千、百万など)を決定します。通貨を入力および表示する方法を設定します。たとえば、スケールを「千」に設定すると、3 円は 3000 円を表します。 <ul style="list-style-type: none"> ● 全体 ● 十 ● 百 ● 千 ● TThousands ● HThousands ● 百万 ● TMillions ● HMillions ● 十億 デフォルト値: 全体	Scale
Currency Code	市場で確立されている通貨名の略語または独自に作成するカスタム通貨コードです。 デフォルト値: 該当なし	CurrencyCode

プロパティ・ラベル	説明	プロパティ名
Symbol	市場で確立されている通貨名の記号です。たとえば、米ドルの記号は\$です。 デフォルト値: 該当なし	Symbol
Triangulation Currency	通貨換算の中間通貨です。三角換算法の通貨を変更する場合は、Triangulation Currency プロパティの為替レートを再入力し、アプリケーションをリフレッシュして、為替レートを転送して保管する必要があります。デフォルト通貨を三角換算法の通貨として選択できません。 このプロパティの値を親レベルで定義すると、すべての子孫は自動的に値を継承します。元の親の子孫メンバーで値が上書きされると、その子孫は新しい値を継承します。 デフォルト値: 該当なし	TriangulationCurrency
Reporting Currency	財務諸表を準備するために使用する通貨です。変換されたレポートの通貨値は、すべてのユーザーに対して保管され、読取り専用になります。 デフォルト値: 該当なし	ReptCurrency

エンティティ

エンティティ次元のメンバーは、表で説明されているプロパティだけでなく、[364 ページの「すべての Planning 次元に適用できるプロパティ」](#)で説明されている次のようなほとんどの一般的なプロパティを使用します:

- Valid for Plan
- Aggregation
- UDA
- Member Formula
- Alias
- Data Storage
- Smart List
- Data Type
- Attribute Values

地域、国、部署などの承認のためのプランを提出するグループ用のエンティティ・メンバーを作成できます。データ・フォームは1エンティティ当たり複数の通貨をサポートするので、複数通貨のデータ入力を使用可能にし、単一の通貨でレポートを作成できます。入力した値の通貨を設定し、定義された為替レートを使用して他の通貨に換算できます。

エンティティ次元には、基本通貨に値を入力するために通貨次元との関連付けが必要です。マルチ通貨アプリケーションでは、通貨次元は基本エンティティ次元に関連付ける必要があります。エンティティ次元には、属性値および別名を次元のメンバーに割り当てるために、属性次元および別名次元と関連付ける必要があります。共有ライブラリのアプリケーションの関連付けは、名前を右クリックし、「すべての関連付けをアクティブにする」を選択してアクティブ化できます。

一般に、エンティティ・メンバーには異なるプランを準備します。エンティティ・メンバーを定義する場合は、メンバーに対して有効なプラン・タイプを指定します。データ・フォームはプラン・タイプに関連付けられるので、各プラン・タイプにデータを入力できるエンティティ・メンバーを制御できます。

プロパティ・ラベル	説明	プロパティ名
Currency	<p>USD(米ドル)など、3文字の通貨コードを入力します。</p> <p>マルチ通貨アプリケーションでは、各エンティティ・メンバーに対して基本通貨を指定します。</p> <p>集約ストレージ・アウトラインには該当しません。</p> <p>このプロパティの値を親レベルで定義すると、すべての子孫は自動的に値を継承します。元の親の子孫メンバーで値が上書きされると、その子孫は新しい値を継承します。</p> <p>デフォルト値: アプリケーションのデフォルト通貨</p>	Currency

期間

期間次元のメンバーは、表で説明されているプロパティだけでなく、[364 ページ](#)の「すべての Planning 次元に適用できるプロパティ」で説明されている次のようなほとんどの一般的なプロパティを使用します:

- Valid for Plan
- Aggregation
- UDA
- Member Formula
- Alias
- Data Storage
- Smart List
- Data Type
- Attribute Values

期間次元を使用して、年次連結の構造を表示および変更します。基本期間および週数を指定できます。

カレンダーを作成した後に基本期間を変更できません。アプリケーションには最大 500 の期間を含められます。実際の制限は、暦年および期間の組合せによって定義します。期間数および年数は、アプリケーションが複数の通貨を使用するかどうかにも依存します。1 年あたり 400 の期間および 27 年、または 1 年あたり 360 の期間および 30 年などが、推奨される実用的な制限です。

名前、説明、別名、期首および期末の更新を含めて、要約期間または BegBalance メンバーを追加および変更できます。基本期間の順序をスキップまたは変更できません。現在の会計年度を超えて範囲を拡張できません。12 か月および四半期の

基本期間の均衡階層を使用するには、すべての基本メンバーをルートから同じ数のレベルにする必要があります。

最初の配置を成功させるには、Planning アプリケーションに必要なメンバー (BegBalance および YearTotal) が含まれ、最初の配置より前にこれらのメンバーの名前を変更しないようにします。(YearTotal は、カスタム期間の四半期または週を集約するための要約期間です。)ただし、最初の配置後、アプリケーション・ライブラリ内の BegBalance メンバーと YearTotal メンバーの名前を変更できます。

注： BegBalance メンバーと YearTotal メンバーの名前の変更によって、最初の配置が失敗した場合、"BegBalance"と"YearTotal"に名前を変更してアプリケーションを再配置し、アプリケーション・ライブラリ内の一意の名前でこれらのメンバーの名前を再度変更します。

期間次元を作成し、アプリケーションを Planning に配置した後で、メンバーの順序を変更できません。

プロパティ・ラベル	説明	プロパティ名
Use Beginning Balance	BegBalance 期間を使用するかどうかを指定します。 デフォルト値: 該当なし	UseBegBalance
Period Type	期間タイプ: 基本期間、要約期間、年期間、または代替期間	PeriodType

期間次元の代替階層の考慮事項

代替階層を使用する場合は、次のことを考慮します:

- 期間タイプ「代替期間」を、すべての代替階層メンバーに対して設定する必要があります。
- 代替階層メンバーの親は、期間などの期間次元の root メンバーか、または別の代替階層メンバーです。

シナリオ

シナリオ次元のメンバーは、表で説明されているプロパティだけでなく、364 ページの「すべての Planning 次元に適用できるプロパティ」で説明されている次のようなほとんどの一般的なプロパティを使用します:

- Valid for Plan
- Aggregation
- UDA
- Member Formula
- Alias
- Data Storage
- Smart List

- Data Type

データをグループ化するには、シナリオ次元を作成します。各シナリオには勘定科目および各エンティティの他の次元のデータが含まれます。ユーザーは、エンティティおよびバージョンのデータを入力した後に、データを送信するか、または確認および承認のために他のユーザーに移行できます。エンティティ、シナリオおよびバージョンの交差は、プランニング・ユニットと呼ばれます。Planning は、確認プロセスでプランニング・ユニットのステータスを追跡します。異なる期間にシナリオの範囲を広げられます。シナリオ次元には、開始期間値および終了期間値を入力するために、期間次元および年次元との関連付けが必要です。

シナリオの用途は次のとおりです:

- 別の Planning 方法を適用する
- 予測および予算を作成する
- 実績の履歴を保管する

プロパティ・ラベル	説明	プロパティ名
Enable Process Management	プロセス管理に対してシナリオを使用可能にするかどうかを指定します。これによって、このメンバーを含むプランニング・ユニットを管理できます。 デフォルト値: TRUE	EnableProcessManagement
Start Year、End Year、Start Period、End Period	シナリオを有効にする年および期間です。データ・フォームにアクセスするユーザーは、その範囲内の年および期間のみでそのシナリオに入れます。シナリオの時間範囲は変更できます。 デフォルト値: 該当なし	StartYear、EndYear、StartPeriod、EndPeriod
Use Beginning Balance	BegBalance 期間を使用するかどうかを指定します。 デフォルト値: 該当なし	UseBegBalance
Exchange Rate Table	マルチ通貨アプリケーションのみで使用します。シナリオに為替レート・テーブルを割り当てます。 デフォルト値: 該当なし	ExchangeRateTable

シナリオ・メンバーには、グループまたはユーザーがデータを表示または変更できるかどうかを決定するアクセス権を指定できます。Planning のアクセス権の設定については、『Oracle Hyperion Planning 管理者ガイド』を参照してください。

シナリオを削除する場合は、シナリオ(データを含む)を使用するすべてのプランニング・ユニットが削除されます。データ・フォームの軸(行または列)で開始されるか、または割り当てられているプランニング・ユニットで使用されるシナリオは削除できません。最初にデータ・フォームからシナリオへの参照を除去し、別のシナリオを割り当てる必要があります。

バージョン

バージョン次元のメンバーは、表で説明されているプロパティだけでなく、[364 ページ](#)の「すべての Planning 次元に適用できるプロパティ」で説明されている次のようなほとんどの一般的なプロパティを使用します:

- Valid for Plan
- Aggregation
- UDA
- Member Formula
- Alias
- Data Storage
- Smart List
- Data Type

バージョン次元の用途は次のとおりです:

- プランに、準備段階や最終などの複数の繰り返しを提供する
- ベスト・ケースなどの仮定に基づいた予測結果をモデル化する
- 内部や外部などのプラン・データを制御する
- 簡単に目標を設定する

バージョンはシナリオから独立しています。バージョン名およびアクセス権を変更できます。アプリケーションには、少なくとも1つのバージョンが必要です。アクセス権の設定については、『Oracle Hyperion Planning 管理者ガイド』を参照してください。

表 40 バージョンのプロパティ

プロパティ・ラベル	説明	プロパティ名
Enable Process Management	プロセス管理に対してバージョンを使用可能にするかどうかを指定します。これによって、このバージョン・メンバーを含むプランニング・ユニットを管理できます。ターゲット・バージョンでは使用できません。 デフォルト値: 該当なし	EnableProcessManagement

プロパティ・ラベル	説明	プロパティ名
Version Type	<p>目標: ユーザーは、任意のレベルでメンバーのデータを入力し、ビジネス・ルールを使用して親メンバーから子孫に値を配布できます。</p> <p>ターゲット・バージョンを使用して、プランにハイレベルの目標を設定します。ボトムアップ・バージョンで作業するプランナは、プラン・データの入力時に目標を参照できます。</p> <p>ターゲット・バージョンはトップダウンの予算を使用します。ワークフロー・タスクは許可されず、#MISSING などのターゲット・メンバーの子は、トップ・レベルでデータ入力を使用可能にするために空白にする必要があります。ターゲット・メンバーは、「保管」に設定する必要があります(動的計算は、データの入力内容を子の合計で上書きします)。</p> <p>ボトムアップ: ユーザーは、最下位レベルのメンバーにデータを入力します。親レベルのメンバーは読取り専用です。親メンバーの値は、最下位レベルのメンバーから集約されます。</p> <p>デフォルト値: ボトムアップ</p>	VersionType

年

年次元のメンバーは、表で説明されているプロパティだけでなく、[364 ページの「すべての Planning 次元に適用できるプロパティ」](#)で説明されている次のようなほとんどの一般的なプロパティを使用します:

- Valid for Plan
- UDA
- Member Formula
- Alias
- Data Storage
- Smart List
- Data Type
- Attribute Values

カレンダーに年を追加するには、年次元を使用します。年次元の名前は、FY08 などのように、FY に続けて 2 桁の年を記述する必要があります。会計開始年は、年次元構造の最初の年メンバーに基づきます。アプリケーションの配置後に会計開始年を変更できません。ただし、初期の年の範囲の最後に年を追加することはできます。

年次元の最初の年メンバーおよび「会計開始年」プロパティは、同じ年を表す必要があります。たとえば、「会計開始年」が 2008 の場合、年次元の最初の年は FY08 にする必要があります。2008 と FY07 のように、年の間に不一致があると、エラーが表示され、アプリケーションは配置できません。

年には、別名を追加、変更、または割り当てられます。カレンダーの年数は、新規データベースを作成しないかぎり、減らすことはできません。Performance

Management Architect は、年次元の最初のシステム・メンバーとして「年なし」を追加します。Performance Management Architect では、年次元の最初のメンバーとして「年なし」が保存されますが、プランニング・リポジトリでは最後の年として保存されます。

カスタム次元

勘定科目次元のメンバーは、表で説明されているプロパティだけでなく、[364 ページの「すべての Planning 次元に適用できるプロパティ」](#)で説明されている次のようなほとんどの一般的なプロパティを使用します:

- Valid for Plan
- Two Pass Calculation
- Aggregation
- UDA
- Member Formula
- Alias
- Data Storage
- Smart List
- Data Type

Apply Security プロパティを使用して、カスタム次元にセキュリティを適用します。カスタム次元は、[386 ページの「次元、メンバーおよび別名の名前付けの制限」](#)の名前付けルールに従う必要があります。次元名および別名は一意にする必要があります。スペースを含めて最大 80 文字を指定できます。説明は 255 文字までです。

Planning の別名

別名は、次元の定義を支援する代替の名前、説明、言語、またはその他のアイテムです。別名は、勘定科目、通貨、エンティティ、シナリオ、期間、バージョン、年およびユーザー定義の次元メンバーに割り当てることができます。

エンティティなどの基本次元には、別名次元とのアクティブな関連付けがあり、エンティティ・メンバーには、選択された別名テーブルに対して定義された別名があり、別名は Planning カテゴリの別名フィールドに表示されます。アプリケーションを Planning に配置する場合は、別名次元の子メンバーが別名テーブルになり、「デフォルト」というメンバーを含める必要があります。別名は、[386 ページの「次元、メンバーおよび別名の名前付けの制限」](#)の名前付けの要件に従う必要があります。

Planning の属性

属性を使用して階層を作成し、別名を割り当てることによって、データのグループ化、選択、または計算を簡略化できます。属性名は一意にする必要があります。386 ページの「次元、メンバーおよび別名の名前付けの制限」の命名規則に従う必要があります。属性データ型には、テキスト、ブール、日付、数値があります。属性およびその値の詳細は、『Oracle Essbase Database 管理者ガイド』を参照してください。

属性を疎次元のみに割り当てられます。疎次元が密次元に変更されると、次元のすべての属性およびその値は自動的に削除されます。属性をラベルのみのメンバーに割り当てることはできません。エンティティや製品などの次元は、属性値および別名の割当てを使用可能にするために、属性次元および別名次元に関連付ける必要があります。クラシック・Planning アプリケーションを Performance Management Architect にアップグレードする前に、属性次元の名前に含まれるすべてのスペースを除去する必要があります。

属性を変更または削除した場合は、ビジネス・ルール、レポートおよびデータ・フォームを更新および検証する必要があります。属性を削除すると、関連するすべての属性値が削除され、割り当てられているカスタム次元のメンバーから除去されます。インポート・プロファイルを使用して属性値をロードする場合は、ロードする前に属性次元を作成する必要があります。アプリケーションをアップグレードする前に、属性次元の名前に含まれるスペースを除去する必要があります。

Planning 9.3.1 および Performance Management Architect の操作

Planning 9.3.1 を Performance Management Architect の最新版とともに使用する場合は、最新の Performance Management Architect のほとんどの機能を使用できます。ただし、データ・ソースの作成や新規属性タイプ、ブール、日付および番号の使用などの一部の機能は Planning 9.3.1 で使用できません。互換性については、『Oracle Hyperion Enterprise Performance Management System インストール概要』ガイドを参照してください。

Public Sector Planning and Budgeting のコンテンツの操作に関する考慮事項

Public Sector Planning and Budgeting に対して有効になっている Planning アプリケーションでは、Performance Management Architect 次元の別名「従業員」、「職階」および予算アイテムは、アプリケーションを検証、配置またはクラシックの Planning から Performance Management Architect に変換するときに、事前定義された名前を保持する必要があります。詳細は、『Oracle Hyperion Public Sector Planning and Budgeting ユーザー・ガイド』を参照してください。

Essbase での作業の考慮事項

Planning の「データベースの管理」ページで作成およびリフレッシュを行うと、Essbase データベースのデータに影響します。「作成」をクリックすると、データが消去され、Planning のプラン・タイプが再構築されます。「リフレッシュ」をクリックすると、データが置換されることがあります。詳細は、『Oracle Hyperion Planning 管理者ガイド』を参照してください。

クラシック・アプリケーション管理で作成したアプリケーションを Performance Management Architect に変換すると、クラシック・アプリケーション管理に戻ってそのアプリケーションを操作できなくなります。Essbase アウトラインを直接 Oracle Essbase Administration Services で変更することはサポートされていません。

Planning アプリケーションをリフレッシュすると、Essbase データベースは次のように変更されます:

- Planning のリレーショナル・データベースにメンバーがない場合、メンバーおよびそのプロパティ、属性およびユーザー定義属性(UDA)は、リフレッシュ時に Essbase で維持されません。
- Planning は、Essbase の既存のメンバーからメンバーのプロパティを取得し、その後 Planning で定義できるメンバー・プロパティを設定および上書きします。

この動作は、これらのメンバー、属性、および UDA が Planning に存在しなかった場合もリフレッシュ・プロセスがインクリメンタルで、Essbase のアウトラインに直接行われた変更を維持する前のリリースとは異なります。

HSP_UDF UDA は、Performance Management Architect の外部で定義されたメンバー式を維持します。Performance Management Architect のリフレッシュを使用して割当てを解除しても、Essbase のアウトラインから UDA の割当ては解除されません。HSP_UDF UDA を含むメンバーを直接 Essbase に追加してデータベースをリフレッシュすると、Essbase のこのメンバーのすべての式が保存され、レベル・ゼロおよび動的計算のメンバーに式プレースホルダ(;)は生成されません。カスタム UDA や HSP_NOLINK UDA などのその他の UDA は、Performance Management Architect または Planning(クラシック・アプリケーション用)で定義された場合のみ維持されます。

メンバー式は、Performance Management Architect および Planning(クラシック・アプリケーション用)でサポートされているので、HSP_UDF UDA の必要性はそれほど高くありません。UDA は、できるだけ Performance Management Architect または Planning(クラシック・アプリケーション用)で定義するようにしてください。

@XREF 関数は、現在のデータベースの値を計算するために別のデータベースからデータ値を参照します。HSP_NOLINK UDA をメンバーに追加すると、メンバーに対して選択されていないソース・プラン・タイプではないすべてのプラン・タイプに対して @XREF 関数が作成されないようにできます。UDA および関数の詳細は、『Oracle Essbase Database 管理者ガイド』を参照してください。

最も一般的に使用される Essbase メンバー・プロパティに対して、Essbase のアウトラインを直接変更する必要はありません。Performance Management Architect および Planning は、期間次元における動的時系列、期間次元における代替階層、シ

ナリオおよびバージョン次元における階層、属性次元における階層および別名をサポートします。

これらのガイドラインは、スーパーバイザまたはアプリケーション管理者としてログオンして Essbase で作業する際に使用してください:

- 次元の疎密の設定および Essbase における次元の順序は変更しないでください。
- テキスト、ブール、数値および日付を含む任意の属性次元タイプを使用できます。
- リンク・レポート・オブジェクト(LRO)は使用しないでください。
- タイム・バランスのデフォルト設定は変更しないでください。残高のデフォルト設定は「期末」、フローのデフォルト設定は「なし」です。
- 差異レポートの設定は変更しないでください。これらは、保存された仮定を除くすべての勘定科目の種別に対して事前に設定されています。保存された仮定の勘定科目の種別の有効な設定は、費用および費用外です。
- リフレッシュする前にデータベースをバックアップします。

アプリケーションの命名の制限(Essbase)

Essbase のアプリケーションおよびデータベースの作成の詳細は、Essbase の製品ドキュメントを参照してください。

Planning または Essbase のレポート・アプリケーションの名前を付ける場合は、次の規則に従います:

- 非 Unicode モードのアプリケーションおよびデータベースでは、8 文字以内を使用し、Unicode モードのアプリケーションおよびデータベースでは、30 文字以内を使用します。
- スペースは使用しないでください。
- 次の特殊文字は使用しないでください:
 - アスタリスク
 - 円記号(バックスラッシュ)
 - 大かっこ
 - コロン
 - カンマ
 - 等号
 - 大なり記号
 - 小なり記号
 - 期間
 - プラス符号
 - 疑問符
 - 引用符(二重および一重)
 - セミコロン

- スラッシュ
- タブ
- 垂直棒
- リレーショナル・データベース環境における Planning アプリケーションの名前に、アンダースコアを除く拡張文字は使用しないでください。
- 集約ストレージ・データベースでは、アプリケーション名に DEFAULT、LOG、METADATA、または TEMP は使用しないでください。

名前の大文字と小文字を正しく入力してください。アプリケーション名は入力したとおりに作成されます。

次元、メンバーおよび別名の名前付けの制限

次元、メンバーおよび別名の命名では、次の規則に従います:

- 非 Unicode モードの次元、メンバーまたは別名では、1 バイト文字 80 文字まで使用します。Unicode モードの次元、メンバーまたは別名では、80 文字まで使用します(マルチバイト文字は 1 文字として数えられます)。
- 大文字および小文字は、大文字および小文字の区別が使用可能になっている場合のみ区別してください。
- メンバー名、次元名、別名および説明では、HTML タグは使用しないでください。
- 引用符、かっこ、円記号(バックスラッシュ)、タブは使用しないでください。かっこは使用できますが、ブロック・ストレージのアウトラインではお薦めできません。集約ストレージのアウトラインへの変換時にエラーが発生します。
- 次元またはメンバの名前の先頭に次の文字は使用しないでください:
 - アット・マーク
 - 円記号(バックスラッシュ)
 - 大かっこ
 - カンマ
 - ダッシュ、ハイフンまたはマイナス符号
 - 等号
 - 小なり記号
 - 丸かっこ
 - 期間
 - プラス符号
 - 引用符
 - アンダースコア
 - 垂直棒

- 名前の先頭または末尾にスペースを入れないでください。Essbase では、名前の先頭または末尾のスペースは無視されます。
- メンバー名にスラッシュ(/)は使用しないでください。
- カスタム・カレンダーの期間では、接頭辞にスペースを使用しないでください。
- 次の単語を次元、メンバーまたは別名の名前に使用しないでください:
 - 計算スクリプト・コマンド、演算子およびキーワード。コマンドの一覧については、Essbase の製品ドキュメントを参照してください。
 - レポート・ライター・コマンド。コマンドの一覧については、『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』を参照してください。
 - 関数名および関数引数。
 - 他の次元の名前、他のメンバーの名前(メンバーが共有でない場合)、世代名、レベル名およびデータベースでの別名。
 - 予約語: Financial Management、Profitability and Cost Management、Essbase および Planning の予約語のリストは、次のガイドを参照してください:
 - 『Oracle Hyperion Financial Management 管理者ガイド』
 - 『Oracle Hyperion Profitability and Cost Management 管理者ガイド』
 - 『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』
 - 『Oracle Hyperion Planning 管理者ガイド』

ALL AND ASSIGN AVERAGE CALC	GENRANGE GROUP GT ID IDERROR	OR PAREN PARENPARAM PERCENT PLUS
CALCMBR COPYFORWARD CROSSDIM	INTEGER LE LEVELRANGE	RELOP SET SKIPBOTH SKIPMISSING
CURMBRNAME DIM DIMNAME DIV	LOOPBLOCK LOOPPARAMS LT MBR	SKIPNONE SKIPZERO TO TOLocalRATE
DYNAMIC EMPTYPARAM EQ EQOP EXCEPT	MBRNAME MBRONLY MINUS	TRAILMISSING TRAILSUM UMINUS UPPER
EXP EXPERROR FLOAT FUNCTION GE GEN	MISSING MUL MULOP NE NON	VARORXMBR XMBRONLY \$\$UNIVERSE\$\$
	NONINPUT NOT	#MISSING #MI

- 動的時系列を使用可能にしている場合は、履歴、年、季、期間、四半期、月、週、および日は使用しないでください。

Planning のフラット・ファイルの操作

メタデータを Performance Management Architect にインポートするために、49 ページの「フラット・ファイルの作成」で説明されているように、.ads フラット・ファイルを作成できます。Planning アプリケーションのメタデータをロードする際、Performance Management Architect には為替レートをロードできないことに注意してください。Planning アプリケーションでは、この後のセクションの例で示すように、標準的または単純なフラット・ファイルを使用できます。

Planning のフラット・ファイルの例(通常)

次に、Planning で使用できる通常のフラット・ファイルの例を示します。

```
!FILE_FORMAT=ADS
!VERSION=1.0
```



```

MemberValidForPlan3|MemberValidForWorkforce|MemberValidForCapex|Plan1Aggregation|
Plan2Aggregation|Plan3Aggregation|WorkforceAggregation
#root|100|NeverShare|Average|Y|Y|Y|N|+|+|+|+

!PropertyArray=Account
'Property|Name|Key|Value
Alias|100|Aliases_Table_1|Aliases_Table_1|100
Alias|100|Aliases_Table_2|Aliases_Table_2|100
Alias|100|Aliases_Table_3|Aliases_Table_3|100
Alias|100|Aliases_Table_4|Aliases_Table_4|100
Alias|100|Default|Alias_100

!Members=Currency
'Name|DataType|Symbol|Scale|ThousandSep|DecimalSep|NegativeSign|NegativeColor|
ReptCurrency|TriangulationCurrency|CurrencyCode|SmartList|UDA|Description
Local|Unspecified|null|Whole|None|Dot||Black|N||||Local currency
USD|Unspecified|$|Whole|None|Dot||Black|Y||||United States of America dollar
DEM|Unspecified|DM|Whole|None|Dot||Black|Y||||Germany deutsche mark
EUR|Unspecified|€|Whole|None|Dot||Black|Y||||European Union Euro
FRF|Unspecified|F|Whole|None|Dot||Black|Y|EUR|||France franc
IEP|Unspecified|IR£|Whole|None|Dot||Black|Y||||Ireland punt

!Hierarchies=Currency
'Parent|Child|DataStorage|MemberValidForPlan1|MemberValidForPlan2|
MemberValidForPlan3|MemberValidForWorkforce|MemberValidForCapex
#root|Local|StoreData|Y|Y|Y|N|
#root|USD|StoreData|Y|Y|Y|N|
#root|DEM|StoreData|Y|Y|Y|N|
#root|EUR|StoreData|Y|Y|Y|N|
#root|FRF|StoreData|Y|Y|Y|N|
#root|IEP|StoreData|Y|Y|Y|N|

!PropertyArray=Currency
'Property|Name|Key|Value
Alias|DEM|Default|Alias_DEM
Alias|FRF|Default|Alias_FRF

!Members=Entity
'Name|DataType|Currency|SmartList|UDA|Colors|Description
ParentMMM|Unspecified|USD|||
Mem_3|Unspecified|USD|||
Mem_2|Unspecified|USD|||
Mem_1|Unspecified|USD|||
ParentMMM_Shared|Unspecified|USD|||
Canada|Unspecified|USD|||
United States|Unspecified|USD||blue|
Oregon|Unspecified|USD|||
California|Unspecified|USD|||
San Francisco|Unspecified|USD|||
Washington|Unspecified|USD|||
East|Unspecified|USD|||
NY|Unspecified|USD|||
West|Unspecified|USD|||
CA|Unspecified|USD|||
WA|Unspecified|USD|||
NJ|Unspecified|USD|||

```

```

!Hierarchies=Entity
'Parent|Child|DataStorage|MemberValidForPlan1|MemberValidForPlan2|
MemberValidForPlan3|MemberValidForWorkforce|MemberValidForCapex|Plan1Aggregation|
Plan2Aggregation|Plan3Aggregation|WorkforceAggregation
#root|ParentMMM|NeverShare|Y|Y|Y|N|+|+|+|+
ParentMMM|Mem_3|NeverShare|Y|Y|Y|N|+|+|+|+
ParentMMM|Mem_2|NeverShare|Y|Y|Y|N|+|+|+|+
ParentMMM|Mem_1|NeverShare|Y|Y|Y|N|+|+|+|+
#root|ParentMMM_Shared|NeverShare|Y|Y|Y|N|+|+|+|+
ParentMMM_Shared|Mem_3|ShareData|Y|Y|Y|N|+|+|+|+
ParentMMM_Shared|Mem_2|ShareData|Y|Y|Y|N|+|+|+|+
ParentMMM_Shared|Mem_1|ShareData|Y|Y|Y|N|+|+|+|+
#root|Canada|NeverShare|Y|Y|Y|N|+|+|+|+
#root|United States|NeverShare|Y|Y|Y|N|+|+|+|+
United States|Oregon|NeverShare|Y|Y|Y|N|+|+|+|+
United States|California|NeverShare|Y|Y|Y|N|+|+|+|+
California|San Francisco|NeverShare|Y|Y|Y|N|+|+|+|+
United States|Washington|NeverShare|Y|Y|Y|N|+|+|+|+
#root|East|NeverShare|Y|Y|Y|N|+|+|+|+
East|NY|NeverShare|Y|Y|Y|N|+|+|+|+
#root|West|NeverShare|Y|Y|Y|N|+|+|+|+
West|CA|NeverShare|Y|Y|Y|N|+|+|+|+
West|WA|NeverShare|Y|Y|Y|N|+|+|+|+
West|NJ|NeverShare|Y|Y|Y|N|+|+|+|+

```

```

!PropertyArray=Entity
'Property|Name|Key|Value
Alias|Canada|Default|Alias_Canada
Alias|United States|Default|Alias_United States
Alias|Oregon|Default|Alias_Oregon
Alias|California|Default|Alias_California
Alias|San Francisco|Default|Alias_San Francisco
Alias|Washington|Default|Alias_Washington

```

```

!Members=NewCustomDimension
'Name|DataType|SmartList|UDA|Description
One|Unspecified|||

```

```

!Hierarchies=NewCustomDimension
'Parent|Child|DataStorage|MemberValidForPlan1|MemberValidForPlan2|
MemberValidForPlan3|MemberValidForWorkforce|MemberValidForCapex|Plan1Aggregation|
Plan2Aggregation|Plan3Aggregation|WorkforceAggregation
#root|One|NeverShare|Y|Y|Y|N|+|+|+|+

```

```

!PropertyArray=NewCustomDimension
'Property|Name|Key|Value
Alias|One|Default|Alias_One

```

```

!Members=Period
'Name|DataType|SmartList|UDA|Description
BegBalance|Unspecified|||
YearTotal|Unspecified|||
Q1|Unspecified|||
Jan|Unspecified|||
Feb|Unspecified|||
Mar|Unspecified|||
Q2|Unspecified|||

```

```

Apr|Unspecified||
May|Unspecified||
Jun|Unspecified||
Q3|Unspecified||
Jul|Unspecified||
Aug|Unspecified||
Sep|Unspecified||
Q4|Unspecified||
Oct|Unspecified||
Nov|Unspecified||
Dec|Unspecified||

!Hierarchies=Period
'Parent|Child|DataStorage|MemberValidForPlan1|MemberValidForPlan2|
MemberValidForPlan3|MemberValidForWorkforce|MemberValidForCapex|PeriodType
#root|BegBalance|StoreData|Y|Y|Y|N|N|Base Time Period
#root|YearTotal|StoreData|Y|Y|Y|N|N|Year Time Period
YearTotal|Q1|StoreData|Y|Y|Y|N|N|Summary Time Period
Q1|Jan|StoreData|Y|Y|Y|N|N|Base Time Period
Q1|Feb|StoreData|Y|Y|Y|N|N|Base Time Period
Q1|Mar|StoreData|Y|Y|Y|N|N|Base Time Period
YearTotal|Q2|StoreData|Y|Y|Y|N|N|Summary Time Period
Q2|Apr|StoreData|Y|Y|Y|N|N|Base Time Period
Q2|May|StoreData|Y|Y|Y|N|N|Base Time Period
Q2|Jun|StoreData|Y|Y|Y|N|N|Base Time Period
YearTotal|Q3|StoreData|Y|Y|Y|N|N|Summary Time Period
Q3|Jul|StoreData|Y|Y|Y|N|N|Base Time Period
Q3|Aug|StoreData|Y|Y|Y|N|N|Base Time Period
Q3|Sep|StoreData|Y|Y|Y|N|N|Base Time Period
YearTotal|Q4|StoreData|Y|Y|Y|N|N|Summary Time Period
Q4|Oct|StoreData|Y|Y|Y|N|N|Base Time Period
Q4|Nov|StoreData|Y|Y|Y|N|N|Base Time Period
Q4|Dec|StoreData|Y|Y|Y|N|N|Base Time Period

!PropertyArray=Period
'Property|Name|Key|Value
Alias|Aug|Default|Alias_Aug_New

!Members=Scenario
'Name|DataType|StartYear|EndYear|StartPeriod|EndPeriod|UseBegBalance|
EnableProcessManagement|SmartList|ExchangeRateTable|UDA|Description
Current|Unspecified|FY06|FY09|Jan|Dec|N|Y|||
A_Scenario|Unspecified|FY06|FY06|Jan|Jan|N|Y||A_FXRate||
B,_Scenario|Unspecified|FY06|FY06|Jan|Dec|N|Y||A_FXRate||

!Hierarchies=Scenario
'Parent|Child|DataStorage|MemberValidForPlan1|MemberValidForPlan2|
MemberValidForPlan3|MemberValidForWorkforce|MemberValidForCapex
#root|Current|StoreData|Y|Y|Y|N|
#root|A_Scenario|StoreData|Y|Y|Y|N|
#root|B,_Scenario|StoreData|Y|Y|Y|N|

!PropertyArray=Scenario
'Property|Name|Key|Value
Alias|A_Scenario|Default|Alias_A_Scenario
Alias|B,_Scenario|Default|Alias_B,_Scenario

```

```

!Members=Version
'Name|DataType|VersionType|EnableProcessManagement|SmartList|UDA|Description
BU|Version_1|Unspecified|BottomUp|Y|||
A_Version|Unspecified|BottomUp|Y|||
B,_Version|Unspecified|BottomUp|Y|||
C,_Version|Unspecified|Target|N|||
D_Version|Unspecified|Target|N|||

```

```

!Hierarchies=Version
'Parent|Child|DataStorage|MemberValidForPlan1|MemberValidForPlan2|
MemberValidForPlan3|MemberValidForWorkforce|MemberValidForCapex
#root|BU|Version_1|StoreData|Y|Y|Y|N|
#root|A_Version|StoreData|Y|Y|Y|N|
#root|B,_Version|StoreData|Y|Y|Y|N|
#root|C,_Version|StoreData|Y|Y|Y|N|
#root|D_Version|StoreData|Y|Y|Y|N|

```

```

!PropertyArray=Version
'Property|Name|Key|Value
Alias|A_Version|Default|Alias_A_Version
Alias|B,_Version|Default|Alias_B,_Version
Alias|C,_Version|Default|Alias_C,_Version
Alias|D_Version|Default|Alias_D_Version

```

```

!Members=Year
'Name|DataType|SmartList|UDA|Description
FY06|Unspecified|||
FY07|Unspecified|||
FY08|Unspecified|||
FY09|Unspecified|||
FY10|Unspecified|||
FY11|Unspecified|||

```

```

!Hierarchies=Year
'Parent|Child|DataStorage|MemberValidForPlan1|MemberValidForPlan2|
MemberValidForPlan3|MemberValidForWorkforce|MemberValidForCapex
#root|FY06|StoreData|Y|Y|Y|N|
#root|FY07|StoreData|Y|Y|Y|N|
#root|FY08|StoreData|Y|Y|Y|N|
#root|FY09|StoreData|Y|Y|Y|N|
#root|FY10|StoreData|Y|Y|Y|N|
#root|FY11|StoreData|Y|Y|Y|N|

```

```

!PropertyArray=Year
'Property|Name|Key|Value
Alias|FY06|Default|Alias_FY06

```

```

!Members=Alias
'Name
Aliases_Table_1
Aliases_Table_2
Aliases_Table_3
Aliases_Table_4
Default

```

```

!Hierarchies=Alias
'Parent|Child

```



```

'Parent|Child|DataStorage
#root|blue|
#root|green|
#root|purple|

!Hierarchies=Account
'Parent|Child|DataStorage|MemberValidForPlan1|MemberValidForPlan2|
MemberValidForPlan3|MemberValidForWorkforce|MemberValidForCapex|Plan1Aggregation|
Plan2Aggregation|Plan3Aggregation|WorkforceAggregation|DataType|SourcePlanType|
AccountType|ExchangeRateType|VarianceReporting|TimeBalance|SmartList|UDA|TwoPassCalc|
SkipValue|Description|BSOMemberFormula|Alias=Default|Alias=Aliases_Table_1|
Alias=Aliases_Table_2|Alias=Aliases_Table_3|Alias=Aliases_Table_4
#root|100|NeverShare|Y|Y|Y|N|+|+|+|+|Currency|Plan1|Revenue|Average|NonExpense|
Flow|_|_|_|_|Alias_100|Aliases_Table_1_100|Aliases_Table_2_100|Aliases_Table_3_100|
Aliases_Table_4_100

!Hierarchies=Currency
'Parent|Child|DataStorage|MemberValidForPlan1|MemberValidForPlan2|
MemberValidForPlan3|MemberValidForWorkforce|MemberValidForCapex|DataType|Symbol|
Scale|ThousandSep|DecimalSep|NegativeSign|NegativeColor|ReptCurrency|
TriangulationCurrency|CurrencyCode|SmartList|UDA|Description|Alias=Default
#root|Local|StoreData|Y|Y|Y|N|Unspecified|null|Whole|None|Dot|Prefixed Minus|Black|
N|_|_|_|_|Local currency|
#root|USD|StoreData|Y|Y|Y|N|Unspecified|$|Whole|None|Dot|Prefixed Minus|Black|Y|_|_|_|
United States of America dollar|
#root|DEM|StoreData|Y|Y|Y|N|Unspecified|DM|Whole|None|Dot|Prefixed Minus|Black|
Y|_|_|_|Germany deutsche mark|Alias_DEM
#root|EUR|StoreData|Y|Y|Y|N|Unspecified|€|Whole|None|Dot|Prefixed Minus|Black|Y|_|_|_|
European Union Euro|
#root|FRF|StoreData|Y|Y|Y|N|Unspecified|F|Whole|None|Dot|Prefixed Minus|Black|Y|
EUR|_|_|France franc|Alias_FRF
#root|IEP|StoreData|Y|Y|Y|N|Unspecified|IRf|Whole|None|Dot|Prefixed Minus|Black|
Y|_|_|_|Ireland punt|

!Hierarchies=Entity
'Parent|Child|DataStorage|MemberValidForPlan1|MemberValidForPlan2|
MemberValidForPlan3|MemberValidForWorkforce|MemberValidForCapex|Plan1Aggregation|
Plan2Aggregation|Plan3Aggregation|WorkforceAggregation|DataType|Currency|SmartList|
UDA|Colors|Description|Alias=Default
#root|ParentMMM|NeverShare|Y|Y|Y|N|+|+|+|+|Unspecified|USD|_|_|_|
ParentMMM|Mem_3|NeverShare|Y|Y|Y|N|+|+|+|+|Unspecified|USD|_|_|_|
ParentMMM|Mem_2|NeverShare|Y|Y|Y|N|+|+|+|+|Unspecified|USD|_|_|_|
ParentMMM|Mem_1|NeverShare|Y|Y|Y|N|+|+|+|+|Unspecified|USD|_|_|_|
#root|ParentMMM_Shared|NeverShare|Y|Y|Y|N|+|+|+|+|Unspecified|USD|_|_|_|
ParentMMM_Shared|Mem_3|ShareData|Y|Y|Y|N|+|+|+|+|Unspecified|USD|_|_|_|
ParentMMM_Shared|Mem_2|ShareData|Y|Y|Y|N|+|+|+|+|Unspecified|USD|_|_|_|
ParentMMM_Shared|Mem_1|ShareData|Y|Y|Y|N|+|+|+|+|Unspecified|USD|_|_|_|
#root|Canada|NeverShare|Y|Y|Y|N|+|+|+|+|Unspecified|USD|_|_|_|Alias_Canada
#root|United States|NeverShare|Y|Y|Y|N|+|+|+|+|Unspecified|USD|_|_|_|blue|Alias_United
States
United States|Oregon|NeverShare|Y|Y|Y|N|+|+|+|+|Unspecified|USD|_|_|_|Alias_Oregon
United States|California|NeverShare|Y|Y|Y|N|+|+|+|+|Unspecified|USD|_|_|_|
Alias_California
California|San Francisco|NeverShare|Y|Y|Y|N|+|+|+|+|Unspecified|USD|_|_|_|Alias_San
Francisco
United States|Washington|NeverShare|Y|Y|Y|N|+|+|+|+|Unspecified|USD|_|_|_|
Alias_Washington

```

```
!Hierarchies=NewCustomDimension
'Parent|Child|DataStorage|MemberValidForPlan1|MemberValidForPlan2|
MemberValidForPlan3|MemberValidForWorkforce|MemberValidForCapex|Plan1Aggregation|
Plan2Aggregation|Plan3Aggregation|WorkforceAggregation|DataType|SmartList|UDA|
Description|Alias=Default
#root|One|NeverShare|Y|Y|Y|N|+|+|+|+|Unspecified|||Alias_One
```

```
!Hierarchies=Period
'Parent|Child|DataStorage|MemberValidForPlan1|MemberValidForPlan2|
MemberValidForPlan3|MemberValidForWorkforce|MemberValidForCapex|DataType|SmartList|
UDA|Description|PeriodType|Alias=Default
#root|BegBalance|StoreData|Y|Y|Y|N|Unspecified|||Base Time Period|
#root|YearTotal|StoreData|Y|Y|Y|N|Unspecified|||Year Time Period|
YearTotal|Q1|StoreData|Y|Y|Y|N|Unspecified|||Summary Time Period|
Q1|Jan|StoreData|Y|Y|Y|N|Unspecified|||Base Time Period|
Q1|Feb|StoreData|Y|Y|Y|N|Unspecified|||Base Time Period|
Q1|Mar|StoreData|Y|Y|Y|N|Unspecified|||Base Time Period|
YearTotal|Q2|StoreData|Y|Y|Y|N|Unspecified|||Summary Time Period|
Q2|Apr|StoreData|Y|Y|Y|N|Unspecified|||Base Time Period|
Q2|May|StoreData|Y|Y|Y|N|Unspecified|||Base Time Period|
Q2|Jun|StoreData|Y|Y|Y|N|Unspecified|||Base Time Period|
YearTotal|Q3|StoreData|Y|Y|Y|N|Unspecified|||Summary Time Period|
Q3|Jul|StoreData|Y|Y|Y|N|Unspecified|||Base Time Period|
Q3|Aug|StoreData|Y|Y|Y|N|Unspecified|||Base Time Period|Alias_Aug_New
Q3|Sep|StoreData|Y|Y|Y|N|Unspecified|||Base Time Period|
YearTotal|Q4|StoreData|Y|Y|Y|N|Unspecified|||Summary Time Period|
Q4|Oct|StoreData|Y|Y|Y|N|Unspecified|||Summary Time Period|
Q4|Nov|StoreData|Y|Y|Y|N|Unspecified|||Summary Time Period|
Q4|Dec|StoreData|Y|Y|Y|N|Unspecified|||Summary Time Period|
```

```
!Hierarchies=Scenario
'Parent|Child|DataStorage|MemberValidForPlan1|MemberValidForPlan2|
MemberValidForPlan3|MemberValidForWorkforce|MemberValidForCapex|DataType|StartYear|
EndYear|StartPeriod|EndPeriod|UseBegBalance|EnableProcessManagement|SmartList|
ExchangeRateTable|UDA|Description|Alias=Default
#root|Current|StoreData|Y|Y|Y|N|Unspecified|FY06|FY09|Jan|Dec|N|Y|||
#root|A_Scenario|StoreData|Y|Y|Y|N|Unspecified|FY06|FY06|Jan|Dec|N|Y|A_FXRate|||
Alias_A_Scenario
#root|B,_Scenario|StoreData|Y|Y|Y|N|Unspecified|FY06|FY06|Jan|Dec|N|Y|A_FXRate|||
Alias_B,_Scenario
```

```
!Hierarchies=Version
'Parent|Child|DataStorage|MemberValidForPlan1|MemberValidForPlan2|
MemberValidForPlan3|MemberValidForWorkforce|MemberValidForCapex|DataType|VersionType|
EnableProcessManagement|SmartList|UDA|Description|Alias=Default
#root|BU_Version_1|StoreData|Y|Y|Y|N|Unspecified|BottomUp|Y|||
#root|A_Version|StoreData|Y|Y|Y|N|Unspecified|BottomUp|Y|||Alias_A_Version
#root|B,_Version|StoreData|Y|Y|Y|N|Unspecified|BottomUp|Y|||Alias_B,_Version
#root|C,_Version|StoreData|Y|Y|Y|N|Unspecified|Target|N|||Alias_C,_Version
#root|D_Version|StoreData|Y|Y|Y|N|Unspecified|Target|N|||Alias_D_Version
```

```
!Hierarchies=Year
'Parent|Child|DataStorage|MemberValidForPlan1|MemberValidForPlan2|
MemberValidForPlan3|MemberValidForWorkforce|MemberValidForCapex|DataType|SmartList|
UDA|Description|Alias=Default
```

```
#root|FY06|StoreData|Y|Y|Y|N|Unspecified|||Alias_FY06
#root|FY07|StoreData|Y|Y|Y|N|Unspecified|||
#root|FY08|StoreData|Y|Y|Y|N|Unspecified|||
#root|FY09|StoreData|Y|Y|Y|N|Unspecified|||
#root|FY10|StoreData|Y|Y|Y|N|Unspecified|||
#root|FY11|StoreData|Y|Y|Y|N|Unspecified|||
```

```
!Hierarchies=Alias
```

```
'Parent|Child
```

```
#root|Aliases_Table_1
```

```
#root|Aliases_Table_2
```

```
#root|Aliases_Table_3
```

```
#root|Aliases_Table_4
```

```
#root|Default
```

13

Profitability and Cost Management プロパティの操作

この章の内容

次元プロパティおよびメンバー・プロパティ 397

次元プロパティおよびメンバー・プロパティ

Profitability and Cost Management の次元およびメンバーのプロパティは、表 41 にアルファベット順で表示され、次の情報が含まれます:

- プロパティ・ラベル。プロパティにわかりやすい表示名を提供します。該当する場合、関連データベース・タイプが名前に付加されます(ASO または BSO)。データベース・タイプが指定されていない場合、プロパティは両方のタイプに適用されます。
- 各プロパティの説明
- プロパティに一意的識別子を提供し、インポートおよびバッチ・クライアントでデータを更新する際に使用するプロパティ名。

次元ライブラリでプロパティを選択すると、ドロップダウン・リストまたはデータ入力ボックスを表すプロパティを変更できます。

注: Essbase のプロパティは、409 ページの「次元プロパティおよびメンバー・プロパティ」を参照してください。

表 41 Profitability and Cost Management の次元プロパティおよびメンバー・プロパティ

プロパティ・ラベル	説明	プロパティ名
Alias	<p>選択した次元またはメンバーの別名を入力します。別名は、配置したアプリケーションに表示される次元名です。</p> <ul style="list-style-type: none">● 現在の次元またはメンバーのデフォルトの別名を割り当てるかまたは変更する場合は、既存の別名をクリックして新規名前を入力します。適切な命名規則に従います。すべてのデータベースには、「Default」という別名テーブルがあります。● 現在の次元またはメンバーの別名を割り当てるかまたは変更する場合は、別名テーブルの横にある既存の別名をクリックして新規名前を入力します。適切な命名規則に従います。	Alias

プロパティ・ラベル	説明	プロパティ名
アプリケーション・タイプ	Profitability and Cost Management アプリケーションのタイプを表示します: <ul style="list-style-type: none"> ● 全般 - 標準 Profitability アプリケーション ● 詳細 - 詳細 Profitability アプリケーション 	
Attributes	次元メンバーの特性を入力します。 たとえば、製品次元のメンバーには、サイズや風味など、いくつかの属性がある場合があります。 詳細な説明は、409 ページの「次元プロパティおよびメンバー・プロパティ」を参照してください。	Attributes
Attribute Type	属性タイプを選択したメンバーに関連付けます。メンバーのクエリーおよびフィルタに使用できる次元メンバーに割り当てられた属性の属性値を作成します。 属性タイプは次のとおりです: <ul style="list-style-type: none"> ● テキスト ● ブール ● 日付 ● 数値 たとえば、「カフェイン入り」の属性タイプはブール値になります。データ値は True または False です。	AttributeDataType
Comment	次元またはメンバーのコメントを入力します。コメントには最大 255 文字を指定できます。デフォルトでは、テキスト・ボックスには現在のコメントが表示されます(存在する場合)。 属性次元またはメンバーにコメントを割り当てられません。 注: Unicode 使用可能データベースでは、最大 80 文字まで許可されます。	Comment
Consolidation	メンバー連結プロパティは、子を親にロール・アップする方法を指定します。現在のメンバーが次元または属性でない場合は、連結演算子を選択してそのメンバーに割り当てます: <ul style="list-style-type: none"> ● + (加算) - デフォルト ● - (減算) ● * (乗算) ● / (除算) ● % (パーセント) ● ~ (連結では無視する) ● ^ (連結しない) ● NotUsed 注: 集約ストレージ・アウトラインでは、連結演算子の使用に一部制限があります。詳細は、『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』を参照してください。	Consolidation

プロパティ・ラベル	説明	プロパティ名
Data Storage (ASO)	<p>次元およびメンバーの ASO ストレージ・オプションを選択します:</p> <ul style="list-style-type: none"> ● StoreData - データは次元とともに保管されます。 ● ShareData - このメンバーに関連付けられているデータは共有できます。ShareData プロパティは、メンバーのみに適用されます。次元ルート・メンバーは共有できません。 ● NeverShare - この次元に関連付けられているデータは、1つの子を持つ親など、暗黙の共有関係がある場合でも共有できません。この場合、データは親および子で複製されます。 <p>注： このオプションは、集約ストレージ・アウトラインに保管された階層には適用されません。</p> <ul style="list-style-type: none"> ● LabelOnly - この次元に関連付けられているデータはありません。 	<ul style="list-style-type: none"> ● ASODimensionDataStorage (次元ルート・メンバーの場合) ● ASOMemberDataStorage (次元メンバーの場合)
Data Storage (BSO)	<p>次元およびメンバーの BSO ストレージ・オプションを選択します:</p> <ul style="list-style-type: none"> ● StoreData - データは次元とともに保管されます。 ● ShareData - このメンバーに関連付けられているデータは共有できます。ShareData プロパティは、メンバーのみに適用されます。次元ルート・メンバーは共有できません。 ● NeverShare - この次元に関連付けられているデータは、1つの子を持つ親など、暗黙の共有関係がある場合でも共有できません。この場合、データは親および子で複製されます。 ● LabelOnly - この次元に関連付けられているデータはありません。 ● DynamicCalcAndStore - この次元に関連付けられているデータは、ユーザーが要求するまで計算されません。一度計算されると、そのデータは保管されます。 ● DynamicCalc - この次元に関連付けられているデータは、ユーザーが要求するまで計算されません。データは保管されず、要求が実行された後で破棄されます。 	<ul style="list-style-type: none"> ● BSODimensionDataStorage (次元ルート・メンバーの場合) ● BSOMemberDataStorage (次元メンバーの場合)
Dimension Formula (ASO)	<p>セルをダブルクリックし、セクタ・ボタンをクリックして、メモ・エディタを開きます。式を入力し、「OK」をクリックします。</p> <p>適切な ASO MDX 構文を使用します。</p>	ASODimensionFormula (次元ルート・メンバーの場合)
Dimension Formula (BSO)	<p>セルをダブルクリックし、セクタ・ボタンをクリックして、メモ・エディタを開きます。式を入力し、「OK」をクリックします。</p> <p>適切な BSO CALCULATOR 構文を使用します。</p>	BSODimensionFormula (次元ルート・メンバーの場合)
Dimension Solve Order	<p>選択した次元のソリューション・シーケンスに数値を入力します。たとえば、この次元を2番目に解決する場合は、「2」を入力します。</p>	DimensionSolveOrder

プロパティ・ラベル	説明	プロパティ名
Dimension Sort Order	<p>Profitability and Cost Management によって生成された Essbase アウトライン内の次元を配置する場所を示す数値を入力します。</p> <p>たとえば、この次元が Essbase アウトラインの 2 番目の次元である場合は、2 を入力します。</p> <p>Dimension Sort Order は、別名次元と UDA 次元を除く、モデル内のすべての次元に設定する必要があります。</p> <p>次元ソート順が連続しており、一意かつ 1 以上である。</p> <p>ソート順は次のように設定します:</p> <ul style="list-style-type: none"> ● メジャー次元がデフォルトで 1 に設定されています。 ● AllocationType 次元がデフォルトで 2 に設定されています。 ● POV 次元とビジネス次元は、3 以上に設定する必要がある。 ● 属性次元は常に最後の次元としてソートする必要がある。 <p>たとえば、12 個の連続した次元のうち 4 個が属性次元である場合、属性次元には 9、10、11 および 12 を設定する必要があります。</p>	DimensionSortOrder
Dimension Storage Type	<p>「Dimension Storage Type」プロパティは、Essbase のブロック・ストレージ(BSO)データベースに対してのみ使用されます。次元に必要なストレージのタイプを選択します:</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 密 ● 疎 	DimensionStorageType
Hierarchy Type (次元のみ)	<p>「Hierarchy Type」プロパティは、Essbase の集約ストレージ(ASO)データベースにのみ使用されます。レポート用データベースが Profitability and Cost Management によって生成されます。</p> <p>次元の階層のタイプを設定します:</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 次の集計記号を使用する次元メンバーには「保管済」を選択します: <ul style="list-style-type: none"> ○ + (加算) ○ ~ (無視) <p>注: メンバーの親が LABEL_ONLY に設定されている場合、非集計演算子または無視(~)は、保管済階層にのみ使用できません。</p> ● 加算や無視などの集計記号を使用する次元メンバーの場合、または次元メンバーに式が含まれる場合は「動的」を選択します。 ● 代替階層をサポートする場合は、「使用可能」を選択します 	DimensionHierarchyType
Hierarchy Type (メンバーのみ)	<p>メンバー元の階層のタイプを設定します:</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 保管(最初の Gen2 の子用) ● 動的(2 番目以降の Gen2 の子用。2 番目の Gen2 メンバーは代替階層をホスト可能) ● なし(使用不可) 	HierarchyType
集約でのレベルの使用	<p>プロパティ・グリッドに PrimaryLevelWeightingDim について表示されます。</p>	

プロパティ・ラベル	説明	プロパティ名
Member Formula (ASO)	セルをダブルクリックし、セクタ・ボタンをクリックして、メモ・エディタを開きます。式を入力し、「OK」をクリックします。 適切な ASO MDX 構文を使用します。	ASOMemberFormula
Member Formula (BSO)	セルをダブルクリックし、セクタ・ボタンをクリックして、メモ・エディタを開きます。式を入力し、「OK」をクリックします。 適切な BSO CALCULATOR 構文を使用します。	BSOMemberFormula
Member Solve Order (メンバーのみ)	Essbase が式を検索する優先度を表す数値を入力します。たとえば、このメンバーを 2 番目に解決する場合は、「2」を入力します。 このプロパティは、ASO データベースのみに適用されます。 解決順が 0 のメンバーは、そのメンバーの次元の解決順を継承します。 同じ解決順を持つメンバーは、ディメンション・ソート順プロパティで別の指定がないかぎり、データベース・アウトラインでそのメンバーの次元が現れる順に評価されます。 解決順のないメンバーは、解決順のあるメンバーの後に評価されます。	MemberSolveOrder
POV Dimension	この次元を選択したモデルの POV 次元として設定する場合は、このチェック・ボックスを選択します。	IsPOVDimension
POV Display Order	複数の POV 次元がある場合は、1、2、3 などの数値を入力して、各 POV 次元の表示順を設定します。	POVDisplayOrder
Primary Level Weighting	集約操作中にビュー選択エンジンで選択できるレベルを制限します。これらの設定は、Essbase (ASO)アプリケーションのみに適用されます。 次のオプションのいずれかを選択します: <ul style="list-style-type: none"> ● Default - ビュー選択エンジンは選択するレベルを自由に決定できます。これは、新規の階層に対する初期値です。 ● AllLevels - ビュー選択エンジンは階層のすべてのレベルを集約対象とみなします。 ● NoAggregation - ビュー選択エンジンはどのレベルも集約用に選択できません。 ● TopLevelOnly - ビュー選択エンジンは次元の最上位レベルのみを集約対象とみなします。 ● BottomaTop - ビュー選択エンジンは、次元の最上位レベルおよび最下位レベルのみを集約対象とみなします。 ● BottomLevelOnly - ビュー選択エンジンは次元の最下位レベルのみを集約対象とみなします。 	PrimaryLevelWeighting
Two Pass Calculation (次元のみ)	BSO データベースのみの場合、アウトラインを通じて 2 番目のパスで次元を計算するためのチェック・ボックスを選択します。	TwoPassCalc (次元ルート・メンバーの場合)

プロパティ・ラベル	説明	プロパティ名
Two Pass Calculation (メンバーのみ)	BSO データベースのみの場合、アウトラインを通じて 2 番目のパスでメンバーを計算するためのチェック・ボックスを選択します。	TwoPassCalc
UDA	<p>選択したメンバーの UDA 名を入力します。</p> <p>UDA 次元は、Performance Management Architect に存在し、UDA が追加される先のベースに関連付けられている必要があります。「次元の関連付けの表示」を参照してください。</p> <p>最大 256 文字までの英数字を入力できます。</p> <p>注： Unicode 使用可能データベースでは、最大 80 文字まで許可されます。</p>	UDA
Unicode	Unicode を選択して、アプリケーションを Unicode モードに設定します。Unicode モードのアプリケーションは複数のキャラクタ・セットをサポートします。	Unicode

この章の内容

アプリケーション・プロパティ	403
次元プロパティおよびメンバー・プロパティ	409

アプリケーション・プロパティ

Performance Management Architect を使用して、Essbase (ASO)および Essbase (BSO) アプリケーションを作成し、Essbase および Planning や Profitability and Cost Management などの他のアプリケーションの次元に基づいてレポートを提供します。

次の表に、Essbase (ASO)アプリケーションおよび Essbase (BSO)アプリケーションのプロパティをアルファベット順に示します。特に注記がないかぎり、プロパティは両方のアプリケーション・タイプに適用されます。ラベル列は、Performance Management Architect プロパティ・グリッドに表示される各プロパティのラベルを示します。プロパティ名列に表示される名前を使用すると、Performance Management Architect バッチ・クライアントを使用してプロパティ値を変更できます。『Oracle Hyperion Enterprise Performance Management Architect バッチ・クライアント・ユーザー・ガイド』を参照してください。

注： Essbase (ASO)は Enterprise Analytics とも呼ばれます。Essbase (BSO)は Essbase Analytics とも呼ばれます。

表 42 Essbase (ASO)アプリケーションおよび Essbase (BSO)アプリケーションのプロパティ

ラベル	説明	プロパティ名
Allow Duplicates in Outline	<p>アウトラインでの重複メンバー名を許可する場合は選択します。</p> <p>デフォルトでは、Essbase のアウトラインで、メンバー名を一意にする必要があります。既存の一意のアウトラインで重複メンバー名を許可する場合は、このオプションを選択して、重複メンバーを許可するようにアプリケーションを変換できます。アプリケーションを一度変換すると、一意に戻すことはできません。</p> <p>デフォルトでは、重複メンバー名を許可するアプリケーションのすべての次元では、重複メンバー名が許可されます。重複メンバー名のアウトラインの 1 つ以上の次元で、「次元で重複を許可する」オプションを選択解除し、次元で一意のメンバー名を要求することもできます。</p> <p>デフォルト値: FALSE</p>	AllowDuplicatesInOutline
Attribute Calculations Avg Name	<p>アウトラインにおける名前の重複を避けるために、属性計算次元またはそのメンバーの名前の変更が必要になる場合があります。</p> <p>必要に応じて、属性計算次元の新規名前またはすべてのメンバーの新規名前を指定します。指定した名前は、レポートおよびスプレッドシートで使用されます。メンバーの機能は、メンバー名の影響を受けません。たとえば、どのような名前であってもカウントされます。</p> <p>省略可能: 属性計算の Avg メンバーに新規名前を指定します。</p> <p>注: このオプションは、Essbase (BSO)アプリケーションのみに適用されます。</p> <p>デフォルト値: Avg</p>	AttributeCalculationsAvgName
Attribute Calculations Boolean False Name	<p>省略可能: ブール属性次元のすべての FALSE メンバーに対する名前を入力します。たとえば、FALSE 値を持つすべてのメンバーを No と名付けます。</p> <p>デフォルト値: FALSE</p>	AttributeCalculationsBooleanFalseName
Attribute Calculations Boolean True Name	<p>省略可能: ブール属性次元のすべての TRUE メンバーに対する名前を入力します。たとえば、TRUE 値を持つすべてのメンバーを Yes と名付けます。</p> <p>デフォルト値: TRUE</p>	AttributeCalculationsBooleanTrueName
Attribute Calculations Count Name	<p>省略可能: 属性計算平均の Count メンバーに新規名前を指定します。</p> <p>注: このオプションは、Essbase (BSO)アプリケーションのみに適用されます。</p> <p>デフォルト値: Count</p>	AttributeCalculationsCountName
Attribute Calculations Date Name	<p>日付属性次元のメンバー名のフォーマットを選択します:</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 月が最初(mm-dd-yyyy) ● 日が最初(dd-mm-yyyy) <p>デフォルト値: 月が最初</p>	AttributeCalculationsDateName

ラベル	説明	プロパティ名
Attribute Calculations Dimension Name	省略可能: 属性計算次元に新規名前を指定します。 デフォルト値: 属性計算	AttributeCalculationsDimensionName
Attribute Calculations Max Name	省略可能: 属性計算 Max メンバーに新規名前を指定します。 注: このオプションは、Essbase (BSO)アプリケーションのみに適用されます。 デフォルト値: Max	AttributeCalculationsMaxName
Attribute Calculations Min Name	省略可能: 属性計算 Min メンバーに新規名前を指定します。 注: このオプションは、Essbase (BSO)アプリケーションのみに適用されます。 デフォルト値: Min	AttributeCalculationsMinName
Attribute Calculations Range Name	属性値が数値範囲の上限または下限を指定します。たとえば、属性名 1000、100000 および 1000000 で「範囲の一番上」を選択すると、範囲は、0 から 1000、1001 から 100000、および 100001 から 1000000 になります。 次のオプションのいずれかを選択します: <ul style="list-style-type: none"> ● 範囲の一番下 ● 範囲の一番上 デフォルト値: 範囲の一番上	AttributeCalculationsRangeName
Attribute Calculations Sum Name	省略可能: 属性計算次元に新規名前を指定します。 デフォルト値: Sum	AttributeCalculationsSumName
Auto Configure	次元のデータ構成の疎/密を Essbase に自動的に判断させるかどうかを指定します。 <ul style="list-style-type: none"> ● TRUE: Essbase は、各次元の疎/密を自動的に設定します。次元ストレージ・タイプを手動で変更できません。 ● FALSE: データ構成の疎/密を手動で変更できるようにします。 注: この設定は、Essbase (BSO)アプリケーションのみに適用されます。 デフォルト値: FALSE 注: Performance Management Architect の Auto Configure プロパティを変更しても、Essbase 内で上書きされないことがあります。Essbase アプリケーションで Dimension Storage Type プロパティを設定する場合は、Essbase にアプリケーションを配置または再配置する前に、Auto Configure プロパティ値を FALSE に設定する必要があります。	AutoConfigure

ラベル	説明	プロパティ名
Case Sensitive	<p>大文字と小文字を区別してメンバーを扱うかどうかを示されます。</p> <ul style="list-style-type: none"> このチェック・ボックスを選択した場合: メンバー名の大文字と小文字は区別されます。たとえば、Product と product は区別されます。名前の大文字と小文字のみが異なるメンバーは、すべてのメンバー比較と検索操作で個別のメンバーとして扱われます。これはデフォルトです。 このチェック・ボックスを選択解除した場合: メンバー名の大文字と小文字は区別されません。 <p>デフォルト値: TRUE</p>	CaseSensitive
Comment	<p>省略可能: このアプリケーションを説明するコメントを入力します。</p>	Comment
Conversion Method	<p>換算の計算時に使用する換算方法を選択します:</p> <ul style="list-style-type: none"> 乗算: メイン・データベースに保管されている現地のデータ値に、通貨データベースに格納されている換算レートを乗算します。 除算(デフォルト): メイン・データベースに保管されているローカルのデータ値を、通貨データベースに保管されている換算レートで除算します。 <p>注: この設定は、Essbase (BSO)アプリケーションのみに適用されます。</p>	ConversionMethod
Currency Database	<p>通貨換算の計算用にリンクする通貨データベースを選択します。現在のデータベースに通貨データベースをリンクしなければ、通貨データベースは「なし」になります。</p> <p>注: この設定は、Essbase (BSO)アプリケーションのみに適用されます。</p>	CurrencyDatabase
Database Name	<p>このアプリケーションを配置する際に作成する多次元データベースの名前を入力します。</p>	DatabaseName

ラベル	説明	プロパティ名
Date Format	<p>日付フォーマットを選択します:</p> <ul style="list-style-type: none"> ● mon dd yyyy ● month dd yyyy ● mm/dd/yy ● mm/dd/yyyy ● yy.mm.dd ● dd/mm/yy ● dd.mm.yy ● dd-mm-yy ● dd month yy ● dd mon yy ● month dd, yy ● mon dd, yy ● mm-dd-yy ● yy/mm/dd ● yymmdd ● dd Month yyyy ● dd mon yyyy ● yyyy-mm-dd ● yyyy/mm/dd ● 長いフォーマット ● 短いフォーマット <p>日付メジャーを使用して、メンバーを日付型の値に関連付けることができます。メジャー次元の日付を処理する機能は、時間次元を使用して表現するのが困難な分析のタイプで役立ちます。</p> <p>アプリケーションの Typed Measure Enabled プロパティを選択してから、日付フォーマットを選択し、「日付」タイプとして定義されているメジャーを追加します。</p> <p>日付値は内部的には数値として保管されますが、それらの値は、Essbase にはフォーマットされた日付文字列として配置されます。クエリーされると、日付メジャーは選択された日付フォーマットに応じて表示されます。</p> <p>日付フォーマットと日付メジャーの詳細は、『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』を参照してください。</p>	DateFormat

ラベル	説明	プロパティ名
Prefix/Suffix Format	<p>ブール、日付および数値属性次元のメンバー名に、Essbaseが付加する値のソースを選択します:</p> <ul style="list-style-type: none"> ● なし: 接頭辞や接尾辞を付けずに完全なメンバー名を使用します。たとえば、6000000 のようになります。 ● 次元: 完全なメンバー名に、属性次元の名前を接頭辞または接尾辞として付加します。たとえば、Population_6000000 のようになります。 ● 親: 完全なメンバー名に、親の名前を接頭辞または接尾辞として付加します。たとえば、Small_6000000 のようになります。 ● 親の親: 完全なメンバー名に、親の親の名前を接頭辞または接尾辞として付加します。たとえば、Population_6000000 のようになります。 ● 祖先: 完全なメンバー名に、上位世代のすべての名前を接頭辞または接尾辞として付加します。たとえば、Population_Small_6000000 のようになります。 <p>デフォルト値: なし</p>	PrefixSuffixFormat
Prefix/Suffix Separator	<p>区切り記号: 属性メンバー名および接頭辞または接尾辞との間に挿入する区切り記号を、次の中から選択します:</p> <ul style="list-style-type: none"> ● アンダースコア(_): たとえば、Population_Small_6000000 ● パイプ(): たとえば、Population Small 6000000 ● キャレット(^): たとえば、Population^Small^6000000 <p>デフォルト値: アンダースコア(_)</p>	PrefixSuffixSeparator
Prefix/Suffix Value	<p>接頭辞と接尾辞のどちらを付加するかを選択します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 接頭辞: 指定した接頭辞を、ブール、日付および数値属性次元のメンバー名の前に付加します。たとえば、Population_6000000 のようになります。「接頭辞」がデフォルト値です。 ● 接尾辞: 指定した接尾辞を、ブール、日付および数値属性次元のメンバー名の後ろに付加します。たとえば、6000000_Population のようになります。 <p>デフォルト値: 接頭辞</p>	PrefixSuffixValue
Typed Measure Enabled	<p>アプリケーションで型付きメジャーを有効にする場合に選択します。</p> <p>メジャーは、数値の他に、テキストや日付タイプの値にも関連付けることができます。</p> <p>型付きメジャーの詳細は、『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』および『Oracle Essbase Administration Services オンライン・ヘルプ』を参照してください。</p>	TypedMeasureEnabled

ラベル	説明	プロパティ名
Unicode	<p>アプリケーションを Unicode モードに移行するには、このチェック・ボックスを選択します。</p> <p>注意 アプリケーションを配置した後は、Unicode モードの設定を元に戻せません。アプリケーションの Unicode モードへの移行については、『Oracle Essbase Database 管理者ガイド』を参照してください。</p> <p>デフォルト値: FALSE</p>	Unicode

次元プロパティおよびメンバー・プロパティ

この表は、Essbase (ASO)および Essbase (BSO)の次元とメンバーの次元プロパティとメンバー・プロパティについて説明しています。特に注記がないかぎり、プロパティは次元とメンバーの両方のタイプに適用されます。

表 43 Essbase (ASO)および Essbase (BSO)の次元プロパティおよびメンバー・プロパティ

ラベル	説明	名前
Alias	<p>テキスト・ボックスに別名を入力します。</p> <p>そのデータベースに対して定義されているすべての別名テーブル、および現在のメンバーに対して定義されているすべての別名が表示されます。</p> <ul style="list-style-type: none"> ● デフォルト: 現在の次元またはメンバーのデフォルトの別名を割り当てるかまたは変更する場合は、既存の別名をクリックして新規名前を入力します。適切な命名規則に従います。すべてのデータベースには、「Default」という別名テーブルがあります。 ● 別名テーブルの一覧: 現在の次元またはメンバーの別名を割り当てるかまたは変更する場合は、別名テーブルの横にある既存の別名をクリックして新規名前を入力します。適切な命名規則に従います。 	Alias
Allow Duplicates In Dimension	<p>重複メンバー名を許可するアウトラインで、次のいずれかのオプションを選択し、細かいレベルでメンバー名の一意性を指定します:</p> <ul style="list-style-type: none"> ● TRUE: 次元内で重複メンバー名を許可します。 ● FALSE: 次元内では一意のメンバー名は必須です。これは、重複メンバー名のアウトラインのデフォルトです。 <p>注: この設定は、一意のメンバー名を必須とするアウトラインには適用されません。</p>	AllowDuplicatesInDimension

ラベル	説明	名前
Attribute Type	<p>属性タイプを選択したメンバーに関連付けます。メンバーのクエリーおよびフィルタに使用できる次元メンバーに割り当てられた属性の属性値を作成します。</p> <p>属性タイプは次のとおりです:</p> <ul style="list-style-type: none"> ● テキスト ● ブール ● 日付 ● 数値 <p>たとえば、「カフェイン入り」の属性タイプはブール値になります。データ値は True または False です。</p>	AttributeType
Comment	<p>次元またはメンバーのコメントを入力します。コメントには最大 255 文字を指定できます。デフォルトでは、テキスト・ボックスには現在のコメントが表示されます(存在する場合)。</p> <p>属性次元またはメンバーにコメントを割り当てられません。</p>	Comment
Compression	<p>選択された次元を圧縮次元として作成します。アカウント次元を圧縮することにより、集約ストレージ・データベースを最適化することをお勧めします。</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 選択されている場合、データは次元内で(キー, 複数値)としてグループ化されます。 ● 選択されていない場合、データは(キー, 単一値), (キー, 単一値)として格納されます。 <p>注: この設定は、Essbase (ASO)アプリケーションにのみ適用されます。</p>	Compression
Consolidation	<p>メンバー連結プロパティは、子を親にロール・アップする方法を指定します。現在のメンバーが次元または属性でない場合は、連結演算子を選択してそのメンバーに割り当てます:</p> <ul style="list-style-type: none"> ● + (加算) ● - (減算) ● * (乗算) ● / (除算) ● % (パーセント) ● ~ (連結では無視する) ● ^ (連結しない) ● NotUsed <p>デフォルト値: + (加算)</p> <p>『Essbase Administration Services オンライン・ヘルプ』の属性データの計算に関する項目も参照してください。</p> <p>注: 集約ストレージ・アウトラインでは、連結演算子の使用に一部制限があります。</p>	Consolidation

ラベル	説明	名前
Currency	<p>選択したアイテムが次元で、その次元に国のタグが付けられている場合に表示されます。</p> <p>通貨名を入力します(たとえば、米国ドルの場合は USD)。通貨換算のためにメイン・データベースのアウトラインを準備する際には、国次元およびそのメンバーに通貨名を割り当てる(たとえば、アメリカにはドルを、ドイツにはユーロを割り当てる)必要があります。</p> <p>注： この設定は、Essbase (BS0)アプリケーションのみに適用されます。</p>	Currency
Currency Conversion	<p>現在のメンバーが勘定科目次元のメンバーで、通貨アプリケーションの中にある場合は、次のオプションを設定します。</p> <p>注： この設定は、Essbase (BS0)アプリケーションのみに適用されます。</p> <p>「通貨換算」ドロップ・ダウン・リストがあります。次の通貨換算オプションの1つを選択して、通貨の為替レートのカテゴリを定義します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ● なし: このメンバーには通貨換算との関係はありません。これはデフォルトの設定です。 ● 換算しない: メンバーは通貨の値ではないために換算されません。その値は数量またはパーセンテージなどの可能性があります。 ● カテゴリ: このメンバーは、指定したカテゴリへの通貨換算を必要とします。 <p>『Essbase Administration Services オンライン・ヘルプ』の通貨換算のためのメイン・データベース・アウトラインの準備に関する項目を参照してください。</p>	CurrencyConversion
Currency Category	<p>現在のメンバーが勘定科目次元のメンバーで、メンバーが通貨換算を必要とする場合は、必要な通貨換算のタイプを入力します。</p> <p>通貨カテゴリ・タイプは、通貨データベースの勘定科目次元のメンバーの名前です。</p> <p>『Essbase Administration Services オンライン・ヘルプ』の会計メンバーへの通貨カテゴリの割当てに関する項目を参照してください。</p> <p>注： この設定は、Essbase (BS0)アプリケーションのみに適用されます。</p>	CurrencyCategory

ラベル	説明	名前
Data Storage	<p>次のいずれかのストレージ・オプションを選択します:</p> <ul style="list-style-type: none"> ● StoreData: 次元とともにデータを保管するには、これを選択します。 ● DynamicCalcAndStore: ユーザーから要求されるまでこの次元と関連するデータが計算されないようにするには、これを選択します。一度計算されると、そのデータは保管されます。 このオプションは、集約ストレージ・アウトラインには適用されません。 ● DynamicCalc: ユーザーから要求されるまでこの次元と関連するデータが計算されないようにするには、これを選択します。データは保管されず、要求が実行された後で破棄されます。 このオプションは、集約ストレージ・アウトラインには適用されません。 ● NeverShare: 暗黙の共有関係(親と1つの子など)がある場合でもこの次元と関連するデータが共有されないようにするには、これを選択します。この場合、データは親および子で複製されます。 注: このオプションは、集約ストレージ・アウトラインに保管された階層には適用されません。 ● LabelOnly: この次元にデータを関連付けないようにするには、これを選択します。 このオプションは、集約ストレージ・アウトラインに対して制限があります。 ● Share Data: 共有メンバーの場合です。メンバーは同じ名前の別のメンバーとストレージ・スペースを共有します。重複メンバー名を使用可能にするアウトラインでは、共有としてタグ付けしたメンバーと同じ名前の複数メンバーが含まれる場合、「共有メンバーの複製」ダイアログ・ボックスが表示されます。このダイアログ・ボックスには、アウトライン内の共有メンバー名と一致するすべてのメンバー名が表示されます。共有メンバーの基準にする重複メンバーを選択します。集約ストレージ・データベースでの教諭メンバーの使用の詳細は、『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』の代替階層に関する項を参照してください。 <p>デフォルト値: NeverShare</p> <p>注: Performance Management Architect を使用して、ハイブリッド分析または拡張リレーショナル・アクセス・キューブを作成できません。</p>	DataStorage

ラベル	説明	名前
Dimension Solve Order	<p>次のいずれかの解決順序オプションを選択します:</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 既存の値または 0: アウトラインで指定した解決順の設定を使用する場合に選択します。既存の設定がない場合、Essbase は解決順の値を 0 に設定します。 ● 新規の値: 優先度を表す数字を指定する場合に選択します。Essbase はその値で式を計算します。解決順が最上位のメンバーに対する式が優先されます。解決順には 0 から 127 までの数値を指定できます。0 より小さい、または 127 より大きい値の場合は、それぞれ 0 または 127 にリセットされます。警告メッセージは表示されません。デフォルト値は 0 です。 <p>メンバー・レベルで解決順序を指定することもできます。解決順序が設定されていないメンバーは、その次元の解決順序を受け継ぎます。</p> <p>解決順序の詳細は、『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』で計算順序を参照してください。</p> <p>注: これらの設定は、Essbase (ASO)アプリケーションにのみ適用されます。</p>	DimensionSolveOrder
Dimension Sort Order	<p>Essbase アウトラインで次元を配置する必要がある場所を示す数値を入力します。たとえば、次元がアウトラインの番目にある必要がある場合は、次のように入力します:</p> <p style="text-align: center;">4</p>	DimensionSortOrder
Expense Reporting	<p>@VAR または@VARPER 関数を含む式を割り当てられている会計メンバーの場合は、「支出」または「支出外」を指定して、Essbase で実績データと予算データの差を計算する方法を決定できます。</p> <p>注: これらの設定は、Essbase (BSO)アプリケーションにのみ適用されます。</p>	ExpenseReporting

ラベル	説明	名前
Format String	<p>フォーマット文字列を使用して、Essbase データベース・メンバーの値(セル・コンテンツ)を数値タイプ・メジャーでフォーマットして、クエリーの実行時に、事前定義されたテキスト、日付またはその他のタイプの値として表示します。結果として表示される値はセルのフォーマットされた値(MDX では FORMATTED_VALUE プロパティ)です。</p> <p>このプロパティを使用するには、Typed Measure Enabled プロパティが選択されている必要があります。このプロパティは、勘定科目、時間、汎用、通貨、国、属性の各次元に適用されます。</p> <p>MDX 言語を使用して、フォーマット文字列式を記述します。フォーマットは次のとおりです:</p> <pre style="text-align: center;">MdxFormat(string_value_expression)</pre> <p>たとえば、次のフォーマット文字列は、負のセル値を括弧で囲まれた正の値として表示します。この式は、MDX 関数 CellValue()を参照して、フォーマットされるセル値にアクセスします。</p> <pre style="text-align: center;">/* Enclose negative values in "(,)" */ IIF(CellValue() < 0, Concat(Concat("(, numtostr(-CellValue()))", ")" numtostr(CellValue()))</pre> <p>フォーマット文字列の詳細は、Oracle Essbase データ管理者ガイドおよび『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』を参照してください。</p>	FormatStringDuplicate (次元の場合) FormatString (メンバーの場合)
Fully Qualified Shared Member	<p>重複メンバー名を使用可能にするアウトラインでは、メンバーの修飾名とともに重複(一意でない)名を表示します。修飾メンバー名は、メンバー名に対して祖先を接頭辞にして(名前が一意になるまで祖先をさかのぼって)構成されます。</p> <p>たとえば、New York という名前のメンバーがアウトラインに 2 つ存在し、一方は State、他方は City の下に含まれている場合は、修飾メンバー名には次のように、2 つのメンバーを区別する最初の祖先の名前が含まれます:</p> <pre>[State].[New York] [City].[New York]</pre>	FullyQualifiedSharedMember

ラベル	説明	名前
Hierarchy Type	<p>集約ストレージ・データベースの任意の次元および親メンバーについて、階層タイプを定義するオプションを選択します:</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 使用可能: 複数の階層が有効です。保管階層と動的階層の両方を次元内で使用するには、これを選択します(このオプションは次元レベルでのみ使用できます)。 ● 使用不可: 複数の階層は無効です(このオプションは、メンバーでのみ使用できます)。 ● 保管済: 次元または親メンバーを保管階層として設定するには、これを選択します。勘定科目次元以外では、これがデフォルトです。 ● 動的: 次元または親メンバーを動的階層として設定するには、これを選択します。 <p>勘定科目タグが付けられた次元は自動的に動的次元とみなされます。勘定科目次元を保管階層に指定できません。</p> <p>デフォルト値: 保管済</p> <p>注: これらの設定は、Essbase (ASO)アプリケーションにのみ適用されます。</p> <p>動的階層と保管階層の使用に関する制限の重要な情報は、『Oracle Essbase Administration Services オンライン・ヘルプ』の階層に関する項を参照してください。</p>	HierarchyType
Member Formula ASO	<p>メンバーと関連付ける式を入力します。ASO(集約ストレージ)の式は MDX フォーマットである必要があります。</p> <p>MDX での式作成の詳細およびその他のガイドラインは、『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』を参照してください。</p> <p>注: MemberFormula プロパティは非推奨です。値をインポートすると、警告が表示され、値は無視されます。ASOMemberFormula プロパティは、かわりに Essbase ASO アプリケーションに使用してください。</p>	ASOMemberFormula
Member Formula BSO	<p>メンバーと関連付ける式を入力します。BSO(ブロック・ストレージ)の式は、標準の Essbase 計算スクリプト・フォーマットである必要があります。</p> <p>メンバー名が引用符で囲まれている場合(例: "Root Beer"+"Cream Soda";)は、式全体を引用符で囲んでください("...")。この作業を行わないと、Essbase では先頭と末尾の引用符が削除され(例: Root Beer"+"Cream Soda)、結果としてこの式が無効になります。</p> <p>正しい構文は次のとおりです:</p> <pre>"Root Beer"+"Cream Soda"</pre> <p>計算スクリプト・フォーマットでの式作成の詳細およびその他のガイドラインは、『Oracle Essbase Database 管理者ガイド』を参照してください。</p> <p>注: MemberFormula プロパティは非推奨です。値をインポートすると、警告が表示され、値は無視されます。BSOMemberFormula プロパティは、かわりに Essbase BSO アプリケーションに使用してください。</p>	BSOMemberFormula

ラベル	説明	名前
Member Solve Order	<p>優先度を表す数字を指定します。Essbaseはその値で式を計算します。解決順が最上位のメンバーに対する式が優先されます。解決順には0から127までの数値を指定できます。0より小さい、または127より大きい値の場合は、それぞれ0または127にリセットされます。警告メッセージは表示されません。</p> <p>デフォルト値: 0</p> <p>解決順が0のメンバーは、そのメンバーの次元の解決順を継承します。次元ソート順プロパティで他の指定がないかぎり、解決順が同じメンバーは、それらのメンバーの次元がデータベース・アウトラインに出現する順序で評価されます。解決順のないメンバーは、解決順のあるメンバーの後に評価されます。</p> <p>注： これらの設定は、Essbase (ASO)アプリケーションにのみ適用されます。</p> <p>詳細は、『Oracle Essbase Administration Services オンライン・ヘルプ』の計算の順序に関する項目を参照してください。</p>	MemberSolveOrder
Named Level	<p>論理的に関連するすべての名前付き世代に適用できるレベルの一意の名前を指定します。たとえば、「製品」という名前の付いたレベルは、製品を含むすべてのレベルに適用できます。</p> <p>94 ページの「名前付きレベルの操作(Essbase (ASO)および Essbase (BSO)のみ)」を参照してください。</p>	NamedLevel
Named Generation	<p>関連メンバーを関連付けるための一意の名前を指定します。たとえば、「地域収益」という世代には、各地域で達成された収益の金額が含まれます。</p> <p>92 ページの「名前付き世代の操作(Essbase (ASO)および Essbase (BSO)のみ)」を参照してください。</p>	NamedGeneration
Period Type	<p>「基本期間」や「年期間」などの期間の種類を指定します。</p>	PeriodType
集約でのレベルの使用 (基本次元向け。)	<p>集約操作中にビュー選択エンジンで選択できる基本次元のレベルを制限します。</p> <p>次のオプションのいずれかを選択します:</p> <ul style="list-style-type: none"> ● デフォルト: ビュー選択エンジンは選択するレベルを自由に決定できます。これは、新規の階層に対する初期値です。 ● AllLevels: ビュー選択エンジンは階層のすべてのレベルを集約対象とみなします。 ● NoAggregatopm: ビュー選択エンジンはどのレベルも集約用に選択できません。 ● TopLevelOnly: ビュー選択エンジンは次元の最上位レベルのみを集約対象とみなします。 ● BottomTop: ビュー選択エンジンは、次元の最上位レベルおよび最下位レベルのみが集約に対応するとみなします。 <p>注： これらの設定は、Essbase (ASO)アプリケーションにのみ適用されます。</p>	PrimaryLevelWeighting

ラベル	説明	名前
集約でのレベルの使用 (属性次元向け。)	<p>集約操作中にビュー選択エンジンで選択できる属性のレベルを制限します。</p> <p>次のオプションのいずれかを選択します:</p> <ul style="list-style-type: none"> ● デフォルト: ビュー選択エンジンは選択するレベルを自由に決定できます。これは、新規の階層に対する初期値です。 ● AllLevels: ビュー選択エンジンは階層のすべてのレベルを集約対象とみなします。 ● NoAggregation: ビュー選択エンジンはどのレベルも集約用に選択できません。 ● BottomLevelOnly: ビュー選択エンジンは属性次元の最下位レベルのみを集約対象とみなします。 <p>注: これらの設定は、Essbase (ASO)アプリケーションにのみ適用されます。</p>	SecondaryLevelWeighting
Skip Value	<p>オプションを選択して、タイム・バランスの計算中に Essbase がスキップまたは無視する対象を指定します。タイム・バランス・プロパティに「期首」、「期末」または「平均」を設定した場合にはスキップ設定のみ指定できます。</p> <ul style="list-style-type: none"> ● なし: 親の値を計算するときに、ゼロおよび欠落している値を含めるには、これを選択します。 <p>注: 計算時に Essbase が #MISSING 値を検出した場合、#MISSING 値はメンバーの総数で除算されません。代わりに、実際の値を持つメンバーの数で #MISSING 値が除算されます。</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 欠落: 親の値を計算するときに #MISSING 値を除外するには、これを選択します。 ● ゼロ: 親の値を計算するときにゼロを除外するには、これを選択します。 ● 欠落およびゼロ: 親の値を計算するときに、#MISSING 値およびゼロを除外するには、これを選択します。 <p>デフォルト値: なし</p>	SkipValue
Smart List	<p>特殊文字やスペースを入れずに、英数字とアンダースコア文字を含む一意の名前を指定します。</p> <p>メジャーの「タイプ」をテキストとして指定する場合は、スマート・リストを使用して、テキストベースのコンテンツをメジャーにマップします。テキストのコンテンツの格納と分析は、セルがテキスト値の確定リストの 1 つを持つ必要がある場合に便利です。たとえば、5 つの異なる色の製品が販売されることがあります。色は、対応する数値 ID にマップされるテキスト文字列のセットです。これらのマッピングは、作成する次元レベルのスマート・リストに含まれます。</p> <p>114 ページの「スマート・リストの作成」 および 115 ページの「スマート・リストの次元プロパティの変更」 を参照してください。</p>	SmartList

ラベル	説明	名前
Time Balance	<p>勘定科目次元のタイム・バランス・プロパティを設定するオプションを選択します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 既存の定義またはなし: アウトラインで指定された設定を使用します。既存の設定がない場合、Essbase はタイム・バランス・プロパティを「なし」に設定します。これはデフォルトです。 ● なし: タイム・バランス・プロパティを使用しません。メンバー値はデフォルトの方法で計算されます。 ● 期首: 親の値が期間の開始時点における値を表す場合は、このタイム・バランス・プロパティを選択します。 ● 平均: 親の値が期間中の平均値を表す場合は、このタイム・バランス・プロパティを選択します。 ● 期末: 親の値が期間の終了時点における値を表す場合は、このタイム・バランス・プロパティを選択します。 ● スキップ・プロパティ: 次のいずれかのオプションを選択して、タイム・バランスの計算中に Essbase がスキップまたは無視する対象を指定します。タイム・バランス・プロパティに「期首」、「期末」または「平均」を設定した場合にはスキップ設定のみ指定できます。 <ul style="list-style-type: none"> ○ なし: 親の値を計算するときに、ゼロおよび欠落している値を含めるには、これを選択します。 <p>注: 計算時に Essbase が #MISSING 値を検出した場合、#MISSING 値はメンバーの総数で除算されません。代わりに、実際の値を持つメンバーの数で #MISSING 値が除算されます。</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 欠落: 親の値を計算するときに #MISSING 値を除外するには、これを選択します。 ○ ゼロ: 親の値を計算するときにゼロを除外するには、これを選択します。 ○ 欠落およびゼロ: 親の値を計算するときに、#MISSING 値およびゼロを除外するには、これを選択します。 <p>注: このプロパティの値を親レベルで定義すると、すべての子がその値を自動的に継承します。</p> <p>注: 次のオプションは、Essbase アプリケーションには適用されません: 入力、フロー、残高、加重平均 - 実績平均、加重平均、実績 365。</p> <p>Essbase アプリケーションの配置の場合: 「タイム・バランス」が「残高」に設定されていると、プロパティは「期末」として Essbase に送信されます。「タイム・バランス」が「フロー」に設定されていると、プロパティは「なし」として Essbase に送信されます。</p> <p>デフォルト値: 既存の定義またはなし</p> 	TimeBalance
Two Pass Calculation	<p>アウトラインの 2 回目のパスでその次元を計算するには、このチェック・ボックスを選択します。</p> <p>注: これらの設定は、Essbase (BSO) アプリケーションにのみ適用されます。</p>	TwoPassCalc

ラベル	説明	名前
Type	<p>次のいずれかのオプションを選択します:</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 数値: デフォルト ● テキスト: メンバーがテキスト・メジャーかどうかを選択します。 ● 日付: メンバーが日付メジャーかどうかを選択します <p>タイプが「テキスト」の場合は、このメンバーにスマート・リストを関連付ける必要があります。</p> <p>タイプが「日付」の場合は、日付のフォーマットをこのメンバーに関連付ける必要があります。</p> <p>デフォルト値: 数値</p>	Type
UDA	<p>選択したメンバーの UDA 名を入力します。複数の UDA の場合はカンマで区切る必要があります。例: Small Market, New Market。</p>	UDA
Variance Reporting	<p>次のいずれかのオプションを選択して、実績データおよび予算データの差異を計算する方法を指定します。</p> <p>注: このプロパティの値を親レベルで定義すると、すべての子はその値を自動的に継承します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 「既存の定義または支出外」: アウトラインで指定されている設定を使用して実際のデータと予算データの差異を計算する場場合に選択します。既存の設定がない場合、Essbase は次元を支出外として保管します。これはデフォルトです。 ● 「支出外」: メンバーを支出外として設定する場合に選択します。支出外のアイテム(たとえば売上など)の予算を立てる場合は、売上実績が予算時の見積を上回ることを期待します。売上実績が予算を下回ると、差異は負数になります。 ● 支出: メンバーを「支出」に設定するときに選択します。ある期間の支出を予算化するとき、支出の実績が予算を下回る必要があります。実績が予算を上回ると、差異は負数になります。 <p>デフォルト値: NonExpense</p> <p>注: これらの設定は、Essbase (BSO)アプリケーションにのみ適用されます。</p>	VarianceReporting

15

統計およびシステム・プロパティの操作

この章の内容

統計プロパティ	421
次元システム・プロパティ	421
メンバー・システム・プロパティ	422

選択したカテゴリを問わず、次元メンバーに適用される統計およびシステム・プロパティがあります。プロパティには次の方法でアクセスします:

- 「管理」、「次元ライブラリ」の順に選択します。
- 次元またはメンバーを選択します。
- 右側のプロパティ・グリッドで、「カテゴリ」からタイプ(システムなど)を選択します。

統計プロパティ

表 44 次元とメンバーの統計プロパティ

ラベル	説明	名前
Child Count	子の数	ChildCount
Descendant Count	子孫の数	DescendantCount
Sibling Count	兄弟の数	SiblingCount
Reference Count	親の数	ReferenceCount
Hidden Member	内部的な用途にのみ使用されます	MemberHidden

次元システム・プロパティ

表 45 次元の統計プロパティ

ラベル	説明	名前
Dimension Type	テキストや数値など、定義済の機能を使用可能にする、次元によって収集されるデータの種類の種類です。たとえば、時間に定義済のカレンダー機能があるものとしてタグが付けられた次元などです。	DimensionClass

ラベル	説明	名前
Default Member Class	内部的な用途にのみ使用されます	Default Member Class
Dimension State	次元の状態: 「ローカル」または「共有」	Dimension State
Dimension Name	次元の名前	DimensionName
Dimension Description	次元によって収集または表示されるデータの要約	DimensionDescription
Display Properties	内部的な用途にのみ使用されます	DisplayProperties
Default Member	最上位メンバー	DefaultMember
Dimension Alias	配置済アプリケーションの次元に対して表示される名前	DimensionAlias
Dimension Owner	次元を変更および削除できるユーザーまたはグループ。権限の指定の詳細は、『Oracle Hyperion Enterprise Performance Management System ユーザーおよび役割セキュリティ・ガイド』を参照してください。	DimensionOwner
Dimension Readers	次元を表示できるユーザーおよびグループ。権限の指定の詳細は、『Oracle Hyperion Enterprise Performance Management System ユーザーおよび役割セキュリティ・ガイド』を参照してください。	DimensionReaders
Dimension Writers	次元を変更できるユーザーおよびグループ。権限の指定の詳細は、『Oracle Hyperion Enterprise Performance Management System ユーザーおよび役割セキュリティ・ガイド』を参照してください。	DimensionWriters
Source Dimension	現在の次元がコピーまたは同期するソース次元。	SourceDimensionName
IsCloned	内部的な用途にのみ使用されます	IsCloned

メンバー・システム・プロパティ

表 46 メンバーのシステム・プロパティ

ラベル	説明	名前
Member Class	内部的な用途にのみ使用されます。	MemberClass
Parent	所有次元または上位メンバーの名前	Parent
Parent Description	親によって収集または表示されるデータの要約	ParentDescription
Display String	内部的な用途にのみ使用されます	DisplayByString



このリリースにアップグレードする場合のプロパティに関する考慮事項

この付録の内容

- 以前のリリースとのプロパティの違い..... 423
- アプリケーションと配置済アプリケーションを比較する場合の考慮事項..... 428
- リリース 9.3.3 以降 Performance Management Architect に追加された新規プロパティ..... 429

この付録では、このリリースの Performance Management Architect で導入されたプロパティの変更と新しい検証に関する情報を示します。デフォルト・プロパティの変更および新しい検証が含まれ、次のリリースとこのリリースの比較を示します:

- リリース 9.3.3
- リリース 11.1.1.3
- リリース 11.1.2.x

アップグレード後に検証エラーが表示される場合、手動での修正が必要な場合があります。付録 B「アプリケーションの検証」を参照してください。

以前のリリースとのプロパティの違い

Performance Management Architect の新しいリリースで変更が加えられた既存のメンバーと次元のプロパティがあります。たとえば、ビジネス要件に基づいてプロパティのデフォルト値が変更されたり、プロパティ・タイプが変更されています。この表は、以前のリリースの Performance Management Architect とのプロパティの違いについて説明しています。

表 47 以前の Performance Management Architect のリリースとのプロパティの違い

プロパティ名	古い値	新しい値	影響	該当するアプリケーション・タイプ
AttributeCalculationSumName	<空白>	Sum	変更は不要です。	Essbase ASO

プロパティ名	古い値	新しい値	影響	該当するアプリケーション・タイプ
CapexAggregation	~(無視)	+ (加算)	更新が必要です。 Capital Asset Planning プラン・タイプのすべてのメンバーの場合: 値を~に手動で再設定します。	Planning
DataStorage	NeverShare	StoreData	更新が必要です。 値を NeverShare に手動で再設定します。	Planning、Essbase ASO、Essbase BSO
DataStorage	DynamicCalcAndStore	DynamicCalc	更新が必要です。 値を DynamicCalcAndStore に手動で再設定します。	Essbase BSO、Profitability
DataStorage (メンバー・プロパティ)	DynamicCalc	StoreData	更新が必要です。 値を DynamicCalc に手動で再設定します。	Essbase BSO、Profitability
DataStorageDuplicate	Store Date	StoreData	誤植の修正。変更は不要です。	Essbase ASO
DimensionHierarchyType	<空白>	保管済	複数の階層が有効でない場合、デフォルト値は「保管済」です。 複数の階層が有効で、値が「保管済」に設定されている場合、変更が必要です。	Essbase ASO、Profitability

プロパティ名	古い値	新しい値	影響	該当するアプリケーション・タイプ
DimensionSortOrder	0	9	<p>このプロパティは、「パフォーマンス設定」を使用して設定します。181 ページの「パフォーマンス設定の変更」を参照してください。</p> <p>Essbase アプリケーションの場合、新しい検証では、一意で連続した設定の使用が強制されます。これらの設定が既存のアプリケーションに対して正しく設定されていない場合、新しい検証が失敗し、「パフォーマンス設定」画面を使用してプロパティを適宜設定する必要があります。</p>	Profitability Essbase ASO、 Essbase BSO
DimensionStorageType	<空白>	疎	<p>変更は不要です。</p> <p>このプロパティは、次元の初期化時にデフォルトが設定されます。</p>	Essbase BSO
ExchangeRateType	なし	平均	<p>更新が必要です。</p> <p>値を「なし」に手動で再設定します。</p>	Planning
GridMissingLabelType	Data from Setting	Dropdown	<p>更新が必要です。</p> <p>値を Data from Setting に手動で再設定します。</p>	Planning
HierarchyType (勘定科目、汎用、年、エンティティおよび期間のメンバー・プロパティ)	<空白>	使用不可	変更は不要です。	Essbase ASO
HierarchyType (エンティティ・メンバー・プロパティ)	保管済	使用不可	変更は不要です。	Essbase ASO

プロパティ名	古い値	新しい値	影響	該当するアプリケーション・タイプ
HierarchyType (勘定科目メンバー・プロパティ)	保管済	<空白>	変更は不要です。	Essbase ASO
HierarchyType (勘定科目次元プロパティ)	保管済	動的	変更は不要です。	Essbase ASO、Profitability
MaximumReviewLevel	<空白>	1	変更は不要です。	連結
MaxDocAttachmentSize	<空白>	-1	変更は不要です。	連結
MaxNumDocAttachments	<空白>	-1	変更は不要です。	連結
MemberFormula	<空白>	DirectAllocation + GenealogyAllocation + SysAllocaVar1	変更は不要です。	Essbase ASO
MemberFormula	"DirectAllocation"+"GenealogyAllocation"+"SysAllocVar1"	DirectAllocation +GenealogyAllocation + SysAllocVar1	変更は不要です。	Essbase BSO
MemberValidForCapex	FALSE	TRUE	更新が必要です。 値を <code>False</code> に手動で再設定します。	Planning
MemberValidForCapexAggregation	FALSE	TRUE	更新が必要です。 値を <code>False</code> に手動で再設定します。	Planning
MemberValidForWorkforce	FALSE	TRUE	更新が必要です。 値を <code>False</code> に手動で再設定します。	Planning

プロパティ名	古い値	新しい値	影響	該当するアプリケーション・タイプ
NegativeColor	赤	黒	更新が必要です。 値を Red に手動で再設定します。	Planning
PrimaryLevelWeighting	TopLevelOnly	デフォルト		Essbase ASO
Scale	<空白>	全体	変更は不要です。	連結
SysAllocVar2	"DirectAllocation"+"GenealogyAllocation"+ "SysAllocVar1"	DirectAllocation +GenealogyAllocation + SysAllocVar1	変更は不要です。	Essbase BSO、Profitability
ThousandSeparator	カンマ	なし	更新が必要です。 値を「カンマ」に手動で再設定します。	Planning
UseForMapping	TRUE	FALSE	更新が必要です。 値を False に手動で再設定します。	Planning、Profitability
VarianceReporting	支出外	NonExpense	誤植の修正。変更は不要です。	Planning
WeeksDistributionMember	EVEN	TRUE	このプロパティ・タイプは、ドロップダウン・リストからプルに変更されました。アップグレード・プロセスによって、以前のドロップダウン・リスト値が True または False の値にマップされます。ほとんどの場合、手動の変更は不要です。	Planning

プロパティ名	古い値	新しい値	影響	該当するアプリケーション・タイプ
WorkforceAggregation	~(無視)	+ (加算)	更新が必要です。 Public Sector Planning and Budgeting または Workforce Planning プラン・タイプの場合、値を~に手動で再設定します。	Planning

アプリケーションと配置済アプリケーションを比較する場合の考慮事項

アプリケーションと配置済アプリケーションを比較する場合、次のプロパティの違いは無視します:

- **Capex の集約:** アプリケーションとメンバーが Capex プラン・タイプに対して有効でない場合
- **Workforce の集約:** アプリケーションとメンバーが Workforce プラン・タイプに対して有効でない場合
- **週の分散:** 週の分散プロパティは、11.1.1.x でドロップダウン・リストからブルーに変更されました。アップグレード・プロセスによって値が移行されますが、アプリケーションの比較時に違いが表示されます。
- **為替レート・タイプ:** 新しい値が None で、値が読取り専用の場合、このプロパティに設定された制限に従って適切です。古い値が空の場合、違いが表示されます。
- **値のスキップ:** 新しい値が None で、値が読取り専用の場合、このプロパティに設定された制限に従って適切です。古い値が空の場合、違いが表示されます。
- **通貨:** このプロパティは ID=USD と表示される場合があります(配置済アプリケーションでは USD)。この違いは無視できます。
- **デフォルトの親:** このプロパティは違いを示す場合があります。これは、配置済アプリケーションでは空の場合がありますが、プライマリの親は正しく表示されます。
- **ドキュメントの添付の最大サイズ:** この値は、以前のリリースでは空の場合があります。空の値は-1 と等価です。これは、11.1.1.x で修正されましたが、9.3.3 からアップグレードされたアプリケーションの場合に違いが表示される可能性があります。
- **ドキュメントの添付の最大数:** この値は、以前のリリースでは空の場合があります。空の場合は-1 と等価です。これは、11.1.1.x で修正されました。9.3.3 からアップグレードされたアプリケーションの場合、これは違いとして表示される可能性があります。

- **デフォルト・メンバー:** このプロパティは違いを示す可能性があります。現在の状態では空で、配置済の状態では 0 の場合があります。
- **タイプ:** このプロパティは違いを示す可能性があります。これは、配置済アプリケーションでは空で、現在のアプリケーションの場合は Numeric の場合があります。この新規プロパティは、テキスト・タイプを扱うために 11.1.2.0 で導入されました。デフォルト値は Numeric で適切です。
- **フォーマット文字列:** このプロパティは違いを示す可能性があります。
- **マッピングに使用:** このプロパティは、ASO キューブの通貨次元で違いを示す可能性があります。通貨次元は Essbase ASO ではサポートされておらず、この違いは問題ではありません。
- **階層タイプ:** このプロパティは、複数階層が有効でない場合、Essbase ASO アプリケーションで最上位レベルのメンバーについて違いを示す可能性があります。新規の値は Disabled で読取り専用にできます。これは正しい動作で、無視できます。

リリース 9.3.3 以降 Performance Management Architect に追加された新規プロパティ

次の表で、リリース 9.3.3 以降 Performance Management Architect に追加された新規プロパティを確認してください。

表 48 リリース 9.3.3 以降追加された新規プロパティ

プロパティ名	Essbase ASO	Essbase BSO	連結	Planning	Profitability	9.3.3.x	11.1.x	11.1.2.x
ASOMemberFormula	X					X	X	X
ASOMemberFormulaDuplicate	X					X	X	X
AttributeDataType	X	X		X		X		
AttributeType				X		X		
AutoGenId	X	X				X	X	
BSOMemberFormula		X		X		X	X	X
BSOMemberFormulaDuplicate		X				X	X	X
CapexDeployed				X		X		
Compression	X					X	X	
Currency		X				X	X	X
CurrencyCategoryDuplicate		X				X		X
CurrencyConversionDuplicate		X				X		X
DateFormat				X		X		

プロパティ名	Essbase ASO	Essbase BSO	連結	Planning	Profitability	9.3.3.x	11.1.x	11.1.2.x
Description				X		X		
DimensionDescription				X		X	X	X
DimensionSortOrder	X	X				X	X	
DimTwoPassCalc				X		X		
DisplayOption				X		X	X	
DTSEnabled		X				X	X	
DTSEnabled				X		X		
DTSGeneration		X				X	X	
DTSGeneration				X		X		
EssbaseDateFormat	X	X				X		
FiscalYearStartDate				X				X
FlowMetric	X					X	X	
FlowMetricDuplicate	X					X	X	
FormatString	X	X				X	X	
FormatStringDuplicate	X	X				X	X	
HierarchyTypeDuplicate	X					X	X	
Increment	X	X				X	X	
IsCurrencyPartition		X				X		X
ItemValue	X	X				X	X	
LevelUsageOfAggregation	X							X
LevelUsageOfAggregationDuplicate	X							X
MissingLabel	X	X				X	X	
NamedGeneration	X	X				X	X	
NamedLevel	X	X				X	X	
OutOfRangeName	X	X				X	X	
PeriodType		X				X	X	
PhasedSubStartYear			X			X		
PlanningAppType				X		X	X	

プロパティ名	Essbase ASO	Essbase BSO	連結	Planning	Profitability	9.3.3.x	11.1.x	11.1.2.x
PrimaryLevelWeightingDim (プロパティ・グリッドでは「集約でのレベルの使用」と表示されます)	X					X	X	X
PSBWorkforceModel				X		X	X	
SecondaryLevelWeightingDim	X					X	X	X
SharedServicesInstanceID	X	X				X	X	X
SmartList	X	X				X	X	
SmartListEntryLabel	X	X				X	X	
SmartListLabel	X	X				X	X	
StartValue	X	X				X	X	
Type	X	X				X	X	
TypedMeasureEnabled	X	X				X	X	
WorkforceDeployed				X		X		



アプリケーションの検証

リリース 11.1.2.1 へのアップグレード後に検証エラーが表示される場合、次のように手動で修正する必要があります:

検証エラー	修復
次元のソート順値を負、ゼロまたは空にできません: 次元'Dimension Name'。	ソート順が使用可能でないか、以前の状態で正しく設定されていない場合、検証エラーとして示されます。ユーザーは、「パフォーマンス設定」でソート順を修正する必要があります。 .181 ページの「パフォーマンス設定の変更」 を参照してください。
次元レベルの DataStorage が以前のバージョンで空に設定されている可能性があります。	ほとんどの場合、Essbase では、保管データまたはラベルのみにデフォルト設定されます。ユーザーは、次元に適したデータ・ストレージ・プロパティ値を手動で選択する必要があります。

次の表では、各アプリケーション・タイプに対して Performance Management Architect によって実行される検証について説明します。

表 49 連結の検証

検証レベル	検証
次元	<ul style="list-style-type: none">● UDA 次元は連結アプリケーションでサポートされないため、アプリケーションに UDA 次元がないことを確認する● アプリケーションで無効の次元クラスを使用している次元があるかどうかを判断する● 期間次元がローカルであることを確認する● 次元インスタンスが次元の深さの最大許容レベルを超えていないことを確認する● 次元が共有メンバーをサポートすることを確認する● 次元が一意でないメンバーをサポートすることを確認する● 次元に必要な関連付けがあることを確認する● カスタム次元 ID を検証する● 静的次元があるかどうかチェックする
アプリケーション	<ul style="list-style-type: none">● すべての必須次元がアプリケーションに含まれていることを確認する● アプリケーションに追加されている次元クラスの、許容済次元インスタンス数を検証する● アプリケーションの命名規則を適用する● 無効な文字があるかどうかをチェックする
メンバー	<ul style="list-style-type: none">● メンバー用に有効な勘定科目の種別があることを確認する● 有効なデフォルト・メンバー・プロパティがあることを確認する

表 50 Planning の検証

検証レベル	検証
次元	<ul style="list-style-type: none"> ● 属性次元は疎次元にのみ関連付けられます。 ● ブール・メンバーに許容される値は、TRUE または FALSE である ● レベル-0 の日付メンバーは、アプリケーション設定で日付フォーマット・プロパティ設定に一致している必要がある ● レベル-0 の数値のメンバーは、有効な数値である必要がある ● 表示次元タイプは、Planning アプリケーションではサポートされない ● タイプが BOOLEAN、DATE または NUMERIC の空の属性次元を、基本次元と関連付けることはできない ● 基本次元は、1 つのブール属性次元とのみ関連付けることができる ● 年、通貨および別名の次元に制約された次元レベルがある ● 年、通貨および別名の次元に共有メンバーがない ● 次元は同次元内に一意でないメンバーをサポートしない ● 各別名次元にデフォルトの別名メンバーがある ● 選択した次元プラン・タイプは、アプリケーションに対して選択されているプラン・タイプと同一またはサブセットである必要がある ● 別名の次元に許容されていない名前がない ● 別名テーブルに別名の重複がない ● バージョン次元のすべてのメンバーについて、Version Type プロパティが「ターゲット」に設定されている場合に Enable Process Management プロパティが「TRUE」に設定されていない ● メンバー名および別名が一意である <p>期間および年の検証:</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 年メンバーは連続している必要がある ● 最初の年メンバーは、現在のアプリケーションの会計開始年にする必要がある ● 期間ツリーの年合計メンバーの下にある各レベルには、同じ子の数が必要である ● このアプリケーションの基本期間の年合計メンバーの下にあるリーフ・メンバーの数が正しい ● 最大期間数は 500 である ● 最大の年メンバー数を超過していない ● 年次元に 100 を超える年がない ● 年次元の最初の年のフォーマットが正しい ● 配置済のアプリケーションで、範囲の最初に年が追加されていない ● 期間次元メンバーの深さが期間タイプに基づいている

検証レベル	検証
アプリケーション	<ul style="list-style-type: none"> ● アプリケーション内に次元の関連付けが存在しない ● 169 ページの「Planning アプリケーションの作成」で説明しているように、アプリケーションに必要な最小限の数の次元がある ● シナリオ、年、期間、エンティティ、勘定科目および別名の次元に、アプリケーションの指定より多くのインスタンスがない ● アプリケーション・レベルの選択したプラン・タイプに基づき、必要な次元がすべて表示されていることをチェックする ● Account Type プロパティに、Planning に有効な値のみが含まれていることを確認する ● アプリケーション名のルールを適用する。アプリケーション名には最大 8 文字を使用でき、"Planning" という名前にすることはできません。 ● PerfOrder プロパティ (RatesPlan1PerfOrder など) に、一意のプラン・タイプの値があることを確認する
メンバー	<ul style="list-style-type: none"> ● ソース・プラン・タイプ値はメンバーに対して有効でない ● この値の支出レポート値は有効でない ● タイム・バランスは Essbase アプリケーションの最後にのみ設定できる ● メンバーのプラン・タイプは、その親と同一、またはサブセットである。上位レベルのメンバーでは、親プラン・タイプは次元のプラン・タイプである ● 選択した期間タイプに基づき有効な DTS が使用されている ● 特定の次元クラスのすべての次元のメンバーすべてに、特定のプロパティ用の非 NULL 値があり、プロパティ値が許容された値であることをチェックする ● Data Type プロパティに基づく為替レート・タイプ・プロパティ値をチェックする ● DataStorage プロパティに基づく Two Pass Calculation プロパティをチェックする ● 複数のメンバーが属性プロパティを使用する場合、これらのメンバーはそれぞれの階層と同一レベルである必要がある <p>メンバー名の検証:</p> <ul style="list-style-type: none"> ● スマート・リストのメンバー名に、特殊文字または空白スペースがあってはならない ● 年メンバー名は、FY10 のフォーマットである必要がある ● メンバー名に前端または後端の空白があってはならない ● 1 から 80 文字の範囲である必要がある ● 特殊文字または予約語を含めることはできない ● 特殊文字で開始できない ● 予約語であってはいけない ● 次元名と一致できない ● 属性タイプがブールである場合、メンバー名の値として許可されるのは TRUE または FALSE のいずれかである

注： これらの要件は、「プラン 1」、「プラン 2」または「プラン 3」のプラン・タイプを使用する Planning アプリケーションに固有です。他のプラン・タイプを使用する Planning モジュールでは、要件が異なる場合があります。Oracle Hyperion Public Sector Planning and Budgeting については、『Oracle Hyperion Public Sector Planning and Budgeting ユーザー・ガイド』を参照してください。Oracle Hyperion Workforce Planning および Oracle Hyperion Capital Asset Planning の詳細は、『Oracle Hyperion Workforce Planning 管理者ガイド』および『Oracle Hyperion Capital Asset Planning 管理者ガイド』を参照してください。

表 51 Profitability の検証

検証レベル	検証
次元	<ul style="list-style-type: none"> ● ビジネス次元のルート・メンバーには、「ラベルのみ」に設定された ASO および BSO データ・ストレージが必要です。 ● 次元ソート順が、別名次元と UDA 次元を除き、モデル内のすべての次元に設定されており、次の条件を満たします： <ul style="list-style-type: none"> ○ 次元ソート順は、別名次元と UDA 次元を除き、モデル内のすべての次元に設定されている必要があります。 <li style="padding-left: 40px;">注： 別名次元と UDA 次元は、次元ソート順に対して無視されています。 ○ 次元ソート順が連続している必要があります。 ○ メジャー次元がデフォルトで 1 に設定されています。 ○ 標準の Profitability アプリケーションの場合のみ、AllocationType 次元はデフォルトで 2 に設定されます。この次元は、詳細 Profitability アプリケーションの場合は適用されません。 ○ POV 次元とビジネス次元が 3 以上に設定されています。 ○ 属性次元が最後の次元としてソートされています。 <li style="padding-left: 40px;">たとえば、12 個の連続した次元のうち 4 個が属性次元である場合、属性次元には 9、10、11 および 12 を設定する必要があります。 ● 重複メンバーが同じ次元に存在しません。 ● POV には少なくとも 1 つのメンバーが必要です。 ● 属性次元は疎次元にのみ関連付けられます。 ● 属性次元は次の条件を満たす必要があります： <ul style="list-style-type: none"> ○ 属性次元のレベル 0 のメンバーのみ属性として割り当てられます。 ○ 属性は基本次元の同じレベルのメンバーにのみ割り当てられます。 ○ 属性次元は疎次元にのみ関連付けられます。

検証レベル	検証
アプリケーション	<ul style="list-style-type: none"> ● アプリケーション名は7文字以下で、特殊文字は使用できません。 ● POVタイプには少なくとも1つの次元を設定する必要があります。最大4次元までをPOV次元としてマークすることができます。各POV次元クラスの出現回数は1回のみです。 ● 少なくとも1つのビジネス次元を定義する必要があります ● 少なくとも1つのメジャー次元を定義する必要があります ● 少なくとも1つのAllocationType次元を標準Profitabilityアプリケーションに対して定義する必要があります。この次元タイプは、詳細Profitabilityアプリケーションの場合は適用されません。 ● タイプが勘定科目の次元が1つのみである ● タイプがエンティティの次元が1つのみである ● アプリケーション名に Essbase の特殊文字および予約語が含まれていない
メンバー	<ul style="list-style-type: none"> ● ASO および BSO データ・ストレージのみを定義できる ● 最初の世代2メンバーに共有メンバーを許可しない ● 共有メンバーは必ずアウトライン順序で対応する基本メンバーの後に出現する必要があります。 ● NoMember がどのビジネス次元に対しても最後の世代2メンバーとして設定され、プロパティ・グリッドで「無視(~)」に設定されている必要があります。 <p>注： この要件はPOV、メジャー、AllocationType、別名、UDA または属性次元に適用されません。</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 次のいずれかの方法で、動的階層に共有メンバーが存在する必要があります： <ul style="list-style-type: none"> ○ 世代1メンバーが HierarchyType=dynamic である ○ 世代1メンバーが HierarchyType=HierarchiesEnabled であり、共有メンバーの世代2の祖先が HierarchyType=dynamic である ● 次元のメンバーに重複するメンバー名または別名がないことを確認する ● メンバー名に Essbase の特殊文字および予約語が含まれていない

表 52 Essbase ASO と BSO に共通の検証

検証レベル	検証
次元	<ul style="list-style-type: none"> ● 属性次元は、他の1つの基本次元にのみ関連付けられます。 ● 次元ソート順が連続し、重複がなく、属性次元が最後にあることを確認します ● すべてのスマート・リストが参照されていることを確認します。 ● スマート・リスト次元が空でないことを確認します。 ● 世代名とレベル名はアウトライン(アプリケーション)内で一意である必要があります。名前を他の世代名またはレベル名と同じにすることはできません。また、名前をメンバー、次元、別名プロパティ値、または次元別名プロパティ値と同じにすることはできません。

検証レベル	検証
アプリケーション	<ul style="list-style-type: none"> ● 最小の次元数は 1 です。 ● データベース名が空でないことを確認します。 ● 次のタイプの次元間で重複は許可されません: 時間、勘定科目、汎用、通貨および国。 ● アプリケーション名には、最大 8 文字(Unicode 以外)、または「Unicode をサポート」プロパティが有効になっている場合は 30 文字(Unicode)を使用できます。 ● アプリケーション名に次の文字を含められません: 空白 * \ [] ; , = < > . + ? " ; ' / \ t ● アプリケーションの説明が 79 文字を超えることはできません。 ● 次元名、メンバー名、別名値および別名メンバーは 80 文字を超えることはできず、次の文字は使用できません: <ul style="list-style-type: none"> ○ 引用符(")、大かっこ[]、またはタブ ○ 先頭または末尾の空白 ○ 最初の文字として: @ \ { } , - = < () . + ' _ . ● Database Name プロパティを null にすることはできません。 ● アプリケーション・レベルで TypedMeasureEnabled=false の場合は、勘定科目メンバーの Type プロパティを「テキスト」または「日付」に設定できません。
メンバー	<ul style="list-style-type: none"> ● すべての勘定科目次元メンバーの Time Balance プロパティには、「なし」、「期首」、「平均」または「期末」の値のみ指定できます。 ● プライマリ・メンバーは、共有インスタンスよりも前に存在する必要があります。 ● Essbase 次元の AllowDuplicatesInDimension プロパティが false に設定されているのに、一意でないメンバーが含まれているかどうかを確認します。一意でないメンバーが見つかった場合は、エラーがログに記録されます。 ● (アウトラインで設定されたプロパティによって)すべてのメンバー名と別名がアプリケーションまたは次元内で一意であることを確認します。 AllowDuplicatesInOutline が false に設定されている場合は、すべてのメンバー名が一意である必要があります。別名値は別名表の中で一意である必要があります、いずれのメンバー名とも競合できません。別名値をメンバー名と同じにすることはできません。 AllowDuplicatesInOutline が true に設定されている場合は、次元のコンテキスト内で一意性がチェックされます。次元内に一意でないメンバーが必要な場合は、次元レベルのプロパティ AllowDuplicatesInDimension を true に設定する必要があります。 ● 共有メンバーの DataStorage が ShareData に設定されている場合は、そのプライマリ参照メンバーの DataStorage が StoreData に設定されている必要があります。 ● 属性の関連付けを持つ次元が「ラベルのみ」に設定されている場合は、すべての属性の関連付けが破棄されることを示す警告が表示されます。 ● スマート・リスト・メンバーのいずれにも重複する値がないことを確認します。 ● スマート・リストの値がベース(リーフ)メンバーでのみ許可されていることを確認します。

表 53 Essbase (BSO)の検証

検証レベル	検証
次元	<ul style="list-style-type: none"> ● 次元が、重複および一意でないメンバーを許可するように設定されていないことを確認します。 ● 時間、勘定科目および属性のタイプの次元について、次元レベルで設定された Data Storage プロパティが LabelOnly、NeverShare または StoreData であることを確認します。 ● キューブの少なくとも 1 つの次元が「密」に設定されていることを確認します。

検証レベル	検証
アプリケーション	<ul style="list-style-type: none"> ● 次の次元タイプの少なくとも1つ(許容される最大数)がアプリケーションにあることを確認します: 時間、期間、勘定科目、通貨、エンティティおよび国。 ● 勘定科目次元のタイム・バランスが設定されている場合は、Skip プロパティが設定されていることを確認します。
メンバー	<ul style="list-style-type: none"> ● 最上位のメンバーを共有メンバーにすることはできません。 ● プライマリ・メンバーがない場合にメンバーの共有インスタンスが存在することはできません。 ● 時間、勘定科目、汎用、通貨、国および属性のタイプの次元では、ベース/レベル0のメンバーが LabelOnly の Data Storage 値を持つことはできません。 ● Essbase 次元の AllowDuplicatesInOutline および AllowDuplicatesInDimension プロパティが false に設定されているのに、一意でないメンバーが含まれているかどうかを確認します。一意でないメンバーが見つかった場合は、エラーがログに記録されます。 ● 時間、勘定科目、汎用および属性の次元のメンバーについて、Data Storage プロパティが DynamicCalc、DynamicCalcAndStore、LabelOnly、NeverShare、ShareData または StoreData に設定されていることを確認します。

注： Essbase (ASO)および Essbase (BSO)の場合、大多数の検証は配置時に実行されます。

表 54 Essbase (ASO)の検証

検証レベル	検証
次元	<ul style="list-style-type: none"> ● 次元の"複数階層"が有効になっている場合、Data Storage プロパティは LabelOnly である必要があります。 ● 時間タイプと勘定科目タイプの次元では、次元レベルの Data Storage プロパティを LabelOnly、NeverShare または StoreData にすることができます。 ● 属性次元に共有メンバーがあってはなりません。
アプリケーション	<ul style="list-style-type: none"> ● 時間または勘定科目次元が1つのみであることを確認します。

検証レベル	検証
メンバー	<ul style="list-style-type: none"> ● 最上位のメンバーを共有メンバーにすることはできません。 ● 各共有メンバーのプライマリもアプリケーションに存在します。 ● 次元間での重複は、アプリケーション・レベルでフラグによって制御されます。また、次元内での重複が許可されることを示すフラグが次元レベルにあります。アプリケーション・レベルで重複が許可されない場合は、次元レベルの重複も許可されません。 ● 階層の深さが 10 レベルを超えている場合は警告を発行します。 ● "複数階層"が有効になっている場合は、動的階層メンバーと動的次元に対してメンバー式がサポートされます。 ● 保管階層次元が共有メンバーを持つことはできない。複数階層次元内の保管階層は、共有メンバーを持つことができます。ただし、複数階層が有効になっている次元内の最初の階層に共有メンバーが含まれてはなりません。共有メンバーは、そのプライマリ・メンバーと同じ保管階層にあってはなりません。保管階層は、共有メンバーのコピーを 1 つのみ持つことができます。 ● 動的階層のメンバーが式を持たないレベル 0 のメンバーの場合にのみ、動的階層のメンバーの共有インスタンスを保管階層に含めることができます。 ● 複数階層有効の次元の最初の階層は保管階層である必要があります。 ● 共有メンバーは、メンバーのプライマリ・インスタンスより前に見つかってはなりません。見つかった場合は、それぞれのメンバーについてエラー・メッセージがログに記録されます。 ● 次のメンバーについて、Data Storage プロパティは LabelOnly、NeverShare、ShareData、StoreData のみ持つことができる: 時間、勘定科目および汎用次元 ● 属性メンバーの Data Storage プロパティは DynamicCalc にのみ設定できます。 ● 時間、勘定科目、汎用および属性の次元タイプでは、ベース/レベル 0 のメンバーが LabelOnly の Data Storage 値を持つことはできません。 ● 保管階層の連結操作が常に追加(+)に設定されていることを確認します。DataStorage プロパティが LabelOnly の場合は、無視(~)が許容されます。 ● 式は動的な階層でのみ有効です ● 保管階層の LabelOnly メンバーには、ラベルのみの祖先が必要です。 <p>注： Essbase では、同じレベルのすべてのメンバーが LabelOnly であることも要求されます。</p>



データ・シンクロナイザで使用されるメンバー・クエリー関数

この付録の内容

[メンバー・クエリー関数の使用方法](#) 441

メンバー・クエリー関数の使用方法

サブトピック

- [注意事項](#)
- [構文](#)
- [例](#)
- [Parent](#)
- [Children](#)
- [Ancestors](#)
- [Descendants](#)
- [Siblings](#)
- [Member](#)
- [Match](#)
- [AllMembers](#)
- [BottomOfHierarchy](#)
- [TopOfHierarchy](#)
- [レベル 0](#)

Performance Management Architect データ・シンクロナイザは、次のメンバー・クエリー関数をサポートしています:

- [Parent\(\)](#) - 同じ分岐内の member-name より 1 レベル上のメンバーを戻します。[444 ページの「Parent」](#) を参照してください。
- [Children\(\)](#) - 指定した親より 1 レベル下のメンバーを戻します。[445 ページの「Children」](#) を参照してください。
- [Ancestors\(\)](#) - 同じ分岐内の指定したメンバーより上位のすべてのメンバーを戻します。[446 ページの「Ancestors」](#) を参照してください。
- [Descendants\(\)](#) - 指定した親より下のすべてのレベルのメンバーを戻します。[447 ページの「Descendants」](#) を参照してください。
- [Siblings\(\)](#) - member-name パラメータと同レベルの同じ親を持つメンバーを戻します。[448 ページの「Siblings」](#) を参照してください。

- Member() - 指定したメンバーを戻します。449 ページの「Member」を参照してください。
- Match() - 指定したパターンに一致するメンバーを戻します。449 ページの「Match」を参照してください。
- Level0() - 階層の最下位にある子を持たないメンバーを戻します。452 ページの「レベル 0」を参照してください。

注： Financial Management では、Level0 関数はサポートされていません。

- IParent() - 親を含め、同じ分岐内の member-name より 1 レベル上のメンバーを戻します。444 ページの「Parent」を参照してください。
- IChildren() - 指定した親を含むメンバーを戻します。445 ページの「Children」を参照してください。
- IAncestors() - 指定した祖先を含め、同じ分岐内の指定したメンバーより上位のすべてのメンバーを戻します。446 ページの「Ancestors」を参照してください。
- IDescendants() - 指定した親を含むすべてのレベルのメンバーを戻します。447 ページの「Descendants」を参照してください。
- ISiblings() - 指定した兄弟を含め、member-name パラメータと同レベルの同じ親を持つメンバーを戻します。448 ページの「Siblings」を参照してください。

Performance Management Architect では、これらの技術を使用して Essbase および Planning 向けのデータを取得し、ロードします:

データのロード	データの取得
Planning、Essbase BSO および Essbase ASO では、IESSCube オブジェクトに対して Essbase Java API メソッド (begindataload、sendString および endDataLoad)を使用します。	Planning および Essbase BSO では、計算スクリプトを使用します。 Essbase ASO では、レポート・スクリプトを使用します。

注意事項

次の考慮事項に留意してください:

- Financial Management では、Level0()関数はサポートされていません。
- 「メンバーの選択」ダイアログ・ボックスでメンバーを選択すると、「フィルタの作成」ダイアログ・ボックスで Match()、AllMembers()、BottomOfHierarchy()および TopOfHierarchy()関数を手動で入力できます。
- Profitability and Cost Management では、Essbase BSO と同じ構文とコードを使用します。
- ソースが Oracle Hyperion Planning、Essbase BSO、Essbase ASO または Oracle Hyperion Profitability and Cost Management で、フィルタへの引数のいずれかが重複している場合、標準的な Essbase の適格規則に従います。また、いずれか

の関数に渡されたいずれかの引数が重複している場合は、Essbase の要求に従ってメンバーを修飾する必要があります。

- Essbase ASO アプリケーションでは、Siblings()関数は ISiblings()と同じです。
- IParent、IChildren、IAncestors、IDescendants、ISiblings の各関数は、function-name(member-name)という構文を使用して、「フィルタの作成」ダイアログ・ボックスに手動で入力できます。

構文

複数の関数を使用するには、各関数をセミコロンで区切ります。例:

```
Children(Q1); Children (Q2); ISiblings(Jan);
```

関数構文では、引用符は使用できません。例:

```
Siblings ("operating expenses global", Account, true)
```

データ同期ログに抽出時のエラーを戻します

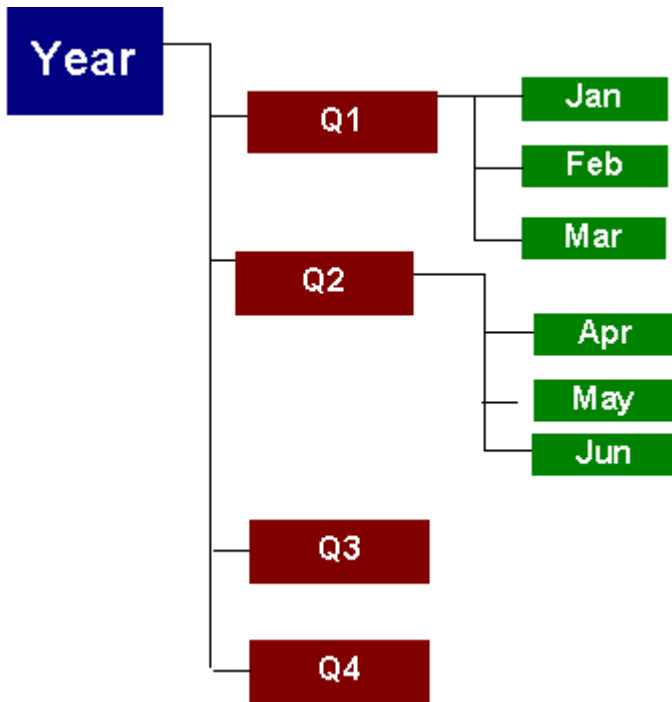
正しい構文は次のとおりです:

```
Siblings (operating expenses global, Account, true)
```

次のコード例では、複数行にまたがって表示される文字列があります。しかし、コードでは、文字列は1行で定義する必要があります。

例

すべての例は、次の年次元に基づいています:



Parent

サブトピック

- [構文](#)
- [例](#)

同じ分岐内の member-name より 1 つ上のレベルのメンバーを戻します。

構文

```
Parent  
(  
  member-name  
)
```

```
IParent  
(  
  member-name  
)
```

注： IParent は包含なので使用を強くお勧めします。

パラメータ	説明
member-name	次元のメンバー名。

例

```
Parent (Jun)
```

Q2 を戻します

```
IParent (Jun)
```

Jun、Q2 を戻します

Children

サブトピック

- [構文](#)
- [例](#)

指定した親の 1 レベル下のメンバー(member-name)を戻します。

構文

```
Children  
(  
member-name  
)
```

```
IChildren  
(  
member-name  
)
```

注： IChildren は包含なので使用を強くお勧めします。

パラメータ	説明
member-name	次元のメンバー名。

例

```
IChildren (Q1)
```

Q1、Jan、Feb、Mar を戻します

Ancestors

サブトピック

- [構文](#)
- [例](#)

同じ分岐内の指定したメンバーより上のすべてのレベルのメンバーを戻します。

構文

```
Ancestors  
(  
  member-name  
)
```

```
IAncestors  
(  
  member-name  
)
```

注： IAncestors は包含なので使用を強くお勧めします。

パラメータ	説明
member-name	次元のメンバー名。

例

```
Ancestors (Jan)
```

Q1 を戻します

```
IAncestors (Jan)
```

Q1、Jan を戻します

Descendants

サブトピック

- [構文](#)
- [例](#)

指定した親より下のレベルの全メンバー(member-name)を戻します。

構文

Descendants

```
(  
member-name  
)
```

IDescendants

```
(  
member-name  
)
```

注： IDescendants は包含なので使用を強くお勧めします。

パラメータ	説明
member-name	次元のメンバー名。

例

```
Descendants (Year)
```

Q1、Jan、Feb、Mar を戻します

```
IDescendants (Year)
```

Year、Q1、Jan、Feb、Mar を戻します

Siblings

サブトピック

- 構文
- 例

member-name パラメータと同じレベルに同じ親を持つメンバーを戻します。

構文

```
Siblings  
(  
  member-name  
)
```

```
ISiblings  
(  
  member-name  
)
```

注： ISiblings は包含なので使用を強くお勧めします。

パラメータ	説明
member-name	次元のメンバー名。

例

```
Siblings (Jan)
```

Jan、Feb、Mar を戻します

```
ISiblings (Jan)
```

Jan、Feb、Mar を戻します

注： Oracle Essbase ASO アプリケーションでは、inclusive パラメータは無効で、メンバーだけでなく、member-name パラメータと同じレベルにあり同じ親を持つメンバーも返されます。したがって、Siblings 関数と ISiblings 関数は同じです。

Member

サブトピック

- [構文](#)
- [例](#)

文字列として提供される名前を持つメンバーが戻されます。

構文

```
Member  
(  
  member-name  
)
```

```
Member  
(  
  member-name  
)
```

パラメータ	説明
member-name	次元のメンバー名。

例

```
Member (Q1, Year)
```

Q1 を戻します

Match

サブトピック

- [構文](#)
- [例](#)

指定したパターンに一致するメンバーを戻します。

構文

```
Match  
(  
  pattern
```

)

ここで、pattern はテキスト文字列です。次のワイルドカード文字を使用できます

? - 任意の 1 文字と一致します

* - 0 文字以上の文字と一致します。*は文字列の末尾にのみ使用できます。

例

Match (Q?)

Q1、Q2、Q3 および Q4 を戻します

```
Match(J*)
```

Jan を戻します

```
Match(*)
```

すべてのメンバーを戻します

```
Match(F?b)
```

Feb を戻します

AllMembers

サブトピック

- [構文](#)
- [例](#)

階層のすべてのメンバーを戻します。

注： AllMembers()は、Financial Management アプリケーションでのみサポートされます。

構文

```
AllMembers  
(  
  hierarchy  
)
```

ここで、hierarchy は次元の階層です。

例

```
AllMembers (Year)
```

年次元のすべてのメンバーを戻します

BottomOfHierarchy

サブトピック

- [構文](#)
- [例](#)

次元内で子のないメンバーを戻します。

注： BottomOfHierarchy()は、Financial Management でのみサポートされます。

構文

```
BottomOfHierarchy  
(  
  hierarchy  
)
```

ここで、hierarchy は次元の階層です。

例

```
BottomOfHierarchy ()
```

Jan、Feb、Mar、Apr、May、Jun、Q3、Q4 を戻します

```
BottomOfHierarchy (Q1)
```

Jan、Feb、Mar を戻します

注： Level0 および BottomOfHierarchy 関数は、結果的に同じ動作になります。
Level0 を入力すると、Performance Management Architect によってこの関数が自動的に BottomOfHierarchy に変換されます。

TopOfHierarchy

サブトピック

- [構文](#)
- [例](#)

親メンバーを持たない、階層の最上位のメンバーを戻します。

構文

```
TopOfHierarchy  
(  
  hierarchy  
)
```

ここで、hierarchy は次元の階層です。

例

```
TopOfHierarchy (Q1)
```

Year を戻します

レベル 0

サブトピック

- [構文](#)
- [例](#)

子を持たない、階層の最下位のメンバーを戻します。

注： Oracle Hyperion Financial Management では、Level0 関数はサポートされていません。

構文

```
Level0  
(  
  hierarchy  
)
```

ここで、hierarchy は次元の階層です。

例

Level0 (Qtr1)

Jan、Feb、Mar を戻します



BPMA_Server_Config.xmlの構成設定

BPMA_Server_Config.xml ファイルには、DimensionServer および log4net という 2 つの主要要素があります。DimensionServer セクションには、次元サーバーとその他の関連コンポーネントの内部動作に固有の設定が含まれています。log4net セクションには、log4net モジュールが警告やエラーなどをログングするために使用する設定が含まれています。BPMA_Server_Config.xml ファイルは、
<EPM_ORACLE_INSTANCE>\products\Foundation\BPMA\AppServer\DimensionServer\ServerEngine\bin にあります。次に BPMA_Config_Server.xml ファイルの抜粋を示します。

```
<?xml version="1.0" encoding="utf-8" ?>
<Config>
  <DimensionServer>
    <Data_Access_Layer>
      <ConnectRetries>3</ConnectRetries>
      <ConnectRetryTimeout>30</ConnectRetryTimeout>
      <CommandTimeout>900</CommandTimeout>
      <UseWindowsAuthentication>>false</UseWindowsAuthentication>
    </Data_Access_Layer>

    <SessionManager>
      <ClassPath>%EPM_ORACLE_HOME%\products\Foundation\BPMA\AppServer\DimensionServer\ServerEngine\bin\awbutil.jar;%EPM_ORACLE_HOME%\products\Foundation\BPMA\AppServer\DimensionServer\ServerEngine\bin\CASecurity.jar;%EPM_ORACLE_HOME%\common\jlib\11.1.2.0\epm_j2se.jar;</ClassPath>
```

注： 次の表の説明には、デフォルト値が示されているものがあります。デフォルト値は、Performance Management Architect のインストール時に自動的に事前に移入される値です。特に注記のないかぎり、設定を空白にしないでください。

次の表に、BPMA_Server_Config.xml ファイル内の設定のパラメータ、説明およびデフォルト設定を示します。

パラメータ	説明	デフォルト設定
DimensionServer	セッション・マネージャなどの、次元サーバーとその他の関連コンポーネントの内部動作に固有の設定が含まれています。	

パラメータ	説明	デフォルト設定
Data_Access_Layer	<p>Shared Services から接続の詳細を取得できない場合にデータベースへの接続を作成するために使用される値が含まれています。</p> <p>すべての Performance Management Architect コンポーネントは、同じ設定を使用している Performance Management Architect データベースに接続します。次の設定は Data_Access_Layer にあります:</p> <ul style="list-style-type: none"> ● ConnectRetries - 例外(エラー)をスローする前にデータベースへの接続を試行する回数 ● ConnectRetryTimeout - データベース接続が再試行される間隔(秒数)。 ● CommandTimeout - データベースにクエリーを送信した後、データベース・エラーが報告されるまでの経過秒数。デフォルト値は 900 で、900 秒(15 分)を意味します。 ● UseWindowsAuthentication - SQL Server データベースの場合のみ。True に設定されている場合、Windows 認証が使用されます。False に設定されている場合、SQL Server 認証が使用されます。 	
EPMAtempFilePath	<p>次の Oracle Hyperion EPM Architect 一時ファイルが保管されるディレクトリ。</p> <ul style="list-style-type: none"> ● OutputExportDocuments が FALSE(デフォルト)に設定されている場合、最終的なエクスポート結果は次の場所に書き込まれます: EPMAtempFilePath に置かれたフォルダ内の FinishedDeploymentDocument.xml。 ● OutputExportDocuments が TRUE に設定されている場合、最終的なエクスポート結果は次の場所に書き込まれます: ExportXSLPath に置かれたフォルダ内の FinishedDeploymentDocument.xml。 <p>デフォルトの場所は<EPM_ORACLE_INSTANCE>\tmp\EPMA です。</p>	

パラメータ	説明	デフォルト設定
SessionManager	NetJNIBridge サービスを介して Shared Services に接続するためにセッション・マネージャ・サービスで使用される値が含まれています。セッション・マネージャでは、ユーザー認証、グループ、役割、権限情報、データベース接続情報などを取得するために Oracle Hyperion Shared Services を使用します。	
JavaMinHeap	SessionManager セクションにあります。この設定には、起動時の JVM ヒープ・メモリの最小値が指定されています。定義可能な最大値は 256M です。	16M
JavaMaxHeap	SessionManager セクションにあります。この設定には、起動時の JVM ヒープ・メモリの最大値が指定されています。定義可能な最大値は 1024M です。	512M
EnableNestedGroups	TRUE に設定すると、特定のユーザーに対してグループ・メンバーシップが要求されたときに、最上位グループとともにすべてのネストされたグループが戻されます。このパラメータを FALSE に設定すると、特定のユーザーに対してグループ・メンバーシップが要求されたときに、最上位グループのみが戻されます(ネストされたグループは含まれません)。	TRUE
NetJNIBridgePort	NetJNIBridge サービスが SessionManager サービスと通信するために使用するポート番号。	5255
NetJNIBridgeHost	NetJNIBridge サービスを実行中の物理マシンの名前。NetJNIBridge が次元サーバーと同じマシン上で実行されている場合は、この名前に localhost を使用できます。	
Port	EPMA サーバーがリスニングするポート番号	5251
DimensionServerStartupTimeout	次元サーバーのインスタンスが例外をスローする前に待機する秒数。	300
ExportCompressionThreshold	エクスポートが圧縮される前のエクスポート済アプリケーションの最大サイズ(バイト)。	102400
ExportXSLPath	アプリケーション・エクスポートをフォーマットするために使用される XSL ファイルへのパス。	

パラメータ	説明	デフォルト設定
OutputExportDocuments	<p>配置の際のアプリケーション・エクスポート中に、ファイル・システム内でのファイルの作成を使用可能または使用不可にします。</p> <p>デフォルトでは、使用不可で FALSE に設定されています。使用可能にするには、この値を TRUE に設定します。</p>	FALSE
ProductMetadataPath	製品メタデータを定義する XML ファイルへのパス。このパラメータは、次元サーバーでプロパティ定義などをロードするために使用されます。	
CustomMetadataPath	(非推奨)	
Validations	検証を制御するために使用される値が含まれています。Application、MaxReportedErrors、MaxReportedWarnings および DefaultMessages の設定が含まれています。	
Application	アプリケーション検証を制御するために使用される値が含まれています。	
MaxDeploymentHistoryEntries	アプリケーション配置履歴の最大エントリ数をオーバーライドするには、この設定を追加します。入力する値は 1 より大きい値です。	10
MaxReportedErrors	アプリケーションの検証時に記録できるエラーの最大数。	5000
MaxReportedWarnings	アプリケーションの検証時に記録できる警告の最大数。	5000
DefaultMessages	アプリケーションの検証時にユーザーに報告されるエラーと警告の合計の最大数。	25

パラメータ	説明	デフォルト設定
AutoCleanupTemporaryApplicationsStartTime AutoCleanupTemporaryApplicationsMinimumAge	<p>サーバーが一時アプリケーションを自動的にクリーンアップする方法を制御します。</p> <p>一時アプリケーションは、アプリケーション作成ウィザードによって使用されます。一時アプリケーションは、適切にクリーンアップされないと、除去されない可能性があります。</p> <p>デフォルトでは、temporaryとしてマークされたアプリケーションは4:00:00(午前4時)に自動的に除去されます。</p> <p>注： この時刻は、24時間制フォーマットのローカル時間です。たとえば、午後2時30分は14:30:00と入力します。</p> <p>時刻は、AutoCleanupTemporaryApplicationsStartTime設定を変更して調整できます。デフォルトでは、アプリケーションの経過時間が24時間を超える場合にクリーンアップの対象となります。アプリケーションの最少経過時間は、AutoCleanupTemporaryApplicationsMinimumAge値(分数)を設定して変更できます。</p>	<p>AutoCleanupTemporaryApplicationsStartTimeのデフォルトは4:00:00です。</p> <p>AutoCleanupTemporaryApplicationsMinimumAgeのデフォルトは、1440です。</p>
PurgeBaselineStartTime	<p>不要になったベースラインの自動削除が開始される時刻を設定します。デフォルトでは、ローカル時間の午前3時です(3:00:00と入力されています)。</p> <p>注： この時刻は、24時間制フォーマットのローカル時間です。たとえば、午後2時30分は14:30:00と入力します。</p>	3:00:00
ImportErrorThreshold	<p>実行中のインポートがシャット・ダウンする前に発生する可能性があるエラーと警告を合せた最大数。</p>	<p>デフォルト値: 1000</p> <p>最小値: 0</p> <p>最大値は定義されていません</p>
ExcludedMemberLimit	<p>EnumExcludedMembers() API呼び出しによって戻されるメンバーの数を制限します。</p>	<p>デフォルト値: 5000</p> <p>最小値: 0</p> <p>最大値: 5000</p>
log4net	<p>log4netモジュールが、エラーやデバッグ情報などをログングするために使用する設定が含まれています。</p> <p>注意 このセクションの値は、Oracleカスタマ・サポートによって指示されないかぎり、変更しないでください。</p>	

用語集

! 「感嘆符」を参照してください。

#MISSING 「欠落データ」を参照してください。

2 パス 他のメンバーの計算済の値に依存するメンバーを再計算するために使用される、Essbase のプロパティです。2 パスのメンバーは、2 番目のパスの間にアウトラインから計算されます。

Calculation Manager Planning および **Financial Management** のユーザーがグラフィカルな環境でビジネス・ルールを設計、検証、管理するために使用できる、Enterprise Performance Management Architect (EPMA) のモジュールの 1 つです。

CDF 「カスタム定義関数」を参照してください。

CDM 「カスタム定義マクロ」を参照してください。

Cookie Web サイトによってコンピュータ上に配置されたデータのセグメントです。

EPM Oracle インスタンス EPM System 製品のアクティブで動的なコンポーネント(実行時に変化可能なコンポーネント)が配置されているディレクトリです。EPM System コンフィグレートによる構成中に、EPM Oracle インスタンス・ディレクトリの場所を定義します。

EPM Oracle ホーム EPM System 製品に必要なファイルを含むミドルウェア・ホームのサブディレクトリです。EPM Oracle ホームの場所は、EPM System インストーラを使用したインストール時に指定します。

essbase.cfg Essbase のオプションの構成ファイルです。管理者は、このファイルを編集して Essbase サーバー機能をカスタマイズできます。一部の構成は、Essbase クライアントで使用することにより、Essbase サーバーの設定を上書きできます。

EssCell 特定の Essbase データベース・メンバーの交差を示す値を取得するために、Essbase Spreadsheet Add-in のセルに入力する関数です。

ESSCMD Essbase の操作を対話的に実行したり、バッチ・スクリプト・ファイルから実行したりするための、コマンドライン・インタフェースです。

ESSLANG テキスト文字を解釈するために使用されるエンコード方式を定義する Essbase 環境変数です。「エンコード方式」も参照してください。

ESSMSH 「MaxL シェル」を参照してください。

Extensible Markup Language(XML) データに属性を割り当てるタグのセットで構成される言語です。スキーマに基づいて、複数のアプリケーションの間で解釈可能です。

Extract-Transform-Load(ETL) データを抽出してアプリケーションに移行するための、データ・ソース固有のプログラムです。

GUI グラフィカル・ユーザー・インタフェースです。

ID 外部認証におけるユーザーまたはグループの固有の ID です。

Interactive Reporting 接続ファイル(.oce) データベース API(ODBC、SQL*Net など)、データベース・ソフトウェア、データベース・サーバーのネットワーク・アドレス、データベース・ユーザー名などのデータベース接続情報を含むファイルです。管理者は、Interactive Reporting 接続(.oce)ファイルを作成して発行します。

Java アプリケーション・サーバー・クラスタ Java Virtual Machines (JVM) のアクティブ-アクティブ・アプリケーション・サーバー・クラスタです。

Java データベース接続(JDBC) Java クライアントとリレーショナル・データベースにより使用されるクライアントとサーバー間の通信プロトコルです。JDBC インタフェースにより、SQL データベースのアクセスのための呼出しレベル API が提供されます。

JSP Java Server Page です。

KeyContacts ガジェット Smart Space ユーザーのグループを含み、Smart Space Collaborator へのアクセスを提供するガジェットです。たとえば、マーケティング・チームおよび開発チーム向けに個別の KeyContacts ガジェットを使用できます。「ガジェット」も参照してください。

LRO 「リンク・レポート・オブジェクト」を参照してください。

MaxL Essbase で使用される多次元データベース向けアクセス言語です。データ定義の言語(MaxL DDL)とデータ操作の言語(MaxL DML)から構成されます。「MaxL DDL」、「MaxL DML」および「MaxL シェル」も参照してください。

MaxL DDL Essbase で、バッチまたは対話的なシステム管理のタスクに使用されるデータ定義の言語です。

MaxL DML Essbase で、データのクエリーと抽出に使用されるデータ操作の言語です。

MaxL DML の計算済メンバー 分析を目的として設計されたメンバーです。MaxL DML クエリーのオプションの WITH セクションで定義されます。

MaxL Perl モジュール Essbase MaxL DDL の一部である Perl モジュール(essbase.pm)です。このモジュールを Perl パッケージに追加すると、Perl プログラムから Essbase データベースにアクセスできます。

MaxL シェル MaxL ステートメントを Essbase サーバーに渡すためのインタフェースです。MaxL シェルの実行可能ファイル(UNIX は essmsh、Windows は essmsh.exe)は、Essbase の bin ディレクトリに格納されています。

MaxL スクリプト・エディタ 管理サービス・コンソールのスクリプト開発環境です。MaxL スクリプトで Essbase を管理するとき、テキスト・エディタと MaxL シェルの代替として MaxL スクリプト・エディタを使用できます。

MDX (多次元式) 多次元対応のデータベースでのクエリーと計算に使用される言語です。

MIME タイプ 項目のデータ・フォーマットを示す属性により、システムはオブジェクトを開くアプリケーションを判断します。ファイルの MIME (Multipurpose Internet Mail Extension)タイプはファイル拡張子または HTTP ヘッダーにより決定されます。プラグインはブラウザに対して、サポートされる MIME タイプ、および各 MIME タイプに対応するファイル拡張子を通知します。

NULL 値 データのない値です。NULL 値はゼロと等しくありません。

ODBC Open Database Connectivity の略です。データベース管理システム(database management system: DBMS)の情報処理方法に関係なく、あらゆるアプリケーションにより使用されるデータベース・アクセスの方法です。

「OK」ステータス 集計ステータスの 1 つです。エンティティが連結済であり、階層の下にあるデータが変更されていないことを示します。

OLAP メタデータ・カタログ Essbase 統合サービスにおける、リレーショナル・データ・ソースから引き出されたデータの性質、ソース、場所および種別について説明するメタデータを含むリレーショナル・データベースです。

OLAP モデル Essbase 統合サービスにおける、リレーショナル・データベースの表および列から作成された論理モデル(スター・スキーマ)です。OLAP モデルは多次元データベースの構造を生成するために使用されます。「オンライン分析プロセス」も参照してください。

Open Database Connectivity(ODBC) 標準のアプリケーション・プログラミング・インタフェース(API)です。これにより、アプリケーションから複数のサードパーティ・データベースにアクセスできます。

Oracle ホーム 特定の製品に必要なインストール済ファイルを含むディレクトリで、ミドルウェア・ホームのディレクトリ構造内にあります。「ミドルウェア・ホーム」も参照してください。

PL 勘定(P&L) 損益勘定です。P&L は、通常は会社の損益計算書を構成する費用勘定と収益勘定の集合を指します。

POV (視点) 行、列、またはページ軸に割り当てられていないメンバーを選択することにより、データ・フォーカスを設定する機能です。たとえば、FDMでの POV の選択項目には、場所、期間、カテゴリ、およびターゲット・カテゴリが含まれる可能性があります。また、Smart View で POV をフィルタとして使用すると、Currency 次元を POV に割り当て、Euro メンバーを選択できます。データ・フォームで POV を選択すると、ユーロ建でデータが表示されます。

Production Reporting 「SQR Production Reporting」を参照してください。

PVA 「期別価額メソッド」を参照してください。

root メンバー 次元分岐における最上位のメンバーです。

Shared Services レジストリ Shared Services リポジトリの一部で、ほとんどの EPM System 製品の EPM System 配置情報(インストール・ディレクトリ、データベース設定、コンピュータ名、ポート、サーバー、URL、依存サービス・データなど)を管理します。

SPF ファイル SQR Production Reporting Server で作成される、プリンタに依存しないファイルです。フォント、間隔、ヘッダー、フッターなど、フォーマットされた実際のレポート出力を表します。

SQL スプレッドシート SQL クエリーの結果セットを表示するデータ・オブジェクトです。

SQR Production Reporting データ・アクセス、データ操作、および SQR Production Reporting ドキュメント作成のための専用プログラミング言語です。

Structured Query Language (SQL) リレーショナル・データベースに対する指示を処理するために使用される言語です。

TCP/IP 「Transmission Control Protocol/Internet Protocol」を参照してください。

Transmission Control Protocol/Internet Protocol(TCP/IP) 異なるオペレーティング・システムおよび内部アーキテクチャを持つコンピュータをリンクする標準的な通信プロトコルのセットです。TCP/IP を使用すると、LAN および WAN に接続する多様なコンピュータとの間でのファイルの交換、メールの送信、およびデータの保管が可能です。

Unicode モードのアプリケーション 文字テキストが UTF-8 でエンコードされている Essbase アプリケーションです。様々な言語に設定されているコンピュータを使用するユーザーが、アプリケーション・データを共有できます。

WebLogic Server ホーム ミドルウェア・ホームのサブディレクトリで、WebLogic Server インスタンスに必要なインストール済ファイルが格納されます。WebLogic Server ホームは、Oracle ホームのピアです。

WITH セクション MaxL DML で、オプションで使用できるクエリーのセクションです。メンバーのセットを定義する再利用可能な論理を作成するために使用されます。WITH セクションでセット(カスタムのメンバー)を一度定義すると、クエリー中に複数回参照できます。

Workspace ページ 複数のソース(ドキュメント、URL、その他のコンテンツ・タイプ)からのコンテンツを使用して作成されるページです。Oracle およびその他のソースからのコンテンツを集約するために使用できます。

ws.conf Windows プラットフォーム用の構成ファイルです。

wsconf_platform UNIX プラットフォーム用の構成ファイルです。

XML 「Extensible Markup Language」を参照してください。

XOLAP アウトラインのメタデータのみを保管し、クエリー時にリレーショナル・データベースからすべてデータを取得する、Essbase の多次元データベースです。XOLAP は、集約ストレージ・データベースおよび重複メンバー名を含むアプリケーションをサポートします。

Y 軸スケール 「調査」セクションに表示される、チャートの Y 軸上の値の範囲です。たとえば、各チャートについて一意の Y 軸スケールを使用すること、すべての詳細チャートに同一の Y 軸スケールを使用すること、または列内のすべてのチャートに同一の Y 軸スケールを使用することが可能です。多くの場合、共通の Y 軸スケールを使用すると、一目でチャートを比較できるようになります。

Zero Administration サーバー上のプラグインの最新バージョン番号を識別するソフトウェア・ツールです。

アウトライン 多次元データベースのデータベース構造です。すべての次元、メンバー、タグ、タイプ、集計、および算術的関係を含みます。データは、アウトラインに定義された構造に応じてデータベースに保管されます。

アウトライン同期 パーティション・データベースで、データベースのアウトラインの変更を他のデータベースに伝播するプロセスです。

アクセサ データ・マイニング・アルゴリズムに関する入出力データ仕様。

アクセス権 リソースに対してユーザーが実行できる一連の操作です。

アクティビティ・レベルの承認 操作対象のデータに依存せず、アプリケーションへのユーザー・アクセス、およびアプリケーションで実行できるアクティビティのタイプを定義します。

アクティブ-アクティブ高可用性システム すべての使用可能メンバーが要求に対応でき、アイドル状態のメンバーがないシステムです。通常、アクティブ-アクティブ・システムは、アクティブ-パッシブ・システムより豊富な拡張性オプションを備えています。「アクティブ-パッシブ高可用性システム」と対比してください。

アクティブ-パッシブ高可用性システム 常に要求に対応するアクティブ・メンバーと、アクティブ・メンバーに障害が発生した場合にのみアクティブ化されるパッシブ・メンバーがあるシステムです。「アクティブ-アクティブ高可用性システム」と対比してください。

アクティブ・サービス 実行タイプが保留ではなく開始に設定されているサービスです。

アセンブリ EPM System 製品またはコンポーネントのインストール・ファイルです。

値次元 入力値、換算値および連結の詳細を定義する次元です。

アダプタ ターゲットおよびソース・システムのデータやメタデータにプログラムを統合するためのソフトウェアです。

アップグレード ソフトウェアの新リリースを配置し、アプリケーション、データおよびプロビジョニング情報を、それまでの配置から新しい配置に移すプロセスです。

宛先 1) Business Rules では、計算された値が格納されるデータベースのブロックです。2) Profitability and Cost Management では、割り当てられたコストまたは収益フローの方向を制御する、割当てモデル内のソースと宛先の関連付けです。

アドホック・レポート エンド・ユーザーが動的に作成するオンライン分析クエリーです。

アプリケーション 1)特定のタスクまたはタスクのグループを実行するために設計されたソフトウェア・プログラムです(スプレッドシート・プログラム、データベース管理システムなど)。2)特定の分析要件のセット、レポート要件のセットまたはその両方に対応するために使用される、次元および次元メンバーの関連するセットです。

アプリケーション移行ユーティリティ アプリケーションとアーティファクトの移行に使用されるコマンド・ライン・ユーティリティです。

アプリケーション管理者 アプリケーションの設定、構成、維持、および制御の担当者です。アプリケーションのすべての権限およびデータ・アクセス権を持ちます。

アプリケーション・サーバー・クラスタ 複数のアプリケーション・サーバーが緩やかに結合したグループです。これらのアプリケーション・サーバーは、信頼性と拡張性を実現するために連携して同時に実行されるので、ユーザーには1つのアプリケーション・サーバーのように見えます。「垂直アプリケーション・サーバー・クラスタ」および「水平アプリケーション・サーバー・クラスタ」も参照してください。

アプリケーションの通貨 アプリケーションのデフォルトのレポート用通貨です。

アペンド 宛先を意味する Log4j の用語です。

安全率 より安全な投資から期待される利回りです(米国の長期国債など)。

暗黙の共有 メンバーが1つ以上の子を持ち、集計されている子は1つのみである場合は、親と子が値を共有します。

アーティファクト 個別のアプリケーションまたはリポジトリ・アイテムです(スクリプト、フォーム、ルール・ファイル、Interactive Reporting ドキュメント、財務レポートなど)。オブジェクトとも呼ばれます。

移行監査レポート 移行ログから生成されるレポートです。アプリケーションの移行に関する追跡情報を提供します。

移行スナップショット アプリケーションの移行のスナップショットです。移行ログに取込まれます。

移行定義ファイル(.mdf) アプリケーションの移行に使用される移行パラメータを含むファイルです。これによりバッチ・スクリプトを処理できます。

移行ログ アプリケーションの移行のすべてのアクションとメッセージを取込むログ・ファイルです。

依存エンティティ 組織内の他のエンティティに属するエンティティです。

一意でないメンバー名 「重複メンバー名」を参照してください。

一意のメンバー名 データベース・アウトライン内に1度のみ存在する、共有されないメンバーの名前です。

一意メンバーのアウトライン 重複メンバー名を使用できないデータベース・アウトラインです。

イメージ・ブックマーク Web ページやリポジトリ・アイテムへのグラフィック・リンクです。

因果関係マップ 企業戦略を形成する要素の関連、およびこれらの要素が組織の戦略目標を達成するためにどのように連動するかを示すマップです。因果関係マップのタブは、各戦略マップについて自動的に作成されます。

インストール・アセンブリ EPM System インストーラにプラグインされる製品インストール・ファイルです。

インデックス 1) Essbase により、疎データの組合せを使用してブロック・ストレージ・データベースでデータを取得する方法です。2) インデックス・ファイルを指します。

インデックス・キャッシュ インデックス・ページを含むバッファです。

インデックス項目 疎次元の交差へのポインタです。インデックス・エントリはディスク上のデータ・ブロックをポイントし、オフセットを使用してセルを検索します。

インデックス・ファイル ブロック・ストレージのデータ取得情報を保管する Essbase ファイルです。ディスクに常駐し、インデックス・ページを含みます。

インデックス・ページ インデックス・ファイルの下部区分です。インデックス・ページには、データ・ブロックを指すポインタが含まれます。

イントロスペクション データベース固有の関係に基づいて階層を判断するために、データ・ソースを詳細に検査することを指します。「スクレーピング」と対比してください。

インポート・フォーマット FDM で、ソース・ファイルの構造の定義です。これにより、ソース・データ・ファイルを FDM データのロード位置にロードできます。

疎次元 ブロック・ストレージ・データベースで、他の次元と比較した場合に、すべてのメンバーの組合せのデータを含んでいる可能性の低い次元です。「密次元」と対比してください。たとえば、すべての顧客がすべての製品のデータを持っているわけではありません。

「影響」ステータス 親エンティティに連結する子エンティティの変更を示すステータスです。

エンコード方式 テキストの作成、保管、表示のためにビット組合せを文字にマッピングする方法の1つです。各エンコード方式には UTF-8 などの名前が付けられています。各エンコード方式では、それぞれの値は特定のビット組合せにマッピングされています。たとえば、UTF-8 では大文字の A は HEX41 にマッピングされています。「コード・ページ」および「ロケール」も参照してください。

エンタープライズ・ビュー Administration Services の機能の1つです。グラフィカルなツリー・ビューを使用して Essbase 環境を管理できます。エンタープライズ・ビューを使用すると、Essbase アーティファクトを直接操作できます。

エンティティ 部門、子会社、工場、地域、製品など、組織での財務報告単位となる組織単位を示す次元です。

エージェント アプリケーションやデータベースの開始と停止、ユーザー接続の管理、ユーザー・アクセスのセキュリティ対策を行う Essbase サーバー・プロセスです。このエージェントは、ESSBASE.EXE と呼ばれます。

お気に入りガジェット Reporting and Analysis ドキュメントへのリンクと URL を含むガジェットです。「ガジェット」も参照してください。

親 直接レポートする依存エンティティを1つ以上含むエンティティです。親は少なくとも1つのノードに関連しているエンティティであるため、エンティティ、ノードおよび親の情報が関連付けられています。

親の調整 親に関連して子に転記される仕訳エントリーです。

オンライン分析プロセス(OLAP) 複数ユーザーによりクライアントとサーバー間の計算を行える多次元的环境です。集計された企業データをリアル・タイムで分析するユーザーが使用します。OLAP システムの機能には、ドリルダウン、データのピボット、複素数計算、トレンド分析、およびモデリングが含まれます。

会社間消去 「消去」を参照してください。

会社間照合 アプリケーション内の内部取引勘定科目の対の残高を比較するプロセスです。内部取引の受取勘定科目は、対応する内部取引の支払い勘定科目と比較されます。一致する勘定科目は、組織の連結合計から内部取引のトランザクションを消去するために使用されます。

会社間照合レポート 内部取引勘定科目の残高を比較して、勘定の収支が合っているかどうかを示すレポートです。

拡張リレーショナル・アクセス リレーショナル・データベースと Essbase 多次元データベースの統合を指します。これにより、すべてのデータがリレーショナル・データベースに保持され、Essbase データベース内の要約レベルのデータにマッピングされます。

確認レベル プロセス管理の確認ステータス・インディケータの1つです。「開始していません」、「第1パス」、「送信済」、「承認済」、「発行済」など、プロセス単位のレベルを示します。

加重 スコアカードの項目に割り当てられた値です。スコアカード全体のスコアの計算において、その項目の相対的な重要性を示します。スコアカードのすべての項目の加重を総計すると100%になります。たとえば、ある製品について新機能を開発する重要性を認めるため、開発者のスコアカード上の New Features Coded のメジャーに Number of Minor Defect Fixes のメジャーよりも大きな加重が割り当てられる可能性があります。

カスケード メンバー値のサブセットに対して複数のレポートを作成するプロセスです。

カスタム・カレンダー システム管理者が作成したカレンダーです。

カスタム次元 ユーザーが作成および定義する次元です。チャンネル、製品、部署、プロジェクト、または地域がカスタム次元になることがあります。

カスタム定義関数(CDF) Java で開発され、MaxL により Essbase の標準計算スクリプト言語に追加された、Essbase 計算関数です。「カスタム定義マクロ」も参照してください。

カスタム定義マクロ(CDM) Essbase のマクロです。Essbase 計算機の関数および専用マクロ関数を使用して記述されます。カスタム定義マクロが使用する Essbase の内部マクロ言語により、計算関数を組み合わせることが可能となり、複数の入力パラメータが処理されます。「カスタム定義関数」も参照してください。

カスタム・プロパティ ユーザーが作成した次元または次元メンバーのプロパティです。

カスタム・レポート 設計レポート・モジュールで作成する複雑なレポートです。コンポーネントの様々な組合せによって構成されます。

カタログ・ペイン アクティブ・セクションで使用可能な要素のリストを表示する領域です。クエリーがアクティブ・セクションの場合はデータベース・テーブルのリストが表示されます。ピボットがアクティブ・セクションの場合は結果列のリストが表示されます。ダッシュボードがアクティブ・セクションの場合は埋込み可能セクションのリスト、グラフィック・ツールおよびコントロール・ツールが表示されます。

カテゴリ データ編成に使用するグループです(月など)。

株式ベータ 株のリスクを指します。その株の収益と市場利益率の差異により測定され、ベータと呼ばれるインデックスで示されます。たとえば、市場利益率が1%変動するのに伴って株の収益が通常1.2%変動するのであれば、その株のベータは1.2です。

カレンダー ユーザー定義の期間、およびその関係です。カレンダーまたは会計年度は、Q1、Q2、Q3、およびQ4から構成されます。

為替レート・タイプ 為替レートの識別子です。異なるレート・タイプが使用されるのは、一定期間および年間について複数のレートが存在することがあるためです。従来より、期末時点でのレートを当期の平均レートおよび期末レートとして定義します。その他、履歴レート、予算レート、予測レートなどのレート・タイプがあります。レート・タイプは特定の時点に適用されます。

換算 「通貨換算」を参照してください。

換算レート 「為替レート」を参照してください。

勘定科目の種別 時間の経過に伴う勘定科目の値のフロー、およびその符号の動作を決定するプロパティです。勘定科目タイプのオプションには、費用、収益、資産、負債および資本が含まれます。

勘定科目の消去 連結時に連結ファイル内で値がゼロに設定された勘定科目です。

勘定科目のブロック 連結ファイルで勘定科目が入力データを受け入れるプロセスです。ブロックされた勘定科目は加算連結プロセスで値を受け取りません。

関数 Data Relationship Management で、パラメータを受け入れて動的な値を返す派生プロパティ式の構文要素です。

感嘆符(!) 一連のレポート・コマンドを終了して、データベースからの情報を要求する文字です。レポート・スクリプトは感嘆符を使用して終了する必要があります。レポート・スクリプト内では複数の感嘆符を使用できます。

管理対象サーバー 内蔵された Java 仮想マシン(Java Virtual Machine: JVM)で実行されるアプリケーション・サーバー・プロセスです。

関連勘定科目 メイン勘定科目に関連する勘定科目で、同一のメイン勘定科目番号にグループ化されます。勘定科目の構造体では、すべてのメイン勘定科目および関連勘定科目は同一のメイン勘定科目番号にグループ化されます。メイン勘定科目と関連勘定科目は、勘定科目番号の最初の接尾辞により区別されます。

外部でトリガーされるイベント ジョブの実行をスケジュールするための、時間ベースでないイベントです。

外部認証 アプリケーションの外部に格納されているユーザー情報を使用して Oracle EPM System 製品にログオンすることです。ユーザー・アカウントは EPM System によって保持されますが、パスワード管理とユーザー認証は、Oracle Internet Directory (OID)や Microsoft Active Directory (MSAD)などの企業ディレクトリを使用して外部サービスによって実行されます。

ガジェット EPM のコンテンツを容易に表示し、Reporting and Analysis のコア機能にアクセスできる、軽量で単純な専用アプリケーションです。

期別価額メソッド(PVA) 通貨換算プロセスの1つです。一定期間における期別の為替レート値を適用して通貨を算出します。

基本エンティティ 組織の構造の一番下に位置し、他のエンティティを持たないエンティティです。

基本次元 1つまたは複数の属性次元に関連付けられている標準次元です。たとえば、製品に香りがあるとすると、Product 次元が Flavors 属性次元の基本次元となります。

基本通貨 日常の業務トランザクションが行われる通貨です。

期末 チャートの日付範囲を調整できる期間です。たとえば、月の期末の場合、当月末までの情報がチャートに表示されます。

キャッシュ データを一時的に保持する、メモリー内のバッファです。

キューブ 3つ以上の次元を含むデータのブロックです。Essbase データベースはキューブです。

キューブ・スキーマ Essbase Studio におけるメジャーおよび階層などのメタデータ要素です。キューブの論理モデルを指します。

キューブ配置 Essbase Studio で、アウトラインを構築してデータを Essbase アプリケーションおよびデータベースにロードするために、モデルのロード・オプションを設定するプロセスです。

兄弟 他の子メンバーと同じ世代で、すぐ上に同じ親を持つ子メンバーです。たとえば、メンバー Florida とメンバー New York はメンバー East の子であり、互いの兄弟です。

共有 Workspace ページ 専用のシステム・フォルダに保管され、組織全体で共有する Workspace ページです。権限を持つユーザーは、共有 Workspace ページの「ナビゲート」メニューからアクセスできます。

共有ストレージ フェイルオーバー・クラスタのすべてのノードから使用可能である必要のあるデータを含むディスクのセットです。共有ディスクとも呼びます。

共有ディスク 「共有ストレージ」を参照してください。

共有メンバー ストレージ・スペースを別の同名メンバーとの間で共有するメンバーです。Essbase アウトラインに複数回現れるメンバーが重複して計算されることを防ぎます。

クエリー・ガバナンス Essbase Integration Server のパラメータまたは Essbase サーバーの構成設定です。データ・ソースに対して実行されるクエリーの時間とサイズを制御します。

行の抑制 欠落値を含む行を除外し、スプレッドシート・レポートからの文字にアンダースコアを付ける設定です。

クラスタ 単一リソースとして動作して、タスクの負荷を共有し、フェイルオーバーのサポートを提供する一連のサーバーまたはデータベースです。システムにおける単一障害点となるサーバーやデータベースを排除します。

クラスタ・サービス システムとしてクラスタ・メンバーの操作を管理するソフトウェアです。クラスタ・サービスを使用すると、一連のリソースやサービスを定義して、クラスタ・メンバー間でのハートビート・メカニズムを監視し、これらのリソースやサービスをできるだけ効率よくかつ透過的に別のクラスタ・メンバーに移動できます。

クラスタ内部接続 ハートビート情報に関するノード障害を検出するためにハードウェア・クラスタで使用されるプライベート・リンクです。

クラスタ棒グラフ カテゴリを横に並べたグラフです。垂直棒グラフでのみ使用されます。

繰返し 同じバージョンのデータを修正して移行する予算またはプランニング・サイクルの"パス"。

クリーン・ブロック 計算スクリプトによってすべての次元が一度に計算された場合、または計算スクリプトで SET CLEARUPDATESTATUS コマンドが使用された場合の、データベース全体の計算が完了しているデータ・ブロックを指します。

クロス集計レポート テーブル・フォーマットでデータの分類および集計を行うレポートです。テーブルのセルには、交差する分類に合致するデータの集計結果が保管されています。たとえば、製品販売情報のクロス集計レポートに、列見出しとして Small や Large などのサイズ属性、行見出しとして Blue や Yellow などの色属性を表示できます。テーブルの中で Large と Blue が交差するセルには、サイズが Large のすべての Blue 製品の総売上げが表示されます。

グリッドの POV 行、列、またはページの交差に次元を配置せずに、グリッド上で次元メンバーを指定する手段です。レポート・デザインはグリッド・レベルで POV の値を設定し、ユーザーの POV がグリッドに影響を与えないように防ぎます。次元に含まれるグリッドの値が1つのとき、その次元は行、列、またはページではなくグリッドの POV に配置します。

グループ 複数のユーザーに同様のアクセス権を割り当てるためのコンテナです。

グローバル・レポート・コマンド 別のグローバル・コマンドに置換されるか、またはファイルが終了するまで実行し続けるレポート・スクリプトのコマンドです。

計算結果アイテム データベースやキューブに物理的に保管される列に対して、仮想の列を指します。クエリー実行時にデータベースにより、または Interactive Reporting Studio の「結果」セクションで計算されます。計算結果アイテムは、関数、データ・アイテム、およびダイアログ・ボックスで提供される演算子に基づくデータ計算であり、レポートに含まれたり他のデータの計算に再利用されることがあります。

計算スクリプト データベースの集計方法や集約方法を定義する一連のコマンドです。集計プロセスとは別に、割当てや他の計算ルールを指定するコマンドが計算スクリプトに含まれることもあります。

計算済勘定科目 変更できない計算式を持つ勘定科目です。これらの計算式は、構築しているモデルの勘定科目の整合性を保つために固定されています。たとえば、当期純利益、計算済勘定科目の計算式は Strategic Finance に組み込まれており、過去実績/予測の期間で変更はできません。

系統データ 割当ての計算後にオプションで生成される追加データです。このデータにより、すべての割当てステップにわたる開始から終了までのコストまたは収益のフローについてのレポートを作成できます。

系列 異なるメタデータ要素間の関係です。メタデータ要素が他の1つ以上のメタデータ要素からどのように導き出されるかを示し、メタデータ要素を物理ソースまでトレースします。Essbase Studioでは、この関係を系列ビューアでグラフィカルに表示できます。「トレーサビリティ」も参照してください。

結合 特定の列または行の共通のコンテンツに基づく2つのリレーショナル・データベース・テーブルまたはトピックの間のリンクです。通常、異なるテーブルまたはトピック内の同一または類似するアイテムの間で結合が起きます。たとえば、Customer テーブルと Orders テーブルで Customer ID の値が同一である場合、Customer テーブル内のレコードが Orders 内のレコードに結合します。

欠落データ(#MISSING) ラベル付けされた場所のデータが存在しないか、値が含まれていないか、データが入力されていないかまたはロードされていないことを示すマーカーです。たとえば、勘定科目に当期ではなく過去または将来の期間のデータが含まれている場合は、欠落データが存在します。

権限 データまたは他のユーザーとグループを管理するために、ユーザーおよびグループに付与されるアクセス・レベルです。

検証 アウトラインに対してビジネス・ルール、レポート・スクリプトまたはパーティションの定義をチェックして、チェック対象のオブジェクトが有効であることを確認するプロセスです。

検証ルール データの整合性を強化するために FDM で使用されるルールです。たとえば、FDM では、検証ルールによって、FDM からターゲット・アプリケーションにデータがロードされた後に、特定の条件が満たされていることが保証されます。

限界税率 税引き後の負債コストを計算するために使用される率です。最近計上された所得に適用される税率(所得額に適用される最高の税率区分の税率)を示し、連邦税、州税および地方税を含みます。課税対象所得と税率区分の現在のレベルに基づいて、限界税率を予測できます。

現地通貨 入力通貨タイプです。入力通貨タイプが指定されていない場合は、現地通貨がエンティティの基本通貨に一致します。

原点 2つの軸の交差です。

子 データベース・アウトライン内で上位に親を持つメンバーです。

高可用性 障害が発生した場合でもアプリケーションが継続してサービスを提供できるようにするシステム属性です。これは、シングル・ポイント障害、フォルト・トレラント・ハードウェアおよびサーバー・クラスタを除去することで実現されます。1つのサーバーで障害が発生すると、処理要求は別のサーバーにルーティングされます。

高機能計算 最後に実行された計算以降に更新されたデータ・ブロックを追跡する計算方法です。

交差 多次元データベース内の次元の交差を表すデータの単位。ワークシートのセル。

構造ビュー トピックをコンポーネントのデータ・アイテムの単純なリストとして表示します。

構築方法 データベース・アウトラインを変更するために使用する方法の一種です。データ・ソール・ファイルのデータ・フォーマットに基づいて構築方法を選択します。

個人の反復タイム・イベント 再利用可能なタイム・イベントです。作成したユーザーのみがアクセスできます。

個人用変数 複雑なメンバー選択の名前付きの選択ステートメントです。

個人用ページ リポジトリ情報を参照するための個人用ウィンドウです。表示する情報、およびレイアウトと色を選択します。

コミット・アクセス Essbase のトランザクションの処理方法に影響する Essbase カーネルの分離レベルです。コミット・アクセスでは、同時トランザクションは書き込みロックを長期間保持し、予測可能な結果を生成します。

コンテキスト変数 タスクフロー・インスタンスのコンテキストを特定するために、特定のタスクフローに定義される変数です。

コンテンツ リポジトリに保管されたあらゆるタイプのファイルの情報です。

コンテンツ・ブラウザ コンテンツを参照して選択し、Workspace ページに配置するために使用できるコンポーネントです。

コントリビューション 子エンティティから親に追加される値です。それぞれの子は親に対するコントリビューションを持ちます。

コード・ページ 一連のテキスト文字へのビット組合せのマッピングです。コード・ページは、それぞれ異なるキャラクタ・セットをサポートします。各コンピュータには、ユーザーが必要とする言語のキャラクタ・セットについてのコード・ページ設定が含まれます。このドキュメントでは、コード・ページは非 Unicode のエンコードのビット組合せに文字をマッピングします。「エンコード方式」も参照してください。

差異 プラン値と実績値などの 2 つの値の差です。

サイクル・スルー データベース内で複数パスを実行し、同時に計算します。

再構成 URL ユーザーが Workspace にログオンしているときに、サブレット構成設定を動的に再ロードするための URL です。

再構築 データベース・インデックス、また場合によってはデータ・ファイルの再生成もしくは再構築を行う操作です。

最新 最新期間として定義されたメンバーからデータ値を取得するために使用される、スプレッドシートのキー・ワードです。

最上位メンバー 次元のアウトラインで、階層ツリーが一番上に位置する次元メンバーです。次元メンバー間に階層の関係がない場合は、ソート順で最初のメンバーを指します。階層の関係がある場合、最上位メンバーの名前は一般に次元名と同一です。

サイレント応答ファイル インストール管理者が提供する必要のあるデータを提供するファイルです。応答ファイルにより、ユーザーの操作や入力なしで EPM System インストーラまたは EPM System コンフィグレータを実行できます。

サブ勘定科目のナンバリング 不連続の整数を使用してサブ勘定科目のナンバリングを行うためのシステムです。

サブスクライブ アイテムまたはフォルダが更新されるときに自動的に通知を受け取るように、アイテムまたはフォルダにフラグを付けることを指します。

サポート詳細 セルの値を算出した計算および仮定です。

三角換算法 第 3 の共通通貨を介して、残高をある通貨から別の通貨に換算する方法です。たとえば、残高をデンマーク・クローネから英国ポンドに換算するには、残高をクローネからユーロに換算し、ユーロからポンドに換算します。

算出ステータス 一部の値または式の計算が変更されたことを示す集計ステータスです。影響を受けるエンティティについて正しい値を取得するには、再集計する必要があります。

算術演算子 式およびアウトラインでのデータの計算方法を定義する記号です。標準的な算術演算子またはブール演算子が使用されます(+、-、*、/、% など)。

算術データ・ロード データベース内の値に対して演算(たとえば各値に 10 を加算するなど)を実行するデータ・ロードです。

サンプリング エンティティの特性を判断するためにエンティティの代表的な部分を選択するプロセスです。「メタデータのサンプリング」も参照してください。

サービス ビジネス・アイテムを取得、変更、追加、および削除するためのリソースです(権限付与、認証など)。

サブレット Web サーバーが実行可能なコンパイルされたコードです。

残高勘定科目 特定の時点に関連する符号なしの値を保管する勘定科目のタイプです。

式 Data Relationship Management で、プロパティ値を動的に計算するために派生プロパティによって使用されるビジネス・ロジックです。

式の保存 データ取得中にワークシート内に保持される、ユーザーが作成した式です。

資産勘定科目 勘定科目タイプの 1 つです。会社の資産の値を保管します。

支出勘定科目 期別の値と年次累計値を保管する勘定科目です。値が正の場合は、純利益が減ります。

市場リスク割増額 国債よりもリスクの高い投資を投資家に呼びかけるための、安全率に追加して支払われる利回りです。予測される市場利回りから安全率を差し引いて計算されます。この数字が示すモデルは将来の市況に近いものとなる必要があります。

システム抽出 アプリケーション・メタデータから ASCII ファイルにデータを転送する機能です。

子孫 データベース・アウトラインで親の下に位置するメンバーです。たとえば、年、四半期および月を含む次元では、メンバー Qtr2 およびメンバー April がメンバー Year の子孫となります。

シナリオ データを分類するための次元です。たとえば、実績、予算、予測 1、予測 2 などです。

支配比率 所属するグループ内でエンティティが受ける支配の程度です。

収益勘定科目 期別の値と年次累計値を保管する勘定科目です。値が正の場合は純利益が増えます。

集計ルール 階層のノードを集計する際に実行されるルールです。親の残高が正しく集計されるように、顧客固有の適切な式を含めることができます。消去プロセスは、このルール内でコントロールできます。

修飾名 定まったフォーマットのメンバー名です。重複メンバーのアウトラインにおいて、重複メンバー名を区別します([Market].[East].[State].[New York]、[Market].[East].[City].[New York]など)。

集約 集約ストレージ・データベースの値をロール・アップおよび保管するプロセスです。または集約プロセスによって保管された結果を指します。

集約関数 関数の一種です。合計、平均の計算など、データの要約や分析を実行します。

集約スクリプト 集約を構築するための集約ビューの選択を定義するファイルです。集約ストレージ・データベースのみで使用されます。

集約ストレージ・データベース 潜在的に大きな多数の次元に分類される疎に分散した大規模なデータをサポートするように設計されたデータベースのストレージ・モデルです。上位のメンバーと式は動的に計算され、選択されたデータ値は集約、保管されます。通常、集約の合計所要時間が改善されます。

集約制約 集約要求ライン・アイテムや集約メタピック・アイテムに設定する制約です。

集約セル 複数のセルから構成されるセルです。たとえば、Children(Year)を使用するデータ・セルは、Quarter 1、Quarter 2、Quarter 3、および Quarter 4 のデータを含む 4 つのセルに展開されます。

集約ビュー 各次元内のメンバーのレベルに基づく集約セルの集合です。計算時間を短縮するため、値は事前に集約されて集約ビューとして保管されています。取得は集約ビューの合計から開始され、合計に追加されます。

出資比率 エンティティが親によって所有される程度です。

手動ステージ ユーザーが操作する必要があるステージです。

障害快復 アプリケーションおよびデータを地理的に離れたスタンバイ・サイトで回復させる戦略を持つことにより、本番サイトでの自然災害や予期しない事故による停止を防ぐ機能です。

消去 組織内のエンティティ間でのトランザクションをゼロに設定(消去)するプロセスです。

消去済勘定科目 連結ファイルに表示されない勘定科目です。

詳細チャート 要約チャートで、詳細な情報を提供するチャートです。詳細チャートは要約チャートの下にある「調査」セクションに列で表示されます。要約チャートに円グラフが表示される場合、その下の詳細チャートには円の各区分が示されます。

使用済ブロック 最後に計算された後に変更されたセルを含むデータ・ブロックです。子ブロックが使用済である場合(つまり更新されている場合)、上位のブロックにも使用済のマークが付けられます。

シリアル計算 デフォルトの計算設定です。1 つの計算を複数のタスクに分割して、一度に 1 つのタスクを計算します。

仕訳(JE) シナリオと期間の残高勘定科目の借方・貸方に計上する調整のセットです。

シングル・サインオン(SSO) 1 回ログオンするだけで、認証のプロンプトを再び表示することなく複数のアプリケーションにアクセスできる機能です。

シングル・ポイント障害 障害が発生した場合にユーザーが通常の機能にアクセスできなくなるシステムのコンポーネントです。

信頼できるユーザー 認証されたユーザーです。

時間次元 データが示す期間です(会計期間、暦時間など)。

軸 1)測定と分類に使用されるグラフィックを貫通する直線です。2)多次元のデータを整理および関連付けるために使用されるレポートのアスペクトです(フィルタ、ページ、行、列など)。たとえば、Simple Basic でデータ・クエリーを実行する場合、軸では Qtr1、Qtr2、Qtr3、および Qtr4 の値の列を定義できます。Market と Product の階層による合計が行データとして取得されます。

次元 ビジネス・データを整理して値の取得や保持のために使用されるデータ・カテゴリです。通常、次元には関連するメンバーをグループ化した階層が含まれます。たとえば、年次元には多くの場合、四半期、月などの期間の単位ごとのメンバーが含まれます。

次元間の無関係性 次元が他の次元と交差しない状況を指します。次元に含まれるデータは、交差しない次元からはアクセスできないため、交差しない次元はその次元と無関係になります。

次元構築 Essbase アウトラインに次元およびメンバーを追加するプロセスです。

次元構築のルール データ・ロードのルールに似た仕様です。Essbase でアウトラインを変更するために使用されます。変更は外部データ・ソース・ファイルのデータに基づきます。

次元性 MaxL DML において、セットで示された次元およびその順序です。たとえば、{ (West, Feb), (East, Mar) } というセットの場合は、含まれている 2 つのタプルはいずれも次元 (Region, Year) を反映しているため、同一の次元性であることになります。

次元タイプ 定義済の機能を使用可能にする次元のプロパティです。時間のタグが付けられた次元は、定義済のカレンダー機能を持ちます。

次元タブ 「ピボット」セクションで、行と列の間でデータのピボットを実行するためのタブです。

次元テーブル 1) 特定のビジネス・プロセスに関する多数の属性を含むテーブルです。2) Essbase 統合サービスでは、Essbase の潜在的な次元を定義する 1 つ以上のリレーショナル・テーブルのための、OLAP モデルのコンテナを指します。

事前計算 ユーザーが取得する前にデータベースで計算を実行することです。

持続性 Essbase の操作や設定に対する継続的または長期的な影響です。たとえば、ユーザー名やパスワードの有効性について、Essbase 管理者がその持続性を制限することがあります。

実行時プロンプト ビジネス・ルールが実行される前にユーザーが入力または選択する変数です。

実績の頻度 日付のセットを作成して結果を収集および表示するために使用されるアルゴリズムです。

自動逆仕訳 次期に逆仕訳する調整を入力するための仕訳です。

自動ステージ ユーザーの操作を必要としないステージです (データ・ロードなど)。

従業員 特定のビジネス・オブジェクトに対して責任を負う (または関与する) ユーザーです。従業員は組織に勤めている必要はありません (コンサルタントなど)。従業員は、認証のためにユーザー・アカウントに関連付けられている必要があります。

重複する別名 別名テーブルに複数存在し、データベース・アウトラインの複数メンバーに関連付けられている可能性のある名前です。重複する別名は、重複メンバーのアウトラインでのみ使用できます。

重複メンバーのアウトライン 重複メンバー名を格納しているデータベース・アウトラインです。

重複メンバー名 データベース内に異なるメンバーを表して重複して存在する同一のメンバー名です。たとえば、ニューヨーク州を示すメンバーとニューヨーク市を示すメンバーが存在する場合、データベースに New York という名前のメンバーが 2 つ含まれることがあります。データベースに New York という名前のメンバーが 2 つ含まれることがあります。

重要事業領域 (CBA) 部門、地域、工場、コスト・センター、プロフィット・センター、プロジェクト・チーム、またはプロセスに編成された個人またはグループです。責任チームまたはビジネス領域とも呼ばれます。

重要成功要因 (CSF) 戦略目標を達成するために確立および維持する必要のある能力です。戦略目標または重要プロセスにより所有され、1 つ以上のアクションに対する親となります。

上位レベル・ブロック 少なくとも 1 つの疎メンバーが親レベルのメンバーになっているデータ・ブロックです。

冗長データ 重複データ・ブロックです。Essbase で更新されたブロックがコミットされるまで、トランザクションの間保持されます。

ジョブ 出力生成のために起動できる特殊なプロパティを持つドキュメントです。ジョブには Interactive Reporting、SQR Production Reporting、または汎用ドキュメントを含められます。

ジョブの出力 ジョブの実行によって生成されたファイルやレポートです。

垂直アプリケーション・サーバー・クラスタ 同じマシンに複数のアプリケーション・サーバー・インスタンスがあるクラスタです。

水平アプリケーション・サーバー・クラスタ 別のマシンにアプリケーション・サーバー・インスタンスがあるクラスタです。

数値属性範囲 基本次元メンバーを関連付けるために使用される機能です。メンバーは個別の数値を含み、値の範囲を示す属性を持ちます。たとえば、顧客を年齢別に分類する場合、Age Group 属性次元に 0-20、21-40、41-60、および 61-80 という年齢範囲に該当するメンバーを含められます。各 Customer 次元メンバーは Age Group 範囲に関連付けられません。データを取得する際は、個別の年齢の値ではなく年齢範囲に基づいて処理されます。

スキーマ リレーショナル・データベースにおける、データおよびデータ間の関連を表す論理モデル。

スクレーピング データ・ソースを検査して、最も基本的なメタデータ要素を得ることを指します。「イントロスペクション」と対比してください。

スケール スケールによって、値の表示方法(整数、十、百、千、百万など)を決定します。

スコア 目標を達成するレベルです。通常は目標のパーセンテージとして表されます。

スコアカード 目標を達成する上での、従業員、戦略要素または責任要素の進行状況を示すビジネス・オブジェクトです。スコアカードに追加された各メジャーおよび子スコアカードについて収集されるデータに基づいて、進行状況が確認されます。

スコープ Essbase の操作または設定により包含されるデータ領域です(セキュリティ設定により影響を受けるデータ領域など)。通常、スコープには粒度が 3 レベルあり、上位レベルが下位レベルを包含します。レベルは上位から下位の順で、システム全体(Essbase サーバー)、Essbase サーバー上のアプリケーション、Essbase サーバー・アプリケーション内のデータベースとなります。「持続性」も参照してください。

ステージ 1)通常は個別のユーザーにより実行される、タスクフロー内の 1 つの論理ステップを形成するタスクの説明です。ステージには手動と自動の 2 つのタイプがあります。2) Profitability で、組織の割当てプロセスのステップを表すモデル内の論理的な区分です。

ステージ・アクション 自動ステージで、ステージを実行するために呼び出されたアクションです。

ステージ後割当て 割当てモデルにおける割当てです。後に続くモデル・ステージの場所に割り当てられます。

ステージ内割当て 財務フローの割当てです。同じステージ内のオブジェクトに対して割り当てられません。

ステージング・テーブル 特定のアプリケーションの必要性に対応するために作成するデータベースです。ステージング領域は、1 つ以上の RDBMS のスナップショット(再構築されたバージョン)です。

ステージング領域 特定のアプリケーションの必要性に対応するために作成するデータベースです。ステージング領域は、1 つ以上の RDBMS のスナップショット(再構築されたバージョン)です。

ステータス・バー 画面下部のバーで、コマンド、勘定科目、およびデータ・ファイルの現在のステータスに関する有用な情報を表示します。

スナップショット 特定の時点の読取り専用データです。

スポットライター 選択された条件に基づくカラー・コーディングを使用可能にするツールです。

スマート・カット URL フォームのリポジトリ・アイテムへのリンクです。

スマート・タグ Microsoft Office アプリケーションでのキーワードです。スマート・タグのメニューから使用可能な定義済アクションに関連付けられています。Oracle EPM System 製品でも、スマート・タグを使用して Reporting and Analysis のコンテンツのインポートや Financial Management および Essbase の機能へのアクセスが可能です。

スーパーバイザ サーバーのすべてのアプリケーション、データベース、関連ファイル、セキュリティ機構にフル・アクセスできるユーザーです。

ズームチャート チャートを拡大することにより詳細情報を表示するためのツールです。ズームチャートにより、チャートに表示されるメトリックについて数値情報を詳細に表示できます。

精度 数値に表示される小数点以下の桁数です。

製品 Shared Services における、Planning や Performance Scorecard などのアプリケーション・タイプです。

セカンダリ・メジャー プライマリ・メジャーよりも優先度の低いメジャーです。セカンダリ・メジャーには業績レポートがありませんが、スコアカードで使用したり、次元メジャーのテンプレートを作成するために使用できます。

責任マップ 組織内の責任チーム(重要事業領域とも呼ばれます)の責任、報告、および依存関係の構造を視覚的、階層的に示します。

セキュリティ・エージェント Web アクセス管理プロバイダ(Oracle Access Manager、Oracle Single Sign-On、CA SiteMinder など)です。企業の Web リソースを保護します。

セキュリティ・プラットフォーム Oracle EPM System 製品で外部認証とシングル・サインオン機能を使用するためのフレームワークです。

世代 データベースでのメンバー関係を定義する階層ツリー内のレイヤーです。世代は、次元の最上位のメンバー(世代 1)から子メンバーへと 1 世代ずつ下に配置されていきます。一意の世代名を使用すると、階層ツリー内のレイヤーを特定できます。

設計レポート コンポーネント・ライブラリを使用してカスタム・レポートを作成するための Web Analysis Studio のインタフェースです。

接続ファイル 「Interactive Reporting 接続ファイル (.oce)」を参照してください。

セル 1)多次元データベースの次元の交差を表すデータ値です。ワークシート上の行および列の交差を指します。2)管理ドメインに属するノードの論理グループです。

セル・ノート Essbase データベースでセルに付けられるテキスト注釈です。セル・ノートは LRO の一種です。

選択リスト レポート・デザイナーがレポートの視点(POV)を定義する際に各次元に指定できるメンバーのリストです。定義されたメンバー・リストに指定されたメンバーのみを選択するか、または動的リストの関数に定義された条件に一致するメンバーのみを選択することで、選択リストを使用する次元の POV を変更できます。

戦略マップ 組織の上位レベルのミッションおよびビジョンのステートメントを、構成要素である下位レベルの戦略目標および目的に組入れる方法を示します。

戦略目標(SO) 測定可能な結果によって定義された長期目標です。各戦略目標は、アプリケーション内の 1 つのパーспекティブに関連付けられ、1 つの親(エンティティ)を持ち、重要成功要因または他の戦略目的の親になります。

税金の初期残高 Strategic Finance では、損失の初期残高、収益の初期残高、および納税の初期残高のエントリーは、Strategic Finance の最初の期間に先立つ期間に発生していることを前提とします。

関連サブクエリー 親クエリーの各行で一度評価されるサブクエリーです。サブクエリーのトピック・アイテムを親クエリーのトピックに結合することにより作成されます。

相互割当て 財務フローの割当ての一種です。宛先の 1 つとしてソースが含まれます。

組織 各エンティティ、およびその関係を定義するエンティティの階層です。

祖先 その下にメンバーを含む分岐メンバーです。たとえば、メンバー Qtr2 とメンバー 2006 はメンバー April の祖先です。

属性 次元メンバーの特性です。たとえば、従業員次元メンバーには、名前、年齢、または住所の各属性がある場合があります。製品次元メンバーには、サイズや味などの一連の属性を指定できます。

属性計算次元 メンバーのグループに対して、合計、カウント、平均、最小、および最大を計算するシステム定義の次元です。この次元は動的に計算され、データベース・アウトラインでは表示されません。たとえば、メンバー Avg を使用すると、製品 Red についてニューヨークでの 1 月の平均売上値を計算できます。

属性次元 次元の一種です。次元のメンバーの属性や特質に基づいて分析できます。

属性タイプ 様々な関数(データのグループ化、選択、または計算)を使用可能にするためのテキスト、数値、ブール値、日付、またはリンク属性タイプです。たとえば、Ounces 属性次元は数値タイプを持つので、各製品の属性として指定されるオンス数を使用して当該製品のオンス当たりの収益を計算できます。

属性の関連付け データベース・アウトラインでの関係です。これにより、属性次元のメンバーが基本次元のメンバーの特性を表します。たとえば、製品 100-10 がグレープ味である場合、製品 100-10 は Flavor 属性の関連付けがグレープになります。したがって、Product 次元のメンバー 100-10 は Flavor 属性次元のメンバー Grape に関連付けられることになります。

属性レポート 基本次元メンバーの属性に基づくレポート作成プロセスです。「基本次元」も参照してください。

貸借一致の仕訳 借方の合計と貸方の合計が等しい仕訳です。

対称型マルチプロセッシング(SMP) マルチプロセッシングとマルチスレッディングを使用可能にするサーバーのアーキテクチャです。多数のユーザーが単一のインスタンスに同時に接続した場合でも、パフォーマンスが大きく低下することはありません。

対象トポロジ 本番サイトとスタンバイ・サイトの層全体にわたって同一の Oracle Fusion Middleware Disaster Recovery の構成です。対象トポロジでは、本番サイトとスタンバイ・サイトのホスト、ロード・バランサ、インスタンスおよびアプリケーションの数は同一です。両方のサイトに同じポートが使用されます。システムはまったく同様に構成され、アプリケーションは同じデータにアクセスします。

タイトル・バー Strategic Finance 名、ファイル名およびシナリオ名のバージョン・ボックスを表示するバーです。

タイム・イベント ジョブの実行をトリガーします。

タイム・スケール 指定された期間別(毎月、四半期ごとなど)にメトリックを表示するスケールです。

タイムライン・ビューア 特定の場所について、完了したプロセス・フロー・ステップの日時を表示するための FDM の機能です。

多次元データベース 3 つ以上の次元でデータを整理、保管および参照するメソッドです。次元のセットが交差するポイントが個別の値となります。「リレーショナル・データベース」と対比してください。

タスクフロー ビジネス・プロセスの自動化を指します。手続きのルールに従って、あるタスクフロー参加者から別の参加者にタスクが渡されます。

タスクフロー・インスタンス タスクフローの単一のインスタンスで、タスクフローの状態と関連データを含みます。

タスクフロー管理システム タスクフローを定義および作成し、その実行を管理するシステムです。定義付け、ユーザーまたはアプリケーションのやりとり、およびアプリケーションの実行可能ファイルが含まれます。

タスクフロー参加者 手動ステージおよび自動ステージの両方について、タスクフローのステージのインスタンスに関連付けられているタスクを実行するリソースです。

タスクフロー定義 タスクフロー管理システムのビジネス・プロセスです。ステージとステージ間の関係のネットワークから構成され、タスクフローの開始と終了を示す基準、および個別のステージに関する情報(参加者、関連アプリケーション、関連アクティビティなど)が含まれます。

タスク・リスト 特定のユーザーについて、タスクの詳細ステータスを示すリストです。

タブ Strategic Finance で、勘定科目とレポートのナビゲーションを行えるビューです。

ダブル MDX 構文の要素です。セルは、各次元からのメンバーの交差として参照されます。次元が削除されている場合、最上位のメンバーが示されます。たとえば、(Jan)、(Jan, Sales)、([Jan], [Sales], [Cola], [Texas], [Actual])といったダブルがあります。

単項演算子 アウトラインのメンバーに関連付けられている算術インディケータ(+、-、*、/、%)です。単項演算子では、データベースのロールアップ中のメンバーの計算方法が指定されます。

代替階層 共有メンバーの階層です。代替階層はデータベース・アウトラインの既存の階層に基づきますが、次元に代替レベルを持ちます。代替階層により、異なる視点(POV)から同一データを表示できます。

ダッシュボード 業務の要約を対話的に示すメトリックと指標の集まりです。ダッシュボードにより分析アプリケーションを構築して配置できます。

置換 データ・ロードのオプションの 1 つです。データ・ロード・ファイルに指定された期間のすべての勘定科目からの既存の値を消去し、データ・ロード・ファイルからの値をロードします。ロード・ファイルに勘定科目が指定されていない場合は、指定された期間に該当する値が消去されます。

チャート・テンプレート Workspace チャートに表示するメトリックを定義するテンプレートです。

抽出コマンド Essbase レポート作成コマンドの1つです。データベースから抽出される RAW データの選択、向き、グループ分けおよび順序付けを処理します。小なり記号(<)から始まるコマンドです。

調査 「ドリルスルー」を参照してください。

調整 「仕訳」を参照してください。

調整勘定科目 内部取引勘定科目の消去プロセスで均衡しない差額が保管される勘定科目です。

直接レート 為替レート・テーブルに入力する通貨レートです。直接レートは通貨換算に使用されます。たとえば、残高を日本円から米ドルに変換する場合、変換元通貨を日本円、変換先通貨を米ドルとして、為替レート・テーブルに期間またはシナリオのレートを入力します。

通貨換算 データベースの通貨の値を別の通貨に変換するプロセスです。たとえば、1米ドルをユーロに変換するには、ドルに為替レート(たとえば、0.923702)を乗じます(1*0.923702)。変換後のユーロの額は0.92になります。

通貨の上書き 任意の入力期間の選択した入力メソッドを上書きして、デフォルトの通貨/アイテムとして該当期間の値の入力を使用可能にする機能です。入力メソッドを上書きするには、数値の前または後にシャープ(#)を入力します。

通貨パーティション アプリケーションでの定義に従って、基本通貨から現地通貨メンバーを隔離する次元タイプです。通貨タイプ(実績、予算、予測など)を特定します。

通常仕訳 特定の期間に一度かぎりの調整を入力するための機能です。通常仕訳は、貸借一致エンティティごとに貸借一致、貸借不一致のいずれかになります。

定義済ドリル・パス データ・モデルでの定義に従って次の詳細レベルにドリルするために使用されるパスです。

適応状態 Interactive Reporting Web Client の権限レベルです。

テキスト・メジャー Essbase では、メジャーが示されている次元で Text としてタグ付けされたメンバーを指します。セルの値は定義済テキストとして表示されます。たとえば、Satisfaction Index というテキスト・メジャーについては、Low、Medium、および High という値を含めることがあります。「型付きメジャー」、「テキスト・リスト」および「導出テキスト・メジャー」も参照してください。

デフォルト通貨単位 データの単位スケールです。たとえば、千単位で分析を定義するように選択して10を入力すると、この単位は10,000と解釈されます。

データ関数 値を集約する関数。データの平均、最大値、件数を求める関数や、その他の統計値を求める関数があります。

データ・キャッシュ 非圧縮データ・ブロックを保持するメモリー内のバッファです。

データ・セル 「セル」を参照してください。

データ値 「セル」を参照してください。

「データなし」ステータス 集計ステータスの1つです。特定の期間と勘定科目のデータがこのエンティティに含まれていないことを示します。

データ・ファイル・キャッシュ 圧縮データ(PAG)ファイルを保持する、メモリー内のバッファです。

データ・フォーム Web ブラウザなどのインタフェースからデータベースにデータを入力でき、データまたは関連テキストを表示して分析できるグリッド表示です。一部の次元メンバー値は固定され、データが特定の視点から表示されます。

データベース接続 データ・ソースへの接続に使用する定義とプロパティを保管し、データベース参照を移動可能にして広く使用できるようにするファイルです。

データ・マイニング Essbase データベースを検索して、大量のデータの中から隠れた関係やパターンを見つけるプロセスです。

データ・モデル データベース・テーブルのサブセットを示します。

データ・ロック 指定された基準(期間、シナリオなど)に従ってデータの変更を防ぐ機能です。

データ・ロード位置 FDM で、ソース・データをターゲット・システムに送信する報告単位です。通常、ターゲット・システムにロードされるソース・ファイルごとに FDM のデータ・ロード位置が 1 つあります。

データ・ロードのルール テキストベース・ファイル、スプレッドシート、またはリレーショナル・データ・セットからのデータをデータベースにロードする方法を決定する一連の基準です。

透過パーティション ローカルのデータベースの一部であるかのように、リモート・データベースのデータにアクセスして変更できるようにする共有パーティションです。

透過ログイン ログイン画面を起動せずに認証されたユーザーをログインさせるプロセスです。

統合 Shared Services を使用して Oracle Hyperion アプリケーション間でデータを移動するために実行されるプロセスです。データ統合の定義によりソース・アプリケーションと宛先アプリケーションの間でのデータの移動が指定され、データの動きのグループ化、順序付けおよびスケジュールが決定されます。

統制グループ 証明書および評価の情報を維持および整理するために FDM で使用されるグループです。サーバンス・オクスリ (Sarbanes-Oxley) 法の規定に準拠する上で特に役立ちます。

時系列レポート作成 カレンダの日付(年、四半期、月、週など)に基づくデータのレポート作成プロセスです。

トップ・ラベルとサイド・ラベル 列と行の見出しです。ピボット・レポートの上部とサイドにそれぞれ表示されます。

トラフィック・ライト 2つの次元メンバーの比較、または一定の制限値に基づいて、レポートのセルまたはピンを色分けする機能です。

トリガー ユーザーが指定した基準に従ってデータを監視するための、Essbase の機能の 1 つです。基準に一致すると、Essbase はユーザーまたはシステム管理者にアラートを送信します。

トレーサビリティ メタデータ要素を物理ソースまで追跡する機能です。たとえば Essbase Studio の場合、キューブ・スキーマをそれ自体の階層およびメジャー階層から次元要素、日付/時間要素、メジャー、そして最終的には物理ソース要素まで追跡できます。「系列」も参照してください。

トレース・レベル ログ・ファイルに取り込まれた詳細のレベルです。

トレース割当て Profitability の機能の 1 つです。財務データのフローに対する視覚的な追跡を可能にします。この追跡は単一の交差から、モデル内の前方または後方に実行できます。

トークン 外部認証システム上の 1 つの有効なユーザーまたはグループの暗号化された ID です。

トースト・メッセージ 画面の右下隅に表示されるメッセージです。

同期 Shared Services とアプリケーション・モデルの同期です。

同期済 モデルの最新バージョンがアプリケーションと Shared Services の両方に存在する状態を指します。「モデル」も参照してください。

導出テキスト・メジャー Essbase Studio で、範囲として表現された定義済ルールによって管理される値を持つテキスト・メジャーです。たとえば、販売高メジャーに基づく導出テキスト・メジャー「販売実績インデックス」は、「高」、「中」、および「低」の値で構成できます。対応する売上が該当する範囲に応じて High、Medium、および Low が表示されるように定義されます。「テキスト・メジャー」も参照してください。

動的階層 集約ストレージ・データベースのアウトラインに限定して、取得時に値が計算されるメンバーの階層です。

動的計算 Essbase で、動的計算メンバー、または動的計算および保管メンバーとしてタグ付けされているメンバーについてデータを取得する場合にのみ実行される計算です。メンバーの値は、バッチ計算で事前に計算されるのではなく、取得時に計算されます。

動的計算および保管メンバー ブロック・ストレージ・アウトラインで、値を最初に取得したときのみ Essbase によって計算が行われるメンバーです。計算された値はデータベースに保管され、2 回目以降の取得では計算を実行する必要がありません。

動的計算メンバー ブロック・ストレージ・アウトラインで、取得時にのみ Essbase によって計算が行われるメンバーです。取得要求の処理が完了すると、計算された値は破棄されます。

動的参照 データ・ソース内のヘッダー・レコードを指すルール・ファイル内のポインタです。

動的時系列 ブロック・ストレージ・データベースで、期間累計のレポート作成を実行するプロセスです。

動的ビュー勘定科目 勘定科目の1つです。勘定科目の値は、表示されているデータから動的に計算されます。

動的メンバー・リスト システムにより作成される名前付きメンバー・セットです。ユーザーが定義した基準が使用されます。アプリケーションでリストが参照されるとき、リストは自動的にリフレッシュされます。次元メンバーの増減に応じて基準が自動的にリストに適用され、変更内容が反映されます。

動的レポート レポートを実行するときに更新されるデータを含むレポートです。

ドメイン データ・マイニングにおいて、データ内での移動の範囲を表す変数です。

ドライバ Profitability and Cost Management では、ドライバを使用する複数ソース間の数学的關係、およびこれらのソースがコストや収益を割り当てる宛先を示す割当て方法の一種です。Business Modeling については、「コスト・ドライバ」および「アクティビティ・ドライバ」も参照してください。

ドリルスルー あるデータ・ソースの値から別のソースの対応するデータに移動することです。

ドリルダウン 次元の階層を使用してクエリー結果セット内をナビゲートすることです。ドリルダウンにより、ユーザーのパーспекティブが集約データから詳細に移ります。たとえば、ドリルダウンにより年と四半期の階層関係、または四半期と月の階層関係が明らかになります。

名前付きセット MaxL DML で、MaxL DML クエリーのオプションの WITH セクションに定義された論理を使用するセットです。名前付きセットはクエリー内で複数回参照することが可能です。

入力データ 計算されるのではなくソースからロードされるデータです。

認証 安全対策としての ID の確認です。一般に、認証はユーザー名およびパスワードに基づきます。パスワードおよびデジタル・シグネチャは認証のフォームです。

認証サービス 単一の認証システムを管理するコア・サービスです。

ネイティブ認証 サーバーまたはアプリケーション内で、ユーザー名とパスワードを認証するプロセスです。

ネスト列ヘッダー 複数の次元からのデータを表示するレポートの列ヘッダーのフォーマットです。たとえば、Year と Scenario のメンバーが含まれる列ヘッダーはネスト列です。ネスト列ヘッダーでは、ヘッダーの一番上の行の Q1 (Year 次元) が、ヘッダーの一番下の行の Actual および Budget (Scenario 次元) で修飾されます。

ハイパーテキスト・マークアップ言語 (HTML) Web ブラウザでのデータ表示を指定するプログラミング言語です。

ハイパーリンク ファイル、Web ページまたはイントラネット HTML ページへのリンクです。

ハイブリッド分析 リレーショナル・データベースに保管された下位レベルのデータを、Essbase に保管された要約レベルのデータにマッピングする分析です。リレーショナル・システムの大規模スケーラビリティと多次元データを組み合わせます。

反復タイム・イベント ジョブの実行開始点と実行頻度を指定するイベントです。

反復テンプレート 各期間に対して同一の調整を行うための仕訳テンプレートです。

汎用ジョブ SQR Production Reporting または Interactive Reporting 以外のジョブを指します。

凡例ボックス 次元のデータ・カテゴリを特定するためのラベルを含むボックスです。

ハードウェア・クラスタ ネットワーク・サービス(たとえば IP アドレス)やアプリケーション・サービス(データベースや Web サーバーなど)のシングル・ビューを、これらのサービスのクライアントに提供するコンピュータの集合です。ハードウェア・クラスタの各ノードは、独自のプロセスを実行するスタンドアロン・サーバーです。これらのプロセスは互いに通信して、連携してアプリケーション、システム・リソース、データをユーザーに提供する1つのシステムのようなものを形成します。

バックアップ アプリケーション・インスタンスの複製コピーです。

バッチ POV ユーザーの POV において、バッチに含まれる各レポートおよびブックのすべての次元の集合です。バッチのスケジュールを立てる際は、バッチ POV で選択されたメンバーを設定できます。

バッチ計算 データベースにおいてバッチで実行される計算です(計算スクリプト、すべてのデータベース計算など)。動的計算はバッチ計算とはみなされません。

バッチ処理モード サーバー管理や診断のルーチン・タスクを自動化するために使用できるバッチやスクリプト・ファイルを記述するために、ESSCMD を使用する方法です。ESSCMD スクリプト・ファイルは複数のコマンドを実行でき、オペレーティング・システムのコマンド・ラインから実行したり、オペレーティング・システムのバッチ・ファイルから実行できます。バッチ・ファイルを使用すると、複数の ESSCMD スクリプトを呼び出したり、ESSCMD の複数インスタンスを実行できます。

バッチ・ファイル 複数の ESSCMD スクリプトを呼び出して複数の ESSCMD セッションを実行できるオペレーティング・システム・ファイルです。Windows システムの場合、バッチ・ファイルには BAT というファイル拡張子が付けられます。UNIX の場合、バッチ・ファイルはシェル・スクリプトとして記述されます。

バッチ・ローダー 複数ファイルの処理を可能にする FDM コンポーネントです。

バージョン データのシナリオのコンテキスト内で使用される、起こりうる結果です。たとえば、Budget - Best Case と Budget - Worst Case では、Budget がシナリオであり、Best Case と Worst Case がバージョンです。

パターン照合 条件として入力される項目の一部またはすべての文字と値を照合する機能です。欠落文字は、疑問符(?)やアスタリスク(*)などのワイルド・カード値で表すことができます。たとえば、「Find all instances of apple」では apple が戻されるのに対して、「Find all instances of apple*」では apple、applesauce、applecranberry などが戻されます。

パフォーマンス・インディケータ ユーザーが指定した範囲に基づくメジャーおよびスコアカード・パフォーマンスを示すために使用されるイメージ・ファイルです。ステータス記号とも呼ばれます。デフォルトのパフォーマンス・インディケータを使用することもできますが、無制限に独自のパフォーマンス・インディケータを作成することも可能です。

パブリック・ジョブ・パラメータ 管理者が作成する再利用可能な名前付きジョブ・パラメータです。必要なアクセス権を持つユーザーがアクセスできます。

パブリック反復タイム・イベント 管理者が作成する再利用可能なタイム・イベントです。アクセス・コントロール・システムからアクセスできます。

パレット JASC に準拠し、.PAL 拡張子を持つファイルです。各パレットには相互に補完し合う 16 色が含まれ、ダッシュボードの色要素の設定に使用することが可能です。

パースペクティブ スコアボードのメジャーやアプリケーションにおける戦略目標をグループ化するために使用されるカテゴリです。パースペクティブにより、主要な利害関係者(顧客、従業員、株主、金融関係者など)またはキー・コンピテンシ領域(時間、コスト、品質など)を示せます。

パーティション化 データ・モデルの間で共有またはリンクされるデータの領域を定義するプロセスです。パーティション化は Essbase アプリケーションのパフォーマンスとスケーラビリティに影響することがあります。

パーティション領域 データベース内のサブ・キューブです。パーティションは、データベースの一部からの 1 つ以上のセル領域から構成されます。複製パーティションおよび透過パーティションの場合、2 つのパーティションが同じ形状となるために、領域内のセルの数がデータ・ソースとターゲットで同一となる必要があります。データ・ソース領域に 18 個のセルが含まれる場合、データ・ターゲット領域にも対応する 18 個のセルが含まれている必要があります。

非アクティブ・グループ 管理者によりシステムへのアクセスが非アクティブにされているグループです。

「非アクティブ」ステータス エンティティの当期の集計が非アクティブ化されていることを示すステータスです。

非アクティブ・ユーザー 管理者によりアカウントが非アクティブ化されたユーザーです。

非次元モデル Shared Services のモデル・タイプの 1 つです。セキュリティ・ファイル、メンバー・リスト、計算スクリプト、Web フォームなどのアプリケーション・オブジェクトが含まれます。

非対称トポロジ 本番サイトとスタンバイ・サイトの層全体にわたって異なる Oracle Fusion Middleware Disaster Recovery の構成です。たとえば、非対称トポロジでは、スタンバイ・サイトのホストやインスタンスを本番サイトより少なくすることができます。

日付メジャー Essbase で、メジャーが示されている次元で「日付」のタグが付けられているメンバーです。セルの値はフォーマット済の日付として表示されます。メジャーとしての日付は時間次元を使用して示すことが困難な分析タイプに役立つことがあります。たとえば、一連の固定資産の取得日をアプリケーションで追跡する必要がある場合、取得日の範囲が実現可能な時間次元モデリングの範囲を超えて長期にわたってしまうことがあります。「型付きメジャー」も参照してください。

表示タイプ リポジトリに保存された 3 種類の Web Analysis フォーマット(スプレッドシート、チャート、ピンボード)のいずれかを指します。

標準仕訳テンプレート 各期間に共通する調整を転記するために使用する仕訳の機能です。たとえば、共通する勘定科目 ID、エンティティ ID または金額を含む標準テンプレートを作成すると、これを多数の通常仕訳の基準として使用できます。

標準次元 属性次元以外の次元です。

ビジネス・プロセス 集散的にビジネス上の目標を達成するための一連のアクティビティです。

ビジネス・ルール 期待される一連の結果値を生成するためにアプリケーション内に作成される論理式または式です。

ビジュアル・キュー 特定のデータ値タイプを強調表示する、フォントや色などフォーマットの設定されたスタイルです。データ値は、次元メンバー、親メンバー、子メンバー、共有メンバー、動的計算、式を含むメンバー、読取り専用データ・セル、読取りおよび書込みデータ・セルまたはリンク・オブジェクトのいずれかです。

ビュー 年次累計または期別のデータ表示です。

ピボット 取得したデータのパーспекティブを変更します。Essbase では、まず次元が取得され、データが行に展開されます。その後、データのピボット(並べ替え)を行うことにより、異なる視点を得ることができます。

ピン ピンボードと呼ばれるグラフィック・レポート上に配置される対話型アイコンです。ピンは動的です。基盤となるデータ値や分析ツールの基準に基づいて、イメージやトラフィック・ライトの色を変更できます。

ピンボード 3 種類のデータ・オブジェクトの表示タイプの 1 つです。ピンボードは、背景およびピンと呼ばれる対話型アイコンからなるグラフィックです。ピンボードを使用するにはトラフィック・ライトを定義する必要があります。

ファイルの区切り文字 データ・ソース内のフィールドを区切る文字です(カンマ、タブなど)。

ファクト・テーブル スター結合スキーマの中心のテーブルです。外部キー、および次元テーブルから取得した要素により特徴付けられます。通常、このテーブルにはスキーマの他のすべてのテーブルに関連する数値データが含まれます。

フィルタ データ・セットで、特定の基準に従って値を制限する制約です。たとえば、特定のテーブル、メタデータ、または値を除外したり、アクセスを制御したりする場合に使用されます。

フェイルオーバー プライマリ・データベース、サーバーまたはネットワークに障害が発生したり、これらがシャットダウンしたりする場合に、冗長性のあるスタンバイ・データベース、サーバーまたはネットワークに自動的に切り替える機能です。フェイルオーバー用にクラスタリングされているシステムは、高可用性、サーバーの冗長性を利用したフォルト・トレランス、および共有ディスクなどのフォルト・トレラント・ハードウェアを提供します。

フォーマット文字列 1) Essbase では、セル値の表示形式を変換するための方法です。2) Data Relationship Management では、プロパティ値を戻すフォーマットを示す、フォーマットまたはフォーマット済日付の派生プロパティのパラメータです。

復元 データベースが破損または破壊された場合にデータおよび構造の情報を再ロードする操作です。通常、データベースをシャット・ダウンおよび再起動した後で実行されます。

複製パーティション パーティション・マネージャにより定義されるデータベースの一部です。あるサイトで管理されるデータの更新を別のサイトで保管されているデータのコピーに伝播するために使用されます。ユーザーは、ローカルのデータベースと同じようにデータにアクセスできます。

負債勘定科目 一定時点における会社の負債残高を格納する勘定科目タイプです。たとえば、未払費用、買掛金勘定、長期借入金などです。

フッター レポート・ページ下部に表示されるテキストまたはイメージです。ページ番号、日付、ロゴ、タイトル、ファイル名、作成者名など、動的な関数や静的なテキストが含まれます。

フリーフォーム・グリッド 動的計算のために、異なるソースからのデータを提示、入力、および統合するためのオブジェクトです。

フリーフォーム・レポート作成 ワークシートに次元メンバーまたはレポート・スクリプト・コマンドを入力することにより、レポートを作成することを指します。

フレーム デスクトップ上の領域です。ナビゲーションとワークスペース・フレームの2つの主要な領域があります。

フロー勘定科目 期別と年次累計の符号なしの値を保管する勘定科目です。

ブック 1) Financial Reporting では、類似ドキュメントのグループを保持するコンテナです。ブックでは、次元のセクションまたは次元の変更を指定できます。2) Data Relationship Management では、グループとしてまとめて実行できるエクスポートのコレクションです。エクスポート結果は、結合されるか個別に出力されます。

ブックの POV ブックが実行される次元メンバーです。

ブックマーク ユーザー個人のページに表示されるレポート・ドキュメントまたは Web サイトへのリンクです。ブックマークには、マイ・ブックマークおよびイメージ・ブックマークというタイプがあります。

ブロック プライマリ・ストレージ・ユニットです。多次元配列であり、すべての密次元のセルを表します。

ブロックされた勘定科目 手動で入力するために連結ファイルの計算に含めない勘定科目です。

ブロック・ストレージ・データベース 疎次元に定義されたデータ値の分散度に基づいてデータを分類および保管する、Essbase のデータベース・ストレージ・モデルです。データ値はブロック単位で保管され、ブロックは値を含む疎次元メンバーについてのみ存在します。

ブロードキャスト・メッセージ Planning アプリケーションにログオンしているユーザーに対して管理者が送信する単純なテキスト・メッセージです。メッセージには、システムの可用性、アプリケーション・リフレッシュの通知、アプリケーションのバックアップなどの詳細情報が表示されます。

分離レベル データベース操作のロックとコミットの動作を決定する Essbase カーネルの設定です。選択肢は: コミット・アクセスまたはアンコミット・アクセス。

プライマリ・メジャー 企業および事業のニーズにとって重要な、優先度の高いメジャーです。コンテンツ・フレームに表示されます。

プランナ データの入力と送信、他のプランナが作成したレポートの使用、ビジネス・ルールの実行、タスク・リストの使用、電子メール通知の使用、および Smart View の使用が可能なユーザーです。プランナは、大多数のユーザーから構成されます。

プランニング・ユニット シナリオ、バージョン、およびエンティティの交差におけるデータ・スライスです。プラン・データの準備、確認、注釈付け、および承認のための基本単位です。

プレゼンテーション Web Analysis ドキュメントのプレイリストです。レポートのグループ化、整理、並べ替え、配布、および確認を行えます。リポジトリ内のレポートを参照するポインタを含みます。

プロキシ・サーバー セキュリティを保証するために、ワークステーション・ユーザーとインターネットの間で仲介を行うサーバーです。

プロジェクト 実装でグループ化された Oracle Hyperion 製品のインスタンスです。たとえば、Planning プロジェクトには Planning アプリケーション、Essbase キューブ、Financial Reporting サーバー・インスタンスが含まれることがあります。

プロセス監視レポート FDM データ変換プロセスにおける、場所のリストとその位置です。プロセス監視レポートを使用して、決算手続のステータスを監視できます。レポートにはタイム・スタンプが付けられるので、時間データがロードされた場所を判断するために使用できます。

プロット領域 X 軸、Y 軸、および Z 軸で囲まれている領域です。円グラフの場合は、その周りに表示される長方形の領域です。

プロビジョニング ユーザーおよびグループに対して、リソースへのアクセス権を付与するプロセスです。

並列エクスポート Essbase データを複数のファイルにエクスポートする機能です。並列エクスポートは、1つのファイルにエクスポートした場合に比べて時間を短縮できます。また、1つのデータ・ファイルでサイズが大きくなりすぎた場合の、オペレーティング・システムでの操作上の問題を解決できます。

並列計算 計算オプションの1つです。Essbase では計算がタスクに分割され、一部のタスクは同時に計算されます。

並列データ・ロード Essbase で、複数プロセスのスレッドによりデータ・ロードのステージを同時に実行することを指します。

変換 1)アプリケーションの移行後も移行先の環境で正しく機能するように、アーティファクトを変換するプロセスです。2)データ・マイニングで、キューブおよびアルゴリズムのセルの間で(双方向に)流れるデータの変更です。

変換先通貨 残高の変換後の通貨です。為替レートを入力して、変換元通貨から変換先通貨に変換します。たとえばユーロから米ドルに変換する場合、変換先の通貨は米ドルです。

変換元通貨 為替レートを使用して変換先通貨に変換される前の、値の元の通貨です。

「変更済」ステータス エンティティのデータが変更されたことを示す集計ステータスです。

別名テーブル メンバーの代替名を含むテーブルです。

ページ グリッドまたはテーブルでの情報表示の一種です。しばしばZ軸により示されます。ページには、1つのフィールドからのデータ、計算により得られるデータ、またはテキストを含められます。

ページ・ファイル Essbase のデータ・ファイルです。

ページ見出し レポートの現在のページで表示されているメンバーをリストした、レポート見出しの一種です。ページ上のすべてのデータ値には、ページ見出し内のメンバーが共通属性として適用されています。

ページ・メンバー ページ軸を決定するメンバーです。

保管階層 集約ストレージ・データベースのアウトラインのみで使用されます。アウトラインの構造に従ってメンバーが集約される階層を指します。保管階層のメンバーには、式を含むことができないなどの一定の制限があります。

ホスト アプリケーションとサービスがインストールされているサーバーです。

ホスト・プロパティ ホストに関するプロパティです。ホストに複数の Oracle EPM ホームが含まれる場合は、いずれかの Oracle EPM に関するプロパティとなります。

保存された仮定 ビジネス上の主要な計算を推進するための、Planning でのユーザー定義の仮定です(事業所の床面積 1 平方フィート当たりのコストなど)。

マイ Workspace ページ ユーザーにより作成されたカスタマイズ可能な Workspace ページです。これらには特殊なマークが付くため、リポジトリに移動する必要なく、1つの場所から簡単にアクセスできます。

マイニング属性 データ・マイニングにおいて、一連のデータを分析する際の係数として使用する値のクラスです。

マスター・データ・モデル 複数のクエリーによりソースとして参照される独立するデータ・モデルです。このモデルが使用される場合は、「クエリー」セクションのコンテンツ・ペインにロック済データ・モデルと表示されます。データ・モデルはデータ・モデル・セクションに表示されるマスター・データ・モデルにリンクされています(管理者によって非表示になっていることがあります)。

マップ・ナビゲータ 戦略、責任、および因果関係の各マップに現在の位置を示す機能です。赤色のアウトラインで示されます。

マップ・ファイル 外部データベースとの間でのデータの送信や取得のための定義を格納するファイルです。マップ・ファイルの拡張子は、データ送信用が.mps、データ取得用が.mpr となります。

マルチロード 複数の期間、カテゴリ、および場所を同時にロードすることを可能にする FDM の機能です。

マージ データ・ロード・オプションの1つです。データ・ロード・ファイルで指定された勘定科目の値のみを消去し、データ・ロード・ファイルの値で置換します。

密次元 ブロック・ストレージ・データベースでは、次元メンバーのすべての組合せについてデータを含んでいる可能性があります。たとえば、時間次元はしばしば密ですが、これは時間次元がすべてのメンバーのあらゆる組合せを含んでいる可能性があるからです。「疎次元」と対比してください。

ミドルウェア・ホーム Oracle WebLogic Server ホームを含み、EPM Oracle ホームと他の Oracle ホームも含むことのできるディレクトリです。ミドルウェア・ホームは、ローカル・ファイル・システム、または NFS を介してアクセス可能なリモート共有ディスク上に配置できます。

ミニスキーマ データ・ソースからのテーブルのサブセットをグラフィカルに示したものです。データ・モデリングのコンテキストを表します。

ミニレポート レポートのコンポーネントの 1 つです。レイアウト、コンテンツ、ハイパーリンク、およびレポートのロード用の一つまたは複数のクエリーを含みます。各レポートには、1 つ以上のミニレポートを含められます。

耳折れ 折り曲げられたページの角です。チャートのヘッダー領域の右上の隅に表示されます。

メジャー OLAP データベースのキューブに含まれる数値で、分析に使用されます。メジャーには、利益幅、売上原価、売上数量、予算などがあります。「ファクト・テーブル」も参照してください。

メタアウトライン Essbase 統合サービスにおける、OLAP モデルから Essbase アウトラインを作成するための構造とルールを含んでいるテンプレートです。

メタデータ データベースに保管された、またはアプリケーションにより使用されるデータのプロパティと属性を定義および説明するデータ・セットです。メタデータには、次元名、メンバー名、プロパティ、期間、およびセキュリティなどが含まれます。

メタデータ・セキュリティ ユーザーにより特定のアウトライン・メンバーへのアクセスを制限するための、メンバー・レベルのセキュリティ・セットです。

メタデータのサンプリング ドリルダウン操作で次元に含まれるメンバーのサンプルを取得するプロセスです。

メタデータ要素 データ・ソースから算出されるメタデータ、および Essbase Studio で使用するために保管され、カタログが作成されるおよびその他のメタデータです。

メンバー 次元内の個別のコンポーネントです。メンバーにより、類似する単位の集まりが個別に特定および区別されます。たとえば、時間次元には Jan、Feb、Qtr1 などのメンバーが含まれることがあります。

メンバー選択レポート・コマンド 兄弟、世代、レベルなどのアウトラインの関係に基づいて、メンバーの範囲を選択するレポート・ライター・コマンドの一種です。

メンバー専用レポート・コマンド レポート・ライターのフォーマット・コマンドの 1 つです。レポート・スクリプトで現れると実行されます。このコマンドは関連するメンバーにのみ影響し、メンバーを処理する前にフォーマット・コマンドを実行します。

メンバー・リスト 次元のメンバー、関数、他のメンバー・リストを示す名前付きのシステム定義またはユーザー定義グループです。

メンバー・ロード Essbase 統合サービスにおける、次元およびメンバーを(データなしに)Essbase アウトラインに追加するプロセスです。

目標 指定された期間(日、四半期など)についてメジャーに期待される結果です。

持株会社 法的エンティティ・グループの一部であるエンティティです。グループ内のすべてのエンティティに対して直接的または間接的に投資しています。

モデル 1)データ・マイニングで、アルゴリズムにより検査されたデータに関する情報の集合です。より広範なデータ・セットにモデルを適用することにより、データに関する有用な情報を生成できます。2)アプリケーション固有の方法で示したデータが含まれるファイルまたはコンテンツの文字列です。モデルは Shared Services により管理される基本データであり、次元と非次元のアプリケーション・オブジェクトという 2 つの主要なタイプがあります。

3)Business Modeling で、検査対象の領域からの業務および財務上のフローを示し、また計算するために接続されたボックス・ネットワークです。

役割 リソースへのアクセス権をユーザーおよびグループに付与する際に使用される手段です。

ユーザー定義属性(UDA) アウトラインのメンバーに関連付けられ、メンバーの特性を説明する属性です。UDAを使用すると、指定された UDA が関連付けられているメンバーのリストが戻されます。

ユーザー定義メンバー・リスト ユーザー定義による、次元に含まれるメンバーの名前付きの静的なセットです。

ユーザー・ディレクトリ ユーザーおよびグループ情報を集中的に格納する場所で、リポジトリまたはプロバイダとも呼びます。普及しているユーザー・ディレクトリとして、Oracle Internet Directory (OID)、Microsoft Active Directory (MSAD)、Sun Java System Directory Server があります。

ユーザー変数 ユーザーのメンバー選択に基づいてデータ・フォームを動的に配置し、指定されたエンティティのみを表示する変数です。たとえば、Department というユーザー変数を使用すると、特定の部署および従業員を表示できます。

要約チャート 「調査」セクションで、同じ列内で下に表示される詳細チャートをロール・アップし、各チャート列最上位の要約レベルにメトリックを描画するチャートです。

ライトバック 取得を行うスプレッドシートなどのクライアントが、データベースの値を更新する機能です。

ライフサイクル管理 アプリケーション、リポジトリまたは個々のアーティファクトを製品環境間で移行するプロセスです。

ライン・アイテムの詳細 勘定科目で最も下位の詳細レベルです。

リソース システムにより管理されるオブジェクトまたはサービスです(役割、ユーザー、グループ、ファイル、ジョブなど)。

リポジトリ ビューおよびクエリーに使用するためのメタデータ、フォーマットおよび注釈の情報の格納場所です。

領域 メンバーおよび値の定義済みのセットであり、パーティションを構成します。

履歴平均 多数の履歴期間にわたる勘定科目の平均です。

リレーショナル・データベース 関連する 2 次元テーブルにデータを保管するデータベースです。「多次元データベース」と対比してください。

リンク 1)リポジトリ・オブジェクトへの参照です。リンクはフォルダ、ファイル、ショートカットおよび他のリンクの参照に使用できます。2)タスクフローで、あるステージのアクティビティが終了して別のステージのアクティビティが開始するポイントです。

リンク条件 タスクフローのステージを順序付けるためにタスクフロー・エンジンにより評価される論理式です。

リンク・データ・モデル リポジトリのマスター・コピーにリンクされたドキュメントです。

リンク・パーティション データ・セルを使用して 2 つのデータベースをリンクするための共有パーティションです。ワークシートのリンク・セルをクリックすると、リンク・データベースの次元を示す新しいシートが開きます。これにより、表示される次元をドリルダウンできます。

リンク・レポート・オブジェクト(LRO) セル・ノート、URL、テキスト、オーディオ、映像、画像を含むファイルなどの外部ファイルへのセルベースのリンクです。Financial Reporting では、Essbase LRO 向けにサポートされるのはセル・ノートのみです。「ローカル・レポート・オブジェクト」と対比してください。

隣接する四角形 Interactive Reporting ドキュメントのセクションを個人用ページに埋め込む場合に、Interactive Reporting ドキュメントのコンテンツをカプセル化する必須のパラメータです。高さおよび幅を表すピクセル、または 1 ページ当たりの行数により指定されます。

レイアウト領域 Workspace ページで、コンテンツを配置可能な領域です。

例外 事前定義済みの条件を満たす値です。フォーマット・インディケータを定義したり、例外が生成されたときに登録ユーザーに通知したりできます。

レイヤー 1)階層構造内で横並びにメンバーを含む場所です。世代(上から下へ)またはレベル(下から上へ)により指定されます。2)他のオブジェクトに対して相対的なオブジェクトの場所です。たとえば、Sample Basic データベースでは Qtr1 と Qtr4 は同じ年に含まれるので、世代が同一であることになりません。しかし、不均衡階層を含むデータベースの場合、Qtr1 と Qtr4 は同一世代であっても同じレイヤーに位置しないことがあります。

レコード データベースで、1つの完全な入力項目を形成するフィールドのグループです。たとえば、顧客レコードには、名前、住所、電話番号、および販売データのフィールドが含まれることがあります。

列 Data Relationship Management では、インポート・ソース、またはクエリー、比較、検証またはエクスポートの結果に関連付けられているデータのフィールドです。

レベル 階層ツリー構造において、データベース・メンバーの関係を定義するレイヤーです。レベルは、一番下の次元メンバー(レベル 0)から親メンバーまで並んでいます。

レベル 0 のブロック 疎のレベル 0 のメンバーの組合せに使用されるデータ・ブロックです。

レベル 0 のメンバー 子の存在しないメンバーです。

レポート・エクストラクタ レポート・スクリプトの実行時に、Essbase データベースからのレポート・データを取得する Essbase コンポーネントです。

レポート・オブジェクト レポートの設計において、テキスト・ボックス、グリッド、イメージ、チャートなどの動作や外観を定義するプロパティを持つ基本要素です。

レポート・スクリプト 1つまたは複数の運用レポートを生成する、Essbase レポート・ライター・コマンドを格納したテキスト・ファイルです。

レポートの通貨 財務諸表を準備するために使用される通貨です。現地通貨からレポートの通貨に変換されます。

レポート・ビューア レポート・スクリプトの実行後に完全なレポートを表示する Essbase コンポーネントです。

連結 従属するエンティティからのデータを親エンティティに集約するプロセスです。たとえば、次元 Year に Qtr1、Qtr2、Qtr3、および Qtr4 というメンバーが含まれている場合、この連結は Year になります。

連結比率 親に連結された子の値の割合です。

連結ファイル(*.cns) 連結プロセスでチャートまたはツリー・ビューを使用して Strategic Finance ファイルを追加、削除、移動するためのグラフィカル・インタフェースです。連結ファイルを使用して、連結を定義したり変更したりすることも可能です。

連結ファイル(親) 事業部門のすべてのファイルが連結されたファイルです。連結の定義を含みます。

ログ・アナライザ Essbase ログのフィルタ、検索、および分析を行うための Administration Services の機能です。

ロケーション別名 データ・ソースを特定する記述子です。ロケーション別名により、サーバー、アプリケーション、データベース、ユーザー名、およびパスワードが指定されます。ロケーション別名は、DBA のデータベース・レベルで管理サービス・コンソール、ESSCMD、または API を使用して設定されます。

ロケール コンピュータで使用される言語、通貨および日付のフォーマット、データのソート順、およびキャラクタ・セットのエンコード方式を指定するコンピュータ設定です。Essbase ではエンコード方式のみが使用されます。「エンコード方式」、「ESSLANG」も参照してください。

ロケール・ヘッダー・レコード スクリプトなど、一部の非 Unicode でエンコードされたテキスト・ファイルの先頭で、エンコード・ロケールを特定するテキスト・レコードです。

ロック済 ユーザーやプロセスがデータを変更するのを防ぐために、ユーザーが呼び出すプロセスです。

「ロック済」ステータス 集計ステータスの 1 つです。変更できないデータがエンティティに含まれていることを示します。

ロック済データ・モデル ユーザーが変更できないデータ・モデルです。

論理 Web アプリケーション Web アプリケーションの内部ホスト名、ポートおよびコンテキストの識別に使用される別名参照です。クラスタ環境または高可用性環境では、これは分散コンポーネントに対して単一の内部参照を確立する別名です。EPM System では、非クラスタ論理 Web アプリケーションのデフォルトは、Web アプリケーションを実行している物理ホストになります。

論理グループ FDM で、ソース・ファイルが FDM にロードされた後に生成される 1 つ以上の論理勘定です。論理勘定はソース・データから導き出される計算済勘定です。

ローカル結果 データ・モデルのクエリー結果です。ローカルの結合で結果を使用する場合は、結果をデータ・モデルにドラッグして挿入できます。ローカルの結果を要求すると、カタログに表示されません。

ローカル・レポート・オブジェクト Explorer で Financial Reporting レポート・オブジェクトにリンクされていないレポート・オブジェクトです。「リンク・レポート・オブジェクト」と対比してください。

ロード・バランサ 要求をクラスタ内の個々のアプリケーション・サーバーに方向付けるハードウェアまたはソフトウェアで、システムへの唯一のエントリ・ポイントです。

ロード・バランシング サーバーのグループに要求を分散すること。これによって、エンド・ユーザーのパフォーマンスが最適化されます。

ロールアップ 「連結」を参照してください。

ワイルド・カード 検索文字列で単一の文字(?)または文字グループ(*)を示す文字です。

割当て 割当てモデルでのソースと宛先の関連付けです。割り当てられたコストや収益のフローの方向を制御します。

ワークフロー FDM でデータを最初から最後まで処理するために必要なステップです。ワークフローは、インポート(GL ファイルからのデータ・ロード)、検証(すべてのメンバーが有効なアカウントにマッピングされていることの確認)、エクスポート(マッピングされたメンバーのターゲット・アプリケーションへのロード)、およびチェック(ユーザー定義の検証ルールを使用してデータを処理することにより、データの精度を確認)から構成されます。

ワークブック 多数のワークシートを含むスプレッドシート・ファイル全体です。

索引

記号

- #MISSING データ, 373
 - 設定の指定, 371
- #Missing データ
 - スマート・リストで表現, 116
- #Missing データ・フォーム・ラベル・オプション, 116
- #Missing ドロップ・ダウン・ラベル・オプション, 116
- 2 パス計算, 370
- 2 パス計算オプション, 368
- 4-4-5 週次パターン, 179
- 445 週パターンおよび 544 週パターン、再配置時の考慮事項, 251
- 5-4-4 週次パターン, 179

A - Z

- AccountType
 - 動作, 338
- Actual_365 加重平均タイム・バランス, 373
- Actual_Actual 加重平均タイム・バランス, 373
- Aggregation Weight, 341
- Alias, 335, 341, 343, 344, 352, 355, 359
- AllMembers メンバー・クエリー関数, 450
- AllocationType 次元, 187, 197
 - 次元ソート順, 223
- AllocationType 次元タイプ
 - 説明, 48
- Allow Adjustments, 343
- Allow Adjustments From Children, 343
- Analytic Services
 - 考慮事項, 384
- Ancestors メンバー・クエリー関数, 446
- BegBalance メンバー。「期首残高の期間」を参照
- BottomOfHierarchy メンバー・クエリー関数, 451
- Calc Attribute, 335
- Children メンバー・クエリー関数, 445
- CloseInputValueBlock 変数, 152
- Consolidate YTD, 345
- Consolidation Account Type, 335
- Consolidation Rules , 348
- Control, 353
- CrossRef(accountName, prefix)関数, 153
- CrossRef(accountName)関数, 153
- Currency Code, 375
- Custom Top Member, 335
- CYTD(memberName, calTpIndexName, fiscalTpIndexName)関数, 153
- CYTD(memberName)関数, 153
- D-T-D、日次累計, 137
- Data Storage
 - パフォーマンスの最適化のために使用, 368
- Decimal Separator, 375
- Default Alias Table
 - 定義, 366
- Default Currency , 348, 365
 - 再配置の要件, 251
- Default Frequency, 345
- Default Frequency For IC Transactions, 345
- Default Parent, 335, 341, 343, 345, 359
- Default Rate For Balance Accounts, 348
- Default Rate For Flow Accounts, 348
- Default Value For Active, 348
- Default View, 345
- Descendants メンバー・クエリー関数, 447
- Dimension(dimtag)関数, 153
- Dimension Sort Order プロパティ, 223
- Display In ICT, 355
- DOWN 勘定科目, 357
- DTS メンバー
 - 定義済, 137
 - 年および期間の名前変更, 138
- Enable Custom Aggregation, 336
- Enable Data Audit, 336, 345

- Enable Metadata Security Filtering, [349](#)
- Enable Process Management, [345](#)
- Essbase
 - 制限, [208](#)
- Essbase (ASO)アプリケーション
 - 配置ガイドライン, [248](#)
 - 配置要件, [247](#)
 - 要件, [209](#)
- Essbase (BSO)
 - 再配置, [253](#)
 - 配置, [247](#)
- Essbase (BSO)アプリケーション
 - 配置ガイドライン, [248](#)
 - 配置要件, [247](#)
 - 要件, [209](#)
- FDM Application Name, [352](#)
- Fiscal Start Year, [366](#)
- getCalendarTPIndex()関数, [153](#)
- getFiscalTPIndex()関数, [153](#)
- H-T-D、累計, [137](#)
- Holding Company, [343](#)
- HSP_NOLINK, [384](#)
- HSP_UDF, [384](#)
- ICchildren メンバー・クエリー関数, [445](#)
- ICP, [358](#)
- ICP Entities Aggregation Weight, [349](#)
- ICP Top Member, [336](#)
- ICP 次元タイプ
 - 説明, [48](#)
- ICP の設定, [358](#)
- ICP メンバー
 - 生成されたシステム, [358](#)
- IParent メンバー・クエリー関数, [444](#)
- Is Calculated, [336](#), [341](#)
- Is Consolidated, [336](#)
- Is Holding Method, [353](#)
- Is ICP, [336](#)
 - エンティティ, [343](#)
- Level0 メンバー・クエリー関数, [452](#)
- M-T-D、月次累計, [137](#)
- Match メンバー・クエリー関数, [449](#)
- Maximum Cell Text Size, [349](#)
- Maximum Document Attachment Size, [349](#)
- Maximum Number of Document Attachments, [349](#)
- Maximum Review Level, [345](#)
- MeasuresDetailed 次元, [199](#)
- Member - メンバー・クエリー関数, [449](#)
- Name, [337](#), [341](#), [344](#), [346](#), [353](#), [355](#), [359](#)
- Negative Color, [375](#)
- Negative Sign, [375](#)
- Node Security, [350](#)
- Number Of Decimal Places, [337](#)
- NumberOfPeriodsInYear 変数, [152](#)
- NumberOfYears 変数, [152](#)
- OpenInputValueBlock 変数, [152](#)
- Org By Period Application, [350](#)
- P-T-D、期間累計、期間メンバー名の変更, [137](#)
- Parent メンバー・クエリー関数, [444](#)
- PCON 勘定科目, [357](#)
- PCTRL 勘定科目, [357](#)
- Percent Consol, [353](#)
- Percent Consol Value, [353](#)
- Performance Management Architect
 - Planning 固有の情報, [363](#)
 - 情報, [21](#)
- Period(periodName)関数, [153](#)
- Phased Submission Start Year, [346](#)
- Plan Name, [364](#)
- Planning
 - 2 パス計算, [370](#)
 - Account Type, [371](#)
 - BegBalance メンバー, [378](#)
 - Exchange Rate Type, [372](#)
 - Source Plan Type, [372](#)
 - UDA, [369](#)
 - Valid for Plan, [367](#)
 - YearTotal メンバー, [378](#)
- アクセス権, [89](#)
- アプリケーション設定の変更, [177](#)
- アプリケーションの要件, [169](#)
- アプリケーション、配置, [251](#)
- アプリケーション・プロパティ, [364](#), [365](#)
- インポート・プロファイルによる次元メンバーの追加, [85](#)
- 疎および密次元, [85](#)
- エンティティ・プロパティ, [376](#)
- 会計開始年, [241](#)
- 会計開始年および月, [366](#)
- 為替レート・テーブル, [379](#)
- 勘定科目, [370](#)
- 勘定科目計算の例, [373](#)
- 勘定科目の種別の組合せ, [372](#)

- 期間プロパティ, 377
- 基本期間, 366
- 共有メンバー、操作, 136
- 共有メンバー、データ・ストレージへの ShareData の設定, 137
- 再配置時の考慮事項, 251
- 支出レポートのオプション, 371
- シナリオ, 379
- 集約プロパティ, 369
- 次元, 85, 89, 363
- 次元の選択, 174
- 事前に定義されている次元, 169, 174, 241
- 属性値, 370, 383
- タイム・バランス・プロパティの例, 373
- ターゲットおよびボトムアップ・バージョン, 381
- 通貨, 374, 377
- デフォルト通貨の指定, 173
- デフォルト別名テーブル, 366
- データ型, 369
- データ・ストレージ, 368
- 年次元, 381
- 動的計算, 368
- 配置の考慮事項, 241
- バージョン, 380
- パターン, 366
- 複数通貨, 365
- プラン・タイプ, 364, 365, 370
- プラン・タイプの定義, 172
- プラン名, 364
- プロセス管理、使用可能, 379, 380
- プロパティ, 367
- 別名テーブル, 369
- 別名テーブル、デフォルト, 366
- 命名規約, 89
- メンバー計算式, 369
- メンバー、削除, 141
- メンバー、除外, 141
- メンバーの削除、影響, 252
- レポートの通貨, 376
- Planning の再配置のトラブルシューティング, 251, 381
- Planning の配置のトラブルシューティング, 241, 381
- Plug Account, 337
- POV
 - POV Display Order, 193, 206
 - POV 次元, 193, 206
 - POV 次元, 187, 197
 - 次元ソート順, 223
 - POWN 勘定科目, 357
 - PreviousCalendarYear オプション, 181
 - Profitability and Cost Management
 - 再配置の検証, 254
 - 配置の検証, 246
 - Q-T-D、四半期累計, 137
 - S-T-D、季節累計, 137
 - SameCalendarYear オプション, 181
 - Scale, 356, 375
 - Security As Partner, 344
 - Security Class, 337, 342, 344, 346, 359
 - Security For Accounts, 350
 - Security For Custom, 350
 - Security For Entities, 350
 - Security For ICP, 350
 - Security For Scenarios, 350
 - Shared Services タスクフロー
 - 参加者ステータスの表示, 329
 - 参加者の詳細の表示, 330
 - ShareData
 - 共有メンバーに対する設定, 137
 - 配置, 137
 - SharesOutstanding 勘定科目, 358
 - SharesOwned 勘定科目, 357
 - Siblings メンバー・クエリー関数, 448
 - Source Plan Type, 372
 - Submission Group, 337, 342, 359
 - Support Submission Phase for Account, 351
 - Support Submission Phase for Custom, 351
 - Support Submission Phase for ICP, 351
 - Switch Sign For Flow, 342
 - Switch Type For Flow, 342
 - Thousands Separator, 375
 - Time Balance プロパティ, 371
 - To Percent Control, 353
 - To Percent Control Compare, 354
 - TopOfHierarchy メンバー・クエリー関数, 452
 - Translation Operator, 356
 - UDA
 - HSP_NOLINK, 384
 - HSP_UDF, 384
 - Planning, 369
 - 操作, 148
 - 複数, 369

Unicode モード・オプション, 266
 Use Beginning Balance, 378, 379
 Use PVA For Balance Accounts, 351
 Use PVA For Flow Accounts, 351
 Used By Calc Routine, 354
 User Defined1...3, 337, 342, 344, 346
 Uses Line Items, 338, 347
 Validation Account, 351, 352
 Version Type, 381
 VotingOutstanding 勘定科目, 358
 VotingOwned 勘定科目, 357
 W-T-D、週次累計, 137
 Weeks , 366
 Y-T-D、年次累計、年メンバー名の変更, 137
 YearTotal メンバー
 配置に必要, 378
 編集, 378
 Zero View For Adjustments, 347
 Zero View For Non-adjustments, 347

あ行

アウトライン、更新の考慮事項, 384
 アクセス権
 メンバーの削除の影響, 252
 アクセス権、Planning への割当て, 89
 アクセス権、シナリオ用の定義, 379
 アクティブ勘定科目, 357
 値次元タイプ
 説明, 49
 値のスキップの設定, 371
 値メンバー
 生成されたシステム, 358
 編集, 359
 アプリケーション
 Planning の配置, 251
 Planning の変更, 177
 Profitability and Cost Management の要件, 187
 マイクロ原価計算, 197
 アプリケーション・メンバーシップの表示,
 223
 インスタンス, 265
 カレンダー範囲の定義, 179
 管理, 22, 159
 基本期間の定義, 179
 検証, 238, 239
 再配置, 250
 収益性の作成, 185, 195

手動による次元の追加, 190, 202
 次元順序の変更, 181
 次元の関連付けの表示, 220
 次元の除去, 220
 次元の追加, 165, 176
 情報, 159
 前提条件, 161
 通貨の定義, 173
 月配布分散の定義, 179
 データ型の評価順序, 183
 データ・ソース, 265
 データ・フローからのアクセス, 238
 配置, 238
 パフォーマンス, 183
 パフォーマンス設定のプラン・タイプ, 181
 パフォーマンスの最適化, 181
 比較, 233
 比較結果, 234
 プランニングの作成, 169, 170, 171, 172, 174
 プラン・タイプの設定, 172
 プロセス, 159
 密次元および疎次元, 181
 命名規則, 385
 メンバーの除外, 157
 メンバーの操作, 154
 メンバーのフィルタ処理, 154
 連結の作成, 161
 連結の配置, 244
 連結の要件, 163
 アプリケーションの作成
 Planning, 169, 170, 171, 174
 収益性, 185, 195
 連結, 161
 アプリケーションの変更
 Planning, 177
 アプリケーションのメンバー
 フィルタ処理, 154
 アプリケーション・プロパティ
 Planning, 364
 連結, 347
 アプリケーション・メンバーシップ
 表示, 223
 アプリケーション・メンバーシップの表示
 次元ライブラリ, 92
 アプリケーション・ライブラリ
 データ・フローの表示, 236
 アーキテクチャ

Performance Management Architect, 25

以前のリリース

互換性, 362

一定期間のデータの配布, 179

インスタンス、操作, 265

インタフェース・テーブル

概要, 61

構成, 62

削除, 64

システム・テーブル, 64

消去, 68

定義, 64

編集, 63

インタフェース・テーブルのインポート

タスクフローの作成, 319

インタフェース・テーブルの消去, 68

インタフェース・データ・ソース

構成, 62

削除, 64

編集, 63

インタフェース領域

定義, 276

インポート結果, 312

インポート・ファイル

管理, 77

削除, 80

作成, 49, 68

階層セクション, 55

次元セクション, 51

次元の関連付けセクション, 52

プロパティ配列セクション, 58

メンバー・セクション, 53

次元のインポート, 77

表示, 80

編集, 79

インポート・ファイルの作成

次元ライブラリ, 49

インポート・プロファイル、および Planning,

85

インポート・プロファイルの管理, 77

インポート・プロファイルの削除, 80

インポート・プロファイルの作成, 68

インポート・プロファイルの表示, 80

インポート・プロファイルの編集, 79

疎次元, 85

およびパフォーマンス, 181

密への変更の影響, 383

うるう年、会計, 373

エラー・メッセージ

再配置, 251

数式用, 154

配置, 137, 241, 381

エンティティ次元, 376

エンティティ次元タイプ, 187, 197

説明, 48

エンティティ・プロパティ

Planning 用, 376

連結, 343

エンティティ・メンバー

およびプラン・タイプ, 367

通貨, 377

エンティティ・メンバーの通貨, 377

か行

会計開始月、再配置の要件, 251

会計開始年

説明, 381

フォーマット, 241

会計開始年、設定, 179

会計初年度

説明, 381

「会計年度の開始日」オプション, 181

「会計年度の最初の月」オプション, 181

「会計年度の最初の月」および「会計開始年」

オプション, 179

「会計年度の最初の月」プロパティ, 169

「会計年度の数」オプション, 180

開始期間, 379

開始月, 366

再配置の要件, 251

配置の要件, 241

開始年, 379

再配置の要件, 251

階層セクション

isPrimary 列, 55

加重平均タイム・バランス・プロパティ, 373

カスタム期間、Planning, 366

カスタム次元

削除, 142

除外, 142

命名, 89

カスタム・プロパティ

Planning, 89

連結, 341

カレンダー

- 現在の年または期間の変更, 381
- 再配置の要件, 251
- 実用的な限界, 377
- 設定, 377
- 年の追加, 381
- 要約期間の作成, 377

カレンダー範囲, 179

- 為替レート、勘定科目メンバーのタイプ, 372
- 為替レート・テーブル、シナリオ用の定義, 379

勘定科目計算における欠落データ, 373

勘定科目計算におけるゼロ, 373

勘定科目次元, 370

勘定科目次元タイプ, 187, 197

説明, 48

勘定科目の種別

および支出レポート, 371

説明, 371

要約, 372

勘定科目プロパティ

Planning, 370

連結, 334

勘定科目メンバー

勘定科目の種別, 371

プラン・タイプ, 370

関数。「数式」を参照

メンバー・クエリー, 441

管理

アプリケーション, 22

ジョブ, 305

関連付け

Planning のアップグレード時に割当て, 85

次元, 220

フラット・ファイルでのロード, 85

関連付け、プランニング・メンバーの除去時に

解除, 141

期間

シナリオ用の定義, 379

実用的な限界, 377

変更, 381

期間次元, 377

期間次元、情報, 377

期間次元タイプ

説明, 48

期間の範囲、設定, 377

期間、変更, 381

期間別組織, 352

期間累計、期間の名前変更, 138

期首残高の期間

およびシナリオ, 379

配置に必要, 378

編集, 378

期首タイム・バランス・プロパティ, 373

基本期間, 366

定義, 179

データの分散, 179

基本メンバーの設定、Planning で使用しない, 136

共有オプション, 368

共有しないオプション, 368

共有データ、共有メンバーの設定, 368

共有メンバー

作成, 132

操作, 136

データ・ストレージへの ShareData の設定, 137

共有メンバーの作成, 132

国次元タイプ, 187, 197

説明, 48

経常残高勘定科目の動作, 338

結果

インポートの表示, 312

権限、Planning への割当て, 89

検証

アプリケーション, 238, 239

データの同期, 298

データ・フローからのデータ同期, 238

検証条件

Profitability, 246, 254

孤立メンバー, 140

さ行

「最初の会計年度」オプション, 180

再配置

Essbase (ASO)アプリケーション, 253

Essbase (BSO)アプリケーション, 253

Essbase BSO アプリケーション, 253

Planning の考慮事項, 251

Profitability, 254

アプリケーション, 250

シナリオの考慮事項, 379

使用の表示の確認, 242, 252

タスクフローの作成, 319

- 通貨の問題, 251
- トラブルシューティング, 251, 381
- 年次元の考慮事項, 381
- 差異レポート, 371
- 差異レポートおよび勘定科目の種別, 372
- 削除
 - ジョブ, 313
- 削除されたメンバー
 - Planning での使用の表示の確認, 141
 - 配置前の使用の確認, 242, 252
- 作成
 - 情報, 21
- 三角換算法, 376
- 三角換算法通貨、削除結果, 252
- 参照整合性, 360
- サンプル・テーブル
 - Performance Management Architect , 67
- 残高勘定科目の動作, 338
- 式。「数式」を参照
- 資産勘定科目の動作, 338
- 支出勘定科目の種別
 - および差異レポート, 371
 - 要約, 372
- 支出勘定科目の動作, 338
- 支出外勘定科目の種別, 371
- 支出外の設定, 371
- 支出の設定, 371
- 支出レポートのオプション, 371
- システム勘定科目
 - DOWN 勘定科目, 357
 - PCON 勘定科目, 357
 - PCTRL 勘定科目, 357
 - POWN 勘定科目, 357
 - SharesOutstanding 勘定科目, 358
 - SharesOwned 勘定科目, 357
 - VotingOutstanding 勘定科目, 358
 - VotingOwned 勘定科目, 357
 - アクティブ勘定科目, 357
 - メソッド勘定科目, 357
 - 連結 1...3 勘定科目, 357
- システム・プロパティ
 - 次元, 421
 - メンバー, 422
- システム・プロパティ、次元別名の使用, 85
- シナリオ
 - アクセス権、定義, 379
 - 為替レート・テーブル、定義, 379
 - 期間、定義, 379
 - 削除, 379
 - 配置、必須, 379
 - プロセス管理、使用可能, 379
- シナリオ次元タイプ
 - 説明, 48
- シナリオのプロパティ、Planning 用, 379
- シナリオ・プロパティ
 - 連結, 344
- 支配比率, 357
- 資本勘定科目の種別
 - 要約, 372
- 収益勘定科目の種別
 - 要約, 372
- 収益勘定科目の動作, 338
- 週、再配置の要件, 251
- 週次配布パターン, 179
- 集約ストレージ・オプション・アプリケーション
 - 要件, 209
- 集約なしプロパティ, 369
- 終了期間, 379
- 終了年, 379
- 出資比率, 357
- 出資比率勘定科目
 - SharesOutstanding 勘定科目, 358
 - SharesOwned 勘定科目, 357
 - VotingOutstanding 勘定科目, 358
 - VotingOwned 勘定科目, 357
- 時間次元タイプ, 187, 197
 - 説明, 48
- 次元
 - MeasuresDetailed , 199
 - Planning 固有の情報, 363
 - Planning の命名規約, 89
 - Profitability and Cost Management , 187
 - マイクロ原価計算, 197
 - アプリケーションでの除去, 220
 - アプリケーションへの追加, 165, 176
- 疎, 85
- エンティティ, 376
- 階層, 85
- 勘定科目, 370
- 関連付け, 85
- コピー, 92
- 再配置の要件, 252
- 削除, 99, 142

- 作成, 82
- システム・プロパティ, 421
- 手動によるアプリケーションへの追加, 190, 202
- 次元ライブラリ, 47
- 除外, 142
- 整理, 95
- 定義済, 169, 174, 241
- 統計プロパティ, 421
- 名前付き世代、削除, 92
- 名前付き世代、操作, 92
- 名前付き世代、変更, 92
- 名前付きレベル、削除, 94
- 名前付きレベル、操作, 94
- 名前付きレベル、変更, 94
- 配置、考慮事項, 241
- フォルダへのコピー, 96
- フラット・ファイル、関連付けの指定, 85
- 密, 85
- 命名規約, 386
- メンバーとの関係, 85
- ユーザー定義, 89
- 次元順序
 - 変更, 181
- 次元タイプ
 - AllocationType, 48, 187
 - ICP, 48
 - POV, 187, 197
 - POV Display Order, 193, 206
 - POV 次元, 193, 206
 - 値, 49
 - エンティティ, 48
 - 勘定科目, 48
 - 期間, 48
 - 国, 48
 - シナリオ, 48
 - 時間, 48
 - スマート・リスト, 48
 - セキュリティ・クラス, 48
 - 属性, 48, 187, 197
 - 通貨, 48
 - 定義, 48
 - 年, 49
 - 汎用, 48
 - バージョン, 49
 - 表示, 49
 - ビジネス, 187, 197
 - 別名, 48, 187, 197
 - メジャー, 48, 187
 - マイクロ原価計算, 197
 - 連結メソッド, 48
 - 次元の関連付け
 - 削除, 91
 - 作成, 90
 - 表示, 91, 220
 - 次元の関連付けの削除
 - 次元ライブラリ, 91
 - 次元の関連付けの作成, 90
 - 次元の関連付けの表示
 - 次元ライブラリ, 91
 - 次元のコピー, 92
 - 次元の削除, 99
 - 次元の作成, 82
 - 次元のタイプ, 48
 - 次元のロード、フラット・ファイルの使用, 85
 - 次元別名、システム・プロパティ, 85
 - 次元ライブラリ
 - 関連付け, 85
 - 新規 Planning 次元, 85
 - 次元の関連付けの表示, 91
 - 事前に定義されている次元
 - 再配置の要件, 252
 - 配置の要件, 169, 174, 241
 - 実行
 - データの同期, 298
 - データ・フローからのデータ同期, 238
 - 除外されたメンバー
 - Planning での使用の表示の確認, 141
 - ジョブ
 - 管理, 305
 - 削除, 313
 - タイプ, 305
 - 添付ファイル, 311
 - ジョブ・コンソール
 - ジョブ・タイプ, 305
 - ジョブの削除, 313
 - ジョブの送信のセキュリティ, 311
 - ジョブの添付ファイルの表示, 311
 - ジョブの表示のセキュリティ, 311
 - セキュリティ, 310
 - 操作, 305
 - ナビゲート, 307
 - ビューの変更, 308
 - フィルタの作成, 308

- リフレッシュ, 308
- 数式, 151
 - エラー・メッセージ, 154
 - 構文, 153
 - 使用の前提条件, 152
 - スマート・リストの使用, 154
 - 説明, 152
 - メンバー式の使用, 152
- スキップのオプション, 373
- スケール, 375
- スマート・リスト
 - #Missing の表現, 116
 - およびデータ入力, 113
 - 数式での使用, 154
 - 操作, 113
 - プロパティの設定, 115
 - 命名の考慮事項, 114
- スマート・リスト次元タイプ
 - 説明, 48
- スマート・リストの表示順のオプション, 116
- 制限
 - Essbase, 208
- セキュリティ, 28
 - ジョブ・コンソール内, 310
 - ジョブの送信, 311
 - ジョブの表示, 311
- セキュリティ・クラス次元タイプ
 - 説明, 48
- 設定, 358
- セル・テキスト・ラベル・プロパティ
 - 連結, 340
- 前提条件
 - アプリケーション, 161
- ソース・プラン・タイプ、および勘定科目, 370
- 属性次元, 187, 197
 - 次元ソート順, 223
- 属性次元タイプ
 - 説明, 48
- 属性値
 - Planning, 370
 - 除外, 142
 - ロード, 383
- た行**
- タイム・バランスの計算, 373
- タイム・バランス・プロパティの例, 373
- タスクの自動化
 - 概要, 315
 - 前提条件, 316
- タスクフロー
 - インタフェース・テーブルのインポートの作成, 319
 - 管理, 316
 - コピー, 325
 - 再配置の作成, 319
 - 削除, 325
 - 作成, 317
 - 手動実行, 325
 - スケジュール, 326
 - ステージの作成, 320
 - ステータスの表示, 327
 - 停止, 328
 - データの同期の作成, 318
 - 表示, 317
 - フラット・ファイルのインポートの作成, 318
 - 編集, 324
 - リンクの追加, 323
- 単一通貨、再配置, 251
- 単一メンバーに対する複数 UDA, 369
- ターゲット・バージョン、説明, 381
- 直接出資比率, 357
- 通貨, 343
 - アプリケーションでの定義, 173
 - 再配置の要件, 251
 - トライアンギュレーション, 376
 - 名前, 377
 - 複数, 173
 - 変換, 173
 - レポート作成, 376
- 通貨記号, 376
- 通貨次元タイプ, 187, 197
 - 説明, 48
- 通貨プロパティ
 - Planning, 365
 - 連結, 355
- 月配布パターン, 179
- ツールバー
 - Performance Management Architect, 34
 - ワークスペース, 34
- 定義
 - 連結メソッド, 352
- 添付ファイル

- ジョブの添付ファイルの表示, 311
- テーブル
 - マッピング, 289
- デフォルト別名テーブル
 - 配置の要件, 241
- デフォルト・メンバー
 - データの同期の割当て, 288
- データ
 - 一定期間の配布, 179
 - メンバーの削除の影響, 252
- データ・ストレージ
 - ShareData を使用する共有メンバー, 137
- データ・セルの下矢印, 113
- データ・ソース
 - Essbase サーバーの構成, 266
 - Unicode のサポート, 266
 - 管理, 265
 - 削除, 268
 - 作成および編集, 265
 - 詳細の表示, 267
 - 情報の入力, 266
 - 選択, 266
 - データ・ソース・ウィザードの開始, 265
- データの同期, 271
 - 宛先次元のルール構文, 291
 - アプリケーション, 272
 - インタフェース・テーブルを使用して作成, 277
 - インタフェース領域の定義, 276
 - 外部ファイル, 277
 - 検証, 298
 - 再利用可能なフィルタのコピー, 285
 - 再利用可能なフィルタの削除, 286
 - 再利用可能なフィルタの作成, 281
 - 再利用可能なフィルタの除去, 286
 - 再利用可能なフィルタの挿入, 285
 - 再利用可能なフィルタの編集, 284
 - 削除, 298
 - 次元のマッピング, 279
 - 実行, 298
 - ソース次元のルール構文, 290
 - タスクフローの作成, 318
 - デフォルト・メンバーの割当て, 288
 - データ・インタフェース・テーブル, 275
 - データ・シンクロナイザの操作, 295
 - データ・シンクロナイザのナビゲート, 296
- データ・シンクロナイザ・ビューの変更, 296
- データ・フローからの検証, 238
- データ・フローからの実行, 238
- データ・フローからの編集, 238
- データ・フローでの表示, 237
- フィルタ, 296
- フィルタ条件の追加と編集, 287
- 複数通貨のアプリケーション, 274
- 複製, 297
- 編集, 297
- 保存, 289
- マッピング, 290
- マッピング・テーブル, 289
- マッピング・テーブルの作成, 290, 293
- マッピング・テーブルの編集, 289
- メンバー・クエリー関数, 441
- 理解, 271
- データの分散, 179
- データの保管オプション, 368
- データ・フォーム、メンバーの削除の影響, 252
- データ・フロー
 - 同期の検証, 238
 - 同期の実行, 238
 - 同期の表示, 237
 - 同期の編集, 238
 - 表示, 236
 - フォーカル・アプリケーション, 237
- データベースのリフレッシュ
 - 考慮事項, 384
- 統計プロパティ, 421
- 年
 - カレンダーへの追加, 381
 - 現在の変更, 381
 - 最大, 377
 - 再配置の要件, 251
 - 実用的な限界, 377
 - 年なしメンバー、説明, 381
 - 配置の要件, 241
- 年次元, 381
- 年なしメンバー、説明, 381
- 同期
 - 保存, 289
 - マッピング・テーブルの作成, 290, 293
- 「動的計算」および「動的計算および保管」のオプション, 368

動的時系列(DTS), 137

な行

内部取引パートナ、設定, 358

ナビゲーション

Performance Management Architect, 33

ナビゲート

ジョブ・コンソール, 307

名前付き世代

削除, 92

作成, 92

変更, 92

名前付きレベル

削除, 94

作成, 94

変更, 94

入力タイム・バランス・プロパティ, 373

年次元、説明, 381

年次元タイプ

説明, 49

年次累計、年の名前変更, 138

は行

配置

BegBalance の必須対象, 378

Essbase (ASO)アプリケーション, 247

Essbase (BSO)アプリケーション, 247

Essbase BSO アプリケーション, 247

Planning に必要なシナリオ, 379

Planning に必要な年, 381

Planning に必要なバージョン, 380

Planning の考慮事項, 241

YearTotal の必須対象, 378

アプリケーション, 238

完全、部分的な次元更新でない, 241

共有メンバー、ShareData, 137

使用の表示の確認, 242, 252

情報, 21

トラブルシューティング, 241, 251, 381

必須の次元, 169, 174, 241

メンバーの削除、影響, 252

メンバーの除外, 142

汎用次元タイプ

説明, 48

バックアップ

リフレッシュの前, 384

バッチ・クライアント

情報, 24

バランス・プロパティ, 373

バージョン

Planning の配置に必要, 380

プロセス管理、使用可能, 380

ボトムアップ, 381

目標, 381

バージョン次元タイプ

説明, 49

パフォーマンス

アプリケーションでの最適化, 181

次元順序の変更, 181

データ型の評価順序の設定, 183

プラン・タイプ設定, 181

パフォーマンスの最適化, 181

比較

アプリケーション, 233

比較結果

表示, 234

メンバーの除外, 236

表示

データ・フロー, 236

表示次元タイプ

説明, 49

表示順序

POV 次元, 193, 206

ビジネス次元, 187, 197

次元ソート順, 223

ビュー

同期のフィルタ処理, 296

フィルタ

ジョブ・コンソールでの作成, 308

ジョブ・コンソール内の自分のジョブ, 310

ジョブ・コンソール内の他のユーザーのジョブ, 310

同期, 296

フィルタ処理

再利用可能な次元フィルタのコピー, 285

再利用可能な次元フィルタの削除, 286

再利用可能なフィルタの次元の編集, 284

条件の追加と編集, 287

データの同期における次元, 281, 285, 286

メンバー, 154

フォルダ

作成, 95

次元のコピー, 96

次元の追加, 96

フォーカル・アプリケーション

- 変更, 237
- 複数通貨, 173, 251, 365
- 負債勘定科目の種別
 - 要約, 372
- 負債勘定科目の動作, 338
- フラット・ファイルのインポート
 - タスクフローの作成, 318
- フロー
 - データの表示, 236
- フロー勘定科目の動作, 338
- フロー・タイム・バランス・プロパティ, 373
- ブランク・アプリケーション、作成, 170
- ブロック・ストレージ・オプション・アプリケーション
 - 要件, 209
- プラン 1、プラン 2 およびプラン 3 のプラン・タイプ、説明, 364, 365
- プラン・タイプ
 - Planning, 365
 - アプリケーションでの設定, 172
 - エンティティ・メンバー, 367
 - 勘定科目メンバー, 370
 - 再配置の要件, 251
 - 設定, 364, 365
- プラン・タイプの集約, 369
- プランに有効の設定
 - およびエンティティ・メンバーに対して有効, 367
 - および勘定科目メンバー, 370
- プランニング・ユニット、メンバーの削除の影響, 252
- プロセス
 - アプリケーションの作成, 26
- プロセス管理、Planning での使用, 379, 380
- プロセス管理の使用可能, 379, 380
- プロパティ
 - Aggregation Weight, 341
 - Alias, 335, 341, 343, 344, 352, 355, 359
 - Allow Adjustments, 343
 - Allow Adjustments From Children, 343
 - Calc Attribute, 335
 - Consolidate YTD, 345
 - Consolidation Account Type, 335
 - Consolidation Rules , 348
 - Control, 353
 - Custom Top Member, 335
 - Default Alias Table, 366
 - Default Currency , 348, 365
 - Default Frequency, 345
 - Default Frequency For IC Transactions, 345
 - Default Parent, 335, 341, 343, 345, 359
 - Default Rate For Balance Accounts, 348
 - Default Rate For Flow Accounts, 348
 - Default Value For Active, 348
 - Default View, 345
 - Display In ICT, 355
 - Enable Custom Aggregation, 336
 - Enable Data Audit, 336, 345
 - Enable Metadata Security Filtering, 349
 - Enable Process Management, 345
 - FDM Application Name, 352
 - Holding Company, 343
 - ICP Entities Aggregation Weight, 349
 - ICP Top Member, 336
 - Is Calculated, 336, 341
 - Is Consolidated, 336
 - Is Holding Method , 353
 - Is ICP, 336, 343
 - Maximum Cell Text Size, 349
 - Maximum Document Attachment Size, 349
 - Maximum Number of Document Attachments, 349
 - Maximum Review Level, 345
 - Multiple Currencies, 365
 - Name, 337, 341, 344, 346, 353, 355, 359
 - Node Security, 350
 - Number Of Decimal Places, 337
 - Org By Period Application, 350
 - Percent Consol, 353
 - Percent Consol Value, 353
 - Phased Submission Start Year, 346
 - Plan Name, 364
 - Planning, 363
 - Plug Account, 337
 - Scale, 356
 - Security As Partner, 344
 - Security Class, 337, 342, 344, 346, 359
 - Security For Accounts, 350
 - Security For Custom, 350
 - Security For Entities, 350
 - Security For ICP, 350
 - Security For Scenarios, 350
 - Submission Group, 337, 342, 359
 - Support Submission Phase for Account, 351

Support Submission Phase for Custom, 351
 Support Submission Phase for ICP, 351
 Switch Sign For Flow, 342
 Switch Type For Flow, 342
 To Percent Control, 353
 To Percent Control Compare, 354
 Translation Operator, 356
 Use PVA For Balance Accounts, 351
 Use PVA For Flow Accounts, 351
 Used By Calc Routine, 354
 User Defined 1...3, 337, 346
 User Defined1...3, 342, 344
 Uses Line Items, 338, 347
 Valid for Plan, 365
 Validation Account, 351, 352
 Weeks , 366
 Zero View For Adjustments, 347
 Zero View For Non-adjustments, 347
 疎から密への次元の変更の影響, 383
 開始月, 366
 開始年, 366
 基本期間, 366
 システム, 85
 通貨, 343
 連結
 アプリケーション, 347
 エンティティ, 343
 カスタム, 341
 勘定科目, 334
 シナリオ, 344
 セル・テキスト・ラベル, 340
 連結プロパティ
 通貨, 355
 プロパティ値、疎から密への次元の変更の影響, 383
 平均タイム・バランス・プロパティ, 373
 編集
 マッピング・テーブル, 289
 別名
 Planning, 369
 Profitability and Cost Management の要件, 187
 マイクロ原価計算, 197
 次元の配置に使用, 85
 選択, 369
 命名規約, 386
 別名次元, 187, 197
 次元ソート順, 223

設定, 86
 別名次元タイプ
 説明, 48
 別名次元の設定, 86
 別名テーブル
 Planning での作成, 366
 Planning の選択, 369
 Planning のデフォルト, 366
 保存された仮定, 372
 ボトムアップ・バージョン, 381

ま行

マッピング
 削除, 298
 情報, 290
 テーブル, 289
 テーブルの作成, 290
 同期の次元, 279
 複製, 297
 編集, 289
 マッピング・テーブル
 編集, 297
 ミクロ原価計算次元タイプ, 197
 密次元, 85
 疎への変更, 383
 およびパフォーマンス, 181
 命名規約、Planning, 89
 命名の制限
 アプリケーション, 385
 次元、メンバー、および別名, 386
 メジャー次元, 187, 197
 次元ソート順, 223
 メジャー次元タイプ
 説明, 48
 メソッド勘定科目, 357
 メタデータ
 リフレッシュの考慮事項, 384
 メタデータの整合性, 360
 メニュー
 Performance Management Architect, 35, 36, 37
 メンバー
 Planning 固有の情報, 363
 アプリケーションでの除外, 157
 エンティティ次元, 367
 共有メンバーの操作, 136
 削除, 141, 142
 削除、影響, 252

システム・プロパティ, 422
 集約プロパティ, 369
 除外, 142
 除去, 140
 操作, 154
 デフォルトの割当て, 288
 命名規約, 386
 リフレッシュの考慮事項, 384
 メンバー・クエリー関数, 441
 メンバー計算式
 Planning, 369
 検証結果の表示, 151
 数式の使用, 152
 操作, 150
 メンバーシップ
 アプリケーションの表示, 223
 メンバーの削除
 次元ライブラリ, 141
 メンバーの作成, 131
 メンバーの除外
 比較結果, 236
 メンバーの除去, 140
 モジュール
 Performance Management Architect, 23
 文字、予約, 385

ジョブ・コンソール, 308
 ルール構文
 データの同期で使用する宛先次元, 291
 データの同期で使用するソース次元, 290
 例
 「会計年度の最初の月」および「会計開始年」
 オプション, 179
 レポート通貨, 376
 連結
 アプリケーションの要件, 163
 連結 1...3 勘定科目, 357
 連結勘定科目
 DOWN 勘定科目, 357
 PCON 勘定科目, 357
 PCTRL 勘定科目, 357
 POWN 勘定科目, 357
 アクティブ勘定科目, 357
 メソッド勘定科目, 357
 連結 1...3 勘定科目, 357
 連結比率, 357
 連結メソッド, 352
 連結メソッド次元タイプ
 説明, 48
 ローカル次元の自動作成, 170

や行

役割
 Performance Management Architect, 28
 要件
 Essbase (ASO)アプリケーション, 209
 Essbase (BSO)アプリケーション, 209
 集約ストレージ・オプション・アプリケーション, 209
 ブロック・ストレージ・オプション・アプリケーション, 209
 要約期間
 作成, 377
 範囲の変更, 377
 予約文字, 385

ら行

ライフサイクル管理, 32
 ラベル
 スマート・リスト, 115
 ラベルのみオプション, 368
 リフレッシュ